



大南北全集

第四巻

大南北全集 第四卷

文學博士 坪內逍遙
渥美清太郎 共編

東京 春陽堂刊行

大南北全集　第四卷目次

挿繪目次

挿繪解說

■巻頭に挿入したコロタイプ版三枚續きの錦繪は、「時桔梗出世請狀」初演の折の錦繪で、序幕、祇園社の眉間割りである。この錦繪と、今日演じられる舞臺面とは、殆んど違ひはない。初代豐國の筆である。

■「繪本合法衢」には、都合六種の繪を入れて置いたが、そのうち「多賀社の場」「奥殿の場」「四條磧の場」の三種は、初演の折に發行されたもので、いづれも初代豐國の筆である。また「多賀館の場」は文政七年五月、市村座所演の折の發行、「倉狩峠の場」の三枚續きは、文政十一年九月、中村座所演のもの。「合法ヶ辻の場」の二枚續きは、寛永三年九月、河原崎座所演の際に出たものである。

■「謎帶一寸德兵衞」の洲崎堤の三枚つゞきは、初演の舞臺面で、初代豐國の描いたものである。

■番附は、「繪本合法衢」を除く外は、何れも初演の際ので、今度は解說の中へ加へず、別刷りにして本文の、その個所へ挿入して置いた。「繪本合法衢」の番附は、初演のが見當らなかつたので、文政七年五月、中村座所演、卽ち二度目に演じた折のを入れて置いた。この時は、場面も全部初演通りであつたから、大體を知るには差支へないと思ふ。



尾上栄三郎
豊国画
松本幸四郎
豊国画
澤村源之助
豊国画

解説及年表

時桔梗出世請状

この狂言は、文化五年七月二十五日初日の、市村座に上演されたもので、南北が五十四歳の時の作である。南北が得意の作はといへば、何といつても世話物で、時代物はあまり自分でも好きでなかつたらしく、又書いてもゐない。尤も、曾我狂言や顔見世狂言は、毎年必ず書いてはゐるが、これ等は純粋な意味での時代物とはいひ憎い。また文化文政度の純時代物といへば、大抵は義太夫物に株を奪はれてゐた形で、純歌舞伎劇の時代物といへば、南北はさておいて、一體が僅かしか見當らない位であるから、この作家に少ないのも無理はない。そんな譯で、甘いながらも一種の史劇である「時桔梗出世請狀」は、南北としてのみでなく、當時の劇壇には非常に珍らしかつたものである。

純歌舞伎劇ではあるが、世話物と違つて、斯種の狂言は、流石に義太夫からの影響が多い。信長、秀吉、光秀等を取扱かつた義太夫劇は澤山ある。同種の事件を材料にした物のみを數へても、先づ近松門左衛門の「本朝三國志」（享保四年二月、竹本座）を初めとして、「祇園祭禮信仰記」（中村阿契等作、寶暦

七年十二月、豊竹座)、「三日太平記」(近松半二等作、明和四年十二月、竹本座)、「三國無双奴請状」(近松東南等作、安永五年四月、堀江座)、「繪本太功記」(近松柳等作、寛政十一年七月豊竹座)等は、何れも有名であり、歌舞伎へも輸入され、數多く上演されてゐる。「時桔梗出世請状」はこれ等の院本を參照して作られたらしい。そして大詰なぞは、明らかに「三日太平記」を書き直したものである。また歌舞伎劇としても、寛政十一年十一月森田座上演、村岡幸治作の「八百八町瓢の簪」なぞからも、影響を受けてゐる形跡がある。恐らく南北としては、頼まれて據なく執筆したのかも知れぬ、そして、三幕目の「陣中の場」を得意の世話場化して、爰で十分腕を揮ひ、自身も窮屈さから遁れて、稍溜飲を下げたのであらう。併し事實は、その得意な「陣中の場」は再演されず、その外の幕は、恐らく南北としては第一位に置かれる程に、後世數多く上演されてゐるのである。南北自身が得意としないのに、興行上斯く好成績を擧げたといふのは、何と云つても「饗應」から「本能寺」までは中々の傑作であるし、また光秀に扮した五世松本幸四郎が、一世の當り役として非常な賞讚を受けたゝめ、生涯に度々演じ、遂に家の藝とまでなつた故にも依るであらうと思ふ。現に今でも絶えず上演されてゐる。

初演の折は、左の通りの役割であつた。

松下嘉平次行綱(澤村四郎五郎)小田上總之助春永(澤村源之助)遊女高松後ニ園生の局(山下萬作)百姓、

小袋のたぬ藏（嵐新平）宅間左衞門信盛（市川宗三郎）矢代條助春行（坂東鶴十郎）路地番の吉實ハ三宅源內國次（坂東善次）日和上人（坂東利根藏）武智十次郎光義（助高屋金五郎）連歌師紹巴、料理方大澤九郎二郎（ニヤク鎌倉平九郎）矢代の妹小川（坂東八十八）內藏之助妻簑浦（岩井龜次郎）光秀の妹桔梗、松下下女小藤（ニヤク中山岩次郎）曾呂利新左衞門（桐島儀右衞門）波多野但馬之助後ニ中尾彌太郎俊國（花井才三郎）福島平馬貞景、諏訪飛驒之助直盛（ニヤク松本小次郎）淺山多三重滿（市川門三郎）光秀妻皐月、嘉平次娘千里（ニヤク市川團之助）加藤虎之助正淸、安田作兵衞知綱（ニヤク市川團十郎）森蘭丸、下男助作實ハ小西彌十郎行長（ニヤク尾上榮三郎）髮結ひお八重後ニ久吉妻八重機（岩井半四郎）眞柴大領久吉（坂東三津五郎）判人源五郎實ハ水尾正兵衞茂朝、武智十兵衞光秀（ニヤク松本幸四郎）

第二回目は、文化十二年五月の河原崎座で、名題を「今時攝握虎（ときはいまいきのやつこ）」といひ、殆んど原作通りを再演した。役割は

光秀（松本幸四郎）春永、久吉（ニヤク市川團十郎）嘉平次（澤村四郎五郎）桔梗（松本よね三）正淸（片岡松助）皐月（岩井半四郎）

第三回目は、文化十四年九月の中村座で、名題は「連歌月光秀（ことはのはなつきもみつひで）」といつた。僅かの間に斯く同狂言を上場するは、餘程の好評でなければ當時は見られなかつた事である。この時の役割は

光秀（松本幸四郎）久吉（尾上菊五郎）正淸（坂東彥三郎）紹巴（淺尾友藏）園生（山科甚吉）蘭丸（關三十郎）皐月（中村大吉）春永（坂東三津五郎）

第四回目は、文政五年四月の河原崎座で、名題は「遲櫻愛宕韻」を附け、饗應、馬盥、愛宕、本能寺の外に、尼ケ崎の場を一幕加へて大詰とした。この場は、尼ケ崎の百姓ちまきの當作實は四王天但馬守が光秀を隱まひ、久吉に見出されるといふ筋で、新作であつた。役割は

光秀（松本幸四郎）嘉平次（荻野伊三郎）信盛、淺山（ニヤク中島三甫右衞門）紹巴（大谷門藏）中尾（坂田半十郎）十次郎（市川高麗藏）蘭丸（坂東蓑助）條助（松本錦吾）蓑浦（坂東かしく）桔梗（市川半次郎）園生（中村芝友）作兵衞（尾上蟹十郎）春永、但馬守（ニヤク關三十郎）皐月（中村大吉）久吉（尾上菊五郎）

第五回目は、文政八年八月の中村座で、「時桔梗小田豐作」と名題が變り、饗應から本能寺までを見せた。これが幸四郎の最後の光秀で、江戸では五回演じた事になる。

光秀（松本幸四郎）宅間（市川染五郎）蓑浦（關三之助）十次郎（中村歌木）條助（市川勘藏）彌太郎（松本長四郎）多惣（坂田半十郎）園生（市川なの江）正淸（市川高麗藏）蘭丸（三桝源之助）皐月（岩井粂三郎）春永（市川團十郎）作兵衞（中村傳九郎）

次は、文政十二年八月の市村座で、「小田雁文臺時興」この時は本能寺の次へ、「三日太平記」の嘉平次住家

を附けて、大詰としてあつた。蓑助の光秀は、若年ながら非常な好評を得た。

光秀、久吉（ニヤク坂東蓑助）十次郎（中村三八）園生（小佐川常世）信盛、作兵衛（ニヤク坂東三津右衛門）桔梗（澤村鐵之助）彌太郎、行長（ニヤク坂東三津太郎）紹巴（惣領甚六）皐月（藤川官吉）嘉平次、春永（ニヤク坂東三津五郎）蘭丸（市村羽左衛門）

天保五年九月の森田座では、名題が「時今出世劵」で、前回と同じく、大詰へ「三日太平記」を附けた。

春永（澤村訥升）園生（小佐川常世）宅間、作兵衛（ニヤク淺尾市友）桔梗（岩井春次）中尾、行長（ニヤク市川濤十郎）嘉平次（嵐冠十郎）蘭丸、皐月（ニヤク岩井半四郎）光秀、久吉（ニヤク坂東三津五郎）十次郎（森田勘彌）

天保十年五月の中村座では、「追善皐聯歌」の名題、これは前年死んだ幸四郎の追善として、遺子たる高麗藏が勤めたからである。

春永（坂東彦三郎）光秀（市川高麗藏）作兵衛（淺尾奥山）桔梗（小佐川七藏）園生（岩井松之助）蓑浦（中村芝鶴）多三（關歌助）紹巴（中村鶴藏）彌太郎（坂東佐十郎）宅間（市川染五郎）蘭丸（市川八百藏）皐月（岩井紫若）

天保十一年八月の中村座では、「祇園祭禮信仰記」の名題で、「信仰記」の割普請、是齋屋、金閣寺の三幕

を見せて、次に饗應、馬盥、愛宕、本能寺と並べて見せた。單に世界が同じといふだけで、一狂言を操狂言と歌舞伎と半々に見せたのは、隨分不調和であつたらうと想像されるが、この頃からさういふ事は一切おかまひなし、頗る亂れて來たのである。

光秀（市川海老藏）春永（嵐吉三郎）作兵衛（澤村訥升）蘭丸（市川淸十郎）桔梗（瀨川菊世）中尾（尾上雷助）多三（澤村銕之助）

弘化二年十一月の河原崎座では、「繪本大當記」の名題で、饗應から本能寺までを演じたが、前回と同じく矢張り「信仰記」と組合せになつてゐた。この時の役割は

光秀（八世市川團十郎）春永（坂東彥三郎）作兵衛（澤村宗十郎）桔梗、園生（市川團之助）條助、紹巴（坂東鶴十郎）蘭丸（市川新車）皐月（尾上菊次郎）

嘉永三年十一月、河原崎座では、「小田雪貢賜」といふ名題で、饗應から本能寺までを出した。本能寺では、春永と園生の前とが、所作事の一幕を設けてあつた。

光秀（市川海老藏）春永（澤村長十郎）皐月（尾上梅幸）蘭丸（關三十郎）桔梗（坂東佳好）園生（市川團之助）條助（尾上松助）彌太郎（市川猿三郎）作兵衛（淺尾奥山）

嘉永五年十一月の中村座では、名題が「廓春茲光秀」で、同じく饗應から本能寺まで。

光秀（坂東彦三郎）春永（坂東竹三郎）皐月（尾上梅幸）蘭丸（大谷友松）園生（吾妻市之丞）作兵衛（中村鶴藏）桔梗（岩井米次郎）

安政五年七月の市村座では、馬盥から本能寺までやつて、次に太功記の「妙心寺」と「尼ケ崎」の二段を添へた。名題は矢張り「繪本太功記」であつた。

光秀（市川海老藏）春永（關三十郎）桔梗（姉川源之助）作兵衛 淺尾與六）淺山（坂東又太郎）彌太郎（坂東橋之助）

安政六年五月の守田座では、「時皐月桔梗旗上」として、初演通りを、たゞ三幕目の「鳥取陣中の場」を拔いたゞけで、全部を演じた。即ち、本能寺までゝなく、小栗栖村から嘉平次住家までを、原作のまゝで演じたのである。嘉平次住家の場は、恐らく初演と、この時と、二度ぎりしか上演されなかつたものであらう。

光秀、正兵衛（市川團藏）春永、久吉（嵐雛助）作兵衛、助作（市川九藏）皐月、千里（市川新車）蘭丸、正清（市川團三郎）園生、八重機（坂東玉三郎）たぬ藏（嵐冠五郎）嘉平次（森田勘彌）

文久二年八月の中村座では、「時今握虎券」で、饗應から本能寺までやつて、その跡へ院本の「三國無双奴請狀」の水責の場を附け、大詰として金閣寺を添へたものである。この時の本能寺は、春永、

蘭丸、園生の三人が「竹生島」の今樣を勤め、これが切れると夜討になる趣向であつた。その時の長唄が今でも殘つてゐる。

光秀（片岡我童）春永（坂東彥三郞）皐月（市川團之助）蘭丸（澤村訥升）園生（澤村田之助）淺山（市川雷藏）彌太郞（坂東薪三郞）桔梗（中村いてう）蓑浦（中村松江）作兵衞（淺尾與六）

慶應元年十一月の市村座では、「雪武智一座初役（ゆきのたけちいちざのはつやく）」として、饗應から本能寺まで。

光秀（坂東彥三郞）春永（河原崎權十郞）蘭丸（市村家橘　皐月（岩井粂若）園生（河原崎國太郞　條助（市川新之助）多三（坂東三八）桔梗（岩井米次郞）作兵衞（中村仲太郞）

明治三年一月の守田座では、「館扇曾我訥芝玉（ごしよあふぎそがのとしだま）」この時は饗應から本能寺までの跡へ、新作で、「武智左馬之助湖水乘切り」と「大德寺燒香」との二幕が附いた。

光秀（中村芝翫）春永（澤村訥升）蘭丸（市川左團次）作兵衞（中村仲藏）園生（澤村其答）桔梗（尾上多賀之丞）

明治四年五月の守田座では、「連歌花二見文臺（ことばのはなふたみのぶんだい）」饗應から愛宕山までゝある。

光秀（河原崎權之助）春永（市川左團次）蘭丸（嵐璃鶴）園生、皐月、（岩井粂若）桔梗（河原崎國太郞）條助（市川子團次）

明治七年三月の守田座では「群入田鶴宿魁菊」といふ名題で、饗應から愛宕まで、それへ「奴請狀」の水責を附けた。

光秀（坂東彦三郎）春永（市川左團次）蘭丸（市川子團次）桔梗（坂東秀調）作兵衞（中村仲太郎）園生（尾上いろは）

明治二十年四月の千歳座では「酒戰場愛宕連歌」饗應から本能寺夜討まで。

光秀（尾上菊五郎）春永（市川權十郎）蘭丸（坂東家橘）皐月、園生（坂東秀調）桔梗（岩井松之助）作兵衞（中村傳五郎）多三（尾上松助）彌太郎（尾上菊四郎）

明治二十六年十一月の歌舞伎座では「愛宕連歌誓文臺」といふ名題で、饗應から愛宕まで。

光秀（市川團十郎）春永（市川新藏）蘭丸（市川染五郎）皐月（市川女寅）桔梗（澤村訥升）園生（中村歌女之丞）作兵衞（片岡市藏）

明治二十六年十一月の新市村座「新開場桔梗旗揚」では、饗應から愛宕までと、外に「太功記」の十段目を添へた。

光秀（市川九藏）春永（澤村訥子）蘭丸（中村芝鶴）園生、皐月（尾上多賀之丞）作兵衞（市川瀧十郎）桔梗（市川紅若）條助（市川喜猿）多三（中村種五郎）

明治三十一年二月の明治座「歌合桔梗瓢」では、饗應と馬盥の次へ、廣德寺の臺所と、大德寺の燒香とを附けた。

光秀（市川左團次）春永（市川權十郎）蘭丸（市川米藏）桔梗（市川莚女）彌太郎（市川小米）作兵衞（市川壽美藏）

明治三十三年十月の歌舞伎座「信長記愛宕連歌」では、饗應から愛宕まで。

光秀（市川團十郎）春永（尾上菊五郎）皐月（坂東秀調）蘭丸（市村家橘）園生（中村福助）作兵衞（市川八百藏）桔梗（尾上榮三郎）彌太郎（市川染五郎）條助（市川新十郎）多三（市川猿藏）

明治四十二年六月の歌舞伎座「繪本太功記」では、饗應と馬盥のあとへ、十段目を附けた。

光秀（市川團藏）春永（市川八百藏）蘭丸（中村吉右衞門）園生（尾上梅幸）作兵衞（市川高麗藏）彌太郎（市川新十郎）多三（中村翫助）

明治四十四年十二月市村座の「信長記愛宕連歌」では、饗應から愛宕まで。

光秀（中村吉右衞門）春永（尾上菊五郎）蘭丸（坂東三津五郎）園生（尾上芙雀）皐月（尾上樂之助）作兵衞（尾上榮三郎）多三（尾上紋三郎）彌太郎（中村竹三郎）桔梗（中村米吉）

大正六年七月市村座「時今天下知皐哉」では、饗應から愛宕まで。

光秀（中村吉右衞門）春永（守田勘彌）皐月（尾上菊次郎）蘭丸（中村時藏）園生（尾上菊三郎）作兵衞（中村東藏）桔梗（河原崎國太郎）

大正七年十月歌舞伎座「時今也桔梗旗揚」は饗應から愛宕まで。

光秀（市川中車）春永（市村羽左衞門）皐月（中村歌右衞門）蘭丸（市川猿之助）作兵衞（市川段四郎）桔梗（市村龜藏）園生（澤村源之助）

以上はザッとした年表である。この外に京坂の芝居で演ぜられたのと、小劇場所演の分とを合したら大した數にならう。「鞘當」と、この狂言とは、南北物の中で、上演度數の多さに於ては、双璧といつてよい。

繪本合法衢

南北は生涯に百餘の脚本を書いてゐるが、その間には可成り烈しく三座を往復し、種々な座附き俳優に出合つて、その俳優の柄を見ては、自在に適當な狂言の案を立てゝゐたのである。併し、南北の作を最もよく舞臺に仕活かし、從つて南北自身も最も愉快に筆の執れた時代は、恐らく文化六七年頃、彼れ

が市村座にゐた時代であつたらうと思ふ。この頃の市村座は、特に名優を網羅してゐた。即ち、鼻の高い松本幸四郎、永木の坂東三津五郎、目千兩の岩井半四郎、この三頭目が揃つてゐた上、若手としては三世尾上菊五郎あり、七世市川團十郎あり、二世澤村田之助ありといふ風に、人氣揃ひ巧者揃ひであつたばかりでなく、南北の作には何れも長いこと經驗があつて、よくその呼吸を會得してゐたし、又特に脚本を尊重して、その演出に忠實な俳優達ばかりであつたから、毎回上乘の成績をあげる事が出來、南北の名もこの頃から世に重んぜられて來たのである、この時代に書いた狂言は、いづれも後に度々上演されてゐるのを見ても、異常な好評續きであつた事がわかる。「繪本合法衢」もこの時代の產物で、あらゆる仇討狂言を通じての代表的作物として、最近まで上演を絕たなかつた狂言である。脚本その物も、勿論南北が傑作の一である。南北の良い所が實にハツキリ出てゐる。尤も、仇討ち物は、南北が技倆をふるふには最も適當な世界であつた所爲もある。南北は、左枝大學之助と、立場の太平次といふ二つの敵役を作つて、これに全力を注いで魂を吹き込んだ。そしてその二役を、敵役の名人たる幸四郎に扮させた。この二役は大評判になつた。就中、太平次は非常な成功であつた。松本家の家の藝になつた。
その外、三津五郎の合法も、この優でなくてはならぬ役として、敵役の太平次に對する立役の代表として、幸四郎同樣な賞讃を受けた。

南北は、貸本屋物の實錄體小說から材料を仰いだらしいが、勿論それに囚はれた形はない。自由自在思ふ存分に構想を働らかして、手一杯に書き上げた。筆にも油の乘つた感じがある。同じ材料を脚色した大坂狂言に、「忠孝譽兩街」があるが、到底比較にはならない。

初演は、文化七年五月五日初日の市村座で、役割は左の通りであつた。

多賀太守俊行公。高橋瀨左衞門（ニヤク助高屋高助）左枝大學之助。立場の太平次（ニヤク松本幸四郎）問屋人足、與五郎假名孫七。高橋彌十郎後ニ修行者合法（ニヤク坂東三津五郎）彌十郎妻、皐月。孫七女房、お米（ニヤク岩井半四郎）道具屋、與兵衞。女非人、うんざりお松（ニヤク尾上松助）福屋仲居、お縫（澤村田之助）與兵衞女房、お龜（市川團之助）道具屋後家、おりよ（尾上松綠）百姓、佐五右衞門。笹山官兵衞（ニヤク澤村四郎五郎）高橋下部、會平（花井才三郎）小島林平（市川團十郎）松田幸兵衞。升法印（ニヤク市川門三郎）太平次女房、お道（小佐川七藏）佐五右衞門女房、おわた（山下萬作）道具屋手代、傳三。奴、八内（ニヤク嵐新平）三度飛脚、與五七（松本小次郎）

文政七年五月、中村座で、この狂言は再演された。全部、初演通りに演じた。

大學之助、太平次（ニヤク松本幸四郎）お米（瀨川菊之丞）お縫（岩井粂三郎）與兵衞（澤村源之助）官兵衞（淺尾友藏）おわた（瀨川路之助）瀨左衞門（關三十郎）八内、傳三（ニヤク大谷門藏）升法印（尾上榮十郎）おりよ、お道（ニヤク尾上菊次郎）林平（尾上松助）俊行、佐五右衞門（ニヤク嵐冠十郎）皐月、お龜（ニヤク市

川門之助）彌十郎、孫七、お松（三ヤク尾上菊五郎）曾平（中村傳九郎）

同年同月、市村座でもこの狂言を演じて、烈しい競爭になつたが、勝負は互角であつた。此方では「四條河原の場」「道具屋の場」「福屋の場」の三場をカットして演じた。太平次は「倉狩峠の場」だけになつたが、七世團十郎の太平次は同じく好評で當り役となり、八世も九世も一度づゝ演じる程、身についた役となつた。

彌十郎、孫七（二ヤク坂東三津五郎）佐五右衞門・升法印（二ヤク澤村四郎五郎）林平（中山富三郎）瀬左衞門（市川門三郎）おわた（小佐川常世）與兵衞（坂東彦三郎）お龜・お道（二ヤク岩井紫若）皐月、お米（二ヤク岩井半四郎）俊行、大學之助、太平次（三ヤク市川團十郎）曾平（市村羽左衞門）

文政十一年九月には、中村座と市村座で、又ぞろこの狂言の競爭が始まつたが、この時は市村座の方が稍勝つたらしい。それは中村芝翫が役に適せず、流石の幸四郎も老境に入つた時代だからであつた。兩座ともに前記の三場は矢張り省いてゐた。中村座の役割は

瀬左衞門、彌十郎、孫七（三ヤク中村芝翫）八内、佐五右衞門（二ヤク大谷門藏）與五七（中村千代飛助）お龜坂東玉三郎）おわた、お道（二ヤク吾妻藤藏）林平（市川八百藏）官兵衞（坂田半五郎）俊行、與兵衞（二ヤク坂東彦三郎）皐月、お米（二ヤク瀬川菊之丞）大學之助、太平次（二ヤク松本幸四郎）曾平（中村傳九郎）

市村座の方は左の通りであつた。

倭行、孫七（ニヤク坂東三津五郎）彌十郎、與兵衛（ニヤク坂東蓑助）おわた（小佐川常世）與五七（中山文五郎）瀬左衛門、官兵衛（ニヤク嵐冠十郎）佐五右衛門、升法印（ニヤク澤村しやばく）お龜、皐月（ニヤク岩井紫若）お米（岩井粂三郎）大學之助、太平次（ニヤク市川團十郎）林平（市村羽左衛門）

天保八年七月の森田座では、うんざりお松の件をも加へて上演した。三津五郎のお松は非常な好評を得た。

彌十郎、與兵衛（ニヤク澤村訥升）官兵衛、佐五右衛門（大谷友右衛門）おわた、おりよ（ニヤク坂東かてう）倭行、大學之助、太平次（三ヤク坂東彦三郎）お米（岩井杜若）曾平、升法印（ニヤク坂東佐十郎）林平（坂東蓑助）お道（岩井辰之助）皐月、お龜（ニヤク坂東玉三郎）瀬左衛門、孫七、お松（三ヤク坂東三津五郎）

天保十四年六月の中村座では、矢張りお松の件と福屋の場とを削つて演じた。

大學之助（嵐吉三郎）佐五右衛門（中村芝十郎）お道（岩井松之助）おわた（岩井辰之助）曾平（中村鶴五郎）お龜（岩井杜若）倭行、瀬左衛門（ニヤク坂東彦三郎）皐月、お米（ニヤク岩井紫若）與五七（中山現十郎）林平（澤村清十郎）官兵衛（嵐猪三郎）與兵衛、太平次（ニヤク市川高麗藏）彌十郎、孫七（ニヤク澤村訥升）

嘉永元年八月の市村座では、朝顔日記をテレコにして演じた。それで、今まで原名題の「繪本合法衢」

を固守してゐたのが、この時初めて「繪入稗史蕣物語」と名題が變つた。

俊行（市川小團次）佐五右衞門（三桝源之助）おわた（小佐川常世）官兵衞（關歌助）瀨左衞門（坂東三津五郎）林平（松本小次郎）皐月、お道（二ヤク藤川花友）お米（坂東しうか）大學之助、太平次（二ヤク八世市川團十郎）彌十郎、孫七（二ヤク市村羽左衞門）

嘉永三年九月の河原崎座では、海老藏が補導格で敵役を演じて、好評を得た。

大學之助、太平次（二ヤク市川海老藏）お米（岩井粂三郎）おわた、お道（二ヤク市川團之助）與兵衞、林平、曾平（三ヤク坂東竹三郎）瀨左衞門、俊行（二ヤク市川九藏）佐五右衞門、官兵衞（二ヤク淺尾奥山）皐月、お龜（二ヤク尾上菊次郎）彌十郎、孫七（二ヤク坂東彥三郎）

文久二年五月の市村座では、龜山仇討とテレコにして、鷹野、多賀館、倉狩峠、仇討の四幕を演じた。名題も「菖蒲合仇討講談」と据ゑられた。

大學之助、孫七（二ヤク中村芝翫）彌十郎、太平次（二ヤク河原崎權十郎）與兵衞（市村羽左衞門）皐月、お米（二ヤク岩井粂三郎）お道（市川新車）林平（關花助）瀨左衞門（關三十郎）おわた（姉川源之助）佐五右衞門、官兵衞（二ヤク坂東又太郎）お龜（中村歌女之丞）俊行（市川團藏）

慶應元年五月の守田座でも、前回の通り四幕見せた。

彌十郎（中村福助）大學之助（市川小文次）俊行（中村仲太郎）皐月（坂東玉三郎）佐五右衛門、官兵衛（二ヤク關山右衛門）お道（尾上菊榮）お龜（佐の川市松）孫七（市川八百藏）與兵衛（尾上梅幸）太平次（市川九藏）

明治二十年五月の春木座で、この九藏が中心になつて珍らしく上演した。これが大劇場での最終であつた。この時は念を入れて、うんざりお松の件まで見せたものである。

大學之助、太平次（二ヤク市川九藏）彌十郎、孫七（二ヤク中村駒之助）お米（嵐珉子）皐月（中村梅太郎）與兵衛、お松（二ヤク中村芝鶴）お龜（市川福之丞）

謎帯一寸徳兵衛

この狂言は、文化八年七月、市村座へ、南北が書きおろした生世話もので、カタリにも「園七縞の古くさき世話狂言を新らしく仕立ばえあるお梶が針先絲のえにしの琴浦より引くに引かれぬ中川に釣舟の三吉と三河屋の義平次が所謂の寄りに藝者のお辰やつたやうでは內儀風氣も浮牡丹の香爐まで粋な噂を三重襷」とある通り、「夏祭」の「書替へ狂言」である。「書替へ狂言」に就ては、第三卷に詳しく說明してあるが、つまり當時の三面記事を、「夏祭」の人名に准へて脚色したのである。當時、飯田橋邊にあつ

た蚊帳の事件と、入谷田圃にあつた女殺しとを捕へて來て、似た形式から「夏祭」の役名へ當てはめたのである。だから名前は同じでも、筋や性格は全然違つてゐるが、書替へ狂言の法則として、原作の俤を所々に殘してゐる。たとへば、二幕目でお梶が鐵弓で怪我をする所は、原作のお辰の燒鐵を見せたのであり、義平次がお市を駕籠で連れてゆく所は、原作の琴浦を連れ出す俤であり、田圃の殺しは、長町裏の替りであり、洲崎土手では、向うへ花車を通して見せる。大詰で、團七德兵衞をお辰が仲裁するのは、原作の三婦の仲裁であり、衣裳にしても大詰なぞは、團七は團七縞を、德兵衞は德兵衞縞を着て立廻りをした等である。さういふ原作の匂はせ方にも、南北は一流の巧緻さを見せてゐる。

この脚本を讀んで、直に誰も氣が附く事は、「四谷怪談」ソックリであるといふ事である。お梶はお岩に、團七は伊右衞門に、性格は勿論、筋までも非常に酷似してゐる。これはその筈で、三世尾上菊五郎は他座に出勤してゐて、この「謎帶」を見物した事があるので、後年南北に、あゝいつたやうな狂言を書いてくれと賴んだ結果が、「東海道四谷怪談」が生れたのであるから、似てゐるのも不思議ではない。たゞ「四谷怪談」があまりに名高くなつたので、原作であるこの「謎帶一寸德兵衞」が忘れられてしまつたのである。

初演の役割は左の通りであつた。

大島團七（松本幸四郎）團七女房、お梶。德兵衞女房、お辰（ニヤク岩井半四郎）船頭、釣舟の三吉（實ハ道具屋清七（市川團十郎）三河屋義平次實ハ足輕、生野八内（澤村四郎五郎）奥女中、琴浦（市川團之助）大島佐賀右衞門（大谷門藏）腰元、お繼（三條浪江）玉島若黨、彌市（花井才三郎）玉島兵太夫（淺尾與次兵衞）團七娘、お市（岩井松之助）備中屋番頭、傳八（嵐新平）醫者、道庵（市川成藏）貸物屋、木片の權助（坂東善次）浪人、五郎（市川粟藏）石塔半助（松本虎藏）義平次女房、お虎（市川宗三郎）藝者、お磯（吾妻藤藏）藝者、お照（市川照之助）德兵衞妹、お仲（松本德之助）下男、友七（市川米藏）大和屋德兵衞（坂東三津五郎）

この狂言は、前述の通り「四谷怪談」に母屋を取られてしまつたので、一向に再演されなかつた。尤も文政十一年七月の中村座で、「江戸仕入麗釣船」といふ名題で、中村芝翫の團七、瀬川菊之丞のお梶で、上演される筈であつたが、どうした譯か中止になつてしまつた事がある。

明治十四年八月、蠣殼町の中島座で、珍らしくも再演した。「怨蚊帳復讐奇談」といふ生々しい名題に變つてはゐたが、原作そのまゝを演じた。

團七（關三十郎）德兵衞（中村壽三郎）お梶、お辰（ニヤク澤村巴杖）三吉（尾上幸藏）義平次（市川桂子）琴浦（勝川又吉）

この幸藏は今の幸藏である。その外、中村吉十郎といふ役者が、この狂言を賣り物にしてゐて、地方で折々演じたさうである。わたしも横濱で一度見たが、「旗本氣質」とかいふ名題になつてゐて、吉十郎はお梶と、お辰をやり、今の竹三郎の父の坂東鶴之助が、團七を演じてゐた。場所は横濱の汚ない小屋なり、役者は達者といふので、案外にも古風の、しめつぽい味が漂つてゐた。

「歌舞伎狂言傑作集」の中へ、この脚本を收めたので、忘れられた「謎帶一寸德兵衛」も世に出た。直きに、明治座で、南北研究の名の下に、市川左團次が上演した。大正十一年九月であつた。

團七（市川左團次）お梶、お辰（二ヤク坂東秀調）德兵衛（片岡市藏）義平次（中村鶴藏）佐賀右衛門、五郎（二ヤク市川米左衛門）兵太夫、道庵（二ヤク市川左升）半助（河原崎長十郎）彌市（市川莚升）お織（中村芝鶴）三吉（市川龜藏）琴浦（片岡我童）

この上演は非常な好評だつた。それに刺戟されて、大阪でも、延若の團七、雀右衛門のお梶とお辰、吉三郎の德兵衛で上演したが。その初日は大正十三年九月一日、東京は地震と火事で未曾有の慘禍をうけた日であつた。

（渥美淸太郎識）

時桔梗出世請状

ときもききやうしゆつせのうけじやう

時桔梗出世請狀

序幕　　祇園社の場

役名――小田上總之助春永。武智十兵衛光秀。森蘭丸。波多野但馬之助。宅間玄蕃信盛。大澤九郎二郎。福富平馬。足輕、瀨平。光秀妻、皐月。光秀妹、桔梗。

本舞臺、三間の間、眞中に二間の二重舞臺、瓦屋根の小口を見せ、朱塗りの柱、御簾をあげおろし正面の扉開くことあり、この左右は狐格子、東西に石燈籠、一體に祇園拜殿の道具、誂への通りに飾り付け、神樂にて幕あく。

ト直に向うより桔梗、振り袖、裲襠の形にて、竹の花活に桔梗を大分入れ、これを持つて出てくる。跡より九郎次郎、麻上下、大小の形にて、八股の蘇鐵の石臺を持つて出てくる。跡より瀨平、足輕の形にて附添ひ出て來て、花道にて

九郎　モシ、桔梗樣、兎や角申す内に、はや祇園のお社へ、參りましてござります。

桔梗　それいなァ、この程の暑さに引替へ、秋の日足のやはらかう、一しほ足も苦にならず、いつ來るともなしに今日の代參。

瀨平　最早午の刻でもござりませう。はや〳〵御參詣遊ばされませう。

九郎　サヽ、ござらつしやりませう。

ト神樂になり、三人は舞臺へ來て、九郎次郎、蘇鐵の石臺を下に置き

さて〳〵、この蘇鐵ゆゑ、存じの外ホッと致した。

桔梗　ほんに、よく〳〵見れば、一本にて八股の蘇鐵、こりや珍らしいもの。こりやどういふ事でござりませう。

九郎　この八股の蘇鐵の事は、猪子兵助と申す者、讃州丸龜より持參なしたるその趣意は、先達て春永公、泉州堺妙國寺の蘇鐵を、安土へお取寄せ遊ばせしところ、その寺院へ歸らんといふ怪異あるに依つて、光秀どの利害を申してお返しあるところ、この度春永公、眞葛ヶ原に御假家をしつらへ、太政大臣御任官の御內勅として、世尊寺中納言具房卿のお入り。その饗應司は武智光秀どの近鄕近在より、思ひ〳〵の獻上物。その中にこの蘇鐵は、宅間左衞門信盛公より御內意に依つて勅使饗應の役に立てんと、猪子兵助拙者へ相賴み、光秀どのへ取次ぎくれいとの事ゆゑ、わざわ

ざ持參いたした、八股の蘇鐵でござるて。

桔梗　ほんに今聞けば、以前妙國寺の蘇鐵に、怪異あるまゝお返しありしを、又々これなる蘇鐵を召寄せられし信盛樣のお心、どうも合點がゆかぬわいな。

九郎　成る程、その御不審もござらうが、今日御祈念の場所へ、秋草と申し、殊に桔梗ばかりを供へめさるゝとは、どうもこの儀も合點參らぬて。

桔梗　成る程、この桔梗は兄上の紋どころ、その妹の桔梗が、御代參に持參せしも、何卒この度のお役目、首尾よくお勤め遊ばすやうにと、心の誓ひ、それゆゑ桔梗を供へるのぢやわいな。

九郎　成る程、流石は女儀。なんぼ兄御のお役目を祈ればとて、神前へ草花とは、墓參りではあるまいし、しかも秋草、これは何ともその意を得ぬ事でござる。

瀨平　左樣々々、又その桔梗も、他家の地に出來た草花を、佛事にでも遣はるゝやうで、をかしなものでござります。

九郎　まだその上に、誠に花の盛りは暫時の間、直にしぼんで、しを／＼となりまする。

桔梗　（心にかゝるこなしあつて）エヽ、つんとモウ氣にかゝる。瀨平までが同じやうに。其方も武智の家に奉公しながら、今の一言、他家の地に出來た草花を佛事にやるやうぢやの、また九郎次郎樣も

この桔梗、盛りの間ゝ暫時ぢやのと、なぜにそのやうな事ばかり云うて下さんす。わたしや心にかゝつて、持病のつかへが起つたやうぢやわいの。

九郎　これは如何な事、畢竟只今のは戯れ事、そのやうに癪を起すとは、ドレ〳〵、拙者がその癪を鎮めて進ぜう、ドレ〳〵

ト桔梗の後より手を廻して、癪を押へようとして、桔梗の手を握り、いやらしきこなし。桔梗、振り放して

桔梗　エヽモウつんといやらしい。今のは何でござります。手を握つたり

九郎　エヘン〳〵。これはしたり、どう致して手を握るものでござる。あれはちよつと脈を見たのでござる。一體、コレ〳〵（ト花活の桔梗を取つて）この桔梗といふ花は、仇に見ゆる花でござる。桔梗、苅萱、破帽額……サア、われもかうと思うてゐれど、どこへも知らぬ女郎花、ほんにいつぞは云はう〳〵と……サア、心にばかり。幸ひ今日は折よき代參。實は拙者が（トまた桔梗の後より寄り添ひ）斯う致して、癪を揉み和らげて進ぜたい。

トいろ〳〵こなし。桔梗、振りほどき

桔梗　エヽ、また阿房らしい。ほんにお前も、顔に似合はぬ、あつかましい事のあり條。先刻の事がら

一部仔什、兄上へこの事を

九郎　それを云はれて堪るものか。併し、何も狼藉は致さぬ。たゞ癪を押してあげたばかり

桔梗　イエ〳〵、今のてんがう、きつと兄上へ申しまするぞえ。

九郎　これは御短氣、何卒今の事は、この座ぎり

桔梗　そんなら重ねて氣にかゝる事や、てんがうなさんすと、直に兄上へ申しまするぞえ。

九郎　イヤモウ、只今の儀は全く不調法、必ず光秀どのへ御沙汰なしに賴み存ずる。

瀨平　恐れ入りましてござります。

ト時の太鼓になり、バタ〳〵にて、向うより但馬之助、百日鬘、着付、麻上下の形、無腰にて、これを曾平太、甚平、足輕の形にて、槍にて取卷き、出てくる。跡より中間一人、但馬之助の大小を持つて出て來て、直に舞臺へ來る。九郎次郎見て

九郎　待て〳〵。これに光秀どのゝ妹御も伴ひし折柄、心得ぬその有樣、何事ぢや。

曾平　ハツ。この儀は先達て、小田家へ降人と罷りなつたる、丹州八上の城主、波多野の一族、波多野但馬之助と申す者。

甚平　兼ねて武智光秀樣の、お聞きに達しござるよし。われ〳〵兩人

曾平　降人の法にて斯くの如く、槍にて道を警護なし、大小取上げ、これまで召連れ

兩人　參つてござりまする。

但馬　(思ひ入れあつて)即ち今日は春永公、太政大臣に御任官の、御內勅の嘉儀として、降人御免下さる
よし、御祈念の場所も恐れず、推して社頭へ參りし段、幾重にも御高免下さりませう。

桔梗　何か樣子は知らねども、兼ねて兄上へ達したとあれば

九郎　光秀どのへ、ちつとも早う

桔梗　心得ました。

ト桔梗は下座へ入る。九郎次郎、こなしあつて

九郎　たとへ光秀どのへ達しあればとて、降人の者の試み。ソレ、兩人

兩人　ハッ。

ト兩人、槍にて但馬之助に突いてかゝる。但馬之助、烈しき立廻りあつて、曾平太の槍を叩き落す。
九郎次郎、この槍を取つて

九郎　この槍で、長短の槍術

ト但馬之助へ突いてかゝる。立廻り、「ドッコイ」ととまる。これより大小入りの鳴り物になり、トゞ

但馬之助、曾平太甚平を引敷き、槍を九郎次郎の胸許へ突きつけ
トよろしき見得にて、この道具ぶん廻す。中程より時の鐘。

但馬　降人の手の内、未熟ながら、斯くの通り

本舞臺、向う一面の黒幕、眞中に樋の口、東西とも藪疊、一體に祇園裏のかゝり、ゴン／＼にて道具とまる。

ト本神樂になり、バッタリと音して、樋の口より平馬、黒四天、忍びの形にて、赤旗を口に咬へ、拔刀にて出てくる。このうち向うより皐月、裲襠衣裳にて出て來て、これを見て窺ふ。平馬、刀を納めこなしあつて

平馬　一旦小田家を追ひ拂はれし無念口惜しさに、兼ねて信盛どのと心を合せ、當祇園の社へ奉納ありしこの赤旗、奪ひ取らうばつかりに、神前の下を掘り拔き、この裏手の樋の口へ、水なき折を窺ひ、まんまと手に入れたこの赤旗。忝ない。この上は一刻も早く、信盛公へ、ソレ

ト行かうとする。皐月、やり過して平馬が鐺を押へ、しやんと見得。平馬、思ひ入れあつて、振り切る。これより矢張り神樂にて、兩人烈しき立廻りあつて、トヾ皐月を當て、平馬は元の樋の口へ入る。皐月心附き、これを見て

皐月　御旗の盜賊、いづくまでも

ト平馬の跡を追つて樋の口へ入る。これにて又チョン〳〵と道具廻る。

本舞臺、元の社前になる。二重舞臺、上の方に信盛、上下衣裳にて立ちかゝりゐる。眞中に桔梗、三寶に旗の箱を直し、控へてゐる。下の方に九郎次郎、平舞臺の下の方に曾平太、甚平、瀨平控へゐる管絃にて道具とまる。

桔梗　信盛公には、御內勅御饗應檢引のお役目、御苦勞に存じまする。

信盛　兼ねて當社へ春永公、御奉納の赤旗、今日御內勅につき、世尊寺中納言具房卿お入りなれば、もしやお改めの事もあらんかと存じ、幸ひ饗應司の妹たる、桔梗が罷り居るこそ屈竟、早く御旗を入見せうか。

九郎　成る程、そのお詞、御尤もには似たれども、宅間左衞門樣のお指圖にては

信盛　身が申しつける事、誰が違背申すべき。殊に饗應司たる、光秀どのゝ妹御なれば

九郎　御辭退に及ばぬ

桔梗　左樣なれば、御免なされて下さりませ。

ト塵手水をとりて、旗の箱を戴き、明けて見て惘りし

ヤヽヽヽヽ、この內に大切なる御旗は

信盛　何と致した。

桔梗　紛失いたしてござりまする。

信盛　ヤヽ、大切なる御旗が、紛失なして相濟まうか。

九郎　ドレ……オヽ〳〵、今日御內見に至り、この箱に御旗が無ければ、取りも直さず饗應司の、光秀どのが越度となつたか。

桔梗　すりや、この御旗が、いつの頃より紛失なしても、兄上の越度とや。ホヽホイ。

ト當惑する。信盛、こなしあつて

信盛　サア、最早一大事も露顯なしては、光秀が越度は知れてゐる。光秀をこれへ召連れ參れ。

トこのうち扉の中、バタ〳〵と音して

曾平
甚平　ハアヽ。

皐月　その御旗の盗賊は、これにござりまする。

トこれにて皆々惘りして

信盛　ヤア、あの聲は
九郎　もしや牛頭天王の御神勅か。
桔梗　何にもせよ、ソレ
　ト桔梗、手早く神前の扉を開く。内より皐月、平馬を捕へ出て　引据ゑる。信盛、九郎次郎、思ひ入れ。
　ヤア、姉さん、皐月樣でござりましたか。
信盛　して又、樣子は
皐月　ハツ、お尋ねなくとも、申し上げねばならぬ仕儀。今日御內勅お使ひのお入りゆゑ、みづから眞葛ヶ原のお假家より、當社へ參る祇園の裏手、人も知つたる水なき樋の口より、御旗を奪ひて逃げ去る曲者を、引捕へんとせしところ、顏を見れば、先年小田家へ仕へし、逆賊の福富平馬、逃げんとせしを捕へしが、遁れがたなく又ぞろや、元の樋口へ逃げ去るところ、捕へながらも追ひ駈け入りしが、段々樣子を見るところ、當社の神前より土中を穿つて、裏手へ拔けし水無き樋の口難なく捕へし御旗の盜賊。さし當りたる御旗こそ、慥かに懷中。（ト立廻りあつて引敷き、平馬が懷中より以前の赤旗を引出し）大切なるこの御旗、エヽ忝い。（トしつかりと懷中して）サア、何者に

平馬　頼まれたのぢや。尋常に白狀いたさば、命ばかりは助け得させん。サア、白狀いたすまいか。

平馬　一旦小田家の祿を食んだ平馬定景、追ッ拂はれた返報に、おれが心から盜んだのだ。元より誰にも頼まれない。これより外に詞は無いぞ。

九郎　成る程。流石は福富平馬、これやァおのれが心一つであらう。大切なる御旗さへ返した事なら、申さば今日は大切なる日柄、社を穢すも饗應の妨げ、今日の命は、彼めに預けて遣はされたがようござらう。

信盛　イヤ〳〵、後日に事あれば、饗應司の役目は立つまい。詮議おしやれ。

皐月　頼み手きかぬその內は、いつかなこの場を遁しはせぬ。

平馬　ハヽヽヽヽ、水責め火責めは愚な事、背中を斷ち割り鉛の熱湯、ぷり〳〵責めにあはうとも、元より頼まれた覺えがなけりやァ、白狀する事もない。この身から出た旗の銹、其方へ返した上からは、用のないこの體、大手を振つて立歸るぞ。

甚平　その盜賊を

トかゝるを、立廻つて取つて投げ

平馬　さらばだ。

　　ト管絃になり、平馬向うへ入る。信盛、思ひ入れあつて

信盛　大切なる詮議残りし今の盗賊、おめ／＼見逃し、取逃がせし皐月どのゝ心底、何とも會得いたされぬ。

皐月　たとへこの場を逃げ去るとも、出口々々を固めさせ置きましたれば、ちつともお氣遣ひはござりませぬ。この上は、九郎次郎様には、あの者どもを召連れられ、裏手々々へ、ちつとも早う

九郎　心得てござる。皆参れ。

　　ト九郎次郎、曾平太甚平を召連れて入る。

桔梗　大切なる盗賊。ソレ

　　ト桔梗も下座へ入る。皐月、信盛残る。合ひ方。

信盛　イヤハヤ、男まさりの皐月どの、驚き入つてござるて。

皐月　これは／＼、お恥かしう存じまする。

信盛　恥かしいとは流石は女儀。どう致して我れ／＼なぞは及ばぬところ。拙者もいつぞは折を見合せ皐月どのと連俳なりと、お相手いたしたいと、明暮れ願うて罷りあつたて。

皐月　これはマァあられもない。不拙な私、どう致してそのやうな事が

信盛　イヤ〳〵、左様に卑下めされても、人は姿形には依りませぬ。みな心に惚れまする。(ト皐月と顔見合せ、思ひ入れあつて)ハヽヽヽヽ、これは〳〵、興に乘じて、味な事を申し出した。その惚れたと申す事についてお話がある。いつぞや中國の太守、郡輝元、長州北治山にて皐月狩りを催ふされしに、折節奥女中殘らず召させられたところが、松田九郎左衞門の妹、即ち輝元の妾にて、至つて寵愛淺からずありしところ、この妾、皐月を大分折り取りしゆゑ、輝元も喜びしが、初めは花の盛りも、後には散り〴〵にて嘆かはしく……サア、盛りの皐月も、憎い嵐にさへられて散らうより、また焦るゝ風にうなづいて、人の心のおさまるやうに、ナ、コレ、皐月どの。(ト皐月の手を取らうとして、又思ひ入れあつて、懷中より短冊を出し)これ御覽なされい。

皐月　(取つて)「風さわぐ眞葛ケ原に咲く皐月、手折りて花は詠めてしまに」。

信盛　サア、手折りて花と

皐月　そんならアノ(ト思ひ入れ)。

信盛　解りましたか。

皐月　(思ひ入れあつて)重ねて御返事いたしませう。

ト唄になり、ツイと入る。信盛殘り、思ひ入れ。九郎次郎、ソツと出て來り

八郎　信盛公、皐月が樣子は

信盛　まづ思ひの丈は渡したが、あの短册を納めた心は

九郎　エヽ、面白くなつて來ましたな。

信盛　コリヤ。

ト囁く。これにて道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、正面は假家の木戸、東西とも丸太の垣、上の方に柳の大樹、この下に流れあり、この柳に蜘蛛の巣かゝり、誂への蜘蛛、巣をかけてゐる。爰に光秀、立烏帽子、大紋、小さ刀にて立ち身、この蜘蛛を見てゐる。山颪にて道具とまる。

ト誂への大小入り、靜かなる鳴り物になり

光秀　ハテ合點のゆかぬ。我れいやしくも君命に依つて、勅使饗應の司を蒙むり、善盡し美盡して、御感にあつかり奉らんと、過半知行を費しての心配も、君たる船を浮べる臣は水の譬へ。いま饗應の御假家へ參る折から、柳に蜘蛛のこの振舞ひ。(ト始終蜘蛛は巣を張りゐる。この時、柳、バラ〳〵と落ちて流れへ落ちる。これにて蜘蛛は流れの柳の葉の上へ下る。光秀キッと目を附ける。鳴り物變り)そ

もく船は、唐土黃帝の御宇より事起り、かの貨狄が計り事。されば、そのとき逆臣あり、彼れを亡ばさんとしたまふに、禹江といふ海を隔てゝ、責むべき手段なかりしに、かの貨狄といへる臣下あつて、折しも庭上の池の面を見渡せば、まッこの通り、秋の嵐に散りかゝりし、柳の一葉水に浮みしに、また蜘蛛といふ蟲、これも虛空に立ちけるが、その一葉の上に乘りつゝ、次第次第にさゝがにの、いと果敢なくも柳の葉の、吹き來る風に誘はれて、汀に寄り寄る蜘蛛の振舞ひ實にもと思ひそめしより、工みて船を造れり。黃帝これに召されて、禹江を漕ぎ渡りて、逆臣を容易く亡ぼし給ふと傳ふ。されば某、君命に隨ふも、君は船なり、臣は水、水よく船を守護なす役目。御內勅の具房卿、今日のお入りにこの有樣、我れよく君に仕ふる知らせか。（ト思ひ入れあつて）但しは敵たる中國の郡、眞柴久吉、責め亡ぼせし、君への知らせか。ハテ、いぶかしい……（トこの時、薄ドロ〳〵。この蜘蛛、流れの葉を摑み、巢の內へ登る。）心得ざるはこの蜘蛛の、船に譬へし柳の一葉を咬へ、我が巢へ上りしは面白し。……「我が背子が來べき宵なりさゝがにの

但馬　（最前より出かゝりゐて）蜘蛛の振舞かねて知るしも」。

光秀　すりや兼ねて（ト思ひ入れあつて但馬之助と顏見合せる。合ひ方になる）。心得ざる其方は

但馬　先達て春永公へ降人となつたる、丹州八上の城主、波多野の一族、卽ち波多野但馬之助と申す者

光秀　委細承知。この上は春永公、北山の御遊覽より御歸館、その上にてお目見得いたして、忠勤第一。

但馬　畏つてござりまする。

光秀　一旦敵たる波多野の一族、この上は家名も改め

但馬　波多野の氏に別系たる、中尾の苗字に

光秀　すりや、中尾氏には、いよ〳〵忠勤。

但馬　元より敵へ降る某

光秀　いよ〳〵忠勤たくましく（ト思ひ入れあつて）中尾彌太郎俊國と名乘られてよからう。

但馬　ハツ。（ト思ひ入れあつて、誠に、智勇兼備の武智氏。

光秀　春永公を君と稱する上からは

但馬　忠義は同じ武士の魂ひ。

光秀　（思ひ入れあつて）水よく船を浮べる大事。

但馬　貨狄が工みの柳の一葉。

光秀　すりや最前の

但馬　蜘蛛の振舞ひ。



ト柳の木の方へ行かうとするを、光秀引廻して

光秀　中尾彌太郎

但馬　光秀どの

兩人　同道いたさう。

ト思ひ入れ。唄になり、兩人見得にて、チョン〳〵、この道具廻る。

本舞臺、三間の間、高足の二重、檜皮葺きの屋根、白木の階、高欄附き。萌葱べりの御簾、水色に桔梗の紋附いたる幕を張り、すべて饗應假御殿の體。爰に以前の蘇鐵を直し、九郎次郎、桔梗を捕へゐる。管絃にて道具とまる。

九郎　コレサ、桔梗樣、秋の盛りの今の花を、あの前髪の蘭丸どのに、咲かさうとは胴慾々々。

桔梗　エヽ、嫌らしい九郎次郎、料理方のお役風情で、光秀の妹の桔梗に、戀慕とは慮外であらうぞ。

九郎　ハテ、そこが戀に上下の隔てのないところ。是非に今宵は大澤の九郎次郎、じろ〳〵と附け廻すに、聞き入れぬとは、つれないぞよ〳〵。

桔梗　エヽ、知らぬわいな。

ト突き放して逃げるを、九郎次郎キッとなり

九郎　いゝワ、さうこなたが聞き入れねば、せう事がない。おれも武士だ。命にかけても自由にする。この上は、人の花と詠めさせうより、桔梗どのを落花微塵に

ト刀をスラリと抜く。桔梗恟りして

桔梗　あれえ。

ト逃げるを、九郎次郎追ひ駈ける。立廻りに桔梗、刀の鞘を取つて打附ける。これにて九郎次郎驚き刀を落し

九郎　ウヌ、女のくせに、手練を見知らしたな。

ト追ひ駈ける。この時桔梗、落ちたる刀を取つて差附けて

桔梗　寄らしやんすと、お前を切るぞえ。

九郎　コレ、滅多な事をさつしやるな。

桔梗　そんなら悪い事さしやんせぬか。

九郎　サア、それは

兩人　サア／＼

　　　トまた桔梗、刀を差附ける。これにて九郎次郎逃げる。始終管絃にて、追ひ駈ける事あつて、蘇鐵の石臺の後を廻る途端に、桔梗誤つて蘇鐵の枝を切り折る。兩人悑りして

九郎　ヤア、蘇鐵の枝を

桔梗　こりや粗相をして折れたわいな。（ト驚いて刀を投げ出す）。

九郎　この蘇鐵こそ、信盛樣の申し附けにて、春永公の御上覽に入れんとあつて、猪子兵助が持參せし大切の蘇鐵。その枝を切り折つては、さしあたる科人は桔梗どの。

信盛　（下座にて）その女動かすまいぞ。（ト管絃になり、信盛出て來り）蘇鐵を折りし科人の女、誰かと思へば光秀どのゝ妹、この云ひ譯はあるまいが。

桔梗　サアそれは

九郎　なんと桔梗どの、ちつとさうもござるまい。ハヽヽヽヽ。

桔梗　（落ちたる刀を取り）さうぢや。

　　　ト自害せうとする。下座より皐月、ツカ〳〵と出て桔梗をとめ

皐月　ヤア、桔梗どの、早まらしやんすな。

桔梗　お前は姉さん、放して殺して下さんせねば、蘇鐵を折つた云ひ譯が立ちませぬわいなア。

皐月　ぢやというて、非常の草木、その枝を切り折つたればとて、命を捨つるには及ばぬ程に、マアマア待たしやんせいなア。（トこれにて桔梗とまる）元はといへばそこらあたりに、秋の桔梗の花盛りを、寢たいとやら、何とやら（ト九郎次郎へこなし）。

九郎　エヘン〳〵。

桔梗　そりやモウ、あれなる九郎次郎どのが、わたしを捕へて無禮なる

皐月　ハテ、蘇鐵を切つたる科さへなければ、何事も云はぬがこの場の花とやら。

信盛　イヤ、その蘇鐵こそ春永公、御懇望あつて、讃岐の國丸龜の百姓、猪子兵助に申し附けて、取寄せたる八股の蘇鐵、すりや上意を請けし植木ゆゑ、草木心無しとて、折つたる儘では云ひ譯が立つまい。

皐月　すりや、その蘇鐵は御上覽にて、召寄せられしとや。

信盛　まだその外に、祇園へ奉納の平家の赤旗、光秀饗應司の役目なれば、守護する筈だ。紛失しては云ひ譯が立つまい。

皐月　その旗とても夫光秀が、預かりにてはござらねども、さしあたる最前の詮議にて、自らが御旗は奪ひ返して、卽ち爰に。（ト懷中より最前の旗を出す）。

信盛　イヤ、その旗は眞赤な似せ物。

皐月　ナニ、この旗が（ト旗を改め見て驚き）誠に、春永公御奉納ありしは、お家の御紋を織り入れられしと承る。こりやこれ無紋のこの旗。

桔梗　エヽ。

信盛　それでもこなたの詮議立て。いらざる女の、小癪な事を

皐月　すりや、最前の曲者、福富平馬が奪ひしを取返せしが、さてはその時、似せ物と摺替へしか。

九郎　何にもせよ詮議の女、光秀どのゝ御内證とて容赦はならぬ。九郎次郎が引つ立てゝ

ト皐月へかゝるを、突き退け

皐月　さうぢや。

トつか〳〵と向うへ行かうとするを呼びとめ

信盛　こりや皐月どの、いづれへ。

皐月　曲者の行くへを尋ね詮議して

信盛　御旗を奪ひ、摺替へて立退く曲者、そこらあたりにへちまはうか。馬鹿な事を。

ト皐月立ちどまり、思ひ入れ。合ひ方になり、本舞臺へ來り、ヂッとなる。

九郎　サア、皐月どの、御旗の紛失、蘇鐵の枝を切り折りし云ひ譯聞かう。サヽ、なんと。

桔梗　モシ姉さん、申し譯はござんせぬわいなア。

皐月　（思ひ入れあつて）御旗の事は格別、この蘇鐵の事は、只今これにて申し譯いたしませう。

信盛　すりや、云ひ譯を

皐月　この蘇鐵の枝を切り折つたるその主は、宅間左衛門信盛樣さ。

信盛　ヤ、なんと。

皐月　（以前の短册を示して）「風騷ぐ眞葛ヶ原に咲く皐月、手折りて花と詠めてしまに」。皐月どのへ、信盛どのとのこの短册。

信盛　ヤア。

皐月　手折りて花を詠めてしと、わたしへ賴みのこの歌。蘇鐵を折つたは信盛樣、なんと覺えがござりませうがな。

信盛　イヽヤ、その短册は

皐月　そんなら主あるわたしへ戀慕、この事夫へ申した上、春永公へ言上しませうか。

信盛　サ、それは

皐月　眞葛ヶ原の皐月とかけしは、わたしを思し召すその御秀歌。
信盛　すりや、手折りて花と詠めてしまに。
皐月　手折れとあるはこの蘇鐵。春永公には、さのみ御所望なき植木を取寄せ給ふは、又そろ堺妙國寺の、蘇鐵の類を無理所望も、みな信盛様のお心一つと、憚りながら、訝かしう存じまする。
信盛　ムウ。（ト思ひ入れ）。
皐月　妹桔梗、なんと信盛様のお頼みで、枝を切つたであらうがや。
桔梗　成る程、左様でござりまする。
九郎　して、御旗の詮議は何と。
皐月　それも詳しく詮議いたさば、どこからどこへどう廻つて、御難儀なさるゝお方もあらうと存じますゆゑ、當時戰場に御用無き御旗、追つての詮議はこの皐月が
九郎　然らばそれも御勝手次第。
信盛　して、饗應司の光秀どのには、いまだ入來は召されぬか。
九郎　やがて世尊寺中納言、具房卿の
兩人　お入りであらう。

光秀（御簾の内にて）イヤ、氣遣ひめさるな、饗應司武智光秀、とくよりこれに相詰め居る。

兩人　ヤ、なんと。

ト管絃になり、御簾上ると、内に光秀、前に饗應の器物種々並べ、これを調べて居る體。

皐月　すりや、夫光秀どのには

光秀　最前よりこの御膳所に相詰め、饗應の品々、相整へ罷りある。

桔梗　そんならこの場の樣子をば

光秀　殘らず承知いたして居る。（ト思ひ入れあつて）何事も御任官のめでたき時節、降人の者も御赦免ある折柄なれば、何かの事は水色の、桔梗、皐月も配膳の手配り。

桔梗
皐月　畏つてござりまする。

光秀　さるにても信盛どのには、御前よきまゝ、妙國寺の日光へ、空蟬の茶碗御所望、それ聞き入れぬ過怠とて、蘇鐵を召寄せ、怪異によつて返されしが、又ぞろこれなる蘇鐵を取寄せ、君へ怒りをすゝむる佞奸。

信盛　ヤ、なんと。

光秀　サヽ、蘇鐵の折れしも承知いたした。御膳所の邪魔たる植木、九郎次郎どの、申し附けて片附け

めされい。

九郎　心得ました。誰ぞあるか、この蘇鐵を片附けい。

侍　ハアヽ。

ト管絃になり、下座より菖蒲革の侍ひ二人出て、石臺を持つて入る。向う揚げ幕にて

呼び　春永公のお入り。

光秀　ナニ我が君のお入りとな……奥、妹は所々の假家へ、手配りの用意申し附けい。

皐月　桔梗　左様なら私どもは

光秀　立て〳〵。

信盛　然らば光秀どの

光秀　後刻。

ト合ひ方になり、信盛に皐月、桔梗附いて下座へ入る。

すりや我が君には、北山のお鷹野より、直樣これへ

呼び　春永公のお入り。

ト時の太鼓、誂への鳴り物になり、向うより春永、誂へ鷹野の形、附け太刀にて出てくる。跡より蘭

丸、胴丸、行縢、誂への形にて、手に鷹を据ゑ、跡より半纏股引、鷹野の形の侍五人、めい〳〵騎射笠、半弓、結構なる合ひ引を持ち出てくる。光秀出迎へる。皆々すぐに本舞臺へ來て

春永　光秀、饗應の役目大儀。

光秀　ハツ、君には北山の御狩、快晴の時節、御滿悦にいらせられませう。

春永　思ひの外の獲物。蘭丸、彼奴が今日の勢ひ、出かしたではないか。（ト餘念なく鷹を愛してゐる）。

蘭丸　ハツ、御拳の手柄物、御饗應の取合せ、調味いたさせませう。

春永　オヽ、世尊寺どのゝ御入來、光秀の心遣ひ。して、饗應は相濟んだか。

光秀　イヤ、御勅使のお入りは、やがてゞござりませうが、御存じあられまする通り、武骨の光秀、お心に叶ひませうやうはござりませねど、身上過半を費し勵みまするも、忠勤に私なき愚臣が心底、恐れながら、御憐察下されませう。

春永　ムウ。（ト思ひ入れあつてあたりを見廻し、心得ぬこなしにて）水色に桔梗の幕張りは、饗應司光秀と、世上へ沙汰する自身の曠れか。（トきつと云ふ）。

光秀　イヤ、全く以て

春永　イヤサ、今日の馳走は春永だぞ。

光秀　ハッ。

ト恐れ入つたる思ひ入れ。春永、スッと立つて二重へ上り、幕を引落して、寸々に引裂き、饗應の器を散々に踏み碎く。光秀、キッと思ひ入れ。蘭丸、驚くこなし。春永、急いたる思ひ入れにて

春永　光秀〳〵、それへ出い。

光秀　ハッ。(ト思ひ入れ)。

春永　イヤサ、ズッと出い。

蘭丸　光秀どの、御意でござる、それへ。

光秀　ハッ。

ト摺り寄つて平伏する。春永、居丈高になり

春永　奇ッ怪なり光秀、過ぎたるは猶及ばざるが如し。內勅の公卿饗應なすに、斯くの如く過分の器物、山海の珍味を調へ、費をいとはぬ奢りの條。其方が所存あつてか、云へ、聞かう。

光秀　ハッ、恐れ入つたる御諚にはござれども、役目を蒙むるその砌り、殿上人へ御饗應、丁寧を盡せよとの御諚に任せ、斯くの仕合せ。

春永　默れ光秀。尤も內勅とは申しながら、勅使は何人、世尊寺中納言。この春永は內大臣、殊に太政

大臣に任官の內勅、重ねて彼方にて我を招かば、如何いたすぞ。元より斯程の用意なさば、再應春永に達すべきに、光秀自分の才覺を以て、禁廷の公卿に意を通じ、後日の便となさんが爲か。

光秀　こは存じよらぬ御疑ひ。たとへ客人何人にも致せ、君命に依つて心を勞し、麁略をなさぬ光秀に面目を失ふ只今の御諚。殊更堂上の高位にへつらひ、野心ぞとのお疑ひは、御心のひがみ。武骨にはござれども、武智光秀、武道に於ては他門の扶助を賴みとせず、近くは丹州波多野の一族、今日も但馬之助を、控へさせ置きましたる忠勤を、思し召し下されずや。恐れながら、御賢慮の相違かと存じまする。

春永　ヤア、過言なる返答。おのれ臣たるの禮を重んじなば、屈伏して罪を謝すべきに、自らその身の武道に慢じ、主命に背く不忠の光秀。コリヤ、さほどの器量あらば、何が故に我に仕へ居るぞ。イヤサ、何故家臣となつて居る。ヤイ、おのれ浪々の昔、西國にもありしと聞く。のち朝倉に仕へて用ゐられず、當家へ奉公を願ふ不便さ。我厚く憐愍を垂れ、列侯に加へ、いま一國を領するも、春永が恩義でないか。主威に依つて波多野に勝ちしを、おのれが武功と存ずる奇ッ怪。身が手を下ろすも穢らはしい。蘭丸、彼奴が生き面を毆れ。

蘭丸　ハッ。（ト立ち兼ねる思ひ入れ）。

光秀　勇あるの愚は親しきなりと、光秀過言の言上には似たれども、君は生得御短慮にまします〳〵て、以前甲州勝頼の一族、惠林寺に於て燒討との御掟、某押切つてお諫め申せども、お用ゐなき御誤り今又非道の御折檻は、不仁の君と萬人の譏り。臣が嘆きも御身の瑕瑾と思し召し、御辨まへ下さらば、生々世々の御厚恩。只今御心なだめられ、お詞下し置かれませうなれば、有り難く存じ奉りまする。

春永　云ふな光秀。やゝともすれば軍慮に暗き不忠の諫言、春永を愚なりとさみする條、言語に絶せし重々の不屆き。猶豫いたすな、蘭丸、打て。

蘭丸　ハツ。

春永　イヤサ、生き面をぶち据ゑい。

ト鐵扇を出して打附ける。蘭丸、立ちかゝつて

蘭丸　武智光秀、上意なるぞ。

ト鐵扇にて打つ。光秀思ひ入れ。

春永　小氣味のよい。ぶて〳〵〳〵。

蘭丸　ハツ〳〵〳〵。（トこなしある）。

春永　手ぬるい。なぜぶたぬ。

蘭丸　ハツ。（ト立ちかゝつて）御上意なるぞ光秀、蘭丸が鐵拳、不忠の五體に、こたへたか〳〵。

トしたゝかに打据ゑる。この時光秀の立烏帽子落ちる。蘭丸、猶も立ちかゝつて打つ。光秀の額より血流れる。光秀、ヂツと平伏して思ひ入れ。バタ〳〵にて向うより仕丁一人、走り出て

仕丁　仰せ附けられましたる饗應の御能の用意、殘らず整ひまして、只今勅使世尊寺中納言どの、御殿へお入りでござりまする。

春永　オヽ、承知した。始めい。

仕丁　ハツ。（ト向うへ入る。）

光秀　御能の刻限。猶豫は恐れ。（ト立上がらうとする）。

春永　光秀動くなっ　ぶち放すぞ。

光秀　でも饗應は身が役目。

春永　何をおのれにこの役目、蘭丸に云ひ附けたぞ。

蘭丸　ハツ、畏つてはござれども

春永　すぐさま代つて饗應なせ。

蘭丸　委細畏つてござりまする。

ト光秀、口惜しき思ひ入れ。春永、ヂロ〳〵見て

春永　光秀は目通り叶はぬ。領地へ歸り蟄居なせ。思ひ出すもいま〳〵しいわい。蘭丸、供せい。

ト向うへ行かうとする。光秀この内、ヂリ〳〵と口惜しきこなしにて、涙をこぼし、慄へてゐる。蘭丸、キツと目を附け

蘭丸　御上意ではござれども、光秀が胸中合點參らねば、きつと警固仕りませうや。

春永　なにサ、彼等如きが何程の事仕出さう。ハヽヽヽヽ。（ト思ひ入れあつて）ヤイ光秀、わりや春永が厚恩を忘れ、その有樣、口惜しいか。無念なと思ふか。返答せい。

光秀　ハツ。（ト平伏して思ひ入れ）。

春永　イヤサ、返答せぬは、口惜しいか。

光秀　たとへ一命召されまするとも、君臣の仲、ナニ恨み奉りませうや。

蘭丸　伍子楚は諫めて軍門に死し、蘇武は胡國に節を失はず。

光秀　登庸の御恩、忘れは仕りませぬ。

春永　ムウ。さうあらうかい。（ト花道へ行き）武道に慢じ、春永へ詞を返せし見せしめ、魂にえりつ

け、よつく覺えたるか。主に背きし知行盜人、國に盜賊、家に鼠と、ムウ。……そちやしかも子の年、道理こそ恩知らずめ。したが、蘭丸といふ逸物の、猫にぶたれて、あの見すぼらしい形わえ。エヽ、面わえ。

ト弓八幡の謠ひになり、春永これに合せて、笑み含み、思ひ入れあつて向うへ入る。蘭丸こなしあつて、是非なく花道へかゝる。光秀、無念のこなし、蘭丸と顔見合せ、光秀、鐵扇を取上げる。木の頭それを戴く。この途端、よろしく拍子
蘭丸、向うへツイと入る。シヤギリ。

幕

二幕目

山崎陣中の場

役名――眞柴大領久吉。蛇の目船の虎實ハ加藤虎之助正淸。判人、源五郎實ハ水尾正兵衞。福富平馬。曾呂利新左衞門。路地番の吉實ハ三宅源内。波多野妹、高松。藤吉女房、お八重。雑兵、矢叫びの音。同、いなゝきの馬。同、初陣の龍。同、流れ矢の權。質屋、五左衞門。女郎、かさの。同、とやしげ。同、鹽花。

本舞臺、三間の間、正面に誂への切り見世三軒、上の方に九尺の屋體、酒肴御料理と書いたる行燈を出し、その前に一軒の屋體見世、蛇の目ずしといふ看板を吊し、加藤正淸、前髪、鮨賣りの拵へ、鮨桶や箱を積み重ねあり、上の方に葭簀張り、高座の上に毛氈を敷き、机を直し、貼出しの札に「戯作おとし咄竝浮世物語當陣中にて日數百日餘り毎夕出席仕候御伽亭曾呂利」と書き、曾呂利新左衞門、話し坊主の拵へ。かさの、とやしげ、しほ花、いづれも、けころめいたる拵へにて、浴衣、板締めの平ぐけ、朱鼻緒の塗り下駄、似顏畫の團扇を持ち、門口に立ち身。長床几に軍兵四人、日の丸の陣笠、紺看板、手甲、股引、一本差し、話を聞いてゐる。すべて因幡の國、帝釋山の麓、久吉の陣中。亂杭、逆茂木を結ひ廻し、よき所に下馬札に紙にて無用と添へ札を貼り、辻行燈を建て、幕の內より四つ竹節に楊弓の音、これにドン〳〵を打込み、賑やかに幕明く。

ト向うより音、馬、龍、權、浴衣單衣帶の下へ、鎧の胸當、前より草摺下りし雜兵の拵へ、下駄がけにて出て來る。跡より五左衞門、質屋の形、五枚兜を風呂敷に包み、大小を手拭にて結へ、提げて出て來り、皆々、地廻りの武士にて、各々女形と捨ぜりふあつて、切り見世へ腰をかける。女形、莨を吸ひ附けて出す。向うより吉、やつしの下へ鎧を素肌に着て、鐵の棒を曳いて出て來り、路地番の捨ぜりふあつて下座へ入る。

音「心石竹、氣は紅葉、歸ろとなくが鹿の聲」。

三人　廻りなんしな。
とや　オヤ、音さんか。かさのさんが待人をかけて居たによ。かさのさん〳〵、奴が來たよ。
かさ　オヤ、なんだな、とやしげさん、つひぞねえ、いつそこぢれが來たによ。
しほ　わつちは小指がゐるか見て來よう、なう。
かさ　打ちやつておきやな。小じやくの癖に。
音　どうだ、今夜來て泊らうか、達引く氣はねえか。
とや　オヤ、ころりはあやまるの。
馬　この子は去年燈籠の時分は、權次近江屋にゐたの。
龍　權や、見や、あの子の顏は、茶瓶に目鼻を附けたやうだ。
權　さうサ。したが、鼻は長樂寺だ。コレ、姐さん、平次蕎麥を取らうか。
かさ　よしてもおくれ。死ぬ者が生きるといつても、お前達が晝遊びがなるものかな。
とや　どれも〳〵曉の客人だの。エヽ、恐れるにヨウ。
權　エヽ、ふくおたの癖に、面を見や。
正清　これよ〳〵、お前達は子供衆を捕まへて。外の無駄と違つて、そりやァ惡いの〳〵。

五左　さうサ。蛇の目鮨の虎さん、眞面目のせりふだね。
正清　ハテ、蛇の目鮨の虎は、かとう出るね。
かさ　そのかとうは有り難いね。
五左　時に、曾呂利さん、一つ承りたいね。
皆々　サア、始めなさい〳〵。
新左　サテハヤ、今日も相變りませず、斯様にお出で下さりまする段、有り難い仕合せに存じ奉りまする。さて、只今お聞きに達しまするは、ずんど短い、誠に怖い、恐ろしいお話しでござります。これは彼の播州の皿屋敷と申すお話しでござりまするが、私が年若な時分でござりました。彼の播州の皿屋敷を、夜に入つて通りましたが、しかも赤松滿祐の明き屋敷前でござりました。しかも雨は頻りに降りまする。誠に眞の闇でござりまするゆゑ、どうぞ提灯のあかりが欲しいものと存じて參つたところ、はるか向うにあかりが見えましたゆゑ、そのあかりの方へ、足を早めて急ぎ、參つて見ましたところが……爰に變つた事がござります。そのあかりの見えまするは、草茫々としげりましたる古井戸でござりました。いつ水を汲みました事やら、葎しげりましたる井筒でござりますれば、そこで私、胸に手を置きまして、さては我ら、狐狸妖怪の類に化さ

れしと心附きましたゆゑ、井の緣に腰を打掛けまして、猶も樣子を窺ひ居りますると、程なく遠寺の鐘も、さて物凄く聞えまして、雨は頻りに降り來りまする。その時、井筒の中にて、さも物凄き女の聲音にて、一つ、二つ、三つ、四つ、五つと、九つまで數へますると、忽ちワツと申して泣き叫びまして、心火えん〳〵と燃え上がり、井戸の中よりは女と覺しく、丈なる黑髮を振り亂し、白き姿にて、面色青ざめ、左右の指を切られましたる體にて、割りましたる皿一枚を口にくはへ、ふら〳〵と立上がりまする。さては彼奴聞えし幽靈と、目を離さず睨み居まりすると、右の幽靈は皿を改めまして、眞一文字に武家方の小路を過ぎまして、城下の町へとかゝりまする。私も矢張りその跡をつけまして、町數二三町も參りますと、右の幽靈は町家の門に佇みまして、左右をキョロ〳〵と見廻しましたが、私を見附け、側近くさし寄りまして、化性の女が申しまするには、大丈夫のお方と見かけまして、少と私はお願ひがござりますると、申しまするゆゑ、私し申すには、幽靈が身共に願ひとは、お札をめくつてくれとの賴みかと申したれば、幽靈が申しまするには、イヤ左樣の儀ではござりませぬ。あなたにお尋ね申しまするは、モシ、燒繼ぎ屋はどこでござりまする……サ、爰で一服下さりませう。

ト矢張り話のうち楊弓の音。仕出しの出入りいろ〳〵ある。

音 先生、そいつは古い話しだの。

三人 古いぞえ〳〵。食つたら堪るまい。蛇の目鮨ぢやァあるまいし。

正清 なんだ、蛇の目鮨がどうした。古いのを食つたら堪るまいとは、おれが見世の鮨の事か。コレエ、今の話しがなんで古い。この猿唐人めら。うぬらは耳が無いか。片つ端から耳を引抜いて、木耳の代りに鮨へ叩ッ込むぞ。とんだ毛唐人めらだ。

馬 なんだ、おいらを唐人だとぬかすかえ。

權 その上に、耳を切つて木耳の代りに使ふとか。

龍 耳を切るより、舌を切つてくれろ。どつちへか方を附けてしまふわえ。

四人 とんだ小僧ぢやァねえか。

正清 なんだ、小僧だ。この毛唐人めらが

ト切り見世にある安土枕を取つて、ぶつてかゝる。新左衛門、五左衛門、女形皆々捨ぜりふにてとめる。この時、吉、鐵棒を持ち出て來り、正清をとめて

吉 コレナ、虎坊、おとなしくもねえ、靜かにさつしやいな。コレ、てめえ達もなんだ。毎晩々々ひやかしに來ながら、惡騷ぎは御免だよ。惡くふざけると、ふん縛つて會所へ叩ッ込むよ。コレ、

はしぐの岡場所とは違ふよ。爰は因幡の、久吉樣の御陣所だよ。

正清 この中國の郡を攻めんと、鳥取の城中を取り圍んで、このやうに一戰にも及ばずして、月を重ねて圍み居る內、敵の輩は兵糧に餓ゑるは治定。さすれば限りなきこの城責め、味方の者に退屈をさせまいため、因幡伯耆の商人を、城中へ招き入れ、市まで立てゝのこの賑ひ。或ひは茶見世、料理茶屋。講釋、楊弓、八人藝。

新左 落し話しは久吉樣の、御前で覺えたこの曾呂利。每晚々々浮世話しに、影狂言、辻能、放歌、お側去らずの正淸どのが、蛇の目鮨とは、こりやよい思ひ附でござるわいの。

正清 これサ吉公、その五分も透かねえ蛇の目鮨を、喰つたら堪るまいとは、おれの鮨が腐つてゐると云はねえばかりの吐かしやうだから

吉 ハテ、そりやァ腹を立たねえがよい。おぬしが鮨は大當りに當るワ。

正清 そりやア、なぜく。

吉 ハテ、小はだ小平次であらう。(前興行の「彩入御伽草紙」の成功を云ふ)

皆々 こいつは出來たわい。

五左 アヽ、そんなら鳥取の落城するまでは、久吉樣の御陣中は、いつもこのやうにお賑やかゝな。どう

でもその所爲がして、殊の外質屋は忙がしうござりまする。モシ〳〵、吉公さん、二朱一本の兜を持つて來ましたが、これは受けになりますかえ。（ト風呂敷より鍬形の長き五枚兜を出す）。

吉　オヽサ、さう〳〵入れ替へばかりにしてゐては、捨利に追はれるから、受けて置くつもりだ。ドレ見せやれ。（ト兜を取り、いろ〳〵見て）コレ〳〵、番頭、こいつは大分兜に、鐵砲疵が出來たが、こりやア誰かに、貸してやつたな〳〵。

五左　サア〳〵、その事だて。お前の代物に疵を附けた奴は、引ッ捕へて牢へぶち込んで置きましたよ。

吉　アヽ、そんならその科人は捕へて、牢へ入れたか〳〵。

五左　モシ〳〵、その科人は、コレこの通り、牢へ入れて置きましたワ。

ト極樂落しの中に鼠二三匹ゐるを、風呂敷より出して見せる。

正清　アヽ、科人は鼠どもか。

五左　左樣々々、この成敗は石見の國銀山に於て、三毛猫の刑罪、申し附けずばなりますまい。

吉　おきやアがれ。親重代の五枚兜を、疵物にしたその代り、二朱一本は當て身の權助だぞ。

五左　こいつはあやまるの。

新左　そりやアさうと、この手合ひも、同じ陣中で毎日の附合ひ顏だ。このまゝに云ひしらけにもなる

まい。なんと話し坊主が、物事丸く納めませうが、仲人まかせに、仲を直さつしやいな。

正清　こなさんの云ふ事だもの。わしやァどうでもようごぜえす。ナウ、たぼ達。

女皆　さうサ〳〵、締めなさい〳〵。

音　虎公がその氣なら、ナニおいらが。ナウ、さうぢやァねえか。

三人　締めべい〳〵。

皆々　アヽ、ヨイ〳〵〳〵。

　　ト手を打つ。向う揚幕にて

平馬　コレ、姐さん、不肖さつしやい〳〵。

高松　ハテマア、わッちが見世まで來ねえよウ。

　　ト流行り唄になり、高松、浴衣、板締の平括け、垢すりの附きし手拭を持ち、糠袋を簪の先へ掛け、朱鼻緒の黒塗り下駄にて、切り見世女郎のこしらへ。平馬、やつし、一本差し、股引、草鞋、口中療治の藥賣りにて、紅梅散の箱を提げ、高松に手を取られ、捨ぜりふにて出て來り、花道にて

平馬　コレ〳〵、姐さん、今云つた事がお前の氣に當つたら、料簡しなさい。わしもこの陣中へは、今日始めて商ひに來た、紅梅散藥歯磨、不肖しなさい〳〵。

高松　その商人のこなさんが、女子に逢ふと、惡口云うてもようござんすか。なんであらうと、わたしと一緒に來なさんせいな。

ト矢張り流行り唄にて、兩人本舞臺へ來る。皆々見て

かさ　オヤ、高松さん、洗湯から今歸りなさつたか。

高松　アイ、お前方は早く見世を張つたの。わつちやァ馬場先の洗湯へ行つて歸りがけ、この陣中へ商ひに入つた、紅梅散のこの人が、わたしを見て、成る程評判の高松ほどあつて、强氣にけん高な女郎ぢやの、イヤ背が高松ぢやのと、嬉しい評判をしてくんなさるから、近附きになつて禮を云はうと、連れ申して來たのだよ。コレ、齒磨屋さん、今夜はわつちが達引いて、お前を泊めるよ。吉公さんもさう思つてくんねえ。ほんにとやけもねえ客人が取れたよ。

吉　アヽ、なにか、この紅梅散が、この子に嫌味を云つたのか。エヽ、この人もマア、子供も多いにとんだ子に惡洒落を（ト平馬を見て）ヤア、こなたは平馬

平馬　アヽコレ。

正淸　ナニ、平馬とは

吉　サ、平馬とは……ソレ、平馬々々。ほんにソレ、高松さん、おめえ附き馬を曳く客人を、必ず取

りなさんなよ。

新左　アヽ、この陣中にも附き馬があるか。

吉　ハテ、附き馬は軍場から始まつた事よ。

平馬　ほんに附き馬といへば、あの下馬札に側へ無用と、添へ札が下つてゐるが、ありやァ下馬無用といふ事かの。

正清　なにサ、下馬札ぢやァごんせぬ。陣中の手合ひが勤めに追はれると、二朱か四百の抵當に、下馬を下げるから、軍場で下馬を下げられたところが、鎧兜と違つて通用が惡いから、ありやァ下馬無用といふ事よ。

平馬　アヽ、そんならこの因幡の網打ち場では、下馬下げる事は法度かえ……イヤ、そりやァさうと、高松さんとやら、今云つたわしが無駄は、これぎりにモシ、……お前方も、いゝやうになだめて下さいな。

吉　さうサ、腹も立たうが、不肖してやりなさいな。高松さん、料簡しなさい／＼。

高松　いゝわな。それ程に云ふ事なら、野暮に腹も立たれまい。今のはこれぎり水にして

平馬　水にするとは面白い。流石は達引譯知りの、その高松は評判の、水際立ちし化粧水。

正清　顏は生れの城がまへ。素顏素面は正しく波多野

高松　エッ

正清　サ、肌の白いは生れつき。高松さんは色ゆゑに、爰へ鞍替へ裏切りの

高松　諸武士は多い陣中の、親方さんは久吉樣、小刀針か水責めの

正清　責めにはいつたが高松も、落城せずばなるまいかえ。ト思ひ入れ)。

平馬　ナニ、高松は落城か……城の落ちたる客人は、油斷のならぬちよつと借り。あの高松は……サ、
高松さんは浮れ女の

新左　浮れ法師のこの曾呂利、仲へ入つたせうがには

五左　この上ともに、互ひに挨拶。

平馬　このお禮には齒磨一斤、取らずばなるまいかえ。

五左　その上望むはこなたの聲色。コレ、必ずかのと聞えぬやう

平馬　オツト、そこらは呑み込んだ。

四人　おいらも助けて使はうか。

平馬　高松さん、皆さん、お世話になりました。

ト四ッ竹節になり、新左衞門、平馬、吉、五左衞門、四人のいさみ附いて下座へ入る。高松、正清、三人の女郎殘る。矢張り四つ竹節にて、向うより源五郎、やつし一本差し、單羽織を前へ挾み、眞田の上帶、ぜげんの拵へにて、三度笠を持ち、裏附草履。跡よりお八重、やつし、女髮結ひにて、毛筋通しを差し、前垂れ、草履下駄にて出て來り、花道にて

八重 モシ、源五郎さんえ。爰はマア、お屋敷か、盛り場か、大した賑ひでござりまするぞえ。

源五 その筈よ。爰は因幡の鳥取。向うに見えたが郡の城内。あの城を責めるといつて、久吉樣がこの陣中へ、京大阪から女郎を呼んで、士卒に退屈させまいと、俄に出來た遊女町。京で石垣、大阪で髭剃り、江戸で云はうなら、切り見世といふ代物よ。向うの城を一網に、引寄せるその縁で、陣中の網打ち場とは爰の事よ。

八重 エヽ、そんなら爰は、屋敷ぢやござりませぬかえ。

源五 ハテ、爰は久吉樣の御陣中だが、この頃爰へ切り見世が出來たから、女郎の髮を結はせるつもりで、そこでてめえを連れて來たのよ。

八重 エヽ、陣中とは、軍場の事ぢやァござんせぬかえ。そこへアノ女子のわたしが、行つてもようござんすかえ。

源五　ハテ、いゝ仕事があるから連れて來たのだ。マアく、來やれなく。

ト四つ竹節になり、本舞臺へ來る。

かさ　オヤく、源五郎さん、お出でか。

とせ　あの髪結ひさんが、わつち等が髪を結ひに來なさつた女中さんかえ。

高松　あの髪結ひさんが來なさつたかえ。

源五　アイ、この女に、てめえ達の髪を結はせようと賴んで來た。隨分と敎へては置いたが、どうでも勝手が知れまいから、よく敎へてやらつしやいよ。

高松　アイく、合點ぢやわいな。こりやアお前、よう來なさつたの。サア、一服あがれ。今日からお世話でもお賴みだよ。

とや　わつちやアあの前髪は、もつと切つておくれ。そして、油氣なしのかきばなしだよ。

かさ　いほじりの文がらたつぷりだから、そのつもりに呑み込んでおくれよ。

トお八重を中へ挾み、捨ぜりふにて口々に髪の風を敎へる。お八重、キヨトくして

八重　ハイくく、畏りましたが、そのやうにあなた樣方が、御一緒に仰しやりますると、私しはモウ、一向に覺えませぬ程に、どうぞお一人づゝ、お敎へなされて下さりませ。

かさ　オヤ〳〵、ぬしは物覺えが惡いなう。

高松　ほんに、見たところが、岡場所や四六屋體の、女の髪を結うた事のない恰好。モシ、姐さん、お前、今まで、どこの長屋の髪を結つた。

八重　ハイ、長局へ召されまして、片はづしより結ひ習ひまして、御祝儀日などのお取込みの節は、度度上がりまして、お髪をとりあげましたゆゑ、隨分存じては居りますれど、見ましたところ、どなた樣も〳〵、ついに見附けませぬお髪の風でござりまするが、こりや、このお屋敷の御殿風でござりまするか。

源五　コレナ、てめえマア、道々も云つて聞かして來たぢやァねえか。爰は屋敷とはいふものゝ、譯が違ふワ。陣所といつて、爰で戰のある所だ。あの長屋も、長局ぢやァない、ありやァ切り見世といふ、女郎の居る長屋だよ。

八重　女郎衆は、お奥をお勤めなされまするかえ。

源五　コレサ、御守殿向きの女郎衆ぢやァねえ。あの女郎衆は、客をお勤めなさるゝ、しかも切りを叩くから、骨は折れるよ。コレ、爰は切り見世だよ。

八重　左樣なら爰は、切り御殿と申しまするかえ。

女郎　オヤ、柳の御殿が聞いて呆れるワ。

正淸　モシエ、お前がアノ今度、この陣中の商賣屋へ、子供の世話をしなさる、源五郎さんかえ。わつちやアお大將樣の世話になつてゐやす、蛇の目鮨の虎といふ者でござりやす。今から子分同前にお賴み申しやす。

源五　ヘエ、虎とはこなさんの事か。氣のきいた若い人だ。ちつと話しに來ねえ。したが、この頃の取込みぢやア、さぞ忙がしからう。コレ、どうだ、客人はあるか。

かさ　ある段かな。强氣にありやす。晝夜をかけて二十四五づゝも賣るがね。その內、泊りの客が、いつちうるさいね。

とや　さうサ、客人は戰場の雜兵手合ひだから、迷ひ子の太鼓を聞いても、夜討ぢやァねえかと、夜一日寢ずにゐるから、どうでもうるせえよ。

源五　そりやア、切りを叩く不請にやア、その位な事は合點で客を取るがよい。

とや　聞きなさい。なんぼ戰場の客だといつて、敵に新手を入れかへ／＼來られちやア、巴でも板額でも、續くものぢやァねえわな。

かさ　ほんに、高松さん、お聞き。わつちが所へ來る、お馬預かりの刎右衞門さんが、中長屋の新造の

所へ行くとサ。そこでわつちやア、コレ、この大黒を鹽漬にして、せつちやうしたよ。

ト誂への三面大黒を出して見せる。

八重　モシ〳〵、あなた、そりや三面の大黒樣ぢやござりませぬか。勿體ない、マア、大黒樣の御存じの事でもござりますまいぞえ。

かさ　なにサ、大黒をせつちやうするのは、わッちらが方での呪ひサ。コレ、ちつと氣を附けろよ。

ト鼠鳴きをして大黒を抛り出す。殘りの女郎、長屋の方へ駈けて行き

女郎　コレ、氣を附けろヨウ。

ト見世の戸をガタ〳〵と叩く。お八重、大黒を取つて

八重　これはしたり、勿體ない。大黒樣を滅相な。モシ〳〵、わたしに福をお授けなされませえ。

ト辻行燈の上へ置く。

高松　コレ、お前方も、もう夜見世の身じまひにかゝつてもよからうぞえ。遲くなると、コレ(ト小指を見せて)これが、だりむくりを云はうによ。

とや　ほんに、身じまひにかゝりやせう。モシ、髮結ひさん、明日から賴むによ。

八重　ハイ、畏りました。

正清　わしも、こなさん達の來さつした事を、お大將樣へお知らせ申さうか。
源五　して、お大將樣のお居間は、何處だえ。
正清　アイ、あの臺屋が、久吉樣の出見世サ。
源五　エヽ、お大將樣も、商ひをさつしやるかえ。
正清　アイ、あの料理見世を出さしつて、久吉樣がお手づから、料理ごしらへ。雜兵士卒に賃錢取らずに、御酒や肴を下さるとは、なんと、有り難いお大將ではござらぬかえ。
源五　成る程、さう聞いては、久吉樣は名將だわえ。
女郎　ドレ、わつちらも、身じまひにかゝらうか。
正清　わしもお大將の、ドリヤ手傳ひをしませうか。

ト流行り唄になり、女郎三人は一軒づゝ見世へ入り、戸をたてる。正淸は、料理見世へ入る。あと揚弓の合ひ方。

高松　モシ、髮結ひさん。お前のお名はえ。
八重　アイ、八重と申しますわいな。
高松　お前、早速ながら、撫でつけておくれえ。

八重　ハイ、結び直しませうかえ。

高松　イエ〳〵、それぢやァ間に合ふまい程に、ちよつと撫でつけておくれ。

八重　ハイ〳〵、畏りました。

ト四つ竹節になり、高松、長床几に腰を掛け、お八重、毛筋通しを出し、後へ廻り、髪を直す。

源五　コレ、お八重坊、てめえもあれほど教へて置くに、野暮に眞面目なものだぞ。コレ、高松さん、亭主に置き去りにあつたね。

高松　エヽ、このお八重さんの亭主さんが、ぬしをマア、置き去りにしなさんしたかえ。

八重　これはしたり、源五郎さん、問はず語りも場所がござりますわいな。どなたもお聞きもない事を、わたしが身の外聞にも係はりまするわいな。モシ、高松様とやら、成る程、わたしが亭主は家出いたしました。殊に年寄つた親御を預け、出さんしてからもう三年、今に於て我が内へ戻つても下さりませぬわいな。

高松　そりやマア、さぞお前、苦勞でござんせう。して、連合ひの行くへは、知れてあるかえ。

八重　サ、お聞きなされて下さりませ。年を重ねて音信不通。併し夫の常々申しまするには、年一合で

も頂戴しまする、侍にならぬ内は、滅多に便りはせぬ程に、出世さんしたならば、早速に知らさうとの事。それを頼みに私は、明暮れ待つて暮らしまするわいな。

源五　コレ〳〵、お八重や、それがてめえ、氣のきかねえ始めといふものだ。おらアおぬしの亭主の藤吉とやらに逢つた事はねえが、たかゞ百姓の彌助が息子、奉公先は遠州の郷士、松下嘉平次といふ浪人どの、鎧を求めるお使ひに、黄金六兩受取つて、それから直に隨德寺。聞けばてめえはその嘉平次どのゝ娘で、藤吉と乳繰り合ひ、親御に暇をくれて、藤吉とやらの跡を追つて、てめえも内を斷落ちしたげの。

八重　アイ、藤吉どのが父さんの所へ、奉公にござんしてから、つい馴れ染めて妹背仲。程なう父さんのお使ひ先から、戻つてもござんせず、殊に懷姙の樣子。家來の胤を身に宿しては、物堅い父さん、大抵や大方ではあるまいと、直にそれから家出して、父さんよりは勘當。今では遠州にもお住ひなく、山城の國、山崎の在所に、劍術指南なされてと、妹の千里の方から詳しい文。

源五　ソレ、見やれ。親御の所を不奉公した藤吉とやら、そんな埒もない者の跡を追つて、主人の娘が家來の爲に勘當され、その上亭主に置去りとは、氣の毒と思ふから、しがねえ世帶へ深切に、貢いでやる源五郎、それも女房にしたいが一ぱい。高松さん、お前取り持つて、わつちが嚊アに勸

めてくんねえ、賴んだによ。

高松　それぢやというて、今逢うたお八重さん、どうしてマアさしつけに

八重　さうでござりまする。私も今でこそ、女中方のお髮上げ、或ひは縫ひ物賃仕事、女手業のかすかな世渡りながら、父さんは松下嘉平次といふ侍。藤吉どのも、今にも立身して戻つてござんすりや、それも侍。ちつとの艱難は、昔語りにならうかと、アイ、わたしや思うてゐやんすわいな。

源五　ソレ〳〵、また固意地を云ふワ。コレ、われの亭主が扶持人になつたところが、高の知れた小祿取り。コレ、口綺麗な申し分だが、その藤吉とやらが、槍の一本も突かせる身分になつて來たらコレ（ト首のまはりを撫でゝ）この首をやるワ。この源五郎が首をやるワ。これ程丈夫な事はあるまい。生兵法大疵の元とやら、いらざる願ひに藤吉とやらも、雜兵の中へ交はつて、首になつたか、流れ矢に當つたか、知れもしない亭主の歸りを、白癡が夫を待つとはこの事。コレ、大祿取りになつて來たら、おれが首をやるワ。おぬしも餘ッ程な、甘口な者ぢやアねえか。

八重　（ムッとして）コレ、源五郎さん、貧しいわたしが世渡りを、お前が云はんすには、こりやわしが手傳うてやらう、借り借錢はよいやうに斷り云うてやらうと、お前の方から云はしやんしたぞ

え。アイ、わたしや賴みはせぬぞえ。それになんぢやえ、いろ〳〵な事を云ひ散らし、今に藤吉どのが戾つて來たら、難儀する者はわたしばかり。殊に夫の出世する、先を挫いたその詞。お前、首やらうとまで云はしやんしたぞえ。

源五　オヽサ、首をやらうと云つたよ。亭主が大祿取りになれば、コレ、この首を切つてやるよ。

八重　エヽ、そのマア憎體な云ひ分わいな。

源五　ハテ、首を切つておぬしにやるよ。

高松　もうよい加減にしなさんせいな。

八重　エヽ、お前あんまりぢやぞえ。

ト兩人立ちかゝつて爭ふ。上の屋體の內にて

正淸　ヤア、音高し町人。久吉公の御座の間近く、控へてよからう。

ト管絃になり、屋體の簾を上げる。內に久吉、鎧下の形、半大口、附け太刀にて、鰹の刺身を作りゐる。正淸、鉢卷きにて、辛子味噌を摺つてゐる。

久吉　君命に依つて大領久吉、鳥取の城を圍むと雖も、籠城手厚き郡の大軍、味方に乏しき事もあらんと、陣內に町家をしつらへ、一夜情の假り枕、酒店をもとめ大將が、自ら敵に勝魚の、庖丁取つ

て細作り、猪口はおろしか辛子酢に、貫く鼻の樣子では、虎之助、いかう辛子が、きいたと見えるワ。

正淸　きいたとも〳〵、お側去らずの正淸が、鼻の左右を貫くは、今度の戰も我が君の、勝利の程は疑ひなし。おめでたう存じまする。

久吉　これは、若年の其方までが、身共をはしたない城將とも思はず、心ある今の詞。して、あれへ參つて居る者どもが、浮れ女遊女の、世話いたす者か。

正淸　左樣でござりまする。遊女の髮を取り上げまする女。一人は、遊女を賣買仕りまする、町人でござりまする。

久吉　ア丶、左樣ならあの者が、ぜげんとやらか。

源五　エ。（ト悄りして）お大將には、ぜげんと申す事を、御存じでござりまするかな。

久吉　コリヤ〳〵、町人、大將たるべき者は、下々の事は存じまいと思ふか。天地の事より、下萬民に至るまで、その道々をあらましも存ぜぬは、一方の大將とは申されぬぢや。

源五　成る程、大將どのといふものは、拔け目のないものだわえ。

久吉　どうやら氣輕さうな男ぢや。コリヤ〳〵、あの者どもを、近う呼べ〳〵。

正清　ハッ……聞かるゝ通りの久吉公の御諚。兩人ともに、サヽ、近う〳〵。

源五　ヘイ〳〵。これは早、有り難い久吉樣のお詞。私は遊女奉公の世話を仕りまする、と申したところが、何もかも御如才のないお大將樣。私は源五郎と申しまする者でござりまする。これに居りまする女は……コレ〳〵、てめえもそこへ出て、久吉樣へお目見得をするがいゝわな。

八重　ハイ〳〵。これはマア、身にあまりました、有り難いお目見得を仕りまする。私は御陣中のお女郎樣とやらの、お髮を上げに上がりました、賤しい女子の髮結ひでござりまする。よい折柄に參りまして、有り難いお目見得を

ト久吉の顏を見上げ、兩人見合つて思ひ入れ。

ヤヽ、あなたはどうやら、お見受け申しました

久吉　ほんに其方は、女房お八重ではないか。

八重　アイ〳〵、八重でござんす。お前は藤吉どのぢやの。

久吉　オヽ、われが亭主の藤吉ぢや。

八重　ヤレ〳〵、ようマア息災でござんした。逢ひたうござんした〳〵。ようマアお前

ト駈け寄るを、正清とめて

正清　コリヤ／＼女、我が君のお側近う、慮外とや云はん。下がらぬか／＼。

八重　ハイ／＼、御免なされませ。併しわたしは、あのお大將樣の、藤吉どのゝ女房でござりまするゆゑ、どうぞ側へおやりなされて下さりませ。

正清　ヤア、心得ぬ一言。賤しき身分の其方が、忝くも眞柴大領久吉公の

久吉　イヤ／＼、苦しうない／＼。近う呼べ／＼。

正清　すりや、この女を、お大將の

久吉　久吉が女房ぢや。ハヽヽヽ。コリヤ／＼、苦しうない、爰へ來い／＼。ドレ／＼、身が方からそれへ參らうか。

ト合ひ方になり、屋體を出て、長床几へ腰を掛ける。お八重、側へ寄つて思ひ入れ。

八重　ほんにお前は疑ひもない、藤吉どのぢや／＼。ようマア息災で居て下さんした。これいなア、マア、わたしやお前に別れて、もう三年も經つてござんせう。お前の親御樣も、御息災ぢや程に、案じぬがよいぞえ。又わたしが父さんも、別條ないとはいへど、今に於てわたしは勘當。してマア、お前はそのやうに、どうして立身しなさんしたえ

久吉　身は春永公のお取立てを以て、眞柴大領久吉と申す、大名になつたわいの。

八重　エヽ、アノこなさんは、お大名になりなさんしたかえ。アノお大名に……サアノ〳〵、そりやマア、めでたいノ〳〵。コレノ〳〵、源五郎さんえ。お前にも常々お話し申した、ぬしが藤吉どのぢやわいな。その藤吉どのがモシ、お大名になつたといな。

源五　ナニ、久吉様といふが、てめえの亭主の藤吉か。あの殿様が。アヽ、道理で五分も透かねえと思つた。

八重　聞きなさんせいな。藤吉どのがお大名になつてぢやわいな。お前も喜んで下さんせ……ほんに、お前はたつた今まで、藤吉とやらが高祿取りになつたなら、首やらうと云ひなさつたぞえ。

源五　ナニ

八重　イヽエイナア、その首やらうと、云ひなさんしたぞえ。

源五　サア、とつけもねえ、べら棒な話しになつて來た。

久吉　何と申す、女房。身が大國の主となれば、あの者が其方に、首をやらうと申したか。

八重　さうぢやわいな。

源五　アヽ、コレノ〳〵、てめえ……アイヤ、お前、とんだ殺生な事を云ふぞ。ありやアおどけよ〳〵。

久吉　コリヤ〳〵〳〵町人。

源五　へイ〳〵。

久吉　そちやその女に馴れ〳〵しう、身が立身出世の事まで、首を賭けたと申したと聞いたが、あの者は今日より、久吉が妻ぢやぞよ。

八重　左樣でござりまする。わたしやアノ、奧樣でござりまするぞえ。

源五　成る程、藤吉樣とやらが、お大名におなりなされたからは、こなさんは……アイヤ、あなたは奧樣でござりませう。モシ、奧樣え、その御祝儀には、鰻でもお奢りなされませ。瀧水の一升も、お買ひ遊ばされませう。

八重　これなア、わたしが大名の奧樣になつた喜びに、そのやうな事で濟みませうかいなア。

源五　成る程、奧樣になつた御祝儀が、のぼりの鰻位でも濟むまいて。何であらうぞ……アヽ、何にしなさい。この頃に一日、芝居を奢りなさい。

八重　エヽ、あの大名の奧樣が、芝居へ行つてもようござんすかえ。

源五　よくなくつて、一日葺屋町へいらつしやるがよい。その日は何か、棧敷をズツと買ひ切りだね。女中衆を大勢連れて、一日見物しなさい〳〵。

久吉　成る程、狂言綺語は讚佛乘の內とやら。人間の善惡を綴り、石打つ童も學問の、學びにも相成る

事ぢや。こりや歌舞伎見物もよからうかえ。

八重　左様なら、芝居見物いたしても、ようござりますかえ。

久吉　久吉が許す程に、遠慮なう見物に参るがよい。併し、以前軽々しう参つた時とは違ふゆゑ、随分と費えをいとはず、恥かしうないやうに、見物いたすがよからう。

源五　左様でござりまする。お大名の奥様の御見物だ。その日は私が、お世話萬端を仕りませう。お茶屋はどれに致しませうな。

八重　どうなとお前よいやうに、お頼み申しまするわいな。

源五　ヨシ、承知しやした。葺屋町の茶屋なら、心安いのがいくらもござります。

八重　定めし桟敷でござんせう。

源五　そりやァ知れた事でござりやす。大名の奥様が、落間でも見られやすまい。私もその日には、御一緒に参つて、お大名の威光を借りて、思ひ入れ褒めやせう。

八重　お前、誰を褒めなさんすえ。

源五　わしが褒めるは杜若に坂三津、イヨ大和屋に大和屋、高麗屋……有り難うござりやす。

久吉　アヽ、芝居で役者を褒めるは、左様なものか。

八重　とつとあの通りぢやわいな。コレ、藤吉どのえ、わたしやこなさんに別れてから、濯ぎ洗濯、賃仕事、樣々な艱難するも、父さんに不孝の罸と諦めて、お前の親御さんを大切に、御不自由なさせますまいと、身丈にあまる苦勞苦患　それに引替へこの年月、便り音づれしやしやんせぬは、こりやてつきりお前、何やら外に、出來たでござんせうがな。

久吉　これはしたり、そのやうに樂な身分だと思やるか。さりながら、これまで便り致さぬを、怨むも道理ぢやが、見やる通りのこの戰場。武士となつては妻子を捨てゝ、主君の許しなき内は、再び家に立歸らぬも、武門の習ひ。これにつけても、思ひ出さるゝは、悴めが事。いはゞ其方は、主人嘉平次どのゝ惣領、親の許さぬ忍び逢ひ、二人が仲に誕生の悴。奉公稼ぎの妨げともなり、又一つには、その頃三州矢矧に住ひする修行の僧、悴が相をよく／＼見て申すは、この小兒成人の後、必ず親に大難來らん、早く他家へ送るべしと、旅僧の詞。我が眼力にも叶はざれば、其方にもその節申し聞かせ、山城の國、小栗栖へ、捨てた悴は二歳の時。

八重　あの子の歳は今年で七つ、天正四年六月三日の誕生にて、その時の名は學之助。いかに親御の爲にならぬというて、ようマア思ひ切つて、捨てさんした事わいな。子捨てる程な艱難を、今の出世に打忘れ、お大名になつたゆゑ、女房の事はどこへやら、定めし奥樣の、お部屋樣のと、手か

け妾があるゆゑに、昔の事は忘れ果て、それで便りさしやんせぬのでござんせう。エヽマアお前は、悋氣しまいと思うたが、あんまり胴慾でござんす〳〵。胴慾ぢやわいなア。

ト久吉の胸づくしを取つて、涙と共に思ひ入れ。

久吉　コリヤ、ヤイ〳〵、いかに女房ぢやというて、身共は誰ぢや。いま中國に於て、猛勇の聞えある郡を責めんと、この所に陣を張り、鳥取の城を圍み罷りある、眞柴大領久吉が、胸づくしを取つて見苦しい。放さぬかいやい〳〵。(ト突き倒す)。

八重　こりやお前、わたしを、投げさんしたなア〳〵。

久吉　投げいでワ〳〵。見苦しう仕るによつて、只今のやうに致したが、何とした。

八重　エヽ、お前はそのやうに、邪險な生れではなかつたに、大名にならしやんしたというて、年寄つた親御さんをわたしに預け、お前ばかり榮華をせうでな。女房は不自由させても、大名と云はれまするか。ほんに久しぶりで、どうやら癇癪が起りさうぢやわいな。

久吉　なんだ、癇癪が起る。コリヤ、ヤイ、癇癪が起らば、前度から、投打ちが得手ものであつたが、只今はその節とは違ふ。どのやうな皿鉢でも、費えはいとはぬ。存分に割つて見せい。

八重　ハイ、割りまする〳〵。お前が割れと云はしやんすりや、癇癪の納まるやうに、わたしが又(ト

屋體の内を見て、ありあふ皿小鉢を持ち來り）これなと割つて、癇癪の蟲を納めようわいな。

高松　ア丶コレ、お八重さんとやら、お前そりや短氣であらうわいな。怪我さんしては惡い程に、マア
マア、待ちなさんせ〳〵。

正清　左様でござります。投打ちはようござりまするが、そこらあたりの鼻が危なうござります。私
なぞは、別して大きな眼でござりますれば、目が險難でござりまする。

八重　イエ〳〵、構うて下さんすな。どうやら癇癪が萌して來やんした。エ丶、この鉢をいつそ打割つ
て（ト打ちつけて割る）。

源五　ア、コレ、危ないわい〳〵。

久吉　コレ〳〵、町人、見やれ、氣違ひの沙汰ぢやわいの。

八重　ハイ、氣違ひでござります。

源五　コレサ、マア靜かにしやれな。

高松　もうようござんすわいな。

八重　イ丶エ、わたしや斯う打ちつけて、癇癪を納めるわいな。

ト打ちつけし大皿の缺け、源五郎の眉間に當り、疵つく。皆々見て

高松　アレ〳〵、源五郎さんの額から、血が流れるわいな。
正清　ほんに、こりやァ飛んだ事をなされた。軍中散でも取つて來て進ぜう、
高松　よい血止めがござんした。ドレ、取つて來て上げやんせうか。
　　　ト合ひ方になり、高松、正清、藥を取りに下座へ入る。
源五　コレ〳〵、マア、靜かにしなさい〳〵。投打ちをするもいゝが、大鉢をぶツつけて、親分がしやツ額で、コレ見なさい、生れもつかぬ極印が出來ました。
八重　エ。
源五　イヤサ、見さつしやい、わしがしやツ額は、初めて月のさはりとなつたよ。
久吉　コリヤ、女房、今あの者が、親分とやら申すが、すりやァノ、其方は
八重　アイ、お前が留守のその間、近所へ越してござんした、源五郎さんといふお方。何かとぬしのいかい世話。
久吉　アノ、この町人が
源五　ヘイ、遊女子供の世話をして、浮世を渡る、源五郎といふ町人でござりまするが、あなたは尾州中村、彌助どのゝ御子息にて

久吉　以前のその名は此下藤吉、いま春永の御手に屬し、眞柴大領久吉。

源五　サ、旗大將の久吉樣の奥樣でも、科もない町人の、このしやッ額へ疵を附けても濟みますか。一城預かる御大將、久吉樣でもどなたでも、女の仕出した事ながら、相手は眞柴久吉樣、モシ、この譯道を、附けてもらひたうござりまする。

トきつと思ひ入れ。これより合ひ方。

久吉　成る程、こりや尤もな一言、さりながら、この久吉を相手に望む、町人の人相、骨柄、只者ならぬ面がまへ。疵は附いても向う疵、侍ならばよき言ひ立て、扶持切り米にもなるべきに、あつたら疵が町人で、誠にこれが玉に疵。

源五　玉に疵だと思はつしやらば、額の疵に知行を下さい。

久吉　いかにも知行を取らしてくれう。知行高祿取らさうが、武士になるべき手練があるか。

源五　ハテ、手練とやらも町人の、知行高祿望みでござらぬ。

八重　して又お前は、何を望みに

源五　こなたが欲しい。

八重　エ。

源五　久吉樣の奧樣を、當分女房に貰ひたく、思ふに幸ひ御亭主に、爰で逢つたが最上吉日、わしが嚊アに貰つたら、枕並べて（ト落ちてある枕を見つけ）幸ひ爰に木枕の、枕並べて添臥しの

トお八重の手を取らうとする。

八重　エヽ、アタ不作法な、なんぢやいな。現在夫の見る前で。わたしは何ぢや、今日からは、眞柴大領久吉の

久吉　ハテ、その國取りの女房も、昔思へばころび合ひ。成り上がりたる大將の、士卒の心慰さむる、陣所の內の浮れ女は、けんぶ猿冠者久吉が、敵勢防ぐ飛び道具、鐵砲見世に相應の、一斤こゝへ鳥取の

八重　和睦を結ぶ杯も、筒井にあらぬ筒茶碗、酒は砂ごし塀ごしに、いつか間者を廻し夜具。

源五　枕は安土、形さへ、城に似寄りのこの枕。安土の城は春永の、爰ぞ比翼の御座所、安土の城を枕とは、敵を板じめ板しばり、さしも根強き居城たりとも、只一ひしぎに、まツこの通り。（ト枕を摑みて引しぎ）ハヽヽヽヽ、御覽じませ、安土の城は落城しました。

八重　城になぞらへ手の內に、枕を引しぐ手練の程。

久吉　正に眞柴が陣中を、窺ふ間者であらうがな。

源五　イヽヤ、わしなら腹からの
久吉　町人ならば置いて行け。
源五　そりや又何を置きまする。
久吉　其方がその首を
源五　町人づれのこの首を
久吉　取つたればとて何の益。
八重　益なき首級を貰ふのも、番うた詞は反故にせぬ
源五　アノ、この首を
八重　切つてやらうと先刻の約束。
源五　サ、それは
八重　よもや忘れはなさんすまい。
源五　サ、やらうと云つたその時は、面に疵の無いわしが、今は俄に面の疵、その疵物のこの首賭け、先刻の約束、今の怪我、これで互ひに五分と五分、帳面消してもらひたい。
久吉　イヽヤ、それでは政道立たぬ。番うた詞は反故にせぬ。

ト拔かうとする。源五郎、その手をとめて

源五　すりや、あなたには町人の

八重　首級を貰ふ先刻の約束。

久吉　それゆゑ身共が

ト拔いて切りつける。お八重、この中へ交り、三人立廻り。源五郎は有り合ふ鼠落しを取つてシャンと受ける。この箱割れて、中より鼠出る。ドロ／＼になり、右の鼠二三匹、正面に立てゝある下馬札にかゝり、文字を喰ひ裂き、北といふ文字ばかり殘る仕掛け。三人これをきつと見る。これより小太鼓の樂になる。

ハテ、心得ぬこの動搖。散亂なしたる件の鼠、人を恐れず、アレ／＼／＼

源五　立てある札の馬といふ、文字を喰ふこの場の不思議。窮鼠かへつて猫を食む

八重　聞き傳へたる春永公、誕生ありしは甲午、その馬といふ文字を殘らず、牙にかけたる鼠の珍事。

久吉　佞人はびこる今この時、馬といふ字の筆勢破れ

八重　北といふ字の殘りしは

源五　北は子の方、鼠の振舞ひ。

久吉　春永公の御身の愼み。
源五　吉事といはんや
八重　凶事といはんや
久吉　國に盜人
源五　家には鼠。
八重　もしやはぬしが
久吉　水尾正兵衞。
源五　ヤ、
　　　ト思ひ入れ。ドロ〱打上げる。三人立廻りよろしくあつて、キツとなり
　　久吉樣。
久吉　町人。
八重　これまで何かと
久吉　禮は詞に
源五　ムウ。

ト立ちかゝる。三人立廻り

久吉　話して行きやれ。

ト暮れ六つの鐘、唄になり、三人思ひ入れあつて、久吉、心を殘し、お八重を連れ、下座へ入る。源五郎殘り、あたりを見廻し

源五　久吉が今の詞。さてはこの身を間者と察し……ハテナア。

ト思ひ入れ。この時平馬、路地番の吉、實は三宅源内國次、兜を提げ、陣太鼓、銅羅を抱へて出て來り

平馬　水尾正兵衞茂朝どの。

源五　福富平馬貞景樣。すりや、あなたにも陣中へ

平馬　疾くより入り込み窺ふも、春永公の不興を受け、追放されしこの貞景。兼ねて宅間と合體なし、久吉が武威を挫かんと、小田家に傳はる御旗を奪ひ、コレ（ト瓜の金紋附いたる赤旗に、怪しき紋を書きしを懷中より出し）これを見やれ。

源五　それこそ小田家の赤旗に、怪しき文字を記せしは

平馬　これこそ春永調伏の、文字を記せし小田の旗、この陣中へ持ち來り、久吉に面談なし、春永どの

と同士討ちさせ、武威を挫かん我が計らひ。

源內　拙者も疾くより、士卒に紛れ入り込みて、有る事無い事、信盛どのへ知らせの間者。

源五　我れも武智の幕下に屬し、久吉に一泡吹かせ、光秀どのに後詰めして、軍功見せんと入り込みしに、身の上氣取つた眞柴久吉。

平馬　猶も樣子を窺つて、宅間へ內通。

源五　コレ。

ト思ひ入れあつて、平馬を招き、囁く。

平馬　心得た。

源內　御兩所樣。

源五　ござりませう。

ト管絃になり、平馬、源五郎、思ひ入れあつて下座へ入る。源內殘つて

源內　サア、これからはこの源內、鳥取の城內へ、久吉が手立てのあらまし內通して、郡へ取り入る工面が肝要。引入れ置きたる伏勢に、合圖に使ふ鉦太鼓、目立たぬやうに（ト思ひ入れあつて）それそれ。

ト帶を解き、陣太鼓を背中へ廻し、銅羅を前へ當てゝ、上へ着物を着て、兜をかむり、思ひ入れあつて

よし／＼、斯うして陣所を忍び出で、鳥取の城内へ……それ／＼。

ト行かうとする。矢張り時の鐘、曾呂利新左衛門出かゝり、源内が兜を着たるを見て、變化と心得、後より拔討ちに

新左　化け物、覺悟。

ト兜へ切り附け、カツチリと音するゆゑ、飛び退いて慄ふ。源内も切られしと思ひ、恟りして慄へ

源内　なんだ、化け物だ。どこに化け物が出た／＼。

新左　ヤア／＼、ぬけ／＼と化け物め、どこへ出たとは、化け物化け／＼しいと、ヤイ。うぬが化け物だワ。暗くて黒白は見えねども、額に角のある化け物。頭を切つてもカツチリと、音のしたるはこれ化け物。サア、眞直に化け物め、正體を現はすまいか。

トわな／＼慄ふ。源内、思ひ入れあつて

源内　アヽ、さては身共を化け物と覺つたな。さう知られたら是非がない。いかにもわれが推量の通この陣中に棲む化け物だワ。

新左　さてこそな。

源内　坊主頭へ切り見世の、鹽花つけてバリ〳〵〳〵、喰つてしまふワ、そこ退くまいか。

新左　こりや化け物め、梅干にでも化けまいか。

源内　おきやアがれ。化け物を化け直させ、茶うけにする氣か。その手はたべまい。

新左　そんなら消えろ。

源内　イヽヤ、否だよ。

新左　消えずば、おのれ

ト立廻りになり、新左衛門、刀にて源内の背中をしたゝかに切る。ドンと音する。悄りして胸許をくらはす。グワンと銅羅の音する。悄りして

いよ〳〵化け物。覺悟なせ。

トこれより合ひ方を借り、兩人よろしく立廻り、間々に源内を切る。この度々にドンチヤンの音するよき時分に音、馬、權、龍、聞き耳立てゝ出て來り、源内を見て

音　相圖の太鼓は

三人　御用かな。

源内　べら棒めら、何しにうせた。

權　鉦や太鼓が聞えたゆゑ

三人　相圖と心得駈けつけました。

新左　うぬらも化け物仲間だな。

源内　その坊主めを、合點か。

四人　心得ました……動きやァがるな。

ト新左衞門を引附ける。その間に源内、花道の方へ來て

源内　わいらに頼むぞ。

四人　合點だ。

トごん〳〵になり、源内は向うへ走り入る。四人、新左衞門を引立て

うしやァがれ。

ト引附ける。正清飛んで出て、四人を毆りのけ、新左衞門を圍ふ。

新左　ヤァ、正清どのか。

正清　今逃げ失せしは正しく間者。跡追ツ駈けて、繩打て、曾呂利。

新左　然らばそろりと追ひ駈けて
正清　無駄を云はずと、早くめされ。
新左　心得ました。おのれ化け物、いづくまでも
　　　ト三重になり、新左衛門追ひ駈けて向うへ入る。
權　　正清
四人　動くな。
正清　こりやァうぬらは陣中へ、入り込む敵の廻し者だな。
音　　いかにも眞柴久吉が、陣中窺ふその爲に
權　　爰へ入り込む鳥取勢、斯く顯るゝ上からは
馬　　うぬを生捕り城中へ、引立て行つて手柄にする。
龍　　正清、腕を
四人　廻せ、エヽ。
正清　小癪な奴だよ、片ッぱし、生けッ首とは思へども、役にも立たぬ一文首、首は殘して一々に、加藤が殘した耳ぬいた、貧乏耳でも福耳でも、並んで置いて引ッこ拔く。耳朶洗つてうしやァがれ

權　面倒な。ソリヤ

三人　やらぬワ。

正清　どつこい。

ト これより賑やかなる鳴り物になり、正清、四人を相手に立廻りのタテあつて、權を捕へ、耳を拔く。權、耳を押へて「桑原々々」と云ひながら逃げる。これを見て殘りの人數、一散に向うへ逃げる。正清、釣瓶を差上げ、四人を追つて向うへ入る。このうち平馬、一腰差し、窺ひ出て、跡を見送り

平馬　今のは加藤正清め。折角入れ置く者どもを

ト思ひ入れ。屋體の内にて

久吉　怪しき女、爰動くな。

ト管絃になり、この聲に平馬小隱れする。簾上がる。高松、懐劍を持ち、久吉へ詰めかけてゐて、兩人、ツカ／＼と舞臺へ出て

高松　卑怯に候ふ久吉樣、阿部六郎が妹の園生。波多野の一族やみ／＼と、腹切らせしも春永へ、久吉樣の佞辯ゆゑと、聞いて入り込むこの陣中。主人の敵、兄の仇、お覺悟あれや大領どの。

久吉　何を恐れて久吉が、女ばらへ表裏の詞。早先達て波多野の一族、降參の諸武士あれば、其方も心

を改めて、小田家へ仕へるものなれば、久吉吹擧仕り、一門一類一命を、助けたまはる寛仁大度、卽ち我が君春永公より、下し賜はる免許狀。

ト出す。高松見て

高松　ナニ、すりや、先達ては波多野の一族、小田家へ降參ありしとや。殊に賜はる免許狀。ドレ

トきつと見て

こりやこれ園生が忠孝の、その志し御感あつて、御臺所のお側にて、宮仕へせよとの、惠みも厚き御厚恩、いつの程にか報じ申さん。只今よりして小田家に仕へ、女ながらもこの園生、忠勤勵み奉らん。この上ともに久吉樣、御吹擧のほど幾重にも、偏へに賴み奉ります。

久吉　小田家へ仕へる心底あらば、よしなに吹擧いたしてくれん。まツた波多野の家滅亡も、福富平馬が佞辯ゆゑ、兄六郎が仇たるも、いはゞ平馬が業なるぞ。

ト爰へ平馬出て

平馬　ヤア、卑怯なり眞柴久吉、底意の知れぬ成り上がり、內股武士と思ふゆゑ、宅間信盛の指圖にて姿を變へて入り込む陣中。阿部六郎が妹に、同士討ちさせん表裏の久吉。福富平馬貞景が、刀の切れ味、試みよ。

ト拔討ちに久吉へ切り附ける。立廻りあつて平馬、懷中より以前の旗を落す。久吉、手早く取つて

久吉　こりやこれ小田家の御旗に、怪しき文字を記せしは

平馬　それ知られたら

ト切つて行くを、刀の手をとめ

久吉　波多野の一族滅亡も、この貞景が佞辯ゆゑ。一太刀討つて、兄への追善。

平馬　小田家の扶持人貞景を、敵の女に討たすか久吉。

久吉　イヽヤ、小田家の家人にあらず。都に於て春永公の、御勘氣受けし平馬貞景。

平馬　そんならそれも早知つたか。

久吉　阿房拂ひの福富平馬、武士の交はりなるべきか。たはけ者めが。

平馬　それ知られたら、久吉覺悟。

ト切つて行くを、久吉キッと捕へ

久吉　兄六郎が敵の貞景。

高松　御主人方への手向けの刃。

ト突いてかゝる。

平馬　所を、おれが

ト立廻り。久吉、平馬が刀をもぎ取り、したゝかに切り下げる。高松のしかゝり、止めを刺し

高松　お家の敵、兄の仇、思ひ知つたか。

久吉　出かした園生。見送りくれん、早参れ。

三人　ハア。

ト見世の内より、かさの、しほ花、下座より五左衛門、足輕にて出て來り

五左　久吉公の仰せにより、小田家へ伴ふ園生のお局。そのお送りは關山藤次。

かさ　浮れ女遊女のわたしらが、きつとお送り

三人　仕りませう。

高松　何から何まで拔け目なき、久吉樣の御取計らひ。然らばあなたの詞につき、これより直に春永樣へ。

久吉　お宮仕への門出よし。いそふれ園生。

高松　久吉樣、おさらば。

ト三重になり、この人數向うへ入る。久吉殘り、以前の旗を出して

久吉　合點のゆかぬ、この御旗に、怪しき五字の文言は……ハテナア。

ト誂への合ひ方になり、件の旗を辻行燈へ掛けて思ひ入れ。この時、上の屋體よりお八重、裲襠衣裳に着替へ、下の葭簀張りの蔭より源五郎、出かゝつて窺ふ。久吉、旗棹へこれを出す。旗の文字、見物へこの通り見える。

平―末―水―本―生

斯る例しは治承二年、小松の重盛、宇佐八幡より、夢中に教へ給ひし怪しき文字。竹杖を入れ見る時は、とりも直さず、まツこの通り「平の末みなもと生ずる」それは古へ平家の世盛り。當時にとつては春永公は平氏。みなもと生ずる源家の正統、その源は……土岐伯耆守は源氏の正統、その末葉は……武智光秀。最前鼠の珍事といひ、心憎きは武智が胸中。ハテナア。

ト思ひ入れ。後より源五郎出て

源五　それを

ト旗へ手をかける。久吉こなし。この時、行燈へ載せ置きし大黒落ちる。久吉これを知らず

久吉　こりや最前の、其方は町人。

源五　ヘイ、何やら色あるその絹を、ちよつと拜見いたさうと

久吉　それゆゑ絹へ手を掛けて

　ト源五郎「ムウ」と一腰へ手をかける。この時、お八重出かゝる。久吉、落ちてある大黒を取つて

こりや久吉が陣中に、勸請いたす三面六臂。

八重　その三面の尊像は、わたしが拾うて、あの行燈へ

久吉　其方は女房。幸ひのこの場所に、落ちてあつたるこの木像、出世をあやかるその爲に、町人、其方へ。

　ト差出す。源五郎取つて

源五　この大黒がどうしました。

久吉　それは大領久吉が、立身出世のその起り。

八重　大黒天の木像も、形は六臂三面の

源五　三幅對の三面も

久吉　三枚目なる橋板は

八重　岡崎の橋、渡し初め。

久吉　橋の半に



八重　女夫の馴れ染め。

源五　積る話しを岡目から

久吉　見て見ぬ振りの夜働き

源五　富貴と見かけて財寶を

八重　奪ひ歩きし山賊、野武士。

源五　ヤ、なんと。（と思ひ入れ）。

久吉　サ、三人寄れば三面の

源五　この大黒を

八重　三萬餘騎の司たる

久吉　我れにあやかる福壽天。

源五　イヽヤ、あやかる所存はない。

八重　夫にあやかる

久吉　所存はないか。

源五　三萬五萬の司には、暫時になるべき身の願ひ。

久吉 神の惠みを待たずとも
源五 智謀を以て
八重 アノ、こなさんが
源五 小事に係はる望みなし。下され物の木像は（ト打ちつけんとする）。
久吉 して又其方が、外に望みは
源五 こなたが所持せし
　　ト立ちかゝつて、久吉が懷中より旗を引出す。三人立廻り、きつとなつて
石に碎いて
　　ト前の石へ大黑を打ちつける。煙硝火パツと立ち、遠寄せの頭を打つ。
ヤ、飛び散る石火は
久吉 相圖の地雷火。
八重 陣門固める
源五 さては狼煙を
久吉 手づからあげしか。（トあざ笑ふ）。

源五　ヤ。

ト三人入れ替り、立廻りよろしく、この時向うにて遠寄せの二つ目を打つ。これに合せて、拍子木の柝の頭。三人、向うを見て、キッと思ひ入れ。この時、重れたる太鼓の音。これに合せて柝のきざみよろしく、ひやうし

幕

三幕目

本能寺の場

役名――小田上總之助春永。武智十兵衛光秀。森蘭丸。中尾彌太郎俊國。淺山多三重滿。矢代條助春行。本能寺日和上人。安田作兵衛知綱。諏訪飛驒之助直盛。武智十次郎光義。連歌師、紹巴。三宅源內。園生の局實は高松。光秀妻、皐月。光秀妹、桔梗。矢代妹、小川。今川妹、魚住。齋藤妻、簑浦。

本舞臺、三間の間、高足の二重舞臺、本簾をかけ、向う金襖。瓦燈口。上の方に蓮と杜若の盛り。

すべて本能寺のかゝり。幕の内より「今様始まり」と呼び、誂への鳴り物にて幕明く。
ト直に所作のかゝりになり、向うより桔梗、小川、魚住、いづれも着流しの上へ狩衣、金烏帽子、附け太刀、中啓を持ち、業平舞の見得にて出で來り、花やかなる鳴り物にて、所作よき程あつて納まると、直に向うにて

呼び　春永公のお入り。

ト奥より日和上人、經宗の紫紋、白の袈裟、緋の法衣、中啓を持ち出て、下の方へ平伏して出迎ふ。向う揚幕より春永、壺折り衣裳、小さ刀、庭下駄をはき出てくる。跡より蘭丸、半素袍、春永の刀を紫の袱紗に持ち添へ、出てくる。次に園生の前（前幕の高松）裲襠衣裳にて、馬盥に錦木を轡どめに活けたるを持ち、條助、上下、大小にて、誂への丸駕籠に紫陽花と晝顔の活けたるを持ち、彌太郎（序幕の但馬之助）上下、大小にて、一軸の箱を三寶に載せ、これを持ち、多三、上下、大小にて、白木の刀箱を持ち、出て來り、直に本舞臺へ來り、女形殘らず下手へ下がり、出迎ふ。春永はじめ皆々、舞臺へよろしく座に住ふ。春永、二疊臺へかゝり、褥に坐すと、上人兩手を突き

日和　こは有り難き春永公のお入り。斯く見苦しき本能寺に、君御陣を据ゑさせ給ふは、當寺の面目、この上や候はん。卽ち住僧の日和、お出迎ひとして、これまで伺候仕つてござります。

春永　流石寺院の物靜かに、蓮の白玉、杜若の、形もさながら七寶の露とあやまたれ、庭樹にそよぐ涼風も、迦陵頻伽の聲とも譬へん。ハテ面白き、景色ぢやなア。

蘭丸　仰せの通り當寺の絶景、名に聞えたる住職の物好き、君にも嘸かし、御滿悦にござりませう。
園生　當住日和上人、我が君お入りと聞かれしより、新たにしつらふ奥庭のお茶屋、築山の風景。
桔梗　御覽遊ばし御酒宴の、御催しもまた一興。
小川　今日君をお慰めの、舞の一手も園生の局のお指圖。私しことは、矢代條助が　妹　小川。
魚住　今川又市が　妹　魚住。
條助　君暫くも當院を陣所と定め、婦女を召しての今日の今樣。さるに依つて諸大名より、君をいさめの贈り物、持參いたせし　某は、矢代條助春行。
彌太　中尾彌太郎俊國も、春永公を警護の爲
多三　席に連なる小田家の忠臣、淺山多三重滿。
條助　今日お成りの辻がため
多三　君の警衛
皆々　仕つてござりまする。
春永　臣下の諸武士、たゞ永を、もてなしの心遣ひ、過分々々。見れば園生の局が持參の活け花。何とやら心ありげなその活け方。して、何者の獻上なるぞ。

園生　ハツ、この錦木を活けましたは、中國へ發足仕りましたる、眞柴久吉、繪圖を以て私し方へ、こま〴〵と申し送り、繪圖の如く手活け致して、差上ぐるは卽ち園生。この物好きは久吉どの、我が君樣へ、わざ〳〵御披露仕ります。

ト春永が前へ出し、下がる。春永、この花をよく〳〵見て

春永　馬盥に錦木を、轡どめに活けたる姿、心あつてしをらしい。我が眼鏡に違はぬ久吉が胸中。下樣の小身より、今一方の大將をも申し付くるは、彼れが武運のなすところ。春永に久吉あるは、龍の翼を得たるに等し。して、矢代が持參の花駕籠は、其方が手活けか。

條助　アイヤ、憚りながら、某が持參のこの花は、これに罷り居ります、光秀の妹桔梗の前より、我が君樣へ。

春永　ナニ、光秀が妹桔梗とな。して、その女、いづれに居る。

桔梗　ハツ、卽ち光秀が妹桔梗、これに控へ罷り居ります。

ト平伏する。春永見て

春永　目通り遠慮申しつけたる武智が妹、何ゆゑこれへ參つた。

桔梗　ハツ、恐れながら兄光秀、思はざるお咎めを蒙むり、蟄居仰せつけられましてござりますれど、

片時も忘れぬ御前の事。何卒してお怒りをなだめ、再びお目通りへ出仕いたしたく、恐れながら兄光秀が獻上の活け花、差上げまするも兄が云ひ附。我が君樣、花の數とも思し召し下されませうなれば、有り難う存じまする。

園生 殊にマア、しをらしいこの花籠、盛りの紫陽花もあさ〳〵しう、色かゆる眺めに引替へ、晝顏の日に負けず、勢ひの強い取合せ。花の姿といひ、よう活けましたぢやございませぬか。

春永 園生の局が執り成しにて、予が怒りをなだめんと計る武智が心底。花に譬へて云ひ聞かさば、久吉が物好きしたる、馬盥の錦木は、馬の口取りより取り上げて、今會稽の錦木と、以前を忘れぬ誠の心底。まつた、この紫陽花に晝顏を入れたるは、「晝顏の源氏のうちに入らざるは旗の赤きや平家なるらん」といふ歌の心。太政入道清盛より、連綿たる春永を晝顏に譬へ、まつた紫陽花の色移りゆく姿を活けしは、平家をうつろはせん心の調伏。花物云はねど香に知るゝと、淺智を以て春永を欺むかんとは、ハヽヽヽヽヽ、愚かな事を。

桔梗 恐れ多いお疑ひ。大恩ある御主君樣、たとへお手討にあひませうとも、毛頭お恨みと存じまする兄光秀ではございませぬ。お疑ひお晴らし遊ばされ……蘭丸樣、いづれも樣、お執り成しの程、偏へにお頼み申しまする。

蘭丸　我が君樣、お聞きあられましたか。只今桔梗が申す如く、彼れが心底思し召し分られ

日和　お目通りを遠ざけられし、武智十兵衛光秀どの

條助　今一度御前の出仕、仰せつけられ下さらば

彌太　降參なせし某とても、光秀が實意を以て、いま列士につらなる中尾彌太郎。朋友とは申しながら、一つの義理。何卒御許容下さらば

皆々　我れ〱までが身の大慶。

多三　我が君樣、ひたすらお願ひ

皆々　奉ります。

ト春永思ひ入れあつて

春永　皆一同のその願ひ。すりや、春永が目通りだに叶はゞ、いか樣な儀もいとはぬといふ、光秀が心底とな。

園生　御不興御免あるものなれば、何のおいとひがござりませう。お聞き濟み遊ばされ

小川　光秀どのゝ出仕の儀を、及ばずながら私どもゝ一統に

魚住　お目見得の儀を我が君樣、ひたすらお願ひ

女皆　申し上げまする。

春永　ウム、われ達までもさほどの願ひ、詞に免じて目通り免す。光秀を、これへ呼べ〱。

蘭丸　すりや、我れ〱が願ひをお聞き濟み遊ばされ、お目見得仰せつけ下さるとや。

皆々　エヽ、有り難う存じまする。

春永　園生の局、女ばらも、酒宴の用意。

女皆　ハア。

蘭丸　又もや御意の變らぬうち、一刻も早く、光秀どのを伴なはれよ。

桔梗　畏りました。

日和　我が君樣、後程お目見得仕りませう。

ト管絃になり、桔梗早足に向うへ入る。日和上人奥へ入る。園生、三寳土器をよき所へ置き、長柄を取り、酌をする。このうち管絃。

園生　イザ、我が君樣、御酒宴のめぐらされませう。

ト春永、土器を取り上げ

春永　日頃我慢の光秀が、悄れ入つたる面を見て、一獻くむも時の興。女ども、酌いたせ。

女皆　ハア。

春永　光秀を呼び出せ。

蘭丸　畏つてござりまする。(ト花道へ向ひ)御前のお召し、武智光秀、急いでこれへ。

ト向うにて

光秀　ハア、。

ト鈴の入つたる三味線入りの音樂になり、揚幕より光秀、上下衣裳、大小にて、平伏して出て來り、跡より桔梗附いて、兩人ともおづ〳〵と、花道の角に手を突く。

彌太　光秀どの、お召しでござるぞ。

光秀　ハツ。(ト恐れ入り、やう〳〵面を上げ)御不興蒙むるその日より、御尊顏の拜し奉らざるところ先づは變らせ給はぬ美はしき御姿、見奉つていかばかりか、恐悦至極に存じ奉りまする。

春永　珍らしや光秀。この程の不興を赦され、我が目通り叶ひ、其方は喜ばしいか。

光秀　ハツ。こは仰せとも存じませぬ。これまで數ケ度の御出陣、諸國の戰場、烈しき過急の軍たりとも、君の御側立去らず、軍功を勵みし光秀。聊か御不興蒙むりて、御前を遠ざけられしこそ、この身にとつては魚の水を失ひ、鳥の塒を燒かれし如く、身體途を失ひし折柄、今日只今御免のお

召しは、誠に氏神の加護、弓矢の冥加に盡きざるところと、いかばかりか

春永　喜ばしいか。

光秀　ハツ。

春永　さもあらん。牛馬は勿論、犬たりとも、三日扶持なせばその恩を知り、尾を振つてしなだるゝ。畜類でさへその通り、ましては人間、よも恩義は忘れまい。アヽ、惜しいかな其方にも、尾があらば振るであらうが、あつたら侍に尾が無うて、殘念々々。

光秀　たとへ犬とも牛馬とも、思し召し下されても、お膝許を許され、いかやうなる役目たりとも相勤め、御出陣の御供に、召連れられ下さらば、生々世々の御高恩、偏へに願ひ奉ります。

春永　こりや尤もの一言、改めて杯くれうか。

光秀　ナニ、お杯を下されんとや。

春永　近う寄れ〳〵。

光秀　ハツ〳〵。

蘭丸　君の上意、光秀どの

皆々　イザ、まづこれへ。

光秀　ハアツ。

ト管絃になり、兩人ト舞臺へ來り、よき所へ住ひ

春永　君の御前へ執り成しの、何れも〳〵禮は追つて。何は差置き、君のお流れ、イザお杯、頂戴仕りたう存じまする。

蘭丸　ハツ。

春永　いかにも杯くれう。其方へくれる杯は、アヽ、何をがな（トあたりを見て）オヽ、幸ひ〳〵、蘭丸、あれなる馬盥の花活け、これへ。

蘭丸　ハツ。

ト合ひ方變つて蘭丸、以前の馬盥を春永の前へ持ち行く。春永、錦木を拔き捨て

春永　蘭丸、この器を光秀へ

ト合點のゆかぬ思ひ入れにて、光秀の前へ持ち行き、直す。

蘭丸　ハツ。

春永　イザ光秀、杯くれるぞ。

ト光秀、思ひ入れあつて

光秀　アノ、この器にて拙者めへ、お杯とな。

ト誂への合ひ方。

春永　いかにも、其方にくれるには、相應のその馬盥。イザ、つけ。

光秀　ヤ。

春永　其方が望みの通り、馬に與へるその杯、鼻面差込み舌打ちして、その杯をグッと干せ。

ト光秀無念の思ひ入れ。蘭丸はじめ皆々氣の毒なるこなし。

光秀　君、君たれども、臣、臣たらざるこの光秀。思し召しの御杯、頂戴仕りまする。

春永　魏の范睢、須賈が讒言に依つて、打たるゝこと百杖、須賈猶赦さず、馬盥を以て馬と共に喰はしむ。范睢僞り死してその難を遁れ、姓名を變へ、秦に仕へて丞相たり。須賈その後命を受けて秦に使ひす。范睢、須賈が來るを窺ひ、以前の馬盥を以て馬草を喰はせ、恨みを報いしその例し。いま馬盥の杯に、臆する色なく受けし光秀が振舞ひ。ムヽ、ハヽヽ。汝が胸に的中なしたか。

ト光秀思ひ入れあつて

光秀　こは餘りなる御疑ひ。范睢が如き、朋友の讒を以て、罪せられたる辱かしめこそ、無念とも殘念とも存ずべきが、君臣の禮儀に於て、なんぞ仇に存ずる光秀ならん。猶々この上は、いか程の儀仰せつけらるゝとも、上意を背く心底、かつ以てござりませぬ。御疑念お晴らし下さらば、この

上の候ふべき。春永公、イヤ、我が君樣。

蘭丸　萬卒は得易く、一將は得がだし。あはれこれなる光秀どの、御出陣の御供、仰せ附けられ下さらば、憚りながら、有り難く存じ奉りまする。

春永　蘭丸が神妙の願ひ。さりながら、當國の出陣、久吉が手に屬する心あらば、中國へ出馬いたせ。

光秀　すりや、中國へ某を

春永　出馬いたして久吉が、旗下に屬なせ。先達て眞柴久吉、我れに名馬を乞ふ。折ふし心に叶ふ駿足無し。今日只今武智といふ、逸物の人喰ひ馬、久吉が陣中へ送らん。誰ぞあるか、光秀に轡をはませ、眞柴が方へ急いで引け。

ト馬盥の轡を蘭丸が方へ投げやる。

光秀　すりや、中國に赴きし、久吉が下知に從へよと、御意なさるゝか。

春永　下知は愚か、眞柴が鞭に從つて、高いなゝきして走せめぐれ。

光秀　斯程に申せど、御心解けざる春永公。この上は君命に從ひ、久吉が下知を守り、中國の出馬、光秀承知仕つてござりまする。

春永　すりや、予が詞を用ゐ、久吉が下知を守らんとや。アノ、其方が……ハテ、神妙の至り……

さりながら、先達て蘭丸に、其方が妹桔梗を、娶合せよと申せしに、不承知の至り。蘭丸、武智を恨むべきに、却つて光秀を予が目通りに取り持つは、若年ながら神妙者。コリヤ、蘭丸、其方はこの上光秀に、遺恨は無いか。

蘭丸　戦場の駈引、先陣後陣の論に依らば、たとへ親兄弟たりとも、遺恨残るは武士の表。女わらべの儀に依つて、かゝる小事にかゝはりませうや。遺恨なぞとは存じもよらぬ儀。恐れながら御返答は、斯くの通りでござりまする。

春永　オヽ、出かした蘭丸。若年に似合はぬ、其方は天晴れな者ぢや。褒美とらせん、サ、何なりと、望め／＼。

蘭丸　こは有り難き御意。知行高祿の望みとてもござりませぬ。御褒美とござらば、相果てました親三左衛門が、舊領の場所を、頂戴仕りたう存じまする。

トこれにて春永、こなしあつて

春永　尤もの願ひ。宇佐山の城にて討死なせし、其方が親三左衛門の、領地は慥か

ト思ひ入れ。光秀もこなし。

蘭丸　親どもの領地は、卽ち江州志賀郡が、舊領の場所にござりまする。

春永　誠に左様であつたな。その江州は只今に至つては、慥か（ト光秀と顔見合せ、思ひ入れあつて）オヽ、光秀が領地ぢやな。

光秀　御意の通りにござりまする。

春永　蘭丸が折角の願ひなれど、丹波近江は只今にては、光秀が領地となる。親どもの舊領とは申しながら、他家の領地は、ナウ、光秀。

光秀　ハツ、御諚にはござりますれど、天下は天下の（ト云はんとして、思ひ入れあつて）我れ一人の國郡とは、憚りながら光秀、えゝ存じませぬやうにござりまする。

春永　すりや、我が領内とはいへど、戰國の習ひ、今にも他家にて切り取る時は

光秀　我れ一人の國にあらねば、領地といへど領主の預かりと、斯く申す光秀は、憚りながら存じまする。

春永　ハテサテ、其方が胸中は、何とやらん（ト思ひ入れあつて）先達て光秀が、懇望なせし俊成卿の和歌、まつた持參させたる日吉丸と名けし劍は、齋藤道三が所持と聞く。コリヤ、中尾彌太郎、これへ參れ。

彌太　ハツ。（トつか〳〵と出て平伏する）。

春永　其方降參いたしてより、何ぞ遣はさうと存じ居つたが、ォヽ……幸ひ持ち合せたる日吉丸の一腰これを汝へ遣はす間、中國へ赴き、久吉が後詰めいたし、高名いたせ。

ト箱のまゝ差出す。彌太郎取つて

彌太　ハヽッ、この度光秀が推擧を以て、降參仕つたる某。下し給はる日吉丸、光秀兼ねて深く懇望仕り居りますれば、有り難うはござれども、光秀が手前と申し

春永　すりや、光秀が恩義あるゆゑ、この刀は請けぬと申すか。

彌太　イヤ、全く持ちまして

春永　某が心をもどくか。

彌太　ハッ〳〵。日頃より承り及びし日吉丸の一腰、中尾俊國、冥加至極、有り難く頂戴仕るでござりませう。

ト光秀へ思ひ入れあつて、刀の箱を持つて下がる。

春永　武智光秀。

光秀　ハッ。

春永　其方は兼ねて連歌に心を寄するよし、春永承り及ぶ。幸ひの一軸、其方に遣はす間、サヽ、受

取れ。

ト差出す。光秀近寄り

光秀　ハヽッ。(ト一軸の箱を取つて)御大將には只今までの、御景色に事かはり、この光秀への下され物

彌太　この彌太郎にも、兼ねて懇望の劍、拜領の面目。

光秀　日吉丸は齋藤家の重寶。兼ねて光秀頂戴の儀を、申し出で置きたる業物。今日只今餘人の拜領は
お羨ましう存じまする。

春永　ウム……左樣な事もあつたかえ。さりながら、其方へ太刀、刀は無益の品。其方には似合つた、
遊藝亂舞の道具が相應。茶の湯或は連歌の節、珍客あらばその席にて、掛け置くにはよき一軸。
急いで旅宿へ持ち歸れ。

條助　御兩所ともに、我が君よりの下され物、頂戴おしやれ。

光秀　ハツ。

ト管絃になり、彌太郎、箱の蓋を開き、太刀を出して押戴く。光秀、箱の蓋を明けると、中に女の切
り髪入れあるを取出し、思ひ入れあつて

我が君よりの下され物、一軸なりと仰せあれど、箱の内には女の切り髪、

春永　光秀流浪のその砌り、越前の國に忍び住み、珍客來つてもてなしの價に盡き、妻が優しき志し僅かの鳥目得ん爲めに、根よりふッつと切り髪を、代なすその節、求め來りし買ひ人は、この春永が間者の武士。予が耳に達せしゆゑ、不便に存じ、臣下となし、近江丹波兩國の太守となせしは、春永が舊恩ならずや。それをおのれが軍功と心得、やゝともすればいはれぬ諫言、返答かへす不敵の光秀、出馬の供を許さんや。切り髪の昔を思ひ、この後心を改めい。

光秀　すりや、この切り髪は越路にて、光秀流浪のその砌り、煙りも細き朝夕の、その世渡りに僅かなる、價に替へて

ト無念の思ひ入れあり、春永と顔見合せ、手早く切り髪を箱へ入れ、しやんと蓋をして、キッと氣を替へ

慥かに落手仕つてござりまする。

春永　オヽ、その一言、春永も滿足々々。まだこの上に、云ひ聞かす一條あれど、予も最前より氣欝いたした。其方が旅宿へ、使者を以て申し聞けん。用なき光秀、サヽ、立て／＼。

條助　光秀どの、歸宅おしやれ。

光秀　承知仕つてござりまする。

蘭丸　君には一先づ、設けの席にて
春永　婦女を集めて一獻くまん。園生の局、女ばら、春永を慰めい。

ト二重舞臺へ上がる。

園生　左樣なれば我が君樣
春永　光秀、使者を相待てよ。
光秀　ハツ。

ト平伏する。春永、光秀を見て、につたりと笑ふ。管絃になり、正面の簾、バラ〳〵と下りて春永を隱す。園生の局先きに皆々、光秀へ式禮あつて、奥へ入る。桔梗、光秀と顏見合せ、氣の毒なる思ひ入れあつて、悄れたる體にて入る。光秀殘り、跡を見送り、箱の蓋を明け、切り髮を見て以前を思ひホロリとして、又氣を變へ、無念の顏色にて奥を見詰め、キツとなる。この時、早舞ひになり　光秀思ひ入れあつて、箱を持ち、向うへ入る。これにて道具かはる。

本舞臺、三間の間、常足の障子屋體、こゝに皐月、裲襠衣裳。十次郎、振り袖着流し、袴ばかりの形箕浦、着流し。安田作兵衞、剃立て、上下、大小。紹巴、すつぺがしの惣髮、十德、連歌師にて、文臺に向ひ、この人數連歌の體。菊燈臺を照らし、すべて愛宕山西の坊、威德院の座敷。暮れ六つの鐘

琴唄にて道具とまる。

ト紹巴詠草を開き

ト作兵衛に渡す。

紹巴「花落ちる池の流れをせきとめて。

作兵　風は霞を吹き送る暮れ」。御覧下さりませう。(ト皐月へ渡す)。

皐月「色も香も醉ひをすゝむる花の本。

簑浦　國々は猶長閑なるとき」。

皐月　その長閑なる時世とは申せども、當時諸國に猛勇の良將あつて、天下を望む者數を知らず

紹巴　さるによつて光秀公、小田家へ忠勤はげみ給ふと雖も、御心猛き春永公、良薬口に苦しと、光秀公のお諫めは用ゐ給はず、當時成り上がりの猿冠者が、詞を用ひ給ふこと、小田家滅亡の起りならんと、この紹巴なぞは存ずるて。

簑浦　これはしたり、紹巴樣には、一大事の今のお噂。他家のお方が御座ならねばこそよけれ、左樣な事は、決して仰しやられぬが宜しうござりまする。

紹巴　なんの〳〵、こりや誠の事を申すのでござる。其許の連合ひ内藏之助どのを初め、これにおゐや

る安田作兵衛どのまでが、お年若にはござれども、あまり遠慮が過ぎまするぞ。奥樣、左樣ぢやござりませぬか。

皐月　成る程、其許には侍と違ひ、連歌にのみ心を寄せられお出でなされば、左樣に思し召すも尤もながら、春永公は誰あらう天下の武將。小田の臣たる夫光秀づれが、中々及びもないといはうか只今のやうな噂、連合ひ武智どのが聞いたら、嘸かしの立腹。必ずともに久吉樣のお噂なぞは、決して無用に致されてよからう。

紹巴　左樣ではござりますれど、氏も系圖も無きあの猿冠者と、光秀どのと一口には

十次　コレ、その猿冠者といふは、侍の事でござりまするか。私はその猿とやらが見たうござりまする。して、その猿も、お大名の交はりを致しまするかえ。

紹巴　致すとも／＼。毛の三本足らぬ猿めが、大名の眞似を致す。そこで猿がしこく、猿智慧をやりまするて。ハヽヽヽ。

簑浦　これはしたり、まだ噂をなされまするかな。もう／＼其やうなお噂は、仰しやらぬがようござりまするぞえ。

紹巴　ハテ、申しても大事ござらぬ。云うて惡いは、これなる十次郎樣の事。これなぞは申しては惡う

ござるが、外の事は何なりと申しても

十次　コレ〳〵、紹巴樣、この十次郎が事とはえ。

簑浦　若殿樣がどうなされましたえ。

紹巴　ハテ、其許へ申して惡いといふのは、十次郎樣の捨子の事を

皐月　アヽコレ、づか〳〵と何を仰しやられまするぞいな。まだその上に、久吉樣のお噂なぞは、なう知綱。

作兵　左樣でござりまする。御主人光秀公には、御本國丹州を出立あり、中國に赴むき、久吉の後詰めいたし、郡を責めんとて軍勢を、この愛宕山の山內にとゞめ、春永公御出馬の御供を願ふと雖もこの程より春永公の、御心に違ひし主人光秀。暫くお目通りを御遠慮との仰せ出され。それとて御近習方の執り成しにて、今日御旅館たる、本能寺への出仕。お留守の間は奧樣はじめ、打寄つて連歌の催し　中國御出馬の御供仰せつけらるゝは必定、お心安く思し召されませい。

皐月　妾も左樣に思へども、御短慮なりと聞き及ぶ、春永公の御心に（ト作兵衞簑浦と顏見合せ）それのみ案じてるわいの。

ト思ひ入れ。向うにて

呼び　殿のお歸り。

簑浦　はや御主人のお歸りとござりまする。

皐月　十次郎、行儀に致しや。

ト唄になり、向うより光秀、以前の箱を持ち、思ひ入れにて出て來り、直に本舞臺へ通る。

十次　父上樣、只今お下り遊ばされましたか。

皐月　わが夫、マア御前の首尾は如何と、案じてお待ち申しましたわいなア。

光秀　奥皐月を初め、連歌師紹巴、見れば文臺を取り散らし、こりや打寄つて連歌の催しかな。

簑浦　左樣でござりまする。紹巴樣のお出でを幸ひ、十次郎樣へ連歌のお稽古のため、只今までお席に於きまして

光秀　悴十次郎へ連歌の稽古か。それは滿足……イヤナニ、それに居るは安田作兵衛知綱か。コリヤ、其方には急用あり、これへ參れ〳〵。

作兵　ハツ。（ト よき所へ出る）。

光秀　知綱、其方はこの愛宕山の院內を駈けめぐり、この程本國丹州より、呼び寄せおきたる諸軍に告げて申さうには、今日光秀、春永公へお目見得いたし、郡責めの後詰めを願へど、いつかなお聞入

れなき大將。中國の出馬は叶はぬ。さある時には無益の諸軍、差置くも如何。今宵中に一人も殘らず、丹州龜山の城へ引取れよと、急ぎ申して參れ。早く〳〵。

皐月　すりや、中國へ向はれし、久吉どのへ後詰めして

簑浦　我が君出馬の御供は、叶ひませぬか。

光秀　いかにも。

ト皆々思ひ入れ。紹巴さしよつて

紹巴　ソレ、御覽なされたか皐月樣、紹巴が申した事、ちつとお胸にこたへませう。あの愚將たる春永公を騙し込み、佞辯を以て光秀公を、兎角御前を遠ざけんと、惡し樣に云ひなすも、これ皆眞柴の猿冠者が（ト腹の立つ思ひ入れ）。

作兵　これはしたり、殿の御前で、他家のお噂、お控へなされい。

光秀　安田は急ぎ院内の、諸軍に詳しく申し聞かせよ。

作兵　畏つてござりまする。

光秀　皐月には、申し聞ける一儀あり。簑浦は悴を誘ひ、暫く奥へ

簑浦　畏りました。イザ、若殿樣

十次　左様なら父上様、後程お目にかゝりませう。

紹巴　拙者もお次へ立ちませう。

光秀　知綱、早う

作兵　ハッ。

ト管絃になり、作兵衛一散に向うへ入る。簑浦は十次郎を連れ、紹巴附いて奥へ入る。あと合ひ方。

皐月、心得ぬ思ひ入れにて、光秀が側へさし寄り

皐月　我が夫光秀様、只今本能寺よりお歸りなされし、あなたの御様子、お顔の色も常ならず、殊に何やら見馴れぬその箱。して、その品は

光秀　今日本能寺に於て、列座の中にて主君春永公、手づから賜はるこの一品。女房皐月、開いて見やれ。

ト差出す。此うち矢張り皐月、合點のゆかぬ思ひ入れにて

皐月　アノ、この品を我が君様より

ト箱の蓋を明け、中より以前の切り髪を出し、不思議さうに思ひ入れあつて

こりやこれ、中には女子の切り髪、これをどうして、あなたには

光秀　拜領いたした。

皐月　エ。

光秀　月日も立てばその切り髪、我が身ながらも、見忘れたであらうな。

皐月　エ、この切り髪を、見忘れたと仰しやるは

光秀　そりや、其方が切つたる黒髪ぢや。

ト本調子の合ひ方。

皐月　エヽ。（ト驚く）。

光秀　不審は尤も。斯くいふ光秀の夫婦とも、未だ越路に流浪なし、仕官の望みとつおいつ、何れへこの身を寄せんずと、心ならざる羽生の隱れ家。

皐月　ほんに、それ〳〵。すりや、その切り髪……アヽ、思ひ出すも淺ましき、朝な夕なの煙りさへ、如何はせんと女氣の、髪の飾りも貯へし、曠れ着もいつか預け物。（ト俯向く）。

光秀　昨日と暮らし今日は早、糧には盡きてこの儘に、餓ゑかつへても武士の、この魂は離さじと、つゞれまとへど兩腰は、武士の道具と辛抱なし

皐月　開くる運を松風の

光秀　おとなふ門に稀れ人の、尋ね來りしもてなしに、麁酒一獻と我れ知らず、とめての後の後悔は

皐月　酒を求めん價さへ、內證知らぬ珍客の、御馳走あらばと打解けて、歸る景色もなかく〳〵に

光秀　梨地ながらも昔もの、緣も蒔繪も亂れ箱、代なす價も安近の、錆びた小柄を添へたとて

皐月　僅かな利あし是非もなく、丈なる髮も夫ゆゑ、なんの惜しまん惜しからん、これなと添へてと根許より、くらう黑髮押し切つて

光秀　賣り代なせし志し、春永公のお聞きに達し、夫婦が素性をお尋ねあり、それより召されて武智が立身。その舊恩も今は早、手の裏返す御大將、滿座の中にてその切り髮。辱かしめを受けたるは、一期の瑕瑾この上なし。身の立身もその切り髮、今日の恥辱もその切り髮、この身にとつては、德なり、仇なり。女房皐月、武智が胸中、推量してくれいやい。(ト思ひ入れ)

皐月　さてはわたしの切り髮が、あなたの出世の種ともなり、今は御身の仇ともなり、滿座の中にて、こちの人。

光秀　女房皐月……アヽ、せまじきものは、宮仕へぢやわい。

ト合ひ方やむ。奧より紹巴出て來て

紹巴　すりや、御流浪のその砌り、奧方の貞女より、髮まで切つての御心勞。操正しき事ながら、口外

せぬがこれ人情。それに並ゐる列座にて、春永公の嘲りとや。殊にこれまで光秀公、小田家へ對して數度の軍功、忠勤仇なる御大將。よもや今より主君と仰ぐ、お心はござるまい。コレ、光秀樣、武士ならぬ宇野紹巴、聞いても腹が立ちますわいの。光秀樣。

トきつと云ふ。光秀思ひ入れあつて

光秀　恥も恥辱も主君の命、この上君の難題あるとも

紹巴　あなたは腹が立ちませぬか。コレ、いかに主命なればとて、理を非に枉げる春永公、猿冠者づれが詞を用ひ、餘人の諫めは馬の耳。かゝる愚將に仕へずとも、御身逆意の催しあらば、裏切りなして大半は、御手に屬し奉らん。この企ては武智樣、思し立ちござらぬか。コレ、光秀公。

トきつと云ふ。光秀、思案の思ひ入れあつて、手早く拔いて紹巴を一太刀切る。紹巴うろたへ逃げんとするを、立廻りにて引附ける。この血汐、光秀が上下にかゝりし思ひ入れにて、きつと見得。

光秀　益なき惡事を勸むる紹巴。

ト紹巴ふりほどいて逃げんとするを、見事に首を打落す。この途端、向うにて

呼び　上使。

ト光秀、皐月、向うを見て思ひ入れ。また「上使」と呼び、管絃になり、揚幕より多三、上下、大小

にて、御書を懐中し、彌太郎、同じく大小にて、以前の日吉丸の箱を抱へ、出て來り、直に本舞臺へ來り

多三　春永公より過急の上使、淺山多三重滿。

彌太　その添へ人として、中尾彌太郎俊國、兩人わざ〳〵

兩人　參上いたしてござる。

ト光秀、紹巴が死骸を方寄せ、皐月も出迎へ

光秀　春永公よりの御上使。夜中と申し、御苦勞千萬。イザまづ、あれへ。

多三　然らば御容赦下されい。彌太郎どの

彌太　マヽ、其許より

多三　然らば。

ト上座へ通る。光秀手を仕へ

光秀　先刻本能寺に於て、御意得申せし御兩所の入來。今日光秀、我が君のお目通り叶ひしも、申さば御兩所の御推舉、忝う存ずる。先刻君の御諚には、やがて使者を遣はすとの御意。斯くあらんと旅宿に相待つ武智光秀。案に違はず役目とあつて、遠路と申し、夜陰に及びし御登山、御苦勞

千萬に存じまする。して、拙者めへ、仰せ下されし御諚はな。

多三　いかにも、知らるゝ通り御短氣なる我が君、明日とも申さず、只今直にとの仰せを受け

彌太　屋敷へ歸る某を、添へ人と仰せあるゆゑ、直樣同道いたしてござる。見請けますれば光秀の、

この席に血の滴り、殊に貴殿の上下衣服へ、かゝりし血は合點が參らぬ。

トいぶかしき思ひ入れ。

皐月　サ、この血は

トつかへる。光秀、思ひ入れあつて

光秀　御不審は御尤も。何をか包まん、只今これにて、手にかけし連歌師紹巴。春永公が蔭ながらの嘲り。斯樣な輩を生け置きては、後日に事の出來いたすと存ぜしより、直樣手討に仕る。その節かゝりし衣服の血。席を改め申さんも、心に任せぬ旅宿の當院、御容赦の程、偏へに願ひ奉りまする。

多三　尤もの返答。然らば君より仰せ越されしこの一條、とくと御承知いたされよ。

光秀　御苦勞ながら御書の趣き

多三　心得申した。

ト懷中より御書を出し、開き、讀み上げんとする。この時、風の音して、燈臺の灯、一時に消える。

兩人 これは（ト思ひ入れ）。

光秀 爰は所も愛宕山、烈しき夜半の秋の風、庭前より吹き來り、灯火一度に、ハテ、折わるい。（トこなしあつて）かゝる闇夜を幸ひに、服改めん。ヤア／＼簑浦、申し附けたる衣服上下、上使へすゝむる御杯、悴光義、持參いたせ。

簑浦 畏つてござりまする。

ト合ひ方になり、簑浦、廣蓋に白無垢水上下をのせ、袱紗をかけしまゝ持つて出てくる。十次郎、三寶に九寸五分をのせ、これを持ち、くらがりの思ひ入れにて出て來り、本舞臺へ來り、よき所へ置く。

十次 父上の仰せに任せ、御上使樣へすゝむる御杯。

簑浦 召しかへ給ふ衣服上下、簑浦持參仕つてござりまする。

皐月 召しかへ給はゞ、早く灯を

光秀 アイヤ、御上使のお目通り、灯があつては無禮の着替へ。よき時分には相圖せん。女房皐月、その節燈臺、持參いたせ。

皐月 畏つてござりまする。



ト これより草笛の合ひ方になり、皐月、探り〳〵奥へ入る。蓑浦、思ひ入れあつて、光秀が衣服を脱がせ、持ち來りし白小袖、無紋の上下に着替へさせる。光秀、ゆつくりと着替へ、三方を探り、我が前へ引寄せ

光秀 女房皐月、急いで灯。

皐月 ハツ。

ト燈臺を持ち、ツカ〳〵と出て來り、よき所へ置き、皆々この灯にて、光秀の姿を見て

ヤヽヽヽ、我が夫、何ゆゑ無紋の上下。

多三 いつの間にかは腹切り刀。

彌太 死装束の

兩人 この體は。

蓑浦 主君はとくより御覺悟。

皐月 すりや何ゆゑに

兩人 光秀どの。

光秀 淺山多三が持參の御書、承らずと光秀推察。丹波近江の兩國を、お取上げの御上使ならん。そ

れゆゑかゝる死用意。承らぬその先に、覺悟の姿、御兩所へお目にかけるは光秀が、恥を存ずるこの生害。なれども御兩所、お役目なれば、御書の趣き一通り、お聞かせなされて下さりませ。

多三　アヽ、流石は武智光秀どの、天晴れ明智のその一言、未然を察せし事ながら、一通り承られよ（ト書き物を開き）「先達て其方軍功に依つて、丹波近江二ヶ國を領地せしむるところ、この度仔細これあり、右兩國を故なく差上ぐるに於ては、替へ地として出雲石見二ヶ國のうち、何れなりとも望みに任せ、領地たるべくの條、この旨、相違なく相心得べきものなり。月日、淺山多三、中尾彌太郎承る。春永判。武智光秀へ」。

光秀　さもあらんと察せしゆゑ、承らぬその先に、斯く無紋の死裝束。舊領の二ヶ國召上げられて、なんの面目。これと申すも蘭丸づれと（ト思ひ入れあつて氣を替へて）お恨みとは存ぜねども、滿座の中にてこの切り髮。（ト皐月と顏見合せ、思ひ入れあつて）一期の瑕瑾、この上や候ふべき。光秀このまゝ生害なさば、コレ（ト十次郎を引寄せ、思ひ入れあつて）これまでは口外なさねど、其方はこの光秀が胤ならず、六年以前、小栗栖の藪蔭に、生れし年月、まつた坂本山王の守りを添へて、男の捨子。

十次　すりや、私しは捨て子にて、父のお胤ではござりませぬか。

皐月　コレ、今更その子にその樣子を

ト差寄るを突きのけ

光秀　養ひ親の光秀は、今日只今腹切るとも、其方は殘つて武智の家名相續せよ。女房皐月、とも〲其方もお願ひ申せ。

皐月　すりや、どうあつても光秀どの、その切り髮より事起り、面目なさのこの生害。今々思へばその砌り、よしないわたしが髮切つて、今の嘆きを光秀どの、お前の爲と思うたが、却つてその身の恥辱となり、こりや何とせう、どうせうぞいなう。

蓑浦　御尤もでござりまする。そのお嘆きは尤もとも、道理とも、思ひやられて皐月樣、おいとしう存じまする。

光秀　ヤア、見苦しい女ばら。御兩所の手前、未練の吠え面、すさり居らう……これにつけても俊國どの、先刻貴殿、主君より、拜領ありし日吉丸、齋藤道三所持の劍、かね〲某懇望せしを、知らぬ顏なる春永公の御振舞ひ。然らばよく〳〵御主人に、うとまれ果てし武智が成行き。あはれ一つの願ひといふは、只今生害仕れば、其許所持の日吉丸、その劍にて、介錯いたし下されい。

彌太　すりや、某が拜領の、刀を以て御身の介錯。

光秀　武士の情と思されて、くれ〲頼む、俊國どの。

彌太　お頼み、承知いたしてござる。劍は即ち

ト抜いて光秀が目先へ差出す。光秀、キツと見て

光秀　切尖、金色、相違なき日吉丸にて、この世を去るがこの身の本懷。これにつけても光秀が、最期に及び、我が君へ、辭世の一句奉らん。女房皐月、文臺これへ。

皐月　ハツ。

ト誂への合ひ方になり、文臺に短册を載せて持ち行く。光秀取つて、筆をしめし、短册を取つて一句を認め、文臺に置き

光秀　憚りながら春永公へ、御披露の程、貴殿偏へに頼み存ずる。

ト差出す。多三取つて、短册をよく〲見て

多三　「時は今、天が下知る

兩人　皐月かな」。

光秀　「時は今、天が下知る皐月かな」。

ト向うにてドンと遠寄せの頭を打つ。所々にて貝鉦を合せる。光秀、九寸五分を持つたまゝ、につこ

りと笑ふ。

皆々　あの遠寄せは。

彌太　用意がよくば（ト刀を拔く）。

光秀　南無阿彌陀佛。（ト短刀を逆手に持つ）。

彌太　南無阿彌陀佛。

ト切つて行くを、光秀、この手を押へ

光秀　今ぞ成就の

多三　ヤ。

ト思ひ入れ。光秀「エイ」と短刀を打ちつける。急所にあたり、多三、タヂ／＼となる。彌太郎これを見て

彌太　ヤ、何ゆゑ多三を

トつか／＼と寄るを、刀をもぎ取り、彌太郎が首を見事に打落す。この時、遠寄せ早め、向うより作兵衞、鎧の形にて一散に走り出て來り、花道にて

作兵　御注進、御注進。

光秀　安田作兵衛、夜討の安否心許なし。勝利の程は、なんと〳〵。

作兵　ハヽツ。

　　　　　トこれより誂への合ひ方になり

されば に候ふ。御主君の下知に隨ひ、兼ねて伏せ置く我が軍勢、夜半に紛れて合圖を定め、本能寺を十重廿重、おッ取り卷いて大音あげ……今日今宵春永の、御旅館目がけて狼藉なすは、武智十兵衛光秀が、下知を受けたる惟任勢。御大將の御首、申し請けんずこの亂入、お覺悟あれといふ間もなく、力者と呼ばれし四方田、大石取つて人礫、塀重門を打碎けば、これに續いて入り込む軍勢、おめき叫んで亂れ入る。不意を打たれし小田家の勤臣、防ぐとすれど素肌武者、中にも手ごはき蘭丸が、春永公を守護なす樣子。光秀公にもこれより直に、御出馬あつて御尤もに存じまする。

光秀　いしくも知らせし、神妙々々。二條の館へ差向けし、知らせもあらん。其方は本能寺へ走せ參じ春永どのを討ち洩らすな。

作兵　心得ました。光秀公

光秀　早行け。

作兵　ハツ。

トどんちやん烈しく、作兵衞引返して入る。皆々思ひ入れあつて

多三　さては惟任光秀は、叛逆人にてあつたよな。

皐月　現在連添ふ妾にまで、これまで包み給ひしは、エヽお情ない、光秀どの。

光秀　いふにや及ぶ。思ひ立つたる大望、女童に云ひ聞かさんや、たはけた事を……殊に兩氏に光秀が、腹切る體に見せたるも、日吉丸を手に入れんと、心を盡すと知らざるや。うつけ者めが。

多三　すりや、我れ〳〵を騙かりしか。助けおかれぬ、光秀覺悟。

トよろばひながら切つて行く。光秀立廻つて、この刀踏み落し、足下に踏みつけ

光秀　小癪な奴の。

トきつとなる。遠寄せ早めになり、東の方より飛驒之助、凜々しき形にて一散に出て來り、舞臺上の方へ來り

飛驒　諏訪飛驒之助直盛、二條の館落城の早打ち。御注進々々々。

光秀　して春忠が生死はいかに。

飛驒　ハツ……（ト誂への合ひ方になり）兼ねて主君の命に隨ひ、本能寺の先手の勢、院内へ込み入りし

知らせを待つて左馬之助光俊どのゝ軍配にて、二條の館へ無二無三、ひた／＼と押寄せて、不意にあげたる鯨波の聲。思ひ設けぬ事なれば、途を失ひし小田家の武士、うろたへ騒いで大半討たれ、大將三位春忠どの、早叶はじとや思しけん、腹かき切つて炎と共に、煙に入つての最期の樣子、確かに見屆け御注進。光秀公も御安堵あり、本能寺へ御出馬の、急いで御用意あられませう。

光秀　すりや、春忠も最期となつ。この上は光秀が、直樣向つて春永の、御首を賜はらん。直盛、急ぎ物の具持て。

飛騨　ハツ。

ト奥の方へ駈け行く。皐月、光秀に縋つて思ひ入れ。この間に飛騨之助、鎧櫃を抱へ、よき所へ持ち出す。

皐月　エヽ、情ない光秀どの、主君を害して國家を奪ひ、子孫の榮えがあるべきや。一旦勝利あるとても

蓑浦　遂には天のお罰を受け、罪を受けんは目のあたり、只おいとしいは若殿樣。

皐月　子でなきこの子を我が子となし、末代主に敵對せし、汚名を取らせ、その上に、もし見苦しき死

をとげなば、誠の親が聞く時は、さぞや悔まん、嘆くであらう。この子も妾が手にかけて、わしも自害を……さうぢや。（ト十次郎が脇差を拔き）南無阿彌陀佛。

ト十次郎を切らうとする。光秀引ッ捕へ、突きのけ、手早く十次郎を鎧櫃へ打込み、蓋をしやんとして

光秀　我が胤ならねどこの年月、育て上げたる十次郎、武智の家の世繼となす。くたばりたくばおのれ一人、勝手にそれにてくたばりをらう。（トはつたと蹴倒す）。

皐月　すりや、どうあつても

蓑浦　奥樣、お覺悟遊ばされませう。

皐月　もう是非に

ト持つたる脇差、蓑浦は懷劍を拔き、兩人とも自害する。多三詰め寄り

多三　小田家に敵たふ逆賊光秀、いで重滿が

ト拔討ちに光秀へかゝるを、かいくゞつて見事に切り倒し

光秀　出陣の血祭りよし。

飛驒　光秀公。

光秀　出馬の用意。

飛驒　ハッ。

ト光秀、血刀を差出す。飛驒之助、手水鉢の水を注ぎかける。皐月、蓑浦、落入る。光秀向うを見てきつと思ひ入れ。この仕組よろしく、ひやうじ幕のうち、ドン〳〵にて、つなぎ、引返し。

幕

本舞臺、三間の間、黄土塗りの筋塀、瓜の紋附いたる高提灯を立て、園生の局、甲斐々々しくからげ薙刀を構へ、平太、權八、四天の形にて、拔刀にて立ちかゝりゐる。幕のうちよりドンチヤンにて、幕明く。

平太　園生の局、覺悟なせ。

園生　小癪な一言。武智に組みなす無道人、園生の局が薙刀の、刃金に成佛いたさせん。

兩人　觀念ひろげ。

ト園生、二人を相手に立廻り、ドン〳〵烈しく、向うより軍兵四人、條助と立廻りながら、源内引添ひ出て來り、舞臺大亂になり、園生の局、平太、傳八を追ひかけ、向うへ入る。條助、軍兵を奥へ追

ひ込み、源内と立廻りあつて

條助 おのれも武智の一族か。

源内 いかにも、光秀公の身内にて、三宅源内國次といふ。おのれは何者だ。

條助 小癪な廣言。小田家の忠臣、矢代條助春行、逆賊武智に一味の武士、その首渡せ。

源内 小癪な。覺悟。

ト これにて兩人、よろしきタテ、よき程に向うより園生、平太と傳八を相手に立廻りながら出て來り花道にて立廻り。このうち條助と源内は切り合つて奥へ入る。園生は兩人を追ひ込み、行かうとする所へ、揚幕より飛驒之助、以前の形にて出て來り、園生の局を押し戻し、本舞臺へ來り

飛驒 女ながらも手練の聞え、園生の局は、諏訪直盛を討取りくれん。

園生 云はれぬ廣言。女と侮り、おくれを取るな。

飛驒 小癪な一言。

ト 切つて行く。鳴り物變つて、兩人、花やかなるタテあつて、兩人奥深く切り入る。知らせにつき、正面の塀を引上げる。

本舞臺、高足の簾屋體。爰に春永、大わらはになり、矢を射かけゐる。椽の下に丹下、雲八、黒七、丹藏、いづれも四天の形、軍兵大勢、槍を持ち、詰め寄りゐる。春永、射かけし矢種盡きたる思ひ入れにて

春永　誰そあるか、薙刀持て。

ト急いて云ふ。園生、後より薙刀を持ち、ツカ〳〵と出て春永へ渡す。この時後より平太、園生にかかる。立廻りながら兩人奥へ入る。春永、大勢を相手に立廻り、トゞ向ふへ追ひ込む。引違へて向うより條助、駈け戻る。跡より源內追ひかけ來り

條助　ヤヽ、我が君には御安泰。

源內　春永、覺悟。

トかゝる。立廻り。

春永　矢代條助、其方は、大切なる雲龍の印、一先づ久吉方へ持ち參れ。必ず敵に奪はれな。早く〳〵

條助　畏つてござりまする。

源內　それを

トかゝる。春永引敷き

春永　早く行け。

條助　ハッ。

トどんちやんにて向うへ走り入る。春永、源內立廻る。よき程に向うより蘭丸、丹下、雲八と立廻りにて出て來りしが、春永を見て二人を投げのけ、本舞臺へ來り、平伏して

蘭丸　こは春永公にてましますや。今宵寄せたる武智が狩り武者、かけ散らさんと門外に進みしところ敵は新手を、入れ替へ〳〵

兩人　蘭丸、覺悟。

トかゝるを、見事に立廻り、屋體の上には源內、春永にかゝるを、立廻りにて引敷き

春永　味方勝利か、なんと〳〵。

蘭丸　されば候ふ、當院を、固めし勇士は小勢にて、不意を討たれし素肌の働き。承れば二條のお館、左馬之助が軍配して

兩人　やらぬワ。

ト立廻り。春永、勢ひ込んで

春永　二條の館へも寄せたりとや。ホヽホイ。

蘭丸　御痛はしや春忠卿、御最期なりと追ひ〳〵早打ち。心は矢竹にはやれども、要害とても寺院の不都合、御身の上も危し〳〵。急ぎ御賢慮あられませう。

ト春永向うをキッと見詰め、無念の顔色にて

春永　日本武家の棟梁たる、この春永を騙かつて、主に敵たふ、おのれ光秀。思へば〳〵、エヽ、逆賊め。（トきつと思ひ入れ）。

源内　春永、覺悟。

トかゝるを、見事に切り倒し

春永　蘭丸々々〳〵。

蘭丸　ハヽア。

春永　防ぎ矢いたせ。

蘭丸　ハア。

ト二人を投げのける。ドン〳〵早め、屋體へ簾下りる。奥より軍兵四人、バラ〳〵と出て

皆々　蘭丸、覺悟。

ト突きかける。蘭丸、槍を殘らず踏み落し、皆々向うへ逃げる。蘭丸、十文字の槍を提げ、追ひかけ

行く。揚幕より作兵衞、同じく槍をかまへ、つか〳〵と出て、花道にて兩人立廻りあつて、本舞臺へ
押返し、キッとなつて

蘭丸　汝も武智が一類よな。

作兵　尋ねなくとも某は、惟任光秀が一族に、さる者ありと呼ばれたる、安田作兵衞知綱なり。望むところの森蘭丸、前髪首を早く渡せ。

蘭丸　いはれざる安田が廣言。冥土の先手仕れ。

作兵　蘭丸、あの世の先陣いたせ。

ト突いてかゝる。蘭丸、槍にてあしらひ、鳴り物變つて、兩人、槍のタテよろしく、蘭丸高舞臺へ駈け上がる。作兵衞、槍を持つたるまゝ平舞臺へ飛ぶ。蘭丸、上から逆突きに突く。この途端に丹下出てこの中へ交り、誤まつて蘭丸の槍にて貫かるゝ。作兵衞、この槍を取つて前へ引く。蘭丸飛び下り作兵衞と立廻り、この時軍兵大勢出て蘭丸を取卷く。二重舞臺、襖の間より、切り腕、切り首、夥しく投げ出す。春永、拔刀にて、飛騨之助と立廻りながら出て來る。園生の局、軍兵と立廻りながら出て來る。春永、飛騨之助を當てる。園生、軍兵を切り下げる。蘭丸見て

蘭丸　ヤヽ、君には深手を負ひ給ふか。

ト駈け寄るを、軍兵、蘭丸へ組みつく。

春永　雑兵、葉武者のその爲に、見苦しき死をとげんより、いま春永が覺悟の生害。園生、蘭丸、予が首討てよ。

ト刀を腹へ突き立てんとする。園生縋つて

園生　御武運拙き我が君樣。

春永　未練な事を

トきつと思ひ入れ。この時いづくよりかは鐵骨の扇を打ちつける。春永、拂ひ落し、キツと見て

いづくよりかは抛つ扇、予が覺えあり。(ト取り上げて) こりや光秀を打擲の、その節打たせしこの鐵扇。

蘭丸　この場へ打ちしは

ト駈け出さうとする。この間に春永、開き見て

春永　「時は今、天が下知る皐月かな」。

園生　その手跡こそ謀叛の張本

蘭丸　正しく惟任。

ト立上がるを、飛驒之助起き上がつて

飛驒　いゝや。

皆々　やらぬワ。

　　ト取卷く。この時、向う揚幕にて

光秀　ヤア〳〵方々承れ。寄せ手の大將、武智光秀、春永公へ見參々々。

　　トどん〳〵、カケリになり、向うより光秀、うしろ鉢卷、陣羽織、着込み、大口の形にて金の揮を持ち、一散に出て來り、直に本舞臺よき所へ來る。このうち「アリヤ〳〵」の聲。陣笠の軍兵六人、奥よりバラ〳〵と出て左右を圍み

皆々　どつこい。（ト取卷く）。

春永　ヤア、汝は武智光秀よな。

光秀　お騒ぎあるな御大將、この光秀は源家の正統、土岐伯耆守が末葉にて、兼ねて謀叛の根ざしあれば、土岐とかけたるその秀句、武智が生き面打たれし鐵扇、認め返す扇の返報。御身を討つて今日より、天が下知る光秀が、四海を握るは手裏にあり。二條の館も一時の煙り、御連枝、公達落命あり、久吉方へ送られし、雲龍の印手に入つたり。今ぞ傾むく小田家の滅亡。潔く御腹めされよ。但し搔き首仕らうか。

春永　サ、それは

光秀　御自害あるか。

春永　サア

皆々　サア〳〵〳〵

光秀　光秀これにて、見物いたさう。

ト詰め寄る。春永思ひ入れあつて

春永　傾むく運とはいひながら、天文の頃より、當代天正十年の今日まで、四海のうちに横行し、武威を以て天下の兵亂を切り鎭め、二位右大臣に昇進し、願へる大業成就せざるといふ事なく

蘭丸　その英名は鬼神の如く、萬民恐れをのゝきし、名將勇士も情なや

園生　運つき弓の弦切れて

春永　逆賊武智が計略に、落命なすか、園生、蘭丸

園蘭　我が君様

春永　エヽ、口惜しい。

ト顔見合せ、無念の思ひ入れ。

是非に及ばぬ。

ト春永、蘭丸、腹へ突き立てる。園生、自害する。光秀見て

光秀　流石は春永、よき覺悟。

作兵　御計略成就の上は

光秀　今こそ和朝にひるがへす、源氏の正統武智光秀、六十餘州をたなごゝろ、都へなびかす桔梗の旗揚げ。士卒をまとめて歸陣なさん

ト桔梗の紋ついたる旗をキッと差出す。春永、蘭丸、これを見て、無念の顏色にて

春蘭　思ひ廻せば

トきつとなる。光秀、ツカ〳〵と高二重へ上がり、刀を拔き、春永の首を打落す。蘭丸、園生見て

兩人　冥土の御供。

ト刀を引拔き、笛をかいて一度に落入る。光秀、春永が首を摑み、キッと見て

光秀　勝鬨、勝鬨。

皆々　エイ〳〵〳〵。

トどんちやん早め、鯨波の聲をあげる。光秀こなしあつて

光秀　アラ、心地よやなア。

トかけり、ドン／＼にて、ひやうし

幕

四幕目

小栗栖村の場

役名――水尾正兵衛國次。百姓、助作。嘉平次娘、千里。同召仕、小藤。藤吉女房、お八重。武智十次郎光義。安田作兵衛知綱。百姓、たぬ藏。同、萬兵衛。同、畑四郎。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、正面打抜き竹藪、上の方に三尺の地藏堂、狐格子をたて、所々に稻村、すべて山城の國、小栗栖在、彼岸のうちの景色。てんつゝに、念佛太鼓、法螺貝、陣鉦の音にて幕明く。

ト萬兵衛、畑四郎、外に百姓五人、いづれも脚絆、草鞋、竹の笠をかむり、萬兵衛と畑四郎は藪の竹を切つて、鉈にて槍を拵へてゐる。外の百姓は念佛を申して踊つてゐる見得。捨ぜりふよろしく踊りあるいて、畑四郎が上へこけかゝる。

畑四　コレ〳〵、こいつらは、いゝ加減に踊り跳ねろ。この畑四郎が槍を拵へる邪魔になるワ。

萬兵　さうだ〳〵。先刻からバタクサ〳〵と、埃が立つてなるものぢやアないワ。わいらも踊り跳ねる手間で、落人でも見附けて、鎧兜でも引ッ剝がいで、跳ねた奴等ではないか。

百一　コレエ〳〵、萬兵衞、わりやァ落人といふが、今日は一年に二度の彼岸だよ。

百二　それ〳〵、出來作がいふ通り、秋の彼岸に地藏樣へ、踊りを奉納し申すのよ。

百三　おいらが踊りぶりは、江戸の振附けとやらも叶ひますまいて。

百四　この又じよなめきを、女どもが見かずつたら、さぞ我れともに、惚れ申さうぞ。

百五　併し、昨日からの戰は、久吉樣が勝だげな。何か武智樣が、だりむくつて、山崎からこの小栗栖あたりは、落武者が暗雲に通りまするて。

畑四　サア、その落武者を見附けたら、すつぽん突きと思ふから、竹槍に油を塗つて、走りのいゝやうに拵へるのだよ。

萬兵　てめえ達は、落人を捕まへるとも、拾ひ首をするとも、油斷なく、頑張れ〳〵。

皆々　合點だ〳〵。いつそ拾ひ首と出ようわえ。

ト在鄕唄になり、向うより千里、振り袖衣裳にて、菊雞頭の花を持ち、小藤、下女の拵へ、小桶を提

げ出てくる。跡よりたぬ藏、百姓の拵へ、脚絆、草鞋にて、鐵砲、脇差、陣笠なぞを一つにからげ、
擔いで出て來り、花道にて、

たぬ　コレ〳〵、千里さん、待ちなさいな〳〵。ハテ、お娘にしては早い足だて。

千里　オヽ、お前は、たぬ藏さんぢやござんせぬかえ。

小藤　こりや、お前も、彼岸のうちの地藏參りに來なさんしたのかえ。

たぬ　おきやァがれ。地藏參りをしてたまるものか。ちつとお前に話がある。マア〳〵、向うまで、サア、あゆびなさい〳〵。

ト鳴り物の切れにて、二人本舞臺へ來る。皆々見て

萬兵　イヤア、こりやァ嘉平次樣の娘御だの。

皆々　こりやァ彼岸の、地藏參りか〳〵。

千里　お前方は村のお若いの。こりや中日の地藏踊りでござんすかえ。

小藤　その踊を、ちつと見物じて行かうかいな。

たぬ　コレ、てめえ達も、この錢儲けのある最中。なんだ、地藏踊を踊るのか。

畑四　アヽヽ、わりやァ小袋のたぬ藏か。見れば、さま〳〵な物を脊負つて來たなう。

皆々　何しに出かけるのだ〳〵。

たぬ　エヽ、わいらも氣のきかねえ。おらア今朝から、天王山の麓から、山崎を一遍駈け歩いて、コレ見やれ、陣笠、鐵砲、太刀、刀、今日も餘ッ程の仕事をしたて。

皆々　アヽ、そりやア皆拾ひ物か。

たぬ　知れた事だワ。これからいゝ拾ひ首をするか、落人を生捕つて、こんな時に大名にならにやアならねえ。てめえ達も落人と見たら、矢庭に叩ッ挫け〳〵。

皆々　合點だ〳〵。

千里　アヽ、そんならお前は今朝から出て、アノ戰場を駈け歩いてござんしたかえ。

小藤　ほんに戰場といへば、あの助作どのを見やしやんせぬかえ。

たぬ　イヤ〳〵、見やしなんだが（ト思ひ入れあつて）アヽ、見た〳〵。

千里　コレ、どこで見さんしたえ。

たぬ　あゝ、たしか山崎の渡し手前に、年頃といひ、なんでも榮三郎によく似た男が、流れ矢や鐵砲かなんでも飛び道具にあたつて、五段目の定九郎といふ仕打でゐたが、たしかあの手負ひは助作であつたわえ。

千里 エヽ。

千里 コレ〱、たぬ藏さん、そりやマア、ほんまの事かいな〱。

小藤 どうしてマアあの助作どのが

たぬ ハテ、あの野郎は、慾が深いから、戰場をうろついて、拾ひ物に出かけたであらうが、可哀や流れ矢に當つたと見えるわえ。

千里 そりやマア、ほんまの事かいな。コレ、小藤、こりやマアどうせうぞいなう。

たぬ ナニお前、どうするものか。遠からお前の親御の嘉平次樣の、一番弟子のこのたぬ藏、劍術柔術に拔け目のないわしだから、お前の聟は、さしづめこの色男だ、コレ、案じなさるな〱。

千里 エヽ、誰が案じるものかいな。父さんの弟子であらうが、わしが氣に入らぬお前、聟ぢやの何のと、エヽ、云うても下さんすな。

たぬ ハテ、それでも親御から貰つておいた。

千里 エヽ又云うてかいな。コレ、小藤、今日は彼岸の中日ぢやによつて、地藏參りしようと出たけれど、惡い人に逢うて、聞いてもうるさい。直に歸らうわいな。

小藤 左樣なされませ。サア〱、また明日なとお參りなされませ。

千里　サアヽ戻らうわいな。

ト行かうとする。たぬ藏、これをとめて

たぬ　ドツコイ〳〵、戻す事はならねえワ。お前、たつて歸るなら、花聟のこのたぬ藏が、送つてやらう〳〵。

千里　エヽ、それにや及ばぬわいな。

畑四　成る程、こりや送りかゝつて送らずば、おぬしも男が立つまい。送れ〳〵。この畑四郎が、この姐えを送つてやらうワ。

ト小藤へしなだれかゝる。

萬兵　こいつはどうだ。そこら中が色事で、目を突くやうだ。とてもおいらに相手は無し、人の色でも取り持つべいか〳〵。

たぬ　コレ〳〵、若い者ども〳〵、見る通りのしやく馬娘、いつそ栗畑へでも、おつころばしと出ようわえ。

皆々　さうしやれ〳〵。

千里　アヽコレ、滅相な事しやんすと、免さぬぞえ。

たぬ　それ〳〵、さう腹を立てたところが、一倍可愛らしいワ。この黄昏を幸ひに、向うの畑へ、きさはし柿と洒落やせう。

千里　エヽ、知らぬわいな。

たぬ　ハテ、あゆびねえよ。

トてんつゝ、禪のツトメになり、皆々捨ぜりふにて、たぬ藏は千里の手を取り、畑四郎は小藤を引立て、向うへかゝる。揚幕より助作、百姓のこしらへ、朝顏形の籠へ、茄子と玉蜀黍を入れ、これを擔ぎ出て來り、花道にて行きあひ、千里を圍ひ、押戻して本舞臺へ來る。畑四郎を投げのけ、たぬ藏の腕を捻ぢあげ、キツとなつて

助作　千里樣、夕暮れ時に物騷な。地藏參りのお歸りでござりまするかな。

小藤　ほんに助作どの、ようマア來て下さんしたの。

千里　これいなう、地藏樣へ參る道で、このたぬ藏どのが、いろ〳〵な事云うて、わしや腹が立つわいの〳〵。

助作　ハテ、ようござりますわな。一體マア日暮れ時分に、女中ばかりでござるが惡い。それだによつて此やうな、コレ、袋狸とやらが出ます。もう日は暮れかゝる、袋狸にあはぬうち、早くお

たぬ　宿へお歸りなされませな。（トたぬ藏を投げ出す）。

たぬ　オヽ、痛いぞ〳〵。コレエヽ、うぬは助作めだな。なんだ、今聞けばおれが事を、袋狸だと吐かしたな。コレエヽ、どこが袋狸だ。業平の前から節句錢を取りさうな色男だぞ。目の玉を洗つてよく見やアがれ。

助作　成る程、こなさんは、業平も跣で逃げる色男だが、どうしても袋狸だといふ面差しがあるわえ。コレ、こなた衆も、八十八の團子を喰つたか知らねえが、袋狸につき合はねえがいゝ。コレ、惡い病を病むぞよ。

皆々　イヤアヽ。

萬兵　成る程、さう云へばどうやらあの男は、袋狸のやうにも見えるわえ。

皆々　思ひなしか、顏が、ふくろ〳〵としましたわえ。ハヽヽヽヽヽ。

たぬ　おきやアがれ。こいつらは何を吐かしやアがる。ヤイ助作、わりやアなぜたぬ藏樣の、戀の妨げをするのだ。

助作　ナニお前の戀の邪魔をするものか。わしやア旦那嘉平次樣の云ひつけで、山澤の畑へ行つて、瓜や白瓜を取つて歸るべいと、仕事に行つたところが、聞かつしやい、戰の奴等が踏み込んだから

畑中は首だらけ。瓜や南瓜は一つもない。その代りには、よささうな首を、二つ三つ拾つて來ました。

ト籠の中より切り首を三つばかり出す。

千里　アヽコレ助作、其方はマア、滅相な物を拾つて來やつたなう。

たぬ　イカサマ、物好きな男だぞ。併し、拾ひ首でもして錢にせずば、何として〱、とても誠の働きは出來まい。このたぬ藏などは、見つけ次第に落人を引ッ捕へて、首を取るワ。その前方に、あの娘を取らにやアならねえ。コレ、此方へ退いてゐろ。

ト助作を引退け、千里が方へ寄るを　助作、切り首を取つて

助作　ソレ、切り首を進ぜませう。

トたぬ藏へ打ちつける。たぬ藏、恟りして飛びのく。

畑四　コレ、小藤、氣はないか。

ト立寄る。助作、捨ぜりふにて又切り首を打ちつける。

皆々　アヽソレ、首が來た。御免だ〱。

助作　もう一つ振舞はうか。（トたぬ藏へ打ちつける。）

たぬ　アヽ、御免だ〳〵。
皆々　おいらも御免だ〳〵。ト逃げる。助作、首をそこら中へ打ちつける。これにて、たぬ藏初め皆々恐れ、捨ぜりふ云ひながら下座へ逃げて入る。
助作　エヽ、死首を見て恐れるとは、餘ッ程はねた奴等だわえ。
千里　これいなう助作、其方はマア、わしが思ふやうにもない、なぜに返事をして、たもらぬぞいの。
助作　ハテ、その御返事は、この間も申した通り、あなたの親御樣は、御浪人なされても、松下嘉平次といふお侍ひ樣、そのお娘御のお前。私しは、家來も〳〵作男、その以前、藤吉どのとやらが不奉公から、お前のお姉樣お八重樣とやらも家出して、藤吉が跡を追うてござつたとの事。ひよつと又そんな事になつて御覽じませ、親御樣にお氣を揉ませまするは必定。それゆゑどうも
小藤　あなたへ返事をしやしやんせぬか。
助作　貴樣までも同じやうに、この上必ず取り持つ事は、御無用々々々々。
千里　そんならどうでも、色よい返事は
助作　お主の娘御、どうも返事はなりますまい。

トこの時、ドン〳〵烈しく、鯨波の聲をあげる。これにて千里驚き、助作に縋りつき

千里　オヽ怖。あの聲は、何ぢやぞいの〳〵。

助作　ありやァ慥か落人を、見附け出したその人聲でござりませう。怖い事はござりませぬ。私しにひつたりと、取りついてござりませ。

千里　アノ、斯うかえ〳〵。

小藤　まだ〳〵聲が致します。隨分ひつたりと、取りついてござりませ。

助作　したがモシ、抱きつくのは御免だよ。

トこの時またドン〳〵烈しく、鯨波の聲をあげる。千里、また縋りつく。

これはしたり、また抱きつくのかえ。

千里　なんであらうと、怖うて〳〵ならぬわいな、常から其方の側へとては、寄せてはたもらぬ助作があの人聲にはひつたりと、取りついての介抱は、今から毎日戦があれば、こちや嬉しいわいの。

助作　アヽ、らッちもねえ。さう毎日々々戦があらうものなら、コレ、世の中に人種は盡きますわいの。

千里　サア、人種は盡きやうがまゝ、わしは其方さへ息災なれば、こちや嬉しいわいの。

助作　イヤ、呆れたものだ。

ト爰に又ドン〳〵烈しく、鯨波の聲を上げる。千里また縋りつく。

小藤　それ〳〵、また人聲でござりまするぞ。しつかりと取りついてお出でなされませ。

助作　これサ、あのたんびに取りつかれて堪るものか。仕事も何も出來るものぢやァねえ。いつそこりやァお前樣を、お內へ送つて參りませう。

千里　送つてたもるなら、人聲の方の道まで送つてたもや。

助作　ハテ、お前もとんだ物好きだぞ。したが、落人でもうせをつたら、道の程も危ない。駕籠からうにも駕籠は無し。籠は茄子籠。爰がコレ、侍ひなら（ト玉蜀黍を見つけ）よし〳〵、あるぞ〳〵。（ト玉蜀黍を二本、大小のやうに差して）御覽じろ、道にて狼藉ある時は、玉蜀黍の大小にて、たつた一打ち。氣遣ひなしに、千里樣

千里　そんなら助作

助作　參りませうか。

ト又ドン〳〵烈しく、鯨波の聲する。千里、縋りつかうとする。

またドン〳〵か。イヤ、恐れたものだ。

小藤　あの人聲が結ぶの神。

千里　聲する方へ、コレ、助作。

助作　ハテ、お前もとんだ物好きだぞ。

ト合ひ方になり、千里、小藤先に助作送つて、下座へ入ると、直にドンチヤン烈しく、向うにて鯨波の聲、ドン〳〵にて十次郎、鎧下の形、半切れ、手甲、毛沓、拔刀にて出てくる。百姓四人、蓑笠にて、竹槍を突つかけ、花道にて立廻りながら出て來り、本舞臺へ來て

四人　動くな。（ト取巻く）。

十次　こりや土民ども、幼き者と侮つて、道の狼藉、なんとする。

百一　ヤア、小ましやくれたる落武者め。正しく武智に身寄りの小悴。

百二　命は助けるその代り、裸になつて物の具を

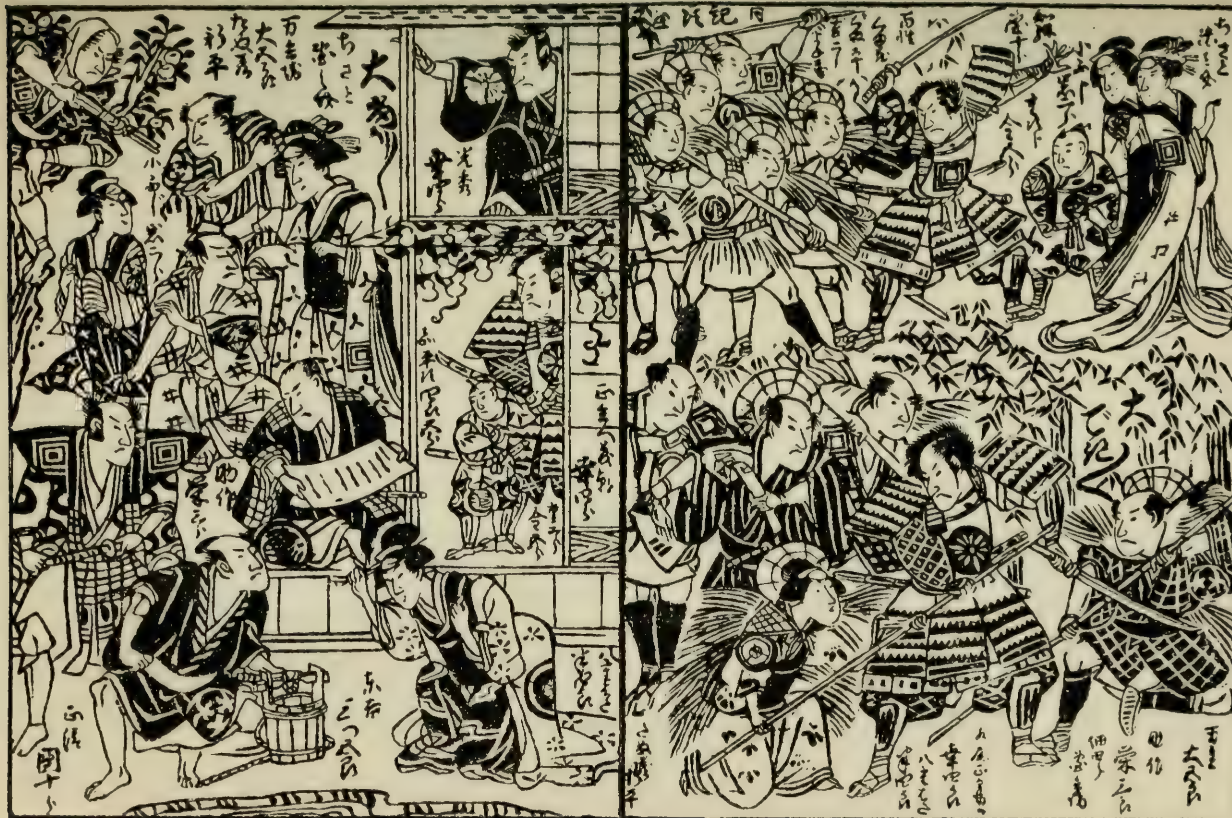
百三　渡して爰を突ッ走れ。

百四　小僧め早く

皆々　脱ぐまいか。

十次　ヤア、落武者とは舌長なり。我れは武智十次郎光義、生年積つて十七歳の、その初陣の手練を見よ

百一　面倒な。ぶッちめろ。



四人　やらぬワ。

ト禪のツトメになり、四人は竹槍にて突つかける。十次郎、切り拂ひ〳〵立廻り、ト、四人は逃げて入る。よき時分より、たぬ藏、畑四郎出かゝり、窺ひゐて、ツカ〳〵と寄つて十次郎を引附ける。この時十次郎、懐より、赤地の守り袋を落す。たぬ藏捕へ

たぬ　動きやアがるな。餓鬼には手ひどい今の働き。幸ひ掛けたる守り袋、氏も系圖もこれにて知れん。寄越しやアがれ。（ト引ッたくる。）

十次　ヤア、その守りを

ト寄るを捕へて

畑四　ちよツほりめ、うしやアがれ。

トどん〳〵、突ッかけになり、兩人は十次郎を引ッ立て、向うへかゝる。揚幕より作兵衛、鎧なり、一散に駈けて出て、十次郎を圍うてキツとなる。

十次　ヤア、よい所へ安田知綱。

作兵　光義公にてありけるか。御供いたすこの道筋、野武士のさゝへに思はぬ遲參。イザ、お越しあられませう。

たぬ　さてこそ武智が小倅よな。この守りこそよき證據。餓鬼めを渡せ。

トかゝるを、作兵衞引きつける、立廻り。たぬ藏の手に守り袋殘り、書き物は吹きちる。以前の四人バラ〳〵と出て

四人　動くな。

ト取卷く。この間に、たぬ藏、花道へかゝり

たぬ　その落人を取逃がすな。この間におれはこの守り。

作兵　おのれ、その品

ト四人を蹴りのけ、行かうとする。下座より百姓大勢、いづれも簑笠にて、竹槍を構へ、バラ〳〵と出て取卷く。

たぬ　ドリヤ、このうちに、ソレ

ト禪のツトメになり、たぬ藏、守りを持ち、一散に向うへ入る。

畑四　ソレ、若武者を突きとめろ。

皆々　やらぬワ。

ト矢張り禪のツトメにて、作兵衞立廻りあつて、上手の石地藏を取つて大勢へ打ちつける。これにて

皆々左右へ逃げ散る。作兵衛、これを追ひかけんとする。十次郎、作兵衛が鎧の草摺に縋つて思ひ入れ。作兵衛思ひ入れあつて

作兵　お氣遣ひなされまするな。高が土民の刃向ひ立て。さりながら、暫くあなたは（トあたりを見廻し地藏堂を見附け）幸ひ〳〵、御窮屈にはござらうが、地藏堂に暫しが間

十次　必ず怪我してたもるなよ。

作兵　まづ〳〵これへ。

ト地藏堂へ十次郎を隱し、戸をたてる。この時以前の人數、殘らず出て

皆々　やらぬワ。

ト突いてかゝる。作兵衛拔いて、切り立て〳〵、禪のツトメにて立廻りあつて、上の方へ三人ばかり切り倒す。殘りの人數は向うへ逃げる。作兵衛は下の方へも三人ばかり切り倒し、殘りの人数を追つて向うへ入る。鳴り物打ちあげる。舞臺の上と下に三人づゝ重なり合つて倒れゐる。時の鐘になり、上の死骸の中より水尾正兵衛、蓑笠にて、ソツと顏を上げ、向うを見る。この時、向うにて、大勢の聲するゆゑ、正兵衛ちやつと顏を隱す。下の方の死骸の中より、時の鐘を合圖に、お八重、蓑笠にて、顏を上げ、正兵衛が方へ目を附ける。下座にて大勢の聲するゆゑ、お八重ちやつと顏を隱す。また時の鐘になり、上の方より正兵衛、顏を上げ、ソロ〳〵立つて來り、笠を脫ぐ。剃立ての拵へ、眉間に

十次　ヤア、其方は

古疵あり、蓑の下は鎧兜にて、窺ひ〳〵地藏堂へかゝり、中より十次郎を引出す。十次郎見てトロを押へ、着てゐたる蓑を脱いで十次郎に冠せ、姿の見えぬやうにして、横抱きに抱へる。この時吹替へになる。よろしく抱込み、行かうとする。後より助作、窺ひゐて、附け太刀の鐺を捕へ、引戻す立廻り。振り切つて行かうとする。死骸の中よりお八重、竹槍にて正兵衞へ突きかける。正兵衞一刀拔き、お八重へ切りかける。助作、つか〳〵と寄るを、畑四郎出てかゝる。助作、畑四郎を捕へ

正兵　コレ。

ト突きやる。正兵衞、刀を振り上げる。畑四郎組みつく。正兵衞跡じざりにて藪の方へ行く。お八重竹槍を突き出す。正兵衞、タヂ〳〵として藪の中へ半身入る。この時、錦の袋に入れし綸旨を落す。窺ひ見てお八重、槍にて正兵衞をしたゝかに突く。正兵衞、ガツクリとなる。

助作　落人。

畑四　やらぬワ。

ト聲立てる。正兵衞、拔討ちに首打落し、返す刀にて竹槍を切り折る。これにてお八重、撞と坐す。はずみに以前の書き物を拾ふ。藪の中より切り首よき所へ落ちる。このうち暗闇の仕組み、忍び三重捨て鐘、雨の音。お八重は竹槍をかい込み、書き物を咬へ、助作は綸旨を拾ひ、探り寄つて、ほのか

に三人顔見合せ、きつと思ひ入れ。正兵衛は藪中へ隠るゝ。お八重、助作、左右へ別れて、キツと見得。この仕組みよろしく、ひやうし

幕

大詰　松下嘉平次住家の場

役名――眞柴大領久吉。武智十兵衛光秀。水尾正兵衛。下男助作實ハ小西彌十郎行長。加藤虎之助正清。松下嘉平次。久吉妻、八重機元のお八重。嘉平次娘、千里。百姓、たぬ藏。同、萬兵衛。下女、小藤。武智十次郎光義。

本舞臺、三間の間、上の方塗り骨障子の二階家、下に瓢簞棚、四ツ目垣、よき所に秋草の花壇、桔梗、苅萱、女郎花、紫苑、萩、絲薄、その外草花盛りの體、出入りあり。栗丸太の井筒、その側に梧桐、枝葉茂り、舞臺前にしがらみ、泉水の體。正面に大和葺きの通したる屋體、切り目縁、塗り骨障子をたて切り、藁葺きの門口、竹の簀戸、屋根へ瓢簞這ひまとひ、門口に松下嘉平次といふ標札、柿の生りたる立ち樹、これに鳥おどしの弓矢を附け、下は茂りたる竹藪、庭には手水鉢、沓脱ぎ石。すべて小栗栖のほとり、嘉平次閑居の體。琴唄に囃子をかむつて幕明く。

ト縁先に千里、竹の花活へ庭の桔梗を活けてゐる。小藤、萬兵衞、竹刀打ちの稽古をしてゐる。たぬ藏、麻上下を着て、二升樽を提げ、立ちかゝりゐる。兩人竹刀打ちの立廻りあつて、小藤、萬兵衞をしたゝかに打ちすゑる。

萬兵　アイタヽヽヽヽヽヽ、コレ／＼小藤坊、もう／＼御免だ。手の内は見えた／＼。

小藤　ソレ見やしやんせ。なんぼ手練の程が見せたいなぞと云はんしても、女子のわたしにさへその通りぢやないかいな。重ねて高言は愼しましやんせいなア。

萬兵　イヤモウ、愼しむとも／＼、口は禍ひの門とは、よく云つたものだわえ。

たぬ　コレ／＼萬兵衞、わりやア口程にもない、女にぶたれたか。流石嘉平次樣に使はるゝ程あつて、今の働き、下女奉公の小藤でさへその通り。娘御の千里さんの、手練の程が奥床しい。その男まさりの娘御ゆゑ、親御へ願つて、弟子の中でも見所のある此たぬ藏、押しかけての聟入りだ。千里さん、サア／＼

千里　又しても、たぬ藏さん、親が得心ないに聟入り詮索、もう／＼云うても下さんすな。

萬兵　モシ／＼、お娘御、そりやアお前、惡い合點だ。どうで弟子衆の中から聟を取らつしやらう。差詰めあのたぬ藏は兄弟子、こりやアこの男を、聟にしなさるがよからうぞえ。

たぬ　それ〳〵、おぬしが云ふ通りだ。否應なしに聟に取りなさい。幸ひ今日は日柄もよし、コレ、見なさい、上下で酒を持つて來ました。なんと立派な花聟であらうがな。

千里　エヽ、おきなさんせ。お前のやうな花聟はいらぬわいな。こちや父さんに願うて、聟に取りたい男がござんす。なう、小藤、さうぢやないか。

小藤　左樣でござりまする。あなたの聟さんは、差詰めあの助作どのを

千里　これはしたり、小藤とした事が、滅多な事を云やんないの。

たぬ　アヽ、よめた〳〵。今の小藤が詞ぢやァ、爰の内の助作めを、聟にしたい心だな。コレ、千里さん、そりやァお前、悪い思ひ附きだ。あの助作と此たぬ藏、どう一口に云へるものだ。マア、彼奴とわしと立ち竝んだ所が、彼方は色が白し、わしは黒し、彼方は鼻が高いし、わしは低いワ。彼方は目に色氣があつて、わしの目はソレ藪睨みだワ。その上、世間中の女が惚れるあの助作に、わしには誰も惚れぬワ。ソレ見なさい、これ程生れまさつたわしを否がると、お前、男冥利に盡きて罰があたるよ。

千里　こちや罰があたつてもようござんす。お前に思はるゝよりは、いつそ罰のあたる方がましかいなァ。

たぬ　そりやァお前、お情ない、そんな事は云はねえものだ。マア、わしが女にかゝつての鹽梅を、ちよつと見なさい〳〵。

ト千里にしなだれ寄る。小藤さゝへる。たぬ藏追ひかけ、捨ぜりふにて萬兵衞も交り、追ひ廻す。千里逃げて正面の障子の中へ駈けて入る。たぬ藏も追ひかけ入らうとする。よき時分より唄になり、障子を明け、嘉平次、白髮かづら、羽織衣裳、大小にて、莨盆を提げ、出てくる。千里これに附き出て來る。たぬ藏、捨ぜりふにて嘉平次へしなだれかゝり、顏を見て、愕りして

たぬ　ヤ、あなたは先生

嘉平　門弟のたぬ藏どの、立騷いで何をおしやるのぢや。

たぬ　アイヤ、私しは何サ……アノ、物でござります。オヽ、ソレ〳〵、今日は日柄もよし、先達てからお頼み申した、お娘御へ私しを、聟になさるゝやうにと、御覽なされませ、上下で參りました。それをあのお娘御や、小藤なぞが煽てまして、聟ぶりがよいから、祝つて胴に上げようと申しまする。それを彼方へ逃げ、此方へ逃げる拍子に

嘉平　身共へ轉けかゝつたとお云やるか。

たぬ　ハイ〳〵、左樣でござりまする。

千里　イヽエイナア、父さん、ありや皆嘘でござんすわいな。モウ、來る度々にわたしを捕へて

嘉平　ハテサテ、誰も聞かぬに問はず語り、控へてゐやれ。其方は幼少より母に別れ、わしが手しほで育つた娘、身も浪人して二君に仕へず、一生獨り身。娘に聟を取ればとて、この嘉平次が心に叶はぬ男は持たさぬ。たとへ娘が得心でも、又は望みの者あるとも、親が眼鏡で緣附ける。弟子衆もその通り、娘も左樣心得て、必ずこの上男の側へ打交り、みだらな事は愼しみませうぞ。

トたぬ藏へ當てゝ云ふ。たぬ藏、ウヂ〱して

たぬ　成る程、左樣でござりまする。

千里　エヽ、お前こそさしつけに

嘉平　ハテ、また問はず語りか。

たぬ　左樣でござりまする。親御樣のお詞を、きつとお用ひなされませ。へゝゝゝゝ、先生、これはお慰みになされませ。（ト酒樽を持ち出す）。

嘉平　これは忝ない。お志しの御酒、晩から寢酒に下されうかえ。

ト思ひ入れ。唄になり、向うより助作、鋤に草刈り鎌を結ひつけ、これをかたげ、咬へ煙管にて出て來り、門口へ來り

助作　ヤレ〳〵、草臥れた〳〵。小藤どのや、今帰つたよ。（ト内へ入り）これは旦那様、これにお出でなされまするか。お指図ゆゑに山際の荒れ畑を、ようなつて帰りましたが、モシ、お聞きなされませ。なんでも、爰らで、よい拾ひ首はあるまいかと、仕事の片手間に尋ねましたが、皆拾つて行つてしまひました。アヽ、どこの人も、轉んでも只は起きませぬて。

たぬ　イヤモウ、誰もよくは知つてゐるの。昨日から何でも拾はうと、ウソ〳〵歩いて、役にも立たないコレ（ト守り袋を出し）裂れは古いが昔物、こんな守り袋を、小栗栖で拾ひました。モシ、先生縫ひ直して、莨入れにでもなりませうかな。

ト見せる。嘉平次取つて

嘉平　裂れは至つて古けれど、赤地の錦、桐唐草。中に守りの様子もなく、この守り袋ばかりが

たぬ　ハイ、落ちて居りました。

助作　ほんに、拾ひ物といへば、私しもその小栗栖の藪際で

千里　其方も何ぞ拾うてかいな。

助作　ハイ、これも同じく錦の袋、守りかお札か存じませぬが、同じやうな品を拾ひました。

ト綸旨を差出す。嘉平次取つて、思ひ入れあり

嘉平　アノ、この品が、小栗栖の藪の小蔭に
助作　ハイ、落ちてありました。
嘉平　こりやコレ正に光秀へ、下し賜はるこりや御綸旨。
助作　エ、アノ、それが
嘉平　ハテサテ其方は、結構な品を拾うて参つた。
助作　結構かは存じませぬが、錢金にもならねえ代物。併し何ぞの呪ひに、持つて居つたらなりませう。マア私しへ（トさしよろ）。
嘉平　ソレ
ト差出す。助作取つて、兩人キツと顏見合せ
ハテ、よい品を
ト助作懐中する。嘉平次思ひ入れあつて
拾つて參つた。
助作　へイ、守りに致して、掛けて居りませう。（ト思ひ入れ）。
たぬ　此たぬ藏が拾つた守りは、裂ればポロ〳〵切れかゝる。何の役にも立たない代物。小藤坊、てめ

え莨入れにでもして持つがよいぞえ。

小藤　イエ〳〵、お前の拾うたあの守り、わたしや欲しうはござんせぬわいな。

たぬ　ハテ、てめえも愛想づかしの御挨拶だ。

嘉平　中に書き物見えねども、拾うた場所は小栗栖の、あの藪陰とあるからは、こりや嘉平次が預かつて置かう。

ト守り袋を懐中する。この時、入り相の鐘鳴る。

アヽ、もう入り相か。小藤、灯の支度せいよ。

五郎　ハイ〳〵、畏りました。

萬兵　ほんに先生、稽古場を方附けませうかな。

嘉平　さうしてくりやれ。

たぬ　わしも手傳うてやらうか。

嘉平　助作には用事もあり、娘も殘つて

助千　畏りました。

たぬ　ドリヤ、稽古場を方附けませうか。

ト唄になり、たぬ藏千里へこなしあつて、萬兵衞、小藤と共に奥へ入る。

助作　旦那樣、私しにはまだ御用がござりますかな。

嘉平　オヽ、其方に用事といふのは、アヽ、何をがな……オヽ、それ〳〵、今日はまだ庭の草木へ水を打たぬわい。コリヤ娘、其方はあの庭木へ水を打ちやれ。

千里　ハイ、畏りました。

嘉平　助作は庭の井戸より、水汲んでやりやれ。

助作　ヘイ、水を汲みまするのか。

嘉平　左樣々々。（ト合ひ方にて、庭下駄をはき、平舞臺へ下り）サヽ、助作、その井筒より水を汲んでやりやれ。サア娘、あの如露で水を打ちやれ。

助千　ハイ、畏りました。

ト助作、籠釣瓶を下ろし、井戸より水を汲み、手桶へあける。千里、如露を取つて水を入れ、庭の秋草へ水を打つ。嘉平次、手桶を持つて跡に附き、指圖する。よき時分より屋體の障子を明け、光秀窺ふ。

千里　コレ、助作、あれ見やいなう。この秋草の花壇の盛り、桔梗、苅萱、地楡、おみなへしとは女郎

助作　花、いとしらしい絲すゝき、斯うもつれ合うてゐたなれば、さぞ嬉しい事であらうなう。

助作　左樣でござりまする。いとしらしい絲すゝき、招く尾花に騙されて、小萩の白いにどのやうな、男郎花でも有頂天。併しあなたはお主樣、同じ花壇に押し合うても、紫苑ばかりの目に立てば、これぞ師の恩……紫苑は卽ち鬼の醜草。お主は鬼とも

嘉平　ヤ。

助作　鬼蓮は、お泉水でござりましたな。

嘉平　そりや知れた事ぢやわい。サヽ、もう一釣り汲み上げい。

助作　ヘイ〳〵、畏りました。

ト釣瓶を取つて、井筒の内へ下げんとして、二階より窺ふ光秀の顔、井戸の内へ映るを見て思ひ入れ。

ヤ、時は黄昏、井の内に、慥かにそれと解らねど、映るは正しく

ト二階を見上げる。嘉平次心附き、ツカ〳〵と寄つて助作を引退ける立廻り。二階の障子を閉す。

あの二階は

ト寄るを、きつととめる。この時、暮れ六ツの鐘、雨の音する。

嘉平　アコレ、もう水打ちには及ぶまい。

助作　エ。

嘉平　今聞えるは暮れ六ツの、鐘もろともに秋雨の、このしめりでは庭前へ、水打つ事は、無用々々。

助作　でも、只今の人影を

ト立ち寄るを留めて

嘉平　コレ、人顔とても誰そや誰れ

千里　その黄昏のこの庭先。

助作　井筒の内に誰そや誰れ

嘉平　黄昏どきぢや。

助作　エ。

嘉平　灯をともしやれ。

助作　ヘイ。

ト唄になり、助作思ひ入れ、千里先に正面の屋體へ入る。嘉平次殘り、あたりへ思ひ入れあつて、屋體より下りし綱を曳く。鳴子から〱と鳴る。これを合圖に光秀、百日鬘、鎧下の形にて、障子をよき程に明け、顏を出し

光秀　合圖に吊り置く鳴子の綱、曳き召されたは他聞の遠慮

嘉平　遠ざけたれば氣遣ひござらぬ。暗夜に等しきその一間、暫らく憂さを

光秀　心遣ひ、過分に存ずる……元綱どのにはその以前、齋藤家に仕へし頃、朋友のよしみを忘れず、この光秀を隱まひ給ふ志し、武智が身にとり滿足至極。

嘉平　ナニこれしきにそのお詞、嘉平次未だ、齋藤道三の臣下たりし時、其許の姉呉竹は、元綱が妻となり、程なく病死。我れも齋藤滅亡の前、主君の惡事を諫めしかど、聞入れなきより身退き、二君に仕へず遠州に住居せしが、近頃當所小栗栖に、傳手を求めて隱れ住む。心得ざるは光秀には山崎表の一戰こそ、天下分目と聞きつるに、未だ勝利も決せざるうち、夜陰に及びこの庵へ、尋ね來つて暫くも、忍びおはする貴殿の胸中、元綱何とも合點が參らぬ。

光秀　その疑ひ至極なり。この程光秀の腹心、內藏之助、我れに密かに申せし諫言、未だ戰ひ半ならざるうち、敵に三つの利あり、味方に三つの失ありて、始終の勝こそ專要なれ、早くもこの場を退きて、丹州龜山に籠城あり、小田の臣たる柴田を招き、心を一致なすなれば、彼れ久吉をこばむの將たり、御身に心を寄するは必定と、勸めに任せ腹心の武士、安田、蓑浦、水尾の輩を武智と名乘らせ、山崎に殘し置き、光秀一騎夜に紛れ、丹州へ急ぐの路次、案に違はず味方の敗北。

事の様子を糺さん爲、暫らく爰に足をとめしも、姉呉竹に縁ある其許、昔忘れぬこの大恩、過分に存ずる、松下どの。

嘉平　その計略面白し。柴田を味方に招くなら、久吉如きは取るに足らず。御身利あつて眞柴を討つとも、將軍宣下のその砌り、都に於て賜はりし、綸旨は所持しておゐやるか。

光秀　その儀は氣遣ひし給ふな。肌身離さぬ武將の綸旨。まつた關白光基と心を合せ、日月の御旗を預かり奉れば、今にも久吉寄せ來るとも、この御旗を破却といはゞ、近寄る事は叶ふまい。即ち日月の御旗は

ト懷中より旗と綸旨を出し、さつと開く。嘉平次近寄り

嘉平　アノ、これが日月の御旗とや。

ト旗の裾を捕へ、キツと思ひ入れ。この時門口の藪の中に、雀の聲夥しく、雀一度に飛びまとふ。

兩人思ひ入れあつて

光秀　ハテ、心得ぬ、群がる小鳥。

嘉平　夜陰に及び飛びかふ有り樣。

光秀　野に伏勢ある時は、歸雁つらを亂すといふ。

嘉平　今はそれにはあらねども、もしや敵より入り込む間者が（ト表へ目をつけ、思ひ入れあつて）暫らく
二階で、事の實否を

光秀　詞に隨ひ、二階へ參つて、事の樣子を

ト綸旨と旗を懷中して、障子を閉す。この時、庭の方より萬兵衞、短檠を片手に持ち、出て來り、窺ひ居て

萬兵　ヤ、今の鳴子は、座敷の內へ

嘉平　ヤ。

萬兵　正しく落人、あの二階に

ト手燭を置き、二階へ駈け行かうとする。嘉平次立廻りあつて、井筒へ見事に打ち込む。この時、時の鐘、凄き合ひ方になり、雨の音する。門口の藪を押し分け、正兵衞（幸四郎早替り）以前の甲冑の形へ蓑を引つかけ、眉間に古疵あり、脇腹に竹槍の切尖殘り、手負ひし體にて、十次郎を小脇に抱へ、窺ひながら出て、門口の標札、朧に見えるゆゑ、透し見るこなしあつて、よろぼひながら門口に取りつき

正兵　この家の內へ、案內頼み存ずる。

トこれにて嘉平次思ひ入れあつて、手燭を照らし、庭下駄を穿き、門口へ来り

嘉平　御案内とは、其許かな。

正兵　左様でござる。小栗栖の藪つゞき、窺ひ参ればこの構へ。庵の主人は存ぜねど、幼きを連れ、病の悩み、殊に夜に入り甚だ難儀。一夜を明かさせたまはらば、この上や候はん。お宿の御芳志、頼み存ずる。

嘉平　すりや、幼きを連れ、急病に難儀とな。して、其許は旅人でござるか。

正兵　アイヤ、落人でござる。

嘉平　なんと。

正兵　山崎の一戦に勝利を失ひ、深手の落武者、卑怯未練も子ゆゑの闇、焼野の雉子、夜の鶴、子に引かされて惜しからぬ、命のばはりやう〳〵と、藪押し分けて爰まで参つた。是非に一夜を、明かさせては下さるまいか。

嘉平　窮鳥懐に入る時は、猟師もこれをとらずとやら。親子連れたる夜の鶴、諸軍の網にかゝらぬうち、サヽ、これへ。

正兵　御承知あつて先づは満足。然らば御免下されい。

トよろぼひながら門口へ入る。嘉平次、始終目を附け

嘉平　御所勞と仰せあれど、まさに深手に惱むの顏色。さては御身は

正兵　お尋ね忝し。いかにも痛手に難儀いたす。

嘉平　さてこそ推察いたしてござる。して、其許は山崎にて

正兵　從ふ諸軍も散り〴〵に、そら定めなき落人の、木の下雨にそほ濡れて、賴む木蔭と存ずるゆゑ、秦の始皇の御狩りの松、大敵しのぐは最屈竟、松の宿りと松下どのを、見かけて貴殿を賴み存ずる。

嘉平　拙者を松下嘉平次と、御存じありし其許樣、殊に男子を連れられし、して御家名は

正兵　この落人が家名は卽ち

トあたりを見廻し、桔梗を活けし花筒を取つて、嘉平次が前へ差出す。嘉平次思ひ入れあつて

嘉平　筒に入れたる秋草を、御家名なりとお云やる其許。桔梗は卽ち（ト思ひ入れあり）源氏の正統、土岐の末、その旗じるしの、水色に桔梗の紋は

正兵　武智でござる。

嘉平　いよ〳〵貴殿が

正兵　光秀でござる。

十次　アヽコレ、其方は水尾

ト云はうとするを引附け

正兵　コリヤ、身共は武智、汝が父の光秀なるぞ。(トきつと思ひ入れ)。

嘉平　して、同道の御男子は

正兵　これぞ悴の十次郎、まだ初陣の光義が、運拙くて親子とも

嘉平　敗軍ありし、いよ〱御身が

正兵　武智光秀。

嘉平　イヽヤそれこそ僞はる計略。この元綱を疑ひ、久吉方より入り込む間者、武智と名乘るは僞はりならん。

正兵　イヽヤ、證據は春永の、短慮に蒙むる面の疵。

ト嘉平次、光秀が面の疵をキツと見る。この時、下の方の障子を明け、助作窺ひゐる。

嘉平　誠や面のその古疵。

正兵　便るこの家は松下どの、武智が爲の石城同然。

助作　その武智こそ山崎を、落ちゆく大將、生捕つて

　　ト駈けよるを、嘉平次引とめる。立廻り。この時向うにて

呼び　お使者。

　　ト呼ぶ。三人向うをキツと見て

嘉平　ハテ心得ぬ。松下が、かゝる閑居へ、使者の入來は

助作　殊に四方は眞柴の大軍、勝ち誇つたる陣中より

正兵　光秀ありと疾く知つて

助作　詮議なさんず俄のお使者か。殊更一間に隱まふ光秀、又も忍んで入りくる武智、いづれ一人は

正兵　ヤ、なんと。

　　ト助作、手燭を取つて

助作　覺えござるか。

　　ト前幕に拾ひし綸旨を見せる。正兵衞、キツと見て

正兵　それこそ所持せし（ト立ちよる）。

助作　その面體を

ト手燭をさしつける。嘉平次、扇にて打ち落し

嘉平　無禮千萬。(トきつと云ふ)。

助作　ヘイ。(ト綸旨を懐中する)。

正兵　元綱どの

嘉平　ゆるりと養生。

助作　ウム

ト寄るを引退け

嘉平　御案内仕れ。

ト唄になり、正兵衛苦痛の思ひ入れにて、十次郎を連れ、助作附いて障子の内へ入る。嘉平次殘る。
又向うにて

呼び　お使者。

ト呼ぶ。花やかなる唄になり、向うより奴二人、五三の桐の箱提灯をともし、先に立ち、跡よりお八重、裲襠衣裳、駕籠に乗り、正清、上下衣裳、股立ちにて、丁子車の紋附いたる赤地の袋をかけし誂への薙刀、柄の方へも袋をかけしを持つて出る。次に上下の侍ひ二人、八つ丁字の油單をかけし挾み

箱を擔ぎ、その外家來大勢附いて出て來り、直に舞臺へ來る。正淸、ツカ〳〵と門口へ來て

正淸 この家の内へ、御案内賴み存ずる。

嘉平 コリヤ娘、表に案内がある。これへ來て取次ぎやれ。

千里 畏りました。

ト合ひ方になり、千里奥より出て來り

父さん、いづれからのお出でゝござりまする。

嘉平 ハテ、いづれぢややら、それで取次ぎ致せと申すのぢや。

千里 アイ〳〵。（ト門口へ行き）ハイ、どなた樣でござりまするえ。

正淸 イヤ、拙者は大領久吉が郎黨。御標札の表にては、この家は松下嘉平次元綱どのと申す、御浪人のお宅。主人久吉の奥方、面談いたす仔細ござつて、わざ〳〵罷り越してござると、取次いで下されい。

千里 すりや久吉樣の奥方樣が（ト思ひ入れあつて）畏りました。暫くお控へなされませ。……モシ〳〵父さん。久吉樣とやらの奥樣が、お出でなされましたといな。

嘉平 ナニ、久吉の奥方とな。（ト思ひ入れあり）いま山崎へ向ひし大將、眞柴大領久吉どのが、この浪

千里　人の嘉平次に、別して用事は無し筈ぢや。門違ひであらう。よいやうに申して、歸しやれ〳〵。

ハイ。（ト氣の毒なる體にて門口へ來り）親嘉平次へ申し達しましたるところ、御大家の久吉樣の奧樣、どうしてマア輕々しう浪人風情へ。そりや大方門違ひでござりませうとの返答。この通りをアノ、奧方樣へ

正淸　お聞きあられましたか。

ト合ひ方になり、乘り物よりお八重出て

八重　尤もの返答……コレ妹、わしぢやわいの。コレ、姉の八重でござるわいの。

千里　ヤ、お前は姉さん。どうしてマア、思ひがけもなう、ようマア尋ねて來て下さんした。サア〳〵お入りなさんせいなア。（ト內へ入り）モシ〳〵、父さんえ、久吉樣の奧樣といふはナ、わしが姉さん、お八重さんでござんすわいなア。早う內へ入れ申して、お逢ひなさんせいなア。

嘉平　コリヤ〳〵、娘、そちや何を申す。身が姉娘の八重と申したは、八年以前、未だ遠州に罷りあるうち、不所存者にて親を見捨て、家出いたした。それより身共は勘當いたし、今以て音信不通しその姉めが歸つてうせやう筈がない。よし又うせても、これへは叶はぬ。脛踏み込まば、眞二つぢや。

ト門口に聞えるやうに云ふ。お八重、思ひ入れあつて

八重　その御立腹、尤も至極。御勘當ゆりぬこのお家へ、顔おし拭うて參りしは、夫久吉よりの使ひ。お逢ひなされて下さらば、父上樣、有り難う存じまする。

嘉平　イヽヤ、逢ふ事は罷りならぬ。勘當いたせし娘といひ、久吉どのよりこの嘉平次、使者を受くべき用事はない。とく／＼それより罷り歸れ。

千里　それぢやというて折角の、あの姉さんのお出でといひ

嘉平　ヤア、其方までが取り持つ顔色。逢うて用なき大家の使ひ。ドリヤ、奥の間へ

ト行かうとする。お八重、ツカ／＼と入つて、嘉平次の袖に縋り

八重　お待ち遊ばせ、元綱樣。只今あなたのそのお詞、無理とはさら／＼存じませぬが、お尋ね申す、仔細がござつて

嘉平　すりや、元綱に、尋ぬる仔細と申すのか。

八重　左樣でござりまする。

嘉平　（思ひ入れあつて）氣に入らぬ。

八重　エヽ、そりや何がお氣に入りませぬな。

嘉平　今の身分は知らねども、綺羅を飾つていかめしく、供人連れて浪人の、親が羽生へこれ見よがし。尾羽打枯らしあるゆゑに、身をひけらしに參つたか。

八重　サ、それは

嘉平　どうぢや〳〵

八重　（思ひ入れあつて）正清、持たせ參りし挾み箱、その内の物をこれへ殘し、家來は殘らず陣中へ

正清　心得ました。お供の面々、御陣中へ少しも早う。

家來　ハア、。

ト皆々向うへ入る。お八重、跡を見送り

八重　虎之助、挾み箱の品これへ

正清　ハア、。

ト合ひ方になり、挾み箱より立縞の前垂れを出す。お八重これをしめ、思ひ入れあつて

八重　左樣な仰せもあらうかと、持つて參りしこの前掛け。浪人住みの手不足を、見兼ねて手傳ふ水仕業。兄弟ぐらしの以前を思ひ、お手助けにもならうかと、わざ〳〵尋ねて參りました。コレ妹、其方はまだ、アノ、殿御を持たずかえ。

千里　アイ、父さんのお許しのないうちは、思ふ殿御があればとて

八重　そりやマア、おとなしい善い心掛け。それに引替へこの姉は、父さんのお目を掠め、お許しもなき夫さだめ、家來の胤を（ト思ひ入れあり）サ、それゆゑお内に居られもせず、家出してから、やすく〳〵と、產み落せしは立派な男子。

千里　さぞ成人でござんせうの。

八重　なんのいなア、連れ添ふ夫は仕官の願ひ、乳のみ子かゝへ奉公もと、可哀やその子は

千里　どうさんしたえ。

八重　この小栗栖へ二つの時、捨てた年より指折れば、手許に居たら慥かに……七つになるわいな。

千里　そりやマア、惜しい事をなさんしたなう。

　　ト此の時、嘉平次思ひ入れあつて

嘉平　して、その捨て子の、今に行くへは

八重　アイ、いづくの誰が拾ひしか、先は知れねど心得ぬ、昨夜暮れ過ぎ小栗栖にて、不思議に拾ひし書き物は、我が子の守りへ入れ置きし、年月時日のこの書き物。

　　ト前幕に拾ひし書き物を出す。嘉平次見て

嘉平　ドレ。（ト取上げ見て）「天正四年六月三日の誕生。尾州愛知郡中村の產、何某　倅榮之助」。（ト思ひ入れあつて）この書き物を拾ひし場所は

八重　ハイ、しかも昨夜の暗まぎれ、雨を催す宵月に、落ち行く騎馬武者遁さじと、蓑笠まぶかに土民と共、突き出す秋の篠すゝき。（ト正淸に持たせし薙刀の鞘袋を取り捨てる。中は切り折れし竹槍、これを取つて）手答へせしが切り折つて、闇はあやなし見失ひ、その時手に入るその書き物。夜明けてあたりを吟味なすに、小栗栖の藪蔭より、滴る血潮は一筋道、御浪人の一構へ、塀を見越しの松下氏、あなたのお內へ流れしは、もしや武智は……サ、討ち洩されの落武者を、かくまひあらんも計られずと、眞柴が妻のこの八重機、女ながらも久吉が名代。お隱しあらば父上樣、お渡しなされて下さりませ。

嘉平　イヽヤ存ぜぬ。嘉平次が胸中疑ふ女ばら、この家に叶はぬ。とつとゝ爰を

　　ト八重を引立てんとする。正淸駈け寄り

正淸　內緣あらうが今にては、久吉公の奧方へ、無禮の振舞ひ。虎之助正淸が、癇癪にさはりまするぞ。

嘉平　何を小癪な。小雀如きの靑二才、控へて居らう。

正淸　その靑二才は云はずとも、いづれも樣が御存じだワ。耳をつぶして控へれば、上へ立つ身と我儘

氣儘。エヽ、こなさんは

ト立ちかゝる。お八重とめて

八重 こりや何事ぢや。其方は臣下ならずや。願ひある身の自らが、供を致して參つた其方。コレ、何事も無念を堪へ、心を鎭めて、控へてゐやいなう。

正清 エヽ、上へ立つ身の是非がない。エヽ、小ぢれッたいわえ。

ト控へる。嘉平次、以前の守り袋を出し、書き物を一つにして

嘉平 いま嘉平次へ見せたる書き物。まつた最前手に入つた守り袋、此方にあつて益なき品なれば、とつとゝ持つて、早歸れ。

ト投げてやる。お八重取上げ、思ひ入れあつて

八重 こりや見覺えある守り袋、この書き物を入れ置きしは、赤地錦の桐唐草、藤吉どのが所持せし守り。どうしてこれが

嘉平 何をクド／＼解らぬ物云ひ。すりや、其方が夫といふは

八重 以前の御家來、此下藤吉。

嘉平 エヽ、眞柴大領久吉とは、猿冠者よな。身が貯への黄金六兩、横取りひろいだ手長猿、この山崎へ

出馬して、古主の門を乗打ちの、無禮緩怠、憎くき藤吉。殊に娘に懐妊させ、親に恥辱を與へし下郎め。コレ（ト手箱より年季證文を出し）彼奴が陣へ罷り越し、この證文にて恥面かゝせん。娘、身共が草履持て。

千里　モシ、急かずとお心鎭めた上

嘉平　エヽ、何うろたへて、履き物持たぬか。コリヤ、女子どもはいづれにある。履き物持たぬか。草履持て。

千里　サア、どうぞ（トもぢ〳〵する）。

嘉平　履き物持てと云ひ附けるに、何をウヂ〳〵。草履持たねば、このまゝ陣所へ

トさゝへろ三人を突きのけ〳〵、素足にて門口へ出る。この時向うにて

久吉　御主人暫く。眞柴大領久吉が、お草履持参仕りませう。

ト嘉平次キッと思ひ入れ。白囃子になり、向うより久吉、奴のこしらへ、一本差し、中ぬきの持ち草履を摑み、ツカ〳〵と出て來り、花道よき所にて嘉平次に行きあひ、兩人キッと思ひ入れ。本舞臺へ押し戻し、よろしく敬ふ。嘉平次、ヂロリと見やり

嘉平　そちはその以前家出せし、草履摑みの猿冠者よな。

久吉　ハツ、恐れ入つたるお目通り。まだ前ぶりの頃よりも、お膝許にお奉公。丁稚上がりの藤吉め、お主の御恩かへりみず、桶皮胴の鎧の價へ、黄金六兩受取つて、それより今日只今まで、便り音信仕らず、まだその上にお娘御、お許しもなき不義密通、懐姙いたさせ、安産の、男子もいつか身に迫り、身捨つる藪は無けれども、子捨つる藪の小栗栖へ、捨てし悴が守りのうち、入れ置く書き物、二つには、藪を滴る血汐の様子、かれこれ合點參らぬゆゑ、今一國をも領地なす、眞柴が直すこの草履。御主人様、旦那様、思し召しには違はんが、御容赦あつてそのお草履、ネイ〳〵、お召しなされて下さりませ。

嘉平　すりや、おのれまでが身が宅へ、面おし拭つて參つたは

久吉　逆賊武智光秀を、お渡しなされて下さりませ。

嘉平　なんと。

久吉　昨夜黄昏、小栗栖を、まだ幼年の落武者あり、正しく武智が一子なる、十次郎光義ならんと、土民の訴へ、かいくれに、見失うたるその跡に、心覺えのその書き物、落しあつたが詮議の手蔓。正にこの家へ親子をとも、隱まひ給ふと聞いたるゆゑ、所望いたさんその爲に、押して推參いたせし藤吉。旦那様、お覺えござらば親子とも、申し請けたう存じまする。

嘉平　下郎藤吉、何と申す。落人武智親子の者を

久吉　お隱まひ遊ばすとも、餘人は知らず私しは、手出しのならぬ古主のあなた。されども武智は遁さじと、この山崎は十重廿重、眞柴が大軍とり圍めば、遁れがたなき籠中の鳥。

八重　親子ねぐらの夜の鶴、その雛鳥は、もしや二人が

久吉　コレ、武智は主君を討つたる大罪、召捕る時は子孫は勿論、十類絶やす竹鋸。

八重　サ、その十類と十次郎、刑罪うけんは目のあたり。その子がもしや、わたしら二人が

嘉平　ヤ、なんと。

八重　その悲しみも他人同士。

久吉　よし内緣があるにもせよ、見遁しならぬ天下の科人。親が子を討ち、子が親を、討つも武門の（ト思ひ入れあつて）サ、一合取つても武士の端だワ。

嘉平　たとはゞ嘉平次、光秀を、隱まうたりとも大事ない。コレ（ト鋤の柄へ手形を貼り、庭先に突き立て）この證文の印形の、拔けざるうちは、いつかな〳〵、古主が隱まふお客人、よもや手出しは叶ふまい。

久吉　印形拔けぬそのうちは、この藤吉が旦那樣、御用ござらば何なりと、返り新參、初奉公。

八重　それに連れ添ふ女房のわたし、夫が手助け、水仕業。

正清　この正清はその間、水も洩らさぬ圍みの手配り。

嘉平　そりやどうなりと、勝手におしやれ。

正清　拙者にお構ひござらぬか。

嘉平　猿冠者づれが祿を喰む、三本足らぬうつけ武士、手放しやるとも何程の

正清　餘りといへば、その廣言。

ト立ちかゝるを、千里思ひ入れ。

久吉　コリヤ、何程無禮の御意あるとも、あの印形の拔けざるうちは、古主と崇むる松下氏。其方も身共が家來ならずや。無禮なきやう、控へてゐい。

正清　左樣ござらば正清は、手をこまねくは泣く子と地頭。

久吉　御意に任せて、お次へ立ちやれ。

正清　然らば拙者は

千里　わたしと一緒に

正清　久吉公。

久吉　慮外いたすな。

正清　ハッ。

ト唄になり、正清、挾み箱を引ッ抱へ、千里附いて奥へ入る。あと合ひ方。

久吉　して、御家來の私しは

嘉平　印形拔けぬそのうちは、世上へ見せしめ、其方が、年季手形の捨て札同然。それとも心を改めて奉公いたす所存なら、不忠の藤吉、不義した娘、わいら二人に云ひつける、用事を首尾よく勤めるか。

久吉　そりや願うてもなき幸ひ、たとへいかなる御難題、仰せあるとも古主のお指圖。

八重　娘のわたしも父上の、仰せとあらばどのやうな

久吉　御無體仰せ下さるとも。首尾よく勤めたその上は、又拙者めも願ひの筋ござれば、成るたけ奉公仕らう。して又旦那のお心に、叶ふこの場の御用はな。

嘉平　用事といふは、アレあの如く、前の流れへ映りし瓢、手を濡らさずに嘉平次が、目通り間近く持參いたせ。

久吉　すりや千生りのあの瓢、水に映るを、旦那の御前へ

八重　して又わたしへ、相應な

嘉平　用事といふは外でもない、桐の梢の枝葉をおろせ。

八重　あの庭先の梧桐の

嘉平　桐の枝葉が茂るゆゑ、花壇に植ゑて色もよき、やがて盛りの蕾みの花、惜しや桔梗も枯れ〴〵に

八重　蕾みの儘に咲きもせで

久吉　日の目見せぬは梧桐の、茂る葉蔭にしをるゝ桔梗。

八重　桐は眞柴の旗じるし。

久吉　桔梗の紋は武智光秀。

八重　桐ゆゑ枯るゝ日蔭の桔梗。

嘉平　桐の葉落せ、水仕の女。

八重　茂れる桐を今こゝで

久吉　落さで置かばあの桔梗、開く時節は來るまい。

八重　でも、我が夫の旗じるし

久吉　ハテ、御機嫌を違へぬやう、下郎は指し物さしかざす。軒の瓢の生り下がり

嘉平　なり上がつたる下郎藤吉、手を濡らさずに目通りへ

八重　高い梢の桐の葉を

嘉平　落せと女。

八重　すりや、どうあつても

久吉　[illegible]心に任せて

ト このあたりより、たぬ藏、種ケ島を持ち、下の柿の木の上にて久吉を覗ふ。この時、空へ月出る。

八重　中[illegible]瓢。

久吉　[illegible]葉。

嘉平　[illegible]八、早く。

久吉　ヘイ。

ト誂への合ひ方に變り、久吉、井筒の門の釣瓶を見つける。お八重、前の流れへ映る鐵砲の火影を見附けし思ひ入れ。嘉平次、緣先に腰を掛け、莨のみゐる。

秋[illegible]し滿月の、照らす光りに井筒の釣瓶。

八重　流れへ映る怪しき火影。

久吉　軒の瓢も
　　　ト釣瓶を取つて前の流れへ映りし瓢の影を月あかりに透し見て、この水をソツと汲み上げる。お八重流れへ目をつけ
八重　慥かに窺ふ
　　　ト簪を手早く手裏劍に打つ。たぬ藏にあたり、飛び下りてお八重へかゝるを、立廻つて種ケ島を打ちおとし、たぬ藏を當てる。タヂ〳〵として倒れる。嘉平次、目を附ける。お八重、種ケ島を、桐の梢へ向けて火蓋を切る。筒音高く、煙硝火立つて、桐の枝仕掛けにて落ちる。この筒音を合圖と心得、遠寄せの頭を打込む。これにて二階の障子を細めに明け、光秀窺ふ。下家障子を明け、正兵衞窺ひゐる。お八重素早く桐の葉を取り上げ、久吉釣瓶を持つて、兩人嘉平次の前へ持ちゆく。嘉平次思ひ入れあつて
嘉平　二人に用事をいひつくる、折も折とて聞ゆる貝鐘。
久吉　あの遠巻きはこのお家を、憚り多くも久吉が、下知を守つて圍みの手配り。
嘉平　ハテ、仰々しき其方が軍勢、取るにも足らぬ
　　　トにつこりと笑ふ。お八重思ひ入れあつて
八重　咲きし桔梗を蔭にして、日の目を見せぬは桐の科、その茂りたる梧桐の、枝葉は卽ち小筒を以て

久吉　流れへ映る千生りの、瓢は即ちまッこの通り。手を濡らさずに旦那の御前へ。
嘉平　流石頓智の此下藤吉、水へ映して汲み取る瓢。
久吉　瓢ばかりか、六十餘州。やがて下郎が手の中に、握りつめたる持ち草履。
八重　逆賊武智は汲み上げし、その水色に桔梗の旗、瓢をともに釣りの內。
久吉　映る月影、猿冠者が、及ばぬ願ひも猿猴の、月日の旗は正しく光秀

ト奥を目がけて行かうとする。嘉平次キッと留めて

嘉平　許しなきうち古主の奥の間、蹫踏み込まばアレあの證文、あの高札の掟が立つまい。
久吉　どうござつても、手形を枷に
嘉平　たて置くうちは身が家來。
久吉　盛切り米の二合半、その下樣も時至らば、唐、高麗の果までも
八重　見ぬ唐土の鳥もがな
嘉平　桐の葉落せ秋の夜の
久吉　冴えゆく月に雲覆ひ
嘉平　空も時雨の十三日。

久吉 今宵ぞ中の三日の月。

八重 三日天下と世の人の

ト下家の正兵衞思ひ入れあつて

正兵 その嘲りも誰ゆゑぞ。

ト無念の思ひ入れ。お八重、こなしあつて

八重 ヤ、さういふ聲は

ト立上がらんとする。正兵衞、手早く竹槍の切尖をお八重へ打ちつける。お八重、取上げ見て

切り折つたる竹槍の（トありあふ竹槍に引合せ見て）しつくり合うたは、さてはこの家に

ト駈け寄らんとする。嘉平次、鋤に貼りたる手形をめくり、キツととめる。お八重、最前の臍の緒の

書き物を落す。久吉手早く取つて、お八重に差附け

久吉 コリヤ待て女房。眼前に光秀あつても、臍の緒のこの書き物は、藤吉が手跡に相違なければ、これあるうちは、義理ある武智。

嘉平 この書き物は嘉平次が、小者藤吉を抱へし手形、これあるうちは手出しはなるまい。サ、そこを存じて今日只今、眼鏡に叶ひし上からは

久吉　反故になさるゝ御所存か。
嘉平　小事にかゝはる松下が、掟を守らば大義たる、天下の掟が立つまいと、存じついたるこの手形。
久吉　拙者も悴の縁により、義理を思はゞいつまでも、天下の政事立たぬと存じ
嘉平　この證文も
久吉　書き物も
兩人　互ひに反故を
ト兩方一度に引裂き
嘉平　三世の緣も
久吉　悴が縁も
八重　ちぎれ〳〵になる上は
久吉　圍むに及ばぬこの小家、固めを引かす、味方へ知らせは
トあたりを見廻し、最前たぬ藏が落せし早合を見附け、火入れへくべる。煙硝火立つ。向うにて遠寄せ打ちやめる。嘉平次思ひ入れあつて
嘉平　早合の口藥にて、圍みを開かせ

久吉　これまで拙者の不奉公、今日只今お免しあつて、入れ置く一札
嘉平　印形抜けば、主従ならぬ
八重　今ぞ改め眞柴大領
久吉　この久吉に
嘉平　野心ござらぬ御大將、上座は恐れ、ハヽツ、イザ先づあれへ。

ト久吉を上座へ直し、嘉平次、下座へ下りる。

久吉　松下嘉平次、尋ぬる一條。
嘉平　奥の一間で
八重　定めしわたしも
嘉平　矢張り勘當。
八重　そりや又、何ゆゑ
嘉平　浪人者の身が娘、いま大國の主たる
八重　久吉公に連れ添へば
嘉平　娘、其方が爲になるまい。

八重　ぢやというて
ト立ちよらんとして、前なる釣瓶の水を見つけ、思ひ入れあつて
似寄りの面、二つまで
久吉　ドレ。
ト見ようとする。嘉平次手早く釣瓶を取つて庭先へ打ちつける。この時、二階も下家も障子をしやんと閉す。
嘉平　覆水、盆に
八重　エ。
嘉平　返らぬ事を。
久吉　然らば嘉平次
嘉平　久吉公。
八重　モシ
ト嘉平次へ縋るを突きのけ
嘉平　入らせられませう。

ト唄になり、久吉先に嘉平次附いて、障子の内へ入る。お八重殘る。合ひ方になり

八重 いま大國の主たる、久吉公に連れ添ひしが、浪人者の娘といはゞ、この身の恥とお察しあり、わざとわたしを他人向き。それにつけてもこの守り、この家の内にあるからは、どうでも捨てたる我が子は正しく

ト思ひ入れ。たぬ藏、よき時分より心附き、窺ひゐて

たぬ おれが拾つた守りを見て、捨てた我が子といふ奥樣。どうやら何ぞになりさうな。マア、その守りを

ト取りにかゝる。立廻り。奥より助作、上下、大小に改め、ツカ〳〵と走り出て、たぬ藏の手を捻ぢ上げる。

八重 ヤア、其方は行長。

助作 八重機樣。

たぬ うぬは助作、その形は

助作 默らう、匹夫め。慮外ひろがば、ぶち放すぞ。（トきつと云ひ）ハツ、先達て主君の仰せにより、斯く申す小西彌十郎行長、とくより入り込み、下人となつて窺ふところ、正しく武智はこの家に

忍び

八重　隠まひ給ふ父上の胸中、何とも以て

助作　合點のゆかぬは、昨夜暮れ過ぎ、小栗栖の藪陰にて、不思議に手に入るこの綸旨、落し置きしは正しく光秀。（ト綸旨を出す）。

八重　御綸旨持參の落武者こそ、疑ひもなき、それぞいよ〳〵

助作　忍ぶは光秀、さりながら、疾くよりこの家に窺ふ光秀。又も最前來りし光秀。彼奴は怪しき武智が影武者。

八重　さはさりながら父さんの、心解けざるそのうちは

助作　そりや御親子の内證事、いはゞ天下の仇なる光秀。

八重　親を捨てゝも

助作　夫に附くが

八重　女子の掟。

助作　父御の胸中

八重　善か惡かを

助作　御詮議あらば

八重　守りの出どころ。

助作　御油断あるな。

八重　小西行長

助作　然らば奥様。

たぬ　綸旨とやらを

　トかゝるを引附け

助作　八重機様

八重　父御へお詫び

たぬ　ウム。

　ト立上がるを、助作キツと立廻つて、たぬ藏を見事に門口へ投げ出し、簀戸をシヤンと締めて思ひ入れ。お八重、こなしあつて

八重　ドリヤ、申し上げうか。

　ト唄になり、お八重奥へ入る。助作殘る。

助作　合點のゆかぬ嘉平次の胸中。落人武智を隱まふ樣子。事荒立つて詮議なさば、久吉公へ古主の松
下、小西が爲にも矢張り御主人。ハテ、何とやら

ト思ひ入れ。合ひ方になり、千里出て來り、助作を見て

千里　ヤ、其方は助作、思ひがけない立派なその形。さては其方は

助作　久吉公の下知を受け、お內へ參つて奉公なすも、主人眞柴がその以前、不奉公せしその名代。藤
吉ほどにはあらずとも、其方參つて仕へ申せと、指圖に任せ入り込む某、誠は久吉腹心の武士、
小西彌十郎行長と申す者。

千里　すりや、お前が彌十郎行長樣、御本名聞くからは、わたしが夫。父さんへお賴み申しても、恥か
しからぬ立派なお侍ひ。どうぞ願ひを叶へて

助作　イヽヤ、その儀はお免しあれ。

千里　でも、これまでにいろ〳〵と……サ、ありや皆わたしから願うた事、お前に科はござんせぬ。ど
うぞ聞きわけ、わたしが願ひを

助作　サ、叶へて上げたき者なれども、みだらがあれば小西行長、主人眞柴へ侍ひの

千里　道が立たぬと云はしやんすか。

助作　小西が武士道、立ちませぬ。（トきつと云ふ）。

千里　ハア丶。

ト泣き落す。門口のたぬ藏、聞き耳立て

たぬ　いよ〳〵この家に隠まふ光秀、それをそのまゝ捨て置くは、眞柴主從二ごころ、この由宅間信盛樣へ。さうだ。

トごん〳〵になり、一散に向うへ入る。助作キッとなり

助作　表に立ち聞く今の下郎め。主君の身の上、佞人たる信盛方への訴へは、彼奴は正しく宅間が間者

千里　久吉樣へ疑ひの、かゝるは必定、二つには、父さんまでが御身の難儀。今の男子を

ト身ごしらへする

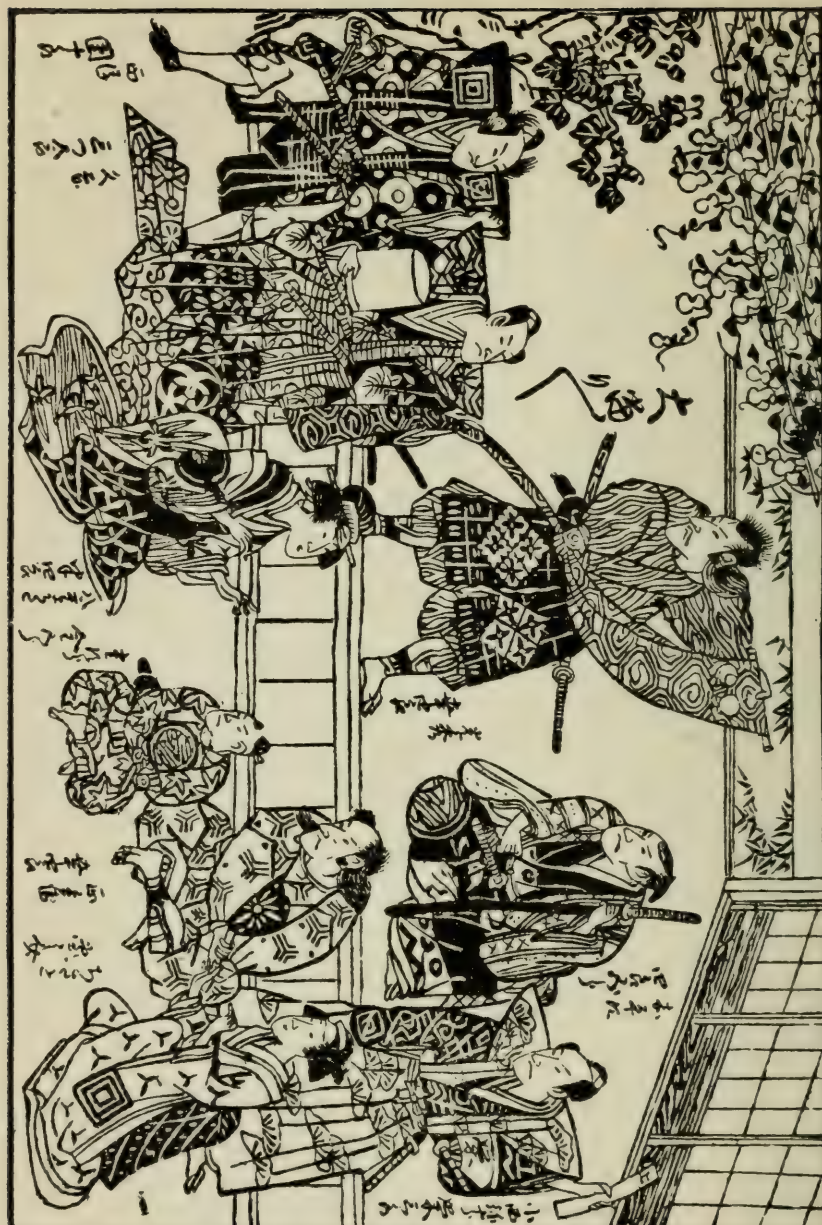
助作　然らば御身は、跡追ひかけて

千里　女ながらも松下の、娘の千里が手練の程

助作　覺えござるか、千里どの。

千里　父の教へは今この時、思ひ込んだる八重鎌も、在所女の手の内を、御覽の上の、女夫の約束。

ト草刈り鎌を取り出し、キッと思ひ入れ。



助作　それも父上へ願うた上。必ず御油断なさるゝな。

千里　行長様。

助作　ちつとも早う

千里　さうぢや。

ト早三重になり、鎌を携へ、裾引きあげ、一散に向うへ入る。この時、屋體の内より、正兵衛窺ひ居る。

助作　奥に忍びし落人こそ、この御綸旨を所持せしからは

正兵　我れこそ誠の武智光秀、昨日黄昏小栗栖にて、失ひたりしその綸旨、さては汝が手に入りしか。速かに返すまじきや。

ト屋體より出てくる。

助作　すりや、最前の落武者こそ、いよ〳〵武智光秀とな。小西が手に入るこの御綸旨、添へて汝が首取る、光秀。

正兵　小癪な一言。綸旨を渡せ。

助作　その首渡せ。

トこれより兩人、少し立廻り。正兵衞、手負ひの思ひ入れにて撞と坐す。助作、ツカ〳〵と寄つてキツとなる。このうち奥より、正淸、十次郎を引つ抱へ、走り出て

正淸　小西行長、これ見られよ。この小びッちよこそ武智が一子、虜になしたる上からは

助作　日月の旗も隱し持たん。速かに、渡したく〳〵。

正兵　イヽヤ、御旗の在所は存ぜぬ。さりながら、痛手に弱るこの光秀、天運盡きたる上からは、今ぞ最期の近づく知死期、上帶解けば、直にこの世の

ト疵口からげし上帶解くと、ガツクリとなる。この時、後へ嘉平次出かゝりゐて

嘉平　武士の義により松下が、一旦この家に隱まへども、主君を討ちし光秀どの、天命のがれぬ今日只今。

正兵　主を討つたる光秀が、この首進上仕るは、この家の主、松下どの。

助作　されども武智は山崎にて、似寄りの影武者附き添へば、面體定かならざるうちは

正兵　イヽヤ、誠の武智といふ、證據は所持するその御綸旨。

嘉平　殊に引添ふ悴光義、よもや我が親光秀の、面體知らぬといふ事あるまい。今際の別れ、暇乞ひ。すりや、胤ならねども大恩ある、父の武智でござらうがな。

十次　サア、それは
正兵　コレ、我が子ならねど我が子の光義。
嘉平　誠の祖父は我れなりと
正兵　コレ、今更云はゞその子の嘆き。運命盡きて小栗栖の
嘉平　土民の突き出す槍先にて
　　ト爰へ最前よりお八重出かゝりゐて、この時
八重　突きとめたりし落武者は、いつぞや因幡の陣中にて
正兵　首賭けしたる約束の、首は今こそ進上いたさう。
八重　イヽヤ、首賭けいたしたは、そりや陣中へ入り込む町人。
助作　ムウ、首取るは武智光秀、御身の父御に相違ないか。僞はらずとも有やうに、云ひ聞かされよ、光義どの。
十次　南無阿彌陀佛。
　　ト腹へ突き立てる。お八重見て
八重　アヽコレ、可哀や其方は、早まつた事しやつたなう。

ト駈けよるを、嘉平次引つける。この時奥にて

久吉 逆賊の武智が一子、生害慥かに見屆けた。

ト鼓入りの合ひ方になり、久吉、長上下に着替へ、出てくる。

嘉平 ヤ、あなたは大領久吉公。

八重 アレ見やしやんせ、可憐らしい、あの若武者の健氣な最期。流石はあなたの

久吉 ありや光秀が悴の光義。昨日暮れ過ぎ小栗栖にて、其方が拾ひし書き物は、最前引裂き捨てたれば、縁もよしみも敵味方。

嘉平 武智が小悴十次郎、光義なれど氏素性、胤腹かはる

正兵 血を分けねどもこの年月、主人が手しほに……サ、手しほにかけしは、斯くいふ光秀。

久吉 その光秀の小悴が、眼前健氣の死を遂げうが、天の誡め給ふのところ、さのみ久吉不便に存ぜぬ。斯くなるべきは存じの上。主を討つたる光秀が、胤には産れまさつたる、健氣の光義……親の因果が子に報ふとは、ハヽヽヽヽ、天の憎しみ、さもあらん。

ト嘆きを隠す。お八重思ひ入れあつて

八重 そりや胴慾な久吉どの。その子の親の光秀どの、お主を討つとも、なんであの子にお主の罪、天

の憎しみあるべきぞ。東西わかぬいとけなき子を、捨てたる親は呵責の鬼。主殺しの子にしたも夫婦の鬼がなせる業。

正兵　心は鬼の光秀も、苦痛の胸に殘りたる、六年以前の捨て子の場所、拾ひ取りしもこの小栗栖。後の親たる光秀が、最期も同じ小栗栖の、子捨つる藪の竹槍にて、この身を果し落命なすとも、何卒主人に今一度

久吉　ヤ、なんと。

正兵　はや首討てよ、眞柴久吉。

久吉　云ふにや及ぶ……エイ。

ト正兵衞が首を討ち落し、直に手に持ち

十次　エヽ、そりや誠の父上か。もしや忠義の侍ひか。もう目が見えぬ。

怨敵光秀、討ちとつたり。

ト探り寄る。お八重思ひ入れあつて

八重　アレ、目が見えぬとは、近づく知死期。

ト寄らうとするを、久吉とめて

久吉　いらざる他人の貰ひ泣き。今討つたるは其方を、誘ひ來りし誠の光秀。

嘉平　すりや、大領には、それなる首を

久吉　都へ送り、梟木に

八重　かゝりやつながるその光義、せめて今際に血を分けし、コレ、この親の面ざしを

十次　拜みたうても叶はぬ兩眼。コレ、この座にござある他人の御回向、どうぞ他人の御回向を

嘉平　最期を淸う

八重　臨終正念。

兩人　南無阿彌陀佛。

十次　南無阿彌陀佛。

トばつたり落入る。久吉、顔を外ける。愁ひのこなし、嘉平次、お八重思ひ入れあつて

嘉平　ヤヽ、最早孫めは

八重　不便や、あの子は

助作　流石は御主君、久吉公の、お胤にあらぬ武智が血筋。

正淸　逆賊ながら親子の最期

八重　今日は如何なる

ト寄るを制し

久吉　コリヤ、今云ふ通り武智が忰、介抱とても叶はぬぞ。死骸となつた無緣の忰、せめていたはり、小栗栖の、ほとりの御寺へ葬むりとらせよ。

八重　死骸となつては

久吉　苦しうない。

ト兩人思ひ入れ。お八重、ツカ／＼と寄つて十次郎が死骸に縋り

八重　エヽ、忝い

ト泣き伏す。この時向うバタ／＼にて、千里、たぬ藏立廻りながら出て來り、本舞臺へ來り、正淸走りよつて、たぬ藏を投げのける。助作、キッと引きつける。

助作　あなたは娘御

嘉平　千里でないか。

千里　大事を聞いて信盛へ、ある事ない事知らする間者。

久吉　助け置いては後日の災ひ。

助作　小西が刀に、おのれが引導

たぬ　ところで爰を

ト駈け出すを、助作、見事に切り倒す。

嘉平　天晴れ手の內。

久吉　然らばこのまゝ

嘉平　亡び失せたる光秀が

久吉　似せ首、慥かに受取つた。

嘉平　ナニ、似せ首と御意あるは

久吉　申さずとても水尾正兵衛、武智が爲の忠死の首級。

嘉平　でも、所持ある綸旨を證據に

助作　これぞ眞赤な似せ物サ。

嘉平　あの御綸旨は

久吉　似せ物ならであのまゝに、よもや下部の助作に、渡し置かるゝいはれやあらん。

八重　日月の御旗、御綸旨もろとも、誠の光秀が所持なさん。父上樣。

嘉平　サ、それは
久吉　妻が詞に松下氏、よもや相違はござるまい。
嘉平　察しの上は何をか包まん。その返答は……南無阿彌陀佛。
　　ト腹切らうとする。お八重、千里、駈けよつてとめる。この時、障子の内にて
光秀　ヤレ松下氏、早まりめさるな。誠の光秀これにあり。久吉へ見參。
　　ト鼓の合ひ方になり、光秀出て來り
助作　さてこそ武智
久吉　光秀よな。
光秀　珍らしや眞柴久吉。この家に忍び窺ふ光秀、いま松下の實義に感じ、日月の御旗、綸旨もろとも汝に渡し、討たれくれんず我が心底。急ぎ二品、イザ、受取られよ。
久吉　すりや、御旗に御綸旨もろとも、眞柴に故なく與へんとな。流石は光秀、神妙〳〵。然らば二品
光秀　受取りめされよ。
久吉　イザ
兩人　イザ〳〵〳〵

ト旗と綸旨を久吉へ渡し

光秀　二品渡せし上からは、光秀討てよ、眞柴久吉。

久吉　云ふにや及ぶ。さりながら、一旦隱まふ松下の、武道を立てゝ武智が一命

八重　殊に我が子を育てられ、義理ある御身といひながら

嘉平　見のがし歸さば天下の掟

久吉　それも忰が追福の、佛事終らば互ひの參會。

光秀　我れは丹州龜山に、籠城なして寄せ手を待たん。

正淸　その時武智光秀が、首引ッさぐるは加藤正淸。

助作　後詰めは小西行長が、分捕り高名現はさん。

久吉　子で子ならねど佛事の營み。

八重　御經にあらぬ鯨波の聲。

千里　陣所の篝り火、送りの門火。

嘉平　回向は互ひに、戰場々々。

光秀　眞柴久吉

久吉　武智光秀

八重　兩陣互ひに

嘉平　備へを亂さん。

ト皆々入れかはつて

皆々　さらば。

光秀　まづ今日はこれぎり。

トめでたく

打出し

繪本合法衢

えほんがつぽふがつじ

繪本合法衢

序幕

多賀家水門口の場
多賀明神鳥居先の場

役名――高橋瀨左衞門。奴、八內。三度飛脚、與五七。守山軍藏。草履取り、團平。駕籠舁、甚八。坂本權平。彥根嘉仲太。黑川兵內。篠原傳五。水茶屋、萬六。松田幸兵衞。妾、お須磨。乳人、柵。妾、お弓。關口多九郎。下部、會平。道具屋娘、お龜。道具屋、與兵衞。佐五右衞門、娘、お米。問屋人足、孫七。左枝大學之助。

本舞臺、三間の間、正面に誂らへの水門を取り附け、左右に石垣、その上に練り塀、見越しの松を見せたる道具。下の方に誂らへの用水桶、この上に手桶積重ねあり。幕の內より坂本權平、篠原傳五、忍びの形にて、提灯、拍子木を持ちたる夜廻りの者二人を絞殺してゐる。時の鐘、蛙の聲にて幕明く。

ト兩人こなしあつて

傳五　流石は下郎。もろい死にざま。

權平　上首尾々々々。萬事は諜し合せし通り。この水門口がかねての拔け道。
傳五　此奴らをおッかたづけりやァ、誰も氣のつく事ぢやァない。
一平　隨分ともに、あたりへ心を
傳五　合點だ。
　ト思ひ入れあつて、呼子を出して吹くと、パッタリと音して、正面の水門より、關口多九郎、浪人者の形、頰冠りにて、香爐の箱を咬へ、拔刀にて出て來る。兩人思ひ入れ。
兩人　關口どの。
多九　コリヤ。
　ト思ひ入れ。この內、向うより守山軍藏、忍び頭巾の形、龕燈を持ち出て來り、舞臺を見て
軍藏　關口多九郎。かねての一儀は
多九　氣遣ひあるな。まんまと手に入る靈龜の香爐。
軍藏　出來た〳〵。我れ〳〵心を盡すも、左枝大學之助樣の計らひ。このたび京都管領より、諸國の大名家々の、寶改めこれある由。當多賀家の家に、傳はるところの菅家の一軸、まつたこの香爐を捲きあけて置けば、多賀家の滅亡まのあたり。さある時は、一門たる大學之助どのを家督とな

すべき一つの手段。

權平　まつたその上に、先達て、多賀の館より伊勢兩宮へ、御寄附の金子五千兩、松田幸兵衛持參なす道すがら、雲津の宿にて奪ひとらせしも、大學どのゝ計らひ。それ故にこそ、松田幸兵衛はお咎めの身の上。

傳五　これとても、將軍の仰せをもどき、御寄附の金子間に合はぬは、越度の第一。

多九　成る程。何から何まで、殘る方なき御計略。それにつけても先達て、本家多賀の館へ有りつかれし笹山官兵衛、諸事は大學之助どのと內通ある由、拙者へも密の知らせ。この上はちつとも早くこの香爐を

傳五　まづ、今出川に持ち行き、笹山氏へ手渡しなし、矢張り官兵衛どのより、大學之助どのまで差出せば、我れ／＼が出精の屆くといふもの。また貴殿も、これを功に、大學樣へ目見え致さるゝがよからう。

多九　それこそ早速望むところ。命懸けのこの役目、仕負せた上からは、一かどに有り附かにやァならぬ。

權平　兎角、それこれ共に、大學樣の代となれば

軍藏　云はずと知れた活計歡樂。

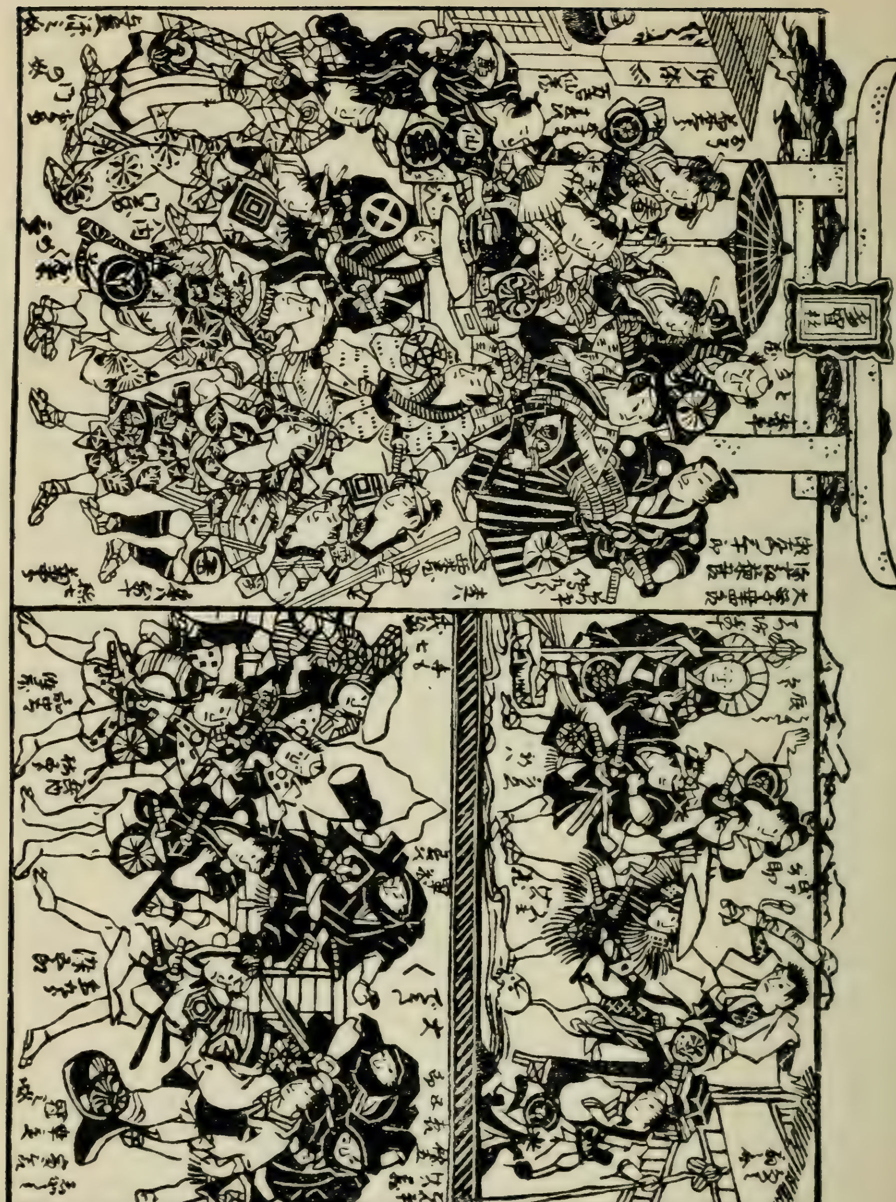
多九　何はともあれ、ちつとも早く、笹山氏へ持ち行き、密に密談。ソレ。（ト行かうとして、向うを見て）ヤヽ、アレ、あの灯影は。確かこれへ來ると見えるワ。

ト皆々さゝやき、小隱れする。矢張り時の鐘、蛙の聲にて、向うより、中間・箱提灯を持ち、乳人柵抱へ帶の形にて、出て來る。後より、菖蒲革の侍ひ附いて出で來り、直ぐに舞臺へ來て、以前の死骸を見て、驚き

中間　ヤヽ、モシ、人が殺されて居ります。御油斷なされますな。

しが　ヤヽ。（トこなしあつて、落ちてある提灯を取り上げ見る。）こりやコレ、御本家の合印すりや、この者も、御家來衆に相違はない。何はともあれ、合點の行かぬこのしだら。正しくこのあたりに曲者が

トあと云ひさして思ひ入れ。このうち權平、傳五、多九郎、軍藏、頰冠りにて顏を隱し、權平、傳五は中間が持ちたる提灯を切り落す。これにて柵、身構へする。供の者、「ワツ」と云つて逃げて入る。權平、傳五、これを追つかけて下座へ入る。このうち多九郎、軍藏、柵へ斬りかける。ちよつと立廻りあつて、多九郎隙を窺ひ、香爐を持つて、一散に向うへ走り入る。柵、心得ぬといふこなしにて、跡を追つ



かけ行かうとする。軍藏、柵を引きとめるはずみに、柵、タヂ〳〵と後へよつて、思はず用水桶へこけかゝる。このうち、軍藏花道へ來て、小柄を拔いて、手裏劍に打つ、途端に、重れたる手桶に立つて、柵が前へバツタリと落ちる。直ぐに小柄を拔き取り

後日の證據。

ト月影にかざし見る思ひ入れ。軍藏は一散に向うへ入る。この仕組よろしく、チョン〳〵と道具廻る。

本舞臺、三間の間、上の方、多賀大社と書いたる額を懸けたる石の大鳥居、石の玉垣、石燈籠、所々に取り附け、下の方に、葭簀張りの水茶屋。長床几二三脚直し、臺に一つ竈、茶釜、茶碗、棚、手桶、柄杓、その外一式取り揃へあり。こゝに、萬六、やつしなり、亭主の拵へにて、茶を汲んでゐる。大拍子、馬士唄にて道具とまる。

ト思ひ〳〵の旅人、その他の仕出し、大勢出て來て東西へ入る。ト四ツ手駕籠をかつぎ出てくる。この駕籠の中に、お龜、振り袖、旅の形にて乘つて居る。後より與兵衞、半合羽一本差し、町人旅の形にて三度笠を持ち、脚絆、草鞋の形にて出て來る。後より與五七、三度飛脚の形にて、股引、脚絆、草鞋の形にて、三度笠を持ち、莨箱をのみながら出て來る。皆々直に舞臺へ來て、駕籠舁捨ぜりふにて駕籠を下す。

萬六 サア〳〵、おかけなされませ。お茶をお上りがなされませ。

與五　サア〳〵、こゝは多賀の鳥居前でござります。せめてこれから鳥居の中までは、お歩きなさるがいゝ。

與兵　それ〳〵。そのやうに駕籠にばかり乘つてゐては、結句氣がつまつてなるものではない。ちつと歩いて見ると、また氣が晴れてよいぞや。

駕屋　サア〳〵、ちつとおひろひなされませ。

ト云ひながら草履を直す。駕籠の中よりお龜出る。

かめ　そんならこの鳥居が、多賀様かいなア。

與五　さやう〳〵。この鳥居から多賀様。こゝでゆつくり、茶でも上がつて、それからお參りなされませ。

與兵　それがよい〳〵。サア〳〵、お龜、こゝへおぢや、こゝへおぢや。

かめ　アイ〳〵。

ト與兵衞の側へ腰をかける。萬六、茶、煙草盆を運びながら

萬六　サア、お煙草盆を上げませう。時に、あなた方は今朝、どこからお出でなされました。

與兵　今朝醒ケ井を遲う立つて來ましたが、女子づれといふものは、どうしても埒の明かぬもの。御亭

主、もう何時でござうな。
萬六 ハイ、もう九つ半過ぎでもござりませうが、醒ケ井からなれば、遲くもござりませぬ。して、あなた方は
奥兵 イヤ、わしは京都から來ましたが、久しい願ひで、どうぞ伊勢へ參宮して、歸りは美濃路へかゝつて、谷汲の觀音へ參詣し、それから段々この近江路へかゝつて、八景をも見物して、京都へ歸る心でござります。
萬六 それはよいお樂しみでござります。したが、お女中づれのお道中は、とんとはかのゆかぬもので
かめ そんなら、こゝはもう、近江の内でござんすかいな。
萬六 近江の段ぢやァござりませぬ。
かめ モシ／＼、そんならちつと聞きましたい事がござんす。アノ、清水村といふ村がござんすかいな。
萬六 清水村かえ。ござりますとも／＼。その清水村といふは、この高宮の宿を出離れて、一里塚から半道ほど參りますと、四十九院村といふがござります。その村と千野村といふ間が、清水村と申しますが、何ぞお知り人でもござりますかえ。
奥兵 イヤ、別して近附きといふでもなけれど、その清水村で、庄屋役をも勤めらるゝさうなが、佐五

右衞門といふ人はござらぬかな。

萬六　成る程、佐五右衞門といふ人がござります。以前は大庄屋の佐五右衞門といつては、誰知らぬ者もござらなんだが、いつの頃よりか、段々に微祿いたされて、今では眞に水飲み百姓でござりますのサ。

ト是を聞いて、お龜、與兵衞顏見合せ、思ひ入れあつて

かめ　そんなら父さん

ト云はうとするを與兵衞消して

與兵　ハテ、人の行末といふものは、知れぬものぢやてな。

ト餘所事にいふ。この内、與五七煙管をしまひ

與五　サア〳〵、これからわしはお龜さんを連れて、そろ〳〵先きへ參ります。與兵衞さんは後からゆる〳〵とお出でなされませ。サア、お龜さん。お出でなさい。

ト手を取つて行かうとするを、お龜振り離して

かめ　いえ〳〵。わたしや、お前と一緒に行く事は否ぢやわいな。

與五　ハテ、わしが惡い事は申しませぬ。また、主とも離れて歩いてもよいぢやアないかえ。サア、お出

でなさい〳〵。

かめ　エヽモウ、わたしに構うて下さんすな。わたしや、與兵衛さんの側を離れて、行く事は否でござんすわいな。ほんに、アタすかん。云ふまいと思へども、晝も一日附け廻し、夜は泊ると毎夜毎夜、人の所へ

與五　エヘン〳〵。(ト咳にて紛らす)。

かめ　アタ否らしい、モウ〳〵、わたしには構うて下さんすな。

與五　モシ、お龜さん。わしもあの京都から頼まれて、こゝまで案内して來ましたが、今、與兵衛さんの聞いて居る前で、をかしな事を云ひなさるが、それぢやァわしも立ちませぬ。なんでもこの明りを立てにやァなりませぬ。………トサア、云へば物事に角が立つて悪うございます。さう云はずと、モシ、お龜さん、機嫌直して、サア、平に、お出でなさい〳〵。

ト無理に手を取り連れ行かうとする。與兵衛隔てゝ

與兵　コレサ〳〵、與五七どの。それほど否といふものを、先へやらいでもの事。今又聞けば、毎夜毎夜、泊り〳〵で、このお龜へ、誰やらが這ひ廻つて、主のある者を無理口説き(ト與五七へ思ひ入れあつて)サア、こなさんに限つて、そのやうな事はあるまいが、長い道中には、泊り〳〵で、得

てそのやうな事もあるぢやげな。それもこれも、わしが附いて居てさへ、そのやうな事ぢやもの。ましてて手離してやつたら、どのやうな事があらうも知れぬ。…………サア、一緒に行きませうわいの。

ト與五七これを聞き、腹の立ちたる思ひ入れ。

與九　エヽ、何の事だ、おかつしやいな。何だか味に嫌味、辛味をぶち込んで、人を上げたりおろしたり。いゝワ、もうそんな事を云ひ立てられちやア、此方も氣障だ。モウこれまで三度が顏で、雲助、馬士にも、びくとも云はせずに來たが、もう否だ。この上はおれが居ないでもよからうよ。これからは、また其方が手を下げて賴んでも、此方が否だ。なんのこつた。かざッぴいた。お龜さんの、お孃さんのと、奉れば附け上がり、毎晩々々、夜這ひに來たも凄まじい。サア、駕籠の手合ひも、おらアもう構はないから、存分駕籠賃を引ッたくつて歸るがよい。おれもこれで、さばさばとした。（ト駕籠舁兩人に强請れといふ思ひ入れ）。

駕甲　それ〳〵。わしらもお前の顏だけで、こゝまでも廉く來ましたが、そんならこゝから歸りませうよ。

駕乙　モシ、旦那、駄賃をお貰ひ申しませう。


尾上
松助
豊国画

與兵　成る程、駕籠の者が歸らうといふなら、駕籠は明けてもやらうが、京都から頼んで來た、三度の
與五七どのは、こゝから歸つても濟むか。
與五　雇はれて來ても、氣に喰はねえから歸るのだヮ。
與兵　賃錢は殘らず、取つて置いても
與五　此方が否だ。
駕乙　モシ、どうぞ駄賃を早く下さいましな。
與兵　(少し急いたるこなしにて)今、勘定してやるわえ。もう斯うなつては、三度も何もいらぬ。人も頼まぬ。(ト云ひながら、懷中より二朱銀を一分出して紙に包み)ソレ、醒ケ井から高宮まで、四里足らず。一貫二百といふ極めなれど、酒手なしに、ソレ、取つて置きやれ。
駕甲　(取つて見て)モシ、こりやァ、たつた一分かえ。棒組、呆れたものだな。
與兵　オヽサ。一貫二百の所へ、一分やるから、云ひ分はあるまいが。
駕甲　モシ、旦那、よくお積りなすつて御覽じまし、米の飯を食ふ野郎が二人、汗水になつて、四里足らずでも、二貫や一貫取つて商賣になるものぢやァござりませぬ。さうとぼけずとも、極めの通り、拂つておくれなされませ。

與兵　一貫二百と極めたによつて、酒手無しに一分やらうと云つたが、そしていくら寄越せと云ふのだ。

駕甲　知れた事サ。四貫八百だ。

與兵　どうしたと。

駕乙　何でも極めの通り、ひッたくれ〳〵。

與五　ハァ。こりやァ三度の與五七の肩を持つて、わいらは足弱づれを、附け込んで強請るのだな。

四人　強請るとは、何の事だ〳〵。

與兵　四里足らずの所を、四貫八百と極める馬鹿者があるものか。一貫二百を四貫八百だと云ふから、物ねだりだと云つたが、誤りか。

兩人　何が、どうしたと。

かめ　ハテ、與兵衛さん、ようござんすわいな。ちつとの事なら、よいやうにしてやらしやんせいな。

與兵　なにサ、うつちやつて置きやれ。癖になるワ。

與五　癖になるも凄まじい。今までおれが庇で、道中をして來たぢやァないか。いゝかと思つて

兩人　サア、駄賃を、拂つてもらはう〳〵。

與五　思ひ入れ、引ッたくれ〱。

與兵　引ッたくれとは何事だ。もう料簡がならねえわい。

兩人　こいつは面白い。相手になるべい。サア、どうともしろ〱。

ト與五七、駕籠舁、與兵衞へ體を摺りつける。與兵衞口惜しき思ひ入れ。これをお龜留めて居る。萬六も立ちかゝり、捨ぜりふにて留めて居る。このうち大拍子になり、向うより八内、旅奴の形、脚絆、草鞋、三尺帶の形にて出て來る。あとより孫七、脚絆、草鞋、小揚げの形にて、八内が割掛けの荷を肩へ掛け出で來り、この體を見て、八内より先きへ駈けぬけ、舞臺へ來て、與五七を取つて投げ、駕籠舁兩人を散々に打ちのめす。お龜嬉しき思ひ入れ。與兵衞も氣味よきこなし。

孫七　うぬら、この往還で旅人衆を、何だと思つて手籠めにするのだ。この上にも四の五とぬかすと、叩き殺すぞ。

兩人　アヽ、こりやァ間違ひだ〱。料簡さつしやい〱。

與五　アヽ、痛い〱。なんでおれを爰へ投げやァがつた。これぢやァ、濟まないぞ〱。

孫七　コレサ〱。誰がこなたを投げるものだ。つい今のどさくさの時に、分ける張合ひで、こなたがそこへ躓いたものよ。そして、見れば、貴樣はいつも、この街道で見る顏だが。オヽ、それ〱、

三度の衆だの。

八内　オヽ、それ〳〵。誰だと思つたら、三度の與五七だの。

與五　オヽ、お前は守山軍藏樣の御家來八内樣かえ。そして僅かな荷を持たせて、どこへござりました。

八内　イヤ、おれも旦那の急用で、今朝長濱まで行つたが、歸り道でこの男が、どうぞ僅かな酒手で、これを持つて行きませうといふから、おれも施し心で、こゝまで持たせて來たが、何だかをかしなこの場の樣子。コレ、小揚げどの、こなたも中へ入つた不祥だから、この男も立つやうに、いゝ、しらをつけてやるがよい。

孫七　畏りました。あなたもお待ち遠でござりませうが、ちつとの内

八内　イヤ〳〵、おれは爰まで來りやァ、べん〳〵とこの裁きを見ちやァ居られない。旦那も殿のお供で、この多賀へござると聞いたによつて、先へ行つて待つてゐにやァ失敗る道理だ。ドレ、荷物は此方へ寄越しやれ。駄賃はやつて置いたよ。ドレ、行くべいか。

ト獨り言を云つて鳥居の内へ入る。

與五　なんの事だ。あの八内にやァ、狐でも附いたやうだ。それはさうと、中へ入つた小揚げ、おぬしも懸り合ひだ。どう方を附けようと思ふのだ。

孫七　ハヽヽ。なんのわたしが懸り合ひな事があるものでござります。畢竟通りかゝつて見たところが、どうか旅の人の難儀な様子と見受けたによつて、駕籠の手合ひと、こなさんが一つになつて、とやかく云ふやうだから、マア、いはゞ仲裁人といふやうなものだが、わしも口を出した不祥だ、この儘でも置かれまい。時に旅のお方、これはマア、どういふ事の起りでござりますな。

與兵　イヤモウ、最前より段々深切ななされ方、忝う存じまする。元はといへば、今朝醒ヶ井より高宮まで、此方では一貫二百と極めた駕籠賃ゆゑ、それも爰で歸らうといふゆゑ、酒手ぐるみと一分やつたところが、四貫八百ぢやと、餘りな事を申しますゆゑ

孫七　ようござります。解りました。して、このお飛脚どのはえ。

與兵　サア、あの人も京都より、頼んでは參つたが、ちと譯あつて、此方も彼方も否になりまして、是非なく爰から別れる積りなれど、それを根に持つたやら、何のかのと云うて

孫七　サヽ、ようござります、それも様子が知れました。して、ぬしの方に勘定の懸り合ひはござりませぬか。

與兵　そりやモウ、京都にて、皆拂うて來ましてござります。

孫七　成る程。そんならこなさんの方に、何も云ひ分は無い筈だ。又、大金を取つて京都から、雇はれて

來にお飛脚が、先々まで送り屆けもせず、爰で別れるさへあるに、まして足弱み連れてござるを見込んで、今のやうに駕籠の者と一緒になつて、こづき廻しても事が濟むか。

與五　エヽ。（ト悔りする）。

孫七　又、駕籠の手合ひも、一貫二百と極めたところへ、一分やらつしやるのを、有り難いとは思はないで、なんだ、四貫八百寄越せと云つたのか。

兩人　サア（ト氣味の惡きこなし）。

孫七　いよ〳〵、四里足らずの道を四貫八百とれば、おれもこれから二人を連れて、問屋場へかゝつて仕樣がある。どうしても、四貫八百だと云ひ張るのか。

與五　（氣味わるきこなしあつて）なにサ〳〵、それも今、わしが云ひ聞かせてるところでござります。一貫二百の所へ一分下さればよい旦那サ。それだによつて、足許の明いうち、ナ、ソレ、矢ツ張り一分取つて、早く爰まで、ナ、ソレ、行くがよいぢやアないか。

トいろ〳〵こなし、駕籠舁思ひ入れあつて、以前の一分を取つて

駕甲　さやうサ。酒手なしの一分下さるとは、有り難うござります。

駕乙　ハイ〳〵。さやうなら、お貰ひ申しますでござります。

與兵　そんならそれで、云ひ分は無いのか。

兩人　どう致しまして。

萬六　サア、それでよし〳〵。イヤ、わしも見世の先で、ひよつとどんな事でも出來ようかと、大きに案じましたが、これで落つきました。何とこれから、わしも一緒に、あのいつもの田樂で、わつさりとやりませうか。

與五　それがよい〳〵。何だかをかしな心持ちになつて來た。サア〳〵、駕籠の手合ひもあゆばつしやい、あゆばつしやい。

駕甲　それ〳〵。こんな所は、早く切り上げるがよい。

駕乙　サア、ござりませ。

與五　サア、來やれ。

ト大拍子になり、萬六先に、與五七、駕籠舁兩人、孫七を見て、氣味わるさうに、おづ〳〵足早に鳥居の内へ入る。お龜、思ひ入れあつて

かめ　ほんに、どなたかは存じませぬが、段々有り難う存じまする。ほんに、モウ、どうなる事かと、今に問へが下らぬわいな。

與兵　さうであらう〳〵。よい所へぬしがござつて、思はずわしも心持ちを直しました。

孫七　なにサ、この樣な事はいくらもござります。時に、あなた方は、只今仰しやつたは、たしか京都の御出生のやうに承りましたが、さやうでござりますか。

與兵　いや〳〵、京生れではござらねども、當時は京都にて、道具商賣を、致す者でござりまする。

孫七　京の御出生でなく、當時は京都で、道具商賣をなされまするると聞いては、ちつとどうやら(ト思ひ入れあつて)して、あなた樣の御生國は、どちらでござりまする。

與兵　サア、生國は、矢張りこの近江でござりまするが、仔細あつて、幼少より、京都へ養子に參つたゆゑ、只今は京都に住居は致すが、生れ故鄕といふものは、懷かしいものでござりまするて。

孫七　(思ひ入れあつて)そのお話しにつきまして、近頃粗相な申しやうではござりまするが、もしや、あなたの御幼少の時のお名は、孫三郎樣とはおつしやりませぬか。

與兵　成る程、その孫三郎でござりまするが、どういふ事で、幼名を存じませいで何と致しませう。

孫七　私しめは、あなたの御惣領、瀨左衞門樣に御奉公致し、御恩になりました者でござりまするが、瀨左衞門樣には、いさゝかの事にて、勘氣を蒙むり、只今にては眞にその日稼ぎ。小揚げに雇はれ、又は駕籠にも雇はれ、やう〳〵煙を立て、命をつなぎまするう

ち、日頃兄御樣のお話しに、承りましたあなたの事。京都にて、道具商賣なされまする、與兵衞樣とばかり存じましたゆゑ、町所も知れたなら、早速お尋ね申さうと、思ひつめて居りました。念が屆いて、今日不思議にお目にかゝりました。この樣な有り難い事はござりませぬ。もうこの上は、あくまでも、私しがお供いたしませう程に、必ずお案じなされますな。

與兵　ハテサテ、それは不思議な事。して、今の住居は。

孫七　イヤモウ、お恥かしい住居で、お目にはかけられませぬが、これより少し離れて、清水村と申す所でござりまする。

かめ　（こなしあつて）そんならお前は、その清水村に、お出でなさんすお方かいなァ。

孫七　さやうでござりまする。……モシ、與兵衞樣、あの娘御樣はな。

與兵　サア、これも京都の道具屋へ、養女に來た、お龜といふ者ぢやわいの。

孫七　成る程、かねて御養子合せのお話でござりました。すりや、あなたがお龜樣と申しまするか。

ト孫七こなし。

かめ　ほんに、初めてお目にかゝりましたが、不思議に斯う落ち合ひまするも、どう知る人に逢ふも知れぬものぢやわいな。

孫七　さやうでござりまする。この樣にお目にかゝりました上からは、ちつと外に、私しも、お聞き申したい事がござりまするが。して、あなたは何れに御逗留なされて

ト問ひかける所へ、萬六走り出て來り

萬六　コレ〳〵、小揚げの人、ちつとばかりの荷だが、烏本まで持つてもらはねばならぬ。ちよつと來て下さい〳〵。（ト引ッ張る）。

孫七　モシ、わたしはちつと爰に、お話があつて

萬六　ハテ、ちよつくり持つて行つて下さいな。

孫七　ハテ、そりや困つたものだ。モシ、あなた方、お聞きの通りでござります。何を申すも、商賣づく。さやうなら、これでお別れ申しませう。

與兵　そんなら又、緣あらば逢ひませう、與五郎どのとやら

孫七　隨分ともに、御道中

萬六　ハテ、歩ばつしやいな。

ト大拍子になり、無理に孫七を引ッ張り、鳥居の內へ入る。與兵衞、お龜、捨ぜりふにて莨のんでゐる。誂への三味線入り大拍子になり、向うより左枝大學之助、深編笠、袴羽織、大小の形にて出てく

る。あとより妾お弓、同お須磨、着流しの形にて、日傘をさして出てくる。後より乳人柵、そのあとより守山軍藏、大小、袴ばかりの形。彦根嘉仲太、黒川兵內、袴、大小の形にて出て來る。あとより團平、奴、草履取りにて出てくる。中間一人、茶辨當を擔ぎ、陸尺二人、忍び駕籠をかつぎ出て來て、皆々花道にとまる。

軍藏　殿へ申し上げます。もはや多賀の鳥居間近く、參りましてござりまする。

しが　今日はいつにない殿樣のお思ひつき、あなた方にも、ちつとはお氣が晴れましてござりませうな。

ゆみ　思ひもよらぬ今日の仰せ。お須磨さまよりお文を下されましたが、ほんに眞とは思はなんだわいな。

須磨　それぢやというて、御性急な殿樣ゆゑ、お支度が間に合はいでは、わたしまで御不興うけるゆゑ、大抵心づかひな事ぢやなかつたわいな。

嘉仲　成る程、殿の日頃の御氣質に事かはり、女中がたをお連れなされて、忍びながらの御遊興とは、又一つの景物でござるわえ。

兵內　さやう。殊に、片身恨みのないやうにと、お二人ながら召し連れらるゝとは、いかにも和らかな御趣向でござるて。

團平　お忍びとは申しながら、往來の者ども、粗相があつては相濟みませぬ。下郎めお先きへ參つて、村役人どもへ申しつけませうか。
大學　イヤ〳〵、待て〳〵。それには及ばぬ。今日は妾を召し連れ、忍びの遊興、少しの粗相は見遁しても苦しうない。（トこの内に向うを見て）なんと、皆の者、あれを見い。處に見馴れぬ風俗。夜目遠目とは申しながら、甚だ美しく見ゆる。サア〳〵、あれへ參つて一服せうか。
軍藏　いかさま
一同　よろしうございませう。
大學　サア、參れ。
ト又鳴り物になり、皆々舞臺へ來て、床几へ腰をかける。與兵衞、お龜、うろ〳〵してゐる。團平立ちかゝり
團平　茶屋の亭主は居らぬか。亭主々々。
與兵　イヤ、只今、ツイそこへ參りましたさうにござりまする。
軍藏　床几を借りうけ、お毛氈を
兵内　畏りました。

ト毛氈を出し、床几へかけ、大學之助腰をかける。嘉仲太、銀の茶碗、茶臺にて、茶辨當より茶を汲み・大學之助へ持ちゆく。大學之助、お龜を見て

大學 軍藏。

軍藏 ハツ。

大學 なんと美なる者ではないか。

軍藏 さやうでござりまする。

トこのうち與兵衛、お龜 囁きあひ

與兵 サア〳〵、そろ〳〵とお參り申さうか。

かめ それがよいわいな。

ト行かうとする。大學之助思ひ入れあつて

大學 ソレ、留めい。

軍藏 ハツ。……コレ〳〵旅人、殿よりお聲がかゝつた。待て〳〵。

與兵 へゝイ。（ト氣味の惡きこなしにて、下の方にひかへる。）

大學 コリヤ〳〵、町人。何も氣遣ひな事ではない。見れば、爪はづれと申し、賤しからぬ姿ぢやが、

其方達は、供をも連れず、何國より參つた。

與兵　ヘイ〳〵。私しは京近在の者でござりまする。

大學　京都ぢやと申すか。道理こそ、あてやかなる女子と見た。して、わいら二人は、女夫づれと申すやうな事か。又は兄妹づれと申すやうな事か。

與兵　ハイ。(トつかへ、いろ〳〵こなしあつて)兄妹でござりまする。

大學　ナニ、兄妹と申すか。……それは重疊。軍藏、ちよつとまゐれ。

軍藏　ハツ。(ト大學之助の傍へ來る。大學之助軍藏に囁く。軍藏呑みこんで)畏つてござりまする。

大學　荒氣に申すな。

軍藏　ハツ。(ト與兵衞の傍へ來て)さて、お旅人、外の事でもない。手短かに云へば有り難いことだ。その連れて來たお娘が、殿のお目にとまつたといふものだ。そこで、近頃さしつけがましい事だが妾に上げんかと仰せらるゝ。金銀は望みほど遣はすとある。有り難い御意だが、なんと、その娘を上げる心はござらぬか。

ト與兵衞これを聞いて恟りして、お龜と顏見合せ、思ひ入れあつて

與兵　それはハヤ、有り難うはござりまするが、國許に親共ござりますれば、まづ、一たん歸りました上

親共へその趣き、申しては見ませうが、中々かたましい親共でござりますれば、手かけ、妾なぞにはどうも

大學　手かけ、妾が否とあらば、身が妻に致さう。

兩人　エヽ。（ト驚く）。

大學　とても、身が領分へ足を踏み込んだ女は、目にとまるが最後、その儘には歸さぬ。親共が不得心なら、此方から申しつかはさうか。

兩人　サア

團平　返事次第で、浮み上がるといふものだワ。

嘉仲　その上、親仁の一人や二人、お飼ひ殺しにもなさるゝワ。

兵内　そしてお金は、いくらでも望み次第。

軍藏　きり〱返事を、申し上げるがよいわサ。

與兵　イエ〱、そのお金に望みは毛頭ござりませぬ。もう斯うなりましたからは、何と隱しやうはござりませぬ。有りやうは、この女には、云ひ號けがござりまする。

大學　ヤア、今となつてその身を遁れんと、武士を欺く僞り虛言。して、その云ひ號けの男は何者だ。

ト與兵衞、わな／＼つかへる。お龜いろ／＼こなしあつて

兩人　サア。

大學　眞直に申せ。何れの領分の者にもせよ、此方より申し達して、早く手に入れて見せるワ。サア。これにも返答があるか。どうだ。

かめ　いえ／＼、そりや御無理といふものでござります。どの樣に仰しやつたとて、肝心の私しが否でござります。それといふも、二世と連れ添ふ可愛い男がござりまする。アイ、しかも云ひ號けもとうに濟んで、毎夜々々添ひ臥しいたしまする。男のあるもの、無理にとやかう仰しやるは、そりやお武家樣にも似合ひませぬ。そりや密夫も同じ事。その上に、わたしやお屋敷方は嫌ひでござりまする。もう／＼、必ずお留めなされて下さりますな。サア、與兵衞さん、ござんせいな。

ト與兵衞を連れて、行かうとする。大學之助、ツカ／＼と來て、お龜を捕へ

大學　ヤア、女郎と思ひ容赦なせば、開いたまゝの雜言。この上は、否と云はうが、應と云はうが、身が手づから引ッ立てる。サア、來い。（ト引ッ立てうとする）。

與兵　モシ／＼。マア／＼お待ちなされて下さりませ。

ト取りつくを振り放して

大學　エヽ、面倒な。屋敷へ引ッ立てろ。

嘉仲　ハツ。

　　ト兩人、與兵衞を引ッ立てる。大學之助、お龜を引ッ立て

大學　サア、この上は、人手は賴まぬ。大學之助が自身に連れてゆく。女め、うせう。

　　ト無理に引ッ立て、花道へかゝる。大拍子になり、向うより高橋瀨左衞門、繼ぎ上下、大小、一文字の菅笠。あとより曾平、奴の形にて、持ち草履を持ち、出て來る。大學之助と行き合ひ、この體を見て

瀨左　大學之助樣。

大學　瀨左衞門か。

瀨左　まづ〳〵、あれへ。

　　ト舞臺へ押し戻す。與兵衞、瀨左衞門を見て

與兵　ヤア、あなたは

　　ト云はうとするを、瀨左衞門思ひ入れあつて

瀨左　イヤサ、存ぜぬ。ナ。……ソレ、當國の御分地、左枝大學之助樣と存ぜぬゆゑ、往來にて無禮致

した者か。粗忽な奴め。身が參りかゝつたが、其方共の仕合せ。殿へお詫びは致してくれうワ。

大學 イヤ〳〵、瀨左衞門。無禮緩怠でないぞ。

瀨左 して、彼れが越度はな。

大學 餘の儀でも無い。只今この所にて、大學之助が氣に入つたゆゑ、身にくれいと申すに、彼れ此れ申すのみならず、この女、某が事を、密夫なりと恥ぢしめたる一言。密夫ならば、どこまでも、密夫になつて、身が召し連れようと申すのぢや。

瀨左 成る程。殿へ對し、女が申し過しは、重々にツくき奴なれども、取るにたらざる女の事。當國の御分地なればとて、殿を見知らうやうもござらず。兎角、殿の氣隨に任せ、壁に馬を乘りかけたる無理所望。ましてや、連れ添ふ夫あれば、承知いたさぬも、尤もの儀と存じまする。

大學 イヤサ、瀨左衞門。他國の者へ道理をつけ、當分地たる身が誤り、申し立つるか。

瀨左 こりや、殿のお詞とも存ぜぬ。身不肖なれども、御本家の補佐仕る高橋瀨左衞門。いがみました政事は仕らぬ。嘆かはしきは、他國の女を無理所望あつて、不義密夫の汚名を蒙むられましても、多賀家のお名は罷り出ませぬか。

大學 ヤ。

瀬左　コリヤ、下世話に申す法外と申すもの。ハヽヽヽ。取るに足らざるこの場の始末。こりや全く御酒の上のたはれ言。町人にも、さぞ心遣ひであらう。

曾平　よい折から、瀬左衞門樣のお詞一つで相濟んだは、その身の仕合せ。

瀬左　サヽ、勝手次第に、この場を早く、何れへなりと參るがよからう。

大學　でも、みす〳〵

ト思ひ入れ。瀬左衞門隔てゝ

瀬左　イヤ、この上ともに、思し召しの儀がござらば、御自身の御差配はお控へ下され。その役々へ仰せつけらるゝが、殿の御行跡。ちとお愼しみが肝要かと存じまする。

大學　エヽ、いま〳〵しい。……惡い所へ高橋が來て、遊興の妨げ。もう爰には居られぬ。サア、皆、多賀の別當かたへ。

瀬左　お供召されい。

女皆　かしこまりました。

大學　とはいへ

ト刀へ手をかける。瀬左衞門これを見る。大學之助チヤツと隱す。

瀬左　然らば大學之助樣。

大學　瀬左衛門。重ねて逢はう。

ト大拍子になり、大學之助こなしあつて、鳥居の中へ入る。あとより皆々附き添ひ入る。瀬左衛門、與兵衛、お龜、曾平殘る。あと合ひ方。與兵衛あとを見送り

與兵　兄者人、久々にてお目にかゝり、御堅固の體、喜ばしう存じまする。

かめ　エヽ、そんならあなたが、常からお前のお噂ある兄上、瀬左衛門樣かいなう。

瀬左　すりや、あの者が、其方の養子合せとやら、承つた道具屋の娘、お龜と申すのか。

かめ　さやうでござりまする。もと私しは、此お國にて、庄屋役仕りました、佐五右衛門が惣領。譯ござりまして、藁の上から京都へ養子。孫三郎樣も、只今では、親御のお名をお繼ぎなされ、與兵衛樣と申しまする。御縁は切れてあるとはいへど、この上ともに、ハイ〳〵、お目かけられて下さりませいな。

瀬左　成る程。以前庄屋役致したる、佐五右衛門が娘といふ事は、ほのかに承つたが、まだ外に妹があるぢやないか。

かめ　さやうでござりまする。お米といふ妹があるとばかり、私しも音信不通ゆゑ、つひに逢うた事

もござんせぬわいな。

與兵　お顏を知らぬはわしとても、中兄の彌十郎樣、お國詰めゆゑお顏も知らず。それに引きかへ、今のマア、大學樣は、よう、京都の家來筋、太平次に似てゞはないか。

かめ　ほんに、さう云ひなさんすりや、意地の惡さうな顏附きが、大學樣とやらと、此方の太平次と、よう似てあるわいな。して、お前は、彌十郎樣を御存じなく、どうして又、瀬左衞門樣を

曾平　そりやその筈の儀でござります。いつぞや旦那上京の砌り、大佛前に御逗留。その折、下郎が道具屋のお宅を尋ね、御兄弟の御對面。アヽ、よいお序でござります。どうぞ御次男、彌十郎樣にも

瀬左　ア、いや〳〵。當所にうか〳〵、逗留致すは不孝の至り、親御といふは母御ばかり、年寄り一人殘し置いては、世間の手前。近々、お上の御用にて京都へ行く筈。その節、彌十郎を遣はす程にゆる〳〵と對面しやるがよい。

かめ　成る程。わたしも、よい序とはいふもの〻、物堅い父さんとのこと。妹に逢ひたうても、今の母さんはお年若。連れ子もあり。こりや、わたしも、お米に逢はずに、歸りませうわいな。

與兵　いかさま。それも增しかえ。ひよつと逢うても、別る〻時が惡いもの。なう、曾平どの。

曾平　さやうでござりまする。えて、お別れがわるいものでござりまする。イヤ、それは格別。孫三郎樣の、只今の御商賣は道具屋。……モシ、お旦那、この程紛失致したる、彼の一品の

瀨左　成る程。こりやよい所へ心づいた。與兵衞、其方に頼みたいは、コレ。（ト紙入れの間より龜の香爐の繪面を出し）お家の重器、靈龜の香爐。お手前ことは、今の世渡り道具商賣。これに似寄りの香爐出でなば、詮議してはくれやるまいか。

ト渡す。與兵衞取つて、よく〳〵見て

與兵　すりや、この通りの香爐が

瀨左　多賀のお家の重器といひ、殊に弟彌十郎が預りなるが、この程紛失。荒立てゝはと、事穩便に詮議最中。

與兵　畏りました。彌十郎樣のお預りの品といひ、寶の香爐とあるからは、手馴れた業の道具見世。似寄りの品と見ましたならば

瀨左　必ず共に詮議を頼む。コレ、行くへ知れねばお家の大事。

與兵　きつと詮議を仕りませう。

瀨左　ア、弟は持つべきもの。

かめ　兄上さま。

瀬左　嫁女。

會平　隨分御無事で

與兵　その內お目に

ト行かうとして、穿いたる中ぬきの鼻緒切れる。瀨左衞門が持つたる扇の要拔け、パラ〳〵となる。

各〻思ひ入れあつて

こりやどうぢや。今がたおろした草履の鼻緒。

かめ　つまづきもせず、切れたといふも

瀨左　行く末祝ふこの扇。要の拔けたも

かめ　アヽ、心がゝりな。

與兵　草履と

瀨左　扇の

ト兩人顏見合せ、思ひ入れあつて、與兵衞腰の扇を取り

與兵　見苦しけれど

ト差出す。瀬左衞門取つて

瀬左　ア、心利いたる（トこなしあつて）家來、草履を。

曾平　ハツ。（ト與兵衞へ直す）。

瀬左　行きやるか。

與兵　ハイ。

ト唄になり、與兵衞替へ草履をはき、お龜を連れ、思ひ入れあつて、向うへ入る。瀬左衞門見送り

瀬左　ア、物の知らせか。

曾平　エ。（ト顏見合せ）

瀬左　アヽ、役にも立たぬ

トあざ笑ふ。大拍子になり、向うより松田幸兵衞、深編笠、羽織、袴、大小にて、草履取り一人附き出て來り、直ぐに舞臺へ來て

幸兵　それにお居やるは、瀬左衞門どのではござらぬか。

瀬左　さうお云やるは

幸兵　松田幸兵衞めでござる。（ト編笠をとる。長髮の體）。

瀨左　御閉門の幸兵衞どの、未だ金子の手がゝりとてもござらぬかな。

幸兵　さやうでござる。いつぞや伊勢兩宮へ、御寄附の金子五千兩、雲津の驛にて、盜賊の爲に奪ひとられ、役目を受けし拙者が越度。然れども、もし斯樣な事もあらんかと、一兩々々、向う梅の極印ござれば、これを證據に詮議と存じ、當社へ日每の神詣で。瀨左衞門どの、この盜賊は、其許何と思し召さるゝな。

瀨左　されば、眞の盜賊が致したとも存じられぬ。これには正しく

幸兵　サ、世の諺にいふ如く、盜人を捕へて見れば

曾平　もしや、御家門

瀨左　ア、コレ。音高し。密かに〳〵。

ト思ひ入れ。大拍子になり、軍藏出で來り

軍藏　瀨左衞門どの、まだこれにござるか。見ますれば、御本家多賀の御家中幸兵衞どの。御用金紛失に附き、御遠慮と承つたが、ハテサテ、氣の毒千萬な儀でござる。

幸兵　御挨拶忝う存じまする。

曾平　イザ、お旦那。幸兵衞樣と御同道なされ、御口談は神職かたにて。

瀬左　然らば、松田氏。
幸兵　瀬左衛門どの。御同道仕らう。
瀬左　軍藏どの。そのうち御意得ませう。
曾平　ドリヤ、お供致さうか。

ト大拍子になり、瀬左衛門、幸兵衛、曾平、鳥居の内へ入る。軍藏殘り、あたりを窺ひ、小石をとつて左右へ投げる。チヤツパ入りの神樂になり、下の物かげより、關口多九郎、香爐をもち、窺ひ出る、鳥居の中より大學之助、嘉仲太、兵内、團平、附き出て來る。軍藏見て

軍藏　關口多九郎。
大學　すりや、あの者が
多九　御同心仕つたる、多賀俊行の家中笹山官兵衛が身寄りの拙者。卽ち御前へ、官兵衛方より內意の御狀、持參いたすが何より證據。イザ、御披見下さりませう。

ト一通を出す。大學之助開き見て

大學　汝それにて讀みあげい。（ト多九郎へ渡す）。
多九　ハツ。……「かねてお頼みの靈龜の香爐、盜み取らせ、猯又、菅家の一軸も、油斷なくお手に入れ

申すべく候。」……宛て名は憚りござりまする。

大學　して、笹山官兵衞は、當時都に。

團平　殿の御用で上京なし、旅宿は確かに今出川。

多九　首尾よく奪ひしこの香爐。御前のお目鏡淨玻璃の、鏡山より奪ひしまゝ。似せか、眞か、お目利きあつて。

大學　その品これへ。（ト前へ持ち行くを、蓋を明け、よく／＼見て）出來した。眞の靈龜の香爐。近々管領內見の時に至つて紛失なさば、俊行どのゝ越度となり、家の寶を失ふ高橋、重き罪科にあふは必定。その香爐は、暫く其方に預け置かん。

多九　しかと拙者が、預り奉つてござりまする。

ト香爐を受取る。この時、曾平出かゝり、立ち聞きゐる。大學之助懷中より一通を出し

大學　認めおいたるこの書翰は、笹山方へ遣はす密書。京都の旅宿へ、暮れまでに屆けよ。心得たるか。

多九　笹山どのへ、しかとお屆け申しませう。取りわけ拙者は先達て、兩宮寄附の五千兩、道にてひそかに盜みとらせ、大學樣の大望の入用。卽ちその金子の內、コレ。（ト懷中より財布を出し）御物入りは多賀家のこの金。これにて諸事まじくなふは、なんと忠心者でござりませう。何はともあれ、

大切なるその香爐。（ト受取つて懷中する。）

曾平　さてこそ香爐は大學樣の（トつか〳〵と出る。）

兵內　ヤ。わりやアたしかに

嘉仲　高橋の下部だな。

大學　後の災ひ。者ども、計らへ。

兩人　ハヽツ。

曾平　その香爐を

ト多九郎を引きつける。立廻り。懷中より以前の密書を落す。兵內、曾平へ組附くうち、多九郎香爐を持ち、向うへ一散に入る。曾平立廻り中に密書を拾ひ

證據の一通。

兵內　それを

トかゝるを突きのけ

曾平　イデ、追ツかけて。

ト、ゴン〳〵になり、密書を持ち向うへ入る。兵內も曾平が跡を追つかけ入る。大學之助跡を見送り

大學　心憎さは今の下部。軍藏參つて首にせい。

軍藏　ハツ。

　　ト行かうとすると、乳人柵、つか／＼と出て

しが　軍藏どの。待つた。

軍藏　柵どの。なんで身共を

しが　お止め申すはこの一品。これ御存じでござりまするか。（ト小柄を見せる。軍藏思ひ入れあつて）

軍藏　そりや御前より拜領せし、御紋ぢらしのその小柄。

しが　この程御本家多賀のお館、裏門通りの水門にて、怪しき者が打つたる小柄。正しく香爐紛失も、
あなたはお覺えでござりませう。

軍藏　ヤ、（トぎつくりする）。

しが　小柄は御前の御所持といひ、拜領ありしは軍藏どの。こりや其許の正しく仕業。……サア、荒立ては御前のお名の出る道理。存じたものは柵一人。もし、御前樣。（ト小柄を差出し）何卒お心改められ

　　トいふを、大學之助、物いはずに、小柄をとつて刀へさし、拔討ちに柵を斬り下げる

こりや、我が君様、お手討に。

大學　大事を知つたる乳人柵。不便ながらも

しが　エヽ、あなたはいかなる

ト立寄るを切り倒し、止めを刺し

大學　家來、乘り物。

軍藏　ハッ。……お乘り物。

ト神樂になり、軍藏血刀を拭ふ。下座より侍、乘り物を吊らせ、お弓、お須磨附き出て來り、この體を見て

ゆみ　ヤヽ、柵さんのその死骸。

須磨　こりや何者がむごたらしく

兩人　モシ、御前さま。

大學　その柵は予が手討ち。

兩人　エヽ。

大學　不便をくはへるわいらでも、心にたがへばいつ何時、予が手をおろしてこの通り。心をつけて奉

公いたせ。（ト白刃を納める）。

ゆみ　エヽ、恐ろしい御前様。

須磨　いとしぼなげに柵さん。

園平　ハテ、役にも立たぬ女中方。口出しあつてお相伴なされぬ用心。して、この死骸は。

大學　駕籠にて邸へ。

園平　ハツ。（ト柵の死骸を乗り物へ入れる）。

嘉仲　然らば拙者は、死骸の見送り。

大學　わいらも共々野邊送り、手討ちの女が供いたせ。ハヽヽヽヽ。

女二　エヽ、お情けない。

軍藏　立たつしやい。

ト三重になり、乗り物を先きへ立て、女達に侍附き、嘉仲太附き添ひ向うへ入る。

大學　軍藏はその密書、官兵衞方へ寸時も早く。

軍藏　畏つてござりまする。

大學　園平、參れ。

團平　ネイ。

　　ト大拍子になり、大學之助、團平をつれ、下座へ入る。軍藏殘る。引違へて八内出て來り

八内　お旦那、急な御用と仰しやるゆゑ、先刻より待ちましたが、して私への御用はな。

軍藏　御用といふは御前より、京都へ火急の早飛脚。この狀箱を今出川、笹山どのまで、合點か。

　　ト狀箱をわたす。

八内　心得たゝとはいふものゝ、直樣出立仕る、よろしく路銀を。

軍藏　そこに如才はあるものか。ソリヤ、僅かの道でも急の御用。路用の金子。（ト内がへより十兩出す。）

八内　コリヤ、小判で十兩。エヽ、有り難う存じまする。

軍藏　必ず日限、たがへまいぞ。

八内　早速お屆け申しませう。

軍藏　ドリヤ、御前へ參らうか。（ト大拍子になり、軍藏入る。）

八内　サア〳〵〳〵。よい仕事が出來たわえ。この近江より都まで、二十里には足る足らず、路銀は十兩。アヽ、流石大學樣は、むづかしやでもお大名だぞ。

　　ト十兩を數へ居る。矢張り大拍子にて、後へ與五七、一升德利を持ち、出かゝりゐて

與五　コレ、そこにゐるは八内どのか。よい處にゐた。いま裏門で駕籠の奴等に飮まさうとて、酒を取つたが、皆どこへか失せ居つた。サア、一杯きめねえか。

八内　そいつは有り難い。サア〳〵、始めたり〳〵。

與五　幸ひこゝに茶碗もある。ドリヤ、かッ食はうか。

ト　かすめたる神樂になり、兩人床几にかけ、茶碗を取つて酒盛りになる。

八内　コレ、與五七どの、どうだ、歸り仕事でも出來たか。

與五　イヤノ〳〵、まだよい仕事も見えぬが、なんぼ仕事がよくつても、先刻のやうな夫婦者を連れては、泊りの度毎によつぴての睦言。氣がわるくつて寢られるものぢやァない。（ト飮んで獻す）

八内　さうであらう〳〵。して、貴樣は京へ歸るのか。

與五　仕事が見えにやァ、今からでも立つ積りだ。

八内　そいつはちつと相談があるわえ。おらァ旦那の用で、京都の今出川まで行くが、コレ、物は相談、貴樣、この狀を屆けてくれまいか。さうすればおれは助かつて、その內、鏡の廓へ居續けと出かけるワ。

與五　ハテ、奢つた事を云ふが……コレはあるか〳〵。（ト仕方して見せる）。

八内　有る段か。コリヤ、この位な物だワ。(ト首に懸けたろ木綿財布より十兩出して見せる)。

與五　イヤア。よい工面だな。

八内　なんと、一兩だが、この狀を屆けてはくれまいか。

與五　屆けて一兩ならば、屆けてやらう。して、先は今出川では

八内　コリヤ〳〵、この狀箱に書いてある、笹山官兵衛といふ多賀の御家中だ。コレ、一兩は現金だワ。

ト一兩出してやる。

與五　こいつは有り難い。マア〳〵、その狀箱が肝心の代物だ。ドレ、受取らう。

八内　サア〳〵、渡した〳〵。

與五　(狀箱を取つて自分の刀の柄へくゝりつけ、一兩取つて懐中して)歸り仕事の出來た祝ひに、おれが奢りだ。サア、もう一杯きめさつしやい。

八内　イヤ〳〵、大きに下された。アヽ、ふら〳〵として來た。コレ〳〵、必ず怠けずに屆けてもらはう。急な用だよ。笹山官兵衛様だよ。

與五　よし〳〵、承知々々。

八内　さて、今夜はこの金で、鏡山で居續けだワ。

與五　エヽ、有り難いな。
八内　コレ、必ず頼むよ。
與五　ハテ、呑み込んだよ。
八内　ドリヤ、これぎりの飯もりと酒落れようか。
ト大拍子になり、醉うたるこなしにて、金を見せびらかしながら下座へ入る。與五七殘る。
與五　ハテ、あいつは好い仕事を請合ひ居つた。（ト立たうとして醉ひたる思ひ入れ）。ハテ、こればかりの酒にまはされたワ。ちつと氣を鎭めて行かうか。幸ひ爰の床几を借りて、ドリヤ、一寢入りして行かうか。
ト床几へ横に寢る。馬士唄になり。向うよりお米、木綿振り袖、娘のなりにて、小風呂敷に包みし辨當箱を下げ出で來り、花道にて
よね　このマア與五郎さんは、なぜに今日は晝飯に歸らんせぬか。さぞひもじからうと、お辨當を持つて來たが、マア、どこに居さんす事やら。早う逢うて、渡したいものぢやがな。
ト舞臺へ來る。馬士唄になり、下座より旅人二人出て來る。あとより、孫七、割掛けの荷物を擔ぎ、出て來り

孫七　モシ、旦那、お約束の鳥居前でござりまするが、もそつと先まで持たせて下さりませぬか。

旅人　イヤ〳〵、もう爰までゝようござる。それ〳〵、駄賃が百よ。極めの外に、コレ〳〵、廿四は酒手やりませう。（ト錢を渡す）。

孫七　ハイ〳〵、これは有り難うござります。お前様、お酒手には及びませぬ。さやうなら、錢だけに持つて參りませうわいの。

旅人　ハテ、爰でようござるよ。さて〳〵、正直な男でござる。オヽ、大儀でござつた。

ト旅人、捨ぜりふにて、荷を受取り、向うへ入る。お米見て

よね　ヤ、與五郎さんかえ。

孫七　オヽ、お米か。何しに來たのぢや。

よね　さいなア。今朝から駄賃取りに出さんして、晝飯にも戻らんせぬから、父さんも案じてナ、わしが辨當もつて行かうと云はしやんすから、イエ〳〵わたしが持つて參りまするを、立場々々を尋ねて來やんした。さぞお前も、ひもじうござんせうぞえ。

孫七　なんの〳〵。今日はよい仕事があつての、晝飯食ふ間もなかつたが、善い旦那のお供して、饂飩を大分振舞はれ、ひもじくもない事よ。（ト二人床几へかける。三味線入り大拍子）。

よね　わたしも今日は、死なしやんした母さんの命日ゆゑ、お墓參りに行くところ、今の母さんが連れ子の里松を連れて、お寺參りに行きたいといふてナ、三人連れで墓參りして來やんしたわいな。

孫七　イヤモウ、年若ぢやが、あのおわたどのは、ようマア親仁どのゝ氣づまを取つて、わしや其方にも和らかな素直な生れ。とんとてまへの姉御のやうぢやわいの。

よね　サア、そのお噂で思ひ出さるゝは、わたしが幼い時別れた姉さん、京の町の道具屋へ養子に行きなさんしたが、久しう便り音信なう、婿といふのも、武家がたからの養子と聞く。

孫七　アヽ、コレ〳〵。そんなら何か。京の町の道具屋へ養子に行つた、わが身の姉御は、お龜とはいはぬか。

よね　アイ、さうぢやわいな。

孫七　道理こそ。……コレ〳〵、その姉御に、逢うたわいの〳〵。

よね　そりや何處でえ。

孫七　さつきに爰で逢うた、若い女夫の谷汲參り。京の衆といふたゆゑ、問ひかけて見りや、その若い旦那どのは、與兵衞といふ道具屋。そのお方がわしの主人、高橋瀬左衞門樣の三人目の弟御、孫三郎樣ぢやわいの。

よね　エヽ。そんなら姉樣のお連れ合ひといふは、お前の御主人瀬左衞門樣の弟御、孫三郎樣といふのかえ。

孫七　おいのう、あなたも藁の上から町家へ御養子、音信不通の事なれど、瀬左衞門樣はお逢ひなされた樣子。中兄の彌十郎樣は、今にお逢ひなされぬとは、武家がたといふものは、ハテ、物堅いものぢやなう。

よね　そりやモウ、殿達には有りうちなれど、氣強いは姉樣。この國へござんしたなら、せめて立ちながらも、便り音信をなさんせぬは、あんまり心強いわいな。

孫七　ハテ、それにも譯があらうわいの。その時分は屹度した庄屋どの。今では淸水村に引ッ越して、平百姓の舅どの。先きが知れいで、訪ねて來ぬのであらうわいの。

よね　そのやうな事でもあらうかいな。只氣がかりは、お前は瀬左衞門樣の御勘當、いつマアお詫びが叶ふやら。それを案じて居りますわいな。

孫七　ハテ、女といふものは、何の役にも立たぬ事をくよ／＼と。コレ、そんな事氣に病んで、煩らやるな。ヤ、ヤ。

　トお米が側へよつて、袖口より手を入れ、背中を撫でる。この時、下の方の與五七目を覺まし、この

體を見て、床几の上にてけなりさうに思ひ入れ。

よね　イエ〳〵、わたしや煩ふ事ぢやござんせぬが、お前は朝から早うに、草鞋、はゞきで徒歩荷物、辛度からうと案じられ、これが一倍苦になるわいな。

孫七　これはしたり。役にも立たぬ事を苦に病んで、コレ〳〵、必ずまた煩うてくれるなよ。

よね　アイ、嬉しうござんす。孫七さん、必ず見捨てゝ下さんすなえ。

孫七　なんの見捨てう。コレ、お米。

よね　孫七さん、嬉しうござんす。

ト寄り添ふ。與五七これを見て、床几より轉げ落ちる。兩人恟りする。與五七顏をしかめて

與五　アイタ〳〵。なぜ轉ばした。これぢやァ、濟まないぞ〳〵。アイタ〳〵。

孫七　これはしたり。濟まんというて、何をわしらが、いつこなたにマア(ト與五七を見て)ヤ、わりやァ先刻の飛脚ぢやァないか。

與五　オヽ、わりやァおれをよう投げたな。その上に又爰で、あの娘とのいちやつきを見たばかりに、床几から落ちたによつて、膝頭を打ちこはしたワ。わいらがしたも同然ぢや。濟まぬぞ〳〵。

ト孫七が胸づくしを取る。

孫七　イヤ、この男めは無法な奴ぢや。又しても／＼、見ッともない。放さぬか。（ト取つて投げる）。

與五　アイタ／＼。うぬ、又投げたな。もう料簡が

ト欵箱の附いたるまゝ刀を抜かうとする。孫七その手を押へる。お米、おろ／＼してゐる。

孫七　エヽ、大それた刃物三昧。放さぬかえ。

與五　イヤ／＼、合點せぬぞ／＼。

孫七　ヤア、危ないわえ。

ト刃物をもぎとるはずみに、與五七少し手に疵つく。與五七血を見て

與五　ヤア、切つたぞ／＼。コレ、この男めが、切つたワ／＼。

ト立騒ぐ。孫七、お米、捨ぜりふにてうろたへる。萬六と、駕籠舁兩人出て來り

三人　誰が切つた／＼。

萬六　ヤア、わりやァ先刻の小揚げに、飛脚の男。また喧嘩を始めたのか。

駕甲　切つたといふが、疵はどこだ／＼。

駕乙　コレ／＼。どこにも疵が見えぬぞよ／＼。

與五　イヤ／＼、切つた／＼。コレ／＼、しかも疵は大疵だ。

孫七　その疵はどこにある。
兩人　エヽ、そりや猫の引ッ掻いたのか。
與五　おかつしやい、切り疵だ。只は濟まぬぞ〳〵。
萬六　それ〳〵、僅かでも切り疵だ。こりや只も濟まされまい。膏藥代が物はあるわえ。
よね　モシ〳〵、お前さん。金で事が濟みますなら、どうぞよいやうに、計らうて下さりませいな。
孫七　コレサ、お米、打つちやつて置きやいの。
よね　ハテ、さうぢやござんせぬわいな。
萬六　コレ〳〵、疵人々々。こなたは金で扱はゞ、濟ませる氣か。わしも見世の邪魔になるから、仲人に入つて、藥代を取つてやらうが、濟ませる氣か〳〵。
與五　成る程、金で扱はゞ、隨分濟ませてやらうワ。
萬六　それは忝い。コレ〳〵、若い人、金で濟まさうといふが、なんと相談に掛かつて見ようか。
孫七　ハテ、構はつしやるな。ナニ、あればかりの疵に。
よね　これはしたり。少しの事で濟む事なら、あなたを頼むがようござんすわいな。
萬六　さうでござる。高が僅かの疵でござれば、マア、わしがばんだうして進ぜう。

よね　何分よろしう、お頼み申しますわいな。

萬六　呑み込みました〳〵。したが、こゝで相談も出來まい。マア、社内まで來ては下されぬか。

孫七　イヤモウ、何處までも行きまするて。

與五　コレ〳〵、逃しはせぬぞ〳〵。

萬六　ハテ、わしがついて居ますわいの。サア〳〵、二人ながら、社内まで、來て下され〳〵。

孫七　ハテ、馬鹿な目に逢ふ事ぢやわいの。

三人　サア、來さつしやい〳〵。

ト大拍子になり、捨ぜりふにて皆々下座へ入る。お米殘つて

よね　常から短氣な與五郎どの、怪我とはいへど人さんに、疵附けたことなれば、僅かな金で濟む事ならば。とは云ふものゝ、父さんへ云はれはせず、その日暮しでありながら、どうして餘計の

ト屈託の思ひ入れ。大拍子になり、八内、醉うたる體にて出て來り、お米を見て

八内　したり。ハテ、うつゝなる姐えだわえ。今夜はなんでも、鏡の曲輪で、大洒落れと思つたが、この子を見ては、また萬更でもないわえ。コレ〳〵、お娘、どうぢや。この奴に氣はないか。コレ斯う見えても、おれは金持ちだぞよ〳〵。(トしなだれよる。お米ツンとして此方へ來る。)コレサノ〳〵、

奴はこれでも、俄分限ぢや／＼。(トしなだれかゝる)。

よね　エヽ、おきなさんせ。わたしやその樣な、浮氣な者ぢやござんせぬわいな。

八內　これはしたり。浮氣か何か知らないが、奴はする氣ぢや。コレ／＼、俄分限ぢや／＼。

　ト財布を見せびらかす。この時、萬六、スタ／＼出て來り

萬六　コレ／＼、姐え、ちよつと、こゝへ來たり／＼。

よね　ハイ、どうぞ濟まして下さりませえ。

萬六　サヽ、承知サッ。あの疵人にも、段々掛け合つたところ、どうやらかうやら、一兩で得心させたはこなたゆゑ。大儀ながら、內へ行て、一兩工面して、ござれ／＼。

よね　エヽ、そんなら一兩出しますれば、何事なう濟みまするかえ。

萬六　濟むとも／＼。ちつと工面もむづかしからうが、何分一兩持つて行かねば、疵人めが與五郎を離さぬワ。どうぞ早く、一兩工面してござれ。事によると、あの男は牢へ入らにやならぬ。ハテ、氣の毒な事だ。(ト云ひ捨てゝ入る)。

よね　アヽ、モシ／＼、そんなら一兩上げれば、濟みまするかえ。アノ、一兩　(ト思ひ入れ)。一兩といふてからが、今のこの身で工面の仕樣も。父さんには云はれまいし。後添ひのおわたさんに話して

見たとて、微かな世渡り。と云うて、捨てゝは置かれず。アヽ、コレ、どうぞ一兩の金の工面が

トあちこちする。八内聞いて居て、財布より一兩出し、お米に見せびらかし

八内　コレ〳〵、姐え〳〵。一兩有るの〳〵。(ト思ひ入れ)。

よね　(見て) モシ、奴さん、そりや眞の金でござんすかえ。

八内　眞の嘘のと、二つあらうか。コレ〳〵、一兩ばかりぢやない。まだこゝに、金があるの〳〵。(ト財布を見せて)おぬしは、この金が、欲しいかい〳〵。

よね　アイ。どうぞ一兩、欲しうござんすわいな。

八内　アヽ、一兩ばかりか。コレ、これ程ある金が、欲しうはないか。

よね　イエ〳〵。わたしや、一兩あればようござんすわいな。

八内　ハテ、心やすい願ひぢやの。ソレ〳〵、一兩。

よね　ハイ、有り難うござりまする。(ト一兩の金を取り、行かうとする)。

八内　(うろたへ) オット、さうはならぬワ。コレ、姐え、てまへもいゝ蟲の生れだの。なんぼ小綺麗な生れだといつて、見ず知らずの娘に、一兩といふ金を、ナニ、只やる物か。コレ、魚心あれば水心、奴が自由になつたなら、成る程、一兩やらうが、お祭りの濟まぬ中は、滅多にはやれぬの。

よね　モシ、奴さん、わたしや急に、この一兩が入用でござります。どうぞお離しなされて下さりませいな

八内　これはしたり。そりやア、手前勝手といふものだ。其方も入用であらうが、此方も命と釣り替への金だワ。一兩といふ金を、どうして、只やられるものか。やらう程にノ、あの掛け茶屋まで來てくりやれ。

よね　イエ〳〵、わたしや左樣な事は存じませぬわいな。

八内　存じませぬなら、一兩を返してもらはう。

よね　こりやわたしがお借り申しますわいな。

八内　テモ、この娘は、押しの強い女だ。一兩欲しくば、あそこへちよつと

よね　エヽ、存じませぬわいな。

八内　存ぜぬならば、一兩返せ。

よね　イエ〳〵、こりやわたしが

八内　ハテ、あつかましい女だ。コレ、あんまり焦らすな。小腹が立つワ。いふ事はきゝもせず、掴つた金を離さぬとは、コレ、てまへ、盗人だぞよ。

よね　サア、さう仰しやつても、どうもこの金は

八内　離さぬと、盗人だぞ。
よね　どうも離されませぬわいな。
八内　離さねば盗人だ。サア、返せ〳〵。
よね　どうも離されませぬわいな。
八内　アヽ此奴、コリヤ優しい面をして盗みをするな。うぬは女の護摩の灰だな。盗人め、離さぬか。
よね　御免なされませ〳〵。

ト逃ぐるを八内追ひあるく。この時、下座より瀬左衞門何心なく出て來る。お米逃げあるき、瀬左衞門の後ろへ隱れる。

八内　アヽ、モシ〳〵、その女を、お渡しなされませ〳〵。
よね　アモシ、御免なされませ〳〵。
瀬左　コリヤ〳〵、下部、年端もゆかぬ女をとらへ、そりや何事ぢや。
八内　ヘイ〳〵、その女は盗人でござります
瀬左　なんぢや、この娘が盗人ぢや。
八内　左樣でござります。

瀬左　ハテ、見掛けによらぬ、あの娘が盗人ぢやとは。……アヽ、コリヤ、其方間違ひであらう。人違ひであらうワ。

八内　イエ／＼、間違ひはございませぬ。その娘が盗みを致しました。

瀬左　オヽ、して、何を盗み致した。

八内　へイ／＼、金でございます。私しの金を一兩、その娘が盗みました。證據と申すは、ソレ／＼、その女めが、一兩の金を握つて居ります。

瀬左　すりや、この娘が、一兩の金を盗んだと申すか。……コリヤ、女、いよ／＼われは、あの金を盗み致したか。

よね　ハイ。

ト恥かしさうに顔を隠し、いろ／＼と思ひ入れ。この時、大學之助、團平を連れ、出かゝつて窺ふ、

瀬左　ハテサテ、人は見掛けによらぬ。コリヤ女、そちは何れの者ぢや。

よね　ハイ。私しは清水村の、百姓の娘でございまする。

瀬左　オヽ、清水村の百姓の娘か。その清水村は身が支配地っして、親の名は何と申す。

よね　ハイ、その儀はどうも（ト恥かしき思ひ入れ）。

八内　モシ〳〵、旦那様、別してあなたのお構ひなされた儀ではござりませぬ。お退きなされませ。持つてゐる金さへ取返せばよろしうござります。サア、その一兩を、離さぬか〳〵。

トお米を引きつけて、持ちたる金を取らうとする、離さぬゆゑ、八内、拳にてしたゝかにぶつ。瀬左衞門見かねて、お米をかこつて

瀬左　これはしたり。女子供を捕へて、餘り手荒う致さぬがよい。コリヤ女、其方もあの者の金を盗みながら、なぜ戻さぬぞ。但し戻さぬには譯ある事か。（トお米恥かしきこなし）

八内　イエ〳〵、譯も何もござりませぬ。御覧じませ。私しは斯様にまだ外に金を持つて居りまする。決して僞りなぞを申す奴ではござりませぬ。（ト首に掛けてある財布を見せて）所詮、甘口では返しますまい。阿魔め、ウヌ。（ト割り木を取つて立ちかゝる）

瀬左　（八内を引附け）コリヤ下部、わりやあの者をなんと致す。

八内　ハテ、打挫いても金を取戻します。旦那様、お止めなされますな〳〵。

瀬左　イヤ〳〵、左様には致させぬ。

八内　コリヤ、なんで致されませぬ。

瀬左　ハテ、あの女は身が支配地の百姓の娘、善惡糺すはこの瀬左衞門が役目。汝等如きが指圖は受け

ぬゝして、われは何れの小者ぢや。

八内　へイ、私しは

瀬左　何れの家來ぢや。

八内　へイ、私しは、左枝の御家中、守山軍藏が下部でござります。

瀬左　すりや、御分地の御家中の小者、身が支配地の女を捕へ、いらざる差配。指でも差すと許さぬぞ。

八内　へイ。（トうづくまる）。

大學　イヽヤ、小者は身が家中。その女めは清水村の土民。多賀の領地の百姓は、盜みをしても大事ないか。（トよき所へ出る。合ひ方。）

瀬左　（見て）こりや、大學之助樣。

大學　瀬左衛門。其方が支配の百姓の娘、予が陪臣の所持の金、多少に限らず盜み致すを、その方は其儘に致し置くか。イヤサ、多賀の領地の者共は、盜み致すを役人共は打捨て置くか。左樣あつては天下の掟、國の政事が相濟むか。瀬左衛門、返答はどうだ。

瀬左　御尤ものお尋ね。拙者が支配の土民の娘、只今屹度、吟味いたすでござりませう。

大學　さうなうては。大金、少金の分ちはないぞ。殊に、十五を越えたる娘、私しの政道は致させぬぞ。

瀨左　畏り奉りました。（トお米に向ひ）コリヤ女、其方が聞く通り、太守のお聽きに達せしからは、その儘には致されぬ。只合點が參らぬは、あれなる小者は、まだ〳〵外に金子の貯へ。其方眞に盜み致さば、金子は殘らず取るべきに、その內僅か一兩を、盜み致して離さぬとは。コリヤ女、その金は何の爲に盜みとつた。

よね（こなしあつて）ハイ、男の爲に盜みましたわいな。

瀨左　何ぢや、男の爲に。僅か一兩盜む心があるならば、財布の金は何ゆゑに又、殘らず盜まぬのぢや。

よね　イエ〳〵、只今急に、難儀致すは一兩の金。これさへござりますれば、男の難儀を救へまするゆゑ、ついした事に一兩取りましてござりまする。殘りの金は要りませぬ。一兩さへござりますれば、男の難儀を救はれまする。どうぞこの金は私しに下さりませ。殿樣、この金はどうぞ私しに

瀨左　くれいと申すか。

よね　アイ。

瀨左　ハテサテ、優しい心。コレ、女、身が金子遣はさう程に、その金は彼の者へ返して遣はせ。左樣なうては、コリヤ、この場が濟まぬぞ。

よね　ハイ〳〵。左樣ではござりませうが、いとしい男へ遣はしませうと、私しが念づけましたこの一

兩、そればつかりは、どうぞ私しへ下さりませいな。

瀬左　ハテ、正直な女心に（ト大學之助を見て思ひ入れ）。アイヤ、聞き譯のなき慴き女め、その金もとへ戻し居らぬか。

トこの時下座より孫七、與五七、爭ひながら出て來り

與五　コリヤ〳〵、逃しはせぬぞ。一兩取らにや、濟まさぬ〳〵。

孫七　ハテ、その一兩を工面して來ますよ。

與五　イヤ〳〵、さういうて逃げるのか。さうはさせぬ〳〵。（ト爭ひ出ろ）。

八内　（見て）ヤア、與五七か。貴樣はまだ立たぬのか。急な用だワ。

與五　イヽヤ、聞かつしやい。珍事ちうよう、おれはナ、この男に

團平　コリヤ〳〵、大學之助樣のお目通り、立ちはだかつて。下に居らぬか〳〵。

與五　ハイ〳〵〳〵。（トうづくまろ）。

よね　（孫七を見て）ヤア、こなさんは孫七どの。

孫七　オヽ、お米ではないか。（ト瀬左衞門を見て）ヤ、あなたは古主高橋樣（ト云はうとする。瀬左衞門思ひ入れ）。アイヤ、以前は武家のお邸に、御奉公した身なれども、旦那のお氣に違ひしゆゑ、勘

よね　當受けて今の身は、往來の旅人の肩休め、その日暮しの旅小揚げ、ふとした事の口論から、疵が附いたと逆ねだり。扱ひ金も一兩と、値はなつたれど、有りやうは、その一兩に差支へ居やしやんせうと思ふから、ふつと見つけたあなたの金、一兩取つたはお前の難儀、救うて上げうと思ふから

孫七　アノ、一兩のその金を

八內　この女めが盜んだワ。

與五　サ、一兩戻さにや、コレ、おれが手首をこの樣に、刃物で切つて濟むまいぞ。その日暮しの人足が、刀で人を切つても濟むか。

瀨左　ナニ、その者が刀で切つたか。

與五　左樣でござります。併し刀は、私しがさして居つた、コレ、この刀、これで斯樣に切いました。

瀨左　その刀、これへ。

與五　へイ。

ト狀箱を附けたるまゝ、瀨左衞門の前へ持ち行く。瀨左衞門、宛名を見て、手早く裏がへし置く。

大學　人足の身で大それた。旅人に手疵を負はせし奴。何れの者か、それ吐せ。

孫七　ヘイ、私しは、清水村の百姓でござりまする。
大學　すりや、おのれも、瀬左衛門が支配地の者。コリヤ、ヤイ。二人が二人とも、其方が支配所。この儘にさし置くか。
瀬左　イヤ、この儘にはさし置きませぬ。御前に於て拙者めが、屹度吟味を仕りまする。
ト狀箱へ目をつけ、懷中の紙入れより小判を取出す。
八内　これはしたり。その疵人より奴が一兩。
與五　膏藥代はこの男。
兩人　互ひに一兩、此奴から
ト與五七は孫七へ、八内はお米へかゝる、この時瀬左衛門、兩人へ、小判一兩づゝ目つぶしに打つ。
アイタ〳〵。（ト取つて）コリヤ、小判で一兩。
瀬左　身共がわいらへ立替へ遣はす。
兩人　こりやァ有り難い。
孫七　不奉公した御主人に、どうもその金
よね　左樣あつては、折角の、わたしが盡す志し

瀬左　イヤ、合力は仕らぬ。立替へ遣はすその一兩。女、所持せしその金を、身共へ渡しやれ。

よね　ハイ。(ト合ひ方になり、持つたる一兩を瀬左衞門へ渡す)。

瀬左　(よく〳〵見て)この一兩の殘りの金子、下部が貯へ、ちよつとこれへ。

八内　ヘイ。(ト財布の儘持ち行く。瀬左衞門改め見る。幸兵衞出かゝりゐる)。

瀬左　さてこそ下部が所持の金、數は十兩、殘らず覺えの

幸兵　お家の極印、ござるかな。

瀬左　改めて見やれ。

幸兵　心得た。(ト金を改める。瀬左衞門狀箱の密書をよく〳〵見る。大學之助心附き、屹度思ひ入れ)。コレ、見られよ、高橋どの、小判は僅か十兩なれど、九兩の金は殘らず極印、向う梅。身が盗まれし御寄附の金。

瀬左　この文言は死名を憚り、兩名共にわからねど、紛失なしたる五十兩。殊にはお家の重器をば、奪はん爲の密事の段々。これも正しく(ト大學之助へ目を附け)ア、詮議いたさば

ト思ひ入れ。軍藏出かゝり窺ふ。與五七、一兩の金を出し

與五　アヽ、モシ〳〵。どうやら掠んだ金の譯、奴どのからお飛脚に、頼まれた路銀の一兩。サア〳〵

わしは返しまする。（ト幸兵衞へ渡す）。

幸兵　この一兩も覺えの極印。身が失ひし五千兩、殘らず印す向う梅。極印あるその金が、廻り〳〵てこの場へ來たも、手懸り知れたる、これ天命。下郎め、どうしてこの金を

八内　サア、その十兩は、お旦那の軍藏樣から

瀬左　貰ひ受けたか。

八内　左樣でござります。

瀬左　すりや、軍藏が詮議の手がかり。これと申すもその女、僅かな一兩盜みしゆゑ、いはゞ、大金五千兩、行くへの知れるも、其方が働き。

よね　そんならわたしが、恥かしい、僅かな金を盜みしが

瀬左　お家のお役に立つたるぞ。その褒美には（ト孫七を引寄せ、お米が方へ突きやる。）

孫七　これは。

瀬左　不奉公せし孫七が、勘當ゆるして、女へ褒美。

孫七　すりや、私しが御勘當

よね　お免しなされて、以前に變らず

瀬左　主從の上、褒美の男。行く末長う女夫の結び。

孫七　エヽ、重々厚き

よね　おん惠み。

兩人　エヽ、有り難うござりまする。

瀬左　して、この狀は何者から

與五　サア、譯は一向存じませぬ。あの奴に頼まれて、京都にござる笹山樣へ

瀬左　それであらまし

軍藏　知られた高橋。

團平　觀念ひろげ。

ト軍藏、團平、切つてかゝるを、孫七、團平を引きつける。幸兵衞、軍藏をさゝへる。大學之助拔いて瀬左衞門へ斬つてゆく。立廻つて、その手をとらへ

瀬左　こりや大學樣、何ゆゑ拙者を

大學　ヤ。（ト振りほどく途端に、軍藏振り切つて瀬左衞門へかゝるを、大學之助見事に軍藏の首を打ち落し）家の名汚す憎き軍藏。

瀬左　そのお手討ちの相伴は
　ト拔討ちに八内をポンと切る。大學之助血刀を差出す。幸兵衞血を拭ふ。瀬左衞門の白刃は、孫七手拭にて拭ふ。
大學　すりや、その下部も
瀬左　災ひ起すは下部の習ひ。
大學　ア、流石は高橋
幸兵　密書の使ひは
よね　物事存ぜぬ
孫七　證據はそれなる
よね　密書の文言
瀬左　コリヤ。……他言いたさぬ（ト有り合ふ大火鉢へ打込む。煙硝火パツト立つ）。
幸孫　證據の一通
瀬左　火中いたした。
孫米　エヽ。

大學　ア、これにて安堵。

孫七　折角お手に

瀨左　コレ。あらまし胸に、ナ。（ト思ひ入れ）。

大學　ヤ。

ト立ちかゝるを、瀨左衞門隔てる。團平かゝるを、幸兵衞引附ける。孫七、與五七を見事に投げ、お米をかこふ。

瀨左　承知いたした。

トよろしく拍子

幕

二幕目

鷹野の場

陣屋の場

役名――左枝大學之助。高橋瀨左衞門。百姓、佐五右衞門。坂本權平。篠原傳五。彥根嘉仲太。蟹山伴六。島本丹八。高橋彌十郎。松田幸兵衞。三上鄕兵衞。佐五右衞門悴、里松。同女房、おわた。松浦玄蕃。小島林平。



本舞臺、三間の間、淺黄幕、松の大樹枝葉茂り、正面、高土手、夏草の盛り、鳴子、繩張、所々に稻叢。舞臺先き、茂りし草土手。こゝに早乙女、おるせ、おもよ、おはな、浴衣からげ、早乙女のこしらへにて、菅笠に腰をかけ、煙草のみ居る。甚平、勘太、百姓の拵へにて、草刈籠をおき、鎌を持ち、めい／＼草を刈り居る。よき所に榜示杙、多賀領高橋瀨左衞門支配地と書きある。在郷唄にて幕明く。

ト直ぐに念佛太鼓になり

勘太　コレ／＼、お花女郎、けふも又、新田の植附けでござるか。嘸しんどうごんせうの。

はな　さいなア。しかし、どこの在所も田植ゑ時。いつそ氣が晴れてようござんすわいなア。

るせ　さうでござんす。日和のよいので、田植ゑ女の仕合せぢやわいなア。

甚平　イヤモウ、いつも田植ゑ時は、いかう降るものでござるが、今年は天氣がよいので、また豐年でござらうわいの。

勘太　それ／＼。今年も變らず當り年でござらう。ドリヤ、わしらも一服吸ひませう。おもよどの、火を貸して下さい。

もよ　サア／＼、吸ひつけさんせ。コレ、お花さん、もう一息精出して、晩には觀音寺の夜談議、聽きに行かうぢやないかいな。

はな　さうせうわいなア。

勘太　ほんに、そりやァよからうわえ。この勘太も、お花女郎と手に手を取つて、行かうぢやないか。よかろぞや〳〵。（トお花の手を取る）。

はな　エヽ、おかんせいな。（ト振り切る）。

甚平　それ見たか。なんで、おぬしに女が惚れようぞい。大笑ひだ、ハヽヽヽ。

勘太　イヤ、笑はれては男が立たぬぞ。サア、お花女郎。

はな　エヽ、おかんせいな〳〵。

甚平　さうぢや〳〵。お前がたは、わしが後へ、取ツついたり〳〵。

女三　合點ぢやわいなア。

勘太　甚平、わりやァ邪魔するか。

甚平　オヽ、邪魔する程に、われが思ふ女子を、つらまへて見ろ〳〵。

勘太　おれが目附きは、あのお花。

皆々　サア、取つて見やれ〳〵。

ト釣り狐の合ひ方になり、念佛太皷をかぶせ、皆々よろしく追ひ廻す。向うよりおわた、浴衣、前垂れ、

素足にて、在所女房の拵へ、中食の入りし飯臺を頭へのせ、藥罐を下げ、片手に浴衣形の里松が手を引いて出てくる。あとより小島林平、百姓の拵へ、手甲、脚絆にて、大きなる草刈り籠をかつぎ、鎌を下げ、咬へ煙管にて出て來り、直ぐに本舞臺へくる。皆々入り亂れになり、勘太、おわたを捕へ

勘太　オット、つらまへたぞ〳〵。

わた　コレ、勘太どの、何しなさんすぞいな。

はな　こりや、お前は、佐五右衞門さんのお内儀さん。

皆々　そりや違うたわいな。ワアイ〳〵。

林平　モシ〳〵、お前方はもう煙草かえ。モシ、おかみさん、こゝらはもう左枝家の御領分でござりますかえ。

わた　イエ〳〵、この園原村は、鏡山の殿樣、俊行樣の御領地。地頭樣は、お情け深い高橋瀬左衞門樣。アレ、あの榜示杙に記してござんすわいな。

林平　成る程。又こゝらは鏡山の御領地。殊に、お情け深い瀬左衞門樣とは。いつに變らぬ、高橋氏は實義の武士。人は一代、名は末代ぢやなア。

わた　見ればお前は、このあたりで見馴れぬお方。お前はマア、どこの在所からござんしたえ。

林平　ハイ〳〵。わしは遠國の伊勢參りでござりまするが、路銀を切らしまして、稼ぎのため、こゝら
の大百姓へ作男に入りまして

皆々　して、どこへ雇はれてござつた。

林平　ハイ。どこかまだ名も聞きませぬ。この村境の大屋でござりましたて。（ト思ひ入れにて挨拶する）

三人　アヽ、そんなら甚五右衛門の内だんべい。

林平　たしか、そんな名でござりました。

はな　申し、おわたさん。コリヤお前、中食を持つてござんしたのかえ。

わた　さいなア。今日はこちの人佐五右衛門どのゝ、先妻の命日、それゆゑ、お前がたに上げうと思う
て、茶の子を持つて來たのぢやわいなア。

女三　そりや嬉しうござんすわいなア。

甚平　佐五右衛門どのは、先妻とちがうて、今度は若い女房を持たしやつたわいの。

わた　さいなア。今の連れ合ひ佐五右衛門どのは、お米といふ嫁入り盛りの娘もあり、殊に、姉御は京
の町へ養子にやり、わしや三年あとから、この子を連れて後家入り。なさぬ仲のこの里松を、眞
の子よりも可愛がつて下さるゆゑ、家の娘のお米どのも、一倍わたしや大切ぢやわいなア。

はな　ほんに、御夫婦ながら、正直なお方。聞けば、お前には、妹御があるぢやござんせぬかえ。

わた　アイ、わたしにもお松というて、妹がござんしたが、十四の年から在所を出て、身性がわるさに、恥かしい身になつて、京に居るとの事ぢやわいな。

はな　正直なおわたさんに事かはり

ゑせ　身性の悪い妹御。

勘太　イヤモウ、人に正直もあるに、此方の殿樣の御分地大學どのは、さて〳〵意地の悪い人ぢやわいの。

甚平　イヤモウ、目の寄る所へ玉がよると、供に歩く侍ひめらも、碌な奴は一人もござらぬ。

勘太　あの大學めが死なうたらよからうに、得て、憎まれ子國にはびこると、長生きをし居らうわいの。

三人　ハヽヽヽヽ。

林平　（これを聞き、思ひ入れあつて）身は御大家のお血筋に立ちながら、お心たけきお生れゆゑ、土民の疎み、世のあざけり。ハテ、是非もなき

わた　エ。（ト思ひ入れ）。

林平　アイヤ、あの殿樣にも困つたものサ。（ト素知らぬ顔をして居る）。

はな　サア〳〵、皆さん、おわたさんの心づくし、折角持つてござんしたに、いつもの處で開かうわい

な。

るせ　それがようござんす。

もよ　サ、里松どのも來なさんせいな。

里松　コレ、母樣、わしも姉樣達と一緒に行かうわいなう。

わた　ほんに、邪魔でござんせうに、子供といふものは。コレ、わやくを云ふまいぞや。

里松　アイ〳〵。

はな　そんならおわたさん

皆々　サア、ござんせいなア。

ト念佛太鼓にて、おもよ、里松の手を引き、おはな、おろせ、藥鑵の物を持ち、下座へ入る。殘りの人數捨ぜりふにて草を刈つてゐる。向うより松浦玄蕃、打裂き羽織、半纏、股引にて鷹を据ゑ、淺黄股引の仲間二人附き、スタ〳〵と出て來て、舞臺へ來り

玄蕃　ヤイノ〳〵、土ほぜりめら、今日は此あたりにて、主人大學樣お鷹野。うぬらが爰にいらざる草を刈るゆゑに、小鳥めが一羽も居らぬ。サア、きり〳〵と脇寄りせぬか。うぬらもそのまゝには致しおかぬぞ。（ト叱りつける。皆々こなしあつて）

勘太　ハイ〳〵。さやうなら脇へ參りませうが、村方へ何のお觸れもござりませぬゆゑ、そこで草を刈りました。御料簡なされて下さりませ。

玄蕃　イヤ、推參な土民めら。身共が詞を用ひぬに於ては、うぬら一々引ツくゝる。家來ども、ソレ、逃がすな。

仲間　ハア。

二人　そりや怒つたワ。

ト下座へ逃げて入る。中間追つかける。林平、下の方へ來て、煙草のみ居る。おわたも逃げんとするを玄蕃見つけ

玄蕃　コリヤ〳〵、女、そちばかりは逃げる事はない。矢張り爰に居ても、大事ない〳〵。

わた　ハイ〳〵。それは有り難うござりまするが、わたしや植ゑかけた田もござりまする。ドリヤ、もそつとぢや。植ゑつけて來ようか。（ト行かうとするを、玄蕃引きとめ）

玄蕃　イヤ〳〵、滅多にはやらぬ〳〵。見たところが、在所女房には惜しい年增ぢや。コレ、身共が心に從うてくれい。どうぢや〳〵。（トしなだれる）

わた　エヽ、なぶらつしやりますな。獨り身ぢやござりませぬ。主のある者を捕へて、エヽ、あた不行儀

な。放さつしやらぬと、聴く事ぢやござりませぬぞ。

玄蕃　サア、そこを身共の、爰でな。

わた　エヽ、よさつしやりませ。

ト爭ふうち、玄蕃懷中より密書を落す。おわた取つて、「大學之助樣へ笹山官兵衞」ト讀む、林平思ひ入れ。

玄蕃　これはしたり。われが見る狀ではないわえ。それを見ずとも、身共に、ちよつと。

トしなだれる。おわた狀を離さず

わた　エヽ、おかさんせいな。

玄蕃　ハテ、さう云はずと

ト捨ゼリフにて、おわたに戲れ、狀を取らうとする。はずみに、鷹の足に件の狀からみつき、玄蕃これを取らうとしてあせる。この時風の音して、トヒヨになり、小鳥大分飛んで來り、枝にとまる。鷹これをとらうと舞ひ上つて、狀の附いたるまゝに鳥を追ひまはし、小鳥飛び去る。この時、鷹の足、松の枝にからみ、いろ／＼してもがく。玄蕃膽をつぶす。この間に、おわた、玄蕃を突きこかし、下座へ入る。向うより三上郷兵衞、半纏、股引、鷹狩の形にて、この體を見つけ、駈け出で來り、玄蕃を見つけ

鄕兵　これはしたり、立番どの。御祕藏の小霞が、松の枝に足を搦み、アレ、あのやうに跪きまするワ。不調法千萬な。如何いたした儀でござる。

立番　サア、拙者めもさやう存じて、殿樣へ參つた密書、あの足にからみついたまゝ上つたゆゑ、此まに致しては置かれませぬ。まことに珍事ちうようでござる。

鄕兵　さやうでござる。あの儘に致して置きなば、鷹の命も危い〳〵。殊に官兵衞どのより、又ぞろ何やら火急の御狀。殿樣未だ御披見なきうち、風に揉まれて封じ目切れ、もし他人の目にかゝつては一大事。こりやどう致したらよからうなア。（ト いろ〳〵氣を採み、林平を見て）イヤ、幸ひな所に居合せた百姓。コリヤ、おのれ、よい所に居をつた。アレ、あの松ヶ枝へ駈け上つて、松にからみし繩を切つてまゐれ。サア、早く、上れ〳〵。（ト 林平に迫る。林平思ひ入れあつて）

林平　モシ〳〵、お侍ひ樣。そりやあなた御無理でござりまする。三丈餘りもある松へ、どう上られませう。さやうな蹴爪は持ちませぬ。枝が折れゝば命づく。これはつかりは、御免なされませ〳〵。

鄕兵　エヽ、此奴、埒の明かぬ奴でござる。もしあの枝から落ちたといつて

林平　助かりまするかな。

鄕兵　死ぬであらう。

林平　ソレ、御覽じませ。そのお役なら、御免なされませ〳〵。

郷兵　ハテサテ、此奴は未練な奴でござる。この上は玄蕃どの、こりや如何おしやるぞ。

玄蕃　サア、お急きなさるな〳〵。こりや斯樣仕らう。此あたりの杣どもを召し寄せ、この松を切り倒し、鷹を助けるより外はござらぬ。

郷兵　イヤ、妙計々々。コリヤ〳〵、土民、其方急いで杣どもを連れ參れ。サア、早く參れ〳〵。

ト林平を引張る。

林平　ハテ、このお侍ひ樣は性急なお方ではあるぞ。この松は卽ち、この園原村に久しい古木、これを滅多には切られますまい。

郷兵　そりや又、何ゆゑ。

林平　ハテ、この處は多賀の太守俊行樣の御領分。あなた方は大學樣の御近習方。尤も鷹野は武士のお役だと申せば、大家のお殿樣でも、御自身の泥草鞋は、こりや御遊興とは申されませぬが、他領へふんごみ、無理我まゝ。瓜や茄子を見るやうに、滅多に大木を切り倒し、出水、嵐、野分より、こなさんたちの山あらし。村開闢の前から在る松、斧を入れようとは、御支配が違ひます。御分地の殿樣でも、大學どのでも、どなたでも、後から後悔なされぬがようござります。

玄蕃　ヤア、士民に似合はぬ樣々のぬかし事。鄕兵衞どの、急いで杣をお連れなされい。

鄕兵　心得ました。ドレ、杣どもを　（ト行かうとする。向うにて）

呼び　殿のお入り。

ト呼ぶ。時の太鼓、誂への鳴り物にて、大學之助、花やかなる打裂き羽織、半纏、股引、切草鞋、誂への形、あとより坂本權平、半纏、股引、大小にて、結構なる騎射笠をもち、篠原傳五、同じ形にて、半弓を持ち・彥根嘉仲太、同じ形にて、枠床几を持ち、蟹山伴六、鳥本丹八、同じく鷹狩の形にて附添ひ出で來り、花道よき所にて、大學之助、鷹の體を見て

玄蕃　殿には御入來遊ばされましたか。

大學　松浦玄蕃、三上鄕兵衞。松の梢に搦みしは、予が祕藏なす小霞ならずや。

權平　その儘打捨て置かれなば、鷹の命も危ないもの。

傳五　木樵を召し寄せ、駈け上らせ、斧にて枝を打落さば

嘉仲　鷹の命は助かる道理。

伴六　猶豫なされず、御兩所とも、

丹八　殿の御祕藏、あの小霞、早く助ける

四人　お手段召されい。
立番　その儀も拙者油斷なく、杣を召寄せあの松を、切らんと申せば、これなる土民
郷兵　いらざる留立て致すゆゑ、さてこそ延引。恐れ入り奉つてござりまする。
大學　すりや、その土民が留立てするとや。コリヤ、ヤイ、下司め、おのれ、足を搦みし梢の鷹、取り得る工夫があつての事か。
林平　如何にもさやう。憚りながら、お二人の、お侍ひ樣が仰しやるは、人夫を以て松を切らうとなさるゆゑ、留めました。ハテ、田畑の脇へ大木を植ゑ置くは、憚りながら、何の爲でござりまする。
大學　ヤ、なんと。
林平　こりやこれ、大風を除けんため。申さずとも御存じでござりませう。田畑を大切に致すのが、百姓の心掛け。その風除けになる松を、切崩してもらうては、この村の大きな迷惑。殊に今から人夫を呼び集め、何十人かゝつても、半時や一時に、切り倒される木でもござりませぬ。さやうに隙どる其うちに、梢の鷹は身を踠き、立ち所に命を落す。すりや、大木を切つたというて、鷹が死んでは、何の役にも立ちますまい。草木心なしとは申せども、幾年ありしか知らぬこの松、切れば忽ち榮えを失ひ、千年の齡も今日限り。鷹の壽命も、松の壽命も同じ事。あまり無益な御詮議と存

ずるから、それゆゑお留め申したのでござりまする。

大學　土民には、はて利發なる返答。して又、おのれが才智にて、この松を切らずして、鷹を助ける工夫があるか。サ、、それぬかせ。

林平　ござりまする。榮えの松も切らずして、鷹を助けるその工夫、御前樣、この場でお目にかけませう。

大學　して又助ける

一同　その工夫は。

林平　只今お目にかけませう。……御家來衆、その半弓をお貸しなされませ、

大學　望みに任せ、あの者へ。

傳五　ハツ。

ト持つたる半弓を渡す。嘉仲太、床几を置き、大學之助、花道よき所へ腰かける。

林平　御覽じませ。この半弓を以て鷹の足がらみ射切るときは、大木も切り崩さず、鷹も全き私の手の內。この場で御覽に入れませう。

大學　面白い。見事、足搦み切つた上、鷹の命を助くるか。

鄕兵　若し御祕藏の小霞に、凶事ばしあつては

一同　赦さぬぞ。

林平　細工は流々。マア、御覽じませ。

大學　然らばこれにて、見物いたさう。

立番　殿の御前、無禮なさやう。

林平　ハツ。

ト風の音、木魂の合ひ方になり、林平思ひ入れあつて、半弓を番ひ、松の梢を狙ふ。大學之助花道にて林平へ目をつける。林平切つて放つ。過たず弦音して鷹の足草を射切り、鷹は空へ飛上る。皆々見て

一同　ヤア、鷹が、助かつたワく。

立番　早く捕へさつしやいな。

一同　心得ました。（ト騒ぐ中。鷹は何方へか飛び行く。）アレく、鷹が外れたワく。

鄕兵　南無三。鷹が外れたる上は

立番　笹山氏より參りし密書。足にからんで

林平　ヤア。（ト思ひ入れ。）

鄕兵　立番どの。こりや此まゝにはなりますまい。

立番　承知致した。いづれも、土民めに繩打たつしやい。

伴丹　心得ました。（ト兩人ツカ〳〵とゆき）腕廻せ。（ト林平へかゝる。少し立廻りあつて）

林平　こりや、何科ござつて私を

立番　繩かけさするは御祕藏の、鷹を逃がせしその科で。

林平　ヤ、なんと。

傳五　いらざるうぬの猿智慧で

嘉仲　鷹の命は助けても

伴六　取逃がしては役に立たぬワ。

丹八　それとも外れたるあの鷹を

權平　又ぞろ捕ふる工夫があるか。

林平　そりや御無體と申すもの。

鄕兵　然らば彼奴に繩打ち召れい。

一同　腕まはせ。（ト立ちかゝる。）

大學　聊爾いたすな。皆控へよ。

一同　ハア。

ト鳴り物になり、大學之助舞臺へ來る。林平下へ控へる。皆々取圍み居る思ひ入れ。

大學　最前より土民めが手練の程、中々常體の百姓づれに似合はぬ働き。コリヤヤイ、おのれ、まことの百姓ではあるまい。素性を吐せ。ナヽなんと。

林平　イヤ、全く以つて

大學　大學之助が眼力に、見拔き置いたる上からは、陳じ立てひろいでも、おのれら如きに騙かられんや。たつて云はねば、近習の者、拷問いたせ。

一同　ハッ。土民め、御意ぢや。（ト林平へかゝる。五人とも立廻りあつて、キットなる。）

立番　こりや、手向ひか。

林平　全く以て

大學　素性を吐せ。

林平　サアそれは

大林　サア／＼／＼／＼

大學　どうだ。

林平　ハテ、恐ろしい御眼力。いかにも御前の仰せの如く、拙者まことの土民ならず。親ども事はお家の譜代、小島林左衛門悴、同苗林平と申す者。

大學　すりや、其方が

林平　即ち拙者お國詰め、殊に部屋住み、各〻のお見知りなきを幸ひに

大學　姿を土民にやつしたか。

林平　如何にもさやう。

大學　して、その仔細は。

林平　御意見のため。

大學　ヤ、なんと。（ト林平草刈籠より大小を出し、帯刀して、大學の側に差寄り）

林平　エ、お情けなき御前樣。（ト誂への合ひ方、思ひ入れあつて）かねてお身持放埓にて、御城下の町人、百姓、數多の難儀は數へがたし。親林左衛門憚り多くも、御幼少よりお育て申せし御近習役、齢罷り寄り歩行叶はず、拙者を招き申す條、其方土民の姿となり、お鷹野の道を窺ひ、殿の御行ひ狼藉あらば、制せよとの詞に從ひ、御覽の如く樣を變へ、先きへ廻つて窺ふところ、他領へ入つて田畑を荒らし、剰へ、鷹野のために、大木を切らせん御我儘。歎きをかまはぬ非道。鷹の命を助け

たる、拙者を眞の百姓と心得、權威を以て召捕らんと、御前よきまゝ佞辯の、おもねりへつらふ松浦、三上。それに從ふ近習の武士。耳をねぶる佞人讒者を、お用ゐあるは愚かな事。親に代つて身共が意見、お聞届け下されて、殘らず遠ざけ、諸民をあはれむ御心あらば、大殿の御安堵。一家中の喜びは如何ばかり。御前樣、憚り乍ら、御心をお改め下さらば、御意見申せしこの身の大慶、有り難く存じ奉りまする。（ト思ひ入れ。大學之助脇目もふらずに居る）。

玄蕃　ヤア、默れ、二才め。身共を佞人讒者とは、舌長き今の一言。

鄕兵　こりや、この儘では濟みますまい。

林平　濟まぬというて、何とおしやる。

鄕兵　ハテ、知れた事。三上が刀の

林平　切れ味見せると、お云やるか。

玄蕃　その舌の根を切り下げて（ト思ひ入れ）。

大學　兩人控へい。

二人　ぢやと申して

大學　控へいと申さば、控へて居らう。

二人　ハッ。
大學　林左衛門が忰林平。
林平　ハッ。
大學　まだ弱年の身なれども、父が詞をよくも守り、予が目通りにて只今の諫め、大學之助一言一句も返す詞がない。うい奴ぢや。出かした。併し汝の諫めをも、予が聽入れねば如何いたす。
林平　ハッ。その儀は親共とも、暇乞ひの仕り參つたれば、お聞き濟みなき時は、その座を去らず
大學　切腹いたすか。
林平　輕き命を捨てましても
大學　諫言なすか。
林平　かねて覺悟は極め居りまする。
大學　ハテ、うい奴ぢや。……聽きとゞけた。
林平　ハッ。
大學　其方が諫言聽きとゞけた。則ち鷹野も今日限り。直樣歸館いたすであらう。
玄蕃　アイヤ、殿樣、さやうあつては。

大學　ハテ、大事ない。歸館致す。……ナ、何事も身が胸中に、とくと承知仕つて、この場より直樣立歸る。コリヤ、林平。今日よりして其方こと、身が目通りで使うてくれる。近習役を相勤めい。この由、林左衞門方へ申しつかはし、安堵させい〳〵。

林平　すりや、私が憚り多き、御諫言をお聞き屆け下され、お心を改めらるゝのみならず、今日よりして御近習格に取立てられ、お側仕へ仕れとは、有り難き御惠み。親ども斯くと承らば

大學　老いの悦び。滿足に思ふか。

林平　仰せまでも候はず。重々厚き御惠み。

大學　殊に家々の重器改めとして、管領の到着も今宵と聞く。其方は急ぎ邸へ。コリヤ、林平を、同道いたし遣はせ。

權平　畏りました。……サ、林平どの、御同道仕らう。

大學　行け〳〵。

林平　ハツ。（ト合ひ方になり、林平、權平、思ひ入れあつて、下座へ入る。玄蕃、鄕兵衞、思ひ入れあつて）

玄蕃　御前。合點が參りませぬ。これまであなたに御諫言申せし者は、一人も殘らずお手討ち。

鄕兵　その御短慮に引きかへて、生弱輩のあの林平、そのまゝに差置き、お歸しありし殿の胸中。何共以て

四人　合點が參りませぬ。

大學　汝等が不審尤も。土民となつて今の諫言、わざと手討ちにならんず胸中。他領に於て大學が、野人の差別無く、殺害なせしと國中へ觸れ流させ、それを云ひ立て武將への、聞えを憚る爲なんぞと、家老どもが云ひ合せ、かねてしつらふ座敷牢、某を押込めになさんといふ事は、とくより推察いたせしゆゑ、無事に歸せしあの林平。予が眼力に見拔いて置いたワ。

玄番　流石は我が君、大學樣。天晴れ御賢慮。驚き入つてござりまする。

ト思ひ入れ。バタ／＼になり、下座より里松と勘太、以前の鷹を引つ張つて、爭ひ／＼出る。最前足にからみし一通、矢張り鷹と一緒に奪ひ合ふ。甚兵衞留めながら出る。

勘太　コレサ／＼。この子は無理を云ふ子だ。この鳥はおれが持つて行つて、菜を入れて煮て食ふワ。寄越さつしやい／＼。

里松　イヤ／＼、この鳥は此方の田へ下りたによつて、わしがのぢや／＼。

甚兵　コレサ、子供が鳥を何にする物だ。此方へ、寄越さつしやい／＼。

勘太　わやくをいふと、親仁に告げるぞよ。

里松　イヤ／＼、おれがのぢや／＼。

勘太　ハテ、情のこはい。離さないと當所の支配、瀨左衞門樣へ訴へて牢へ入れるぞ。

甚兵　コレサ、離さぬか〳〵。

ト捨ぜりふにて鷹をうばひ合ひ、足に搦みし密書もろとも引合ひ〳〵するゆゑ、密書はちぎれ〳〵になり、鷹も兩羽搔ちぎれ、死ぬ。三人驚き

勘太　アヽ、鳥を、引裂いたワ〳〵。

里松　まどうて返せ〳〵。（ト鷹を持つたるまゝ足摺りして泣く。鄕兵衞見つけ）

鄕兵　ヤ、待て〳〵。その餓鬼めが持つたるは、正しく御前の祕藏なる、只今外れたる、小霞でござるワ。（ト里松を捕へ）御覽なされい。鷹は羽がひを引裂かれ、こりやこれ、死んで居りまする。

玄蕃　殊に笹山氏より火急に來りし、未だ御披見遊ばされぬ、書翰も爰に。コレ〳〵、文字も切れ〴〵、ちぎれ〳〵。こりやこれ、一くだりも讀めませぬワ。

ト密書を持つて思ひ入れ。大學之助カッと顏色變り、密書と鷹を兩手に持ち、キッと思ひ入れあつて、あたりへ投捨て、拔討ちに里松を切り倒す。「ワッ」と叫び倒れる。殘りの百姓「ワッ」というて逃げて入る。皆々見て

鄕兵　御前樣。他領に於ては、お手討ちを、決してなさらぬ今のお詞。

立番　その刻限も終らぬうち、土民の小倅この如く、お手討ちになされしは

大學　他領の餓鬼ゆゑ。

鄕兵　エ。

大學　今、土民めらが、當所は、高橋瀨左衞門の支配地と吐したぞよ。

立番　御意の通り、あれなる榜示に記せしは

大學　ドレ。（ト土手の榜示へキツト目をつける。時の鐘）。瀨左衞門が支配地なれば、多賀の陣屋は村境。かねて意趣ある高橋兄弟、直樣押しかけ返答させ、樣子によつて。（ト兩人に思ひ入れにて呑込ませろ）

鄕兵　只今これなる密事の狀、引きちぎつたるあの小倅。

立番　君の祕藏の鷹もろとも、引裂いたるが自業自得。

大學　おのれ、高橋、今にぞ思ひ

皆々　すりや、御前樣には

大學　コリヤ。

ト思ひ入れ。時の太鼓になり、この道具をぶん廻す。

本舞臺、三間の間、中足の屋體。向うの床の間、誂への襖、緣側つき、石の手水鉢。東西高塀、見越しの松。すべて多賀家陣屋のかゝり。爰に松田幸兵衞、麻上下、大小にて、狀を書いて居る、八つの時計になり、この道具舞臺よき所まで押出し、留める。

ト 侍 二人、下座より出てくる。

侍一 只今打ちましたが未の上刻。番代りでござりまする。

幸兵 成る程。相役は高橋氏、見えらるゝまで御陣屋の詰番は、斯く申す松田幸兵衞。瀨左衞門どのわせらるゝに間もあるまい。暫らく控へて居やれ。

侍二 ハツ。

ト唄になり、向うより高橋瀨左衞門、上下、大小にて、若黨一人、掛け物入れし白木の箱を持ち、林平、麻上下、大小に着替へ、草履取りの仲間附き、出て來り、花道にて

林平 それへお越し召さるゝは、高橋瀨左衞門どの、その後は打絕えましてござるが、其許にも御健勝の段、祝着至極に存じまする。

瀨左 さやう御意なさるゝは、分地左枝家の御家中、林左衞門どのゝ御子息ではござらぬか。

林平 さやうにござりまする。幼少より其許樣の、劍術の指南下されし、林平めでござりまする。

瀬左　成る程、林平どの。さて〳〵、久々にも御意得申した。お物語りも爰は途中。マア〳〵、あれなる陣屋へ、サア〳〵、同道仕らう。

林平　先づ〳〵、お先へ。

瀬左　然らば、御免下されい。（ト兩人本舞臺へ來る）。

幸兵　瀬左衛門どの、只今お越しなされたかな。

瀬左　これは幸兵衛どの、嘸かしお待ちなされたでござらうに、無禮の段は容赦にあづかりたう存ずる。只今も道にて、左枝の御家中、以前拙者が劍術の一手も指南仕つた林平どのに行合ひ、同道仕つた。サヽ、御遠慮なう、これへ〳〵。

林平　イヤ〳〵、お構ひ下さるな。拙者只今までも國許に罷りあり、部屋住みの身分。ふと今日お見出しにあづかり、今宵卽ち御到着遊ばさるゝ管領のお迎ひに、罷り越しましてござりまする。

幸兵　すりや、其許が、左枝家の老臣、林左衛門どのゝ御子息とな。拙者は高橋氏の相役、松田幸兵衛と申すもの。この程までも、ふと致したる越度ござりしかど、瀬左衛門どのゝ働きを以て、この身の明りも立つと申し、斯樣な悦ばしい儀はござらぬ。今日斯樣に御用相勤めまするも、誠に其許のお蔭、幸兵衛、手を突いてお禮申す。忝うござる〳〵。（ト思ひ入れ）。

瀬左　これはしたり。サヽ、お手上げられい。只今林平のお云やる通り、都より管領の到着は、その家々の重器お改めとの事。則ち拙者預り奉る多賀の重器、菅家の一軸、斯様に持參仕つてござる。殊更お出迎ひは、弟彌十郎が役目。則ち今日正七つとの仰せ出され。これに附けても、お家の重器、紛失の香爐の行くへ。

林平　ヤ。

瀬左　アイヤ、弟彌十郎も、追ッつけこれへ參る筈でござる。

幸兵　なにさま、弟彌十郎どのは、お迎ひのお役でござるか。拙者も共々、道までお迎ひに參上仕る心掛けでござる。

瀬左　それは近頃、御苦勞に存じまする。

林平　この林平めも參上いたせば、御同道仕りませう。

幸兵　然らば後刻、高橋氏。

瀬左　御兩所。

林平　サ、お先へ。

幸兵　イザ、御同道仕りませう。（ト唄になり、幸兵衞、林平に家來ついて下座へ入る。瀬左衞門思ひ入れ）。

瀬左　殿より預り奉るお家の重器、菅家の一軸、身共が守護して罷りあれども、今一品の靈龜の香爐紛失なせしも、正しく御家門（ト思ひ入れ）。事荒立てぬ香爐の詮議。ハテ、手がゝりが、ありさうなものぢやが。

瀬左　ハテ、心得ぬ。時太鼓には事かはり、人を集むる法螺貝、半鐘。もし在方に狼藉者か、盜賊か。ハテ、心がゝりな。

ト思ひ入れ。この時、法螺貝の音、村々にて用心太鼓打立てる。半鐘を突く。瀬左衛門思ひ入れあつて

ト屹度思ひ入れ。合ひ方になり、向うより大學之助、立腹の體にて出て來る。あとより郷兵衛、嘉仲太、伴六、丹八、附添ひ、あとより仲間二人、吊り臺に子役の死骸を載せ、蓑を掛け、これを荷はせ、つか〳〵と出て來り、舞臺へ來る。瀬左衛門見て

思ひがけなき、大學樣の御入來。

大學　瀬左衛門か。

瀬左　ハツ。……先づ〳〵あれへ。（ト大學之助草鞋のまゝ上座へ通り、床几にかける。皆々下に控へる。瀬左衛門思ひ入れあつて）見ますれば、今日は、鷹野のお催しと相見えまするが、最早御歸館でござりまするかな。

大學　コリヤ、近習の者。その死骸、瀬左衞門に、とつくと見せい。
一同　ハア。（ト吊り臺の子役の死骸を出し、よき所へ置く）。
鄕兵　瀬左衞門どの、小忰が死骸、お覺えがござるかな。
瀬左（いろ〳〵あつて）拙者覺えは御座らねど、帶につけたる迷子札に（ト腰の札を引きり見て）清水村百姓佐五右衞門忰里松。……こりやこれ、瀬左衞門が支配所百姓、佐五右衞門が忰。
四人　大學樣のお手討ちでござる。
瀬左　さてこそ只今、村方にて、人集めの半鐘は、大學樣のお手討ちを、狼藉者と心得てか。
大學　その狼藉はその小忰、予が祕藏なす小霞といふ鷹、ソレ、その如く引裂き殺し、まだその上に、大切の書翰に（ト思ひ入れ）。サ、鷹を殺せし憎き童、腹中に据ゑかね、手討ちに致した。鷹の死骸を瀬左衞門へ。
傳五　ハア。（ト引裂きし鷹を瀬左衞門が前に置く）。
瀬左　すりや、御祕藏のその鷹を
大學　その如く童が無禮。瀬左衞門、この處は其方の支配地でないか。イヤサ、百姓共へ常より屹度申渡さば、斯かる無禮はないわえ。こりや、何か。分地の左枝家、殊に部屋住みの大學ゆゑ、百姓共

へ申しつけての、斯かる無禮か。さうか〳〵。
瀬左　アイヤ、さやうな儀存じもよらず。御前樣が當所のお鷹野、前以てお屆け下さらば、道筋警固、掃除の者附け置きまする筈なれど、御沙汰なきお越しゆゑ、かゝる狼藉出來いたす。そのお疑ひ、幾重にも、御容赦なし下さりませう。
大學　すりや、其方が申しつけではないと申すか。
瀬左　なか〳〵。さやうでござりまする。
大學　然らば童が親、佐五右衞門とやら、これへ召しよせい。
瀬左　御用ばしござりまするかな。
大學　手討ちに致す。
瀬左　小兒をお手討ちの、又その上に。
大學　親めも呼び寄せ、嬲り斬りにせぬうちは、祕藏の鷹を殺された、無念殘念晴れやらぬワ。
瀬左　まだこの上に親の命を
大學　くどいワ。
瀬左　ハテ、是非もなき。（ト思ひ入れ）。

郷兵　これサ、瀬左衛門どの、斬られた親めは貴殿の御支配。コリヤかばひ立ておしやるのか、ようござる。この上は近習の面々、何れも手分けなし、佐五右衛門といふ土民を尋ね、召連れさつしやい。

四人　心得ましてござりまする。

ト立上がる。この時、向うより佐五右衛門、老けたるこしらへ、百姓の形、跡よりおわた走り出てくる。

佐五　ハー〳〵、申し上げまする。悴めが斬られたとやら申すこと、承りましたゆゑ、中を飛んで参りました。モシ、そりや眞でござりまするか。仰しやつて下さりませ〳〵。

わた　大切の〳〵里松が、何の科で斬られました。僞りでござりまするなら、どうぞお逢はせなされて下さりませ〳〵。（ト兩人緣先へとりつき願ふ。）

郷兵　さては汝らが餓鬼めの親か。コレ、お手討ちの死骸は、ソレ〳〵、そこにあるワ。

佐五　ナニ、あの里松の死骸が

わた　里松かいなう。

佐五　（駈寄り見て）ヤヽヽ。こりや悴めぢや。

わた　里ぢやわいの〳〵〳〵。此やうにむごたらしう、何の科で斬らしやつた。コレ、佐五右衛門どの生さぬ仲でもお前の子、敵を取つて下さんせ〳〵。

ト死骸に取附き思ひ入れ。佐五右衛門縁先へドッカと坐し

佐五　コレ、瀬左衛門様。あの悴はわしが實の子ぢやござりませぬ。この嬶めが三年以前、わしが所へ連れ子。あの餓鬼は義理のある子でござります。年端も行かぬ者を、どれ程の科で斬られました。何奴めが斬りました。云うて下さりませ〳〵。(ト急き込んでいふ)。

郷兵　ヤイ〳〵、土百姓め。おのれら夫婦が餓鬼とあらば、さては汝が佐五右衛門だな。二親とも縛り首だ。腕まはせ。

佐五　エヽ、置かつしやいな。子を殺されたその上に、なんでわしを縛り首とは

大學　默れ、土民め。予が祕藏なす、鷹を殺したその科で

わた　エヽ、すりや、その鷹をあの里松が

大學　親子の奴らが命取らねば、憤り散ぜぬ。サア、ぶつ放す。それへ出をらう。

佐五　エヽ。すりや悴を斬つたはこなたぢやの。エヽ腹の立つ。貴様はおれが子の敵ぢや。(ト立ちかゝる)。

四人　慮外な奴の。(ト引据ゑかゝる。佐五右衛門突きのけ、大學之助へかゝるを、瀬左衛門引きつけ)

瀬左　コリヤ待て、其方は狼狽へたか。あなたをおのれ、どなたぢやと思ふ。當國多賀の御家門、大學之助様、御分地の殿様ぢやぞ。

佐五　エヽ。（ト思ひ入れ）。
瀬左　コリヤヤイ、土民如きの身を以て、御大身の御方を、汝等風情が、なんと敵と討たれうぞ。うつけ者。たはけ者。控へ居らぬか。
わた　イエ〳〵、子の可愛さはどの親々も同じ事。大名でも、殿様でも、敵を取らにやなりませぬ。
佐五　さうぢや〳〵。百姓の子は無理殺しにあうたりとも、解死人は取られぬといふお觸れでもござつたか。これにつけても、宿に殘した姉お米。コレ嗅よ。われもあの娘は生さぬ仲ゆゑ。義理があらう。おりや又生さぬ仲の義理。あの里松を殺した敵は大學どの。無法者、大惡人。人に怨みがあるものか、ないものか、今に思ひ知らせまするぞ。
大學　ヤア、予に向つてその雜言。汝も刀の錆になれ。（ト立ちかゝる。瀬左衞門留めて）
瀬左　イヤ御前、お待ち下さりませう。
大學　瀬左衞門、そちやあの土民をかばやるか。
瀬左　イヤ、全く以て。
佐五　エヽ、こなたはなう。（ト立ちかゝる。瀬左衞門制して）
瀬左　コリヤ、佐五右衞門。他領の殿とはいふものゝ、矢張り多賀家の御分地なれば、當家の御家門。

佐五　ムウ。（ト思ひ入れ）。

俊行公も同然なるぞ。

大學　ヤア、たつて留立てひろいだら、高橋、其方から手討ちの相伴。

ト切つてかゝる。瀬左衞門よろしく立廻り、郷兵衞三四人かゝらうとするを、佐五右衞門立廻り。此うち瀬左衞門、箱の中より掛け物をとつて、大學之助が刀を打落し、一軸にて散々に大學之助を打据ゑる。大學之助虼皮なつて

大學　コリヤ、瀬左衞門、手向ひか。

瀬左　全くお手向ひは仕らぬ。

大學　イヽヤ、手向ひ。なぜ打つた。

瀬左　イヤ、こりや御先祖の御靈筆。

大學　なんと。

瀬左　この一軸こそ菅家の正筆、多賀のお家に傳はる重器。

大學　ヤ。

瀬左　御先祖の御怒り、非道のあなたを、マツ斯う〳〵。

ト一軸にて打擲なす。大學之助屹度なつて、切つてかゝろを立廻り、瀬左衞門屹度留めて

おせきなさるな大學樣。身不肖なれども高橋瀬左衞門、多賀俊行公の御眼力を以て、一郡を支配仕り、上を敬ひ、下を憐み、政道に私し無きに、今日の仕儀。たとへ幼少にもせよ、人間の命を取る事輕からず。元の起りは鷹野の道筋、御家門とは申しながら、他領の儀なれば、先觸れもあるべき筈。一向にお知らせなく、差掛かりたる事なれば、大學樣とは知らぬから、辨へ無き小悴、鷹を爭ひお手討ちになりし上は、御政道は相濟みしに、又ぞろ親をも害せんは、我儘氣儘の御行跡。大殿、又は拙者が主人、俊行公のお耳に達する時には、御身の爲に惡かりなん。土民が悴一人たりとも、多賀の領地の農人なれば、その儘には打捨て置けねど、いゞは一家の間柄、事穩便に計らふ拙者が寸志。大學樣、イヤサ、大學之助樣、いかに百姓なればとて、蟲同然のこの手討ち。もと農人は天下の寶と申す。御前の鷹野は何の爲でござりまする。今太平の御代なれど、禮を忘れぬ教へならずや。さればこそ、御大身の御身にも、草鞋にて露霜に打たれ給ふ。それに引きかへ、田畑を荒し、民百姓の難儀をいとはぬ御遊興の御鷹野。今拙者めが諫めにて、非道のお心改められ、御本心におすゝめ申す。御異見は卽ち菅家のこの一首。「わがたのむ人をむなしくなすならば、天が下にて名をや流さん。」其お心の募りなば、惡の御名を天が下、流さん事は目のあ

たり。今の諫めもお用ひなくば、お命を申しうけ、腹かッさばく拙者が心底。サヽ、大學之助樣、有無の返答、承りたう存じまする。

郷兵 いはれぬ無禮、瀨左衞門。イデ

四人 我々が。（ト立かゝる）。

大學 コリヤ、鎭まらぬか。下に居らう。今高橋が諫めの一言、この身にチッと。（ト思ひ入れ）。コリヤ、近習の者、暫らくの間、次へ立て〳〵。（ト目くばせして思ひ入れ）。

一同 ハッ。（ト下座へ入る。郷兵衞殘る）。

大學 ア、まことに忠言耳に逆ふと、家老どもが數度の諫言、一向に取上げぬ某、今といふ今五臟を貫き、心魂に徹したる瀨左衞門が異見。忝ない、悅ばしいぞよ。予が非道を矯め直すは、御先祖菅家のお手づから、怒り給ふ御打擲と思へば、さら〳〵以て恥かしからず。今より本心に戻る大學。瀨左衞門、よくぞ打擲、いたしてくれたな。

瀨左 すりや、只今の拙者が諫言、お聽き屆け下されて

大學 家來も多くある內にて、誰一人諫言の武士もなく、他家の家來の瀨左衞門は、予が爲には弓矢神。其方が打擲なさずんば、いつまでも予が非道。今日只今、本心になつたるも、高橋が庇。ハテ、

俊行どのには、善き家來を持ち召されたな。

瀬左　さやうなれば、愈々あなたは御本心に。（ト思ひ入れ）。然る時には、一同の悦び、拙者とても如何ばかりか、有り難く存じ奉りまする。

大學　これにつけても手討ちの小兒。（ト佐五右衛門と顔見合せ、思ひ入れ）。佐五右衛門とやら、夫婦の者、悴を討たれ、憤りの段、尤も至極。今といふ今、夢の覺めたるこの大學、其方に敵と討たれたいものなれど、予が本心になる上は、一國の悦びとある。これまでは無成敗に人を害ひ、其方にも愛子を失ひ、殘念ならんが、約束事と諦めよ。悴が菩提は予が弔うて得させん。大學之助。手を突き、頭を下げる程に、佐五右衛門、料簡してくれい。（ト思ひ入れ。佐五右衛門、おわた、こなしあつて）

佐五　これはマア、何と申してよからうやら。只今までは悴が敵、喰ひついてもと存じたなれど、お大名樣のその御挨拶。蠅蟲同然の私しへ、お手を突かれて、頭を下げ、モシ／＼、お手をお上げなされませ。力味返つた私しも、料簡せいとのお詞で、この上何と申されませう。私しも、ハイ、男でござりまする。

わた　私くしどもが胸も晴れ、コレ／＼佐五右衛門どの、あの里松を斬らつしやつたはお大名樣。その殿樣を御異見なされたは地頭樣、それで善心におなりなされば、死んだこの子は、あなたへ異見いうたも同然。

佐五　オヽ、さうぢや。女房ヽよう云うた。お心が直つて一國の悦びとなればナ、里松が命一つで、何萬人の助けか知れぬ。オヽ、出かした〳〵。ハイ〳〵、高橋様、只今のお詞で、私しが胸もさつぱりと晴れましてござりまする。もう〳〵お恨みは致しませぬ程に、あなた様へ宜しう、お詫びなされて下さりませ。

わた　なされて下さりませ。

瀬左　オヽ、天晴れ出かした。其方が料簡は、即ち大學之助様が一生のお身の納まり。申さば悴は氏神同然。コリヤ、些少なれども野邊の營み。(ト袱紗包みの金をやる)。

佐五　エヽ、有り難うござりまする。先達てもお米めが、多賀の社で一兩の、お惠みの上に聟孫七、御赦免ありし御高恩。

瀬左　すりや、孫七が舅であつたか。

佐五　そのお米が姉のお龜、音信不通に京都の道具屋へ、養子合せの與兵衛といふは、高橋様の弟御。御幼名はたしか孫三郎様。

瀬左　すりや、孫三郎に嫁はすお龜は

大學　ヤ。(ト思ひ入れ)。

わた　アヽ、コレ、詞多きは却つて何かの。ナ、モシ。サ、もうお暇申しませう。

と思ひ入れ。大學之助こなしあつて

大學 佐五右衞門夫婦のもの。（ト思ひ入れ）。

二人 ハツ。

大學 アヽ、愁傷の程察し入る。願ひあらば何事なりとも、左枝の役所へ願うて參れ。

佐五 有り難う存じまする。さやうなれば瀨左衞門樣。

瀨左 夫婦の者。必ずあなたを。（ト思ひ入れする。兩人のみこみ）

二人 ハイ。

ト唄になり、佐五右衞門死骸を抱き、おわたが手を引き、こなしあつて向うへ入る。

大學 今の土民が心の內、思ひやられて後の後悔。予が本心になつたるも、偏に菅家の御正筆。この一軸の御惠み。（ト思ひ入れあり）。イヤナニ、瀨左衞門、某未だ多賀の重器、その御正筆、これまで一度も拜禮いたさぬ。瀨左衞門、よき折から、なんと拜見させてはくれまいか。

瀨左 成る程。此たび京都より菅領の到着は、お寶改めの役目。拙者預り罷りある一軸、お上屋敷へ持參の今日。餘人の拜禮は叶はずとも、御家門のあなた樣は、拜禮の儀苦しうもござりますまい。

イザ、お手水遊ばされませう。

大學 承知いたした。郷兵衞、手水を。

ト合ひ方變り、郷兵衞下の方縁先の手水鉢の柄杓を取上げ、大學之助手を洗ふ。この時、玄蕃、塀の蔭より手槍を携へ出かける姿、手水鉢へ映りしを大學之助見つけ、郷兵衞も思ひ入れあり、まだ早いといふ仕方。瀬左衞門これを知らず、床の間の掛け物を取つて箱の中の一軸を掛ける。上の方より以前の四人出かゝり、縁先に窺ひ居る。

瀬左 イザ、御拜あられませう。

大學 瀬左衞門、とてもの事に、その文、詳しう讀んでくりやれ。

瀬左 承知仕りました。

ト二腰を片脇へ置き、無腰にて一軸の方に近よる。玄蕃手槍を大學之助に渡す。瀬左衞門一軸に向ひ

九枝燈盡唯斯曉　一葉舟飛不レ待レ秋

欲下以二浮生一期中後會上　還悲石火向レ風敲

「思ひやる心ばかりはさはらじを何隔つらん峯のしら雲」

ト讀むうち、玄蕃一軸へ手をかける。瀬左衞門見て

ヤ、大切なる一軸ハ。

ト刀を取つて立ちかゝろ、大學之助槍を持つて突いてかゝり、太股をしたゝかに突く、瀬左衞門たちたぢとなる。この時、下手より家來大勢、ばら〱と出で

一同 ヤア、御主人を

ト立騒ぐ。四人一度に拔いてかゝる。これにて家來向うへ逃げるを、四人追ひかけて入る。瀬左衞門立上がらんとする。大學之助槍にて突く。鄕兵衞切つてかゝるを、瀬左衞門裾をかいどり、鄕兵衞を引きつける。此うち、玄蕃は一軸を取納め、懷中して、床にかけたる掛け物を取つて箱の中へ入れ、元の如く置く。凄き合ひ方になり、瀬左衞門こなしあつて

瀬左 こりや、瀬左衞門を、騙し討ちとは、卑怯至極。

大學 もう叶はぬワ、瀬左衞門。この程多賀の社にて、企みを氣取りし其方、生けては置かれぬ。今日まで生き延せしは、折よき場所にて出合はぬゆゑ、助け置いたが殘念至極。先觸れなさず今日の鷹野も、事がな出來よと願ふところ、幸ひ餓鬼が慮外を囮とし、まッ斯くなさん我れが計らひ。

瀬左 扨は身共を騙かりし大學どのゝ計らひよな。この場に命を落すとも、御身を失ひ諸人の嘆きを。それとも知らずうか〱と、騙られたか、うつけ者めが。

ト刀を拔き、槍の穗先を切つて捨て、よろめき立廻りあつて、大學之助たぢ〱となる。鄕兵衞斬つ

てかゝるを、瀬左衞門立廻つて、鄕兵衞に手を負はせる。玄蕃一軸を持つて

玄蕃 我が君樣。

大學 一軸奪ひ、はや落ちよ。

玄蕃 ハツ。

ト捨て鐘にて向うへ走り入る。此うち、瀬左衞門、鄕兵衞立廻りあり、見事に切り下げる。鄕兵衞苦しみ倒れる。大學之助後より鄕兵衞の刀にて瀬左衞門をしたゝかに切り下げ、撞と坐すを槍の先にて止めをさす。この時、バタ〳〵にて、下座より林平走り出て來り

林平 ヤヽ、高橋どのを此お手討ち。

大學 そちや林平か。予に無禮せし瀬左衞門、それゆゑ身共が

林平 イヽヤ、相手はこの林平。高橋どのを討ちしは拙者。申し譯には、まツこの通り。御前樣ではござりませぬ。(ト腹へ突き立てる)。

大學 ハテ、愛い奴な。

トにつたりする。この時、向うより高橋彌十郎、麻上下、大小にて、草履取り一人附き出て來る。下座より幸兵衞、つか〳〵と出て

幸兵　ヤヽ、林平どのゝこの自殺。高橋どのゝ横死といひ

彌十　ナニ、兄瀨左衞門どのを

ト駈けよらんとして、大學之助を見て、席を恐れ、ハツと下へ下つて思ひ入れあり。

こりや、大學之助樣のお手討ちよな。

林平　イヽヤ、主人は御存じござらぬ。相手は卽ちこの林平。その云ひ譯はこの切腹。

彌十　すりや、兄を害せし敵は左枝家、小島林平とな。(ト鄕兵衞の死骸を見て)外に深手の三上鄕兵衞。

これも左枝の家中の武士。(ト合點のゆかぬ思ひ入れ)。

幸兵　大切なる菅家の一軸。(ト箱を取上げ思ひ入れあつて)高橋どのには數ヶ所の手疵。この林平に、か

すり手とても見えず。

大學　アイヤ、相手は林平。併し眼前、兄の仇、切腹したればこの末も、敵と覘ふ世話も無く、彌十郞

にも嘸や滿足。(トこの間に彌十郞思ひ入れあつて、大學之助を見詰め)

彌十　御家門たる大學樣の、只今のお詞、身に取りまして如何ばかり(ト林平へ思ひ入れあつて)相手の武

士の林平は、兄瀨左衞門が武術の門弟、辨へある身を以て、師と賴んだる高橋を、よも刃傷に及

ぶべき。(トこれにて林平思ひ入れ。彌十郞こなしあつて)ハテナア。(トこの時七ツの時計打つ)。

大學　最早管領お着きの刻限。

彌十　すりや、あの時計は

幸兵　氣の毒ながら役目の時節。

彌十　とはいへ、眼前、兄の知死期を

　　ト瀨左衞門が死骸へ思ひ入れ。七つの時の太鼓を打つ、彌十郎槍の穗先を取上げ

切り折る手槍は……すりや疾くよりも、用意あつてか。

大學　立たぬかえ。

彌十　ハツ。

　　ト思ひ入れ。大學之助、林平が死骸を二重舞臺より蹴落し、持つたる扇をサラリと開く。これにて木の頭。彌十郎、大學之助へ目をつけ、無念の思ひ入れ、屹度なる。大學之助、ニツタリと笑ふ。これをキザミにて宜しく、

　　拍子　幕　（勝俵藏）

三幕目

多賀御殿の場

高橋居宅の場

役名——鏡山の太守、俊行公。笹山官兵衞。官兵衞下部、權內。玄蕃妹、あざみ。矢橋喜惣太。

粟津比良藏。堅田照太郎。三井秋之丞。腰元、早百合。同、よもぎ。松浦玄蕃。下部、倉平。
彌十郎妻、皐月。高橋彌十郎。

本舞臺、三間の間、高足、高欄つきの御殿。向う一面の障子、欄間長押、鐵物、廻り縁。下の方、植込み。舞臺先き中程より下座へ、繪心の波板、これに杜若たつぷり花ざかり、いづれも誂への通り。幕の内よりあざみ、腰元の形、踊りの稽古して居る。三井秋之丞、矢橋喜惣太、粟津比良藏、堅田照太郎、麻上下、近習にて立ちかゝり居る。吉原雀の唄にて幕明く、

〽その手で深みへはんま千鳥、通ひなれたる土手八丁、口八丁にのせられて、沖のかもめの二丁立、三丁立。

トあざみ踊り、よき程につまづき倒れる。

秋之　あざみどの、踊りに辷つて倒れたところが、きつい見物だ。

四人　やんや〳〵。

あざ　(ムッとし) なんぼ其やうに惡う云うても、わたしが所作は兩大和屋の直傳。此やうに踊りを稽古するも、殿樣のおため。なぜといはしやんせ、この間より殿樣には御病氣、お床に附かせらるゝ程はなけれど、御家門方より日々のお見舞ひ。

喜惣　サア、それがどう致したな。
あざ　それゆゑわたしが、この面白い踊りでお慰め申したら、直ぐに御本復。
比良　何を本復。こなたの踊りを見ると
照太　肩癖が張りますワ。
あざ　又かいなア。なんぼ其やうにいうても、御殿に上る踊り子の中、わたし程の器量もないゆゑ、所作で殿様にくひつかせ、お手が附けばお前方も、目をかけてやるわいな。
比良　きつい自惚れ。鏡を見た事がござらぬか。
喜惣　檜物町の神主さんが聞いて呆れます。
あざ　それでもこの間、ポチャ〳〵うまい奴ぢやと、方々の殿様が
四人　そりやどういふ氣であらう。
あざ　それでわたしも
四人　どうした。
あざ　コレ。
〽さうした黄菊と白菊の

トあざみ、口説模様の振りよろしく、四人は一人々々あざみを突き倒し、下座へ逃げ入る。唄になり、向うより彌十郎妻、皐月、家中女房の形にて出てくる。あとより權内、中間にて、風呂敷包みと文箱を割掛けにして出て來り、花道にて

權內　モシ〳〵。そこへござるは、皐月樣ぢやござりませぬか。

皐月　ヤア、そなたは權內かいの。（ト逃げようとするを）

權內　アモシ。（ト引止める）。お旦那がどこへも出すなと、いひつけて居るのに、ハアこりや、あの彌十郎どのへ駈出してござるのだな。

皐月　アヽコレ、なんの、兄さんの心に叶はぬ所ぢやもの、夫の內ぢやというて、なんの逃げ走つて行くものぢやぞいなう。

權內　さうして又、どこえ。

皐月　サア、御殿の卯の花樣、よもぎ樣より、呼びにおこしなさんしたゆゑ、上らうと思うてぢやが、そなたは又

權內　わしは御城下所々へお便りの歸り道。旦那がお聞きなさると、また御立腹。サヽ、御殿へ上らずとも、これから、お歸りなされ〳〵。（ト引つ張る。皐月迷惑な思ひ入れ）。

皐月　サア、歸りは歸らうが、權內、そなたはアノ、煙管が欲しいと云やつたぢやないか。ソレ

ト煙管筒より出してやる。

權內　アヽモシ。こりや銀でござりまする。これをアノ(ト恟りする)。

皐月　遣る程に、サア、一緒に、歸つてたも〳〵。

權內　ア、モシ〳〵。なんの歸るに及ぶものか。旦那はあれでも大意地惡。何と云はうと捨てゝおいて、早う御殿へ、お出でなさい〳〵。

皐月　イエ〳〵、兄さんがまた腹立つては

權內　なにサ。小言は話、叱るはお談義だと、目をくんねぶつて

皐月　そんなら其方が

權內　サア、送つて參りませう。

ト矢張り唄にて本舞臺へ來る。このうちあざみは倒れたまゝ寝て居る。皐月、權內にさゝやく。

權內　モシ、ちとお賴み申します〳〵。……モシ、お賴み申します。

あざ　エヽ、よい心持に眠つて居るものを。(ト起きて)そちや、なんでわたしを起したのぢや。

權內　ハイ、私しは、笹山官兵衛が家來。どうぞ卯の花樣、よもぎ様を、ちよつとお呼び申してもらは

うと存じまして
あざ　そんならアノ、官兵衞様の用事か。
權內　イエ、主人の用事ではござりませねど
あざ　さうして、誰が用ぢや。
權內　サア
あざ　奥の女中に、先きも知れぬ用を云うてくる。こりや何でも
皐月　いゝや、怪しい事ではござりませぬ。わたしが賴みましたわいなア。（トそこへ出る）
あざ　お前は彌十郎様の御新造皐月様。……イヤほんに、お前に物云ふではなかつた。
皐月　モシ、あざみさん。わたしに物云はぬとはえ。
あざ　また云はれるものか。武藝お下手の彌十郎様の御新造。
皐月　エ。……すりや、この程の試合に
あざ　イヤモウ、名を云はずと、お負け様で、奥へ通用する。お前も、恥かきさんと、名を變へさんせいなア。
皐月　モシ、そんな事仰しやらずと、どうぞ卯の花様、よもぎ様に

あざ　誰がお前に逢ふ者があらうぞいなア。
皐月　そんなら、奥いつぱい
あざ　不首尾と極印、打つてあるわいなア。
皐月　エヽ。……なぜ我が夫にはそのやうに、不覺を取つて下さんしたぞいなア。（ト思ひ入れ。）
〽女郎の誠と玉子の四角、あれば晦日に月も出る。
ト此うち、向うより玄蕃、麻上下にて家來を連れ、あとより笹山官兵衞、繼上下にて出て來り、花道にて
官兵　これは御分地大學樣の御家來、松浦玄蕃どの、今日も御容體お伺ひでござるか。
玄蕃　これは笹山氏、太守樣には、矢張り相變らずかな。
官兵　イヤモウ、あの通り藝者、踊り子でお諫め申しても、兎角鬱性の御容體。
玄蕃　何はともあれ、先づ御殿へ。……家來、そちは中の口へ。
家來　ハツ。（ト引返し入る。）
官兵　イザ、お出でなされい。
ト矢張り鳴り物にて、本舞臺へ來る。このうち皐月、官兵衞を見て、柴垣の蔭へ入る。權内も遲れて

見つけ、隱れようとするを

權内　ヤイ〳〵、わりや家來權内でないか。何しに御殿へ

官兵　サア、私しが參りましたは

皐月　アノ、城下へ用事申しつけやつたに、爰にうろついて居る憎い奴の。（ト皐月聞きかれてそこへ出て）

官兵　アモシ、その樣に仰しやりますな。權内はわたしが連れて參りましたわいなア。

立番　そちや妹

皐月　ムウ。すりやお噂に承つた、かのお負け彌十郎どのへ緣づかれたる

官兵　皐月めでござる、ヤイ妹、わりや何しにこの御殿へ參つた。

皐月　サア、お前に隱してと思うたれど、お目にかゝつたら是非がない。私しが參りましたは、お前が無得心なゆゑ、女子は一旦嫁いたら、一生里へ歸るまいため、死んで出る心で婚禮の夜の門火。……夫婦はそれ程の緣なものを、ちよつとゝいうて呼寄せ、それぎり返しても下さんせぬゆゑ、奧の女中方を賴んで

官兵　イヤ、誰が云はうと、どなたの御意でも、成らぬといふ譯は、日頃小舅の身共を拒み、たつて望んだこの程の御前の試合。なに身共に刃が立つものか。ほんの小兒の戲れ、物の見事に打据ゑ、

太守の御機嫌散々。面目ないかして、遠慮して居る腰抜けの彌十郎。

あざ　それで取返さんしたら、物を云うてもやりやんせう。コレ、皐月さん、男振りで知行は取られぬぞえ。

立番　オヽ、身共もこの妹あざみを、御本家へ奉公に出しては置くが、婿を取るというても武藝が肝心。

官兵　成る程、侍ひに武藝の無いは、駕籠舁に足の無いと云はうか。

立番　啞の講釋師と云はうか。

あざ　鼻高橋ではなうて

權内　ひく橋彌十郎樣。

官兵　極上大負けの腰ぬけ。

皆々　ハヽヽヽ。

皐月（術なき思ひ入れにて）人は腰抜けとも未練とも云はゞ云へ、わたしが爲には大事な夫。どうぞ兄さん。

官兵　まだ吐すか。愚か者めが。（ト奥にて驛鈴鳴る。）

あざ　ありや殿樣の、これへお出での知らせ。

權内　サア、皐月樣、お歸りなされませ。

官兵　イヤ〳〵、斯ういふ未練者ゆゑ、腰拔けめが所へ拔けて行かうかも知れぬ。あざみどの。

あざ　それ〳〵。わたしが部屋で兄御のお歸りを、待つてござんせ。

皐月　ハイ。

ト皐月思ひ入れ。合ひ方になり、しか〳〵と下座に入る。四人殘り、あたりを見廻し

玄蕃　官兵衞どの、申し合せた儀を今日

官兵　コレサ。（ト小聲になり）かねて大學樣、本家をお望みの企てに、一味の身共。表は忠臣顏に見せ、內證の絲からくり。お望みの寶も手引きしたれば、お手に入つたでござらうが。

玄蕃　サア、何もかも思ふ壺に參つたが、兎角妨げになるべきは高橋彌十郎。ところで彼奴めも

官兵　どういふその日のまんのよさか、試合に手も無く打勝つたも、我が手の內。

權內　それもあなたの惡心を、天も感應まし〳〵て、まんまと彌十郎めは自滅同然。

あざ　なれども又、御前の首尾が、直るまいともいはれぬゆゑ、とゞめの工夫、兄さん、して來なさんしたかえ。

玄蕃　そりや、とつくり思案があるが、どうぞコレ、瀨左衞門を殺した者を、矢張り林平と心得て居るか。又は主人と勘を附けたか。

權内　その探りには、私しが參つて嗅ぎ出しませう。

官兵　オヽ、こりや其方にいひつける。一時も早く

權内　畏りました。（ト權内向うへ走り入る。）

官兵　して、今日の儀は　（ト玄蕃兩人に咡く。）

あざ　出來ました。

官兵　さすればいよ／＼、大學樣の

俊行　（障子の内にて）その企み、聞いた／＼。

三人　ヤア、ありや殿のお聲。（ト愕り。）

俊行　後を云はさにやァならぬ。腰元、云へ／＼。

ト唄になり、障子開く。秋之丞、照太郎、蒲團、莨盆を直す。俊行公、羽織、小さ刀、病ひ鉢卷、長煙管を持ち出てくる。腰元、早百合、蓬。刀、料紙を持ち出て來り

早百　御前樣、私しどもに何を云へと

よも　御意遊ばします。

俊行　ハテ、そち達が色の企み。町家、遊所なぞでは手管、魂膽なぞと云ふさうなが、何の爲ぢや。話

せ話せ。
官兵 すりや、御前には
玄蕃 そのお話を（ト落ちついいたる思ひ入れ）。
俊行 オヽ、官兵衞、大學が家來玄蕃。
玄蕃 ハツ。今日も殿の御容體伺へと、主人が申しつけ。
官兵 あの御景色では、日々御鬱性も晴れませう。
早百 イヤモウ、御病氣このかたは、日頃に變つて女子のお噂ばかり。
もよ お書物は伊勢物語、錦繪は女形。
あざ それ〳〵、お楊枝入れは誰が袖、御酒は女郎花、あまりの事で、お吸ひ物は、赤貝ばつかり。
官兵 すりや、御前には
俊行 賢を賢として色に易へよとは、孔子の手前勝手。それを思へば兼好は粋ぢや。老いたるも若きも只この迷ひと書いたるを、思へば忘られぬ。……ナア。世をも國をも思はずに、心に發する色情が、儘にならば喜見城、これを思へば鄙賤の身が、羨しいわやい。（ト鬱々としたる思ひ入れ
早百 アレ又、御鬱性の


市川團十郎
岩井半四郎

女三　御病氣が

玄蕃　ムウ。（ト俊行をつく〴〵見て思ひ入れあつて）恐れながら、君の御容體を見奉るに、異なる御病氣。主人大學も、殊の外お案じ申し、奇妙な博士ござるに附き、占はせましたる所、君のお名乘、俊行の文字は龜の文字にかへる。龜は卽ち龜なり。これを以て種々判斷致しましたるこのところ、この儀は正に君を守る名器の爲す業。さすれば當家の御重寶、靈龜の香爐紛失いたし、その虛に乘じて邪鬼の業かと、易者の訴へ。

宮兵　靈龜の香爐は高橋彌十郎が預かり。もしや

俊行　紛失いたして、身が病症を發せしか。

宮兵　こりや正しく

俊行　不屆きなる彌十郎、おのれ、どうしてくれうぞ。（ト赫として立上る。）

照太　アモシ、我が君、

秋之　それでは御病氣の

俊行　障はりなす祿盜人、重罪の程死に當れり。

皆々　すりや、彌十郎を

俊行　今に思ひ知らせてくれうワ。

ト唄になり、俊行、座敷を蹴立て、奥へ入る。皆々後に附きそひ、二重舞臺よりツイと殘らず入る。此うち、上手の柴垣の蔭に皐月聞いてゐて

皐月　外へ知らさぬ香爐の紛失。御前に現はれ、御糺明と、殿樣の御怒り。夫の大事。こりや斯うしては居られぬわいの。（ト行かうとする後ろへ、官兵衞出て）

官兵　妹、どこへ行く。

皐月　エ。

官兵　彌十郎へ御前の樣子、知らせに行くか。

皐月　サア、なんのマア

官兵　今聞く通りの御前の首尾、どうで命は無い彌十郎に、緣組ませておいては、そちも共々科の側杖。思ひ切つてしまへ。

皐月　サア。

官兵　思ひ切つて自筆の文で、去り狀くれと書いてやれば、所詮と思つて離緣するは知れた事。サア、書け。（ト其處にある硯箱を差しつける。）

皐月　そんならわたしが文さへやれば

官兵　オヽ、兄のため、その身の仕合せ。

皐月　成る程。書きませう。（トこちら向いて書かうとする。）

官兵　インヤ、文言は身共が云はう。

皐月　すりや、仰せ書に。

官兵　われに書かせりや、御前の様子ばかり、知らせてやるであらうが。

皐月　サア。

官兵　思ひ切るのが誠なら、身が云ふ通り、書け〳〵。

皐月　サア、何と書くのでござんす。（ト是非なく筆紙を取る。）

官兵　「一寸申入れ参らせ候、この程兄官兵衛と試合の勝負に、不覚なるお働きなされ候ゆゑ、殿様はじめ家中一統の物笑ひ、私しまでも恥辱に相成り候まゝ、夫婦の縁を切られ、早々に去り状寄越し下さるべく候」……それでよい〳〵。幸ひのこの文箱。（ト出す。皐月中へ入れて封をする。）アヽコレ、権内めは帰してしまふ。誰も使ひが

皐月　わたしが行つて来うかいなア。

官兵　何を馬鹿めが。……こりや遣りやうがある。

皐月　さうして誰が

官兵　この泉水は、彌十郎が庭先きへ流れ込めば、水に流して

皐月　すりや、この流れを使ひに

官兵　杜若の花を目印し。（ト一本折つて文箱へさす。上の方へ流れゆく。）殊更に油斷はならぬ。身のかたづくまで。（ト引つたてる。）

皐月　アヽコレ、わたしを

官兵　身動きさせぬ、當座のいましめ。

ト提げ緒にてくゝらうとする。ちよつと立廻り、琴唄になり、チョン／＼と逆に廻して、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて二間の屋體、向う床の間、違ひ棚、上の方、三尺の鼠の壁。下手、窓。床の間の前に机を直し、この上に以前の槍の穗先飾り、下の方、植ゑ込み、行燈、四ツ目垣、枝折戸。この外より舞臺前へかけて、御殿の流れの末、所々に杜若生ふ。尤も枝折戸の外には、土橋掛

けてあり、誂への道具。こゝに高橋彌十郎、袴、着流し、手燭を持ち、流れの面をながめて居る。蛙の聲、雨車の音。右の合ひ方にて、道具とまる。

彌十　古池や、蛙飛びこむ水の音。……こりや禪家の悟りの發句ぢやと、聞いては居れど、愚昧の身には、悟り得ぬこの彌十郎、泥にまぶれた名を立てうか。天より降らす天水の、淸うこの身の望みをとげうか。心定めぬ空の村雨。ハテ、風情ある、景色ぢやなァ。（トこなし。右の合ひ方にて、下の方より以前の花を差したる文箱流れ來る。彌十郎手燭にて透し見て取上げ）心無く、誰が折り取つて流せしと、取上げ見ればこりや文箱。この水上は、奥御殿のお泉水。何者が戯れか。但しは粗忽か、何にもせよ。（ト蓋を開き、中より一通出して）ナニ〳〵……「この程兄官兵衛と試合の勝負に、不覺なるお働きなされしゆゑ、殿樣はじめ家中一統の物笑ひ、私しまでも恥辱に相成り候まゝ、夫婦の緣を切られ、早々に離緣狀寄越し下さるべく候。」……ウム。（ト色々思ひ入れ。）こりや身が妻よりの文……この程御前に於て、官兵衛と晴れの試合に、不覺を取りしより何となく、妻皐月を連れゆき、其まゝ返さず、暇くれよと再三いひ越す、兄めが無法は兎も角も、皐月に限り夫を捨つる、所存は無いと打捨て置きしが、流石は女の心變り。緣を切る氣になつたよな。……そりや此方も望むところ。後ともいはず、たつた今、離緣のしるし、書いてやらうワ。（ト腹立ちの思ひ入れにて立上り

右の文をちよつと繰返し見て）ハテ、心得ぬ文のとめ。かしくと書くべきを、のしくと書いたは。ウム（トいろ〳〵思案して）「津の國の、野宿の里に假寢して、松は根ごとにあらはれにけり。」……さてはこの程包み隱せしお預りの……この身の越度が顯はれて、兄が手前に書いたる文か。ムウ。

　トはつと當惑せしこなし。合ひ方、時の鐘にて、向うより下部曾平、口幕のなり、頰かむりにて出て來り、花道より忍んで舞臺へ來て窺ふ。

その折からに今以て、立歸らぬ兄瀨左衞門が下部

曾平　曾平只今、罷り歸つてござりまする。

　ト枝折戸の中へ入り、おづ〳〵うづくまる。彌十郎キツとなり、ズンと立ち奧へ行かうとするな

アイヤ、彌十郎樣、そのお腹立ち、御尤もではござりますれど

彌十　今更何を云ふ事あつて。

曾平　サア、この程旦那のお供にて、多賀明神へ參りし折柄、お家の分地大學樣も御參詣、何か仔細のありさうな浪人めと御密談。樣子あらんと窺ふところ、その節紛失と承つた靈龜の香爐持參の樣子。彼奴盜賊に極まつたと、取返さんにも先きは曲者。追かけ追つめ一晝夜、くんづほぐれつ爭ふうち、最早夜陰のくらさはくらし、無念ながらも取り逃がし、尋ねるうちにお旦那の御落命と、

聞いて身も世もあられませうか。直ぐに陣屋で追ひ腹とは存ぜしが、あなたに一言申し上げたい儀がござつて、面押し拭うて、罷り歸つてござりまする。

彌十　身共に一言申したいとは

曾平　即ちこれが香爐の手がゝり。（ト口幕の密書を出す。彌十郎取つて）

彌十「かねてお頼みなされし靈龜の香爐、盗ませ差上げ、猶菅家の一軸は、程なくお手に入られべく候。」

曾平　手掛りをお渡し申し上ぐれば、旦那の追ひ腹。南無（ト腹を切らうとする。）

彌十　コリヤ待て。なんで腹を切る。

曾平　なんでとは、お旦那を討つたるは小島林平。その座で相果てましたれば、仇を報ふ敵も無く、この世に用なき下郎が體。

彌十　いゝや、用事も役目もある。

曾平　なんと。

ト合ひ方になり、彌十郎、床の間に飾りある槍の穗先きを取つて來り

彌十　兄瀬左衛門どのゝ止めに殘りし、槍の穗先き。

曾平　すりや、これが

彌十　この上兄へ奉公は、生き長らへて後世の營み。又一つには紛失の
曾平　寶の詮議を共々に
彌十　致すが未來の主人へ忠義。
曾平　然らば拙者は
彌十　暇をくれた。
曾平　これより直ぐに
彌十　何國へなりと立退いて
曾平　身柄一身、寶の詮議。
彌十　兄が佛事を、弔らうてくりやれ。
曾平　ハツ。

ト合ひ方になり、曾平花道へ行かうとする。向うにてバタ／＼するゆゑ引返し、下の方へ入る。直ぐに時の鐘、合ひ方にて、向うより喜惣太、比良藏、照太郎、秋之丞、いづれも股立、袴の形、十手を持ち、ツカ／＼と出て來り、直ぐに內へ入り

喜惣　高橋彌十郎、御前のお召し。

四人　立ちませい。（ト取りまく）。
彌十　何者かと存ずれば、御殿の御近習。何ゆゑのこの狼藉。
　ト懐中の袱紗へ槍の槍先きを包み、しつかりと懐中する。
喜惣　ヤア、狼藉とは何を以て。科あればこそ仰せを蒙り
比良　斯くの如く我れ〳〵四人、迎ひとして罷り越したる上からは
照太　仔細は御前で相分らん。その身に覺えなきとても
秋之　容赦ならざるこの場の手詰め。動かず、去らず
喜惣　急いで御前へ
四人　立ちめされい。
彌十　ウム。その御糺明とくより承知。（ト奧へ行かうとするを）
喜惣　ヤア、承知と口では云ひながら
四人　こりや、逃げるのか。
彌十　おてまへ方の所有に比べ、逃げるとは穢らはしい。いかなる罪科にあふとても、主君の御前、服
　改めて

四人　ムウ。（ト控へる。彌十郎・屋體の内より上下を取出し、改める。四人氣を配り思ひ入れ）。
彌十　直樣御同道仕らう。
秋之　御殿までも路次の用心。
四人　立ちませい。（ト十手を振上げ、取卷く）。
彌十　ハテ、仰々しい。
ト衣服を直す。時の鐘、唄にて、四人しづ〳〵つけまはす。彌十郎悠々と、この人數向うへ入る。柴垣の蔭より權内窺ひながら出で來り
權内　お旦那のお指圖で、彌十郎めがこの長屋、庭口から忍び込んで、しやッかゞんで樣子を聞けば、瀨左衛門を殺したは、矢張り小島林平と、思つてゐる曾平への話。これではあなた方も枕を高く寢られるといふもの。この事申し上げたら、一かどの御褒美。一刻も早く。（ト行かうとする曾平出て）
曾平　待て。わりやァ笹山の中間權内だな。
權内　瀨左衛門が奴曾平だな。（トぎよつと思ひ入れ。）
曾平　わりやァ何しに爰へ來た。
權内　サア。……こりやァ何よ。おらがお旦那の、妹御は、爰の家の御新造。ところでこの頃お里へ歸

つてゐるから、皐月樣からお使ひに來た。

倉平 ムウ。そのお使ひに來た者が、瀨左衞門を殺したは、矢ッ張り小島林平と、云うてゐるとはなんで吐かした。

權内 ヤア。

倉平 コリヤ、うぬも何か仔細のありさうな。サア、尋常に腸をさらけ出せ。

權内 イヽヤ、何も云ふ事は無い。お旦那の御用が遲なはる。そこを退け。

倉平 イヽヤ、吐かさにやァ、この倉平が、腕かぎり云はせるぞよ。

權内 この權内も根かぎり、云ふまいが、どうする。

倉平 斯うする。（トかゝる）。

權内 どつこい。

トこれより誂への合ひ方を借りて、兩人タテあつて、見得になる、チョン〳〵と道具まはる。

元の御殿。二重眞中に俊行公、褥、脇息に懸かり居る。左右に照太郎、秋之丞、比良藏、喜惣太、附添ひ居る。玄蕃立ちかゝつて居る。彌十郎留めて居る。所々に燭臺を照らし、管絃にて道具納まる。

彌十　こりや玄番、何とおしやる。

玄番　知れた事。日頃、武藝の廣言をしながら、この程、笹山官兵衛との試合ひに、物の見事に打負けた不覺者。遠慮申しつけられたら、自滅すればよいことに、エヽ、腹も切りかねる卑怯者ゆゑ、死やうを敎へてやらうと思うて　（ト又かゝるを突廻し）

彌十　イヽヤ、勝負は時の運次第、試合ひに負けたが恥辱とあつて腹切らば、侍ひの人種は盡きる。ちつとも恥とは、思はぬ〳〵。武士の恥は、不忠不義より外には無いワ。

玄番　イヽヤ、不忠がある。

彌十　なんと。

玄番　大切なお預りの、靈龜の香爐、なぜ失つた。

彌十　ヤ。すりやその儀を

玄番　御本家の寶、聞捨てならず。身が今日、お屆けに參り、御前にも疾くより御承知。

彌十　ハツ。（ト俊行を見て平伏し）御前へ申上げまする。申し譯にはござりませねど、先月二十九日、雨風烈しき夜に紛れ、盜賊の入つたるにや、お預りの香爐紛失。お屆け申上げ、御免を受けて切腹とは存じたなれど、お耳に達せぬその中に、ならう儀ならば詮議して、事納めたく存ずれど、遠慮の

身なれば他行も叶はず、心盡しも無下と成つたる今日のお咎め。さりながらこの儀に於ては、他家は元より、外に存ぜし者もなき香爐の紛失。如何いたして玄蕃には、御存じてござつたな。

玄蕃 ヤ。

彌十 サア、根を押し尋ね問ひたいところを、御前を憚り、……この上は寶の詮議、日延べの儀を。

俊行 ヤア、いはれざる願ひ。その身が病中に斯かる珍事。詮議をおのれが手を借り、致さうや。われ國主の威勢を以て、暫時が中に尋ね出だすワ。

彌十 然らば拙者めは

俊行 死を以て罪を償ふ今日の刑罪。

彌十 すりや、彌十郎は

俊行 身が手討ち。

皆々 エヽ。(ト悔り)。

玄蕃 コリヤ、さうなければ叶ひますまい。その御意が出る上は、御前のお手を下さるゝまでもない。

皆々 我れ〳〵が (ト立ちかゝる)。

俊行 イヤ、病中の鬱散。勇氣を試す身が手の內。

皆々　然らば御前が

俊行　其方どもは皆次へ。

皆々　ハツ。

ト管絃になり、玄蕃思ひ入れあつて先に、喜惣太、比良藏・秋之丞、照太郎、附いて奥へ入る。

俊行　高橋彌十郎。

彌十　ハツ。

俊行　罪の疑はしきは刑せずといへど、正しく其方は重き罪人。今手にかけて討ち果すが、そちや命が惜しいか。

彌十　こりや、改つた君のお尋ね。生きとし生けるもの、命惜まぬ者がござりませうや。併し、犯せし罪科か、但しは主命、義に依らば

俊行　命は芥よりも輕し。

彌十　又死は易し。生は難し。

俊行　すりや、今日の其方が命は

彌十　俗に申す、盗人の暇はあれど、守り人の隙を窺ひ、寶を失ひしは眞に天災。


岩井半四郎
豊国画


坂東三津五郎

俊行　無成敗と思ふぢやまで。
彌十　イヤ、全く左樣には存ぜねど、この身にも大切な
俊行　ヤ。
彌十　サア、願ひもあれど、主と病ひ。
俊行　勝たれぬ事と覺悟して
彌十　イザ、御存分に、御刑罪。（ト合掌して摺寄る。俊行思ひ入れあつて）
俊行　イヤ、その命、助けてくれう。
彌十　ヤ。
俊行　刀を穢すと、近習の者を呼ばざるは、其方に密々、頼みたき一儀あつて。
彌十　ハツ。お頼みとは恐れあり。主從に何の御遠慮。あまさかさまな儀なりとも
俊行　早速承知、先づ滿足。頼みといふは身が病症、其方といふ名醫ならねば、本復致さぬ晝夜の苦しみ。なんと療治いたしてくれまいか。
彌十　して、御前の御病症には
俊行　戀病みぢや。

彌十　エ。（ト思ひ入れ、合ひ方になり）

俊行　サア、加茂川の水、山法師、叶はぬものはそりや昔。今身が威光を以てなさば、雲に棧、水の月も取らんは易けれども、只任せぬは戀の一字。胸を焦し、命も絶ゆる我が迷ひ。なんと晴らさせてくれまいか。

彌十　ムウ。さほど迄に御心を苦しむる、して、その戀ひ人は

ト摺寄る。俊行思ひ入れあつて、前の流れの杜若を一本折つて

俊行　主ある花も、まツこのやうに手折らせい。

彌十　すりや、その

俊行　杜若の

彌十　色香を見する

俊行　皐月雨。

彌十　さては女房

俊行　皐月の闇に迷うたわやい。

ト此うち後ろの襖をあけ、官兵衞様子を聞き居て

官兵　すりや、殿には
俊行　ヤ。(ト襖ピツシヤリ閉す)。
彌十　イヤ、殿の御病氣、拙者が配劑。
俊行　其方が醫藥を以て
彌十　御本復させませう。
俊行　ムウ。承知いたして身も滿足。さりながら、藥種をつかふ花の一本。
彌十　木折な振りも矯め直す
俊行　花拵へは
彌十　拙者が手際。
俊行　水を揚げるか。
彌十　流れるか。
俊行　手活けに詠めて
彌十　御養生。
俊行　床の間敷かせて、待つて居るぞよ。

ト唄になり、俊行、杜若を彌十郎の前へ抛り、思ひ入れあつて奥へ入る。彌十郎種々思案して居る。
合ひ方彈きつゞけにて、下座より皐月出て來り、彌十郎を見るより

皐月　ヤア、我が夫、御無事でお出でなさんしたかいなア。（ト縋り泣く）。

彌十　ハテ、仰山な。なぜ其やうに云やるぞ。

皐月　サア。飽きも飽かれもせぬ仲を、あの兄さんの胴慾な。添はする事はならぬと、呼寄せたまゝ内へ留め、思ひ切る思案せいと、毎日云はるゝその悲しさ、逃げて行きたいにも遠慮の身。戸締めとやら、部屋に泣いてばつかり居りましたわいなア

彌十　それに又、御殿へはどうして。

皐月　サア、あんまり心の遣る瀬なさ、あの中間の權内を騙し、送つてもらうて、勤めてゐた折り朋輩の、あの卯の花さん、よもぎさんが、わたしをお前の所へ、返して下さんすやうに云うてもらひたさ、御殿へ上つたところがな。

彌十　上りやつたところが

皐月　折わるう兄さんに逢うて、叱らるゝやら、云はるゝやら、まだそれよりは、モシ、この泉水から文箱を流しましたが、屆きましたかいなア。

彌十　いかにも。緣切つてくれといふ其方が文。ありや、まこと、書いたのか。
皐月　サア、あれには段々譯がござんす。……お預りの靈龜の香爐紛失の事、殿樣のお耳へ入つて、重いお咎めもあらう樣子ゆゑ、ちよつとお知らせ申したいにも、側には兄さん、お前の緣を切る文、文言は仰せ書。仕方がなさに文のとめ
彌十　のしくと書いたでこの身の科の、顯はれた事、承知いたした。
皐月　サア、その事で今お手討ちと御近習の噂、それにマア、いつに變らぬ
彌十　イヤ、お手討ち却つて、御前は上首尾。
皐月　エヽ、そりやマア眞でござりまするかいなア。
彌十　サ、お預りの靈龜の香爐は、一體御機嫌に入らぬ品、よう紛失させたとお喜び。また其方の兄宮兵衛と試合ひに負けたも、當時靜謐、弓は袋、太刀は鞘へ收めた世の中、武藝は要らぬ、よう負け居つたとお褒めのお詞。なんと粹殿樣ではないか。
皐月　エヽ、マア、それが定なら、エヽ、有り難うござります。（ト奥をいろ〳〵拜み）その又有り難い次手、わたしが緣も兄さんの得心するやうに、お願ひ申して下さんすりやよかつた。（トいろ〳〵喜ぶ）。
彌十　ア、何にも知らずに

皐月　エ。
彌十　サ、其方は知らぬが、まだめでたいは、御加增まで下されうとある。
皐月　アノ、御加增まで
彌十　まだ有る。……お屋敷へ葺屋町の芝居を呼んで、家中の者に見せよ、と御意なさる。
皐月　アノ芝居を
彌十　まだ有る。……屋形船を湖水に浮め、家中殘らず涼み遊山に遣はさるゝと御意なさる。
皐月　エヽマア、それ程までに家來を惠む殿樣、有り難いとは云はうか。勿體ないと云はうか。どうして御恩の程が
彌十　送らうと思やるなら、申しつける役目がある。
皐月　アノ、女子のわたしに。
彌十　サ、女子でなければならぬ忠義。
皐月　そりやマア、どういふ
彌十　お伽しやれ。
皐月　アノ、お側の

彌十 イヽヤ、お寢間の

皐月 エヽ。(ト悄り。思ひ入れあり)。アノ、わたしに

彌十 驚くは尤も。この程殿の御病氣は、其方を戀ひやみ。

皐月 エヽ。

彌十 サア、花に准へてお命も、絶ゆるばかりとわりない御諚。得心なせばこの身も安穩。違背に及べば可愛さ餘つて寶の紛失、重き咎めに命まで、召されかねぬ御所存ゆゑ、君を思ふも身の大切。いかにもお伽をさせませうと、二言といはずお請けしたが、なんと其方も

皐月 得心せいでござんすか。

彌十 夫とお主の、爲を思うて。

皐月 イエ〳〵、なんぼ夫とお主の爲ぢやとて、現在お前といふ男のある身に、惚れるといふやうな滅相なお主樣(ト居丈高になるを)

彌十 ヤレ、聲が高いワ。(ト口をふさぎ、あたりを見廻しながら)、サア、道を守る心からは、非道のお主、邪まの殿とも、思やるは尤もぢやが、戀に上下の隔てなく、そこが譬への思案の外。……身共ぢやというて、二世を掛けたる女房に、外の者なら直樣刃傷、刀で返事もしかねゝど、何をいうて

も主の一字。コレ、殿には其方に戀ひ焦れ、お命にも關はる御病氣、それを直すは其方といふ戀の妙藥。

皐月 サア、御病氣のお爲とあらば、この身の生き膽を取られうが、骨を削り、身を裂かれうが、ちつとも厭ひはせぬけれど、それより辛い女子の操を破れとは、あんまりなお主の御諚。

彌十 すりや、これ程に云ひ聞かしても

皐月 この事ばかりは、堪忍して下さんせいなア。

彌十 ウム。(ト思ひ入れ。本調子の合ひ方になり、彌十郎、杜若の葉を取つて前なる池へ流す。皐月思ひ入れ)。コレ見よ、皐月。唐土の貨狄といふ者、柳の一葉水に浮み、流るゝを見て、實にもと思ひそめしより、工みて舟を作るといふ。君は船、臣は水。……サア、その水の心一つで、舟を浮べうと、碎かうと、其方がこの場の返事次第。渡りに舟の忠義と云はすか。情け嵐の不忠と云はすか。

皐月 サア

彌十 船の文字は公にすゝむる。これ程云へどすゝまずば、身が腹切らうか。

皐月 サア

彌十 サア、命の瀬戸、心の楫柄、錨おろして、返事をしやれ。

皐月　ぢやといふて
彌十　得心なければ是非に及ばぬ。お請け申せし殿への云ひ譯。さうぢや。（ト一腰を拔かうとする）。
皐月　コレ、待つて下さんせ。
彌十　イヽヤ、退け。（といろ〳〵と揉み合ひ、立廻りあつて）
皐月　モシ。お詞に從ひませう。
彌十　なんと。
皐月　サア、不忠とあるゆゑ、是非に及ばず。
彌十　すりや、得心して、
皐月　お伽申したその上は、所詮お前とモウ……サア、尼法師とも身を變へて、浮世を捨てると覺悟の得心。
彌十　いかにお主の爲ぢやとて、女房に貞女も身も捨てよと
皐月　勸めなさんす心の中。
彌十　承知したがふ其方の心底
皐月　三世のお主

彌十　二世の妻
皐月　くらべて見れば是程にも
彌十　忠義ほど世に
皐月　憂きものは
二人　無いわいなう。（トほろりと思ひ入れ。奧にて五つ半の時計鳴る。）
彌十　ありやお夜詰めの引けるお時計。サア〳〵、浮かぬ顏では濟まぬ。涙も拭いて顏直しや。鏡を持つて居やるか。（ト燭臺を持つてくる）。
皐月　ハイ〳〵。（ト濟まぬ思ひ入れにて、懷中より鏡を出し、顏を直すこなし、いろ〳〵あつて）アヽ、尼になれば、鏡もこれが見納め。
彌十　サア、御前にもお待ちかね。浮き〳〵として早うお寢間へ。
皐月　そんなら、モウ
彌十　ひそかに身が召しつれる。よう顏直しやつたか。
皐月　ハイ。
彌十　それ又、涙で白粉が

皐月　なんのこの身にけはひ化粧。

彌十　イヤ、さう云やるな。賣り物には

皐月　エ。

彌十　イヤ、お伽には、花飾れぢや。

ト苦笑ひする。皐月もしいなりとなる。琴唄になり、立ちかれる皐月を、無理に彌十郎手をひいて、兩人思ひ入れあつて、靜かに下座へ入る。矢張り琴唄にて、この道具を靜かにぶん廻す。

本舞臺、向う一面に平舞臺の金襖、結構なる欄間。上下、袖にて折返し、同じ欄間、金襖。鎧櫃飾りあり。誂への道具、所々に燭臺をともして、眞中に金屏風立てある。右の琴唄にて道具とまる。ト合ひ方にて、下手襖を明けて、あざみ、早百合、よもぎ、以前の形にて、鼻紙臺、煙草盆、茶臺、茶碗をのせ、めい〳〵これを持ち出で來り、ひそ〳〵思ひ入れあつて

あざ　早百合どの、殿樣の御病氣は、彌十郎どのゝ女房、あの皐月どのに戀ひ病みとは、きつい惚れやうぢやないかいの。

早百　それいなア。日頃の堅いお顏も、のろいお顏に見ゆるわいなア。

よも　サア、お主様の事ぢやによつて、皐月どのも得心して、今宵お寢間のお伽とやら。

あざ　あの美しい皐月さんを、殿樣が抱いておよると思へば

早百　此方もいつそ

あざ　オヽ、けなる。（ト夢中になる）。

早百　コレ。

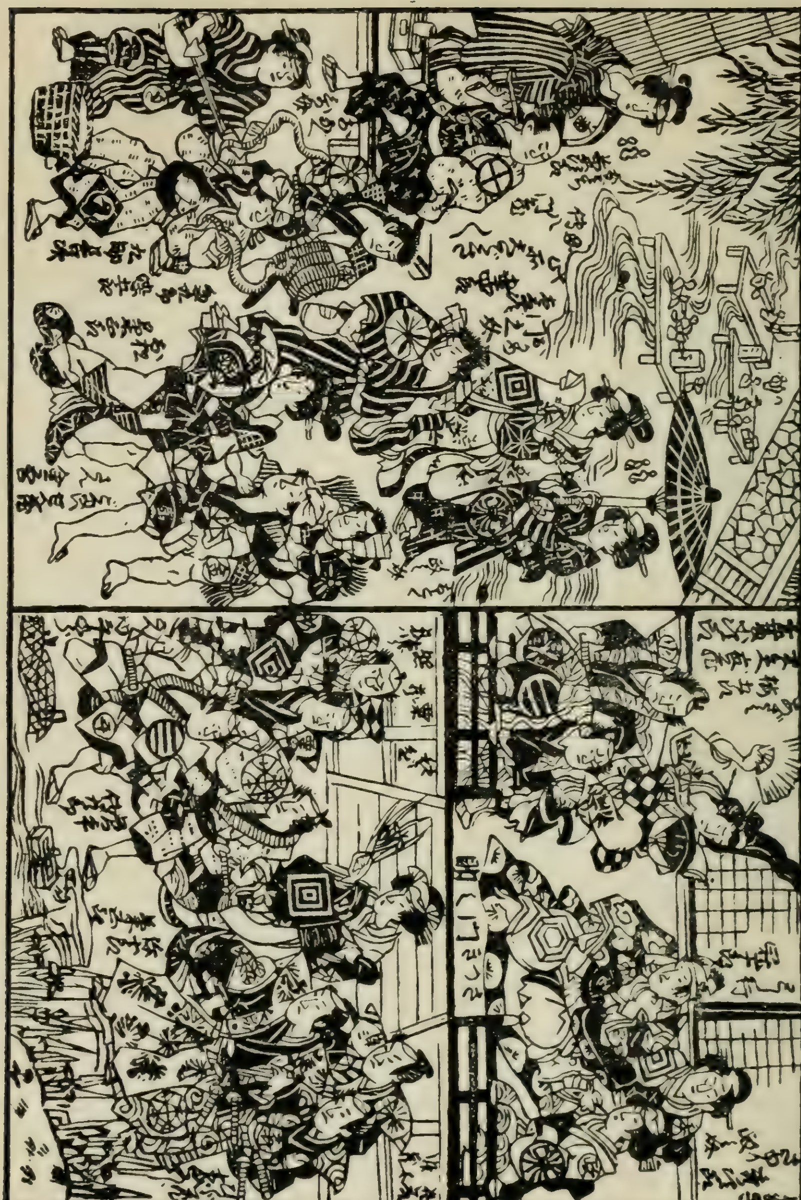
ト囁き、思ひ入れあつて、右の道具を屏風の中へ運び、よろしくこなしあつて、上の方の襖を明け、奥へ入る。ト矢張り合ひ方にて、下の方の襖明け、彌十郎、皐月が手を引いて出で來り、皐月ふろへ嫌がる心。彌十郎いろ〳〵と呑みこます思ひ入れにて、なだめる。屏風をそつと明ける。内に結構なる夜着、蒲團、この上に俊行公、莨のみ居る。彌十郎ハツと平伏する。

俊行　彌十郎か。

彌十　ハツ。お望みに任せ皐月を

俊行　過分。……休息せい。

ト琴の合ひ方になり、彌十郎、皐月に目くばせしい〳〵屏風を立て、ホツと思ひ入れ、案じられるこなし樣々ある心。思ひ切つてツイと下の方、襖の中へ入る。皐月、屏風が蔭より彌十郎が入るをと



つくと見て、俊行が顔を見てにつこり、いろ〳〵會釋して、ト、俊行に寄添ふ。俊行思ひの外なるこなしにて

俊行　ハテ、家中の妻と申すのは、無造作なものぢやな。

皐月　サア、此やうに致しましたら、さぞや御前にはおさげすみ。

俊行　イヤ〳〵、苦しうないく。これまで側の女子や妾どもは、兎角打ちとけいでもどかしかつたに。

ト皐月恥かしきこなし。此うち、最前より、上の襖より、官兵衛出て來り、屏風の外にて様子を立聞いて居る。

俊行　不便な奴の。以後目を掛けて遣はす。望みがあらば何なりと望め。

皐月　サア。(ト云ひかねる)。

俊行　ハテ、遠慮に及ばぬ。疾く申せサ。

皐月　さやうなれば、どうぞお取立て下さりませい。

俊行　夫彌十郎をか。

皐月　イエ、兄官兵衛を

俊行　ヤ。

皐月　サア、義理ある兄と申し、どうぞ人に勝れた立身を
俊行　ムウ。すりや、彌十郎には
皐月　愛想が盡きました。
俊行　アノ、夫に
皐月　盡きまいものか。口では二世といひながら、貞女を破れ、操を缺けと、水臭い、心にふッつり
俊行　さすればいよ〳〵、官兵衛に
皐月　サア、わたしが身は兄次第、兄さへお取立て下さりますれば、お宮仕へも心のまゝ。
俊行　ムウ、取立てゝ遣はさう。家老役に申しつけうか。但し領地を分け、大名に致さうか。
皐月　アモシ、それは兄が心を聞きました上。
俊行　其方が望み次第。何にせい、官兵衛を呼んで　（ト云ふうち）
官兵　イヤ、笹山官兵衛、御前の宿直。（トつか〳〵と出て、平伏する）。
皐月　ヤア、兄さんかいなア。
官兵　オヽ、妹。出かした〳〵。最前からの樣子、あれにて殘らず承つた。殿のお伽、いかゞと案じたに、夫彌十郎と緣切つても、御奉公申したい詞の端々。それが彼の今流行る、名を取らうより德、

兄の事まで御前へ執成し。忝い〳〵。

皐月　そんならお前も悦んで、あの彌十郎どのと

官兵　夫婦の仲を身共が裂く。

俊行　主の威光で承知は致せど

皐月　主ある身では遠慮がち。

俊行　心遣ひに思うたが

官兵　枕を高くおよらせまする。

俊行　オヽ出かす〳〵。彼れに寢間の伽をさすれば、官兵衞は外戚同然。サア、何なりと、望め〳〵。

皐月　サア、そのお願ひの望みは

ト皐月、俊行にいやらしくもたれ、官兵衞が顏を見る。官兵衞、いろ〳〵心迷ふ思ひ入れにて

官兵　拙者が立身のお願ひは、勝手の重役、金奉行か。

皐月　右のお役に（トもたれる、俊行うなづくゆゑ）

官兵　イヤ〳〵。ではない、御用人、御家老（ト皐月こなし、俊行うなづく〳〵。イヤ〳〵、それではあまり慾の深いやうで思し召しも如何。萬石以上樂づとめか。……但し分地を貰うて大名になるか。（ト

此うち、矢張り右の思ひ入れ。官兵衞圖に乘り）　イヤ、いつそ一足飛びに、殿には御隱居なされ、御家督を下さりませい。

俊行　イヤモウ、何なりと望み次第。其方が心任せに取計らひ、家中共へ、異議に及ばぬ墨附き、彌十郎にと認め置いたるに、相手かはつて官兵衞、そちや仕合せ者ぢや。（ト手箱より墨附を出して渡す）。

官兵　このお墨附頂戴の上は

俊行　今より其方は多賀の家督。

皐月　殿樣には御隱居。

官兵　アヽ、有り難うござりまする。

　ト此うち、下手の襖より彌十郎、三方に腹切り刀を載せ、持出てゐる。この時つか〳〵と出て

彌十　御家督の殿、イザすつぱりと、お腹召されい。（ト三方を突きつける。官兵衞恟りして）

官兵　ヤア〳〵。こりや彌十郎、なんで身共は腹切るのだ。

俊行　仔細はそれなる墨附に。

官兵　なんと。（ト官兵衞、墨附を開き）　ナニ〳〵。……「多賀の太守先祖の眞筆、家の一軸紛失の科によつて、切腹申付くるものなり。……管領印。」ヤア、こりやどうだ。

彌十　此たび武將繼目に、諸國の寶お改め。先達て管領當國へお入りあつて、その旨仰せ渡され、吉日を選み、一軸御高覽に入るべきところ

俊行　その一軸は高橋瀬左衞門へ預け置きしが、右瀬左衞門は横死なし、最前見れば眞赤な似せ物。行くへ知れざる菅家の正筆。

彌十　これ卽ち太守の越度。御家督の殿、腹切つて申し譯なされい。

官兵　ヤア、すりや家督になれば腹切らにやならぬか。

俊行　それが隱居へ卽ち孝行。

官兵　イヤ、つい口拍子になつた家督。もう家督は蒔き直しだ。

彌十　イヽヤ、一旦家督と殿の御諚は、金鐵同然。異議に及ばゝ、手を持添へて切らさうか。

官兵　サア、それは

彌十　サア〳〵。なんと。

官兵　アヽコレ、待つた。身に火がついたら云つてしまはう。菅家の一軸は瀬左衞門を手にかけ、分地大學どのが摺替へ取つた。

俊行　それを聞かうばつかり。ソレ。高橋、縛せ。

官兵　ヤア。（ト逃げ出すを、彌十郎引留める。ちよつと立廻り、見事に投げ）
彌十　官兵衞、動くなっ。（トむごく引据ゑる）。
官兵　ヤア／＼／＼、そんならこれも
彌十　オヽ、殿が女房に御執心、管領の指圖も、仕合ひに負けたも皆僞り、落つるところは一軸の、行場を尋ぬる太守の御賢慮。
俊行　御先祖菅公の眞筆は、多賀に於て一の寶。瀨左衞門横死より眞赤な似せ物、時に臨んで右の一軸お改め。南無三寶。この儀露顯に及ぶ時は家の瑕瑾。日延べせんため病氣と稱し、寶の詮議。皐月に戀慕の戀ひ病みも、汝の心を探らんため。
皐月　血は分けねども、義理ある兄。噓僞りの請合ひも、大事の夫が兄上の、たしかにそれと知れざる敵、云はす爲との事ゆゑに、心に思はぬ拵へ事も、夫大事夫大切と、必ず恨んで下さりまするな。
官兵　すりや、大學どのゝ企みのあらまし、身共に云はさう爲であつたか。
俊行　一軸、香爐
彌十　兄の敵も
皐月　それと知れたる大學どの。

官兵　イヽヤ、今のは云ひ誤まり。寶も、敵も

彌十　知らぬとは云はさぬ、證據の密書。（ト一通をさしつける）

官兵　ヤア、その一通まで手に入つたか。もうこの上は

ト拔いて切つてかゝる。彌十郎後ろに飾りある鎧にて受けとめる。烈しき立廻りの中、蓋も取れ、鎧櫃の中へ官兵衞轉げこむ。直に彌十郎蓋をしやんとして、錠を下す。

皐月　これは。

彌十　取逃がさぬ繩目の代り。

俊行　事落着まで、追つての糺明。

皐月　心柄とはいひながら、命ばかりは

彌十　今日の御奉公に替へましても。

俊行　イヽヤ、願ひはまだあらう。

彌十　すりや、拙者が心中を

俊行　察して只今、暇をくれる。

彌十　アノ、願ひの通り

俊行　家門の大學、敎へはせぬが、討たずばなるまい。
皐月　そんなら兄上の敵を
彌十　無念とゞまる槍の穗先き。（ト以前の槍の穗先きを出して、口惜しき思ひ入れ）。
俊行　サア、汝が無念を察しやり、我れに敵たふ大學が惡事、火急に面迫いたさぬも、何卒本意を
彌十　サア、本家を窺ふ烏滸の曲者、事荒立てゝは寳破却も計られず。時節を待つて取返し、惡人退治
　に家を出づれば、三世の縁も、まッかう切つて（ト彌十郎髻を切る）。
皐月　これは。
彌十　家を出づるは出家修行、最早主なき世捨て人。佛門堅固に、兄が迷ひを
皐月　晴らす回向を、どうぞこの身も
彌十　イヽヤ、大事の發心に、むざと女を連れられうか。
俊行　ハテ、佛經にも五者佛身云何、女身女人成佛ありと聞けば、たとへ形は變へずとも、皐月は共に
　法の道連れ。
彌十　ハッ。君のお許しある上は、彼れめも共に
俊行　サア、法を合はする文字をその儘、合法と法名改め

彌十　三界無住に宿りを極めず
皐月　或ひは巡禮、遍路の境涯。
彌十　身は雲水と
皐月　思しめし
二人　下さりませう。
俊行　オヽ、出かした合法。
二人　我が君樣。（ト後ろへ玄番、あざみ出て居て）
玄番　すりや、御主人を
あざ　敵と
二人　ねらふか。（ト彌十郎、皐月へかゝらうとするを、俊行一腰を拔いて、ポン〳〵と切る）
彌十　これは。
俊行　其方達夫婦を手討ちと見せるも、油斷さする手段の死骸。
彌十　何から何まで
玄番　ところを。（トよろぼひ起きてかゝるを、彌十郎、皐月引きつける）。

俊行　修行者二人へ、寸志の手の内。（ト大小を彌十郎、皐月へ遣る）。
彌十　御報謝たしかに　（ト兩人を斬り倒し、止めをさす）。
俊行　天晴れ見事。
彌十　して、この死骸は
俊行　二人が身替り。
彌十　然らばこの儘。
俊行　堅固で暮らせ。
彌十　我が君樣。
俊行　コリヤ。……死骸は物をハト左右の燭臺を扇にて吹き消す）。
彌十　ハツ。（ト木の頭）。
俊行　云はぬものぢや。

ト思ひ入れ。彌十郎、皐月よろしくこなし。

拍子幕

幕の外、花道の附けぎはへ樋の口を出す。時の鐘にて、右の樋の口より、官兵衞、以前の形、頬冠り

にて、水に濡れて出で來り

官兵　危ない所を鎧櫃の、底をくりあけ、やう〳〵爰まで。ハテ、命冥加なおれだなア。

ト行きかける。樋の口の蔭より菖蒲革の侍ひ一人出て組附き、立廻りあつて、右の樋の口へポンと投込み、時の鐘にて官兵裔向うへ走り入る。あとシヤギリ。

（作者　福森喜宇助）

四幕目

四條河原の場

役名＝手代、傳三。蛇遣ひ。九介。非人、したみ酒の三。同、鍋太。關口多九郎。非人、胡麻八。太平次女房、お道。非人、うんざりお松。立場の太平次。

本舞臺、三間の間、上の方、蒲鉾の非人小屋。正面筋違に見たる黑塀、忍び返し、しだれたる柳。二階座敷に掛け行燈、下に水茶屋、楊弓場。すべて四條河原の景色。こゝに太平次女房、おみち、前垂れ掛けにて茶を運び居る。よき所に胡麻八、鍋太、手妻の非人にて、蓙の上にいろ〳〵手妻の道具を置き、立ちかゝり、饒舌つて居る。仕出し多勢、床几にかゝり居る。この中に、關口多九郎、編笠

浪人にて袖乞ひの體。傳三道具屋の番頭の拵へ、名酒の德利を持ち見物して居る。辻打にて幕明く。

胡麻　さて昨日天道樣がぢくねましたゆゑ、小屋がしめつて居りますから、今日は爰で御機嫌を取ります。思へば私しは、每日々々釘や針を食べますが、金佛にもなりませぬてネ。ハヽヽヽ。マア何か一つやらかしませうから、よく出來たら彼の物をナ。……サア、鍋公、やつてくんな。

皆々　サア〳〵。所望ぢや〳〵。

トこれより鍋太、三味線を取上げ、錣の合ひ方を彈く。胡麻八、手妻あつて

胡麻　先づ、首尾よくお騙されなすつて、おめでたうござります。

皆々　イヤ、奇妙だ〳〵。サア〳〵、錢をやるぞ。

ト辻打ちになり、めい〳〵錢をやつて、仕出し別れて入る。あと楊弓の音。

傳三　時に、おみちさん。段々夏になりました。さぞ忙しうござりやせう。どうだね、御亭主の太平次さんは、旅仕事にでも行かれましたかえ。

みち　イエ、まだよい仕事もござりませぬが、この間は何ぢややら、大學樣とやらのお邸から、たびたびお人が參りますわいな。

傳三　アヽ、その左枝大學樣ならばお大名、常から短氣な殿樣ゆゑ、住吉の濱屋敷へ、押籠め同然と聞

きましたが、大方、その大學樣であらう。
多九（これを聞き）コレ〳〵、番頭。
傳三　オヽ、多九郎さんかえ。
多九　そんなら何か、大學樣は押籠め同然の御身分か。それぢやァ猶々、貴樣の頼んだ香爐を、賣切つてしまはずばなるまいわえ。
傳三　サア、あの香爐を與兵衞どのが、見るとその儘、五十兩で買ふ程に、決して外へ賣るまいと、十兩といふ手附けを渡して、後金は明日明後日の積りゆゑ、掛先きを集めに、今日の夜船で大阪へ行き、内本町の日野屋から、金取つて戻るというて、とうに内を出られたわいの。
多九　そんなら、今日明日には、後金の四十兩、納まるに違ひないの。
傳三　きつとわしが金取つてやりませう、その代り、コレ、口錢を一割五分も取らにやァならぬよ。
多九　ハテ、そりやァ承知サ。
みち　モシ、傳三さん、お前がた爰に話してござんすなら、ちよつと見世を見て居て下さんせ。
傳三　オイ〳〵、ちよつとの内ならよいが、早く歸つておくれよ。
みち　ちよつとわたしや、あの扇長から、仕立て物の直しがあるというて呼びに見えたゆゑ、直ぐに行

つてくるわいな。

傳三　エヽ、かみさん、仕立て物をするぢやまで。夫婦稼いで金の置き所があるまいに。

みち　サア、わたしも土藏を建てうと思ふわいな。ホヽヽヽ。ちよつと行て參りまするぞえ。

ト辻打ちになり、とつかはと下座へ入る。

傳三　コレ〱、胡麻八。てめえ達の仲間に、蛇遣ひの女があるぢやァねえか。

胡麻　ハイ、たしかにござりやした。ナア、鍋太。

鍋太　アイ、そりやァ女ぢやァござりませぬ。蛇遣ひの男でござりやすが、稼ぎに出やしたが、もう歸るでござりやせう。

胡麻　旦那、その蛇遣ひに御用がござりやすかえ。

傳三　サア、ちつと賴む事があるが、マア〱、歸つた時分に來て見ようわえ。イヤ〱、見世を見てくれろと、あの嚊ァめが賴んで行つた。

多九　コレ〱、番頭、どうでおれが爰に居るから、氣遣ひなしに行つて來さつしな。

傳三　そんならお前、賴みましたぞえ。蛇遣ひが來たら、ちつと待たせておいて下さい。

鍋太　アイ〱、畏りました。

傳三　ドリヤ、ちよつと行つて來ようか。
ト辻打ちになり、德利を提げ、とつかはと入る。矢張り鳴り物にて、向うより九介、非人の形にて、蜜柑籠へ蛇を大分入れ、これを抱へ、跡より、したみ酒の三、同じく非人にて、一升樽と梅干桶にお餘りを入れ、捨ぜりふにて出て來り、舞臺へ來て
三　どうだ、胡麻八、今日は貰ひがあつたか。
胡麻　イヤモウ、天氣のせゐか强氣に貰つたて。
鍋太　三さん、そりやァ生酒か。砂ごしか。
三　ナニ、したみぢやァねえ、一升おれが奢りサ。
九介　押の强い奴ぢやァねえか。また富川町のお餘りであらう。
多九　コレ〳〵、てめえ達の境涯は氣散じでいゝの。なんと、おれも仲間にしてはくれまいか。
九介　ナニ、仲間になりたいえ、旦那とした事が、素人衆の目からは樂のやうにも見えますが、モシモシ、御覽じませ。（ト蜜柑籠の蛇を見せ）こんな不氣味な物を、商賣なればこそ、懐へ入れたり、襟へ卷いたり、イヤモウ、とつけもない商賣でござりますよ。
三　そりやァさうと、姐えどのは小屋にか。なんだかこの頃は氣が浮かねえやうだの。

胡麻　ハテ、そりやァ戀煩ひとやらであらうよ。
鍋太　なにか。上下者の太平次にか。
多九　ヤアなにか。太平次に、あの小屋の女が
九介　モシ、姐えどのはわし等が頭分サ。お前も近附きになつて、仲間へ入りたくば賴んで見なさい。
多九　近附きにして下さい。
九介　呑み込みました。（ト小家の側へ來て）コレ、姐御、寢たのか。ちつとマァ爰へ出さつしやいな。
ト垂れを上げる。内にうんざりお松、女非人の拵へにて、うたゝ寢して、思ひ入れあつて
まつ　アヽ、てめえ達は、もう歸つたのか。大分お怠けだの。コレ、また日上げを貸せと云ふまいよ。
三　なにサ、今日は大浮きサ。そこで姐御、一升買つて來ました。
まつ　話せるの。
九介　して、今日はどうだ。心持はようごんすか。
まつ　今日はちつといゝの。コレ、見りやァ、爰で稼がつしやる浪人さんが來て居なさるが、何ぞ用か。
九介　姐御、聞かつしやい。わしらが仲間になりたいとよ。
また　ナニ、侍ひをうつちやつて、蒲鉾小屋の附合ひがしたいとかえ。そりやァ好い心掛けだね。

胡麻 モシ〳〵、お詞の中だが、わしらが仲間へ入らつしやつても、藝が無くつちやァいきませんよ。

鍋太 それサ、乞食もお前、藝が肝心でござりやす。

多九 サア、何も藝はないが、身共四つ竹を打つて。

胡麻 そいつァお前、乞食にやァ持つて來い山櫻。姐御、仲間へ入れて進ぜさつしやい。

まつ ほんに、それほど乞食になりたくば、仲間にしてやりやせう。

多九 イヤ、それは近頃忝うござる。して、仲間入りがあらうな。

まつ アイ、乞食の仲間入りといつて、別して大層な話もないね。わつちらも腹からの乞食でもござりやしねえ。もとは近江で百姓の娘、ほんの事だが、これでもお前、女、男も使つた大百姓の娘サ。コレ、これを見な。(ト首に掛けた守りの中より書き物を出し)何の役にも立たぬ反故同様だが、また何ぞの時に要らうかと、枕紙にもしねえが、浪人さん、讀んで見な。(ト多九郎へ渡す)。

多九 なんだ。……「長德三年九月五日の誕生、江州千野村德太夫娘まつ。……ア、近江の生れだの。

まつ さやうサ。百姓の子だが、あまッ子の時分から、田植ゑだの何のと土ほぜりが嫌えでネ、十四の年に、村の番太と色事で國を逃げて、それからモウ、親には勘當され、あつちこつちの手へ渡つて、宿場へも出たり、切りも稼いで、今年二十五になるが、これまでに亭主も十六人持つた。着

ツきにけりが蒲鉾へ落ちたネ。ほんの事だが、善い事は知らねえが、悪い事といつたら、如才の
ある姐えぢやアねえヨ。コレ、餘ツ程こゝも細つて居るわな。
ト襟を叩いて思ひ入れ。以前の書き物を守りへ入れ、首へかける。
多九 成る程。如才のあるのぢやアねえわえ。
九介 見なさい。道樂をしぬいたから、色氣があるわな。
三 姐御も、あの太平次どんに、餘ツ程のびて居るの。
まつ エヽ、馬鹿を云へな。
多九 アヽ、あの侍ひ上りの太平次か。
まつ エヽ、あの人は侍ひかえ。
多九 ありやア、徒士奉公した者サ。
まつ 道理こそ武士らしいところがあるなう。
胡麻 コレ〳〵、姐御、新入りがあるに、なんと酒でも始めようではねえか。
まつ そいつアよからう。併しおらア豪敵に肩が張つたぞ。
鍋太 ちつと揉んで上げうか。


尾上松助
松本幸四郎

まつ　ナニ、女の手ぢやァ利かねえよ。
三　そんならわしが揉んで進ぜよう。
まつ　三坊、ちつとやらかしてくんねえ。
三　オイ〳〵。斯うか〳〵。（トお松の後ろへ廻り、肩を揉む）。
胡麻　サア〳〵、新入り振舞に酒にせうぞえ。
九介　何ぞ肴があるかえ。
まつ　小屋にあつた。コウ、鍋公、とつて來な。
鍋太　アイ〳〵。

ト小屋の中より缺け重箱に缺け摺鉢を添へ、肴の入れたるを取つて來り、樽の酒を徳利へ入れ、茶碗を取出し

サア〳〵、姐御、始めなさい。
多九　新入りがちつと戴きませう。
まつ　そんなら、憚りながら、上げやせう。

ト捨ぜりふにて鍋太、酌して、お松、茶碗を引きうけ、酒を飲む。

胡麻　時に、姐御、新入りの馳走に、九介の踊りはどうだネ。
まつ　よからうョ。始めねえ。
九介　おれが踊るが、三味線は、てめえ彈くか。
胡麻　そいつは承知サ。コレ、新入りさん。稽古ながら見習ひなさい。
多九　拜見いたさう。
まつ　オヤ、馬鹿らしい。
三　サア／＼、早く、始めねえ／＼。
ト胡麻八三味線彈く。九介踊る。何なりと流行り唄。振よろしくあつて納まる。
皆々　サア、酒にすべい／＼。（ト辻打ちになり、以前の傳三、德利を提げて出て來り）
傳三　コレ／＼、蛇遣ひの男は歸つたかの。
多九　番頭か。アレ、あの男が蛇遣ひよ。
傳三　アヽ、てめえか。コレ、おぬしが遣ふ蛇の中に、ひばかりがあるか。
九介　されば、あつたかも知れぬ。（ト蜜柑籠を出す）
まつ　アヽ、ひばかりが何ぞになるかえ。

傳三　ちつと入用だが、有るなら賣つて下さいな。

まつ　コレ、九介、おつりきな相談だ。賣つてやらつしやいな。ドレ、籠を爰へ寄越さつし。

九介　サア〳〵、見てくんねえ。

ト籠を出す。お松いろ〳〵捨ぜりふで、蛇を色々見わける。

多九　コレ〳〵、番頭、氣味のわるいものを、イヤ〳〵、おらア嫌だぞ。

傳三　さうサ。姐えは苦手か。

まつ　アイ。わつちは蛇遣ひもして歩いたよ。

多九　成る程、さう見えるて。

まつ　（ひばかりを一疋取出して）コレ〳〵、此奴がひばかりだよ。

傳三　エヽ、その事か。

まつ　これが何になるえ。

傳三　サア、ちつとそれには話があるが

まつ　（思ひ入れあつて）よし〳〵。こいつアわつちが野暮であつた。………コレ〳〵。ぬし達は、ちつと氣をきかしてくんねえ。

皆々 合點でござりやす。
胡麻 サア、嗅アや。楊弓場の際で始めよう。
鍋太 さうしなさい。
九介 姐御、いゝやうに賴みます。
三 新入りさん、お前も行かねえか。
多九 ナニ、おらア聞いてもいゝ。………とはいふものゝ、今からこなた衆の仲間だ。見習ひながら行かうか。
皆々 そんなら姐御。
まつ ちつとの內だよ。
ト辻打ちになり、胡麻八、鍋太、多九郞、九介、三、ついて下座へ入る。
傳三 コレ姐えや、して、その蛇を、てめえ賣つてくれるか。
まつ ハテ、錢金になる事なら、隨分賣るのサ。
傳三 して、いくら位るだ。
まつ ハテ、蛇の相場に極りがあるものかな。いゝ加減に寄越しなさいな。

傳三 そんならぶッつけ一分だ。よしか。

まつ 蛇一疋を一分とは有り難い。サア、持つてお出で。(ト出す)。

傳三 アヽコレ、どうして〳〵。買ひは買つたが、持つてはゆかれぬ。とても事に、そいつを引裂いて、血を取つてもらはう。

まつ アヽ、血がいるのかえ。待ちねえ。引裂いてあげよう。

ト捨ぜりふにて片口の中へぶちこみ、あちこちして口より引裂く。傳三以前の徳利を出して

傳三 コレ〳〵、この中へ頼みます。(ト蛇の血を徳利へしたみこみ、傳三振りまはす)。

まつ もうそれでよしかえ。

傳三 こりやァ姐御、御苦勞々々々々。

まつ また相應な用があつたら、お頼み申しやす。

傳三 承知サ。そんならお松。

まつ 傳三さん。アヽ、手でも洗つて來よぅか。

ト辻打ちになり、下座へ入る。この鳴り物にて、向うより立場の太平次、襟附きの袷、紅皮の三度、藤倉草履、封じたる狀を大分下げ、飛脚屋の狀配りの形にて出てくる。下座より多九郎出てくる。三

人行き合ひ、床几に腰をかけ

太平　番頭さん、そりやア何だ。銘酒ぢやアないかえ。

傳三　太平次どん、この間、貴様にも話した、彼の毒が調合してあれど、今一藥がひばかりといふ蛇の生血、この小屋の蛇遣ひが持つてゐるたゆゑ、たつた今、この酒の中へしたみ込んだ。こいつを彼の奴にくはせて、めでたくゆけば、お龜はおれが女房にするつもり。

太平　そんなら、その毒で彼の奴をやらかすのか。そりやア手短かな話だの。コレ、それにつけても、この頃あの與兵衛が、おれを見るたびに、無性に腹を立てるが、こいつ一圓合點がゆかねえの。

多九　コレ／＼、太平次、一體マアおぬしの顔が、大學様に瓜を二つに割らずとその儘。その大學様は、いつぞや江州で、あのお龜を妾にしようと云はしつたげな。そこで大學様に當りがあるゆゑ、御前によく似たおぬしゆゑ、腹を立てると見えるわえ。

太平　イエ／＼、そりやア話が違つてゐる。道理こそ大學様がわつしを買込み、高橋ゆかりの奴等なら、方づけてくれろとのお頼み。御前によく似たわつしゆゑに、癇癪を起すのは、そんなら、今は町人でも、御前を恨む心のねえでもねえわえ。

多九　アヽ、そんなら與兵衛は、高橋にゆかりの者か。

太平　アイ。大兄は瀬左衛門。手討ちになつた彌十郎が次の弟、孫三郎といつた高橋の、三人目の弟サ。
多九　そりやアとんだ事だ。
太平　何がとんだ事だ。
多九　さうとは知らず、あの番頭を頼んで、靈龜の香爐を五十兩に、與兵衛めに賣る筈で、手附けをとつて、あつちへ渡して置いたワ。
傳三　エヽ、そんならあの香爐を、與兵衛が見ては悪いかえ。
太平　悪い段か。與兵衛があの香爐を多賀の邸へ上げると、高橋も家が立ち、俊行様のお家も別條なく、折角お前が盗み出し、企んだ元締め大學様も、蒟蒻屋の蒟蒻。ハテ、そりやアとんだ事だ。

トこのわたりに、お松出かゝつて窺ひ居る。

傳三　それぢやア、滅多に、香爐も手離されぬ話だが、是非々々與兵衛が買ふといつて、京大阪へ掛け先きの金を取りに行つたのも、後金濟ます積りだわえ。
太平　して、手附けでも取つたのかえ。
多九　さうサ。十兩取つて遣つてしまひ、香爐も與兵衛が方へ預けて置いたのよ。
太平　そんなら、手短かに、與兵衛が留守を幸ひ、番頭、ちよろまかして來やれな。

傳三　どうして〳〵。大切な道具は戸棚へ入れて、鍵はお袋が腰へくツつけて、離す事ぢやァねえの。
太平　そいつァ困つた話だ。
まつ　モシ、太平次さん、その香爐とやらを、わつちが仕事してあげうか。
太平　ヤア、てめえは非人のうんざりお松。あの香爐を取り返す手段があるか。
まつ　モシ、斯うしてはどうだえ。（ト太平次に囁く）。
太平　ア、、そんなら與兵衛が留守を幸ひ、てめえが店へ振り込めば、コレ、番頭、斯うだワ。
ト傳三にも囁く。
傳三　成る程。留守を幸ひに、そいつもよからう。（ト多九郎へ囁く）。
多九　よし〳〵。併しそれでもゆかないときは、手短かにその酒で
太平　マア、何にしろ、お松の趣向を、やらかして見るがいゝ。併し振りこんだとき、なんぞ與兵衛が動きの取れぬ證文が無くば
傳三　そいつは奇妙な物がある。コレ。（ト懷中より與兵衛がお龜へやりし起請を出し）與兵衛が書いたこの起請。こいつが種になりさうだの。
まつ　ほんに、そいつは奇妙だわえ。コレ、「お龜どのへ與兵衛」といふ起請を、一番役に

ト守り袋を出してその中へ起請を入れる。

多九　コレ、あの與兵衛めが歸らぬ中に

まつ　そんなら直ぐにしかけるよ。首尾よくいけば、モシ太平次さん、薄穢ないわつちでも、萬更腹からの乞食でもねえよ。間にやア、ちつと麥飯も、また藥食ひだわな。(トいやらしき思ひ入れ)。

太平　そりやアモウ、首尾よく香爐を、ちよろまかしてくれさへしたなら、どうでもならうよ。

傳三　併し姐え、その儘でも行くまいの。

まつ　サア、なんぼ乞食だといつて、身仕舞ひ道具の、だりむくつたのでも、持つて居るのサ。

ト小屋の中より古鏡、鏡立を取出し、筵の上へ坐り、たゝう紙の中より白粉茶碗を出し、顏を直す。

太平　エヽ、流石は女だけ、てめえの樣な氣前でも、紅白粉の貯へがあるの。

まつ　ハテ、誰に見しよとて紅鐵漿つきよぞ、みんなぬしへの心中立て。(ト鼻唄を唄ふ)。

傳多　いゝ氣前だの。

太平　氣にくされはねえ奴よ。

ト お松は髮を解かす。辻打ちになり、向うよりお道、風呂敷包みを持ち出て來り

みち　オヤ、お前、いつの間に來なさつた。

太平　コレ、われも店を明けて、どこを歩いて居る、エヽ。
みち　アイ、わたしや扇長に仕事があつて、帶や小袖の縫ひ直しを取つて來たわいな。
　　　トこの中よりお松、じろ〳〵見て居る。
太平　おきやアがれ。あとから附いては歩かれず。
みち　なんで又、女房に附いて歩く亭主があるものかいな。
太平　無くつてヮ。抱寝をする亭主だもの、附いて歩いてもいゝぢやァねえか。
みち　そんなら附いて歩きなさんせいな。
まつ　（こちらを見て）なんだな、太平次さん。なんぼ掛け構ひのねえわつちらだといつて、見てくれのわるい、氣障な事はよしねえな。
みち　オヤ、このお松どんは、何を其やうに腹を立てる。こりやァ女房と亭主の話だわな。
まつ　エヽ、よしなさいな。その話が氣障だわな。イケあつかましい。
みち　コレ、何があつかましいえ。
まつ　あつかましいよ、コレ、かみさん。わつちらがやうな乞食だといつて、さう踏みつけにしねえものだわな。エヽ、お前は旦那衆、わつちらは乞食だよ。アイ、大勢ぢやァござりやしねえ。たつた

一人でござりやすよ。アイ、どうでござりやすな。

みち　ありやマア、何を腹を立てるのぢやぞいな。

太平　コレサ、マア〳〵、てめえ先きへ歸れよ〳〵。

みち　ナニお前、歸る事があるものかな。わたしやまだこの仕立て物も、とつくりと相談してな。

太平　ハテ、大事ねえ、こりやアおらが後から持つてゆく。マア〳〵、先きへ歸れ〳〵。

みち　それぢやといふて、何ぢややら、あの小屋のお松が、わたしに向つて

まつ　小屋のお松もすさまじい。素人衆のかみさんだといつて、乞食だといつて、あんまり退いた話もねえよ。

傳多　ハテ、いゝわな〳〵。（ト小屋の中へ入る）。

太平　コレ〳〵、てめえ、まア先きへ行つてくれろよ。コレ番頭、貴樣、連れて行つて下さい。

傳三　呑み込んだ〳〵。サア〳〵、お道さん、わしと一緒に歩ばつし。

みち　はて、何も行くには及ばぬわいな。

傳三　イエ、先きへ歸らつしやいよ。コレ、これも先きへ持つて行くよ。（ト持つたる德利に思ひ入れ）。

太平　よしサ。先きへ行かつしやいよ。

傳三　サア、來なさいよ。

ト辻打ちになり、傳三件の德利を抱へ、お道をせり立てゝ向うへ入る。太平次、風呂敷包みを受取り、殘る。お松見て

まつ　モシ、太平次さん。あんな綺麗なおかみさんがあつちやア、どうしてマア、わつちのやうな乞食をよもや

太平　イヽヤ、それもてめえの働きで、首尾よくやつたら

多九　そりやアその時の相談に。ナウ、太平次

まつ　そんなら爰から道具屋へ

太平　與兵衛が留守へつけ込んで（ト風呂敷包みをわたす。おまつ取つて見て）

まつ　こりや女小袖に女帶。

太平　身ぐるみ着かへて

まつ　うまく行つたら（トこの時、九介、三、鍋太、出かゝり）

三人　姐御、御苦勞。（トおまつ、太平次に思ひ入れあり）。

まつ　コレ。

太平　エヽ、やかましいわえ。
トこれを刻みにて、よろしく

拍子幕

幕の中、やはり辻打ちにて、繋ぎ。引返し。

五幕目

道具屋の場

役名━━百姓、佐五右衛門。手代、傳三。下女、おみよ。下部、曾平。道具屋娘、おかめ。女非人、うんざりお松。道具屋、與兵衛。道具屋後家、おりよ。立場の太平次。

本舞臺、三間の間、納戸口、更紗の暖簾を掛け、上の方、折廻しの障子、下の方、段さんの戸棚。この前に置き物の唐獅子、櫓時計、堆朱の香爐臺、紫銅の大薬罐など並べ、壁に帳面色々、田代と印しせし軒暖簾。いつもの所、門口。下に木戸を少し見せ、すべて今出川道具屋の體。爰におりよ、母親の拵へ、お龜、振り袖の娘の形にて、おりよが髪結うてゐる。此方に下女おみよ、行燈の掃除して居る。てんつゝにて幕明く。

ト直ぐに向うより、傳三、幕明きの形にて、酒徳利を提げて來り、舞臺へ來て、内へ入る。

傳三　おみよ、今、行燈掃除か。馬鹿々々しい。

みよ　この番頭さんとした事が、歸り早々、もう小言かいなァ。

傳三　小言ぢやァねえが、智恩院の八つを先刻打つたワ。

りよ　コレ〳〵、傳三、その樣に云やんな。あれも遊んでは居ぬわいの。

かめ　母さん、もうよろしうござります。（ト髮結ひしまふ）。

りよ　オイ〳〵、これはお世話。………　おみよ見や。手傳つて結うてもらうたが、齡の十も若くなつたであらうの。

みよ　ほんに、さやうでござります。まだ隨分お嫁入りが

りよ　そりや信濃へであらうな。ハヽヽヽ。

かめ　アレ、母さんの冗談ばつかり。さぞ、氣味がお惡うござりませう。

りよ　なんのいの。（トお龜手を拭く。此うち、傳三、莨盆を控へる）。

かめ　その徳利は、傳三、わが身持つて來やつたか。

傳三　ハイ。こりや與兵衛さんに。………　イヤナニ、アノ與兵衛さんの代りに、建仁寺町の竹垣樣へ、

茶入れの事で參つたれば、幸ひ貰うた加茂川酒、一つ飮めと仰しやります。イヤ〳〵、晝間酒を飮みましては、奉公が粗略になります。ハテ、そちは主思ひな、そんならこれごとやる程に、勝手に飮めと仰しやつて、貰うて參つた、こりや銘酒でござります。

傳三　なんのお前樣、商賣の事より外というたなら、錢湯ばかり。錢湯樣のお惠みで、與兵衞樣へ首尾ようこいつを（ト思ひ入れ）。

りよ　さうとは知らずわしは、又與兵衞が大阪へ行つたを知りつゝ、どこへ行つた事ぢやと思ひました。

りよ　傳三、何を首尾よう

傳三　イエサ、與兵衞樣が、首尾よう金を持つて、歸らつしやればよいといふ事。

かめ　なんのマア、正直な與兵衞さん、受取りさへなさんしたなら

りよ　イヤ〳〵。この頃、與兵衞が夜泊り、日泊り、その上、これまでの孝行な心に引きかへ、ぞん氣になつたは、どうでも心に（ト思ひ入れ）。

かめ　エ。

りよ　ホヽヽヽ。つい愚癡を云はうとした。コレ、おみよ、もう夕飯の拵へぢや。

みよ　ハイ〳〵、畏りました。

りよ　わしは仕掛けた綿入れ物。ドレ、方付けてしまはうか。

ト唄に成り、おりよ先きにおみよ行燈を持ち、奥へ入る。此うち、傳三は莨をのんで居る。お龜、櫛道具を方づけ、奥へ行かうとする。傳三徳利をかた寄せ

傳三　ア丶モシ、お龜さん〳〵。

かめ　イエ、わしや（ト行かうとするを）

傳三　これはしたり、マアちよつと、お出で〳〵。（ト手を取り連れて來る）。

かめ　又いつもの嫌らしい事ぢやないか。

傳三　なんの〳〵。お前の爲を云うて上げるのぢや。

かめ　わしが爲とは、そりや、どのやうな

傳三　お前、さつぱり知らずぢやが、與兵衛さんはこの頃中、祇園町に馴染が出來て、藝子ぐるひ。それで足らいで磯せゝり、モウ〳〵あのお龜が、鼻に附いて〳〵、うるさい、と云うてぢやぞえ。

かめ　イヤ〳〵。わが身のそりや嘘ぢや。與兵衛さんの夜泊りは、謡ひ講や茶の湯にお出で。どうしてそんなお心のないといふ證據は（ト襟にかけし守り袋を出し、中を見て）ヤア、こりや起請が見えぬわいの。（トいろ〳〵尋ねる）。

傳三　モシ〳〵。起請があるか。あるまいがな。與兵衛様は玉歸り。ヤア玉歸り〳〵。評判の玉歸り。

ト立騷いて煽てる。

かめ　なんの、與兵衛さんの心が變つても、わしが心は變らぬわいの。

傳三　コレ、なんぼお前がさう云うても、與兵衛さんはおツつけ、ころり。

ト お龜に見えぬやうに、德利へ指さして思ひ入れ。

かめ　エヽ、そのやうに、えんぎの惡いこと云やんないの。

傳三　ハテ、そこが老少不定、その時は傳三さしづめ跡取り。それぢやによつて、爰で手付けに。

ト ずつと寄る。

かめ　アレモウ、うるさい。離しやいなう。（ト突きのける）。

傳三　ハテ、さう云はずと、ちよつと〳〵

ト又寄る。お龜逃げる。傳三これを追はへ歩く、此うち、てんつゝになり、向うより佐五右衛門、木綿やつし、股引、三尺手拭、一本差し、草鞋の形にて、菅笠を持ち出て來り、舞臺へ來る。

佐五　オヽ、爰ぢや〳〵。……ちと御免なされ。

ト云ふをも聞き入れず、お龜を追はへてゐる。

これはいかな事。御免下され。

ト草鞋を脱いでズツと内へ入る。傳三出合ひがしらに寄る。佐五右衞門悔りする。傳三「ヤア」と思ひ入れ。お龜見て

かめ　お前は近江の父さんぢやござりませぬか。

佐五　さういふ其方はお龜かいの。

傳三　ヤア、そんなら實の

佐五　お龜が父親。番頭どの、今のは何で

傳三　サア、あれは。……オヽそれ〳〵、親御の事ゆゑ、お龜さんが、あれ位ゐ可愛からうと。

佐五　ハテ、いかい苦勞性な。……ハヽヽヽヽ。（ト傳三しよげる）。

かめ　ほんに、父さん、ようお出でなされましたなア。

傳三　さやう〳〵。ひよんな所へ……ようお出でなされました。ドレ、お袋樣へお知らせ申して

ト合ひ方、これをしほに奥へ入る。

かめ　マア、お前も御無事で

佐五　其方も達者で、てもさても、大きうなつたなア。

かめ　アイ〳〵。あのナ、父さん、わたしやいつやら、與兵衛さんと谷汲の觀音樣へ、お詣り申したその時、お前には四五年あとにお目にかゝつたれど、今の母さんもまだ知らず、さうして妹のお米にも、小さい時に別れたゆゑに、逢ひたう思ふ其うち、ついした事で、淸水村へ寄らなんだ。皆おまめでござんすかいなァ。

佐五　オヽ、隨分と皆息災ぢや。

かめ　さうして、今の母さんが連れて見えた、弟の里松わえ。

佐五　サア、その里松めは。……まめで達者で、息災な程に、案じやんな〳〵。（ト思ひ入れ。奥にて）

りよ　なんぢや、お龜の父御が見えた。ヤレ〳〵、それは。（ト云ひながら出て）オヽ、こりや、近江の佐五右衞門どの。何と思うて久し振り。

佐五　これはおりよどの。無沙汰ぢやと思うて下さるな。何ないふも、百姓の

りよ　何のいな、御無沙汰は互ひの事。……コレおみよ、お茶早う持つておぢや。

みよ　ハイ〳〵。

トてんつゝになり、花道よりお松、絹やつし、横帶、引摺り下駄、女房風の拵へにて出て來り、直ぐに舞臺へ來る。此うち、おみよ、茶碗を茶臺にのせ、持ち出て佐五右衞門に出す。お松門口より

まつ　ハイ、おゆるしなされませ。（トずつと内へ入る。お龜思ひ入れ。）
りよ　つひに見馴れぬ女中さん。……ア丶、今日裏長屋へ引越しの
まつ　イエ〳〵、わたしやそんな者ぢやござりません。與兵衞さんにちとつお目にかゝりたい事がござりやしてサ。お前さん、與兵衞さんのお母さんかえ。こりやお初にお目にかゝりやした。どうぞちよつと與兵衞さんに。……モシ、姐えさん、ちよつとお貸しよ。
トお龜が前にある煙管、莨盆を引きよせ、煙草をのむ、お龜氣味わろき思ひ入れにて、そろ〳〵とおりよの方へ寄る。おりよ思ひ入れあつて
りよ　モシ〳〵。お前、折角のお出でぢやが、與兵衞は今日急な事で、大阪へ下りました。なんぞ用なら又その内。
まつ　ヘエ、そんならアノ與兵衞さんは、大阪へお下りかえ。……ほんに、人にやア沙汰もしないで、モシお母さんへ。さういふ事ならお歸りまで、わたしをどうぞお内へお置きなすつて下さりませ。
りよ　そりや又お前、どうした譯で。
まつ　お母さんの前ぢやア、お恥かしいが、わたしやアノ西石垣の扇源と申す呼び屋の、……サア、ついした事から與兵衞さんと、お心安くして居りやしたを、いらぬお世話な何奴だやら、ちやんと

内へ吹込んで、今朝からのやッさもッさ。仕様がなさに駈け出して、與兵衞さんとも相談と、參つたところがお留守ぢやァ、今日の事には參りやすまい。といつて、内へは行かれず。否でもお歸りなさるまで、お待ち申して、此しらちを

ト此うち、佐五右衞門氣の毒な思ひ入れにて、莨盆を持ち、後へ下る。

りよ　そりやモウ、ひよんなお話ぢやが、よもや與兵衞が其やうな

まつ　成る程。お留守へ參つてこんな事を申しちやァ、お前さんも御存じない事ゆゑ、どうか芝居で音羽屋の、親仁がいたす事のやうに、思し召すは尤もだが、今のむ莨が毒になれ、微塵わたしが、さら／＼どうして。といつて…、眞にはなさるまい。慥かな事は與兵衞さんと、取りかはした爰に起請が

かめ　エヽ。（ト思ひ入れ。おりよは佐五右衞門へ氣の毒なこなし。お松守りを出し）

まつ　お目にかけるも、どうやら嫌らしいが、出さにやァわたしが嘘でも……こりやァお守り。……これでもなし……こりやァ臍の緒。……ハテ、つい入れておいたが

ト守りの中より、いろ／＼出して下におく。佐五右衞門これを後ろより見てゐて、臍の緒の書付けを煙管にて引寄せ、取つて見て、お松が顏をちよつと見て懷中する。お松これを知らず

これだ〳〵。これを御覽じて下さりませ。

ト起請をおりよが前に置く、おりよお龜と顏見合せ、思ひ入れ。

モシ、お母さん。これがわつちが慥かな證據。御覽じて下さりやしな。

ト廣げておりよへ突きつける。お龜あちらへ向く。おりよ是非なく取つてちよつと見て

りよ　こりや違ひのない與兵衞の手跡、……お龜どのへ與兵衞。

ト涙聲にて讀む。お龜これを聞き、起請をそつと覗き見て

かめ　ヤア、この起請はわたしがなくした

ト取らうとするを、おりよ思ひ入れ。お松ちやつと手早く取つて

まつ　オヤ〳〵〳〵。お前ばかりがお龜さんかえ。一つ町にも同じ名は、いくらもありやすわな。起請のお龜はわたしが事。お母さん、なんと噓ぢやアござりやすまいね。

りよ　サア、起請のお龜が……こなさんなら

まつ　與兵衞さんゆゑだりむくつて、かう内方へ駈け込んで、據なくお母さんに、こんな事を申すからは、起請の通り、二世三世、變らぬわたしや與兵衞が女房。お氣に入らずと、お母さん、どうぞわたしをこなたの嫁に。……オヤ、履き物を上げられちやア（ト門口の下駄をしまふ）。

かめ　モシ、母さん、アレ、あのやうに

りよ　サア、よいわいの。尤もぢやが、何をいうても憎いは與兵衛。人の内儀と此やうな。ほんに、いとしぼけなこなさん、苦勞であらうな。シタガ、知つてござるか知らねども、あの與兵衛は、爰に居るお龜というて、小さいから云ひ號けの女房のある身。そこへどうも外には

まつ　そんなら、あのお子さんが。……それぢやァ、わたしやなぐさみ物。エヽ口惜しい。どうしようねえ。こんなマア腹の立つ

りよ　コレ〳〵、さうした事でもあるまいが、肝心の與兵衛が居ねば、マア今日は内へ歸らしやんして、與兵衛が戻つたその上では、ハテ、あれも男ぢや。こなさんの譯もつけるであらう程に、さう思うて、どうぞ内へ。

まつ　モシ〳〵。そのお騙しはたべやすまい。今こそ斯うした女房なれ、元はわたしも祇園町で、一夜六分の、花も咲かせて宮川町、繩手も踏んで道場か、高臺寺前下り坂、八坂を落ちて駈け上り、二條新地や御靈裏、おはもじながら風の辻、泣かぬ勤めの螢茶屋、あらゆる場所を駈けまはり、酸いも甘いも承知のわたし、素人方の口鉾に、乘つてそんならさうかえと、歸る女と思し召すか。お如才のないお母さん、お前さんでもござりやすめえ。ホヽヽヽ。女中衆、お茶一つおくれ。

りよ　ムウ。そんならどうでもこなさんは
まつ　アイ。與兵衞さんのおかみさん、この道具屋の花嫁御サ。
かめ　イエ〳〵、與兵衞さんにはわたしといふ
みよ　それ〳〵、親御樣のお許しの、きつとした御新造樣がござんすりや、なんぼお前はさう云うても、及ばぬ事でござんすわいナ。
まつ　默りやァがれ、この阿魔め。及ばうが、及ぶまいが、コレ、この通りの起請がありやァ、どこへ出ても與兵衞が女房。もうこの内に居据つて、お夜食からして据ゑ膳だ。どなたもさう思つておくれ。
りよ　サア〳〵、それも合點なれども、マア與兵衞が戻るまで（トおりよ歸さうといろ〳〵する）。
まつ　イヤ〳〵、爰はわたしが内、手向けの水に一本花、立て線香に白餠の、御馳走たべたその上に、枕念佛を聞かない内は、滅多に出やァ致しやせんよ。
ト莨を吸ひつける。皆々もてあましたる思ひ入れ。傳三出て來り、おりよをこちらへ呼ぶ。
傳三　モシ〳〵、お袋樣。奧で聞いて居りましたが、與兵衞さんの夜泊り、日泊り、ろくな事は出來まいと、存じて居つたが案の定。こりやマア、どうなされます。
りよ　どうというて、あの女中を、マア去なすより、外に思案は

傳三　サア、只さうばかり仰しやつても、とんと埒は明きませぬ。いづれ……れこでござりまするぞえ。
ト思ひ入れ。

りよ　さいなう。それも少しばかりの事なれば

傳三　マア、わたしが一つ。話し合ひませう。（トお松の側へ來り）モシ、お女中さん。お前にも無理はない。至極々々。……ぢやが、爰にあるて。いくら云うてもその相手の與兵衞さんが留守なれば。サ、歸られまい。尤もぢや。そこが物は談合とやら。與兵衞さんの戻るまで、少々の胸倉金で

まつ　カウ〳〵、おきなさい。お前は爰の番頭さんか。わつちやァその嫌らしい、胸倉金の何のかのと……よいワ。そんなら皆がわたしを歸したがゐ事だ。與兵衞さんの歸るまで、料簡つけて待つてやらう。（ト皆々思ひ入れ）。サァ、姐さん、お出で。（トお龜が手を取つて引立てゐ）。

めん　あれいなァ、わたしを

りよ　（留め）コレ〳〵、お龜をなんで、こなさんは。

まつ　ハテ、與兵衞さんはお留守ゆゑ、わたしが事は解りませぬと、親分へ云はれやせうか。お龜さんを預つて、待つのがわたしの料簡サ。與兵衞さんがお歸りなら、お龜さんと退去り書いて、わたしを内へ入れるとも、わつちが手を切り、お龜さんを呼びなさるとも、主の心。それまで、笑は

れない口ふさげのため、お龜さんは預つて歸りやすよ。

ト又引立てる。おりよ、おみよ支へる。お龜思ひ入れ。傳三留める。

傳三　マア〳〵、待ちなさい〳〵。成る程、云ひなさるなァ尤もだが、いとしぼなげにお龜さんを。……

モシ〳〵、なんとお龜さんの代りに、このおみよぢやァ

みよ　エヽ、モウ番頭さん、なんのわたしが

傳三　ハテ、誰ぞお龜さんの（ト思案して）モシ、お袋さん。なんと、お龜さんの代りに、内方にある

龜の香爐、龜といふ名でごぢつけて、香爐を預けては

りよ　そりやモウ、あれで先きさへ得心なら

傳三　マア〳〵、これへお出しなされませ。

トおりよが腰の鍵にて戸棚を明け、中より序幕の香爐を出し

りよ　傳三、シタガ、まだ買ひ切らぬこの香爐、外へやつては

傳三　ハテ、ようござります。こりや元より盗み物。

りよ　エ。（ト傳三ギョッとして）

傳三　サア、なんであらうとマア遣はされませ。（ト無理に取つて）モシ、女中さん、どうもお龜さんは渡

されぬ其代り、こりやこれ、靈龜の香爐といふ大切な物ぢやが、ちつとの內、何とこれを預つて

まつ　そんなら龜といふ名ゆゑ、お龜さんの代りにこの香爐。……ようござえす。預つて待ちやせう。

傳三　アノ、聞き屆けて。……モシ、お袋さん、得心を致しました。お龜さん、嬉しからうな。……サ
アノ〳〵、そんなら、龜の香爐は

ト手柄顏にいろ〳〵あつて、香爐をお松に渡さうとする。この時佐五右衞門、香爐を取り上げ

佐五　イヤ、番頭どの。この香爐は渡されぬ。

ト合ひ方になり、眞中へ出る。お松、傳三、顏見合せ、思ひ入れ。この時向うより立場の太平次、前幕の形にて出て來る。

傳三　モシ、折角香爐で承知のところ、渡されぬとは、お龜さんを

佐五　イヤ、どちらも渡されぬ。聞いた所が、こりやア與兵衞から起つた事。それに、お龜を連れて行かうと、廻り廻つて龜の香爐。おりよどのは得心でも、この實親の娘の名、龜の香爐渡すは不承知。……コレ、女中、相手の與兵衞が代りなら、何なりと持つてござれ。おりよどの、この香爐は先づそちらへ。（トおりよに渡す。この時太平次舞臺へ來り、門口に窺ふ）。

まつ　ナニ、與兵衞さんの代りなら、待ちなさいよ。與の字のついた物ならば

傳三　夜着か、葭簀か、夜鷹蕎麥。
まつ　よしの木、さいかち、猿すべり。
傳三　いつそ、ふの字ぢやァどうだネ。
まつ　馬鹿を云ひねえ。有卦にでも入りやァしまいし。……よいワ。何のかのと氣を揉むより、蒔き直して爰の內に
佐五　そんならどうでも
まつ　お龜與兵衛と、睦まじく起請の通り、夫婦になるのサ。（ト起請を見せる）。
佐五　さうしてこなたは、少さいから、お龜と名を附けたのか。
まつ　アイ、七夜の折にお父さんが、附けておくれたそのまんまサ。
佐五　それでは與兵衛と夫婦には
まつ　どうしたとえ。（ト佐五右衛門、以前の臍の緒書を出し）
佐五　長德三年九月五日の誕生、江州千野村、德兵衛娘まつ。
まつ　ヤ。……どうしてそれが。（ト起請を捨て、臍の緒へかゝるを、グツと引きつける。外にて太平次思ひ入れ）。
皆々　アヽ、モシ、滅多な

佐五　大事ござらぬ〳〵。……ヤイ、お松、わりやアまだおれを知るまいな。四年あとから連添ふ今の女房、おわたが妹。

まつ　ヤア、そんならこなたは、こちの姉聟、（ト起上るを又引きつける）。

りよ　ムウ。すりやこの女中は

かめ　今の母さん

佐五　オヽ、おわたが爲には實の妹。身性が惡さに緣切つて、別れし後は京都にと、噂にきけどどうしたやら、眞人間になつたかと、折々案じておれへの話。思はず爰で出合つても、此方も知らねば、控へる内、最前守りのその中より、取出す臍の緒目にかゝつても、緣者の端と押し隱し、事なく歸らば儘にもと、見る程猶々附け上り、女の身にて筋なき騙り。コリヤ、てんどへ出ると首が飛ぶぞよ。（ト散々に舞臺へ摺附け思ひ入れ）。

りよ　サア、わたしも與兵衛がよもやとは、思へど慥かな自筆の起請。

かめ　そんなら矢ッ張りわたしが失した……それで名宛をその儘に、お龜というて見えたのぢやわいな。

ト起請を取つて懷へ入れる。

佐五　そりや内々で誰ぞ拾つて

傳三　さやうでござります。（ト云ひ〳〵、そろ〳〵奥へ行きかゝる）。

りよ　傳三、待ちや。

傳三　ハアイ。（ト蹲る）。

りよ　與兵衛が留守を附け込んで。お龜と香爐を引上げうと、この頼み手はどこぞにあらうな。

ト傳三ギックリ。

佐五　それも女をぶちのめし、この佐五右衛門が白狀させて

トしゆろ箒を取る。おまつこれはと逃出すを、足を掻いて打たうとする。この時太平次、ツカ〳〵と入つてこれを留める。傳三、この間に逃げて奥へ入る。

まつ　ヤア、お前は（ト思ひ入れ）。

太平　やかましいわえ。……モシ〳〵、只今これへ來かゝつて、樣子を聞けばこの女は、あなたや內方のお龜さんの、どうやらお繫がりとやら。そんなら萬更他人でも、內證同志でこつそりと、……モシ、お袋樣、さやうぢやァござりませぬか。

りよ　太平次どのゝ、云はしやればそんなもの。騙られたといふではなし、この儘去なすが、ナウお龜。

かめ　アイ〳〵。……モシ、父さん、今日はどうぞ堪忍して

佐五　イヤ〳〵、初めて逢つた姉聟が、折檻は女房へ土產。（卜立掛る。皆々隔てる。太平次お松を引立て）

太平　すんでの事に危ない所へ……おれが來たのはうぬが仕合せ。長居をせずと……キリ〳〵と失しやがれ。（卜思ひ入れあつて突出し、門口を締めようとする）

まつ　オツト、待つてくんな。そこらに下駄を置いたつけ。（卜太平次下駄を取つて投出し、門口を締める。お松拾つて）なんの、投出さずとよい事サ。……折角巧いと思つたところへ、あの姉聟の在鄉めが、うせたばつかり、張り込んだ、下駄の錢もいま〳〵しい。こいつが一生つまらない。

卜合ひ方になり、お松花道へ行き、取つて返し、門口に窺ふ。

りよ　なんとマア、見さつしやい。怖い世の中ぢやないかいの。

太平　イヤモウ、今時は女でも油斷はなりませぬ。

かめ　わたしやどうせうと思うたところ、父さんが來てござんしたばつかりに、ナア、母さん。

りよ　それに、五年振りでお出での佐五右衛門樣、埒もない事にかゝつて、ろく〳〵お茶さへ

佐五　イエ〳〵、構うて下さるな。おりよどの、わしが今日來ました譯は

りよ　サア、お出での譯も聞きませうが、マア、ゆるりとなされて。コレ、お龜や、今のお禮や何やかや、たんと御馳走申してたも。

かめ　アイ〳〵。

みよ　モシ、お袋様、爰よりは奥がよろしうござりませう。……サア、佐五右衞門樣。

りよ　いかさま、それがよからう。

佐五　そんなら、あれでお話し申さう。

りよ　太平次どの、これにござれや。

ト唄になり、佐五右衞門先きにおりよ、香爐を持ち、お龜、おみよ、奥へ入る。太平次殘り、思ひ入れ。外よりお松戸を明け

まつ　太平次さん。

太平　コレ。（ト あたりへ心遣ひあつて、表へ出て）お松、まんまと失敗つたよ。

まつ　見ねえな。十が九つやらかしたものを、あの姊聟の篦棒めが、とんだ所にうしやァがつて

太平　よいワ。とてもお袋めが手離さない樣子なりやァ、わりやァどこぞに隱れて居て、あのお龜めを引上げろ。

まつ　そんなら、それさへ首尾よくすれば、わつちがお前に云つた事は

太平　そりやァどうでも。……ヤ、向うへ來るは慥かに與兵衞だ。

まつ　ナニ、與兵衞だえ。
太平　マア〳〵、わりやァちよつと隱れろ。
まつ　何處にしようかの。
太平　何處といつて、押入れか、緣の下。
まつ　お前も古い事を云ふねえ。この頃まで葺屋町で、團十郎が緣の下、春狂言にやァ押入れへ、杜若が隱れて居たぢやァねえか。
太平　コレ、そんな事を云ふ內、ソレもう與兵衞が爰へくる。（ト無理にお松を連れて內へ入り、兩人うろうろ思ひ入れあつて）大和屋氣取りで爰へ入れ。

ト押入れへ突込み、戶を締める。跡を元のやうに直して居る。此うち、てんつゝになり、向うより（お松早變り）與兵衞、やつし、尻ばしをり、一本ざし、單羽織を疊んで前へつけ、眞田の三尺帶、藤倉草履にて出て來る。後より供の者、これも尻ばしをり、三尺手拭、草鞋の形にて、風呂敷包みを脊負ひ、菅笠二蓋持つて出てくる。捨ぜりふにて、直ぐに舞臺へ來り、門口を明け、ズッと內へ入る。太平次悄り思ひ入れあつて

エヽ、與兵衞さんかえ。

與兵　(太平次を見て)太平次どのかえ。(トずつと奥へ行かうとする)。
太平　アヽ、モシ、與兵衛さん、お前さん、慥か大阪へ
與兵　急な用で行く所を、伏見の船で用が足り、それで直ぐに歸つて來たのサ。
ト、ツンとして行かうとする。
太平　モシ〳〵。わたしやァちつとお前さんに
與兵　ハテ、用なれば、後の事にさつしやい。
太平　イエ、なにサ。ちつとばかり　(ト引留める。これにて是非なく)
與兵　平助。おぬしは奥へ行つてお袋に、用が足りて、伏見から歸りましたと
供者　ハイ〳〵。(ト奥へ入る)。
與兵　太平次どの、何の用だえ。
太平　サア、その用は、なにサ。……モシ、與兵衛さん、どうも合點が參りませぬ。先度中からお目にかゝると、何かわしへをかしな顔附き。何も此方にこれぞといふ、心覺えはござりませぬが、あるならお宿の者同然、久しく參るこの太平次、なぜ仰しやつては下さりませぬ。モシ、そりやァお恨みでござりますね。

與兵　（思ひ入れあつて）ハヽヽ。おらア又なんの事かと思つたら、そんなら、アノこなさんに、わしの顏附が惡いといつて……なにサ、そりやアこなさんの心だ。何もこの與兵衞が方には

太平　イエ〳〵、有るでござりませう。モシ、仰しやつて下さりませ。

與兵　ハテサテ、心安いこなたとわし、これが斯うといふ事が

太平　イヽエ、ござりませう。與兵衞さん、わしの顏が似ましたらうね。

與兵　ムウ。そりや又誰に。

太平　お前の兄御高橋樣の敵、左枝大學どのに。

與兵　ヤ。（ト思ひ入れ。合ひ方になり）

太平　なぜお隱しなされます。わしの女房は兄御高橋瀬左衞門樣へ勤めました腰元。その御緣にてお前樣が、孫三郎樣と仰しやつて、お小さいからこの內へ御養子にござつてより、あなたを知らず、今日までお宿へ參つて、御樣子を見まするところ算盤嫌ひ、ヤットウ〳〵がお好きなり、どうでも武家のお胤だと、存じて居るうち兄御樣、非業にお果てなされてより、敵を討たうと思し召し、中兄高橋彌十郎樣は、靈龜の香爐を紛失の、その科ゆゑにお手討とやら。爰こそ日頃町人の、要らざる劍術お役に立ち、與兵衞が敵討と思ふにつけて私しを、御覽じる度に無念のお顏。さてこそあなた

のお心にも、睨まれながら心の嬉しさ。よしない顔にこの面が、似て又くやしさ、くちをしさ。女房の主人はやつぱり御主人。これ程までに思つてゐる、この太平次に與兵衞樣、なぜお心を打明けては

與兵（思ひ入れあつて）ア丶、コレ〳〵、太平次どの。こなさん、そりやア何を云ふのだ。成る程、脇目で見たならば、兄の敵を討つ心が、有らうと思ふも尤もなれど、高橋孫三郎といふ侍ひならば、敵も討たう。今は道具屋田代與兵衞、町人の身の生兵法。殊に、向うの敵は大名。どうして〳〵、そんな事。それればかりでなく幼年より、養育の恩を捨て、家業を捨て丶は、どうも義理が。

太平　へエ。そんなら養子のこの家を、大切と思し召して

與兵　サア、只商ひに油斷なく

太平　イエ、その商ひを大切にして、義理の親御を大切に、思はつしやる身でこの頃つゞく、夜泊り、日泊り、お袋樣へぞん氣にあたるは

與兵　サア。

太平　愛想をつかされ、勘當うけ、望みを叶へる心であらうが。

與兵　イ丶ヤ、遊びに身が入つて、母への不孝は酒の科。口には知つて、心に知らぬも、みんな浮氣の

太平　一盛り。直る時には直るであらう。必ず共に太平次どの、異見して下さるな。
（思ひ入れあつて）成る程。それでなけりやァお望みは

與兵　コレサ。そりやァこなた何を云ふのだ。

太平　イヤ、もう聞きませぬ。與兵衛様、大概それと。（ト思ひ入れあつて）ドレ、一杯おねだり申しませうか。

ト唄になり、太平次ツイと奥へ入る。與兵衛跡を見送り

與兵　あの太平次が、深切らしい今の詞は。……ハテナア。

ト思ひ入れ。てんつゝになり、向うより若黨曾平、木綿やつし、茶屋男の形にて、早足にて出て來り、直に舞臺へ來て門口より

曾平　與兵衛様はお宿にて（ト内を覗き）ヤレ〳〵、お宿でござりました。

與兵　オヽ、井筒屋の喜六か。さて何とも云ひ譯が

曾平　モシ〳〵與兵衛様、どうも今日はその云ひ譯では濟みませぬ。わしもさう〳〵親方の前が

與兵　サア〳〵、尤もだ。おぬしが内へ濟まぬことは、承知しながら此やうに

曾平　毎日々々釣らつしやるのは、そんならわしがお前の事で、首を縊つて死なうとも、構はつしやら

ぬお心意氣だね。

與兵　イヤ〳〵、さうぢやないが

曾平　イエ〳〵、さうだらう。ハテ、お賴もしいお心だ。それぢやァこの上片時ち、もう待つ事は出來ませぬ。花代、雜用、引ッくるめて、サア、今渡して下さりませ。

與兵　コレサ〳〵、そのやうに大きな聲をする事は

曾平　大きな聲をされるのが否なれば、金を渡さつしやいな。

與兵　でも、どうも今といつては。

曾平　この身代で金がなくば、見當り次第金目な物を。（ト奥へ行かうとする。與兵衞留めて）

與兵　待ちやれ。奥にはお袋。おぬしをやつては

ト引戻す。行かうとする。突戻すはずみに曾平もんどり打つて

曾平　アイタヽヽヽ。

かめ　（トこの物音にて、奥よりお龜出て來り）與兵衞さん、お歸りかいな。

曾平　（起上り）ヤイ與兵衞。投げやァがつたな〳〵。（ト立ちかゝる。お龜留めて）

かめ　モシ〳〵。どこのお方か知らねども、マア〳〵靜かに。……ヤ、こなさんはアノ、どこやらで。

曾平　オヽ、見た筈だ。いつぞや近江の多賀の社で
かめ　それ〳〵。たしか高橋瀨左衞門樣の
曾平　步中間の曾平でごんす。
かめ　そんならお前、與兵衞さんの御家來筋ぢやないかえ。それがマア、なぜこの樣に
曾平　大きな聲をする氣もないが、わしも旦那に別れてから、仕樣が無さに祇園町の、井筒屋へ若い者
先度安井の金毘羅で、與兵衞樣に逢ひまして、ツイ一切りと引きつけたが、病み附きの始まりで
この頃每晚大騷ぎ。その花代、雜用、藝子、みんなわしが承り、銀匁を金に直したら、何のか
のと五十兩。催促しても今以て、勘定しないは家來筋、どうもしないと高を括つて、わしに浴せ
る氣と見えるワ。なんと恐ろしいぢやアないかえ。
ト この內、上の障子よりおりよ、暖簾口より佐五右衞門、出かゝり聞いてゐる。お龜思ひ入れあつて
かめ　モシ、與兵衞さん、今あの人の云うた事、ありやマア、眞でござんすかえ。
與兵　お龜、おぬしの前も面目ないが、ついした拍子の張合ひから
かめ　そりやアノ、眞實でござんすかいな。
與兵　噓に外聞缺かれるものかえ。

かめ　（思ひ入れ）。ようござんす。お前の恥はわたしが恥。着類、着替へも頭の物も。……こなさん、ちつと待つてござんせ。

與兵　イヤ、それにやア及ばない。喜六へ渡す金はある。日野屋の手代に豐後橋で、受取つた五十兩。

ト財布を出す。

かめ　モシ、その金は香爐の

與兵　サア、あつちも急ぐ金ながら、おれが遊びのたまりを、おぬしの物で濟ましては、どうも義理が、……それだによつて、この金を

かめ　でも、それ遣つては

與兵　ハテサ、おれに任せておきやれ。コレ、喜六（ト曾平心づかぬゆゑ、大きくいふ。曾平悔り〳〵ソレ、五十兩。（ト財布のまゝ渡す。曾平取つて）

曾平　ヤ、そんならこれを

與兵　花代濟んだぞ。

ト此方を向くはずみに、與兵衞はおりよ、曾平は佐五右衞門と顏見合せ、兩人ちやつと入る。與兵衞曾平、思ひ入れあつて

曾平　ヤレ〳〵。今の事ぢやァあるまいと、思ひの外に五十兩。
かめ　お前、それでよい事なら、早う歸つて下さんせ。ほんにアタ憎らしい。
曾平　成る程、茶屋の若い者は、下齒には憎まれ勝手。ドレ、そんならわしやァ歸りませう。
ト立上がる。この時、傳三出て來て、曾平が財布をとらへ
傳三　どつこい〳〵。この金を貴樣にやァ渡されない。……モシ、與兵衞樣、お前マアこの金を、何にせうとて大阪まで、取りにゆかうとなされました。わしが口入れした香爐の後金ぢやァござりませぬか。それを遊びの拂ひにやつて、此方の金はどうなります。
與兵　サ、それは
傳三　そりやァでは濟みませぬ。まづ、この金は（ト取らうとする）。
曾平　コレサ〳〵。この男は、おれがそれを知るものか。（ト財布を引張る。このはずみに傳三倒れる）。
與兵　コレ〳〵、傳三、明日は屹度都合して、香爐の金は渡さう程に、まづ、あの金は
傳三　なりませぬ〳〵。あの金は此方へ遣らずば、香爐を返してやらつしやりませ。外にも大分望み手が
與兵　サア、尋ね〳〵た靈龜の香爐、外へやつてはこの身の望み

かめ　エ。(ト思ひ入れ)。
與兵　イヤサ、望みかゝつた物ぢやによつて、是非おれが。
傳三　そんならあの金此方へやつて
與兵　どうもさうは
傳三　そんなら香爐は
與兵　サアそれは。
兩人　サア〳〵〳〵。
曾平　(思ひ入れあつて)與兵衞樣。この金お貸し申しませう。(ト合ひ方)。
與兵　ヤ。
かめ　アノ今、憎てらしい事いうて
曾平　サア、折角取つた金なれど、親方の前を明日まで、延ばすはわしが口一つ、聞けば……靈龜の香爐とやら。それさへ手に入る物ならば……五十兩がツイ百兩、儲かりさうな物ならば、與兵衞さん……ソレ、買つて置かつしやりませ。(ト金の財布を渡す)。
與兵　そんなら喜六、その金を。……忝い。サア、傳三、香爐はおれが貰ひ取つたよ。ソレ、金を受取り

やれ。(ト出す)。
傳三　それぢやァ此方の(ト思ひ入れ)。
與兵　どうしたと。
傳三　サア、此方の方もついたといふもの。ハテサテ、よもやと思つた掛け取りが
かめ打つて變つて、その金を
曾平　貸して歸るが東ッ子。せうびんながら男の端。……與兵衞樣、もうお暇申しませう。(ト表へ出る)。
與兵　そんなら明日、あの金は(ト門口まで來る。曾平思ひ入れあつて聲をひそめ)
曾平　孫三郎樣。あれでよろしう
與兵　コリヤ。……よくござつた
ト門口しやんと締める。唄により、曾平思ひ入れあつて向うへ入る。
ドレ、おれも外から歸つたまゝ、澁い顏のお袋へ、金の話もちよつとして(ト行かうとする、傳三心づき)
傳三　モシ、與兵衞樣、お前、今の仲直り、酒一つ上らぬか。
與兵　ナニ、おれに酒を飲め。
傳三　(徳利を出して)加茂川の名酒、ぐつと一つ。(ト袖を捕へる)。

與兵　おきやァがれ。肴もなくつて飲まれるものか。
　　ト袖を振り切り、唄になり、與兵衞奧へ入る。傳三殘り惜しげに、跡を見送つて思ひ入れ。お龜、氣の毒なる思ひ入れ。

かめ　ほんに、愛想の無い與兵衞さん。……コレ、傳三、惡い事さへしやらずば、わしが酌してやらうわいの。

傳三　お龜さん、そりやァお前、ほんの事かえ。それでは一しほ酒が（ト有合ふ茶碗を取る。お龜何心なくつがうとする。傳三フト心づき）イヤ〳〵、この酒をすんでの事に、うぬが手で……オヽ、恐ろしや恐ろしや。

かめ　傳三、この酒がなんで恐ろしいぞいの。

傳三　サア、そりやァ……なにサ、ソレ〳〵、お娘御のお前さんに、酌をしてもらつては、ひよつと罰が當らうかと、それでアノ、恐ろしいわいな。

かめ　なんのマア、その樣な……お辭儀をせずと飲みやいなう。

傳三　イエ〳〵、お辭儀ぢやァござりませぬ。

かめ　そんなら一つ飲みやいなう。（ト又酌しようとする。傳三身を縮めて）

傳三　これは又情けない。（ト思ひ入れ。この時奥にて）

りよ　傳三や／＼。

傳三　ハイ／＼／＼。

トこれをしほに徳利を方寄せる。此うち、合ひ方になり、奥よりおりよ出て來り

りよ　オヽ、爰に居やるか。今、與兵衛が話には、日野屋の金を受取つて、香爐の代はわが身へと云やつたが、アノ、ほんに五十兩を

傳三　ハイ、怪しい金を五十兩、たつた今受取りました。

りよ　最前たしかに五十兩。……それに其方も五十兩。どうもわしは合點がゆかぬ。

傳三　そりやその筈だ。一旦外へ

かめ　アヽコレ。（ト思ひ入れ）。

りよ　傳三、その金見せてたも。

傳三　アノ、これでござりまするか。（ト取つて財布出す。おりよ改め）

りよ　ほんに、こりや眞の金。……傳三。こりやわしが預るぞや。

傳三　モシ／＼、お袋樣、そりやなぜでござりまする。

りよ　最前そなた云やつたには、あの香爐は盗み物

傳三　エツ。（トぎよつとする）。

りよ　サア、でもあるまいが、香爐の出所、その持ち主を同道しや。

傳三　アノ、持ち主を

りよ　連れて見えたら、何時でも、金は渡してやるわいなう。（ト財布を懷へ入れる。傳二思ひ入れ。）

みよ（奥にて）大方、見世にでござりませう。

ト合ひ方、時の鐘になり、おみよ行燈をもち、佐五右衞門一緒に出て來る。

佐五　おりよどの、これにか。先刻の返事はどうでござるぞ。

りよ　オヽ、佐五右衞門樣、先刻の返事と仰しやるわえ。

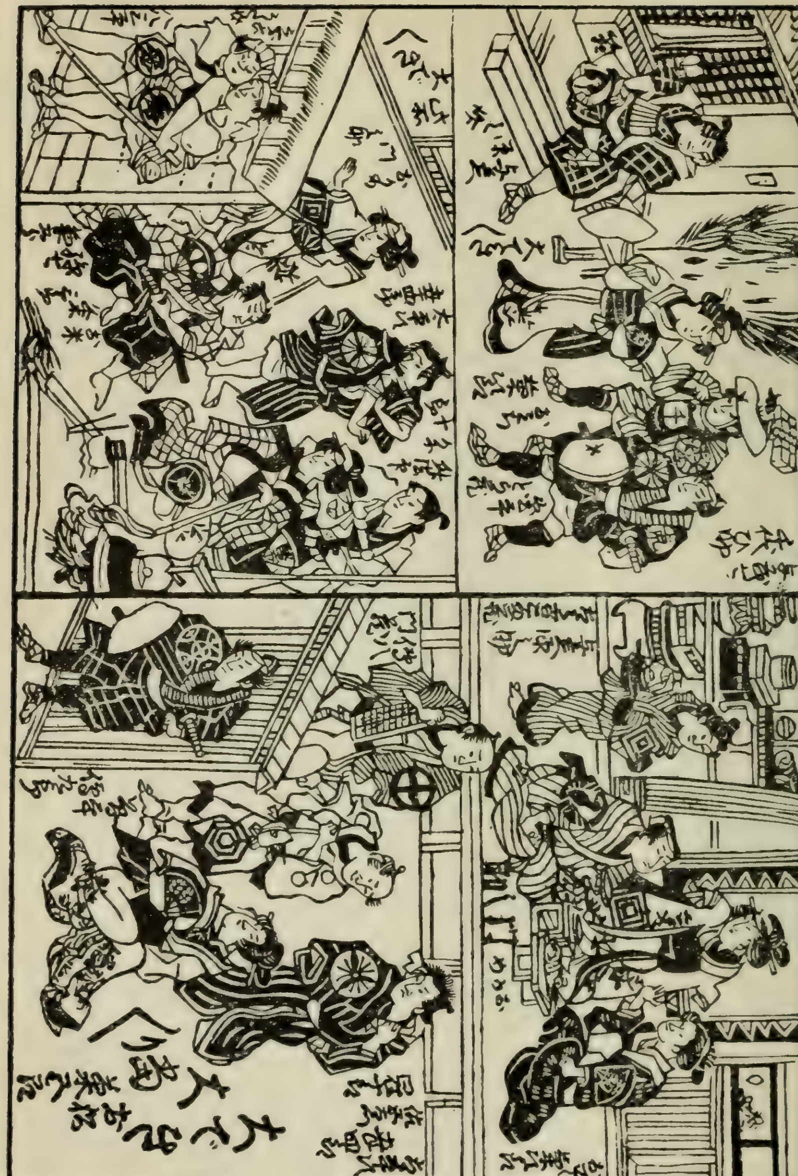
佐五　ハアテ、あれ程いうたお龜が事。

かめ　モシ〳〵、母さん、わたしが事とは、何でござんすえ。

りよ　ムウ。わしや串談かと聞いてゐたれば、すりやアノ眞實

佐五　知れた事サ。誠でなうて在所から、今忙がしい最中を

りよ　そんならこなさん、眞の心で



佐五　娘お龜を取返しに

かめ　エヽ。（ト思ひ入れ。傳三も思ひ入れ）。モシ、父さん、在所にはお米といふ妹もあるに、なぜわたしを

佐五　なぜといふたら慾德づくぢや。こちの國の殿樣の御分地、左枝大學樣といふは、今の女房が連れて來た、里松といふ弟の敵ぢや。

かめ　ムウ、その里松が譯は知らねども、わたしをお前が取戻しに

佐五　サア、來た道筋……も話せば解る。その里松が子供同士、頑是もなう鷹を奪ひあうて引裂いた、その科ぢやとてむごたらしう、大學樣が直に手討。おのれやれと思うても、あつちは大名、こつちは百姓、口惜しうて〳〵、寢た間もおれは忘れぬに、向うはちつとも構はぬに、いかつけなお侍ひめが、こちの內へわせをつて、先達て多賀の社內で、殿樣のお目に留つた今出川の道具屋の娘お龜といふは其方が、實の娘と聞き及ぶ。取返して差上げい、金銀は望み、と吐かしたこそ幸ひ、おのれ。大學め、なんでも爰で……福德の三年目と、早速われを取返しに來たもこの譯ぢや。なんとお龜、嬉しからう。（ト此せりふの中、おりよ思ひ入れ）。

かめ　エヽモ、父さんとした事が、なんのそれが嬉しからう。わさまへも知らぬ時から、こなたのお世話で人並に。成人させてもらうたわたし、今更お前、取戻さうとは

傳三　それ〳〵。こりやァ佐五右衞門樣のあまり身勝手。お龜さんを戻す事は、たとへお袋樣は御承知でも、マァこの番頭大不承知。なりませぬ〳〵。

みよ　ほんにこりや番頭さんの、いつにない眞實な云ひ樣、私が憚りな事ぢやけれど、どうやらこれはりよ　アヽ、コレ〳〵。皆何も云やんな。義理に違うた人ぢやもの、何を云うたとて耳には入らぬ。

傳三　ぢやというてあの樣な

かめ　ハテ、何と父さんが云はしやんせうが、云ひ號けの與兵衞さんと、わしや別れて、あのこはらしい大學樣へは

佐五　イヽヤ、われが行くまいと、じや〳〵ばつても、おれがやる。もう與兵衞には添はしはせぬワ。

りよ　與兵衞にも愛想が盡きてか。

佐五　知れた事。噂ばかりと思ひの外、先刻のしだらを見た上は、娘は此方へ取戻し、大名のお妾樣ぢや。但し與兵衞があの身持で、この身代が立つといふ、母御の請合ひか。

りよ　サア、それは。

佐五　その見屆けぬ聟に、おれが娘と添はしてはおかれぬ。それゆゑ連れて歸るのだ、お龜來い。

かめ　イエ〳〵、わたしや（ト行くまいとする）。

佐五　うせうといふに。(ト無理に引立てる)。
傳三　こりや又無體な(ト取支へるを突退けて、引立てる)。
かめ　アレ、母さん。
ト嫌がる。佐五右衞門これを引立てようとする。ゝの立廻りの中へ、奥より與兵衞走り出で　お龜が手を拂ひ、佐五右衞門を見事に投げのける。
佐五　ヤア、與兵衞か。
傳三　モシ、あの父御めがお龜さんをナ
みよ　無理に連れてと仰しやりますぞえ。(ト此うち佐五右衞門起上り)
佐五　ヤイ。わりや與兵衞、なぜおれを投げたのだ。
與兵　オヽ、投げました。奥で樣子を聞いて居れば、この與兵衞が不身持を、いひ立てにしてあのお龜を、取返してゆかうとは、あんまり道が違つた。
佐五　其方が身持を見限つて、娘をおれが取戻すを、なんで道が違つたとは。
與兵　さればサ。わしもお龜も養子の身の上、身持惰弱が目に餘れば、この與兵衞を勘當して、お龜に似合ひの緣を組み、内を立てるも母の料簡。その辨へなく幼少から、くれた娘を引立てゝ、連れ

てゆくとは非業非道。それでも道には違ひませぬか。

佐五　サア、そりやア

與兵　あんまり直ぐぢやアござるまいぞえ。（ト佐五右衞門思ひ入れ）。

佐五　どうするものだ。そんならそれよ。（ト傳三落ちつきし思ひ入れ）。

傳三　ヤレ、嬉しやこれで

みよ　變らず此方のお龜樣。

かめ　モシ、母さん、わたしやゝつぱり内方の

りよ　オヽ、娘でなうて、どうせうぞいの。

みよ　わたしらもこれで落ちついたわいなア。

傳三　イヤモウ、安堵したら腹がへつた。ドレ、茶漬けを一杯してやらう。

みよ　サア、ござんせ。（ト合ひ方になり、傳三、おみよ、奥へ入る。佐五衞門思ひ入れあつて）

佐五　おりよどの、お龜の事はそれなりでも、娘の親へ手向ひした與兵衞、その儘置かしやつては、こなさん、わしへ立つまいがの。

りよ　そりや云はしやんすまでもない。與兵衞はこの場で直ぐに勘當。

與兵　エツ。（ト思ひ入れ）。
かめ　そんなら見かねて今の時
佐五　おれに手向ひしたゆゑに
與兵　アノ、私しを御勘當とな。
りよ　與兵衛、それで望みは、叶はうがや。
與兵　ムウ。すりやこの頃の不身持、不孝も、みんな御承知で
佐五　コリヤ、それを云うては物が無い。矢ッ張りおれを投げたが科。して又、お龜は。
りよ　これも勘當。
かめ　そりや又何ゆゑに
りよ　布はぬきがら、男は女から、夫の身持放埒は、皆女房の粗略ゆゑ。與兵衛が惰弱もお龜が科。それゆゑ一緒に勘當する。佐五右衛門様、母が無理ではあるまいがな。（ト思ひ入れ）。
佐五　何にもいはぬ、おりよどの。そんならわしが取戻して、大學どのへ上げるといふ、心を推して望みある、與兵衛と一緒に勘當とは、この佐五右衛門が存念足つても……、くれ〳〵他人の聟どの、足手纏ひにござらうが、どうぞ連れ立ち、共々に

與兵　そりやお氣遣ひなされますな。この身の願ひに取りませて かめ　お前の胸もさつぱりと、晴らしまするが、せめてもの、生みの親への恩送り。そんな事とは露知らず、さつきは恨んで居りました。堪忍なされて下さりませ。

與兵　與兵衛も斯うとはお心を、知らぬ事とて勿體ない、手籠めに致した慮外は眞平。又母人へも詞にて云ふに云はれぬこれまでの御恩を仇な勘當を、願ひし事も身に取つて餘儀なき事と幾重にも。

りよ　コレ、その云ひ譯は、やがてめでたう。

佐五　それ〳〵。マアそれまでは二人とも、不孝顏を見る程腹が立つ。わしやもう直にお暇しませう。

りよ　でももう初夜前。

佐五　イヤ、翌立ちの心支度。宿屋で早う（ト佐五右衛門お龜思ひ入れあつて、氣を變へ）その内上りませう。

ト唄になり、佐五右衛門向うへ入る。この唄のうち、奥より太平次出て來る。三人とも思ひ入れ。

太平　委細はとつくり與兵衛樣、よう勘當おうけなされました。流石高橋の若旦那、さうなけりやならぬ所。

與兵　アヽ、コレ〳〵、太平次どの、不所存ゆゑに勘當受けた、與兵衛を捕へ流石のと、母の手前も何とやら。滅多な事云はつしやるな。（ト太平次へ氣をかれる思ひ入れ）。

太平　モシ、お前はまだわしに

りよ　これはしたり、太平次どの。不孝なゆゑに一時に、勘當したあの二人、明日が日こなたの所へ行かうと、必ず構うて下さるな。……アヽ、彼奴にまだ遣る物がある。（ト合ひ方になり、ちよつと暖簾口へ入り、以前の香爐を持つて來り）この靈龜の香爐はの、おのれが目利きで買うた代物、跡に殘して見る度に、腹が立つては罪障ゆゑ、捨てると思うて彼奴に遣ります。

與兵　ナニ、そりや、その靈龜の香爐まで（ト思ひ入れ。太平次も思ひ入れ）。

太平　成る程、そりや與兵衞さんに、いつち好いた下され物。………モシ、勘當うけたその上に、香爐がありやァお前の十分。口ぢやァ憎いと仰しやれども、これ程までのお心ざし、仇おろそかに思し召しまするな。………サア、大事な物だ、しつかりと（ト太平次、香爐を與兵衞に渡して思ひ入れ）。

與兵　重々厚き御恩の程………お龜、とも〴〵、ようお禮を

かめ　アイ。有り難うござります。モシ、與兵衞さん、お前と一緒にどこまでも、連れ立つ事は嬉しいが、母さんに別れるが、わたしや今更（ト思ひ入れ）。

與兵　そりやおれとても同じ事。いつまで云つても名殘は盡きまい。もうこの儘に………母者人。

かめ　隨分ともに、御機嫌よう。

ト兩人しほ〳〵門口へ出る。この時太平次以前の徳利を見つけ、思ひ入れあつて

太平 モシ與兵衛様、お待ちなさい。お詫がすむ少しお暇のまでは、いはゞ暫しの親子の別れ。ちつとお待ちなされませ。（ト徳利を持つて來り、有合ふ茶碗を取つて、おりよが前に置く。兩人は門の外にたゝずむ）。サア、モシ、お袋様、酒は憂ひを拂ふ玉箒とやら、こんな折にはわつさりと、一つお上りなされませ。

りよ いかさま。ありやうは先刻にから、持病の

太平 サヽ、お癪なら猶の事。一つ上つておよるがよい。

りよ そんな事にしませうわいの。（ト茶碗を取り上げる。太平次、徳利をよく振つて一つつぐ。おりよ飲みつ）サア、こなさんも一つ。（ト茶碗を太平次へ渡す）。

太平 アイ〳〵。

ト云ひながら、立つてその茶碗を與兵衛へやる。與兵衛取つて押戴く。おりよ、これをちよつと見る。太平次ニツコリと思ひ入れあつて徳利を持つて、行かうとする。おりよ徳利を押へ

りよ 待たつしやれ、太平次どの。與兵衛と杯する事はなりませぬぞ。

太平 （思ひ入れ）。モシ、さう仰しやるな。いとしぼなげに、來年お逢ひなされうやら、乃至來々年になら

うやら、知れないお別れ。目出たい門出を祝して

りよ　イヤ〳〵、勘當した子に、杯は

太平　ハテ、あなたは御存じ無い分で

與兵　どうぞお慈悲に私しへ

かめ　お上げなされて下さりませ。

りよ　イヽヤ、ならぬぞ。杯がしたくば、一日なりと、早うその身の望みをば……イヤサ、望まずと
ても歸つた時は、めでたう親子の杯せう。マアそれまでは勘當の、與兵衛に杯、ならぬ〳〵。

太平　それも聞えて居りまする。あれ程までに仰しやること。

りよ　イヤ、何と云うても

太平　そんならちよつと、てう附けばかりも

りよ　イヤ、どうあつても。

トおりよは徳利を押へる。太平次は、いろ〳〵と云つて飲ませたき思ひ入れ。與兵衛は茶碗を持ち、
どうぞといふ思ひ入れ。お龜も共々願ふこなし。此うち、後ろへ傳三、頬冠り、尻からげにて、若い
者をつれ、お龜へ窺ひより

傳三　コレ、お龜さん。（ト引立てゝ行かうとする）。

かめ　あれえ。

　　ト これにて與兵衞茶碗を捨て、傳三を引きとめる。若い者これを支へて、與兵衞に組附き、とめる。この内傳三、お龜を引立て入る、與兵衞、南無三と若い者を投げのけ、尻をからげながら、向うへ追つて入る。若い者續いて向うへ入る。この内此方も德利を互ひにせり合ひ、はずみにて打ちこぼす。太平次思ひ入れ。おりよ「アッ」と苦しむ。

太平　モシ、お袋さん。（ト側へより、押へようとして、懷の以前の金、手に觸るゆゑ引出し）ヤ……こりや（ト取らうとする。おりよ血を吐く。太平次の手にかゝる。太平次手早く財布のまゝ取る。おりよ倒れる）。折角與兵衞に飲ませる毒。……惜しい事をしてしまつた。したが、思はず、五十兩。

　　ト思ひ入れ。ゴーンと時の鐘になる。戸棚の中よりお松出る。

まつ　太平次さん、よい事をしたの。

太平　コレ。……名を云ふなえ。

まつ　ほんに、こいつは野暮だつた。

太平　マア、誰もうせないうち、爰を早く

まつ　それがいゝねえ。

ト矢張り時の鐘。太平次、お松に行けと思ひ入れ。お松呑みこみ、兩人門口の外へ出て、花道へ段々かゝろ。

まつ　時に、聞きねえ。お前の云ひつけた通りに、戸棚の中に、土用の内の溫石を見るやうに、隅の方にちよくちよくこなつて、なんでもよい間にお龜めをと、氣を付けて居たところが、因果と側にあいつが居るゆゑ、それで擔ぎそくなつた。

太平　おれもあの與兵衞めへ、お袋めが香爐をやつたは幸ひ、手もなく毒酒をくらはせ、おッ殺せば、大學樣に賴まれた規模も立ち、香爐も手に入る上に、あのお龜を大學樣へと思ひの外、お袋めの固意地で、爭ふうちに德利を、ぶつころばして毒酒は段切れ。そのうちお龜も、與兵衞も、どうしてか、うしやァがらない。

まつ　ほんに、そいつは業腹な事をしたの。それでもお前、五十兩〆めて來たぢやァないか。

太平　オヽサ。お袋めが毒でくたばる時、懷にあつた五十兩、此奴はおれが勘定の外だ。

まつ　コレサ。その金の中でわつちを引上げ、どこぞこつそりと妙な所へ、世帶を持たしてくんねえな。

太平　よいサ。そりやァ合點だよ。

まつ　合點ぢやアない、早くだよ。……オヤ〳〵、蕎麥を誂へたやうだ。

太平　おきやアがれ。

まつ　そりやアさうと、お前、あのお袋を殺して、むづかしくはあるまいかの。

太平　なにサ、そりやア氣遣ひない。お龜、與兵衛が勘當のその內に、丁度くたばつたから、ソレ、殺し手は與兵衛となるワ。

まつ　成る程。こいつは好い間だの。

ト此せりふを云ひながら、中の間より東の花道へかゝるうち、道具替る。

本舞臺、三間の間、向う一面に玉椿の垣、內より卒塔婆大分に見ゆる。よき所に流れ灌頂、あつらへの古井戸。すべて妙覺寺裏手の體。一つ鉦の念佛にて、道具とまる。

ト時の鐘、蛙の聲。兩人舞臺へ來り、太平次古井戸を見つけ

太平　待ちや〳〵。今くたばる時、血を吐いて、薄穢ない、手をよごした。幸ひ爰に井戸があるワ。ちよつと一釣瓶かけてくれ。

まつ　アイ〳〵。……待ちねえ。釣瓶があればよいが。（ト井戸の側へ來り、覗いて）オヽ、ある〳〵。

（ト着物の前を挾んで、繩釣瓶にて汲みにかゝり、汲めぬ思ひ入れ）。この繩釣瓶といふやつが、いま〳〵しい。汲みにくいものサ。（トやう〳〵に汲み上げる。このうち、太平次、お松を見て思ひ入れ）。もつと先きへ手を出しねえな。

太平　もう一杯釣つてくれ。

ト太平次へかける。太平次、本水にて手を洗ふ。

まつ　まだ洗ふのか。よい加減にしねえな。根ツから釣れるものぢやアない。

ト又汲みかゝる。この内始終一つ鉦の念佛。お松いろ〳〵あつて汲むうち、釣瓶の繩首へまとふ。

まつ　これな、氣障だ。この繩を取つてくんねえ。

太平　ドレ、この繩か。

ト取る振をして、繩先きを捕へ、ぐつと締め殺す。お松アツともがくを、そのまゝ足をすくつて井の内へポンと打込む。チヨンと拍子木の頭。太平次、井戸の内を伸び上つて窺ふ。思ひ入れよろしく

拍子　幕

六幕目　倉狩峠の場

（作者　櫻田治助）

役名――――間屋人足、與五郎假名孫七。飛脚、與五七。下部、團平。駕籠舁、八八。同、三婦六。山伏、升法印。篠原傳五。太平次女房、お道。與兵衛女房、お龜。道具屋、與兵衛。佐五右衛門娘、お米。立場の太平次。

本舞臺、三間の間、後ろ黒幕。正面に古宮、黒木の鳥居・神木、その外樹木林。よき所に倉狩峠と書きし榜示。幕の中より雨車、雷の音。夕立の景色にて幕明く。

ト宮の椽先きに、團平、旅奴の形、與五七、序幕の形、八八、三婦六、駕籠舁にて、椽に腰を掛け、雨宿りをして居る。雲助二人、四ッ手駕籠をおろし、此うちへ入り、雨をやめて居る見得。皆々思ひ入れ

皆々　うんらいぐうせいでん。桑原々々。

團平　桑原々々。

八八　コレサ、奴さん。お前、地震と雷をはき違へたのだ。

團平　ほんに、さうであつた。萬歳樂々々々。

三婦　コレサ、この奴さんは。桑原だわな。

團平　ナニ、桑原とはお醫者様の苗字か。

與五　イヤ、おへないへんぼうらいだ。

團平　へんぽうらいぐうでんとは、雷のまじないであらう。なんと物知りか。
皆々　何を云はつしやる。
與五　時にお前、今話さしつたその女を、お抱へなさるというて、それを尋ねるのかえ。
團平　さやう〳〵。殿大學樣の惚れてござる、お龜といふ女を尋ねるて。
與五　そのお龜なら隨分知つてゐるて。モシ、奴さん、お前もいつぞや見たお方だぞえ。
團平　ほんにさうであつた。おらアどうしてか物覺えが惡いて。
八八　コレ〳〵、與五七どの、一昨日の晩、貴樣や太平次が、木津の渡しから連れて來た、あの娘ぢやアねえか。
與五　ナニサ、あの玉とは違ふワ。お龜といふは隨分知つて居るて。
三婦　待ちやれよ。あとの大榎に雨宿りをしてゐた夫婦巡禮、彼奴らぢやアねえか。
八八　それ〳〵。連れの男は、とんと音羽屋といふ代物だ。
與五　そいつだ〳〵。その男は與兵衛といふのだ。聞けば養母を殺して、お龜と二人、道具屋を駈落ちして巡禮に出たと聞いたが、彼奴等を捉まへれば、どう廻しても金儲けだネ。
團平　イヤモウ、金儲けの段か、お龜を締めて差上げれば、コレ、支度金は五十兩。この通り持つて居る。

卜首にかけた財布を見せろ。

與五　そいつは相談物だわえ。もし今云つた夫婦連れが、お龜、與兵衞に極れば、モシ、斯うなされませ。

卜囁く。團平呑み込み

團平　そんなら爰に逗留しようが、して、落ちつく宿は。

與五　斯うなされませ。この峠の立て場に、太平次といふ者がござります。お前、そこへ行つて、待つてござりませ。

團平　アヽ、立場の太平次か。よし〳〵。

雲助　モシ〳〵、旦那。今の雨で路が辷ります。峠までお麻く參りませう。

團平　アヽ、駕籠か。成る程、まだ鳴りさうだな。酒手で乘せてゆくか。

雲助　お麻く參りませう。

與五　そんなら必ず、太平次が所へ。

團平　合點だ〳〵。

八八　コレ〳〵、儲け仕事なら、おいらも半口。

與五　ハテ、委細はあの宮の内で

三婦　雨をしのいで話さうか。（ト又雷きびしく鳴る）。
團平　アヽ、桑原々々。（ト駕籠へ入る）。
與五　アヽ、臆病な奴樣だ。

ト捨ぜりふにて三人は宮の内へ入る。雲助、團平を駕籠に乘せて、「桑原々々」と云ひ〳〵、向うへ入る。矢張り雨車、雷きびしく鳴る。向うより、太平次女房お道、世話女房の拵へて、跣足になり、草履を持ち、前垂れを頭へかむり、俄雨にあうたる體。あとよりお龜、與兵衞、巡禮の拵へにて、與兵衞仕込みの杖を突き、行李を脊負ひ、同行二人、西國巡禮と書いたる菅笠を冠り、病氣の體。お龜これを介抱して出て來り、花道にて

かめ　モシ〳〵、おかみさん。こゝらに人足はござりませぬかいな。このマア、雷さんで、いかう難儀しますわいなア、
みち　そりや難儀でござんせう。跡の峠に内があつたでござんせうに。見ればお若い女中さん、ようまア巡禮なされまするな。（トよく〳〵見て）ヤ、お前はお龜さんぢやアござりませぬか。
かめ　さう云はしやんすは、お道どの。コリヤマア好い所で。コレ〳〵、與兵衞さん、お道どのに逢うたわいな。

與兵　そりやマア、どうしてこゝらへ來てござるのぢや。

みち　イヤモウ、お話し申せば、いろ〳〵樣子のある事でござりますが、折わるい夕立。マア〳〵、おのお宮の軒下へなりとも、お出でなされませ。

かめ　道中すがらあなたの御病氣、いかう難儀して居やしやんすわいなア。

みち　そりやマア、御難儀でござりませう。マア〳〵、あれへお出でなされませい。

トお道捨ぜりふにて、二人を介抱して古宮の緣にかけさせる。

與兵　ほんにマア、どこで知る人に逢ふか知れぬ。イヤモウ、與兵衞が口外せぬけれど、こなた衆夫婦も、大概わしが跡の事も、推量して居るであらう。それはさうと、思ひがけない所で逢うたお道どの、定めし太平次どのも、こゝらへ宿替へしたといふやうな事か、さうか〳〵。

みち　左樣でござりまする。お二人が京都を立退きなされた後、こちの人が在所ゆゑ、急にこのあたりへ引越しましたわいな。

かめ　そりやモウ、二人ながら達者で暮さんして、めでたうござんす。それにつけても、御恩になつた母さんは、息災な事ぢややら。久しう便り音信もないが、わたしや心にかゝつて

ト思ひ入れ。お道こなしあつて

みち　モシ、お龜さん。お前、お袋樣の事、ほんまに御存じござりませぬかえ。
かめ　ほんまに知らぬかとは。アノ母さんが、どうなさんしたえ。
與兵　コレ〳〵、案じられる。お袋樣はどうなされたぞ。
みち　サア、お話し申すも泪の種。お前方の家出なされたその後で、盜人が入りまして、お袋樣は、お果てなされましたわいなア。(ト思ひ入れ)。
二人　エヽ。
かめ　アノ、母さんがお果てなされて　ト泣伏す)。
與兵　コレ〳〵〳〵、そりや何かいの。その盜人がお袋樣をお殺し申したといふやうな事かいの。コレ、さうかいの〳〵。(トいろ〳〵思ひ入れ)。
みち　アイ〳〵。お宅樣のお金を取らうとした事か、あなたを殺して金まで取つて參りましたが、今以て殺した奴が
與兵　どうしたの〳〵。
みち　知れませぬわいなう。(ト泣伏す。お龜こなしあつて)
かめ　エヽ、おいとしいお袋樣。叶はぬながらも、せめて女子の私なりと、お側にあつたらやみ〳〵と

與兵　かゝる非業な御臨終も致させまいに、何をいふにも兄々の、敵を討ちたいばつかりに、藁の上から大恩うけ、養育ありし親を捨て、家出いたせし二人が不孝。罰の報いで此やうに、日増し重なる持病の癪。草葉の蔭にてさぞやさぞ

かめ　お恨みなされん、お袋樣。

與兵　御免なされて

二人　下さりませ。(ト思ひ入れ。お道こなしあつて)

みち　御尤もでござりまする。お道理でござりまする。母御樣の、お身の成行き、お聞きもあらば、嘸やお悔みなされうと、存じたなれど、申さにや成らぬ事ゆゑに

ト此うち、與兵衞、持病の癪の起りし思ひ入れにて苦しむ。お龜駈け寄り

かめ　アヽ、又持病が起りましたかいな。(ト介抱する)

みち　モシ、お龜さん、お藥はござんせぬかえ。

かめ　さいなア。ゆうべの泊りで皆になつたわいなア。

みち　アヽ、そりや困つたものでござりまする。どうぞお藥を(ト思ひ入れあつて)ほんに、この先きの在所に、大阪から來てござんす、醫者どのがござりまする。わたしがツイ一走り、藥を買うて參り

ませうわいなア。(ト身拵へする)

かめ　そんならお前、どうぞ、買うて來て下さんせいな。

與兵　ハテ、この雷に、どうしてマア山路を

みち　ハテ、大事でござりませぬ。ちつとの間お待ちなされませ。わたしが直ぐに買うて參りますわいな。

ト雷きびしく鳴る。お道、お龜の菅笠を借り、これをかざして、とつかはと下座へ入る。兩人あとを見送り

與兵　ヤレ〳〵、マア氣の毒な、この石坂道を、ようマア藥を(ト思ひ入れ)どうも合點の行かぬは、母樣の御最期。殊に、あの太平次が、急にこの在所へ引越して來たといひ、アヽ、どうやらこれには

かめ　サア、わたしもさう思ふわいなア。

トよき時分より與五七、八八、三婦六、頬冠りにて面を隱し、出かゝりゐて

與五　親殺しの與兵衞、見附けたぞ。

八八　ふん縛る。動きやアがるな。(トこれにて兩人思ひ入れあり)

與兵　ヤア、わりやア上下の與五七ぢやアないか。親殺しの與兵衞とは

與五　養母を締め殺し、逐電した與兵衞。見遁してやらうが、物は相談。そのお龜を渡して行くか。返

事次第で

三人　ふん縛れ〳〵。

與兵　アヽ、これ〳〵。滅多な事を云ふまいぞ。どうして母を殺害せう。殊に、お龜を渡せとは、こりやわいら無法を云うて、女房を連れ行かうといふ企みぢやな。わいら寄つたら免さぬぞ。

ト身拵へする。

與五　おきやアがれ。持病に惱むと聞いて居たワ。皆かゝつて締めさつしやれ。

皆々　合點だ〳〵。

與五　お龜はおれが

トお龜へかゝる。與兵衞息杖にて與五七をくらはす。八八、三婦六立ちかゝる。この時雷きびしく鳴る。三人耳を押へて

三人　アヽ、桑原々々。

ト顫ふ。お龜、與兵衞にすがりつく。この時雷きびしく落ちたる音して、神木の杉へ焔硝火立つて、枝二つに折れる。皆々重なりあうて氣を失ふ。與兵衞、お龜をしつかりと抱き居る。空晴れて雷止む。與兵衞心づき、思ひ入れあつて

與兵　コレ〳〵、お龜、もう夕立も晴れたさうな。アヽ、嬉しや〳〵。
かめ　（心づき）與兵衛さん。今のはそこらへお下りなされたのかえ。
與兵　アレ、あの杉の木が折れてゐるワ。
かめ　エヽ、あそこかいな。道理こそ嚴しい鳴り音。
與兵　アレ〳〵、今の奴等はあのやうに、氣を失うたと見えるわえ。
かめ　鬼のやうな惡者が氣を失うて、こちらに怪我のないといふのは
與兵　正しく菅家の末葉たる、多賀のお家の靈龜の香爐、所持せし威徳か。天の助けか。
かめ　寶の香爐の
與兵　コレ。

ヽ、桑原々々。

ト一塊りになる。兩人見てにつこりと笑ふ思ひ入れにて、お龜の手を引く。直に在郷唄にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、向う鼠壁、納戸暖簾、平舞臺に仕立て、上の方へ誂への二階、丸太階子かけ、藁葺の門口。本部屋、藪疊、軒口に燕の棚、草鞋、草履大分、賣藥の札をかけ、辨慶に燒魚をさし、菰か

ぶりの四斗樽、德利、ちろりを散らし、よき所に誂への圍爐裏、自在に藥鑵をかけ、お米、娘の拵へにて、太平次が木綿のどんざ布子を着て、ひとへ帶にて圍爐裏の火を焚きゐる。茶棚、手桶、長床几、すべて倉狩峠一軒家、立て場の模樣。荒神棚に向ひ、升法印、田舍法印の拵へ、着流しにて、錫杖を持ち、荒神拂ひをしてゐる。太平次、やつし、中月代にて、草鞋を作り居る。在郷唄にて道具とまる。

升法　南無、家の內、三寶大明神〳〵々々々々。(ト荒神拂ひ納まる)。

太平　御苦勞でござりました。コレ、姐えや、法印さんにお茶を進ぜい。

よね　アイ。(ト圍爐裏の藥鑵より茶をついで持ちゆく)　アイ、お茶上がりませ。

升法　構はつしやるな〳〵。コレ太平次どの、つひに見た事もないこの姐え。こりや何處から來て居ます

太平　アヽ、その姐えが、嗅アめが燒き餅の發端よ。

升法　アヽ、このやうな。成る程、これぢや夫婦喧嘩も出來さうなものサ。

太平　サア、そこが貴樣も素人だ。ハテ、おれが樣な、ひなた臭い男に、なんでそんな娘がつくものかな。

升法　そして、この子は、なんで來て居る。

太平　こりやア何よ。おれが仲間の與五七といふ三度と二人連れで、木津の渡し場へかゝつたところが、

連れにはぐれたこの娘。乞食めらが取卷いて、着て居た物を取上げて、すんでの事に百萬遍をおツぱじめる所を、可哀さうだと思ふから、乞食めらを叩き散らして、連れの男が來次第渡してやる積り。コレ、必ず斯う世話をするを、惡く氣取らぬがいゝよ。

よね　アイ〳〵。なんの惡う存じませう。一昨日の暮れ方、連れにはぐれて難儀な所、お助けなされたその上に、お內へお連れなされてのお世話。その深切が間違ひの端となり、お內儀さんのいさかひが、わたしやお氣の毒に存じますわいな。

太平　ナニサ、嚊アが事は打つちやつて置かつしやいな。

升法　して、姐えはどこの生れ。

よね　アイ、近江の者でござります。

升法　アヽ、御亭主と二人連れで、こりや大和巡りといふやうな事かの。

よね　アイ、マアさやうなものでござりまする。

升法　夫婦が大和といふ事は見通しの法印、やる物ぢやごんせぬ。ちつと時代な臺詞だが、アヽつがもねえ。ハヽヽヽ。時に太平次どの、こなさんも京に住んでゐるから、おれが妹、譯があつて、現在の兄が仲人役のこの法印。相變らぬ夫婦喧嘩は、犬も喰はねえ世の譬へ。もう好い加減に仲

を直して下さいな。

太平　ハテ、兄貴を仲人に頼んだは、まさかの時に口を明かすまいため。貴樣の内へ引取つて、折角の挨拶だが、迚もじんじゆくはしめえよ。

升法　サア、そこを一番貰ひに來たの。

よね　さやうでござりまする。お二人のいさかひも、どうやらわたしから起つた事と思はれますれば、お腹立もござりませうが、お内儀さんをお戻しなされて下さんせ。さやうござりませぬと、わたしから先きへ妾のお内を（ト出ようとする思ひ入れ）。

太平　オツとさうはならない。嚊アに代へても、亭主の尋ねて見えるまで、世話をせねばならねえよ。コレ、して、貴樣の亭主の名は。

よね　アイ、與五郎と申しますわいな。

太平　エヽ、アノ武家がたに奉公した

よね　よう御存じでござりまする。

ト思ひ入れ。てんつゝになり、向うより以前の駕籠舁、下部團平を駕籠にのせ、息せきと出て來り、門口に下し

團平　もう爰か。早く來たな。(ト駕籠より出る)。
駕甲　旦那。もう鳴る氣遣ひはござりませぬぞえ。
團平　イヤモウ、今の雷は、そこらへ落ちたやうだ。コレ、駄賃は濟んでゐるぞよ。
駕乙　さやうでござります。コレノ〳〵、太平次どの、お客があるぞえ。
太平　オイ〳〵。どこからござつたのだ。
駕甲　何か旅のお方が、女中を尋ねると仰しやつて
太平　ナニ、旅のお方が、女中を尋ねるといつてか。そんなら今噂をした、與五郎といふ人か。
よね　エヽ、あの與五郎さんが來てかえ。(ト門口へ駈け出る。團平ズット入り)
團平　太平次どのはおてまへか。
太平　ハイ、お前が與五郎さんかえ。
團平　イヽヤ、身共は團平と申す。
よね　エヽ、違うたわいなア。
太平　姐え、連れの衆ぢやァねえか。
よね　アイナ。

太平　ハテ、註文が合つたから、連れの衆だと思つた奴サ。
團平　コレ〳〵。身共は與五七と申す男が敎へてよこした。
太平　エヽ、與五七かえ。隨分心安うござりまする。
團平　然らばちつと密々に話があるが、なんと內々で、聞いてはくれまいか。
太平　畏りました。隨分承りませう。コレ、姐えや、てめえあそこにある鉈で、粗朶をこなして下さい。
よね　アイ、これでこなしますするかえ。(ト鉈を取上げる)。
太平　ムウ、それだ〳〵。コレ、法印どの、こなたはアノ嚊アを連れて來さつしやい。それ程までに云ふ事だ。もうわしが方はこれぎりに
升法　妹を呼び返して下さるか。
太平　貴樣に免じて得心するよ。
よね　それでわたしも嬉しうござんす。
升法　そりやァ有り難い。こなさん、相談事があらば、ゆつくりと話さつしやい。見世はわしが見張つて進ぜう。

太平　オウ、頼みましたぞえ。

駕舁　ドレ、おいらも一寝入りやつて行かうか。

太平　奴さん、斯うござりませ。

ト合ひ方になり、太平次先きに團平を連れ、暖簾口へ入る。駕籠舁は門口へ駕籠を置き、下の勝手口へ入る。お米意氣地なく鉈を持つて、粗朶をこなす。升法印見て

升法　コレ〱、姐え、それぢやァゆかねえ。ドレ、おれがこなしてやらう。こなたは行燈でも灯すがよいぞえ。

よね　アイ、お頼み申しまする。ドリヤ、灯りをつけませう。

ト唄になり、お米行燈をたづね、圍爐裏の火をともし、行燈をつける。升法印粗朶をこなす。矢張りこの唄になり、向うよりお道案内して、與兵衛、苦痛の思ひ入れにて、柳行李と菅笠を持ち、お龜介抱しながら出て來り

みち　モシ、お二人様、あの灯りの見えまするが、太平次の内でござりまするが、道々もお話し申す通り、昨日女夫喧嘩して、内を出て居りますれば、門からわたしが案内して上げませう。

與兵　何分こなたを頼みまする。

かめ　モシ、孫三郎さん、お前、太平次どのに逢うたというて、また例の悪い顔しなさんすなえ。

與兵　ほんに、大學に似たあの太平次、逢うたら病ひが……ア丶、儘よ、お道どの、頼みます。

みち　アイ〳〵。（ト門口へ來て）モシ、ちつと爰を明けて下さんせ。

升法　ヤ。さういふ聲は妹ぢやないか。

みち　エ丶、兄さん、來て居なさんすかえ。

升法　オイ。何事もおれが丸めて置いた。サア、入つたり〳〵。

みち　そりや世話でござんしたなう。

よね　ありやお内儀さんの聲、ようマア戻つてお出でなさんしたなう。（ト門口へ出かゝる。お道見て）

みち　エ丶、なんぢや、こなさんは、アタなめ過ぎた。こちの人の着る物を着て、エ丶、きいた風な。

トびんとする。お米氣の毒なる思ひ入れ。

升法　コレサ、妹、あの女中も、聞けば尤もな譯もあるよ。もう〳〵、燒餠はおれに預けて置きやれよ。

みち　イ丶エイナ、みんなあの女子から起つた事ぢやわいな。………サ、モシ、お二人ながら、お入りなされませ。

與兵　いかい世話になりまするて。（ト行李、菅笠を持ち、兩人内へ入る）。

升法　コレサ、妹、あのお二人は、どこからござつたのだ。
みち　サ、このお二人は、お前も知つて居なさんす(トお米がゐるゆゑ云ひかれる思ひ入れ)。
升法　アヽ、何かえ、峠で日が暮れて、難儀さつしやる旅の衆かえ。
みち　マア、そんなお方ぢやわいなア。
よね　エヽ、なんでござりまするかえ。お二人連れのお道中、殊に、先刻の夕立に、途中で日をお暮らしなされたといふやうな事でござりまするかえ。
かめ　アイ、わたしらは女夫連れの西國。仰しやる通り先刻の夕立に、いかう難儀いたしましたわいな。
よね　それはマア御難儀でござりませう。わたしも夫と二人、この大和路へかゝりまして、連れの男にはぐれまして、爰の内のいかいお世話に(ト挨拶する)。
みち　エヽ、何ぢやぞいな。又しても〱、女房のわたしを差置いて、あんまりつべこべと、置いてもらひませうぞえ。(トこれにてお米氣の毒さうに思ひ入れ。升法印この中へ入り)
升法　これはしたり。又腹を立てるのか。どうしてあの女中を見ると、てめえはムカ〱するさうだ。コレ、姐え、逆らつても悪い。マア〱、ちつとの内、あの二階へ、上つて居さツし〱。
よね　ハイ〱。どうぞお内儀さんの心の解けますやうに、お前、詫び事なされて下さりませ。

升法　ハテ、呑み込んで居るよ。マア〳〵、逆らつては惡い。二階へ行つて居さッしやいよ。

ト合ひ方になり、お米氣の毒さうに二階へ上る。升法印捨ぜりふにて付いて上り、梯子より二階の戸を立てゝ、下りて來る。この途端、奧より太平次出て來り、二人を見て

太平　ヤ、こりやお二人ながら、どうして爰へ。マア〳〵、こちらへお出でなされませ。

ト上敷を敷いて、二人をよき所へ通す。

升法　ア、太平次どのも、お近附きか。してマア、お二人は

みち　コレイナア、お前も知つて居さんす、京都今出川の道具屋。

升法　エ、お龜どのと與兵衛どのかえ。その與兵衛樣と申すは、多賀の御家中、瀨左衛門樣の末の弟御、いはゞ妹は御家來筋、ようマア尋ねてお出でなされました。

與兵　久しう逢はぬ太平次どの。京都に居る内、大兄の敵たる、大學どのによう似たこなさん、見る度々に癇癪の、蟲持のこの與兵衛、お龜を連れて旅先きで、持病の癪に惱まされ、殊に最前お内儀の、話で聞いた母の横死、兄は非業の死を遂げられ、又中兄は殿のお手討ち、敵を討ちたいばつかりに、不孝に當り家出せし、跡にて義理ある母の成行。思へば、わし程な、因果な者がござらうかえ。

かめ　その上、ぬしの持病の癪。道中すがらあそこ爰、宿屋に長う逗留の、その物入りに貯への、路用

もいつか遣ひ捨て、心細い女夫づれ。……ほんに此やうなおはもじい、さもしい事を。

　　ト恥かしき思ひ入れ。

太平　そりやモウ、御尤もでござりまする。與兵衛様のお身の悔み、申さうやうもござりませぬ。養母の母御に俄の御不幸。慥かに斯うとは存じたなれど、今日までも口外いたさぬわしら夫婦して、お二人は何國を當に、この大和路へはお出でなされました。

與兵　成る程、この大和路へ參つたは（ト表の方へ思ひ入れあつて）敵とねらふその人は、お上の聞え以ての外、東國近江を發足なし、攝州住吉の濱屋敷に、押込め同然と聞いたるが、只大切なは、コレ。（ト柳行李の中より靈龜の香爐を出し）兄彌十郎どの預りありし、多賀家の重寶靈龜の香爐、手に入る上はお邸へ、とは思へども、御大切を思ふから、兄の朋友幸兵衛どの、兩宮御寄附の金子を繕ひ、勢州と聞きしゆゑ、松田氏へ手渡しなし、その上にて兄の仇（ト云はうとする。太平次思ひ入れあり）。

太平　ア、モシ、奥には他聞の者もござれば、滅多にその名を（ト思ひ入れ。與兵衛手早く香爐を行李へしまふ）

みち　あなたは道から持病の惱み、殊に、路用も遣ひ切り、お二人ともに、いかい御苦勞。

太平　ハテ、そりやマア御難儀でござりませう。路用の金は、御相談申したら

升法　コレ、妹、先刻に聞けば、お龜どのとやらは、その大學が妾に欲しいと云うて、こゝらあたりを

探すと聞いたが、もしあのお子を

かめ　エ。

みち　ハテ、滅多な事を云はぬものぢやわいな。

太平　コレサ、女房、てめえ、大儀ながら、醫者を呼んで來ないか。

みち　ほんに、さうしやんせう。あの養珉さんを、お呼び申して來ようかいの。

太平　さうしやれ〳〵。

與兵　イヤ〳〵、心遣ひは忝いが、構うて下さるな〳〵。

太平　イエ〳〵、さうでござりませぬ。大事のお身でござりまする。

かめ　ほんに、何かとお世話になりまする。して、お前一人行きなさんすかえ。

升法　イエ〳〵、あの曲り角に、えて狼が出をるから、わしが送つてゆきませう。

みち　お前と二人なら慥かぢや。さやうなら行て參りますぞえ。

升法　ドリヤ、一緒に行つてやらうか。

　　ト唄になり、時の鐘。升法印、小提灯を下げ、お道附いて向うへ入る。あと合ひ方。

太平　モシ、與兵衛様、蚊がせゝりませう。その圍爐裏の側へ來て、横になりなされませ。

與兵　さうしませう。免さつしやりませ。(ト寢ころぶ)。
かめ　アヽ、又お前、うたゝ寢して。持病の上に風邪ひかうかえ。コレ、蚊がせゝらうぞえ。(トいろ〳〵して) ほんに思ひの外、蚊が少ない事ぢやわいな。
太平　ナニサお前、後になると、目のあけねえ程出やす。

ト澁團扇にてそこらぢう煽ぐ。お龜、太平次の側へさしより

かめ　コレ、太平次どの、今あの法印さんが云はしやんしたのは、大學どのから此わしを、尋ねて居るぢやございませぬかえ。
太平　アヽ、いらざる事をあの法印が口走つて。さやうなら申しませうが、この間中から此あたりへ、大學どのゝ家來衆、お前に逢つたら勸め込み、あの住吉の濱屋敷へ、妾に抱へて (ト與兵衞へ思ひ入れ。與兵衞もフツと目を明き、聽耳立てる)。今夜も今夜と、お前の支度金に、五十兩持つた奴どのが、暮前がたから泊つて居ますわいの。
かめ　エヽ、そんならわたしが支度金もつて、太平次どのゝアノ家來が。(ト思ひ入れ)。太平次どの、どうぞわたしを左枝の邸へ、奉公に遣つて下さんせいなア。
太平　アモシ、お前、滅相な事云ひなさる。向うは敵のあの大學。そこへどうして、アノお前を

かめ　サ、その敵の大學ゆゑ、わたしを遣つて身代の、金をあなたの路用とも、又その病をなほすとも

ト後云ひかれて忍び泣く。空寐入りせし與兵衞起き上つて

與兵　コレ、忝い。嬉しいぞや。路用に盡きたその上に、持病に冒され、この惱み。それを見かねて女氣の、現在敵の妾にと、思ひついたる心根が（ト思ひ入れ）。

かめ　どうぞ邸へ、アノわたしを

與兵　てかけ、妾に身を穢し、わしを貢ぐその金は、現在敵の（ト云はうとして思ひ入れあり）。どうも其方は遣られまい。（ト思ひ入れ。太平次こなしあつて）

太平　御尤もでござります。先きも多いに、名にあふ兄御の（トあたりを見廻し）敵の邸へ入り込ませ、通ひ路あつたら、あなたのお爲に

かめ　サ、及ばずながらお前の手引、これ幸ひ。その身の代は取らずとも、邸の様子を聞き出だす、願うてもないわたしが役目。　）

與兵　憎しと思ふ現在の

かめ　その仇人に身を穢し

與兵　操を破るも

かめ　お前の爲。
與兵　成就するやう
かめ　そんなら邸へ
與兵　コレ。(ト手を合せ)行つてくりやれ。
かめ　アイ。

ト思ひ入れ。太平次仕濟ましたりとこなしあつて、三人顔見合せ、ホロリとする。時の鐘、合ひ方になり、奥より團平出で來り

團平　サテ〳〵、きつい蚤だ。うたゝ寢をして豪氣にくはれた。

トこれにて與兵衞、二枚屏風をして隱れる。

太平　モシ、團平様、先刻お話しなされた、アレあの娘、やう〳〵とわしが勸め込みましたが、いよ〳〵お連れなされますか。
團平　ヤ、何と云やる。お邸に行かうと申すか。それは重疊。行つてさへくれるなら、コレ、支度金は五十兩。(ト財布のまゝ出し、太平次の前に置き)お目見えの身のまはりは、後からでも大事ない。サアサア、承知なら早いがよい。幸ひと駕籠の者も殘つて居る。コレ、駕籠の衆〳〵。

ト呼び立てる。下の方より、駕籠舁兩人出て來り

駕舁　ハイ〳〵、お歸りでございますかえ。

團平　コレ〳〵、歸り駕籠は女中だから、大事に賴むよ。

駕舁　ハイ〳〵、畏りました。

團平　サア〳〵、太平次、早いがよい〳〵。（トせり立てる）。

太平　サア、此方は隨分ようございます。コレ申し、お前がお邸へござるばかりに、支度金五十兩。これを路銀に

ト兩方へちよつと見せる。與兵衞屛風の蔭より覗く。お龜思ひ入れ。

かめ　その身の代の五十兩、わたしぢやと思し召し、お前のお身の御用に立て、隨分と息災に、わたしも奉公大切に。緣があつたら、又逢ふ事も

トつか〳〵と門口へ行く。駕籠へ乘り、ワツと泣く。團平も附き、門口へ出る。與兵衞思ひ入れあつて

與兵　必ず共に、時節を待つて

かめ　めでたう本望。

太平　アモシ。

與兵　それ叶はねば
かめ　これが別れの
與兵　ヤ。
ト出ようとする。太平次、門口をシヤンとさす。團平垂れを下し
團平　急がうぞえ。
ト唄、捨て鐘にて向うへかゝる。揚幕より與五七、八八、三婦六を連れ、ひそ〳〵と出で出り、花道にて行合ひ、摺れ違うて、與五七、團平とさゝやき、駕籠は向うへ入る。三人は門口へ來り、様子を窺ふ。與兵衞、太平次思ひ入れあつて
與兵　いかにこの身の爲ぢやとて、現在(ノ)敵大學へ、この金取つて妾奉公。これにて病ひは癒ゆるとも、貧の病ひの大病は　（トほろりとする。門口に窺ふ三人スツと入り）
與五　親殺しの與兵衞、見附けた。
三婦　代官所へうしやアがれ。
ト立ちかゝる。太平次、與兵衞を圍つて
太平　これ、エヽ、與五七。何があなたが親殺しだ。

與五　ハテ、道具屋の母親を、殺して立退く養子息子。親殺しだから連れて行くワ。太平次に構はずとふん縛れ。

二人　合點だ。……來やアがれ。

ト與兵衞へかゝる。太平次三人を相手に立廻り、この時捨て鐘になり、向うよりお道出て來り、物騷がしきゆゑ、內を窺ふ。太平次そこに有る鉈を取つて、知らぬ顏にて與兵衞に打ちつける。この鉈與兵衞の膝頭に當る。深疵ついて、たぢ〳〵とする。太平次仕濟まし顏にて、內より八八、三婦六を投り出すお道これに驚き、狼狽へて門口の木部屋に入る。與五七逃げて出る。太平次追駈けて出て、仕方して、逃げろ〳〵と思ひ入れ。與五七呑み込み、三婦六、八八に、來い〳〵、と仕方して、向うへ逃げ入る。太平次、與兵衞を介抱して

太平　モシ〳〵、お怪我はござりませぬか〳〵。

與兵　イヤ〳〵、さのみな事でもないが、コレ、この鉈を打ちつけ、持病の上に、アイタ〳〵。

ト立上がり、思ひ入れ。

太平　エヽ、憎い奴でござります。もう〳〵、この內にお出では御無用でござります。只今のお金もわしが預りまして、お後から持參いたしまする間、お前樣はあの峠の、古宮までお出でなされて、

あれでお待ちなされませ。支度を致し、後から參ります〳〵。

與兵　成る程。立て場の一つ家。又ぞろ彼奴等が大勢うせまいものでもない。あの古社へ行つて夜を明かさうか。

太平　さやうなされませ。して、疵口が痛みはしませぬか。

與兵　ナニ、これしきな疵に。（ト手拭にて膝を結ひ、よろ〳〵と立上り）大切なる靈龜の香爐、多賀のお家へ手渡すまでは

太平　御所持でござりまするか。

與兵　この柳行李の中に

太平　必ず油斷なされまするな。おみ足は痛みませうが、ちつとも早く、サヽ、この提灯を、お持ちなされませ。（ト印しのある提灯を與兵衞に渡す）。

與兵　そんなら太平次。

太平　ぢきに參りますぞえ。

ト捨て鐘、合ひ方にて、與兵衞、柳行李と菅笠を肩にかけ、右の提灯を持ち、仕込みを突いて向うへ入る。太平次跡を見送り、金を數へ、思ひ入れあり。

先づ、ざッと彼奴を騙して、お龜が身の代五十兩。道具屋のお袋を縊り殺して、引ッ奪つた五十兩コレ（ト燕の巣の中より紙包みの五十兩を出し）これで都合百兩。……今のどさくさに、孫三郎めが、向う脛に疵を附けて置いたのも、道具屋で育つた與兵衛とはいふものゝ、瀬左衛門が敵の大學を討たうと思ふ程の奴。あのお龜もまんざら無手ではあるまいし、何にしろ、あの孫三郎めを、峠の宮までおびき出し、あそこで殺せば明日の朝までには、狼が喰つてしまふ。それでマア後腹が病めぬといふもの。香爐を引ッたくつて、大學様へ持つて行つて、また金にするワ。イヤ又、斯うまんが直るものか知らぬ。

ト金を一つにして首へかける。此せりふの内に、二階よりお米聴き耳立てゝ居る。門口にお道立聴きゐて、さてはト思ひ入れ。お米驚いたる思ひ入れ。

よね　エヽ、そんなら先刻に逢うた旅のお二人、知らぬ事とてわたしが姉さん、お龜さんとは先刻のお方。連れのお方は與兵衛さま。夫がたづぬる瀬左衛門様の、弟御孫三郎様。お顔も知らねばつかりに、殊にあなたが、香爐とたしか云はんしたが、それこそたしか靈龜とやらの

太平　ヤ。それを聞いたか。

よね　こりやもう爰には

ト二階より駈け來り、門口へ出ようとする。太平次、お米を引ッ捕へ

太平　どつこい。逃がしてなるものか。與五郎とやらを誘き寄せ、彼奴も高橋が枝葉の奴、押し方付けてそのあとで、われを賣つて金にするワ。

よね　アヽコレ、せめてゆかしい姊さんに

ト行かうとするを、引つ捕へ、荒繩にて縛り、手拭を口へ挾ませる。この内拔き足をしてお道、花道へ行く。

みち　先きへ廻つて與兵衞樣を、お助け申さう。さうぢや。

ト捨て鐘になり、向うへ走り入る。太平次、お米を引立てゝ、丸梯子を上り、お米を二階の柱へ縛りつけ

太平　二三日食はしたも、賣つてやつて金にするつもりだ。われを逃していゝものか。(ト云ひ〳〵下りて戸棚より脇差を取出し)孫三郎めを殺して來る內、その二階にジツとして居ろ。(ト行かうとして)イヤイヤ、おれが留守に、誰がうせまいものでもない。マア梯子を(ト丸太梯子を引き、納戸の中へぶち込み思ひ入れあつて)併し、あゝして置いたら、蚊にせゝらるゝであらう。代物に疵をつけてはならねえ。ドレ、いぶしを仕掛けて置かう。

ト圍爐裏へ松の枝をさしくべ、粗朶をくべて蚊遣りを仕掛ける。時の鐘、蛙の聲になり、向うより孫七の

與五郎、木綿やつし、脚絆、草鞋、一本差し、菅笠を持ち、風呂敷包みを背負ひ、スタ／＼と出て來り

與五　ア丶、向うに見える灯りが、峠の一軒家であらう。彼處へ行つて聞き合せたら、知れる事もあらうと麓の噂。一船違つたばつかりに、あのお米を見失ひ、何處へ行つて居る事やら。惡者の手へなど掛らねばよいが。ア丶コレ、心が丶りな事ではあるぞ。(ト云ひ／＼門口へ來る。太平次はいぶしを仕掛け、身拵へして門口へ出か丶る)。ハイ、お頼み申しませう／＼。

トこの聲を聞き、驚き、行燈の火を吹き消し、脇差を後ろの方へ差込み、思ひ入れあつて

太平　アイ／＼。何處からござつた。

與五　イヤ、わしは旅の者でござります。(ト思ひ入れ)これはしたり、暗い内でござりますね。

太平　コレ／＼、爰は旅籠屋ではござらねえ。泊りなら、外を頼まつしやい。

與五　イエ／＼、あへて泊らうといふのでもござらぬが、ちつとわしは、人を尋ねる者でござるて。

太平　エ丶人を尋ねるえ。そりやァ誰を尋ねさつしやる。

與五　ハイ、道連れの女にはぐれましたが、もしこ丶らへ來はしませぬか。心當りがあらば、敎へて下さりませ。

トこの聲を聞き、二階にてお米あせる思ひ入れ。太平次思ひ入れあつて

太平　エ、女の旅人かえ。そりやァちつと、心當りがごんすの。
與五　知つてござりますか。
太平　隨分、知つて居ります〱。(トこれにてお米逢へると心得、嬉しきこなし)。
與五　して、その女は、爰の内に來て居りますかえ。
太平　イエ〱、爰の内には居ませぬ。この近所の狩人の内に來て居ますて。(トこれにてお米又氣を揉む)。
與五　アヽ、近所に行つて居ますかえ。
太平　さやう。年の頃は廿歳ばかりな女でござらう。たしか道連れは與五郎といふ人だげな。
與五　さやうでござります。卽ちわしが與五郎でござります。
太平　エ。こなさんが與五郎どのかえ。
與五　左樣でござります。
太平　そんなら斯うしませう。わしやァ近所に寄合ひがあつて行きますが、幸ひ道だから、その狩人の家へ寄つて、その女を連れて來て進ぜうか。
與五　ハイ〱、それは忝うござります。なんならわしが參りませう。
太平　どうして〱。谷川や小坂の三つも越えにやァ行かれぬから、どうして知れはしませぬ。わしが

連れて來てやりませう。行つて來るうち、留守を頼みますよ。

與五　隨分お留守を致しまするて。

太平　蚊がせゝらば、粗朶をくべて、燻さつしやりませ。直ぐに行つて來ます。

與五　御苦勞でござります。

太平　(ツカ〳〵と行きかゝりしが、立戻つて)コレ、旅の衆、わしが歸るまで、必ず二階へ上らつしやるなよ。

與五　畏りました。

太平　ドレ、一走り。

ト時の鐘、山颪しになり、先きの方へも氣遣ひ、後ろへも心を殘し、思ひ入れあつて、花道へ足早に行く。向うより與五七、八八、三婦六、ウソ〳〵出て來り、行き合ひ

與七　太平次か。

太平　コレ。(ト八八に囁く。二人は思ひ入れして、舞臺へゆき、下手の藪へ入る)。

與七　そんなら引出し

太平　コレ。手傳つてもらはう。

ト兩人向うへ走り入る。與五郎草鞋を脫ぎ

與五　ヤレ、嬉しや。あの男の云ふ通りでは、お米は爰へ連れて來るに違ひない。シタガ、早速に行くへが知れたので、アヽ、安堵したわえ。(ト内を見廻し)ハテ、山家といふものは、灯もともさないで、行燈は何處にあるか、勝手は知れず。……エヽ、こりやきつい蚤だ。そしてマア、夥しい蚊だぞ。コリヤ、亭主が歸るまで、圍爐裏へ燻しを仕掛けようか。

ト誂への合ひ方、捨て鐘、時鳥、蛙の聲になり、與五郎圍爐裏へ差寄り、粗朶をいぶしつけ、煙草を吸ひつける。この時燕の巣に小鳥チヤワ／＼といふ。悑りして

なんだ。チヤ／＼クチヤいふは。アヽ、燕の巣だな。

トこの時足許へ鼠出て駈けあるく。また悑りし

アヽ、氣味の惡い。蛇ぢやアねえか。(トよく／＼すかし見て)ハヽア、鼠だな。いかさま、鼠の出さうな内だ。シイ／＼。

ト煙管にて鼠を追ひ散らす。鼠二階へ逃げあがる。お米下を見て、いろ／＼身をもがき、思ひ入れ。

ハテ、もう歸りさうなものだが、大分手間取れるな。アヽコレ、どうぞ早くお米に逢うて、安堵したいものだが、おれよりはあの女が、さぞ案じて居るであらう。ハテ、早く逢つて落ちつかせたいものだ。

トこの臺詞の度々、お米思ひ入れにて泣き倒るゝ途端、簪落ちる。鼠それを咬へたまゝにて欄間を走り、よき所より簪を落して、鼠は逃げて行く。與五郎また悸りして

アレ、又、何か落ちたな。百足か。守宮か。モウ〳〵、蛇は御免だ。

ト燃えさしの薪を持つて、あちこち見廻す。簪を見つけ、拾ひ取つて

ヤ、こりや簪だが、アヽ、こりや鼠が引いたと見えるわえ。鼠めが簪を引く位なら、こゝの内は男ばかりの住居とも見えぬ。(ト燃えさしにて、簪をよく〳〵見て)ヤ。こりやこれ、この間お米がさしてゐた八つ丁字の紋所。これが爰にあるからは、もしやお米が。(ト思ひ入れあり)。今の亭主が狼狽てた素振り、行きかゝつて立戻り、必ず二階へ上るなと、氣を附け行つたが、どうも合點が(ト燃えさしをすかし、二階を見て)何やら二階に。

ト思ひ入れあつて、窺ひ〳〵二階へかゝり、上らうとする。梯子が引いてあるゆゑ、あちこちとして、崩れ壁に踏みかけ、やう〳〵二階へ上り、お米を探り見て

さてこそ女をむごたらしく(ト猿轡を取る。お米泣く)。コリヤ、お米か〳〵。

よね　よう來て下さんした〳〵。(と大泣き。與五郎制して)

與五　コリヤ〳〵、聲が高い〳〵。

ト縄を解き、介抱して、二階の戸板をおろし、これを踏まへる思ひ入れして、戸の棧をふまへ、二人とも下家へ下り、介抱する。

よね　孫七さん、爰を早う、退いて下さんせ〳〵。(ト泣き聲にて引立てる)。

與五　コレ〳〵、お米、どうして其方は

ト此の時後ろの毀れ壁、ばら〳〵と音して、ヌツと手を出し、八八、半身入らんとする。お米「ワツ」と驚く。與五郎刀を引下げ、お米をかゝへ、屹度窺ふ。八八、南無三と心得

八八　ワン〳〵〳〵。(ト犬の眞似して、ソツと身を引く。與五郎思ひ入れあつて)

與五　ハテ、犬にしては

よね　エ。

與五　嚴しい物音。

トまた鼠出てお米が裾にまとふ。

よね　あれえ。(ト悑りして、與五郎にすがる。與五郎思ひ入れ)。

與五　エヽ、箆棒め。鼠だわえ。……コレ、お米、氣をしつかりしろ。

ト思ひ入れ。時の鐘にて、この道具をぶん廻す。

本舞臺、元の古社になる。爰に與兵衞、最前の提灯を松の枝に掛け、立ちかゝつて居るを、お道留め居る見得。時の鐘にて道具とまる。

みち　アヽモシ、御尤もでござりまする。どうぞ只今申した通り、お立退きなされて下さりませ

與兵　すりや、太平次は大學方の犬となり、香爐まで奪ひ取らんがため、この社まで引出だし、我れをうま〳〵騙し込み、爰で殺さん企みよな。

みち　サア、その惡企みある太平次、折わるうお前の御持病。その上お足の怪我といひ、大切なる御所持の香爐。目立たぬやうに、ちつとも早う

與兵　イヤ〳〵、此處に止まつて、あの太平次がうせるを待つて

みち　サア、御尤もぢやが、大事のお身、どうぞこゝを

與兵　逃げ走るこそ卑怯未練。殊に、脛には思はぬ疵。歩行叶はぬその時は、若しやみ〳〵ト無念の思ひ入れ。お道縋つてこなし。捨ぜりふにて東の口より篠原傳五、半纏、股引、大小、旅形の中間一人、消えたる弓張りを灯し、中間、四つ手駕籠をかつぎ、スタ〳〵と出で來り

傳五　不調法千萬、この山道で灯を消して堪るものか。

中間　イヤモウ、石につまづきまして。

傳五　これは一向足許が見えぬワ。（ト云ひ〳〵、舞臺に來り、提灯を見つけ）アレ〳〵、灯があるワ。サアサア早く、灯を借りて參れ〳〵。

中間　ヘイ〳〵、畏りました。コレ〳〵、ちよつと灯を貸さつしやい。

みち　ハイ〳〵。（ト一向取合はず）。モシ、どうぞ太平次が

ト與兵衞をなだめるうち、傳五中間、灯を移す。お道捨ぜりふにて太平次〳〵と云ふ。

傳五　これは忝うござつた。（ト禮を云ふ。お道捨ぜりふにて聞きつけぬ思ひ入れ）。

みち　御尤もでござりまするが、太平次が

ト與兵衞を落さんとする思ひ入れ。傳五、太平次といふ事を聞つけ、殊に、提灯に倉狩峠立場太の字の印しあるを見て、最前より目をつける事あつて

傳五　コレ〳〵。聞けば、貴樣達は太平次々々々と女中が云やるし、殊に、提灯の印しといひ……コレおてまへ達はこの峠にて、立て場の太平次といふ者があるを知つてお居やるか。（ト兩人思ひ入れ）。

與兵　太平次を尋ぬるお侍ひ樣。して、あなた樣は。（ト急いて聞く）。

傳五　身は左枝家の侍ひぢや。

與兵　すりや、大學が……アイヤ、大學様の御家來でござりますか。
傳五　如何にもさやうぢや。只今聞けばおてまへ達は、太平次々々とお云やるが、若しや身寄りの
みち　ハイ〳〵。私しは太平次が女房でござりまする。
傳五　アノ、おてまへが……ハテ、よい所で逢ひました。道理こそ、その提灯の印し、倉狩峠立て場の
印し、殊に、一軒家と聞きましたが、して、太平次は
與兵　ハイ、太平次はわしでござりまする。
傳五　すりや、太平次夫婦の衆か。これはよい折柄に逢ひ申した。卽ちおてまへ方へ、主人よりの書狀。
（ト首に掛けたる狀箱を渡す。與兵衞受取り、お道は揚幕の方へ心づかひ、封を切らうとする）。イヤ〳〵、
御狀は渡したが、まことお手前太平次かな。
與兵　さやうでござります〳〵。
傳五　成る程、提灯の文字と申し、相違ない。とくと見さつしやい。（ト提灯を差出す。與兵衞狀を開き）
與兵　「一飛札を以て申し遣はし候、かねて其方事、御主人のお顏に似寄るを幸ひ、高橋血筋の者共、何
れに罷り在るとも、手段を以て尋ね出し、お賴みの通り計らひくれらるべく候、然れども、大學
之助樣事、大殿の咎め立てによつて、攝州住吉の濱邸にござある間、急ぎ住吉邊に參り、折を窺

ひ、お目見え致さるべく候、急ぎの道筋、旅駕籠一挺、近習の者差添へ遣はし候、月日、太平次へ、大學之助役人中。」……（ト讀む、お道思ひ入れ）。すりや太平次を住吉まで迎へのため

傳五　卽ち役目は篠原傳五。サヽ、太平次にはこの旅駕籠にて、これより彼の地へ同道いたしたい。

與兵　すりや、大學様より太平次を、アノこの太平次を攝州へ（トお道と顔見合せ、思ひ入れ）

みち　大學様の迎へとあらば、もしや御身の……サ、氣遣ひなれども、急なこの場。天の助けのあの旅駕籠、どうぞこゝを

與兵　（こなしあつて）左枝の家へ近寄るは、願うても無き好き幸ひ。こゝから直ぐに。

ト行李を抱へ、思ひ入れ。向うバタ〳〵と人音する。傳五見て

傳五　この山中にて夜中といひ、烈しき人音。山賊などの難儀も如何。サヽ、少しも早う。（ト介抱して與兵衞を駕籠へ乘せ）大事の客人、心をつけて。

みち　そんなら早う、モシ……跡は女房の此わしに。

傳五　サ、太平次どのはお館へ。

與兵　先きも氣遣ひ、跡へも心が（ト向うを見て思ひ入れ。又揚幕にて人音する）。近くに人音。慥かに太平次

みち　アコレ。サア、太平次どの。

與兵　あなたは御苦勞。

傳五　急げ。

ト垂れを下す。捨せりふ、捨て鐘になり、提灯持ち先きへ立つて、傳五駕籠に附添ひ、東の方へ行く。向うより與五七駈けて出て、舞臺を窺ふ。後より太平次、息せきと出て來り、この時、駕籠は東の歩みより中の間を通り、揚幕へ入る。お道思ひ入れして、小田原提灯を宮の軒につるし、菅笠を宮の脇へ立てかけ置き、思ひ入れあつて宮の中へ入る。兩人花道にて

與七　コレ〳〵、太平次、あの宮の軒に提灯が吊してあるぞよ。

太平　そりやァ慥かにおれの内の提灯であらう。

與七　なんだ。倉狩峠立場尖の字。

太平　先刻與兵衛めに貸したのだ。コレ、人違ひをしめえによ。

與七　合點だ〳〵。

ト二人ながら窺ひ〳〵、宮の際へ來て、太平次菅笠を見つけ、取上げて

太平　西國巡禮同行二人……違ひなし。これだ〳〵。

ト與五七を引寄せ囁く。呑み込んで、提灯を切つて落す。宮の戸を明け、太平次切つて入る。バタ〳〵


松本幸四郎
五渡亭国貞画
五渡亭国貞画
五渡亭国貞画

と物音してお道手を負ひ、太平次に縋り

みち　コレ、太平次どの。

太平　々、わりや女房か。

與七　そんなら內儀か。

みち　エヽ、こなさんは

太平　うぬは與兵衛と密夫してうせたな。して、あの野郎は何處へこかした。それを吐せ。(ト引附ける)。

みち　ナニ、密夫とは、深切な、わしに惡名つけるのかいな。現在主筋の與兵衛樣を殺し、寶の香爐を手に入れんとは情けない。コレ、こなさんの企みの程、聞いたによつてお知らせ申し、こゝをお遁し申したわいな。

太平　すりや、與兵衛めを逃がしたか。エヽ、亭主の罰を思ひ知れ。(ト踏みにじる。お道苦しみ)

みち　罰も報いも知りながら、お袋樣を無理殺し。その時からのその小指。こなさん、お主を

ト云はうとするを酷く踏みつけ

太平　それを知られちやア、女房でも助け置かれぬ。さりながら後も氣遣ひ、荒ごなしは濟んだ。與五七、嚊アを殺らして來い。

與七　合點だ。こなたは早く。

太平　エヽ、無駄骨を折らしやアがつた。

　　トごん〳〵になり、太平次引返して向うへ入る。

みち　アヽコレどうぞ、與兵衛様を

　　ト立寄る。與五七引きつける。

與七　どうで死ぬなら、一思ひに

　　ト抜いてぶつかける。お道小石を取つて打ちつける。與五七、目へ砂の入りし思ひ入れにて、捨せりふにてあちこちとする。お道よろぼひ上る。禪のツトメになり、向うより升法印、小提灯を下げ、スタ〳〵と出て來り、この體を見て與五七を突退け、お道を介抱して

升法　ヤ、こりや、妹か。何奴がこんなに斬つたのだ。コレ、氣を慥かに持て。この野郎めが斬つたのか。但し外に相手があるか。

みち　法印どの、太平次どのが酷たらしく、ソレ、その男と二人して

升法　そんなら此奴が

與七　アヽコレおらア

ト行かうとする。立廻り、屹度なり、これより禪のツトメになり、兩人摑み合ひのタテあつて、落ちたる刀を取つて、與五七をしたゝかに斬る。ウムと倒れる。お道うめく。升法印駈けより

升法　コレ、妹、氣をしつかりと。（ト介抱する。お道苦しみ落入る。升法印思ひ入れあり）。南無阿彌陀佛。これといふのも（トよろぼひ逃げる與五七を引きづけ）うぬ、太平次め、妹の敵、あとでうぬを。（ト口惜しき思ひ入れ。與五七逃げんとするを引ッ捕へて）うぬも同類。

與七　ヤ。

升法　動きやアがるな。

ト屹度引敷く。この見え、よろしく道具廻る。

本舞臺、以前の立て場の茶屋。この道具に戻る。

ト捨て鐘、忍び三重にて、與五郎、お米に草鞋を穿かせ、逃げんとする見え。

與五　すりや、こゝの亭主が、お龜どのに連れ添ふ孫三郎樣を殺し、御所持の香爐を大學方へ、遣はさうと云うたのぢやな。

よね　アイ。まだその上にお前の事。與五郎といふも高橋の、枝葉と云うて居た程に、早うこゝを、立

退いて下さんせ〳〵。

與五　ちつとも早く孫三郎樣の、お跡を尋ね、敵討のお力とならにやならぬ。サ、このまゝに。

ト捨て鐘にて、與五郎、お米を手を引いて、行かうとする。向うより太平次、スタ〳〵と戻り來り、ズッと內へ入る。兩人恟りする。太平次窺ひ見て

太平　こりやァ留守を賴んだ旅のお人かえ。

與五　ハイ。御亭主、今戾らしつたか。（トお米を後ろへ隱す。お米わな〳〵顫へて居る）。

太平　さぞ待ちかねてござらうに、よく蚊を燻してござればよいにく（ト暗がりの思ひ入れにて、挨拶する。與五郞身拵へして、居爐裏の際へ行く。お米に落着いて居ろといふ思ひ入れ）。アコレ、行燈もそこへ出して置いたに。（ト行燈を尋ね廻る）。

與五　ナニサ、決して構はつしやりますな。

太平　コレ、旅の衆、今に向うから連れの女を送つて來る筈だ。こなたが尋ねて來た事を聞いての、イヤモウ、大きに嬉しがつての。アヽ、もう今に來ませうよ。

トこの臺詞中、暗がりにて探り寄つて門口へ栓さしなして、刀をソッと拔いて、軒に吊せし草履を探り取つて、寢刃を合せ、與五郎、太平次が空言を云ふと思ひ、にた〳〵笑ひ居る。お米、この僞りを

聞いて、わな〳〵顫うて與五郎に取附く。

與五　そりやァ大きに、お世話でござりました。

太平　ナニサ、人の世話は人がしないで誰がするものだ。……エヽ、きつい蚊だ。ドレ、マア、灯をつけて進ぜよう。

ト與五郎に探り寄つて、胸倉を取つて白刃を差しつける。この時圍爐裏の蚊燻しパツト燃え上る。時の鐘。與五郎、太平次を振り離す。お米、與五郎に縋り思ひ入れ。太平次思ひ入れあり。

太平　ヤア、その女は

與五　今しがた來ましたよ。

太平　ヤ。

與五　この女は向うから、送られて來ましたよ。

太平　アヽ、そんなら、送られて、その女が

與五　アイ。

太平　そりやァ早く來ましたの。……留守を頼んだ旅の人、二階を見るなと此方から、云つたを危ぶみこなさんは(ト思ひ入れ)。

與五　貴樣の歸るその間、まち〳〵獨りぽつねんと、しても居られず二階から、話し相手に呼んだのサ。
太平　そこでこなさんが。……さぞ退屈でござらうよ。
與五　ナニサ、蚊にせゝられて眠りは出ず、猫より大きな鼠の騷ぎ、家鳴り、地震がめつき〳〵。壁の崩れへ犬は這ひこむ。
太平　ヤ。
與五　なんだか不氣味な、お住居だ。
太平　それサ、海道端と言ひながら、人里遠き一軒家。
よね　わたしを泊めて孫七さんを、殺さうといふ惡心は
太平　頼まれた。
與五　エ。
太平　高橋由縁の奴等なら、枝葉を枯しくれろとある、大學樣に頼まれた。
與五　すりや、大學が指圖を受け
よね　身寄りの者を尋ねるとや。
太平　三度飛脚の太平次が、大學樣に頼まれて、いはゞ國主の御名代、與五郎われをぶち殺し、お米は

賣つて金にする。怪我せぬやうに此方へ寄れ。

與五　扨ては當所に出張して、高橋身寄りを尋ねる奴、助け置いては孫三郎樣のお爲にならぬ。よい所へ來合せて、大學一味のおのれ等、こゝで逢うたが身の幸ひ。命は貰つた。覺悟をしろ。

太平　何を小癪な、青二才め。お米も側で邪魔すると、不便と思へど側杖に、惜しい物だが太平次が、名代に討つ返り討。頃も幸ひ皐月闇、倉狩峠の土となれ。

よね　エヽ、憎てらしい、あの一言。

與五　お米は後に構はずと、麓の方へ怪我せぬやうに

よね　どうして見捨てゝ

太平　阿魔めは遣らぬ。（ト駈寄る。與五郎隔てる。立廻りあつて、太平次を引敷く）。

與五　サア、動かれるなら、動いて見ろ。

ト屹度なる。このとき壁の崩れより、八八、三婦六、竹槍を持ち、窺ひ居て、與五郎をしたゝかに突く。

與五郎「ウム」と倒れる。お米思ひ入れ。

よね　ヤア、孫七どの

ト寄らうとする。太平次、お米を引据ゑる、これより捨て鐘、忍び三重、時鳥、蛙の聲。與五郎起上が

り、切り拂ふ。八八、三婦六、竹槍にて與五郎へかゝる。三人立廻り、太平次、お米を引寄せる。お米、太平次を掻きむしる。此うち、與五郎、二人を切り倒し、太平次が方へ切つて來る。太平次驚き、火入を目潰しに打ちつける。與五郎たぢろぐを太平次切り下げる。お米駈寄るを、引きつける。與五郎よろぼひながら、切つてかゝるはずみに、お米よろ〳〵として、與五郎が刀にて誤つてお米を斬る。お米苦しみ倒れる。太平次、お米が疵を見て

太平　ヤ、大事の玉を疵物にしやァがつた。もうこれぢやァ此奴も引け物だ。……オヽ〳〵、どんざ布子を血だらけにした。(トいろ〳〵見て)アヽ、惜しい物だ。

トお米を切り下げる。これより二人を存分に切つて、トゞ與五郎を切り倒し、乘つかゝり、立ちより、お米を引きつけ、脇腹へ刀を突込む。

騙し込んだる孫三郎めは危く助かり、いらざる爰へ尋ねて來て、思ひがけないこの死樣。併し逃げてもあの孫三、後から殺してやる程に、うぬら夫婦は連れ立つて、地獄の道の先觸れに、死出の山から三途の川、手に手を取つて、うしやァがれ。

ト所々にて鷄の聲。明六つの鐘。日の出、東の方の霞板へ出る。空に烏群がる。太平次見て

アヽ、東が白んだ。ハテ、夏の夜は

ト刀を抜き、直ぐに與五郎の胸許へ突立てる。與五郎苦しむ。お米落入る。太平次、足にとまりし蚊を追ふとて、平手に太股をぴたりと打つ。これを木の頭。

もう明けるさうだ。

ト木のキザミ、止めの刀。明け六つの鐘。途端、一度に、

ひやうし　幕　（作者　勝俵藏）

七幕目　安井福屋の場
合法庵室の場
大切　敵討の場

役名——仲居、お縫。肴屋、五郎助。下部、團平。坂本權平。篠原傳五。彦根嘉仲太。蟹山伴六。質屋手代、善助。鳥本丹八。仲居、おりく。同、おくら。關口多九郎。道具屋娘、お龜。道具屋、與兵衞。彌十郎妻、皐月。修行者、合法。立場の太平次。左枝大學之助。

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて誂への枝折門。福屋と書いたる懸け行燈。一面の建仁寺垣、うし

ろ、中二階、軒に伊豫簾、團子提灯吊し、建仁寺垣より舞臺へ見越しの楓。その外、庭樹、梢ばかり見える誂への道具。幕の内より舞臺へ床几三脚。こゝに關口多九郎、着流し、大小にて酒飲み居る。善助、質屋の手代、一軸の風呂敷脊負ひ、おりく、おくら、拳を打つて居る。踊り地にて幕明く。

りく　ゴウサイ〳〵、スムユウ、リヤン。（トよろしくあつて）オツト、善助さん、お助け。サア〳〵、一つ飲ましやんせ。

善助　今の手一つ取りそこなつた。負けぢやァない〳〵。

くら　ぢやというて、リヤンというて、四つ出しなさんしたぢやないかいな。

善助　イヤ。リヤンではない、ワンだから、四つ足は當り前だ。

多九　おきやァがれ。コリヤ善助、一つ飲みやれ。……イヤ、飲むといへば、仲居のお縫めが居ぬワ。酒が浮かぬ。何處へ參つた。

りく　あのお縫さんは、お客を送つて、そこまで行きましたが、もう歸るでござんせう。

くら　多九郎さんのきついお案じ、こりやお縫どのに

多九　イヤ、又惚れるも無理ぢやァない。美しい仲居め、彼奴といふ當も無くつて、毎日々々酒飲みに來ようか。誰ぞ呼びにやれ〳〵。

善助　呼びにやれといへば、太平次どのは、今日こゝへ來る約束ぢやァござりませぬか。
多九　オヽサ、是非參らねばならぬといふ譯は、身共を斯樣にお取立下された、大學樣の御用もあれば
善助　サア、私しもお話し申して置いた、彼の質に取つて置いた一軸の理窟で
多九　ハテ、その儀は何れ身共が、太平次に逢ひさへすれば解る事だ。
善助　さやうなら、碇をおろして待ちませうか。
多九　ハテ、お縫めは待たせ居るな。コレ、誰ぞ見て來てくれぬかい。
りく　ほんに、きつい惚れやうではある。そんならちよつと（ト花道を見て）おくらどの、あの提灯は内のぢやないかいな。
くら　ほんに福屋と書いてある。ありや慥かにお縫どのぢやわいな。
多九　ドレ／＼。ほんに、提灯の振り附かせやうまで、粋に見えるて。
りく　イヨ、譽め詞樣。きつい物ぢやわいなア。

ト踊り地になり、向うよりお縫、仲居の形、福屋のブラ提灯を下げて出て來る。あとより肴屋五郎助惡者の親仁にて附いて出で來り、花道にて

五郎　ヤイ／＼、お縫、わりや挨拶も無く、振り切つて行つて、濟まうと思ふか。

ぬひ　濟まぬというて、わたしぢやとて、どうなるものかいなア。
五郎　そんならわれは、親を親とも思はぬのぢやな。
ぬひ　思うたとて、どうマア仕樣が
五郎　無いと云はうが、どう云はうが、どこまでもへばりついて
ぬひ　わたしに外聞かゝすのかえ。
五郎　オヽ、金見ぬうちは歸りはせぬ。
ぬひ　そんならどうなとさんせ。金のなる木は持たぬわいなア。

ト矢張り踊り地にて、兩人せり合ひながら、舞臺へ來り

りく　お縫どの、先刻にから
多九　首を長くして待つて居た。サアく、こゝへ、來やれく。
ぬひ　多九郎さん、今日もお前がござんすと聞いたゆゑ、早う歸らうと思うたけれど、道でお客の惡洒落れ、蟲が好かん事ばかり。一つ飲まして下さんせ。
多九　そんな時には、一杯氣をつけると、面白くなるものだ。
善助　オヽ、それく。七段目ではないが、酒でも無理に參らずば（トついでやる）。

ぬひ　ほんに、命も續かぬわいなア。（ト飲む。五郎助ムツとして）
五郎　（ムツとして）ヤイ〳〵お縫、おれが命も續かぬわい。
多九　コレお縫、あの男は
くら　何でござんすぞいなア。
ぬひ　サア
五郎　イヤ、わしはあのお縫が親でござりまする。どなたも御免なされまし。（トお縫が側へ來り）ヤイ、お縫、酒を飲まにやァ命が續かぬとは、おれに當てつけての事か。
ぬひ　なんのマア
五郎　イヤ〳〵、さうであらう。コリヤヤイ、親の爲なら前尻を賣る女郎にも、孝行な子はなるぞよ。又おれが甘い親なればこそ、御戸帳のやうな前垂れをして、旨い物は食ひ次第、酒は飲み次第の仲居をさせて置くは、有り難い事と、無心の度毎に、二言と云はず、寄越す筈だ。
ぬひ　サア、それぢやによつて、給金も、お客の花も、外へ散らさず、みんな
五郎　云ふな。一分か二分の目腐れ金、それが送る内か。親を大事と思ふなら、おれがいふ三十兩
ぬひ　三十、五十のと、天王寺の塔ぢやあるまいし。

五郎　イヤ、出來る。新町へ三年いつてくりやれ。
ぬひ　エヽ。
五郎　サア、おれも大概な事なら、こんな事は云はねえ。義理のわるい騙り同然な借金。表沙汰になれば、首に繩。親を暗い所へやるとも、明るく濟ますとも、われが心次第。得心して女郎になつてくれるか。
ぬひ　ぢやと云うて、どうしてマア。
五郎　否と云はうが、應といはうが、引摺つて行つて金にする。歩びやれ。(ト引立てにかゝる)。
くら　モシ、親仁さん、お前の娘ぢやというて親方持ち。
りく　さう自由にはなるまいぞえ。
五郎　イヤ、高が一分か二分の給金、後でついても事は濟む。ナア、お縫。
ぬひ　イエ／＼、そのやうに云はしやんしても
五郎　やかましい。うしやアがれ。(ト手を取つて引立てる。お縫行くまいと焦る。立廻りの中へ多九郎出て、五郎助を見事に投げる。起き上る所へ包み金を打附ける)。ヤア、この金は
多九　お縫が身の代、三十兩。

ぬひ　多九郎さん、そんならお前が
多九　この場のあらまし、見かねて投げ出すその金も、とうからお縫に多九郎が、思ひあまつて魚心
ぬひ　みずしらずの父さんが、心がらするその難儀を
多九　救つてやるその代り、お縫、おぬしを抱いて寐るぞ。
ぬひ　それではどうも
五郎　否だといつちやァ、この金が手に入らにやァ、われを女郎に賣つてやるぞ。
ぬひ　サア
多九　得心するか。
ぬひ　サア
三人　サア〳〵〳〵
多九　かねての思ひも金と相談。お縫が返事は
ぬひ　ようござんす。金を借らねば勤め奉公。どちらも苦界、あの二階で、わたしが返事を、多九郎さん
多九　そんならお縫

善助　どうやら、かうやら、金の威光で
多九　ハテ、金ぢやない男ぶり。
善助　前祝ひにわしも一緒に
多九　飲まさう。善助、來やれ。
　ト踊り地になり、多九郎、善助、福屋の內へ入る。皆々あたりを見廻し
仲居　お縫さん。
五郎　まんまと三十兩。
ぬひ　モシ。（ト合ひ方になり、思ひ入れあつて）お倉さん。おりくさん。わたしが身の上に無ければなら
ぬ金の算段。苦勞するのを見かねて、斯う〳〵せいとお前方の詞を
りく　誰しも出しにくい金。どうしたらよからうと思ふうち、思ひついたあのお侍ひ。お前に心あつて
毎日內方へ來るを幸ひ
くら　內へ出入りの肴屋五郎助さん、お前の請け人、殊に深い緣もある樣子。年恰好も丁度好いと
五郎　思ひ附いた親の惡者。金を貸さにやア女郎に賣ると、敵役の眞似がうまう行つて
ぬひ　如才のないあの侍ひも、三十兩といふ金。

くら　併し、お縫さんの身の代の、金を枷に
りく　連れて行つて寐ようといはゞ
ぬひ　ハテ、その時は爰を駈落ち。
くら　成る程、それもわたしらが
りく　幕を切つて上げうわいなア。
ぬひ　エヽ、嬉しうござんす。
くら　モシ、まだ話もござんせう。わたしらは奥へ行つて
りく　座敷の様子
ぬひ　頼んだぞえ。
くら　サア、ござんせ。（ト踊り地になり、仲居兩人奥へ入る）。
五郎　時に、この三十兩では
ぬひ　不足の二十兩はこゝにござんす。（ト懐より袱紗に包みし金を出す）。
五郎　この金はどうして
ぬひ　サア、わたしが兄さん孫七さんのお主、多賀の御家中高橋瀬左衛門様、不慮の御最期。弟御の彌十

郎様はお手討、殘るは京へ養子にお出でなさんした孫三郎樣とやら、其お方の力となつて、敵大學どのを（トあたりを見廻し）サア、其お力となるも先立つは金。拵へてくれまいかと、お前を以て細々とのお文。兄の一世の忠義を立てさす事ぢやと、お客の祝儀、給金、頭の飾り、身のまはりも、みな人を賴んで

五郎　質入れした金でござるか。

ぬひ　これも、兄さんが大切なばつかり。

五郎　オヽ、出かさしつた〳〵。この五十兩を遣つたら孫七どのも、さぞ喜ぶであらう。この間の狀に、女房お米を連れ、この地へ向けて參るとの文體。日を繰れば、もうとうに着する時分。

ぬひ　どうぞ少つとも早う屆けて、安堵させたいものでござんす。

五郎　それも尤も。そんなら斷うせう。內で待合はさうより、お迎ひがてら、倉狩峠、近江海道へ向けて

ぬひ　行つて下さんすか。

五郎　その方が早手廻し。（ト二つの金を合せ、懷へ入れ、行かうとする）。

ぬひ　ア、モシ。必ずこの事を

五郎　ハテ、おれも孫七とは鰯を煮た鍋ぢや。

ト時の鐘、合ひ方にて、五郎助向うへ入る。お縫あと見送り

ぬひ　マア、あれはあれでよけれど、これからはあの侍ひの返事、一つよければ又二つ。むづかしの世の中ぢやなア。

ト唄になり、お縫思ひ入れあつて、門へ入る。直にこの唄の彈き續け、時の鐘にて向うより立場の太平次、頰冠り、一本差し、走り出て來て、花道にて

太平　あの倉狩峠で、孫七夫婦をぶッ放し、跡くらましてこの大阪へ來たが、その人殺しを嚴しい詮議との風聞ゆゑ、晝間歩くも無遠慮と、夜ばかり用を足すとは、どうでも盗人じみて居るさうだ。福屋まで來いと、多九郎からの使ひ。氣の急くせゐか、もう來たさうだ。

トきよろ〳〵しながら、舞臺へ來り、思ひ入れあつて、小石を内へ投げ込む。合ひ方になり、内より多九郎出て來り

多九　小石の合圖は

太平　わしでごんす。

多九　ムウ、太平次か。呼びにやつたに、ようこそ〳〵。

太平　サア、わしも大學様に頼まれ、さま〲耳になる事だらけサ。それゆゑ夜に入つて……して、わしを呼んだのわえ。

多九　サア、別儀でもない。かねておぬしもおれも手先へ廻る大學様、先達てより住吉の濱屋敷へ押籠め其節、お邸内へ置いては心遣ひと、預け置かれし菅家の一軸、身共に受取り參れとの仰せゆゑ。

太平　そんなら、アノ、わしが預つてゐる一軸を

多九　如何にも、急に御用があるゆゑ

太平　モシ、そりやアどうも合點がいかない。濱屋敷へ置いては危ないといつて、預けられた一軸……

ハヽア、もうこの太平次に用は無いと、出入りを止める下心だな。

多九　イヤ、さうではない。これには

太平　イエ〱、云はつしやれ。何もかも腹一ぱい働らかせた上、なりにくいお龜まで、かッ淩つて屋敷へ送り、抱かせて寐させるも、この太平次が庇ぢやアないか。

多九　イヤサ、そのお龜も屋敷へ連れ行き、手をかへ、品をかへ、段々と口說けど、聞入れね不得心な女郎め。どうでしまひはお手討と、點がかゝつて居るワ。

太平　それはてん〲の不器用たから。尤も、金は今まで取つたれど、あの人ゆゑに日陰者同然。何ぞど

つさり規模が無けりやア

多九　返さぬといふは、あの一軸、質に置いたであらうが。

太平　それ程知つて居ながら、なぜ又寄越せといふのだ。

多九　サア、大學樣も心を改めたと、本家へ詫び事。押籠めさへ免されたら、又お望みの企みも樣々と、申し入れたところが、聞濟みあつて、近く赦免の使者が來る筈。それ故、一軸が入用だ。

太平　それだといつて、質に入つてゐる物を、ちやんころ無しに返せとは、比丘尼に何とやらだ。

多九　イヤ、その金はある。

太平　エヽ。

多九　サア、質入れは五十兩と聞いたゆゑ、則ち大學樣から。

太平　アノ、金が來たかえ。

多九　サア、來たが、こゝがおぬしに無心。その五十兩のうち、身共三十兩使つたて。

太平　おれの物を使ふとは、こなたも餘ツ程（トむつとする）。

多九　ハテ、よく腹を立てる男だ。その三十兩の代りだ。（ト懐より墨附きを出してやる。太平次見て）

太平　「高橋一家へ心を運ぶ下郎の孫七、お米もろとも殺害に及び候褒美として、押籠め御免の上は、

新地五百石宛行ふものなり。左枝大學。」……この墨附きをわしに貰つてやるワ。なんと、三十兩貸してもよからうが。

太平　これぢやァ萬更

多九　ソレ、後の二十兩。（ト懐の金を渡し）幸ひ質屋も持つて來て居る。どうぞ、おぬしの働きで

太平　二十兩ぶッつけて、五十兩の代物を、口說いて見ようか。

多九　ハテ、それもちつとの內。大學樣さへ赦免あれば

太平　直ぐに侍ひ、五百石。

多九　それもおぬしが

太平　倉狩峠で

　　ト切る眞似する。この內、お縫二階の障子を明け、何心なく聞いてゐる。

ぬひ　エ。（ト聞き耳立てる）。

太平　そこに居るのは（ト見る。障子ぴつしやり閉す）。

多九　イヤ、仲居どもだ。外に氣遣ふ人はない。

太平　そんなら、これから

多九　福屋の内で

太平　質屋に對談。

多九　太平次。

太平　オツト、その名は、だんまりだよ。

ト踊り地になり、多九郎先きに太平次、墨附きと金を懐へ入れ、門の内へ入る。トばた／＼にて、向うより五郎助走り出て

五郎　コレ／＼、お縫どの／＼。大事ぢや。飛んだ事ぢや。ちやつとござれ／＼。

ト内よりお縫出て來り

ぬひ　五郎助さん、何でござんすぞいなア。

五郎　何ぢやどころでない。亂ちき大事ぢや／＼。（ト騒ぐ）。

ぬひ　モシ／＼。さうばかり云つては解らぬ。マア、譯はどうでござんすぞいなア。

五郎　どうといつたら、殺された／＼。

ぬひ　誰がいなア。

五郎　サア、兄の孫七は殺されたわいの。

ねひ　エヽ。（ト愡り、いろ／＼思ひ入れあつて）そりやマアどこで、何奴が（ト五郎助に取付き、あせる）。

五郎　サア、驚くは、尤もぢや／＼。最前こなたに別れ、近江海道へ出迎ふと、倉狩峠を村役人、御檢視も一緒に、宿次ぎの傳馬。どういふ事かと、樣子を聞けば、倉狩峠の一つ家で、旅の女と男が殺され、そのお檢視の戻りぢやといふゆゑ、その殺された者は、所は何處、名は何といふ者ぢやと聞いたれば、イヤ、夜の內の事ゆゑ知れなんだが、やう／＼割掛けに附いて居る、駄賃帳で大概解つたゆゑ、代官へ持つて行くといふ。駄賃帳を見たところが、コヽ、これぢや／＼。

ト血だらけの駄賃帳を出す。お縫取つて見て

ぬひ　「江州清水村孫七」……こりや覺えある兄さんの手跡。血に染みて居るといひ、そんならどうでも、兄さんは……女子といふは慥かにお米さん。殺されたかいな／＼。

五郎　サア、膽の潰れたと云はうか、愡りしたと云はうか、折角拵へた金も、これでは要らぬ金。持返つて、さうしてこの事も知らさうと、ちよつとゝ云うて、駄賃帳を借りて來たわいの。

ぬひ　して／＼、その殺した者の名は、何と／＼。

五郎　サア、おれもあんまり仰天して、それを聞かずに來た。

ぬひ　エヽ、なんでござんすぞいなア。

五郎　マア〳〵、何より忘れぬうち、最前の金。（トそこへ置き）その駄賃帳は證據、代官所へ持つて行くといふを、ちよつとゝ云うて借りて來た。持つて行かにやならぬ。コレ、お縫どの、孫七が回向ようさつしやれ。おれは駄賃帳を持つて行くから。ヨ、コレ、駄賃帳の回向ようさつしやれ。おれは孫七を持つて行かにやならぬ。ヤレ〳〵、とんだ事だ。

ト時の鐘にて五郎助、駄賃帳を持つて狼狽へ、向うへ走り入る。お縫色々思ひ入れあつて金を取上げ

ぬひ　心を盡して拵へた金も、兄さんを悦ばさうため。それにマア、望みも叶はず、夫婦もろとも、人手にかゝつて死なしやんすとは、どうした不運な身の上か。思へば薄い、兄妹の縁でござんしたわいなア。

ト泣き落す。この時奥にて

善助　イヤ〳〵、それぢやア渡されない。

太平　ハテ、聞分けのない。おれの云ふ事をマア聞きやれな。

トこれにてお縫金を懐へ入れ、思ひ入れあつて下の方へ來り、いろ〳〵思案して居る。合ひ方になり、奥より太平次、善助出て來り

善助　わしが事より、こなさん、聞分けがない。マア、よく物を積つて見たがよい。そりやハヤ、利足

は追ひ〳〵入れてはあれど、五十兩の質を、三十兩出してくれろといふやうな

太平　サア、無理だから賴むのぢやァないか。五十兩の物を、五十兩遣りやァ恩ひらなし。口說くには及ばないワ。

善助　口說くといふは、三百か一本の錢質の事。まとまつた三十兩。

太平　賴んでも聞かにやァ、そこはおれが腕づくでも借りるぞよ。

善助　そんならわしが否といへば

太平　オヽ、高が貸し借り。首の落ちる出入りは無い兇狀。きいた所が荒拵ぎ。それでも否か。

善助　こなさん達の通りを食つて、質屋の奉公がなるものか。

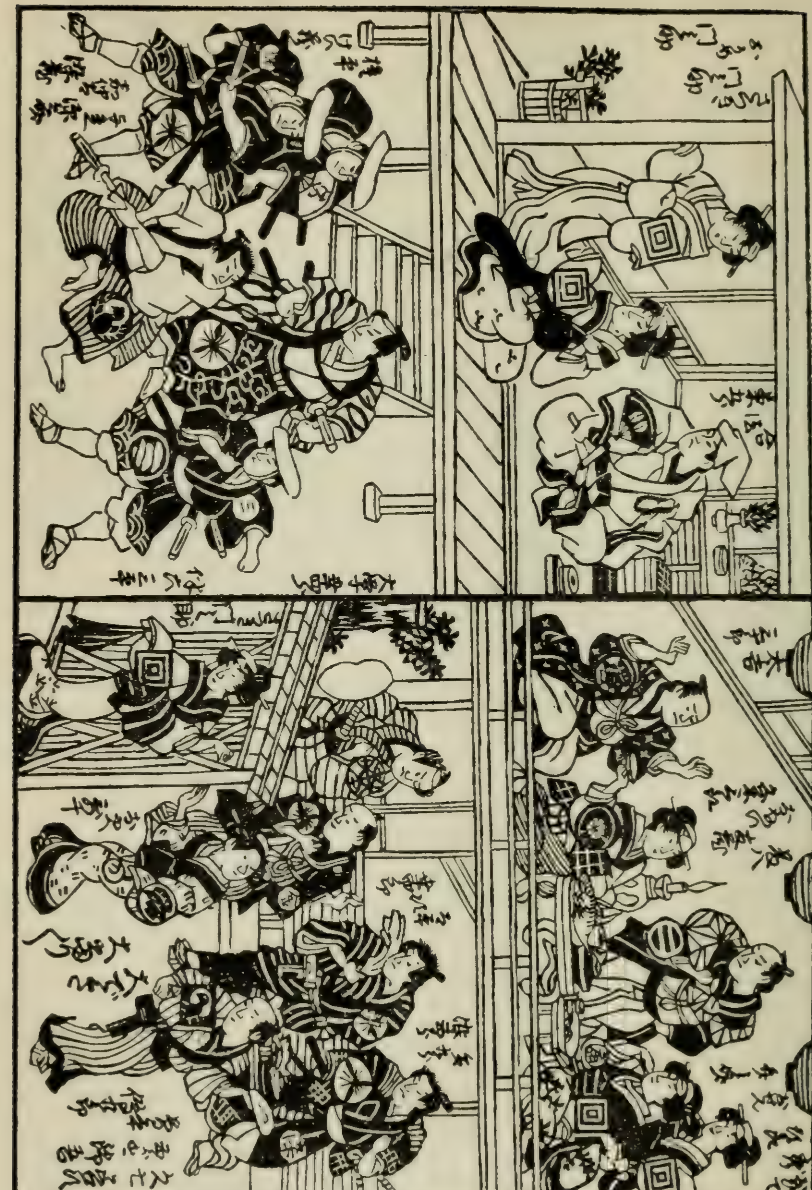
ト行かうする。太平次引つ捕へ、せり合うて、風呂敷包みを取らうとする。此うち、お縫、最前の事を思ひ出したこなしにて、仲を引分け、善助に以前の金を打ちつける。

ヤア、この金は

太平　こなたは慥かこの福屋の

ぬひ　アイ、お縫といふ仲居でござんす。

太平　ほんに、二三度來て、顏は



ぬひ 知つて居ながら、知らぬ顔のお客さん。

太平 イヤ、そりやア夜目、遠目とやら。時にマアその金は

ぬひ 貸して上げうと思うて。

善助 (此うち金を改め見て) アノ、大枚の五十兩。

太平 貸してもらふは忝いが、どうやら心の

ぬひ 知れぬ事も何にもない。一二度來てもお客はお客。お前はお代官の沙汰になつても

太平 ヤ。

ト悩り。お縫心を附ける思ひ入れあつて

ぬひ よいと思へば、貸すまいわいなア。

太平 アヽ、コレサ。百の借り貸しも思案する世の中。ほつかりと五十兩

善助 又もや御意の變らぬうち。サア、代物をお渡し申す。(ト風呂敷の中より一軸の箱を出し、太平次にわたし)わしは方の附いた事を、多九郎樣にちよつと屆けて歸りませう。ヤレ〳〵、危ないところを生返つたやうだ。

ト合ひ方になり、善助金を持ち、門の内へ入る。

太平　イヤ、どうも合點が行かない。これが親類か縁者でもなし。深い馴染も猶ない事。いゝ男なら惚れたとも思はうが、その氣遣ひはないおれに

ぬひ　アノ、いゝ男にばかり惚れるものかえ。

太平　ヤ。

ぬひ　サア、色戀は心意氣ばかり。

太平　そんならおれに

ぬひ　附合つて見たら

太平　面白さうとお見立てか。

ぬひ　サア、それも素面では

太平　成る程。打解けやすいは酒の上。

ぬひ　そんなら一つ

太平　あの二階で（トちよつと寄るを）

ぬひ　飲まぬ先きから、醉うたかいなア。

ト唄になり、お縫、太平次の手を引き、門の内へ入る。下座より仕出し二人、捨ぜりふにて出て向う

へ入る。門の内より、善助先きにお倉ぶら提灯を持ち、おりく附いて出て來り

善助　ヤレ〳〵、大きに世話でござつた。

くら　そんなら、もうお歸りかいなア。わたしらも、幸ひ用もあり

りく　辻まで送つて上げうわいなア。

善助　そいつは豪氣だね。

二人　サア、ござんせ。

ト騷ぎになり、三人向うへ入る。直ぐに二階の障子を開ける。内に太平次、お縫の膝にもたれ、酒を飲んで居る。銚子、鉢、杯、肴、取散らし、誂への合ひ方。

ぬひ　モシ、太平次さん。今からそんな卑怯な事云はずと、もう一つ上れいなア。

太平　イヤ〳〵、頭から茶碗で四五杯やらかしたから、餘ッ程廻り燈籠だ。

ぬひ　そんなら。もう否かえ。

太平　サア、ちつと息を拔いてやらうよ。

ぬひ　モシ、わたしや酒飲まぬ者は嫌ひぢや。そんなら、もうよしなさんせ。（トつんとして茶碗を取上げる）

太平　アヽ、コレサ、氣の短い。酒を飲まぬ者が嫌ひとあれば、飲むは飲むが（ト茶碗を取上げて）お縫、

今云つた事は、あれは眞かよ。

ぬひ　嘘に女が惚れられるものかいなァ。(ト酒をつぐ)。

太平　有り難い。(トぐつと飲んで、お縫へ獻さうとする)。

ぬひ　見事ぢや。抑へやんせう。

太平　また飲めか。

ぬひ　サア、お前と夫婦になつたら、どこへ世帶を持たうぞいなァ。(ト太平次が持つて居る茶碗へ酒をつぐ)。

太平　どこといつたら、マア、大阪なら島の内、江戸なら二丁町近所よ。(ト飲んで下へ置く)。

ぬひ　そんなら芝居の近所ぢやな。(ト下にある茶碗へ酒をソツとつぐ)。

太平　てめえは江戸の事は知るまいが、江戸の芝居といつちやァ、また違つたものサ。(ト酒を飲む。お縫また後へつぐ)。まづ魚は新場、小田原町が鼻の先き、吳服屋は大丸、越後屋、米屋は伊勢町、船宿は堀留。(ト酒を飲む。お縫又つぐ)。淡雪は壺屋、蕎麥は砂場。自由の足りる事といつちやァ、八文屋で飯を買つて、人形町の屋臺店で、十二文が菜を買へば、七五三の料理よりは旨い所よ。

ト拍子に乘つて酒を飲み、醉うたる思ひ入れ。

ぬひ　そりやマア面白い所ぢや。併し江戸は遠い所とやら、行くのにも肝心の

ぬひ　なんの二十兩ばかり。つい遣うてしまうたら

太平　金はある。おぬしが先刻貸してくれて、方をつけたから、その金が二十兩こゝに

太平　金の出來口、いくらもある。

ぬひ　そりや何處になァ。

太平　おッつけ五百石。おれは侍ひになるワ。

ぬひ　何を口から出次第に。嘘々。

太平　ナニ、てめえに嘘をいふものか。

ぬひ　侍ひもをかしいわいなァ

太平　コレ、さう貶すなら見せる物がある。必ず人に云ふなよ。

ト以前の墨附を出して、奥の方ばかり見せろ。

ぬひ　「赦免の上は新地五百石宛行ふものなり。」

太平　なんと、屹度した物であらうが。

ぬひ　ほんに……その後を見せなさんせ。

太平　イヤこの後は、女房になつた上の事〳〵。（ト墨附を懐へ入れ、捨ぜりふ云ひながら、太平次酔つて寝ろ）。

ぬひ　モシ〳〵、寢なさんすかいなア。もう一つ飮まんせいなア〳〵。（ト懷へ手を入れようとする）。

若者（奥にてここちか〳〵。（トちり〳〵の合ひ方。お縫悔りしてあたりを見廻し）

ぬひ　何の事ぢや。御幣廻しが始まつたさうな……モシ、太平次さん〳〵。（ト起しても起きぬゆゑ、ソツと懷へ手を入れ、右の墨附きを引出し、あけて見て）ヤア、こりやこれ、孫七お米もろとも、殺害に及び候褒美、と書いてあるは、さては

　ト太平次目を覺まし

太平　なんと。

ぬひ　兄さんの敵。

　ト太平次が脇差を手早く取つて切りかける。太平次そこにある杯臺、銚子、掛け物の箱、掛け物を打ちつける。この立廻りに、一軸外へ飛んで見越しの楓の枝へひつかゝり、垣の外へはらりと下る。墨附も外へ飛ぶ。始終、ちり〳〵の合ひ方にて、大勢騷ぎ居る。此うちよき程に、向うより彌十郎妻皐月、誂への形、一心寺彌勒堂と書いたる小提灯を灯し、つか〳〵と出て來り、二階の騷ぎを見上げる拍子に、一軸に目を附け、提灯に透して見て

皐月　ヤア、こりや覺えある、慥かに

太平　なんと。

皐月（落ちたる一通も拾ひ上げ）高橋一家へ心を運ぶ下部の孫七、お米諸共殺害に及び候褒美として、押籠め赦免の上は、新地五百石宛行ふ物なり太平次へ左枝大學。……すりや、倉狩峠にて殺害されたは

ぬひ　わたしが兄さん。

太平　さういふうぬは（ト見下す）。

皐月　お縫がゆかり。

太平　すりや高橋にも

皐月　不思議に尋ぬることの一軸。

ト伸び上り取らうとする。太平次、中二階より飛下り支へる。お縫も續いて飛び下り、切りかける。三人よろしく立廻り、これより誂への合ひ方になり、太平次、お縫が刀を引ッたくり、一太刀浴せる。皐月隱し持つたる懐劍をお縫へ遣り、太平次を突廻し、刃物を持ち添へ太平次を切る。立廻りよろしく、トヾ太平次、お縫共に手を負ひ、皐月太平次を押へ、お縫に抉らせる。太平次苦しむ。此うち二階へ多九郎出て

多九　ヤア、人殺し〳〵。（ト飛んで下り、かゝらうとするを、皐月ちやつと留めるうち

ぬひ　イヤ、敵討ち……と云うては、助太刀の又かゝり合ひ。……心中ぢや。

ト太平次が上に乘りかゝり、自害する。

皐月　とはいへ、様子を

多九　女め。うぬ。

ト拔いて皐月に切つてかゝる。刀餘つて楓の枝を切り落す。これにて皐月、一軸と墨附を取つて

皐月　忝い。

多九　それを

トかゝらうとする。太平次が置きし二十兩の金を取つて打ちつける。金ばら〳〵と散る。多九郎狼狽へ、金を拾ふ。皐月手拭を冠り、二品を持ち、時の鐘、誂への合ひ方にて、一散に向うへ走り入る。舞臺よろしく、この道具ぶんまはす。

本舞臺、三間の間、藁の葛家。上の方少し前へ張出し、一間の二重舞臺、餓鬼骨の反故張障子を建て下の方竹簀の子、うしろ同じく餓鬼骨の反故障子、破れ壁。よき所の圍爐裏に竹自在の土瓶掛けてあり。屋體の外、榎の前に石地藏。下座の方竹藪。こゝに高橋彌十郎、合法の拵へにて、七厘にて土瓶の茶を煎じて居る。こなたに六部の笈あり。時鳥しきりに、合ひ方、木魚の音にて道具とまる。

合法　あゝ、啼くワ〳〵。時鳥も八千八聲啼き盡せば、死ぬるといふ世話の譬へ。我れも丁度その如く

斯かる艱苦も事成る上は、長らへ果てぬ冥府の鳥。……冥府といへば、亡き兄の、今日は命日。どれマア回向を（ト矢張り合ひ方にて、笈の扉を開き、鉦を打鳴らす）。遙靈院劍光信士、出離生死頓生菩提。南無阿彌陀佛々々々く／＼々々。……さぞ御無念にござりませう。現在敵はありながら、押籠められし國法に、討つ事ならず徒らに、月日を送る心の本意なさ。どうぞ宥免あるまでに、寳の詮議と敵の無事、兄の佛果を願ふも僧形。……とはいへ、思へば……これはしたり。もう藥が上つたさうな。（トまた元の所へ來り、土瓶の藥を茶碗へ量りながら）今、人の世話になるおのが身で、あの病人の世話をするも、これも他生の縁づくであらう。（ト茶碗の藥を持つて、障子の側へ來り）コレ、寢てか。二番が上つた。服まつしやらぬか。

ト障子あける。始終合ひ方。此うちに、與兵衞、筵屏風を立て、病ほうけたる形にて、合法が着替への布子を引掛け、革行李にもたれ居て、この時、與兵衞屏風を押し退け

與兵　これは〳〵、戴きまする〳〵。（ト茶碗を戴き、一口服む）。

合法　そして、容體はどうござるな。

與兵　サア、なんでも病ひに勝たうぞと、思うて見ても矢張り同然。（ト思ひ入れあつて）どういふ過去の因縁にや、深手にて危い折から、其許樣の通り合され、その場の難儀をお救ひ下され、この庵室に

合法 伴つて、行歩も自由ならぬ身を、この程よりの御介抱、只今死んでもこの御恩

これはしたり。埒もない。死んで堪るものかいの。コレ、そんな氣の弱い事云はずとも、氣をし

つかりと持つて、早く本復……ソレ、藥がさめようぞや。

與兵 (又藥を飲んで)アヽ、なんの因果で此やうな

合法 サア、それも浮世の七轉び

與兵 もう八つでござりませうか。

合法 目が覺めたなら、月でも眺めて。

與兵 (空を見て)空は晴れても、氣は曇る。(ト又思ひ入れ)。

合法 サア、それも病ひが苦になるゆゑ。マア、ちつと話して紛れるがよい。

與兵 いかさま、斯うばかりして居らうより、そこへ出まして

合法 併し、夜風に當つては……よくその布子を引つ掛けて、風邪でもその上へ引かぬやうに。

與兵 ハイ〳〵。

ト誂への合ひ方、篳篥の笛の音。與兵衞布子を引つ掛け、やう〳〵立上がる。合法手を取り介抱なして、此方へ連れ來り、與兵衞思ひ入れあつてあたりを眺め

合法　今日は御同行の女中が、お見えなされぬが

與兵　左樣でござる。ちと木津村まで用事がござつて……ほんにマア、この夜の更けるに

合法　合法どの。あの篳篥は。

與兵　ありや天王寺の勸學院で、稽古の樂器。病人には好い氣慰み。

合法　成る程、聽けば何處ともなう、心を澄ますあの音色。調べはこれと變れども、琴の斷つたる知音の故事。

與兵　すりや、あの唐土對安道が

合法　サア、切なる誠を

與兵　こゝに比べて、

合法　合法どの。……その人を知る魂ひ見込みて、お賴み申す仔細がござるが、何とお聞屆け下されうや。

與兵　ムウ。……魂ひ見込みて賴みたいとは。（ト思ひ入れ）。

合法　サア、外ならぬ大事なれども、何を隱さう拙者めは……敵討ちでござるわいの。

與兵　エヽ。……すりや、望みある身の上とな。……ムウ。

合法　サヽ、賴みと申すはこゝの事。この程倉狩峠にて、本望遂ぐる善き手筋と、わざと手の者と僞りおほ

せ、來る道の深江に於て、手段現はれ、既にその場で云ひ甲斐なく、返り討にもあふべき所、貴殿の助力に危く遁れ、親身も及ばぬ介抱に、本復致し本望をと、今日まで思ひ暮らせしが、とても痛手の病症に、所詮全快叶はねば、敵も討たれず、やみ〳〵と、この儘空しく死なんより、せめて先祖へ云ひ譯に、切腹なさん身の覺悟。

合法　ヤヽ。

與兵　拙者が妻と定まる女も、敵の邸へ擒れと、なりしを幸ひ近寄つて、望みを叶へる健氣な心底。何卒彼れが先途を見屆け、敵を討たせて下さらば、修羅の妄執、晴らす便りは外にはない。お頼み申す合法どの。どうぞ一重にこの事を

合法　（思ひ入れあつて）ムウ。すりや始めて聞きし一大事。すりや、こなたにも敵討ちとな。

與兵　サア、息あるうちにこの事を、お頼み申し、死ぬれば本望。敵の實名、我が素性

合法　アイヤ、その名を滅多に明かすまいぞ。

與兵　エ。

合法　サア、危急に迫る頼みなれども、この儀は容赦に預りたい。……サ、斯樣に申せば卑怯未練と思はれんが、何をか包まん、我れとても、委細を云へば、同じ身の上。

與兵　ナニ、アノ、其許にも敵討ち

合法　いかにも。……　姓名知られし敵は大身、遇ひ次第にて明日をも知らぬ、命を抱いて貴殿の頼み、承つても詮ない事。

與兵　ムウ。それゆゑに助太刀は

合法　サア、未練とさみしておくりやるな。

與兵　ヘイ。（トいろ／＼思ひ入れあつて）さうぢや。たとへ五體は叶はずとも、一心凝つたる我が念願の本望遂げいで置くべきや。

ト向うを見詰め、立たうとしても、足立たぬこなし。二三度あつて、撞と倒れる。合法引起して

合法　ア丶コレ、矢竹に逸るは尤もながら、病苦の身では何として。今の氣丈を張りに持ち、全快なしてその敵を

與兵　サア、本意が遂げたい。命が惜しい。佛神三寶、見離し給ふか。エ丶口惜しい／＼。

ト身を揉み苦しむ。

合法　ハテサテ、愚癡な。こりや身を揉むと爲にならぬが。

ト藥を服ませ、いろ／＼介抱する。此うち、また誂へ、篳篥入りの調べになり、お龜、物思ひの姿に

て出て來り、直ぐに舞臺へ來り、入る。合法見て

ヤ、こりや女房と思ひの外。(ト思ひ入れ)。

かめ　アイ。わたしや與兵衛樣に

與兵　(顏を上げ、お龜を見て)ヤア、そちやお龜ぢやないか。

かめ　與兵衛さん。よう無事で居て下さんした。逢ひたかつたわいな〳〵。

ト走りより、縋り附いて泣く。與兵衛思ひ入れ。

與兵　合點の行かぬ。擒はれの身は籠の鳥。殊に、女の夜夜中。どうして其方は

かめ　サア　(ト思ひ入れ)。

合法　ヘエ。すりやこの女中が、今話しの

かめ　二世とかけたる夫に別れ……いかい苦勞を、致しましたわいなア。

與兵　そんなら望みを叶へた上、首尾よう邸を拔けて來たのか。

かめ　サア、それは

トこの時、向うより村のあるき、駈けて出て來り

歩き　コレ〳〵、合法どの。村役人衆が、何か云ひ聞かす事があるげな。サア〳〵、ちやつと、ござれ

ござれ。

合法　ナニ、今頃に庄屋樣で……幸ひ、こゝに居るも、どうやら遠慮。

歩き　サア、早う、ござれ〳〵。

合法　モシ、女中。そこに藥も煎じてあれば、氣を附けて進ぜさつしやれ。與兵衛樣、わしはちよつと庄屋どのまで。

歩き　ハテ、早くござれよ。

合法　ヤレ、參りますワ。せはしない。

　ト合ひ方になり、合法、歩きと、とつかは向うへ入る。

與兵　コレ、お龜。返答も無く、濟まぬ顏つき。樣子はどうぢや。サヽ、樣子は。

かめ　モシ、與兵衛さん。(ト與兵衛に取附き、ヂツと顏を見て)この程倉狩峠にて、擒はれ行きしその日より、あの住吉の濱屋敷、一間に押籠め、憎體な、侍ひどもが夜となう、晝となう、入れ替り立ち替りては、大學が心に隨へと、嚇しつすかしつ、さま〴〵と、口說かるゝ身の切なさ、辛さ。

與兵　そりや、別るゝからは、互ひの胸に、よう得心して

かめ　さればいなア。望みを遂げたいばつかりに、この身を任すは合點で行ても、現在の夫を捨て、敵

に枕を交はすのが、口惜しさ、悲しさ。一つには、お前の病氣も案じられ、風の便りにこゝと聞き、思ひ焦れて、やう〳〵と、人目の關を遁れて來たも、今一度お顔を見たいばつかりに、歸りましたも果敢ない身の上。死んでも未來は女房ぢやと、モシ、與兵衞さん、どうぞ云うて下さりませいなア。

ト取附き泣く。始終與兵衞苦しみながら、お龜を取つて突退ける。誂らへ。笛入りの合ひ方。

與兵　ヤア、我れを慕うて歸りしを、貞女と云ひたけれど、夫婦の縁もこれ限り。

かめ　エヽ。すりや、アノわたしを

與兵　夫でもない、女房でない。何國へなりと、とツとゝうせう。

かめ　モシ、そりやマア何ゆゑ、胴慾な。心に叶はぬ事あれば、堪忍して下さんせ。わたしやこれまで戻つたも、云ふに云はれぬ大抵な

與兵　ヤア、何を云ひ譯。コリヤ、我れは病苦のその上に、左枝の多勢に痛手を負ひ、今をも知れぬ命なりや、女ながらも敵の屋敷へ、入り込みしこそこれ幸ひ、心をゆるさせ、大學が、小鬢の先きでも一刀、何ゆゑ恨みの刃は當てぬ。

かめ　サア

與兵　返り討ちに逢ふとても、それこそ眞の與兵衛が女房。それに、夫婦の愛慾にひかれ、のめ〳〵と三千年に一度咲く、花盛りを外に見て、立歸つたる卑怯者。兄の位牌へ云ひ譯も、頼みも切れし運の果。それも何ゆゑ、この體の、心に任せぬ病氣ゆゑ。エヽ、口惜しい、無念なわやい。

ト身を掻きむしりつゝ、あせる。お龜思ひ入れあつて

かめ　モシ。すりや返り討にあふとても、敵に刃を向けたなら

與兵　オヽ、それこそは眞の女房。

かめ　嬉しうござんす。その一言が聞きたさに、こゝまで迷うて戻りました。

與兵　なんと。

かめ　何を隱さう、擒はれ行き、その時より心の覺悟。色に事よせ、騙し寄り、一太刀なりと恨みんと、氣は逸れども情けなや、かよわい女の身は一つ、望みも遂げず仕損じて

與兵　ヤヽ。どうしたと。

かめ　憎や敵の（ト思ひ入れ）。

與兵　ヤ。

かめ　刃にかゝつて

ト泣きおとす。與兵衞思ひ入れ。ばた〳〵になり、向うより皐月、一軸を抱へて、こけつまろびつ走り出で、直ぐに舞臺へ來り

皐月　モシ、合法どの、喜ばしやんせ。(ト内へ入る。お龜、一軸に恐ろゝ思ひ入れ)。

かめ　戀しい、床しい與兵衞さん。まだ云ひたい事はあれど、アレ眞筆の威德に恐れ

與兵　なんと。

かめ　我が夫。おさらば。

トどろ〳〵になり、龕燈にてお龜消える。パツと掛け煙硝立つ。跡に血に染みし小袖殘る。兩人驚き

皐月　ヤヽ、今までありし女中さん。

與兵　姿は見えず、忽ちに、殘るは血汐のこの小袖。さてはお龜は手にかゝつて。ホイ。(ト思ひ入れ)。

皐月　譯は知らねど、今のお方は

與兵　この世を去りし魂魄の、迷うて爰まで來りしか。

皐月　この一軸の神威に恐れ

與兵　その儘形の見えざるは、返り討ちに討れしゆゑ、この世の別れに來たのであつたか。さうとは知らず、叱つたは、消えよ、歸れと云うたも同然。

皐月　ムウ。そんならお前も敵討ち。

與兵　サア、その敵の手へ女房お龜、擒はれしを幸ひに、健氣な事を仕損じて、敵の爲に返り討ち。この世に亡き身と知つたなら、よう暇乞ひをしようもの。

皐月　ほんに、この身につまされて、願ひも遂げず、あまつさへ、先立たしやんしたお心根。

與兵　さぞ、本意なからう。口惜しからう。これも前世の約束事。

與兵　果敢ない浮世の

皐月　身の果ぢやなア。

ト與兵衛、血潮の小袖を持ち、皐月も共に思ひ入れ。此うち、向うより以前の歩き、走り出て來り

歩き　コレ〳〵。合法どのは庄屋どのへ留め置いて、さる御大身様が何やら御用で、この庵へ案内せいと。アレアレ、もう彼處へ、お出でなさるワ〳〵。

皐月　エヽ、ナニ。御大身様が（ト此うち、與兵衛苦しみ居るゆゑ、皐月介抱して）マア〳〵お前はあの内へ

ト上の障子屋體へ入れ、鋌屏風を立て、一軸を押戴き、笈の中へ隱す。此うち、時の大鼓、誂への合ひ方になり、向うより左枝大學之助、野袴、打裂き羽織にて、蟹山伴六、島本丹八、彦根嘉仲太の三人、半纏、股引、大小にて、刀筒を持ち、出て來り、直ぐに舞臺へ來り、ズツと上へ通る。

見ますれば、お歴々樣の見苦しい、合法がこの庵へ

大學　夜中も厭はず、來たには仔細がある。して、其方は修行者めに、ゆかりの女か。

皐月　御意の通り。さうしてマア御用の儀は

嘉仲　外でもない。この程より隱まひある

伴六　與兵衛といふ腰抜けめ、

丹八　御前の用だ。

三人　こゝへ出せ。

皐月　(思ひ入れあつて)如何なる事か存じませぬが、庵主居りませねば、その與兵衛……とやら申す人、隱まひありまする事やら、わたくしは一向に

大學　ヤア、知らぬと云はさうか。病みほうけて爰にうせる事、犬を入れて存じ居る。ソレ、家探し致せ。

三人　ハツ。(ト踏込まうとするを、皐月立廻り、三人を投げ退ける)。

大學　コリヤ、手向ひ

皐月　イヤ、全くお手向ひは致しませぬ。庵主留守と申し、殊に與兵衛とやらには、如何なるお咎め、

それ承りました上ならでは。
大學　ムウ。科の次第は持たせし首級。………それ見せい。
伴六　ハツ。（ト片袖に包みしお龜が首を出す）。
皐月　ヤア、こりやアノお龜さんとやらの………すりや、アノあなたが
大學　執心かけし女なれども、我れを敵と刃向ひ立て。所詮心に隨はぬ、しぶとい女郎め。それゆゑ返り討に討ち放した。元の根ざしは與兵衛へ心中。その二才めを生け置いては、後日の邪魔ゆゑ、同じ刀で冥土の道連れ。これへ出せ。
皐月　サア、それは
大學　庇ひ立てして、われも刀の相伴するか。
皐月　サア
皆々　サア〱〱。いつその事に
トまた踏み込まうとする。皐月とめる立廻り。大學之助一腰へ手をかけ、立ちかゝろ。皐月見えよくとめる。この時障子の内にて
與兵　ヤア、庇ひ立てして怪我あるな。

大學　さてこそ與兵衞め。爰へ引出せ。(ト行かうとする皐月を引据ゑて居る)。

三人　ハッ。………腰拔けめ。うせう。

トその儘障子蹴放し、先きへかゝる丹八を與兵衞支へながら投げ退ける。この間に、左右より與兵衞が手を取つて引立て、大學之助が前へ引据ゑる。皐月思ひ入れ。與兵衞、大學之助を見て

與兵　恨み重なる仇敵。思へば〳〵

ト左右の手を振り解き、鞘を力に立上り、拔討ちに大學之助へ切りつける。皆々思ひ入れ。大學之助そのまゝに與兵衞の刀を打落し、直ぐ與兵衞を一かせ切る。與兵衞撞となり、皐月思ひ入れ。大學之助、與兵衞を引附け

大學　五體も叶はぬ身を以て、我れへの手向ひ、慮外な奴の。生け置くゆゑ、敵呼ばり。その蟲の音も、一刀に

ト突放し、白刃を振上げる。皐月、側なる嘉仲太を捕へ、突出す。その間に與兵衞、落ちたる白刃を取つて、グッと腹へ突立てる。

皐月　アヽコレ。叶はぬまでもと思うたに

與兵　イヤ〳〵。志は忝けれど、所詮存命叶はぬ命。………逃げよとあるとて、五町、七町、探し

出され無念の死恥。人に難儀を掛けんより、斯く成り果つる覺悟の生害。せめては今際に一太刀でも、刃向うたがこの世の思ひ出。………とはいへ、目先きへ父の仇、妻の敵を置きながら、討つ事ならず、腹切つて、死ぬるも因果なこの病苦。思へば〳〵、口惜しい。

ト見詰めて屹度思ひ入れ。大學之助・與兵衞が襟を足下にかけ

大學　何を〳〵。………コリヤ、よく聞け。仔細あつて籠居の身も、今日免許の時を得て、御教書差出し、武將へ謁する都入り。少しもこの身に凶事あらば、その身は重罪。叶はぬ事だ。自滅したのはうぬが仕合せ。もがくな〳〵。………ハテ、好いざまな。(ト蹴飛ばす。皐月思ひ入れ。)

與兵　ムウ。(ト口惜しき思ひ入れ)。

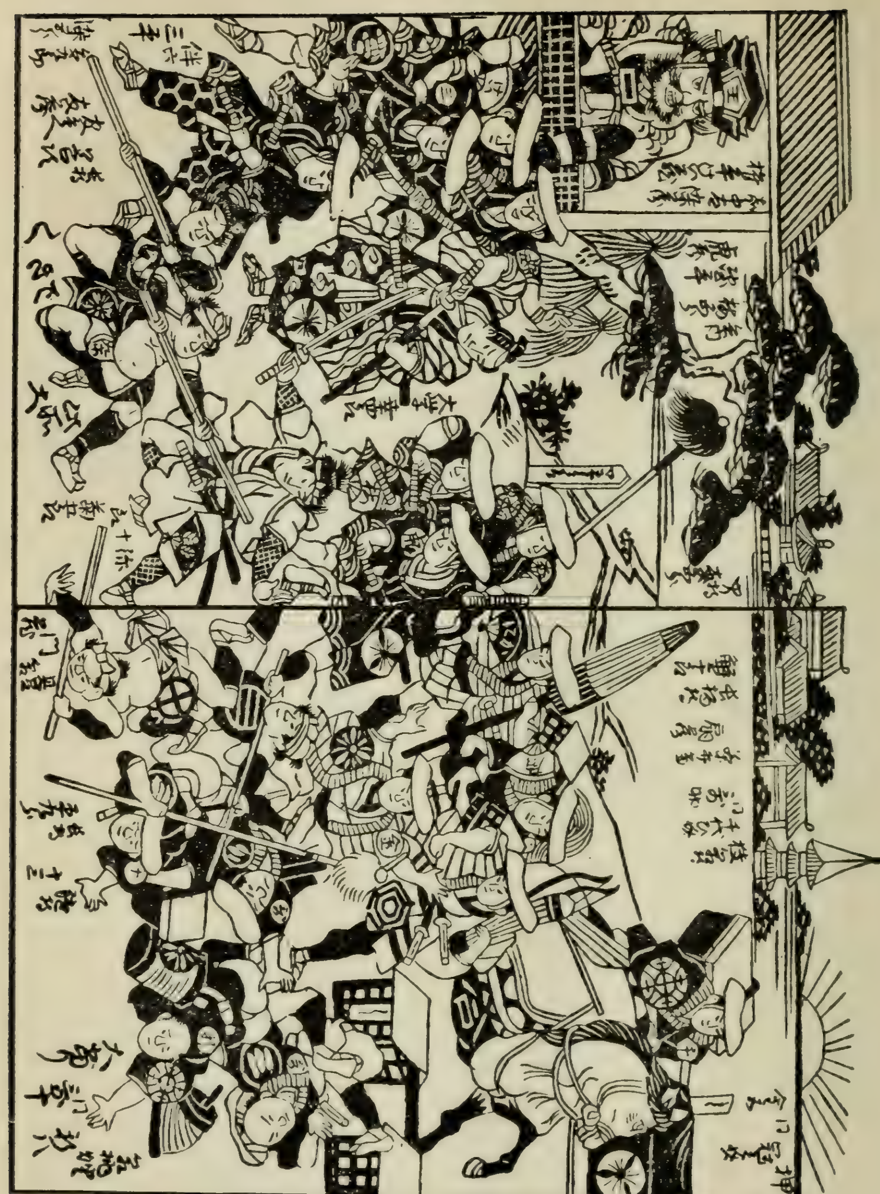
大學　ム、ハ、、、、。二才めがくたばり首、その合法とやらが歸りなば、持參いたせと申しつけい。小堀口にて供揃へ。コリヤ。(ト伴六に囁く)。

嘉仲　お乘り物。

大勢　(向うにて)ハア。

ト乘り物を擔ぎ、バタ〳〵と出て、舁き据ゑる。大學之助直ぐに乘り移る。この時、伴六下手へ小隱れ。皐月思ひ入れあつて

皐月　して、御大身様は
嘉仲　江州多賀の御分地。
丹八　左枝大學様だワ。
皐月　エヽ。………すりや左枝大學様。
　　　と立ちかゝらうとするを、近習隔てろうち
大學　乘り物遣れ。(ト戸をシヤンと閉める)。
皆々　ハア。
　　　ト時の鐘になり、この人數バタ／＼と向うへかゝる。皐月呆れ、跡を見送つて居る。この内向うより
　　　合法出て來り、花道にて摺れちがひ、舞臺へ來る。この人數揚幕へ入る。
皐月　ヤア、遲かつたわいな／＼。
合法　遲かつたとは。
皐月　今こゝへ敵大學が來居つてから、アレ、アノ與兵衛様に自滅させ、お龜さんとやらも手討ちにし
　　　て、たつた今歸つたわいなア。
合法　ムウ。すりや今の乘り物が



皐月　現在敵を置きながら、女子の悲しさ。初手からそれと知るならば、仕様もやうもあらうのに、別れの際に大學どのと、聞くと其まゝ乗物を、近習の數多が警固をして

合法　すりや、濱屋敷の押籠めも

皐月　今日赦免して都入り

合法　して、供揃ひ、發足は

皐月　小堀口にて未明から

合法　エヽ、忝い。（ト四方を拜して）我が兄高橋瀨左衞門どの、修羅の苦患を晴らさせ申さん。草葉の蔭にて悅ばれよ。

トこれを聞き、奥兵衞むつくと起き上り

奥兵　ナニ、高橋とは近江の國、鏡山の高橋どのか。

合法　いかにも同苗彌十郎、寶の行くへ知れるまで、討つ事ならぬ殿のお指圖。

皐月　それゆゑ、夫婦お手討ちと、御披露あつて時節を計る

合法　假の修行者、この合法。

奥兵　ヤヽヽヽ。すりや某が血筋の兄。

合法　なんと。

與兵　幼少の時お別れ申し、京都へ養子の身なるゆゑ、互ひに顔は存ぜねど

合法　そんなら弟孫三郎か。

皐月　與兵衛といふ名にそれぞとは

合法　ドレ。（と走り寄り、屹度顔を眺め）エヽ、知らぬ事とて、神ならぬ身の是非もなや。最前名乗り合うたなら、斯ういふ最期はさせまいもの。

皐月　一つ庵に在りながら、互ひに知らぬ他人向き。

合法　餘儀なき頼みの助太刀も、望みある身を愼んで

與兵　現在兄とも、

合法　弟とも、

皐月　知らぬ目の前、腹切るを、留める事さへならざりし

合法　これも敵の、皆爲す業。

與兵　思へば

皐月　思へば

合法　残念なり。(と思ひ入れ)。
與兵　敵を討つべき兄者人、殿の手討ちと聞く悲しさ。それより仇を報ひんものと、養母にわざと勘當うけ、月日を送る巡禮の、末期の際に兄の無事、名乘り合うたも、佛の惠み。
　　　トよろぼひながら革行李より、袱紗包みの香爐を出し
　これぞ紛失致したる、靈龜の香爐、兄者人へ、渡せば我れは、死すとも、本望。(と合法へ渡す)
合法　眞にこれぞ靈龜の香爐。……もうこの上は今一いろ。
皐月　サア、その菅家の一軸も、不思議に取り得て、コレ、こゝに。
　　　ト笈の内より以前の一軸を出し、合法に見せる。
合法　ムウ。この一軸は、どうして其方の
皐月　樣子は、兄御に勤めたる、あの孫七が妹お縫、この天王寺の福屋に奉公。廻り廻つてその內へ、太平次とやらいふ惡者、この一軸を所持せし上、孫七夫婦を殺した事まで、不思議に知れて爭ひの、所へ思はず行きかゝり、共々お縫に力を添へ、敵を討たせ易々と、この一軸を取戾して
與兵　ナニ、太平次を討ちしとや。たとへ我が手をかけずとも、由緣の刃に仕留めし上は、養母の敵を討ちしも同然。

合法　一時に二品揃ひし上は
　　ト香爐を皐月へ渡し、笈の中より一腰を出し、腰へぼつ込む。
與兵　本意を遂ぐる
皐月　めでたう吉左右。
　　ト合法、お龜が切首を抱へ、ヂツと見て
合法　我が兄、弟、弟嫁、恨みは一つ左枝大學。まッ此やうに
　　ト拔討ちに自在の先きを切る。中より槍の穗先き出る。
皐月　こりや、御無念の
合法　とゞまる穗先き。（ト手早く自在を取つて槍の柄をすげる）。
皐月　そんならこの儘。
合法　オヽサ。直ぐに向つて日頃の仇討ち。其方はこの場にとゞまつて、弟夫婦が亡骸を、目立たぬやうに取り納め、二品の寶を本國へ急ぎ持參し、少しも早う、殿の御前へ披露せい。
皐月　して又、お前は。
合法　ハテ、いづれ、敵に出合ふ日は、討つても死ぬる、討たいでも、死ぬと覺悟は極めて居る。



皐月　すりや、アノこれが
與兵　兄弟
合法　夫婦
三人　この世の別れ。
　ト三人思ひ入れ。七つの鐘鳴る。合法きつとなる。
合法　ありやもう七つ、(ト行かうとする。與兵衞ウンと思ひ入れ)。
皐月　ア、モシ
　ト合法を留める。合法、與兵衞を見て
合法　南無阿彌陀佛。
　ト思ひ入れ。このうち、伴六出かゝり
伴六　合法。うぬを
　ト拔きかゝるを、合法その儘支へて投げ退ける。また來るところを
皐月　こゝ構はずと　(ト伴六隔てる)。
合法　女房、さらば。

トつか／＼と花道へ行く。この時與兵衞、バッタリ落入る。合法思ひ入れ。皐月、伴六を取つて押へる。ゴーンと時の鐘。途端よろしく、

ひやうし幕

幕の外、合法自在の槍を構へ、屹度なる。早三重にて、向うへ一散に走り入る。直ぐに時の鐘、禪のツトメのつなぎにて、この幕引返す。

本舞臺、三間の間、正面誂への閻魔堂、石の座像、賽錢箱、花立、香爐一式飾り、上の方、合法が辻と書いたる榜示杙。下座の方、藪疊、下の方、樹立茂り、後ろ、打抜きの田畑畫き起し、遠く見せたる好みの道具。月星の仕掛け物。すべてこの道具誂へあり。轡の音、三味線入り馬士唄にて幕明く。

ト矢張り、右唄にて、向うより雲助二人、小田原提灯をつけたる菰包みの長持に、左枝大學之助荷物と荷札ついたるを擔ぎ出て來る。後より別の雲助、會符の附いたる雨掛けの荷を擔ぎ出る。後より馬士、駄荷を附けたる馬を曳いて出る。何れも長持唄、捨ぜりふにて宜しく下座へ入る。向うバタ／＼にて、合法、自在の槍をかいこみ、走り出て、舞臺へ來り、向うをきつと見て

合法 あの行列こそ正しく左枝大學、日頃の本望。………南無、日本の諸天善神、別して我が造立の閻魔王。力を合せ、たび給へ。

ト四方を拜するうち、向うより「ハイホウ」の聲する。これにて合法、閻魔堂の蔭へ身を忍ぶと、直

ぐに行列三重、轡の音にて、向うより中間二人、向う梅の紋附いたる高張二挺持つて出る。これに續いて、奴二人、挾み箱。後より團平、伊達道具、後より足輕、弓張、同じく鐵砲三挺、後より誂への具足櫃差荷ひ、これに關口多九郎、旅侍ひにて附添ひ出る。後より向う梅の紋附いたる箱提灯二つ。この後より陸尺四人、旅乘り物を擔ぎ出る。これに坂本權平、篠原傳五、彦根嘉仲太、島本丹八、蟹山伴六、半纏、股引、大小にて、引添ひ出る。醫者、槍持、茶辨當、長柄持、草履取り、押へ侍ひ、附いて來る。後より多勢、合羽籠、いづれも三尺手拭、脚絆、旅の行列にて、直ぐに舞臺へ來る。よき程に、合法、つか〳〵と同勢を押分け出て

合法　アイヤ。このお乘り物、暫くお待ち下さりませう。（トこれにて人數留る）。

多九　ヤア、今日左枝大學之助樣、都入りの御同勢

皆々　お乘り物を留めたる慮外者め。

合法　イヤ、全く、慮外は仕らぬ。私しこそこの閻魔堂の傍らに、舍りを結ぶ修行者合法。先刻、殿大學樣、埴生への御光來、隱まひ置きし、卽ち與兵衞が儀に附きまして

多九　すりや、其方が修行者合法。

合法　如何にもさやう。

權平　その節二才がくたばり首

傳五　持參いたせと女めに、仰せつけられあつたるゆゑ

合法　その儀について密々に

嘉仲　殿へお目見えしたいのか。

合法　なか〱。（ト乘り物へ摺寄る）。

伴六　ヤア、云ふ事あらば、取次ぎ願へ。

丹八　殿へ直とは慮外な奴。

多九　ソレ、何れも、引立てさつしやい。

團平　ドレ、その役目を團平が

トつか〱とかゝるを、見事に投げ退け

合法　ヤア、願ひありとは便らん僞り。强惡無道の大學どの。非道の刃に相果てし、高橋瀨左衞門が弟、同苗彌十郎。兄の敵、弟の仇。觀念召されよ。

ト一腰を拔き、乘り物へ突通し、直ぐに戸を刎ね退けると、乘り物の中には結構なる具足入れある。大學之助居らぬゆゑ

ヤヽヽ。こりや、乘り物には

四人　さてこそ高橋彌十郎だな。
多九　香爐を紛失させた科、手討ちと聞きしが、すりや存命。たとへ長らへうせればとて、根を斷つて葉を返り討ち。
合法　イヤ、本望遂げいで置くべきや。して、大學は
權平　オヽ、斯くと疾くより御承知にて
嘉仲　殿には御身を忍ばせあれば
丹八　及ばぬ事と諦めて
傳五　われもきり〳〵自滅なせ。
伴六　仇討ちなどとは叶はぬ事だ。
合法　エヽ、逃け隱るゝとは卑怯な大學。たとへ何處に忍ぶとも
團平　ヤア、敵なぞとは慮外な修行者。
多九　この多九郎が奉公始め、申し合せた同勢殘らず、語らひ置きし馬士、雲助。皆總がかりに、討取り召されい。
皆々　覺悟なせ。

ト皆々拔きつれて切つてかゝる。合法ちよつと立廻つて切り結ぶ。これにて同勢叶はず、下座と向うへ逃げて入る。合法双方を見て、きつと思ひ入れ。チヨンと月に雲かゝる。これより誂への合ひ方になり、右の人數、二人組、三人組、或は一人づつ合法にかゝる。これより種々面白きタテ。見事に切り倒し、荷物を殘らず突いて見る。トゞ自分も勞れたる思ひ入れ。最早突く物無きゆゑ、刀の血にて咽喉をしめし

合法 チエヽ、口惜しや。今まで刃向ふ其うちに、大學らしき者もなきは、はや逃げ失せたか、殘念な。千辛萬苦も水の泡。所詮この世に長らふべき命ならねど、本望を遂げず、腹切る無念。悔いても返らぬ我が不運。冥土の兄や弟に、イデ追ひ附かん。南無阿彌陀佛。

ト槍の穗先きを腹へ突込み、こなし。この時ゴーンと時の鐘にて、上の藪疊を押分け、大學之助、この體を見て、思ひ入れあつて、スツと側へ來り

大學 高橋彌十郎。仇敵を討ち洩し、殘念なるか。

合法 さういふ聲は

ト、チヨンと月出る。合法、大學之助を見て

敵大學。

大學 斯ういふ事と知つたゆゑ、畔道傳ひに藪蔭へ、忍ぶと知らず、自殺なし、さぞかし殘念。察し

やる。………トレ、この世の暇を、取らしてくれう。

ト側へ立ちかゝるを、突きまはし

合法 イヤ、兄の敵、弟が仇。まづ、こなたこそ、冥土の魁け。

ト白刃を屹度さしつける。大學之助驚き

大學 ヤヽヽ。すりや腹切つたと思ひの外

合法 オヽ、其方も計れば、此方も手段。サア、尋常に覺悟召されい。

大學 小癪な奴の。

トこれより双盤入り。賑やかな鳴り物になり、兩人烈しき立廻りよろしくあつて、トヾ合法、槍の穂先きにて大學之助を仕留める。

合法 國家の怨敵、兄弟の仇、その身に思ひ知らしつたか。（ト存分抉る）。

大學 エヽ、口惜しい。

トよろしく立廻り、ドツコイととまる。頭取出て

先づ今日はこれぎり。めでたく

打出し

（作者 福森久助）

謎帯一寸徳兵衛

なぞのをびちよつととくべゑ

謎帶一寸德兵衛

序幕

向う兩國の場
吾妻橋の場

役名――大島團七。釣舟の三吉。三河屋義平次。備中屋の番頭、傳八。玉島兵太夫。同若黨、彌市。藝者、お磯。兵太夫娘、お梶。奥女中、琴浦。腰元、お繼。大鳥佐賀右衛門。

本舞臺、三間の間、山形に丸印しの附きし土藏、二戸前並び、藏の間ひ、雨落ちの開き、打毀してあり。藏の前、黒き駒寄せ、用水桶。側に犬一疋寢て居る。微めし時の鐘、九つの拍子木にて幕明く。

トすぐに打毀せし所より、釣舟の三吉、尻からげ、頬かむりにて、懷へ茶器の箱をいろ〳〵捻込み、ヌツと出る。この物音にて、伏したる犬起き上り、吠える。

三吉　シツ〳〵。おれだワ〳〵。（ト言ひながら、後先見廻し、駒寄せを越え、腰に挾みし雪駄を穿き、此方へ來る。犬頻りに吠える）。エヽ、篦棒め。おれだわえ〳〵。（ト云ひながら、天水桶の蓋の上へ、懷の物を出して、手拭にて一つに結へながら）吠えるな〳〵。こゝの内の若旦那だワ。……初めて泥坊をして見たが、豪勢足の顫へるものだ。勘當されても親の內だ。これで餘所へ入つたら、マアどんなであらう知らん。

……シツ〳〵。（犬、矢張り頻りに吠えるゆゑ、石を尋ね投げる）。エヽ、いま〳〵しい。（ト穿いたる雪駄を投げつける）。手當り次第にたくし込んだが、とてもの事に風呂敷を。（ト又犬吠える）。エヽ、畜生め。（ト片しの雪駄を打附ける。犬逃げる。雪駄を取つて）これからこいつを

ト思ひ入れして、向うへツイと入る。辻打ちになり、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、眞中に葭簀張りの茶店。上の方土弓場の後ろ。すべて兩國橋向うの體。こゝに茶屋娘おみよ、前垂れ掛けにて茶を運んで居る。長床几に仕出しの若い者。下の方に、大鳥佐賀右衞門、浪人者、古編笠にて莚の上に坐し、箱の楊枝を並べ、自分も楊枝を削つて居る。辻打ちにて道具納る。ト下座と向うより仕出し大勢出て來り、行き違つて入る。この仕出しの中へ、次郎、又、乞食にて出て來り、おみよと捨ぜりふを云ひながら、床几の若い者も捨ぜりふあり、一緒に下座へ入る。トこれに引續いて、向うより傳八、手代の形にて先きに、あとよりお磯、藝者。お仲、振り袖、友七、若い者にて、附き添ひ、出て來る。

傳八　コレサ、お磯坊、なぜ一緒に歩かないな。

いそ　サア、わたしや、ちと

なか　お磯さんは氣合ひが惡いといな。

友七　大方、船にでも醉ひなすつたのだらう。

傳八　馬鹿を云やれ。深川の藝者が船に醉つて堪るものか。野暮な事を云ふものぢやないか。

いそ　いゝえ、わたしや野暮ぢやによつて、船に醉つたのでござんせう。マア、わたしに構はずと

友七　コレサ。

なか　マア、傳八さん、彼處へちやつと。

傳八　それぢやァ、一緒に來なんし柿や九年母サ。

なか　こりやァ、新らしい。

皆々　ハヽヽヽ。

ト此うち、始終辻打ちにて皆々舞臺へ來る。

みよ　オヤ、お磯さん。今日も送りかえ。

かそ　おみよさん、まだ三吉さんは見えずかえ。

みよ　イエ〳〵、今日は

傳八　コレ〳〵、その三吉とは誰が事だ。

みよ　サア、その三吉さんとはな

いそ　なんのお前が、知らいでも好い人でござんす。打つちやつて置かしやんせいな。

傳八　イヤ〱、置かれない〱。大方そりやア清七といつた、神田の道具屋の息子。勘當されては仕方が無く、歴々と見せかけて、沖場でその日を凌ぐ、釣舟々々と云はれる、あの三吉野郎めか。

なか　イエ〱、お磯さんの云はしやんす三吉さんとは、藝者衆の事ぢやわいな。

友七　それ〱。土橋の三吉さんの事でござりませう。モシ、お芳やお清とは違ひます。友七がお附き申して來て、ナニ、滅多な事があるものでござります。

傳八　ムウ。そんならお磯、あの釣舟の三吉ぢやァ

みよ　ハイ、お茶をお上げ申しませう。（ト傳八が額の先きへ出す）。

傳八　エヽ、危ない、火傷をするわサ。

ト茶碗を取つて思ひ入れ。ト又、辻打ちになり、向うより三河屋義平次、親仁の拵へにて、單羽織を腰へ挾み、矢立を差し、手帳を繰りながら、出て來り、すぐに舞臺へ來り

義平　オヽ、備中屋の番頭どんぢやァないかえ。

傳八　義平次さん。どこへござつた。

義平　今日は、神田の方からこの兩國邊に、ちつと尋ねる人があつて。……幸ひな所で逢ひました。茶

代を掠つて、一服のんで行きませう。

傳八　ハテ、あたじけないお人でござるわえ。……併し其あたじけないで仕出した身上。この傳八がまだ灰吹きの掃除をして居る時分から、こちの裏へ三河からござつた頃は、質さへ置かれぬ貧乏人。やう〳〵六つ七つになる、あの娘御のお辰さんを、藝者奉公に賣つた金から取りついて、今では三河屋義平次といふ、酷金貸しの親方。もう其やうにあたじけなく

義平　サア、わしはする氣はなけれども、兎角この心めが、金の殖えるを面白がり、利金ばかりぢやまだるいゆゑ、金にさへなる事なら、人の難儀も構はぬ料簡。昨夜も神田の道具屋へ、盗人めが入つたげな。その泥坊もおれが大概、勘を附けて置いたれば、なんでも此奴を捕まへて、褒美の金をいそ

モシ〳〵。その神田の道具屋とは、もしやあの三吉さんの

ト云はうとして、傳八を見て思ひ入れ。義平次、お磯を見て

義平　傳八どん。大分こなたは、盡すの〳〵。

傳八　イヤ、なにサ。これは今日妙義講で、山の伊勢屋で一杯機嫌。ツイ酌に出たお磯坊を、連れ立つて船でぶら〳〵。コレ、こちの店へござつても、必ずこれは沙汰無しに

義平　オツト、合點。定めてこの口ふさげが

みよ　ほんに、ちつとも遁さぬお方ぢやわいなア。

義平　遁さぬ次手に、こちらに居る新造は、おれが又太刀先きで

友七　モシ〳〵、滅相な。この子は賣物ぢやござりませぬ。大和屋の徳兵衛といふ、わたし等が親方の、妹御でござります。

義平　ムウ。そんならあの大和屋の徳兵衛が妹か。その徳兵衛が所へは、おれが娘のあのお辰を、座敷を引かせて近々に、女房に遣る約束。すりやそのお娘は、おれが爲には、娘も同然。

友七　ヘエ。そんならあのお前さんは、內方のおかみさんにおなりなさる、あのお辰さんの親御さんかえ。

義平　おいの。

みよ　ほんに、鳶が鷹とやら、お前さんのやうなお方に、あの美しいお辰さん。……ホヽヽ。わたしとした事が、粗相な事を。

いそ　わたしも旦那やお辰さんにあやかつて、好いた男と、どうぞ女夫に

傳八　コレ、その好いた男といふは。（トむつとする。お磯思ひ入れ）。

いそ　エヽモ、お前の事ぢやわいなア。（ト寄り添ふ）。

傳八　こりやア、何ぞ買はずばなるまい。
友七　その調子へ持込んで、コレ、どつさり、と云つた所が、彼處に楊枝屋さんが居るばかり。
傳八　その楊枝面白い。惣仕舞にしろ〳〵。
友七　モシ、思ふ樣取つて、皆樣にも上げなさりませぬか。
いそ　ほんに、さうしようわいな。
義平　エヽ、高い物が居をらいで
ト矢張り莨をのんで居る。お磯、お仲、友七、楊枝をあれこれと取る。この時、佐賀右衞門、お磯の手をヂツと捕へる。皆々思ひ入れ。
いそ　エヽモ、氣味の悪い。
トもぎ離さうとする。佐賀右衞門笠を取つて
佐賀　お磯、どうぢや。久しいな。（ト思ひ入れ）。
いそ　ヤヽ、お前は
一同　大鳥樣。（ト義平次思ひ入れ）。
佐賀　おぬしがつれない心意氣を、どうぞ〳〵と通ひ詰め、とう〳〵邸を梵天國。尾羽打枯した形を見

て、おぬしは心で笑ふであらうな。

いそ　サア。……なんの、どうして

佐賀　笑止と思はゞ、ちよつとなりとも。（ト引寄せる。傳八引分ける）。

傳八　ドツコイ〳〵。……この客人の見る前で、そんなかすりは奈良晒し。さりとは地太な御浪人。こんな所に居ようより、青柳へでも義平次さん、おみよ坊も、サア一緒に。

義平　イヤ、おれは今、あとから

なか　そんなら皆さん。（ト佐賀右衛門、お磯へ思ひ入れ。）

みよ　モシ

一同　サア、お出でなさいまし。

ト辻打ちになり、傳八、お磯の手を引き、お仲、友七、おみよも一緒に、下座へ入る。佐賀右衛門すぐに行かうとする。

義平　オツト、佐賀右衛門様。用があります。

佐賀　義平次、身共へ用とは。

義平　コレ、わしへ沙汰なしに、よう店越しをさしつたな。

佐賀　ムウ。轉宅いたせば何とする。

義平　ハテ、浪人さしつたその砌り、日上げの積りで貸した十貫。

佐賀　イヤ、そりやこれまでに段々と

義平　サア、その十貫は濟んであつても、利に利が積つて八貫六百。この算用を

佐賀　すりや、十貫の利に八貫六百。

義平　その風體で錢はあるまい。逢うた所で笠といへど、そこな編笠、錢にはなるまい。それより、いつそ、着物でも

佐賀　慮外な奴の。浪人しても佐賀右衞門、さやうな筋なき金錢を

義平　イヤ、さう云や、斯うして取らにやならぬ。

ト着た物を剝がうとする。佐賀右衞門突退ける。また武者ぶりつく。此うち、輕業の鳴り物になり、向うより玉島兵太夫、老けたる拵へ、羽織、袴の形。左仲太、小紋羽織、袴股立、さんすゐなる若黨の拵へにて、刀箱を持ち、中間一人、風呂敷包みと箱提灯を疊んで擔ぎ、あとより大島團七、羽織、着流し、大小にて、娘お市が手を引き、お市、團扇を持ち出て來る。皆々すぐに舞臺へ來る。この立廻りの中へ、何心なく入る。互ひに顏見合せ

佐賀　ヤ、貴方は先生。（ト思ひ入れ）。
兵太　大鳥氏。
團七　御身は義平次。
義平　オヽ、團七樣。コレ、こなさんにも
團七　コレサ。（ト兵太夫へ遠慮の思ひ入れ）。
義平　サア、佐賀右衞門樣、きり／＼脫いで（トかゝる）。
佐賀　まだ理不盡な。

ト刀へ手を掛けるを、兵太夫押へて

兵太　エヽ、控へ召され。市中といひ、刀へ手をかけ、こりや何事を
義平　モシ、お聞きなされて下さりませ。貸した物の利をせがめば、筋無き事ぢやと踏むゆゑ、そこで
此方も身ぐるみ
佐賀　それがおのれの（トまた手をかけて思ひ入れ）。
兵太　これはしたり。人を殺めてその身が立つか。……エヽ、鎭まり召され。……して、町人、そりや
如何程の事ぢや。

義平　ハイ、八貫六百の事でござります。

兵太　ハテ、それは些細な。（ト紙入れより小粒を出し、紙に包む）左仲太、これを彼の者へ遣はせ。

ト左仲太受取り

左仲　ハツ。……コレ、小粒で五つあるぞえ。

義平　そんならこれを

佐賀　アイヤ、その金子、彼の者へは

兵太　ハテサ、身共が致す事、何で貴殿が……サヽ、町人、早く受取れ。

義平　有り難うござります。（ト金を取って）ヤレ〱、あの料簡ぢやァ踏む氣と見えた。ほんに好いお方がござつたばつかり、八貫六百拾つたやうなものだ。

左仲　コレ、拾ひ物なら身共へ半分。

兵太　何を白癡な。

ト左仲太しよげる。義平次こちらの床几へ掛ける。

佐賀　さて〱、先生と申し、團七どの、久々にて御意得ました。して、御同道にて今日は

團七　アイヤ、拙者はこの中村屋へ、書畫の會がござるゆゑ、涼みがてらに參る道、先生にお目にかゝ

つて御同道。先刻よりも御挨拶とは存じたが、何かそちらの御談じの事ゆゑ

いち　モシ、お父樣、わたしは早う輕業が見たうござりますわいな。

園七　オヽ、今に連れて行くよ。

いち　さうして、彼處にあつた硝子の簪を、買うて下さりませ。

左仲　オヽ、お孃さん、たんとねだつて買つてお貰ひ。エヽコレ、日が暮れると、夜鷹といふ、よい物が出ますけれども

兵太　又しても子供にさやうな

園兵　ハヽヽヽヽヽ。

兵太　お市は慥か七つかな。

園七　さやうでござる。イヤモウ、母親めが病死の後は、我儘育ちの氣隨者。私しの側について、せびつてばつかり居ります。

兵太　さぞ〳〵。併し女子の子は、成るたけ外へ出さぬやうに致さるゝがよい。身共が娘、今宿にあるお梶が妹、緣者の事ゆゑ三州の鄕士、駒形杢兵衛方へ、幼少より養女に遣はしたるところ、七つの年に中間の八内と申す者と、鎭守の祭禮へ參つたさうなが、道に何の仔細も無く、中間ともに歸

らぬ由。その節、杢兵衞方よりの文通。

ト此せりふの内、義平次思ひ入れ。

團七　ハテサテ、それは始めて承つた。お梶どのゝ妹御の事。して、その後も宜しき御沙汰は

兵太　サア、最早十年餘りにも相成れど、かうと申す音信の無いは、必定その中間八内めが勾引して、何處の浦へか、遊女、賣女に、賣渡したも根知れぬて。お市なぞも隨分と、貴殿の側を離さぬやうに召さるゝがよいて。

義平　さやう〳〵。イヤモ、私しも外ながら聞きますれば、お笑止な今のお話。併しその娘御は勾引しではございますまい。大方、そりやア、神隱しでございませう。そこで音も沙汰も無いのでがなございませう。イヤ、音沙汰の無いと云や、團七樣、この中から度々お宿へ

團七　アヽ、コレ〳〵。そりや身共承知致して居る。して、先生には、これから何方へ。

兵太　手前はこの度泉州公へ、御緣組みの御用掛りに附き、結納へ添へ進ぜらるゝ、濱田家の重代、千手院力王のお刀、先達て研ぎを申し附け置きしゆゑ、今日受取り、卽ちこの一の橋のお中邸、羽根倉氏へ、右の儀につき、問合せの事ござつて

ト佐賀右衞門これを聞いて

佐賀　ウム。すりや、泉州公との御縁談、この度首尾よく調ひ、御結納とな。それは重疊。イヤナニ、先生、何卒そのおめでたを幸ひ、拙者が歸參を、よしなに執成し

兵太　イヤ、そりや兵太夫が執成し致すまでもない。お上にも佐賀右衞門が、武術、力量、勝れし者と、惜ませらるゝ事なれば

佐賀　然らば拙者を、お上にも

兵太　オヽサ。酒食に殿の御用金、千兩を石なご同然。三百石を物の見事に棒に振つたは、天晴れの武術、力量者と

佐賀　兵太夫どの、すりや某を

兵太　イヤ、譏るではない、お上の御沙汰。その佐賀右衞門を、何とて身共が。……この場の事は師弟の因み、見るに忍びず、我が寸志。

佐賀　すりや、歸參の事は

兵太　不忠の大鳥、執成しならぬ。(ト佐賀右衞門ムウと立上る。團七留める)。

團七　コレサ。……先づ〳〵、先生。

兵太　イカサマ。左仲太、お刀大切に。

左仲　畏りました。
いち　お父さん。もう参りませう。
義平　アモシ、團七様。ござりますなら（ト袖を捕へる）。
團七　ハテ、これはしたり。承知と申すに。（ト振り切り）大鳥氏、その内ゆるりと。

ト矢張り佐賀右衛門、默つて思案して居る。

兵太　團七どの。
團七　サア、お出でなさりまし。

ト辻打ちになり、兵太夫、佐賀右衛門を見て思ひ入れ。團七、お市を連れ、左仲太、中間、附添ひ、下座へ入る。義平次、佐賀右衛門殘る。

義平　なんの事だ。内へ行けば、留守ばつかり。たま／＼逢へば、承知々々と、承知ごかしに、一緒にツイと。……イヤ、解らぬお人だ。

ト跡を見送つて思ひ入れ。佐賀右衛門思ひ入れ。

佐賀　兵太夫が五音では、迚も歸參の叶はぬ某。これといふのもお磯ゆゑ。思へば／＼、猶々武士の意地
義平　手に入れたうても、素寒貧。

ト これにて佐賀右衞門、義平次を見て

佐賀　義平次。われには一錢も借りはないぞ。

ト思ひ入れ。矢張り辻打ちにて、佐賀右衞門、ツイト下座へ入る。

義平　ハヽヽ。餘ッ程腹を立てたと見える。ほんに、腹を立てたと云や、おれが三河で勾引した、主人駒形杢兵衞樣の、あの娘のお辰めは、そんなら今の兵太夫とやらが、實の娘であつたかえ。おれを中間八内と、知らねばこそ濟んだものゝ、知つたら娘のお辰めも、……こりや何でも早う德兵衞めが方へくれて、……ムウ。

ト又辻打ちになり、下座よりおみよ出て來て

みよ　モシ〱、義平次さん。傳八さんが青柳に待つてゞござります。サア、早うお出でなさんせいなア。

義平　オイ〱、そんならあの番頭めが、口ふさげに青柳で、……よいワ。思ひ入れ、彼奴を煽てかけて、旨い物をどんと奢らせて

みよ　モシ、ちやつとお出でなさんせいな。

義平　オヽサ。……ドレ、二三杯やつて來ようか。

ト辻打ちになり、下座へ入る。おみよ殘る。すぐに向うより若黨彌市、一本差し、小者の形にて、甲斐絹の帛紗包みを持ち、足早に出て來る。

彌市 それ〳〵。わしは大丸へ御用があつて廻つたゆゑ、どうかと思つて。モシ、それぢやァお施餓鬼も

みよ 今最中でござりまする。

ト此うち、辻打ちにて、下座よりお磯、お仲、出て來て

みよ そりや大方、お脊のスラリとしたお女中樣で

彌市 コレ〳〵、女中。もう濱田のお邸から、御參詣か。知らつしやらぬか。

いそ おみよさん。もう傳八さんが強ひつけて困つた所へ、あの義平次さんとやらが見えさんしたゆゑ

なか 二人連れで、そつと拔けて來たわいなァ。

彌市 コレ〳〵。さう云ふのは德兵衞どのゝ

なか ほんに、お前は彌市さん。一昨日お前のお知らせゆゑ

彌市 エヽ、そんなら御勘氣の德兵衞どのゆゑ、琴浦樣に直附ではと、そこであの妹御を

なか サァわたしが名代に、奧樣へお目にかゝつて、ようお詫びをしてくれと

彌市 いかさま、却つて其方が

いそ　ほんに、又あの三吉さんも

みえ　アヽモシ、お前も三吉さんの事ばかり。

いそ　サア、つい氣になつてならぬゆゑ。

なか　彌市さん。どうぞ奥樣へよいやうに。

彌市　ハテ、わしに如才があるものか。マア、何しろ回向院へ、一緒にござつて、よい折を見合せ

なか　そんなら、お前と一緒に行つても

彌市　よしサ。只參詣の振りをして

なか　よい間を見合せ、お詫びのお願ひ。

いそ　此方もよい間に

みよ　コレイナア。（ト思ひ入れ。彌市お磯を見て）

彌市　サア、お仲どの、一緒にござい。

ト辻打ちになり、彌市、お仲、下座へ入る。お磯、おみよ、床几へかけると、引違へて、下座より佐賀右衞門出て來る。お磯を見て

佐賀　お磯、こゝにか。サア、佐賀右衞門と

ト手を取る。お磯思ひ入れ。おみよ隔てゝ

みよ　アモシ。こりやお磯さんを

佐賀　彼れには身共、知行まで擲つて斯かる身の上。今日逢つたこそ幸ひと、すぐにこれより

いそ　サア、モウ、其やうにまで思うてのお志し、嬉しい事は山々なれども、

佐賀　それに兎や角申すのは、今更心に任せては、勤めの意氣地が立たぬといふのか。

いそ　イエ、さうではなけれど

佐賀　そんなら身共と、共々に

 トおみよを突退け、お磯を無理に引立てようとする。此うち、始終辻打ちにて、向うより釣舟の三吉、浴衣、下駄がけにて出て來る。これを見て、ツカ〳〵と舞臺へ來り、佐賀右衞門が手をもぎ離し

三吉　御浪人樣、マア〳〵お待ちなされまし。

いそ　(見て)オヽ、三吉さん。

佐賀　こりやア常々見かける若い者。何ゆゑ身共を

三吉　何ゆゑでもござりませんが、マアこなさんが何ゆゑに、この女をば、手籠めには

佐賀　身共は彼れゆゑ身上を、打果たしたその代り、これから連れ行き、妻に致すワ。

三吉　大方そんな理窟であらうと
佐賀　どう致した。
三吉　たとへ、知行を百萬石、この女中へ入れさつしやらうが、その金は皆親方の揚げ代、合點づくで持運び、今更それが惜しいといつて、勤めの女を斷りなしに、連れてござるは御浪人様、ちとこなさん、横ぢやァないかえ。
佐賀　成る程。一通りの理窟は聞えてあれど、身共もお磯を手に入れねば、斯くまでなつた刀の手前、朋輩への聞えもあれば
三吉　いかさま。そんな事もござりませうが、それがさうとてこの儘に、お磯を連れてござつたら、猶この上にお侍ひの、立たないやうな事が出來たら
佐賀　ムウ。……して、どうしたら、立つやうな
三吉　ハテ、高が賣り物。立て金をして連れて行きなさい。
佐賀　ヤ。
いそ　アモシ。わたしや　（ト思ひ入れ。）
三吉　コレサ。……御浪人さん、勤めの女は金次第。

佐賀　そりやア身共も承知ながら
三吉　出來ずば、御縁もこれぎりで、仕樣がなしサ。
佐賀　イヽヤ、身共が立て金する。
磯み　アノ、お前さんが
佐賀　明日ともいはず、今宵の内。（ト思ひ入れあつて）お磯、その時違變は云はさぬぞ。三吉とやら、挨拶過分な

ト輕業の鳴り物になり、佐賀右衞門、思ひ入れあつて向うへ入る。

いえ　三吉さん。お前もマアそんな事を
三吉　ハテ、よしサ。口ぢやア立派に云つても、二朱の工面も出來ない浪人。ナニ氣遣ひがあるものだ。
みよ　それでもひよつと、どういふ事で
いそ　それ〳〵。もしも立て金した時は
三吉　よいわな。その時は又その時。
みよ　モシお磯さん、三吉さんが、その時には又その時と云はしやんすは、よい極め所でござんすぞえ。
三吉　どうしたと。

みよ　わたしや水を汲んで來るうち、そこの所をとつくりと(ト思ひ入れにて手桶を下げ)三吉さん、店を
ちよつとお賴みぢやぞえ。

ト輕業の鳴り物にて、おみよ下座へ入る。

三吉　オイ〳〵。おらアさうしちやア居られないよ。(ト立上がる)。
いそ　アモシ。……マア、佐賀右衞門がさうした折は、どうせうぞいな。
三吉　どうといつて、おらがどうして。
いそ　(思ひ入れあつて)もしさうなつたら、連れて逃げて下さんすかえ。
三吉　馬鹿を云ひねえ。そんな事が
いそ　それでもお前、その時はと
三吉　アノそれを、とつこに取つてか。
いそ　それぢやによつて、お前何でも
三吉　そんならマア、合點だよ。
いそ　お前、アノ、屹度ぢやぞえ。(ト寄添ふ)。
三吉　コレサ、何をする。(ト突き退ける。この時下座にて)

傳八　お磯坊や〳〵。

三吉　アレ〳〵、誰か

いそ　何のあんな奴に構ふ事が

ト又寄らうとする。三吉逃げる。お磯追はへる。始終、このうち輕業の鳴り物にて、下座より傳八、玉蜀黍を持ち、呼びながら出て來る。三吉、お磯を突退け、摺れ違つて下座へ入る。お磯、傳八を捕へ、寄添つて

や、傳八さんかいなア。

傳八　コレ、お磯坊、遠慮には及ばぬ〳〵。（ト思ひ入れ）。

ト肝を潰し、飛退かうとするを捕へて

いそ　エヽモウ、ずんと

傳八　なに恥かしい事があらう。つひに無いおぬしの仕掛け。さてはこの傳八が心底を見屆けてか。有り難い有り難い。コレ、定めておぬしが好きと思うて、燒立ての玉蜀黍、眞實者であらうがの。

いそ　なんのわたしや、そんな事より（ト突退けて行かうとする）。

傳八　コレ、見えばらずと、マア〳〵こゝへ。

ト捕へようとする。矢張り輕業の鳴り物にて、下座より左仲太、うろ〳〵出てくるを、お磯と心得捕へる。お磯は搆はず下座へ入る。

マア〳〵、それを食べながら、わしが云ふ事聞いてたも。

ト無理に左仲太を床几へかけさせる。左仲太は我が事と心得、玉蜀黍を取つて食ふ。傳八知らずに手を捕へて

コレマア、凡そ質屋の番頭の、人相の善いはないものぢやが、取分けてこの傳八、質置き奴等が名を云はずに、備中屋のいゝ、しよ人〳〵と、名を取つたおれなれど、フトおぬしに引ッかゝり、帳面は亂騷ぎ。この店卸しの勘定には、首でも縊らにや成らぬ羽目。サヽ、そこでおぬしと此やうに、手を引合うて心中と、出かければ本望ながら、それは其方が否であらうと思ふから、迚もの引負ひ次手、親方の金を盗んでおぬしを請出し、こつそりと、どんな暮らしをしてなりと、二人樂しむおれが料簡。マアこの思案に相談きめて、夫婦の固めに、こゝでしつぽり

ト抱きつかうとして、左仲太と心づき、惘りする。

左仲　さて、玉蜀黍といふ奴は、旨い奴ナ。

傳八　そんならお磯と取違へて。……エヽ、いま〳〵しい。（ト踏みたふす）。

左仲　ヤイ〳〵、素町人め。イヤ、おのれは〳〵。無性矢鱈に、これを食べろ〳〵と、玉蜀黍を差附けて、何か解らぬ獨り言。擧句の果には身共が口まで、……その上、土足に掛けたぞよ。推參千萬。それへ直れ。うぬ、眞二つに致してくれう。

ト刀へ手を掛けて思ひ入れ。

傳八　アヽ、モシ〳〵。それは私しが無調法やら、腹立ちに、とんだ慮外を。……モシ〳〵、どうぞお前のお情けに。

左仲　（膽をつぶして）ナニ、身が情けに預りたい。おのれ、侍ひを念者にせうとか。イヤ、憎い奴の。

傳八　イエ〳〵、さうではござりませぬ。私しが慮外のお詫びを

ト平謝まりに詫び言して居る。左仲太力身返つて思ひ入れ。此うち、辻打ちになり、下座より團七出て來り、傳八を見て

團七　傳八ではないか。

傳八　團七樣かえ。

左仲　サア、それへ出い〳〵。（トきつぱ廻して思ひ入れ）。

團七　これは兵太夫どのゝ御家來。何を其やうに

左仲　イヤ、あの町人めが慮外者ゆゑ

團七　それは不屆き……傳八、おぬしは何を致した。

傳八　イエモウ、お話にもならぬ譯。モシ、團七樣、そこへよろしう

團七　コレ〳〵、左仲太、何か仔細は知らぬが、この町人は身共存じた者ぢや程に、料簡して遣つてくりやれ、遣つてくりやれ。

左仲　へイ、左樣なら、あなた御存じの……エヽ、コレ、その分にならぬ奴ながら、團七樣のお詫びゆゑ料簡致すぞ。命冥加な（ト云ひながら、刀を納めようとして、棘の立ちし思ひ入れ）。アイタヽヽヽ。

團七　如何いたした。

左仲　刀の身にて思はず棘を

傳八　ハヽア、そんなら刀は

左仲　（思ひ出して）オヽ、その竹町へ御用があつた。斯うしては居られない。

ト辻打ちになり、左仲太向うへ走り入る。

團七　アノ、白癡めが、何をマア

傳八　イヤ、此方もたはけな目にあつたぞ。……時に、申し、團七樣、先達て入れ替への不足と、時貸

しの一兩、帳面がむづかしいゆゑ、私しが埋めて置きましたが、ちつと私しも、詰らぬ事で、身を隱さねばなりませぬ。それに就いては、右の金子を

團七　ナニ、身を隱す。そりやァ氣の毒な。どうぞ工面して遣りたいものだが。……コレ〳〵、なんと內證で、質を取つてはくれまいか。

傳八　お前さんもマァ、明日にも駈落ちをする體で、內證質を

團七　サヽ、そこだて。質屋の事だから、道具の方は明るからう。おれが知つた者が、浮牡丹の香爐といふ物を質に置きたがるが、……おぬしはそこに幾らある。

傳八　金かえ。三兩持つて居ります。

團七　よし〳〵。今にも其奴がその香爐を持つて來たら、三十兩とも極めて置いて、金は內へ歸つてからと、その三兩で香爐を取るワ。ウンと云はツし。さうして後で香爐をおれに渡しやァ、百兩ばつたりに賣つてしまふワ。

傳八　そんな金になるものかえ。

團七　なる段ぢやァ無い。さうしてその百兩は、おぬしとおれが二つ割に。ソレ、その金を路用にしててめえは駈落ちしてしまふワ。おれの所へ置き主めが、後金を取りに來るワ。聞きやれ、傳八め

が浮牡丹の香爐を持つて駈落ちしたと、ちや〳〵むちやにしてしまふワ。この手段はどうだ。

傳八 モシ　そいつは奇妙だね。

園七 これまで口說を聞いてもらつた、こりやァおぬしへ恩返しだ。

傳八 ようござります。そんならこの三兩で

園七 今にも香爐を持つて來たなら

傳八 首尾よくやつて、後で香爐を

園七 おれに渡しやァ、百兩金だワ。

傳八 面白いね。

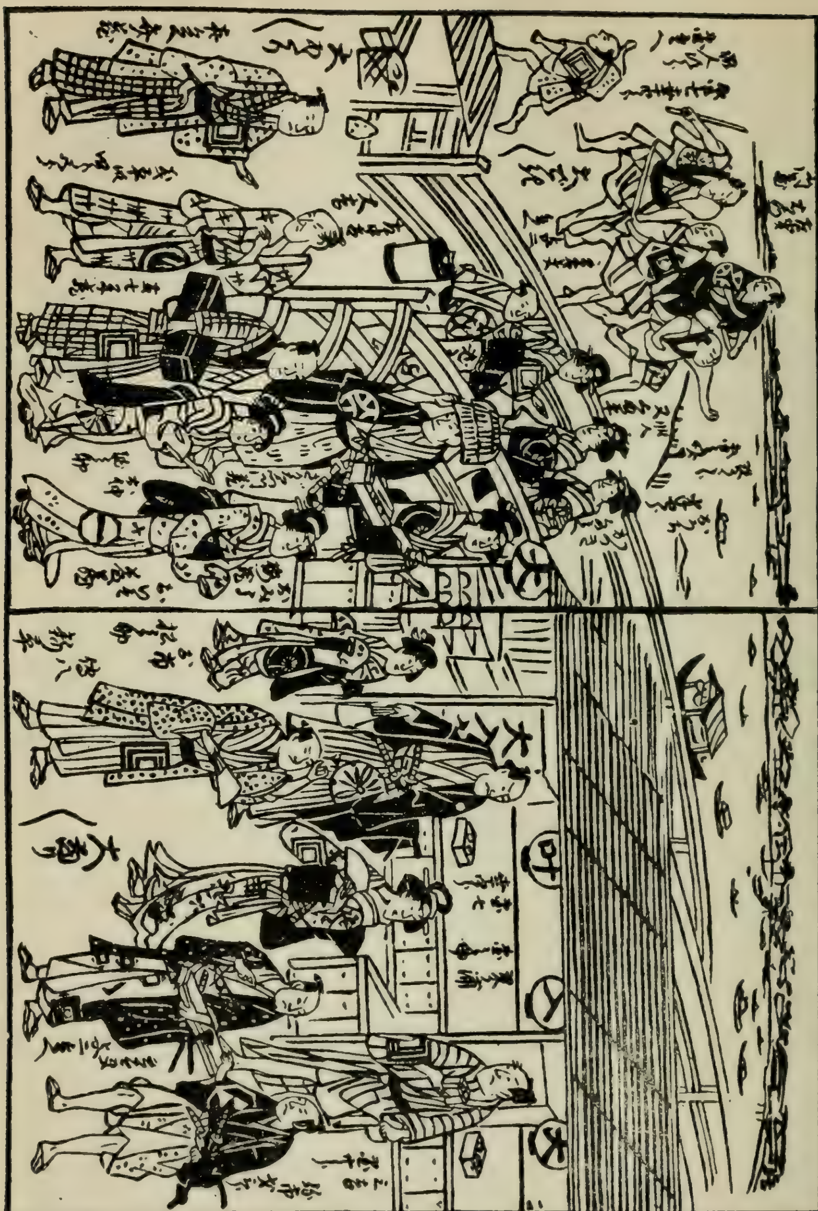
三吉 オイ〳〵。今すぐに行つて來るよ。

トこの聲を聞き、園七、來た〳〵といふ思ひ入れにて、兩人何氣なき體にて、床几に掛け、莨をのんでゐると、又辻打ちになり、下座より三吉、つか〳〵と出て來る。

オヽ、園七さん、お前さんを先刻から

園七 さうであらう〳〵。おれも貴樣を尋ねて居たよ。

三吉 時に、モシ、早速ながら、今朝お頼み申した事を



團七　サア、おれもその事で、方々と歩いたが、なんといつても大金な物ゆゑ、早速には賣れ口が。そこでこれは心やすい質屋の番頭。道で逢つたを幸ひに、不呑込みなを無理に頼んで、同道したが、質でもいゝワ。マアその代物を

三吉　成る程。賣つた程の事はなくとも、早速の事に行かにやア、どうするもので……そこへ見せておくんなさりまし。

ト懐中より箱入りの香爐を出して、團七に渡す。

團七　傳八どの。これが彼のお話し申した浮牡丹と申す香爐。性來は身が請合ひ。どうぞ目一杯頼みます。

ト傳八に渡す。傳八、よく〳〵見て

傳八　いかさま。見ましたところが、結構さうな香爐、併しどうも斯樣な物はと、大島樣へお斷りも申しましたが、折角のお頼み、三十兩でお間に合ひまする事なれば（ト香爐を團七に渡す）。

團七　三公。聞く通りだが、どうする。

三吉　どうといつて、持つて居た所が詰りやせん。三十兩でもようござえす。

團七　さうさな。香爐であつては遣はれず。そんならどうぞ傳八どの。

傳八　御承知なれば、斷うなされて下さりまし。途中の事ゆゑ、こゝに金子三兩ござります。後の金は、

内へ歸りましてから、團七樣まで（ト紙入れより三兩出す）。
團七　そりやよいのサ。ナウ、三公。
三吉　アイ、よくもないが、さういふ事なら（ト思ひ入れ）。
團七　ソレ、三兩よ。（ト渡す）。
傳八　しつかりとお預り申しました。
三吉　こりやァお世話樣でござえます。（ト金を懷中する）。
團七　なんの、心安い仲で
三吉　モシ、團七樣、こいつで今から
團七　イヤ、有り難いが、おらァまだ用が
傳八　ほんに、私しも來た次手に、お開帳へ廻つて
團七　そんなら三吉。
三吉　團七樣。
團七　傳八。そこまで一緒に行かうか。
ト辻打ちにより、團七、傳八、顏見合せ、思ひ入れあつて下座へ入る。

三吉　昨夜の代物、どうやら斯うやら外の物は方づいても、手重いだけにあの香爐、はき場に困つたを、三十兩とは萬更でも……マア、何しろ、後金を取つたら、あいつを斯うして。よし〳〵。

ト思ひ入れ。始終辻打ちにて、下座より番頭喜兵衞出で來り

喜兵　清七樣かえ。（ト三吉、喜兵衞を見て思ひ入れ）。

三吉　喜兵衞か。どこへ行つたのだ。其うち逢はう。（ト行かうとする）。

喜兵　アモシ〳〵、清七樣、……ではござりませぬ。今では釣舟の三吉樣。お前樣を今朝から尋ねて

三吉　ナニ、今朝からおれを……勘當された者を、なぜ又尋ねて。

喜兵　サア、昨夜の事で暗いうちから

三吉　ムウ、そりやア誰ぞ、どうかしたか。（ト空うそぶく）。

喜兵　モシ、お隱しなされまするな。駒寄せの際に人丸印しのこの雪駄。（ト羽織の下より幕明きに犬に打つけし三吉の雪駄を出す。三吉ギヨツとした思ひ入れ）。ひよんな氣におなりなされましたな。……といつて返らぬ事ながら、あの浮牡丹の香爐は、お出入りのお邸から、預りの大切の品。もし、お邸へ聞えると、道具屋の家は退轉。お袋樣のお身の上にも

三吉　なんだ。あの香爐は、お邸ので、お袋の身にもかゝるとか。（ト思ひ入れ。）

喜兵　サア、それだによつて、この事が、世間へパツとせぬうちにと、家の印しの山形に、丸印しのあるこの雪駄は、若旦那のと云はぬ先き、誰にも見せず、お前の在所、お尋ね申すも雪駄を渡して香爐の行くへを聞かうため。モシ、浮牡丹の香爐はどうなされました。親御様のお身の上でござりますぞえ。（ト此うち、三吉、おろ〳〵して思ひ入れ）。

三吉　そんな事とはおらァ知らず、見世の道具と心得て、あの浮牡丹もたつた今

喜兵　人手に渡しておしまひか。……オヽ。（ト思ひ入れ）。

三吉　コレサ〳〵、何もそんなに氣遣ひするな。賣り渡したでもない代物。取返してやらうわサ。

喜兵　それはまだしも。……そりやアノ、ほんとでござりますかえ。

三吉　知れた事よ。なんぼ勘當されたといつて、親の首へ繩の附くを、知らない顏で居られるものぢやアない。屹度おぬしが、……マア、なんにしろ、あの香爐を

ト云ひながら、下駄を脱ぎ捨て、今の雪駄を穿く。

喜兵　左樣々々。ちつとも早く、若旦那。

三吉　氣遣ひするな。そんなら喜兵衛。

喜兵　吉左右を待つて居ります。

三吉　團七どのに逢つて質屋を……さうだ。

　ト輕業の烈しき鳴り物になり、三吉ツイと下座へ、喜兵衞は向うへ急ぎ入ると、輕業の合ひ方になり、奥女中琴浦先きに供の中間、彌市附いて出てくる。この後よりお仲出る。彌市思ひ入れにて、お仲を下の方へ控へさせる。

彌市　イヤ申し、琴浦樣、長い施餓鬼で、さぞ御退屈でござりませう。……イヤ、最前お兄御玉島兵太夫樣にも、この一の橋のお中屋敷へお出でなされましたが、なぜ、お歸りをお待ちなされて、御同道なされませぬぞ。

琴浦　サア、戻りは一つお邸なれど、お表、奥と隔つる中、同道せぬも武士の作法。

彌市　流石は物堅い兵太夫樣のお妹御。其あなたへ好い折柄（ト云つてお仲を連れて來る。楊弓の音）。お願ひでござりまする

琴浦　見れば可愛らしいその娘御。お館へ御奉公願ひで

彌市　イエ、この娘のお願ひは、お連合ひの助松樣に、御奉公いたされた、德兵衞どのゝ勘氣のお詫び。

琴浦　すりや、アノ、これが

彌市　妹のお仲。御家中大鳥佐賀右衞門樣の御家來と喧嘩の上、相手を殺めたその科にて、捨置かれず

と主計樣の、御勘氣受けて仕方なく、まだその砌りは幼少の、これなる妹を召連れて、立退きました御家來德兵衞。今深川に相應の、身過ぎは致せど、御恩の古主。

なか　どうぞお勘氣赦されたいと、今日兩國へのお出でを聞き、私しが直々に、願ふは不躾、其方が代りに奧樣へと

彌市　差附け業な事ながら、これへ同道いたしたも、御不興受けし德兵衞どのゝ

なか　身の誤りを、どうぞあなたが

彌市　お果てなされし助松樣に、何卒代つてお赦しあるやう

なか　一重に奧樣

彌市　彌市も共々

二人　お願ひ申し上げまする。

琴浦　天を忘れず、今の身にも、主の不興を赦されたいとは、殊勝らしいあの德兵衞。殊に、常から忠義な者。他家の家來に手を負はせし、それゆゑの勘當なれば、こちから赦してやりたいなれど、今御浪々の大鳥樣、屋敷へ御歸參ない内は、屆けもせいで此方の、家來ぢやとてその儘に、勘氣はどうも赦されぬ。

なか　すりや、どのやうにお詫び申しても

彌市　お赦しは叶ひませせぬとな。

琴浦　聞分けないと、思うてたもるな。（ト思ひ入れ。）

なか　ほんに、今日を、兄様の、指を折つて待つてゞあつたに、お詫びが濟まぬと云うたなら

彌市　併し、琴浦樣の仰しやる事も、聞えてあれば

琴浦　大鳥樣さへ御歸參あれば、願やらずともその時は

なか　お赦しなされて下さりまするか。

琴浦　そりや知れた事。この通りを

彌市　德兵衞どのへも、よう傳へて

琴浦　サア、そんなら邸へ

彌市　琴浦樣。

琴浦　お仲。その內。

ト思ひ入れ。大阪離れての鳴り物になり、琴浦先きに彌市、中間附いて向うへ入る。お仲あと見送つてゐると、下座にて

團七　コレサ、傳八、おれが留めるに待たないか。

みな　マア〳〵、お靜かになされまし〳〵。

ト辻打ちになり、下座よりおみよ、友七、傳八を留めながら、お磯あとより、友七、お市の手を引いて出て來る。

傳八　イヤ〳〵、留めるな〳〵。モシ、大島樣、先刻お前にお話し申した仕儀は、何故でござります。皆此お磯ゆゑでござります。それにマア、わしを袖にして、腹が立つて〳〵。それだによつて

トお磯を打ちにかゝる。皆々留めて

みよ　アヽ、モシ〳〵。なんのお磯さんがお前さんを

傳八　イヤ〳〵、袖にして先刻も先刻と

友七　ハテマア、ようごぜえます。

なか　お磯さん。何をマア傳八さんは

いそ　オヽ、お仲さん、こゝにかいなア。なんぢや知らぬが、一人して腹立てゝ、モウ〳〵腹を立つとも、叺かすとも、儘にして置いたがようござんす。

團七　これはしたり、お磯坊。そんな事があるものか。どうで野暮は知れて居るワ。まるめりやァ好き

になるぢやァないか。

いそ　それでもあんまり

團七　ハテ、そこが苦界だ。附合つてやりやれ〳〵。

いち　父さん。あんまり側へ寄らしやんすな。怖いわいなア。

傳八　イヤ、もう堪忍袋の緒が切れた。留めるな〳〵。
　ト矢張り立騒ぐ。團七、お磯へ思ひ入れ。これにてお磯側へ來り

いそ　モシ、傳八さん。わたしが惡くばあやまらう程に、もう料簡して、

なか　それ〳〵。機嫌を直さんせいなア。

傳八　なんだ。おれに機嫌を直せ。

みよ　アレ、お磯さんがあやまつて居るわいなア。

友七　そこをいつまでも腹を立てゝは、傳八さんでもござりませぬぞえ。

傳八　サア、なにも腹を立つといふでもないが、あんまりだによつて

いそ　エヽモウ、なんの事ぢやぞいなア。(ト傳八にもたれかゝる。)お前の心を引いて見ようと思うてした
事を、それをマア、なんのかのと、其やうに腹を立つてからに

トこれにて傳八グニヤリとなり

傳八 ナニサ、腹を立てはしないがな、先刻おぬしがをかしい素振り。そこでマア、今のやうに。てめえ又腹が立つたら、堪忍さつし。

團七 イヤ、成る程、質置きには強いが、女には弱い番頭めだ。

友七 サア、モシ、これから仲直りに、船でお出でなされませぬか。

みよ それがよからうわいな。わたしもそこまでお送り申しませう。

傳八 インニヤ、おらア今夜は

いそ イエ〳〵、どんな用があらうとも、連れてゆかねばならぬわいなア。

傳八 又そんな無理を云ふよ。

なか お磯さん。なんでもお連れ申しなさんせ。

いち お父さん、わたしもお船で行きたいわいな。

團七 馬鹿を云ふな。われとおれは涼みながらぶら〳〵と

いち イエ〳〵、わたしやあの伯父さんと一緒に行つて、女郎が買うて見たうござんす。お前も一緒にお出でいなア。

團七　ねだる事に事をかいて、とんだ事を云やァがる。
傳八　こりや面白い。一緒々々。ソレ、友七、お連れ申せ〳〵。
友七　それが宜しうござりませう。サア、お出でなさい。(ト手を取る。)
團七　コレサ、あやまるワ。どうしてこんな
皆々　マア、船までお出でなされませいなア。
ト此うち、下座より義平次出て來て
義平　イヤ、團七樣、お前はまだ遣られませぬぞ。
團七　義平次とのか。おれも又こなたに逢ひたくつて。
義平　そりや、アノ、ほんにか。
傳八　サア〳〵、三河屋先生も、引摺れ〳〵。
團七　コレ〳〵、おらアちつとこの人に用があるから、皆を連れて、マア先きへ、行つてくりやれ〳〵。
傳八　といつて逃げようといふ。斯うしよう〳〵。人質にお市さんを先きへ連れて行かう。
ト お市を捕へる。
團七　アヽ、コレ、それぢやア

皆々　こりや好いわいなア

いち　早うお出でえ。

傳八　ほんに先刻の物は、慥にお前へ

團七　オヽサ、受取つたよ。

傳八　サア、行きやせう。

ト辻打ちになり、皆々わや〳〵云うて入る。團七、義平次殘る。

義平　あの番頭め。本氣とは見えないわえ。

團七　イヤモウ、どうで受け人の厄介ものよ。

義平　時に、先刻承知と云はしつた、先達ての五十兩は

團七　オツト、先づ、そいつは後へ廻して、おれが逢ひたかつたは貴樣の娘のお辰。今までおれも座敷を買つて、度々酒を飲み合つたが、知つての通り、おらア獨り身、なんと座敷を退かせて、女房にはくれまいか。(ト此うち、義平次取合はぬ思ひ入れ。)コレサ、なにも顏を横にする事はない。藝者盛りのあのお辰。おれも只は貰ふまい。帶代がはりに、これで貰はう。

ト懷より最前の香爐を出すとて、手紙も一緒に取落す。義平次、香爐を見て

義平　そりやァ何だえ。

園七　サア、こりやァ浮牡丹の香爐といつて、賣れば百兩からになる代物。これをこなたに

ト義平次取つて、改め見て

義平　そんな値の物かは知らぬが、わしらが身では猫に小判。………併し、こりやァおれが預つて置きませう。（ト懐へ入れる。）

園七　そんならそれを帶代に。

義平　イヤ、お辰は、もう、座敷を退かせて、近々に、大和屋の德兵衞が女房に遣る約束。

園七　ムウ。そんなら、もう、あのお辰は

義平　相談もちやんと極めて、深川へ遣るばかり。

園七　コレ、それに今の香爐は

義平　サア、ありやァ貸した五十兩の、金の抵當にやァ高いゆゑ、二十兩の分にして、これから殘りの三十兩さへ、受ければよいといふもの。

園七　エヽ。（ト思ひ入れ。）

義平　あんまりわしに、足手を運ばせて下さるな。

ト下座の方へ行かうとする。團七驚き、引止め

團七　ア丶コレ・義平次。

義平　團七さん。この頃に行きますぞえ。

ト此うち、始終辻打ちにて、義平次下座へ入る。團七見送り

團七　コレヤイ〳〵。……イヤ、とつけも無い目に逢ふものだ。なんでもお辰を女房にと、思ひの外に德兵衛めに、さうして香爐は金の抵當に、取られてしまつて元の杢阿彌。こいつはつまらない話になつた。……オ丶それ〳〵、あのお辰に生き寫しの、兵太夫が娘のお梶、せめての事に、あいつをこれから

ト思ひ入れ。この時、下座にて

兵太　コリヤ〳〵、お刀大切に持參せい。

ト蛙啼きの輕業の鳴り物になり、兵太夫先きに中間、最前の刀箱と箱提灯を擔ぎ出て來る。

團七　ホウ、これは先生。

兵太　オ丶、大島氏。まだ歸宅召されなんだか。

團七　さやうでござる。娘が何のかのと

兵太　定めし〳〵。身共は用事も相濟めば、もう歸宅致す。下谷のお宅へ歸らるゝには、吾妻橋までちやうどお道づれ。サア、御一緒に。

團七　成る程〳〵。石濱のお邸へは、あれまではよいお道連れながら、またお市めが、これの女子と、輕業へ參つて戻りませぬゆゑ

兵太　然らば身共は、お先きへ參る。明後日の稽古日には

團七　早朝より罷り出まする。

兵太　さやうならば團七どの。……供いたせ。

ト矢張り蛙啼きにて、兵太夫、中間を連れ、向うへ入る。

團七　兵太夫が歸宅の道は、石原通りを吾妻橋（トあたりを見て）楊枝も矢張りその儘に。……エヽ、コレ、何處へ行つた事だ知らぬ。

ト床几にかける。輕業の鳴り物、時の鐘にて、下座より佐賀右衞門、急ぎ足にて出て來る。團七見て

大鳥氏か。

佐賀　團七どの。ちつと心も急きますれば（ト直ぐに行かうとするを）

團七　マヽ、お待ちなさい。見ますれば、お顏色と申し、何か樣子の

佐賀　イヤ、申したとても詮ない事。離し召されい。（ト又行かうとする。）

團七　サヽ、そこが射術の弟子朋輩。仔細をお話しなされたら、及ばずながら又思案を

　　トこれにて佐賀右衞門床几へかけ

佐賀　團七どの。お聞き及びなされた通り、お磯と申す賣女めに、振られながらも通ひつめ、只今の身になつてござれば、せめて彼奴を手に入れねばと、最前これにて逢ひしを幸ひ、兎や角申し、今宵の內、立て金致す約束にて（ト團七思ひ入れある。）

團七　待たつしやい。その女めは、かねぐ深く、申しかはした質屋の番頭、今宵の內に身請け致すと

佐賀　ナニ、餘の者が今宵の內に

團七　しかも拙者が懇意の者。

佐賀　サア、身共もせめて今宵の內、手附けなりともと、身寄りへ便り、合力賴めど取上げくれねば、いつその事にその女を、手にかけてと思案を定め、それゆゑに（ト振り切るを又抑へて）

團七　尤もぐ。併し、それでも侍ひの、意地は立つても、貴殿が一旦、思ひをかけた存念が立つまい。身請けして自由にさつしやい。

佐賀　すりや、貴殿がその金を

團七　イヤ、その金はあの千壽院の、……コレ。(ト囁く。)

佐賀　いかさま。玉島兵太夫を(ト思ひ入れ。)

團七　コレサ。

ト此うち、下座より非人の次郎、又、の兩人、のそ〳〵と出で來り

二人　へイ、旦那、一文。(ト團七、兩人を見て)

團七　幸ひな非人ども。一文錢より金儲け、ぬしと一緒に

二人　そりやア錢にさへなる事なら

佐賀　骨は盜まぬ身共が加勢。

二人　呑み込みました。(ト菰をぬぐ。)

團七　仕損じないやう

佐賀　氣遣ひ召さるな。して玉島は

團七　イヤ、たつた今、石原通りを

佐賀　すりや、この道を。……さうだ。

ト輕業の烈しき鳴り物になり、佐賀右衞門目釘をしめし、一散に、次郎と又は捨ぜりふにて、續いて

向うへ入る。團七これを見送り思ひ入れ。ゴーンと暮六つの鐘鳴る。

團七　どうやら首尾よく……ドレ、そろ〳〵後から行つて見ようか。

ト羽織を疊んで懐へ入れる。此うち、始終時の鐘、かすめたる輕業の鳴り物。下座より三吉、團七を尋ねる心にて出る。この跡について義平次も出てくる。三吉、團七を透し見て

三吉　オヽ、モシ、團七樣。あの浮牡丹の香爐を

ト團七これを聞かぬ振にて向うへ行かうとする。三吉、モシと捕へる。義平次、三吉の聲を聞き

義平　さてこそ釣舟　香爐の泥坊。

ト捕へる。三吉思ひ入れ。團七も三吉を振切る。三吉、義平次タヂ〳〵となつて、義平次を突離す。此うち、團七花道へ來り、尻をからげる。三吉、頬冠りをする。双方、時の鐘の送りにて團七、一散に向うへ入る。舞臺はちくらの立廻り宜しくあつて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、一面の黒塀。此うちより樹木生ひ茂り、たつぷりと吊り枝。上の方、橋のたもと、土手板に川葭。よき所に浪板。すべて石原の體。こゝに兵太夫抜刀にて、片手に白鞘を持ち、非人の又を引しき、佐賀右衛門、この白鞘へ手を掛け、白刃を構へ、非人次郎、兵太夫に竹槍を附けて居る。皆々手負の見え。あたりに中間切り殺され、刀の箱、提灯なぞ取散らしてあり。ばた〳〵、稽古の笙

の音にて道具納まる。

兵太　ヤア、大切なるこのお刀、おのれにやはか、渡さうか。

佐賀　何をその手でいらざる片意地。

非人　早く息の音ぶッとめて

ト又、下より刎ね返す。兵太夫立廻り、非人兩人突いてかゝる。兵太夫拂ふ刀に、又を切り倒す。佐賀右衞門切つてかゝる。兵太夫白鞘を離さず、白刃にて受け留め、次郎窺ふ。此うち、バタ〳〵にて、向うより團七出て來て、直ぐに舞臺へ來て

團七　大鳥どのか。

佐賀　團七どの。

兵太　ナニ、團七とや。（ト我が身方と思ふ。）

團七　加勢いたすぞ。

ト云ひながら、白刃を拔き、兵太夫が白鞘を持ちし手を切り落す。兵太夫、これにてアッと倒れる。佐賀右衞門これにて我が手を負はせしと覺ゆる思ひ入れ。

佐賀　貴殿の深切　忝い。まづその刀を。

ト白鞘を取らうとするを、團七ドンと切り下ろ。すぐにぐつと止めを刺す。次郎これに驚き、ワツと下座へ遁げて入る。此うち、兵太夫よろぼひ起ろ。團七刀を引抜き、佐賀右衞門が死體にて血を拭ひ、鞘に納め、兵太夫が切り落されし白鞘を握りし腕を取上げ、白鞘をもぎ離し、思ひ入れあつて、又我が刀を引抜き、これと中身を入れ替へろ。兵太夫これを見て

兵太　心得ぬ團七。佐賀右衞門が荷擔人なし、某を殺害のみか、大鳥までも手にかけて、大切なる千壽院を、おのれが刀と入れ替へるは、扨てはおのれが私慾の爲か。但しは外に仔細があるか。サ、、それ吐かせ。ナ、なんと。

ト苦しみながら思ひ入れ。此うち、團七これに構はず、思ひ入れあつて、佐賀右衞門が死骸の片袖を引き切り、これを白刃を持つて居たる兵太夫が手にしつかり握らせ、佐賀右衞門と又が死骸を橋のなだれの川中へ打込む。入れ替へし刀を差して、白鞘を川へ投込む。これを見て兵太夫無念のこなし。

ヤア、大惡不敵のおのれが仕業。腕は片し失ふとも、この儘見遁し置くべきや。

ト云ひながら、よろ〳〵と立上り、團七に切つてかゝるを、團七居ながら兵太夫が白刃を叩き落し、その儘蹴倒し、白刃を取上げ、起上らうとするを踏みつけて

團七　どういふ理窟かおれが思案を、草葉の蔭から見やァがれ。

トぐつと止めをさす。ゴーンと時の鐘、この時向うを見て、ヤアと思ひ入れあつて、東の歩みへかゝろと、

向うより左仲太、以前の形にて、箱提灯を持ち、琴浦、守り刀を差し、兵太夫娘お梶、屋敷娘の形、お繼、腰元の拵へにて、附添ひ出で來る。矢張り時の鐘。

つぎ　お梶樣、ありやもう四つでござりまするぞえ。

かぢ　それいなう。左仲太、道違ひはせぬかいなう。

左仲　イエ〱、いつも旦那樣はこの道を

琴浦　コレ、其方は今日お供ではなかつたか。どうして先きへは

左仲　ヘイ、私しは竹町へ御用を申しつけられまして、すぐにお邸へ歸れと仰しやりましたゆゑ、何も此やうに遲い筈では

かぢ　サア、わしもさう思うたりや、頻りに胸が躍るゆゑ

琴浦　さればいの。わしも覺えぬ胸騷ぎ。心に懸つて御殿へも、まだ上らずに其方衆と

つぎ　マア〱、迚もの事に、兩國邊まで、お出でなされて御覽じませ。

琴か　さうしようわいなう。

左仲　石が高うござります。おつまづきなされますな。

ト云ひながら、皆々舞臺へ來る。團七は、此うち、東の揚幕へ入りかゝつて、フト思ひ入れあつて、

幕の間よりこれを見て、窺うて居る。左仲太、舞臺にて血に辷る。

琴浦　オヽ、どうしやつた。

左仲　どこの奴か油でもこぼしたと見えます。(ト提灯を照し、行きかゝり、兵太夫が死骸を見つけ)ヤア、ここに誰か切られて、死んで居ります〳〵。

　　　トぶる〳〵顫へる。お梶、お繼、「エヽ」と思ひ入れ。

琴浦　ドレ、その提灯。(ト左仲太が持つたる提灯を取つて、よく〳〵死骸を見て)ヤア、こりや兵太夫様ぢやわいの。(ト驚く。)

かぢ　エヽ、ナニ父さん(トその儘死骸へ寄り)オヽ、ほんに、こりや父さん。(トおろ〳〵する。)

左つ　旦那様でござります〳〵。(ト狼狽へる。)

かぢ　父さんいなア。

琴浦　兵太夫様ア。

左つ　旦那様ア。(ト皆々呼び活け)

琴浦　こりやモウ、緈はきれたか。

皆々　ハアヽ。

ト死骸に取附き、泣落す。此うち、團七そろ〳〵花道へかゝり、この時、わざと跫音けはしく駈來り

團七　そこにござるはお梶どのではござらぬか。（ト皆々思ひ入れ）。

かぢ　さう仰しやるは（ト透し見て）

左仲　團七樣ではござりませぬか。

團七　如何にも團七。只今お宅へと參りかゝり、御門で聞けば、先生には、まだお歸りないと聞き、何とやら胸騷ぎ。それゆゑにお迎へがてら。こりや其許方にもお迎へか。して、先生には、お逢ひでござるか。

左仲　サア、その旦那樣は、これに切られて

團七　ヤヽヽヽ。ドレ。（ト驚きし思ひ入れにて、死骸へ駈けより）エヽ、殘念な。エヽコレ、今一足早くんば、斯くやみ〳〵と、空しい目は見まいものを。

左仲　コレ〳〵。もう一足早くば、おれも一緒に殺されるであらう。ハテ、危ない事の。

琴浦　コレ〳〵、お梶、泣いて居る所ぢやない。何者の仕業やら、せめてマア、手掛りなりとも

團七　さやう〳〵。何ぞ敵の證據でも

トこれにてお梶、お繼も共々、そこらを尋ねる。この時、チョンと月出る。左仲太、中間の死骸を見つけ

左仲　コレ、品助めも酷たらしく
琴浦　すりや、大勢の仕業と見えた。
園七　さやう〳〵。（ト云ひながら、刀の箱を見つけ）斯様な物に姓名でも
左仲　それは、今日持參の、刀の箱。
琴浦　（これを見て）ヤア、こりや大切なお刀まで
かぢ　ナニ、お刀も
ト思ひ入れ。此うち、お繼、片袖を摑みし腕を見つけ
つぎ　コレ〳〵、こゝに旦那のお手に、何やらを
かぢ　ドレ〳〵。（ト立寄り見ようとして腕を見て）ハアヽ。（ト泣く）。
園七　御尤も〳〵。エヽ、苦々しい酷い事を。（ト袖を取つて）こりやコレ、男の片袖。御覽なされい。
ト廣げて見せる。
琴浦　ムウ。割り轡の紋所。
園七　お心當りがござりまするか。（ト皆々思ひ入れ）。
つぎ　割り轡の紋所は、どうやら見知りの

左仲　それ〳〵。浪人なさつた大鳥佐賀右衛門樣だぞえ。
琴浦　ほんに、大鳥佐賀右衛門樣。
團七　成る程、大鳥。……お梶どの、敵は知れた佐賀右衛門。（トこれにて）
かぢ　スリヤ、父さんは佐賀右衛門樣が
　　ト屹度思ひ入れ。團七思ひ入れあつて
團七　射術の恩ある玉島樣、意趣は知らねど手に掛けし、天罰知らずの佐賀右衛門、身共が爲には師匠の敵。ソレ。
　　ト蹴立つて駈出す。皆々思ひ入れ。
琴浦　團七樣。お待ちなされい。
團七　なぜ、お留めなさるゝな。
琴浦　お志しは忝けれど、人を殺めた佐賀右衛門、もうか〳〵とこゝらには
團七　そりや知れた事、雲の上まで尋ね探して
琴浦　サア、師匠の敵を討ちなされて、現在娘のこの梶は、父の敵と誰を討ちます。
團七　サア（ト思ひ入れ）。

琴浦　思し召し寄りは私し始め、梶も嘸かし喜びませうが、こゝの道理をとつくりと

園七　いかさま、そこへは（ト立戻る。此うち、お梶思ひ入れあつて）

かぢ　そんならわたしは父さんの

琴浦　相手も仕留めぬのみならず、大切なるお刀まで、紛失したる事なれば、玉島の家は、必定没收。

かぢ　エヽ。（ト思ひ入れ）。

琴浦　その兵太夫が娘なれば、家中の批判を受けうより、邸へ戻らず、こゝからすぐに、父の敵の佐賀右衛門を、討つてお刀取戻し、めでたうお上へ差上げなば

かぢ　せめてはそれが父さんへ、何よりの御追善。

琴浦　とはいへ、女子の其方一人。コレ、御奉公の身でなくば、わたしが力を添へんもの。云うて詮ない事ながら、行くへの知れぬ其方の妹、斯ういふ折に居やつたなら（ト思案の思ひ入れ。）

つぎ（思ひ入れあつて）イヤ、申し、琴浦樣、數なりませねど私しは、お梶樣にお附き申して

琴浦　イヤ／＼、なんぼ心は健氣でも、更に武術を知らぬ其方。

園七　エヽ、コレ、理の當然に支へられ、師匠の敵をおめ／＼置くかえ。

ト餘所事に我れに賴めといふ思ひ入れ。

かぢ　たとへ一人であらうとも、神々樣のお力と、憎いと思ふ一念で、討たれぬ事もござりますまい。お案じなくとも、この儘に

琴浦　オヽ、流石は兄上の胤、出來しやつた。……とはいふものゝ、若い其方を突き離しては、どうも……イヤ、申し、團七樣。兵太夫が事、深切に、思し召して下さるあなた、なんとお梶が助太刀して、首尾よう敵をお討たせなされて

團七　アヽ、イヤ〳〵、この儀は團七お斷り申す。（ト琴浦思ひ入れ）。

かぢ　ムウ。そのお心で最前は

つぎ　それ〳〵。お一人でさへ敵を討つと仰しやつたは、ありやお口先きの追從かな。

左仲　おべつかでござりまするか。（ト團七急いたる思ひ入れあつて）

團七　默れ。口先ばかりで追從輕薄いふやうな、侍ひだと身共を思ふか。慮外な奴らの。

琴浦　して、それに又團七樣、今助太刀をお斷りは

團七　思うても御覽なされい。あの美しいお梶樣に、無妻の身共助太刀を、致したところが、人はさやうは申すまい。譯有る仲ゆゑ、親の敵を、幸ひなぞと名を立てられては、折角とお梶樣の孝も立たず。拙者が心も無足といふもの。それゆゑに助太刀は

つぎ 成る程、さう仰しやれば、ナア申し

かぢ サア、それぢやによつてわたし一人を（ト琴浦思ひ入れあつて）

琴浦 團七樣。お心には染むまいけれど、なんとお梶と、夫婦になつては下さりませぬか。

かぢ エ。（ト合點の行かぬ思ひ入れ）。

團七 何と仰しやる。

琴浦 サア、他人どしなら人の口。夫婦の仲なら遠慮はあるまい。サ、どうぞさうして助太刀を

ト團七しめたといふ思ひ入れあつて

團七 ムウ。……退引ならぬ琴浦樣の、緣を結んで助太刀のお賴み。

琴浦 お梶、其方もお緣組みは

かぢ サア、敵さへ討たるゝ事なら、否とは申しませねども、どうやら、それでは

琴浦 ハテ、人の聞えも、憚りも、現在わたしが許す婚姻、何の遠慮もない事ながら、此お死骸の側で今、夫婦の固め、杯事、團七樣にも聞入れて

團七 それ程にまで、仰しやる事なら

かぢ 成る程、夫婦に

團か　なりませう。（ト思ひ入れ。琴浦も思ひ入れあつて）

琴浦　それでわたしも安堵の思ひ。そんなら早う、こゝで學びを

ト思ひ入れあつて、差して居る守り刀の拔身を帛紗に卷いて、帶へ差し、鞘を出して

あの川水を

トお繼心得、受取り、抱へ帶を解き、この鞘へ結びつけ、これにて川水を汲み上げる。左仲太、提灯を差出す。此うち、琴浦、兵太夫が腰の印籠を取り、これを一重放して杯にする。お繼、今の鞘を長柄のやうに持ち、始終、これ迄蟲の聲。

サア、お梶。其方が飲んで團七樣へ。

かぢ　ハイ。（ト誂への合ひ方になり、お梶、印籠の重ねを取上げる。お繼ついで）

琴浦　女子の一世一度ぞと、美々しう祝ふ婚禮の、その祝儀とは事變り

團七　御廚子、黑棚、飾り夜具、錦小袖の鶴と龜、壽き長き長熨斗の

ト此うち、お梶飲んで團七へ獻す。

琴浦　長い未來へ舅入り、三々九度に引きかへて、

ト團七取上げる。

團七　七々四十七七日。立つ日の今日に思はずも

かぢ　結ぶ緣は先きの世の、定まり事と云ひながら

ト此うち、お繼つぐ。團七飮んで

團七　はかない別れに祝言の、降り來つたる秋の空。

琴浦　變はる習ひの袖の露。

團七　涙の雨の水杯。

かぢ　悲しう

團七　祝うて

團かぢ　女夫の固め。（ト兩人思ひ入れ。琴浦謠ふ）。

琴浦　千秋萬歲の……父上、それを末期の水向け

ト琴浦、お梶、兩人して、今の重ねへ水を手向ける。お繼、兵太夫が死骸を起す。左仲太、遠くより提灯を出す。此うち、後ろへ次郎窺ひ出て、この時

次郎　モシ、團七樣。

ト團七、南無三と引廻して投げる。この物音に

琴か 今のは何者。（ト振向く。此うち、次郎起き上るを）

團七 正しく荷擔人。

ト拔討ちにバッサリ切倒す。左仲太驚き、ポンと後の川へはまる。お繼驚き手を離す。兵太夫倒れる。

琴か せめてはそれが

ト思ひ入れ。團七心づき、白刃を此方へ取直す。チョンと拍子木の頭。

團七 色直し。

ト血を拭ふ。此方は死骸の倒れしを見て「ハア、」と泣落す。この途端、ひやうし幕。シャギリ。

中幕

下谷入谷の場
淺草田圃の場

役名――大島團七。大和屋德兵衛。浪人、石塔半助。同、五郎。貸物屋、木片の權助。醫者、道庵。三河屋、義平次。釣舟の三吉。番頭、傳八。團七女房、お梶。德兵衛女房、お辰。團七娘、お市。下女、お縫。下部、彌市。

本舞臺、三間の間、世話屋體。上の方に反故張りの障子。柱に誂への丸括を吊手にして、古蚊帳吊りかけてあり。引戸の門口。下手に玉椿の生け垣、栗丸太の門に、大島團七と書いたる表札あり。門口に張

替への傘拵へてあり。上の方に、二枚屏風を立て、團七傘を張つてゐる。お市、下に七輪にて藥を煎じて居る。上の方に、道庵、さんすゐなる醫者にて、紙の藥袋より藥を手提みに合せて居る。五郎、石塔半助、五分月代一本差しにて、俎の上にて鰻を裂いて居る。よき所に、小さな田樂大鉢、鐵弓かけてあり。半助は鰻を掛けて煽いで居る。貸物屋、木片の權助、萌葱の風呂敷を肩にかけ、催促して居る。德利、茶碗、取散らしてある。てんつゝにて幕明く。

權助 コレサ、團七どの。この頃中から損料が豪氣にたまつたよ。今貸した蒲團の代と、アレ〳〵、あの蚊帳の損料は、今勘定さつしやい。

團七 エヽこの男は、聞分けの惡い。おらア急な仕事で手が塞がつてゐるワ。目を明いて物を云やれな。

五郎 アヽ、貸物屋の權助か。コレ、おいらは今日根岸から始めて、大音寺前の堀を浚つて、コレ、こんな大筋を四五本取つたワ。（ト手盥の中の鰻を見せる。）

半助 コレ、そこでなア、劍菱を一升引みんたんと喰はしたワ。鰻が燒けたらおぬしも一升奢らつしな

權助 おいてくんなさい。お前がたは田圃をほじくり返して、錢の出ない鰻でも取らうが、わしらは、さなかの事を爭ふのが商人サ。

道庵 イカサマ、あの人の云ふ通りぢや。愚老などは、至つて名醫なれども、醫者の拂ひは當分がわるう

ござる。……というて、晦日々々に、弓張りで藥代を取りにも參られませぬて。ハヽヽヽ。……コレナ、娘御、お湯が沸いたら、この一服を、二杯に煎じませうぞ。

いち　アイ〳〵。心得ましたわいなア。

ト藥を受取り、土瓶の蓋を明け、藥を仕掛ける。

園七　モシ、生姜が入らうね。

道庵　さやう〳〵。……時に鰻が燒けたら、一杯きめたいな。

五郎　エヽ、厚かましい。氣があらば、酒を買ひねえ。

半助　劍菱一升切らつしやいな。

道庵　イヤ、一升では二百八十。ちつと恐れみ〳〵申すぢや。

二人　エヽ、あたじけない醫者だぞ。

權助　コレサ、園七樣、損料が滯らば、蒲團は持つて行くよ。退かつしやい。

ト上の方へ行かうとする。

園七　コレサ、この男は、せはしない者ぢやアねえか。先月の損料は晩でもよからうに。

權助　イエ〳〵、貸して置くと、癖になります。貸して愛想をつかさうよりは、サ、返して下さいよ。

園七　そんなら持つて行かつしやい。嗅ァが着て寢て居るよ。

權助　剝いでも持つて行くの。かみさんは何處に寢て居る。アヽ、こゝにか。御免なさい。

ト道庵が前を通り、二枚屛風を取らうとする。お市纔つて

いち　コレ、伯父樣。母さんが氣合ひが惡いというて寢て居さんす。起し申しては惡い程に、お目の覺めるまで待つて下さんせ。

權助　ナニ、目の覺めるまで。コレサ、姐さん、其方の勝手のいゝやうにしては、コレ、此方の鼻の下が干上るワ。此方へ退きな。

ト お市を突退け、屛風へかゝる。五郎、半助立ちかゝつて

五郎　コレ、エヽ、この野郎は、達引の無い奴ぢやァないか。あの子の云ふ事を聞いたか。母さんが氣合ひがわるいと云つて、借りた蒲團を着て寢て居るぢやァないか。

半助　そいつを剝つて行かうとは、あんまり邪險な妄言を吐くな。園七どのが渡さうと云つても、おいらがならないぞ。

權助　コレサ、お前がたの知つた事ぢやァない。打つちやつて置きな。それとも挨拶をするなら、二貫七百の損料をお前達拂ふか。

五郎　拂はないでどうするものだ。この五郎樣が拂つて見せうワ。
權助　サア、拂つて下さい。
五郎　拂ひかねるものか〳〵。
ト立ちかゝる。道庵中へ入り
道庵　コレサ〳〵。お前がたも、マア〳〵靜かにしなさい。內儀は持病で寢て居らるゝではないか。貸物屋さんも、聲高に云はずと、解つて居ますわいの。
權助　それだといつて、あの衆までが、同じやうに無法を云ふからの事サ。ナニ、お前、おとなしく云はつしやれば、貸して行くのサ。
道庵　それ〳〵。それで物事解るといふものだ。團七どの、お前ちよつと挨拶してやらつしやい。
團七　アイ、こりやァお世話でございます。コレ、權助どの。晚には、ちつとでも譯をつけよう程に、蚊帳も蒲團も貸してございまし。
權助　さうおとなしく云はつしやれば、ようごんす。晚方勘定に來ませう。その時賴みますよ。
團七　後にはきつと方をつけるよ。
道庵　アレ、あの通りだ。晚方來さつしやいよ。

権助　心得ました。モシ、お前がたも、氣に留めてくんなさるなよ。
二人　貸してさへ行けば、ナニ構ふものか。
権助　そんなら晩方來やせう。園七樣、頼みますよ。お醫者樣、お世話でござりました。
ト四つ竹節になり、権助向うへ入る。皆々跡見送り
五郎　半公、いけ胴慾な奴ぢやァないか。
半助　愛嬌の無い野郎だなァ。
五郎　時に、園七どの、あの釣舟の三野郎に逢つたら、何かこなたに貸しがあるから、行つて逢はにやァならねえと云つたが、貴樣、覺えがあるか。
園七　ア丶、なにか、道具屋の野良息子か。さう云やァ、萬吏借りの無いでもねえ。ア丶コレ、今來やァがつちやァ小面倒だが、いつそ山下へでも行かうか。
半助　濱田屋へ行つて洒落れようか。
五郎　堂前を晝そ丶りはどうだ。
園七　話せるワ。てめえ達はえて吉はあるか。
五郎　浪人のおいらが何あるものだ。宿六、工面さつしやいな。

團七　待たッし。何ぞあるべい。(トあたりを見廻す。)

道庵　これはきつい蠅ぢや。

ト稈心の先きへ黐をつけ、ほうろくの裏に蠅取り黐の廣げたろへ蠅をさして附ける思ひ入れ。團七捨ぜりふにて内を見廻し、道庵が合口を見つけ、目まぜする。五郎ソツと脇差を取つて懐へ入れる。

半助　ひやつぴ(百疋)ばかりの雜物は無いか。

團七　待たつしやい。何ぞあらう。

ト思ひ入れあつて屏風を取る。中にお梶、敷紙と蓙を敷き。貸蒲團を着て、寢て居る。

コレ、お梶や、ちよつと起きさッし。

ト蒲團を引剝いで起す。お梶枕を上げて

かぢ　團七さん。何ぞ用かえ。

團七　ナニ、用も無いが、どうだ、てめえ持病は治まつたか。

かぢ　アイ、道庵樣のお藥で、どうやら癪も治まり氣味。わたしを起しなさんしたは、何ぞ用でござんすかえ。

團七　イヽヤ、おぬしに用は無いが、コレ、この蒲團にちつと用がある。あの手合ひと行つて來るから、

ちよつと貸さッし。(ト非道に引剝ぐ。)

道庵　コレ〳〵、團七どの、お内儀を冷しては惡い。そのまゝ蒲團は着せて置かッしやいの。

かぢ　イエ〳〵、道庵樣、わたしや餘程快い方でござります。殊に團七どのが入用とあらば、持つてゆきなさんせ。わたしや寒うはござんせぬわいなア。

道庵　ハテサテ、寒いのではない。冷えさしつては惡うござるわいの。

團七　お醫者さん、打つちやつて置かッしやいな。わしが嚊アが風邪をひかうが、煩はうが、醫者の知つた事ぢやアねえわな。半公、こいつを伊勢善へ喰はして、一杯飮んで行かう。

ト蒲團を肩へ掛けて行かうとする。道庵呆れる。お梶思ひ入れ。

かぢ　アヽモシ、お前、今日はアノ父さんの

團七　オヽ、忘れはしない命日サ。おぬしが親なり、師匠なり、義理のある佛ゆゑ、コレ、見やれ、あの手合ひ、鰻を裂いて飮まうといふが、精進日だけ、生き物は食はねえの。なんと義理の堅い男であらうが。

かぢ　そりやよう氣が附いて、嬉しうござんすが、ならう事なら、此方の內で、生き物を殺す事は

團七　エヽ、馬鹿な事を云やるな。舅御が鰻になつて堪るものか。ハヽヽヽヽ。

かぢ　それぢやというて（トこなしあつて）アヽ、また差込みが
　　　　ト思ひ入れ。道庵、お市駈寄つて介抱する。其うち、團七は蒲團をかたげ、出ようとして
團七　アヽ、穿き物が無かつた。
五郎　これか〳〵。（ト道庵が雪駄を見せる。）
團七　ナニ、おらア雪駄は無い。片ちんばの足駄だ。
五郎　こりやア誰がのだ。
團七　あの醫者の雪駄だ。それでも穿かう。
　　　　ト雪駄を穿き、門口へ出て
五郎　コレ〳〵、團公、蒲團に損料屋の印しがあつちやア、そいつは貸さねえの〳〵。
團七　なにサ、印しはいらない。どうで元の鞘へ納まるやうな蒲團ぢやアない。高が夜鷹蕎麥の帳面を消す位の事サ。
　　　　ト蒲團の隅へ綴ぢつけてある印しを引拔いて剝り、門口へ捨てる。
五郎　サアノ〳〵、早く歩ばツし。
團七　今のはあるか。

半助　これか／＼。（ト懐より合口を出して見せる。團七見比べて思ひ入れ。）

團七　アヽ、こいつは引ッくるんで、一朱の一本と見えるわえ。

二人　心細いの。

團七　サア、來さッし。

ト流行り唄にて、三人捨ぜりふにて向うへ入る。

道庵　コレ／＼、今の藥が上つたであらう。一口進ぜさつしやい／＼。

いち　アイ／＼。（ト茶碗を持つて來り）アイ、母さん、お藥が出來ました。これをあがつて、早う病を直して下さんせ。お前が臥てござんすと、わたしや心細いわいな。

ト脊中をさする。お梶茶碗を取り、お市が手を取り、こなしあつて

かぢ　オヽ、娘、よう其やうに優しい事を云うてたもつた。いはゞ其方は繼しい娘。團七どのに、アノわたしが、願ひも願ひ、只ならぬ、身丈にあまる大義の頼み。（ト道庵へ心遣ひして）ホヽヽヽ。役にも立たぬ事を。もう／＼氣合ひはようござんす。サヽ、わしやいつもの通り、起きて働きまする。コレ、お市、必ず案じやるなや。ソレ／＼、起きたぞや／＼。（ト起き直る。）

道庵　コレ／＼、あまり輕はずみは要らぬものでござるぞや。

かぢ　イエ〱、お庇で持病も治まりました。もう〱、ほんまの者になりましたわいなア。

道庵　ハテ、そこを決して起きぬがようござるて。時に、今云はつしやる樣子では、この子は先妻の娘御かな。

かぢ　さやうでござりまする。連合ひの爲には、實の娘でござりまする。御覽なされまする通り、わたしをこの子が、眞の母親同樣に慕ひまするので、わたしも一倍可愛うござりまするわいなア。

道庵　イヤモウ、そりやアその筈の事でござるて。イヤ又、實の子にしては、あの團七どのは邪險な男。お內儀にも常々非道に當たられまするの。

かぢ　あのぞん氣が、主の生れつきでござりまする。ホヽヽヽヽ。

道庵　アヽ、餘程顏附きがようなりました。ドレ、歸りがけぢや。二三本立てゝ行きませう。

かぢ　ハイ、さやうなら、お願ひ申しまする。

ト唄になり、お梶木枕をして横になる。道庵懷より針を出し、療治にかゝる。この唄を借りて、向うより彌市、前幕の通りにて菅笠を持ち、出て來る。後よりお繼、前帶の女房の拵へにて、青傘をさし出て來る。あとより供の男一人、包みを持ち出て來り、花道にて

つぎ　モシ〱、お前は彌市どのぢやござんせぬか。

彌市　オヽ、さう仰しやるはお繼どのぢやの。

つぎ　さうぢやわいの。

彌市　ヤレ／＼、久し振りで逢ひましたの。ちつと逢はぬうち、立派なおかみさんにならしつた。

つぎ　アイ、わたしや石町邊へ嫁きまして、イヤモウ、御奉公と違ひ、苦勞いたしますわいな。

彌市　そりやアめでたいの。して、今日は何處へござるのだ。

つぎ　アイ、今日は旦那兵太夫樣の御命日、お寺詣りの歸りがけ、お梶樣の御機嫌も伺はうと、團七樣のお宅を訪ねまするのぢやわいなア。

彌市　それは奇特な。よく寺詣りをさしつたの。わしもあなたにお目にかゝらねばならぬ事ゆゑ、わざわざ尋ねまするが、たしか向うの（ト表札を見て）大島團七。アヽ、あの内だ／＼。

つぎ　そんなら連れ立ちませうわいなア。

彌市　これはよい所で逢ひましたの。（ト唄の切れにて、三人門口へ來り）ハイ、お頼み申しませう。團七樣のお宅はこれでござりまするかな。

道庵　アイ、これでござるが、どれからでござりました。

彌市　ヘイ、さやうならば私しは、お上屋敷、琴浦方より。

トこの聲を聞き、お梶こなしあつて

かぢ　道庵樣、暫くお待ちなされませ、（ト門口を見て）ヤ、彌市ぢやないか。

彌市　さやうでござります。

つぎ　お梶樣、御息災でおめでたう存じまする。

かぢ　オヽ、わが身はお繼かいなう。ようマア來やつた。サヽ、ちやつと入りやいなう。

つぎ　ハイ〳〵、さやうなら御免なされませ。（ト三人内へ入る。）

かぢ　ヤレ〳〵、よう訪ねて來てたもつたの。

彌市　ヘイ〳〵。私しは取分けまして、琴浦樣よりお前樣へ、御傳言がござりまするゆゑ、わざ〳〵參りましてござりまする。

かぢ　して、伯母樣には、御別條なうお勤めなされてかや。

彌市　隨分御息災でござります。

道庵　モシ〳〵、おかみ樣、お二人ながらあれへお通りなされませ。

つぎ　イエ〳〵、お構ひなされまするな。私しどもはあなたに御奉公しました、召仕ひでござりまする。必ずお心遣ひは御無用でござりまする。

道庵　エヽ、何かな、あなたは爰の内儀の御家來筋かな。愚老は又立派な御新造樣と存じました。只今では、どうか、御家來の方が、御主人のやうで、御主人の方がおさんどの同然な。(トこなしあつて)ハヽヽヽ。これは不調法々々々。お娘御、お茶を上げさつしやい。

いち　アイ〳〵。お茶上げたいにも、土瓶はお藥、茶はござんせぬによつて
ト思ひ入れ。お梶恥かしきこなし。道庵氣の毒がり

道庵　アヽコレ、土瓶がふさがつてなら、そこらに藥罐もあらうに。アヽ、子供といふものは。(トもぢもぢして)イヤ〳〵、愚老はまだ病家があつた。暮れぬうちに、見舞うて參らう。イヤ、お客樣、ゆるりとお話しなされませ。

つぎ　もうお歸りなされまするか。

道庵　イヤモウ、殊の外長座いたしまして。(トあちこちを尋れ、思ひ入れあつて)ハテ、こゝへ置いた筈だが。

かぢ　道庵樣、何をお尋ねなされまする。

道庵　イヤ、腰の物が見えませぬ。ハテ、怪しからぬ事でござる。

かぢ　それは困つたものでござりまするわいなア。

彌市　成る程、お醫者樣のお腰の物を、よもや猫めが（ト同じやうに尋ねる。）

道庵　イヤ／＼、ようござる／＼。御亭主が歸られたら、大方解りませう。併し醫者が丸腰、ちとあやまるの。（ト藥袋を風呂敷に包み、門口へ出る。）

かぢ　主が歸られた上、存じてなら、持たせて上げませうわいなア。

道庵　何分、お賴み申す。……イヤア、又、穿き物が見えぬワ。これは怪しからぬ事だ。

かぢ　アヽ、お穿き物も大方主が、穿きちがへて行かれましたか。それも後から、出ましたら、持たせて上げませう。

道庵　これは迷惑。何ぞ替りはないか。

彌市　モシ／＼、こゝに足駄がござりまするぞえ。（ト齒の缺けし片し違ひの足駄を見せる。）

道庵　これは怪しからぬ替りでござるの。ハテサテ、怪しからぬ内でござる。これでも穿いて行きませう。

彌市　モシ／＼、お危なうござります。

道庵　これは怪しからぬ内でござる。醫者の腰の物、その上、穿き物までを、これは怪しからぬ目にあふものだ。イヤ、怪しからぬ儀でござる。……これは怪しからぬ目に逢うたぞ。

ト捨ぜりふにて向うへ入る。この内、供の男はいろ〳〵思ひ入れ。

供男　モシ〳〵、おかみ樣。用心のわるい内でござります。もうお歸りなされませ。

つぎ　これはしたり、滅多な事を。コレ、あなたはわしがお主樣ぢやわいの。お話もあれば、其方はお勝手へ行きや〳〵。

供男　ハイ〳〵。さやうなら、こゝはあなたの旦那樣のお内。ハテサテ、結構なお内でござります。

ト此うち、お梶氣の毒がる。

つぎ　エヽ、お勝手へ行きやいなう。

供男　ハイ〳〵、御免なされませ。

ト暖簾口へ入る。

つぎ　イヤモウ、下々と申しまするものは（ト思ひ入れして）オヽ、お市樣、お身大きう御成人でござりまするな。私しとした事が、お土産も持つて上りませいで。ホヽヽヽヽ。

かぢ　コレ、お繼、其方はようマア訪ねてたもつたの。さりながら、わが身を使うた時とは事變はり、浪人暮らしの團七どの、傘の張替へ、煙管の磨き。わたしも縫ひ物、賃仕事。（ト思ひ入れあり。）恥かしい今の世渡り、見捨てもなう、ようマア訪ねて來やつたなう。

つぎ　ハイ。今日私しが上りましたは、あなたのお父樣兵太夫樣の御命日ゆゑ、お寺詣りの歸りがけ、ちよつとお訪ね申したのでございます。

かぢ　そりやマア心にかけて、ようマア寺詣りしてたもつた。わしも參詣したいけれど、世帶の苦勞に今ではこの形。（ト思ひ入れ）。アイヤ、この頃の持病ゆゑ、お墓詣りも遠々しく（ト思ひ入れあつて、佛壇より血の附たる片袖に、戒名を持つて出て、思ひ入れあつて）夏月院劍譽信士、あなたの血汐の附いたる片袖。お形見とも、御位牌とも、思うて佛間へ此やうに

彌市　御尤もでござりまする。兵太夫樣の思はぬ御横死、その座で失せし千壽院。これ皆大鳥佐賀右衛門、彼奴が仕業と存ずるゆゑ、伯母樣のお指圖で、まだ年若なお梶樣、娘御のある團七樣へ、後妻の縁組み。これと申すも、親御樣の、敵を討ちたいあなたのお願ひ。その助太刀は團七樣。その節の詞には、似ても似つかぬ只今のお身持ち。矢張り當所に、うから／＼。なぜ御出立はなされませぬ。この事がお上へ聞え、お氣の毒なは琴浦樣。

かぢ　ヤ。伯母樣が、どう遊ばしたや。

彌市　アイヤ、御別條はござりませねど、刀の詮議、敵討ち、立たねばならぬ旅立ちも、安閑とござるといひ、殊に、失たせる千壽院、近々の内、行くへ知れねば、お家に係はる一大事。さある時に

は琴浦様の

つぎ　お身にもかゝるこの程のお噂。それ聞きしゆゑ私しも、お訪ね申してこの由を、申し上げたう存じまして。

かぢ（思ひ入れあつて）すりや、父さんが横死の砌り、失せし劍の行くへ知れねば、大殿様のお身の上、さある時には伯母様までの、お身にもかゝはる（ト思ひ入れ）何をいうても恥かしい、浪人住ひの團七どの、親子三人朝夕の、煙りも細きその中へ、刀の行くへ、敵の詮議、旅立ちするも路用の金。それが先立つばつかりに、今日と暮らして、又明日も、主の機嫌を見た上で、いつ出立と外ながら、問へども例の短氣ゆゑ、只一口に叱られて、是非なう今日まで期を延ばす、心の中を二人の者、推量してたもいなう。（ト憂ひの思ひ入れ。）

彌市　ア、さう仰しやれば御尤も。というて、べん〳〵あの刀。行くへ知れねば、お家の大事。こりや斯うしませう。私しはこの由を、琴浦様へ詳しく申し、あなたがたの路用の拵へ。さやうが宜しうござりませう。

つぎ　成る程。こりやそれが第一でござんす。お前は早う歸らしやんして、琴浦様より路用のお金を、遣はさるゝがよい思案。お梶様、さやうぢやござりませぬか。

かぢ　其方衆の言やる通り、路用の金さへ出來たなら、團七どのに委細を賴み、愈々當所を出立の、それも金ゆゑ、さりながら、この程のあの身持。惡い交際さしやんすりや、若し又心變はりして

つぎ　そりやお氣遣ひなされまするな。私しが後に殘り、お目にかゝつて何かのお賴み。お前は早うお邸へ。

彌市　心得ました。お繼どのは後に殘り、團七樣がお歸りなら、右の樣子を打割つて

かぢ　賴んでたもるは其方衆二人。コレ、このお方の未來の迷ひ。どうぞ敵の佐賀右衛門。

ト片袖を見せ、思ひ入れ。

彌市　アモシ。惡友達の入り込むお內。必ずともに（ト思ひ入れあり。）さやうなら、もうお暇いたしませう。（ト門口へ出る。）

かぢ　伯母御樣へ、何かの樣子。其方くはしう、路用の事も、お案じないやう。

彌市　承知いたしました。

つぎ　御大儀ながら、彌市どの。

彌市　お梶樣。よいお便りを、お聞かせ申すでござりませう。

ト唄になり、向うへ足早に入る。三人殘る。合ひ方。

いち　申し、母さん、氣合ひがよくば、どうぞ髪結うて下さんせぬかえ。

かぢ　ほんに、この間からわたしが持病ゆゑ、わが身の髪もそこ〳〵に、今日はせめて撫で附けてなりと……イヤ〳〵、主の歸りなさるに間もあるまい。行水の湯も、沸かして置かずば、また癇癪。わしやマア、湯を沸かして來ませうわいの。

つぎ　アモシ、お湯を沸かすばかりなら、供の男も居りまする。わたしがちよつとお勝手へ參りまして

ト行かうとする。

かぢ　アコレ、見苦しい勝手。其方は來やるに及ばぬわいなう。

つぎ　なんの大事がござりませう。いはゞ、あなたの召仕ひ、御遠慮には及びませぬ。供の男も居りまする。水も入れさするでござりませう。

かぢ　ハテ、氣の毒ぢやわいの。

つぎ　なんのマア。コレ與助、ちよつと其方、水を一つ汲んで上げやいの。コレ。

ト合ひ方になり、捨ぜりふ云ひながら暖簾口へ入る。

かぢ　アコレ、折わるうわたしが持病で、臥たゆゑに、定めて勝手も取散らし、見するも氣の毒。以前は使うた下女の繼、今はよい所へ嫁いて、移り變りし世の成行き。ア、これに附けても、父さん

の（ト袖を見て、思ひ入れ。）

いち　母さん、髪結うて下さんせぬかえ。

かぢ　オヽ、結うてやりませう。まだ差込みがあるゆゑに、この胸先きが……アイタヽヽ。

いち　又、持病が起つてかえ。

かぢ　アヽ、イヤ〱。何ともない。ドリヤ、撫でつけてやりませうか。

ト獨吟になり、櫛箱を出し、この中へちよつと袖を入れ、鏡立てを直し、お市が髪を撫でつける。唄一くさり切れる。お市、鏡に映るお梶が顔を見て

いち　申し、母さん。お前、また持病が起つてかえ。

かぢ　イヤ〱。わしや何ともないわいの。

いち　それでも又差込みがあるかして、お前のお顔が

かぢ　すりや、鏡へ映るわたしの顔が、苦しげに見えるゆゑ、其方は案じて

いち　アイ。煩うて下さんすなえ。

かぢ　アヽ、親身も及ばぬ、コレ、お市、父御には似ぬ志し。（トこなしあつて、笑ひに紛らし）ホヽヽヽホ。ほんに、髷ゆはへも、掛け直してやりませう。（ト獨吟になり、唄切れる。）オヽ、又明日よう結

ひ直して

いち　そりや、嬉しいわいの。

トてんつゝになり、向うより駕籠舁、四つ手駕籠を擔ぎ出て來る。後より質屋の手代二人、窺ひ〳〵出て來り、花道にて駕籠の樣子を、身をひそめ、窺ひ居る。駕籠を門口へ下し

駕舁　モシ、旦那、こゝでござります〳〵。

傳八　オヽ、御大儀々々々々。（ト垂れを上げ、傳八あたりへ、キヨロ〳〵して出る。これにて花道の手代二人囁き合ひ窺ふ。傳八、ズツト内へ入り）モシ、團七どのは内にかな。

かぢ　アイ。主は今近所まで出られましたが、どれからお出でなされました。

傳八　アイヤ、わしはちつと團七どのに、逢はねばならぬ者でござるが。（ト内外をキヨロ〳〵見廻す。）

駕舁　モシ、駕籠賃を下さいまし。

傳八　オヽ、合點だよ。モシ、おかみさん、ちよつと錢を一本貸してくんねえ。駕籠賃を拂ひやす。

かぢ　アイ、お易い事ぢやが、主は留守なり、折わるう手許にも

傳八　そんならようござります。何もわしは胡亂な者ぢやアござりやせぬ。團七どのが留守なら屆けようと、コレ〳〵（ト手紙を出し）この當て名を見なされば知れやす。コレ、姐さん。そこへ渡してく

んな。

ト お市に手紙を渡す。

駕舁　サア、駕籠賃はどうでございますね。

傳八　今遣るわな。コレ、斯うさつしやい。こゝの亭主の歸るまで、おらア待つて居るから、貴樣達もそれまで、勝手へ廻つて待つて居さつしやい。

駕舁　これは迷惑な事だが、仕方がない。待つて居やせう。

同　サア、來やれ〳〵。

ト 駕籠を置き、生け垣の脇へ入る。この時、手代二人、門口へ來て、內の樣子を窺うて居る。

傳八　モシ、かみさんえ。團七どのが歸りなさるまで、待ちますから、さう思つて下さりませ。

かぢ　そりやモウ、主の歸りまで、隨分と待ちなさんせいなア。

ト 合點の行かぬ者と目を附けて居る。

傳八　さやうならお邪魔でござりませう。一服たべて居りませう。

ト 莨盆を引寄せ、吸ひかゝる。門口の兩人。

手代　駈落ち者の傳八、見つけたぞ

傳八　ヤ、てめえ達は（ト逃げようとする。兩人駈け寄り、引捕へて）

手代　内の金を引負ひの傳八。附いて來た。旦那へ歩べ〳〵。

傳八　コレサ、てめえ達も朋輩のよしみだ。見遁してくれろ〳〵。

手代　イヽヤ、ならない。歩ばつしやい〳〵。

傳八　エヽ、聞分けのわるい（ト振り切つて向うへ逃げる。）

二人　泥坊だ〳〵。

ト追駈けて入る。この時、お市恟りして、手紙を有り合ふ盥の中へ取落して

いち　怖いわいなう。（トお梶へすがる。）

かぢ　アヽ、この子とした事が、何をマア、仰山な。とはいふものゝ、合點の行かぬ今の男。團七どのに逢ひたいと、云ふとその儘、表から　駈落ち者と二人して、雲を霞に（ト向うを見て）あの樣な者に交際はしやんす、團七どのゝ身持ちでは、わたしが願ひも（ト思ひ入れ）。コレ、お市、今の男が、其方に渡した手紙はや。

いち　アイ、あの手紙は、今恟りしたはずみ、この盥の中へ。

かぢ　ヤ。ドレ（ト盥を見て）オヽ、コレ〳〵、臺なし水だらけになつたわいなア。（ト濡れたる手紙を取

出し）何の用かは知らねども、主に斷うして渡したら、さぞ腹立てゝ、どのやうな（ト上書を見て）園七殿へ傳八。……何の用かは知らねども、封を切らねば（ト田樂火鉢を見て）幸ひ火鉢に火もある樣子。コレ、お市、手傳うてたも。

いち　アイ。

ト合ひ方になり、お梶やう／＼火鉢を出し、澁團扇にて煽ぎ、濡れたる狀を二人して、ちぎれぬやうに廣げ、捨ぜりふにて干しながら、讀む事あり。

かぢ　ナニ／＼。「……先達てお渡し申せし浮牡丹の香爐、お取上げのまゝ、未だ金子も遣はされず、申さば盜み物同前の品に候へば、早速金子遣はさるべく候筈の所、騙り同前のなされ方、金子なりとも、香爐なりとも、早々お返し可被下成候、月日。」

ト見て驚く思ひ入れ。この內、手紙を干し上げ、お市何心なく

いち　申し、母さん、もう乾いたわいなア。

かぢ　失せし香爐も、行先きも、園七どのが存じの樣子。殊には騙り同前と、この文言は情けない。これが大望抱へし身の

ト思ひ入れ。向うにて

三吉　離しやァがれ〳〵。

トこの聲にお梶、手紙をちやつと懷中する。てんつゝになり、向うより釣舟の三吉、序幕の形、五郎、半助も武者振りついたるまゝ出て來る。後より團七、附いて出て來る。

團七　コレサ〳〵、二人とも打つちやつて置いて、その野郎が好きにさせるがいゝ。どうするものか。くらひそばへた餓鬼ぢやァないか。

五郎　イヽエサ、そこが友達の附合ひだ。貴樣を見ると、豪氣に熱くなつた樣子だから、譯を云へと云へば、道行きも云はない上に、こなさんにむしりつくと見たゆゑに、ナァ石塔。

半助　さうだ。團七どのを相手にする三吉。コレエ、われも今でこそ屋根船や網の板子を枕に、かつさき同前、元は何だ。道具屋の息子樣、淸七と言つた商人だワ。おいらは浪人でも武士だワ。馬鹿な野郎ぢやァねえか。

三吉　何を此さいた奴等が、浪人の癖に。コレエ、、道具屋を勘當された釣舟の三吉、うぬらは寄つて締めるのか。指でもさすと、扶持の喰ひ上げだぞ。コレエ、、團七、云ひ分があるぞ〳〵。

團七　ハテ、その云ひ分を、聞くまいとは云はないワ。いくらでも云へ。併し、他人に聞かせちやァ、後で面倒だ。斯うしやれ。こなた衆二人は、こゝから歸つてもらはう。

二人　イヤ〳〵、こなたの身の納まりを聞かないうちは、歸らない〳〵。
團七　ハテ、大事ない。どうするものか。この野郎だといつて、おれだといつて、ちつとは暗い事もあるから、起つた事だ。何しろ、二人が居ては惡い。
二人　惡くば、居やすまい〳〵。
三吉　サア、さうおとなしく云はれては、此方だといつて鬼ではなし、鬼神ではなし、挨拶に困る奴よ。
五郎　團七どのがあゝ云ふから、そんなら歸らうかえ。
半助　さうすべい〳〵。コレ、團七どん、わしらは歸るよ。
團七　エヽ、きり〳〵と歸りやァ。
半助　そんなら晩には、堂前とくらはすべいか。
五郎　味に搦まば、かみさんを、ちよつと寄越しねえ。すぐに來るよ。
團七　そいつは有り難い。併し、無駄な喧嘩はしまいぞよ。
二人　承知サ。團七どの、晩に逢ひやせう。
ト四つ竹節になり、二人は向うへ入る。團七、三吉、門口へ來る。
團七　お梶や、歸つたよ。

かぢ　アイ、早うござんしたの。モシ、お前の留守に、知らぬ人が手紙を持つてナ、コレ。

ト出さうとする時

三吉　御免なさいまし。園七どの、こなたを預けて行くよ。

ト内へ入る。これにてお梶、ちやつと手紙を隱す。園七思ひ入れあつて

園七　預けてよくば、預けて行きやれ。こゝに家主はねえワ。

三吉　知れた事だ。地守りとか地主とかねえ事もあるめえ。そこをナ、吟味する。モシ、かみさん、この地主は何と云ひやす。

かぢ　エ、アノ、こゝはナ。

園七　エヽ、口をきゝやァがるナ。行水をする湯を汲んで置け。

かぢ　アイ。（トうぢ〳〵する。）

園七　エヽ、早くしないかえ。

かぢ　どりや、行水の支度いたしませう。

ト唄になり、お梶、お市を連れて暖簾口へ入る。三吉跡見送り、思ひ入れあつて

三吉　コレ、園七どの。こなさん、手の好い騙りだぞよ。この三吉を夜盗にして、首を落してこなさん

は、後でぬつくり遣る氣だの。コレ、さうはさせねえ。おれが行けば抱いて入るよ。
團七　なんだ、この野郎、道理を云ふな。そんな嚇しをくふやうな團七ぢやァねえぞ。香爐さへ返したら、何もいさくさはあるまいが。
三吉　知れた事だワ。元の起りは、こなたが勸めて、親の內ならよからうと、夜盗に入つて盗んだ香爐。後にて聞けば邸の預り。內の難儀と聞いたゆゑ、返さうにも代物を、たつた三兩握らせて、こなたが捲上げ、返さぬわサ。今日は絕體絕命だ。三吉が夜盗になりやァ、こなさんも同類だ。その上に上前取りだ。團七どん、團七、たつた今返してくりやれな。（トきつと云ふ）。
團七　イヽヤ、返す事はならない。
三吉　なぜ〳〵。
團七　おらが方から、三兩遣つて置いた代物。そんなら手附けの濟んだ物だ。おらが物だワ。
三吉　イヽヤ、三兩ばかりは返してしまふ。何にするものか。親父の內に眞面目で居れば、道具屋の若旦那淸七だワ。身持ちが惡さに釣舟三吉。アレ見や、態は惡いが、裏附けは內燒印、山形に丸印し、道具屋の株印し同前。四の五もいらねえ、香爐を返さねば、雷が落ちかゝつても、この內ばかりは動きはしないワ。

團七　動かずば、いつまでも神輿を据ゑろ。エヽ、氣の强い二才めだ。

ト三吉に構はず、團七は、門口に干してある傘を取込んで居る。てんつゝになり、向うより三河屋義平次、羽織、菅笠、雪駄にて、出て來り、團七を見て

義平　團七どのか。精が出ますの。

團七　オヽ、義平次どのか。何と思つて

義平　ハテ、後金をはたりにサ。

ト内へ入り、上の方へ通る。團七莨盆を持ち

團七　サア、一服のまつせえ。

義平　構はつしやるな。コレ、團七どの、一體五十兩の中を、いつぞや二十兩だけの代物を受取つて、殘金は三十兩。その方はいつ附けます。コレサ、三十兩は、いつ方が附きますよ。

團七　コレサ、義平次どん。三十兩の事はわしも忘れはしないわな。ハテ、借りた時は獨身の團七、今では女房はあり、殊に、餓鬼でも、娘が一人あり、今までの極樂とんぼとは違ふわな。殊に、ソレ、二十兩に渡して置いた、アレ、アノ、ナ、程な代物で

義平　イエ〳〵、あんな物は、わしらが方ではいつそ厄介ぢや。女子供の賣り買ひなら、商賣物ゆゑ値

打も出來まするが、何だか知れない香爐だの、香箱だのと、靈寶物を見るやうな

ト うか〳〵云ふ。團七思ひ入れあつて

團七 エヘン〳〵。（ト咳に紛らす。三吉これを聞いて）

三吉 待たつしやい。譯は何だか知らねえが、こゝでまぢ〳〵聞いて居れば、香箱とやら、香爐とやら。香爐なら、耳に障つた今の噂。此方もあれゆゑ手古摺る最中。その香爐とは、義平次さん、どういふ始末でございますね。

ト義平次、三吉を見て

義平 ヤ、おぬしは、三吉だな〳〵。

三吉 イヤ、三吉サ。わしがどうしたえ。

義平 コレ、おぬしには逢ひたかつた。コレ、この頃の事でもないが、聞けばおぬしは、親の内は大事ないと云つて、盗みに入つたといふ噂。コレ、實の親でも勘當息子。他人同前、家内ではない。すりや、盗人、夜盗も同じ事だ。おぬしに逢つたら、見當り次第、取つて出せば金になる仕事だ。サア、三吉、一緒に來やれ〳〵。

ト立ち上る。三吉こなしあつて

三吉　コレ〳〵、義平次さん。なんだ。この三吉を、盗んだといふ噂があるゆゑ、こなさんが連れて行かうといふのか。

義平　さうだ。覺えがなくば、代官所で云ひ譯するがいゝ。マア、ちよつと來やれ。

ト立ちかゝるゆゑ、三吉狼狽へ、門口を出るとて、義平次が雪駄を片し穿き違へて、表の方へ出て

三吉　なにサ。何處へも行く事はない。氣が違つたさうな。ナニ、おれが小盗みをするものか。そりやア人違ひだらう。おらアそんな覺えはないわい。

義平　ハテ、覺えがあるまいが、噂がわるい。ちよつとマア、代官所まで

三吉　イヽヤ、否だといふに。

團七　コレサ、三吉。代物を返さう。三兩寄越しやれ。

三吉　三兩遣らう。代物を今返しやれ。

團七　返して遣らう。中橋の道具屋へ盗人が入つて、失なつた浮牡丹の香爐を、返して遣らう。

三吉　受取りに行かうワ。(ト戻つて來る)。

義平　ヤ、浮牡丹の香爐を、アノ三吉が。そんならいよ〳〵それだわえ。サア、一緒に歩べ。(ト立ちかゝる)。

三吉　エヽ、おらアこなたと一緒に何處へも行く覺えはない。エヽコレ、悪い所へ飛んだ奴が來たばつ

かりに、みす〳〵おれが代物を
義平　その代物は香爐か。
三吉　ナニ、決してそんな
義平　マア、何しろ、一緒に來やれ。
三吉　エヽ、こなさんと一緒に行く用はないわな。用といつちやァ、團七どの、みす〳〵こなたに
團七　なんだな。サア、云やれな。
義平　一緒に行かうか。
三吉　エヽ、團七、覺えて居ろよ。
ト唄になり、雪駄を片し穿き違へ、足早に向うへ入る。兩人顏見合せ
義平　ハヽヽヽ。團七どの、どうぢや。脛に疵持つ三吉も、嚇しをくつて、コソ〳〵と逃げて失せたワ。義平次が法は、强いものか〳〵。
團七　イカサマ、香爐の事を、毎日々々、催促のあの野郎め。こなさんが味に臺詞へ、もくをつけたばつかりに、尻こそばゆく失しやァがつた。流石は三河屋、奇妙々々。
義平　イヤ、さうでもないが。ハヽヽヽヽ。時に、コレ、團七どのや。あのマア、いつぞやの香爐を、

二十兩と踏んでサ。後金の三十兩は、いつ寄越すのぢや。是非今日は持つて行かにやならぬ。さう心得て下さりませ。

團七　コレサ、義平次どの、先刻も云ふ通り、この團七は厄介持ち、三十兩が出來ない時は、ハテ、蒔直した相談もありやせうよ。

ト落着いて居る。合ひ方にて、暖簾口よりお梶、茶を汲んで出て

かぢ　ハイ、お茶上がりませ。

ト出す。義平次取らうとして、お梶をヂロ〳〵見て

義平　ハテサテ、ようマア

かぢ　どう致しましたえ。

義平　イヤアノ、わしが娘に、お前がよう似てござるによつて。

かぢ　あなたのお娘御樣に、アノわたしが

義平　瓜を二つと申さうか。ハテサテ、斯うも似るものか。

團七　コレサ。おれが嬶アが、こなさんの娘のお辰に似たばかりに、あの女だと思つて、女房に

かぢ　エ。

團七　アイヤ、義平次どん、今後金の一段が、もし解らずば、ソレナ。……それぢやァ、こなさん承知であらう。貴様、借りた金の抵當に、その代物を渡したら、萬更でもあるまい。後金だけのものはあらう。

トお梶を渡さうといふ心にて、義平次に呑み込ませる。

義平　成る程。こりやァ結構。髪も形も世帶じみ、汚して置くは惜しい代物。磨き上げると、一かどの花魁。これなら抵當に取らいでは。……して、今日渡すか。

團七　ハテ、此方も話して呑み込ませ、得心づくで

義平　イカサマ。そこもあるわえ。

トお梶合點の行かぬこなし。最前の駕籠の者、門口にて

駕舁　モシ、先刻の旦那。駕籠賃はどうでござりますえ。

團七　ナニ、駕籠賃。そんな事は知らないワ。

駕舁　南無三。棒組、騙られたワ。

義平　(この聲を聞き)アコレ、貴樣達は本所の駕籠だの。

駕舁　アイ。義平次さんでござりますかえ。

義平　アコレ、わしが歸るまで、此方の勝手で待つて下さい。
駕舁　ハイ〳〵、畏りました。
義平　そんなら必ず團七どの、後金だけのあの代物、よく云ひ聞かして
團七　よしサ。待つてござりませよ。
義平　呑み込んだ。モシ、おかみさん。
かぢ　ハイ。
義平　こりやァお世話になりますね。
　　ト唄になり、義平次は奥へ、駕籠の者は下へ入る。兩人殘ると、合ひ方、お梶差寄り、こなしあつて
かぢ　モシ、團七どの、ありや何處のお方でござんすえ。
團七　あの親仁か。ありやァ三河屋の義平次といふ山ぜげんよ。
かぢ　その義平次さんとやらが、なんで心安う、あのやうに。
團七　ハテ、あの親仁には、前の女房の生きてゐたうちから、借りがあるのよ。そこで度々うるさく催促。そこで今夜が日限りの切端よ。
かぢ　すりや、あのお方にも借りた金。まだその上に先刻の手紙の

團七　どうした。
かぢ　サア、重ね〴〵お前に問はねばならぬ。
團七　ヤ。

　　　ト思ひ入れ。暮れ六ツの鐘。暖簾の中にて

つぎ　お危なうございます。私しが持つて上げませう。(ト合ひ方になり、角行燈に火を灯し、これを持ち、
　　お市附いて出て來り)さて〳〵、お内は、夥しい蚊でござりまするなア。
團七　(見て)あのおかみさんは何處からござつた。
かぢ　ありや邸に居やつたお繼ぢやわいなア。
團七　エヽ、アノ、召使ひ。
つぎ　ハイ。團七様、久しうお目にかゝりませぬ。お前様も御機嫌よう。何かとお梶様の事、御面倒を
　　御覧じて下さりまする、お禮かた〴〵、ハイ、上りましてござりまする。
團七　そりやア奇特な。して、今では嫁いてか。
つぎ　さやうでござりまする。
かぢ　モシ、團七さん。今日、繼が來やつたも、伯母さまからお前へ御傳言。

團七　ナニ、おれが所へ、アノ、伯母御様から

かぢ　今の譯を、主に其方が

つぎ　ハイ、申し上げるでござりませう。……モシ、團七様、別儀でもござりませぬ。これなるお梶様をお連れなされて、餘程のうち、佐賀右衞門が行くへ、刀詮議の旅立ちも、まだそれなりの御様子。琴浦様のお案じ。殊に、この程のお噂には、千壽院の刀の在所知れねば、お家にかゝはる一大事と、御家中の御評議。心ならぬは伯母御様、あなたの御返事内々にて、承り參るやうにと仰せつけられ、それゆゑ、今日は、お訪ね申してござりまする。

團七　成る程。さう聞いては、伯母御の案じさつしやるのも尤もサ。併し又、この團七が身にもなつて見さつしやるがよい。兵太夫様の敵は知れた佐賀右衞門。刀を盗んで失せたも彼奴。敵さへ討てば刀も戻るは知れた事。此方もべん／＼捨てゝ置く氣はござらぬが、何を云つても、路金が無いの。ハテ、假にも三人。路用の貯へしないぢやア、うか／＼しても行かれませぬワ。サア、敵討ちが延び／＼になるの。そこで、この頃思ひついて、コレ、この娘のお市をいくらにでも賣つて、そいつを路金と極めるより、外には仕様は、どうもないの。

かぢ　モシ團七様、それではわたしが實の父様の兵太夫様へあなたは立たうが、わたしやあの子を賣つ

た金、路銀にしては先妻の、この子の母御へ、どうも云ひ譯がござりませぬ。

つぎ　さやうでござりまする。いかに金子が要ればとて、團七樣のお娘御樣、どうマァ女郎に賣りまして、それでは世間へ濟みますまい。お梶樣、さやうぢやござりませぬか。

いち　コレ、母さん、わたしやどの樣な事があつても、女郎とやらになる事は否。それが氣に違うて、父さんが子になされずば、ようござんす。こゝの内に居らいでも、お前のほんの娘にして、側な離して下さんすな。拜むわいな〳〵。（ト手を合せて拜む。お梶泪ぐみ）

かぢ　オヽ、よう云やつた。お前もわしも母さんには、早う離れた因果者。氣遣ひしやんな。女郎とやらに賣る事ぢやござんせぬ。父さんが何と云はしやんしても、この母さんが、賣る事ぢやないぞやないぞや。

團七　ナニ、その餓鬼めが賣られる事は否だ。アノ、うぬは親の瀨に立つ事は否か。エヽ、この餓鬼も三つ子の魂ひ百までと、今からそんなませた事を吐しやァ、この上どんな癡言吐かうも知れぬ。親の爲なら、ふんばり奉公でもしませうと、吐かさないと、うぬ。

ト鐵弓を持つて打つてかゝる。お市、お梶に取附く。お繼、團七を留める。

つぎ　アヽ、申し、お前樣、そりや御短氣でござりまする。

團七　エヽ、退いて居やァがれ。うぬ、いけ口を

いち　怖いわいなう。

かぢ　アヽ、コレ、堪忍して

團七　エヽ、退けと云ふに。

　ト火の附いたる鐵弓を取つて打つてかゝる。お梶、お市を抱いて居る。團七腹立ち紛れに、くらはせるとて、誤つてお梶が顏を鐵弓にて打つ。「ワツ」と云うて倒れる。團七も驚き、介抱する。お市「ワツ」といふて、暖簾口へ逃げて入る。

　サアサ、とんだ事だ。嬶アが面へ疵が附いたワ。コレ、こなたは藥を、持たねえか〳〵。

つぎ　ハイ〳〵。こゝに好い藥がござりました。

團七　サア、早く出さつしやいな。氣のきかない。

　トあせる内、お繼は懐の紙入れより藥を出し

つぎ　これをちやつと、お顏の疵へ、おつけなされませ〳〵。

かぢ　イヤ〳〵、痛みはせぬ程に、わしに構はずとも、お市を外へ、遣つて下さんせ〳〵。

つぎ　お氣遣ひなされまするな。あのお子は爰ではござりませぬ。

團七　コレ、お梶、こりやア怪我だぞ〳〵。
かぢ　イエ〳〵。もうようございまする。今の藥にて、痛みは止まつたわいの。
團七　オヽ、それで落着いた。エヽ、これといふのも、マアあの餓鬼めが
つぎ　ハテ、もうよいぢやございませぬか。
かぢ　どうぞ堪忍してやつて下さんせいなア。

ト奥より供男出て

供男　モシ〳〵、おかみさん。もう暮れました。殊にどうやら降りさうでございます。もうお歸りなされませぬか。
つぎ　ほんに、内から迎ひの來ぬうち、歸りませうわいなア。……モシ、お梶樣、又この間にお見舞ひ申しませう程に、隨分御身を御大切に。團七樣、あなたの事を、お賴み申しまする。
團七　なにサ、こなたが賴まないでも、わしが嬶アだもの、隨分承知サ。
かぢ　そんなら、もう歸りやるか。また見合せて來てたもや。
つぎ　ハイ〳〵。一兩日のうちに上りまする。モシ、これは憚りでございまするが、何ぞお口に合うたものを取寄せて、お上り遊ばせえ。

ト小粒の包みをソツと渡す。團七ちよつと見て、ニツコリ笑ふ。お梶、お繼が手を取り

かぢ　今の其方の志し、以前の身なら、よう禮の、云ひやう、品もあらうのに、この身になつては。（トお繼に縋り）忝い。嬉しうござるわいなう。

つぎ　何のマア、其やうな事仰しやりまするな。又この間に上りませう。

團七　アヽ、歸りやるか。暗からうに、提灯もあつたが、皆貸してしまつた。アヽコレ、盆燈籠がある。こいつを灯してはどうだ。

ト切り子燈籠を取つて出す。

つぎ　有り難うはござりまするが、それには及びませぬ。ハイ、さやうなら、又この間に。

かぢ　もう行きやるか。

つぎ　お梶樣。

團七　氣を附けて行かつしやい。

ト唄、時の鐘になり、お繼、供男を連れて向うへ入る。引違へて木片の權助、伊勢權と書いたる弓張提灯を持ち、風呂敷を肩にかけて出て來る。お梶は額の疵痛むゆゑ、手拭にて押へて居る。權助門口へ來て

權助 團七どの、內にか。（ト入る。）
團七 權助。もう來たか。
權助 來ないでヮ。晚までの約束だワ。サア、勘定さつしやい。
團七 ハテ、先刻無い物が、ナニ、今有るものか。明日來や。
權助 イヤ、呆れたものだ。さうあらうと思つた。もう〳〵否だ。所詮勘定は出來まい。先刻の蒲團を持つて行かうわい。
團七 どうともしろえ。
權助 しねえでサ。（トお梶を突退け、あたりを尋ね、蒲團無きゆゑこなしあつて）ヤア〳〵。もう蒲團をくらはせたな。イヤ、油斷のならない湯灌場だ。コレ、團七どん、そんなら蒲團は鳶の魚か。
團七 松魚の出ない先きの事よ。
權助 イヤ、呆れたものだ。もう〳〵、何でも貸しちやァ置かれない。あの蚊帳も、返せ〳〵。
團七 返さないでどうするものだ。この蚊帳で二貫七百の損料をフイにするワ。いゝ算用か。サア持つて行け。
ト釣り手の丸括けの附いたまゝ、蚊帳を取つて權助に渡す。お梶この蚊帳に縋つて

かぢ　コレ、團七どの、此マア蚊の多いに、その蚊帳を返さんして、わたしや大事ないが、あの娘のお市が寢やるのに

團七　ナニ、あのお市が蚊にくはれたと云つて、喰ひ殺される程な事はあるまい。ハテ、あんな無得心な奴が代物を、借りて居るのも腹が立つ。返してしまふ〳〵。

かぢ　ハテ、そりやお前が無得心とはいふものぢやわいなア。……ほんに、今、繼が志しのこの金。これをマア貸物屋さんに渡して、今夜の所を

團七　エヽ、無駄を云ふな。百でも遣つて堪るものか。返してしまふワ。

かぢ　モシ、聞き分けて今宵一夜さ

團七　エヽ、役にも立たない事を。離さないかい。

ト無理に引ッたくる。この途端に、お梶が爪、蚊帳に搦み附いて拔けたる思ひ入れにて、指より血タラ〳〵と落ちて、敷紙へ血かゝる。お梶こなし。この體を見て權助思ひ入れ。

權助　ヤ、かみさんの手から、アレ〳〵、血が出るワ〳〵。

ト顫ふ。團七、蚊帳を權助に差附け

團七　ソレ、返すワ。持つてうしやァがれ。

ト突き附ける。權助わな〳〵顫うて、氣味惡さうに蚊帳を取つて

權助　エヽ、むごッちねえ男だ。

團七　蒲團はこの頃に返すぞよ。

權助　イエ〳〵、もう〳〵決して取りには來ませぬ。さて〳〵邪險な

團七　どうしたと。

權助　ハイ、慥かに受取りました。

ト捨て鐘になり、向うへ一散に逃げて入る。お梶、手の痛む思ひ入れ。團七介抱して

團七　今日はどういふものだか、豪氣にてめえ怪我をするぞえ。(トお梶が袂よりお繼が置いて行きし小粒の包みを落したるを取上げて)こいつはおれが預るぞえ。

ト義平次、奥より出て來て

義平　團七どの、後金の抵當に、いよ〳〵内儀を連れて行くぞよ。

團七　どうで出來ない三十兩。連れて行かッし。

義平　合點だ。サア、かみさん、おれと一緒に來さつしやいよ。

ト立ちかゝる。お梶悄りして

かぢ　ア、申し、義平次さんとやら。こりやお前、なんでわたしを

義平　御亭主の團七どのに、用立てた金の殘り、三十兩のその代り、こなたを連れて行つて、賣女にするのよ。

かぢ　エヽ、すりや、アノわたしに、勤め奉公。……モシ、團七どの、これにはお前

ト立寄らうとする。義平次押へて

義平　どつこい。亭主の側へはもう遣らぬ。否でも應でも連れて行く。サア、かみさん、わしと一緒に。

ト手を取つて引立てる。お梶指の痛む思ひ入れあつて

かぢ　アイタヽヽヽ。（ト手を押へる。）

義平　ヤ。どうした內儀。どこが痛んで（ト指を見て）こなさん、こりや指を切つたか。

かぢ　イヽエ、わたしや、ついした怪我。

ト立寄る顏を見て

義平　ヤヽヽヽ。先刻まで無疵な顏が。ヤア〳〵。こいつはとんだ疵物になつたワ。顏は大疵、兩手まで、この疵物がどうして〳〵、三十兩になるものか。團七どの、其方へ返す。金で寄越しやれ。

トお梶を團七の方へ突遣る。

團七　エヽ、この人も、その金が有る位なら、女房を連れて行けとは云はない。先刻の約束、不承であうらが、連れて行かッし。

トお梶を義平次の方へ突遣る。

義平　ハテ、そりやァ無疵で見た時よ。こんな疵物は要らないワ。

トお梶を突遣る。

團七　連れて行かつしやいよ。

義平　要らないよ。

ト兩方で酷く突廻す。この時、奥よりお市出て來る。お梶に縋つて

いち　申し、父さん、なぜ母さんを此やうに

かぢャ、其方は娘。

義平　ナニ、娘だ。そんなら金の代りに、小びつちよでも、疵物の親よりは増しだ。せめてこの子を

團七　それで濟むなら、連れて行かッし。

義平　合點だ。……駕籠の衆、頼みますぞよ。

駕舁　心得ました。

　ト出て來る。お梶、お市を抱へて

かぢ　アヽ、滅相な。わたしを遣らうと約束をさしやんした上、義理のあるこの子を、わたしが代りとは、そりや成りませぬ〳〵。草葉の蔭のこの子の母さんの、位牌の前へ立ちませぬ。

團七　コレサ。それでも金の代りには、あれでも遣らにやァ濟まないわえ。

かぢ　濟まぬというて、どうしてこの子を。

　ト遣るまいと縋る。

義平　コレサ、團七どの、水放れまで內儀を賴む。わしはこの子をあの駕籠で

團七　喰ひつぶしのあの娘、連れてござれ。

義平　合點だ。

　トお市を抱へ、外へ出る。お梶縋るを、團七引つける。その間にお市を駕籠へ乘せる。義平次穿き物を見て

コレ〳〵〳〵。おれの雪駄が片し違つた。こゝにあるのは合印しのこの雪駄の片し。アヽ、さては三吉めが穿き違へたな。

團七　マア、それなりに行かつしやい。

義平　合點だ。……ヤ、降つて來たな。鳴らねばよいが

ト片足違ひし雪駄を持ち、裸足にて菅笠を冠り、身拵へをする。雨、雷少し鳴り出す。

駕舁　アヽ、鳴つて來ました。

義平　早く頼むぞよ。

いち　母さんいなう。

ト捨て鐘、雷にて、嫌がるお市を無理に乘せて、義平次附いて向うへ入る。

かぢ　どうあつてもあの子は遣らぬ。コレ、娘。

團七　ハテ、大事ないわい。

トお梶は跡を追うて行かうとする。團七遣るまいとする。立廻りのうち、櫛箱より戒名の片袖出る。お梶取つて門口へ出る。團七續いて出ようとするを、お梶外より、しやんと戶を差し、押へて居る。

明けないかえ／＼。

ト内よりあせる。お梶外より戶へ掛け金を掛け、栓無きゆゑ、鬠棒を取つて栓にさす。これにて髮は亂れ、よろぼひ／＼花道へかゝる。向うより傳八、頰かむり、夕立にあつて出て來り、お梶を見て

傳八　かみさんか。傳八の手紙の返事は。
かぢ　知らぬわいなア。
　　トよろぼひながら、向うへ入る。傳八門口へ來て戸をしやくる。内にて團七戸を叩く。外にて
傳八　誰だ〳〵。
團七　おれだ。明けてくれ〳〵。
傳八　おれとは誰だ。
團七　團七だ〳〵。
傳八　ヤ、團七どのだ。……(ト外より戸をあける)手紙の返事は。
團七　ヤ、傳八か。
傳八　香爐はどうする。
團七　エヽ、用があるわえ。
　　ト行かうとする。立廻りに、行燈を蹴飛し、暗くなる。傳八取りつくを、團七見事に投げる。途端に蠅取り黐へ足を踏みかけ、行かうとしても行かれぬ思ひ入れ。其うち團七は刀を差し、花道へかゝり
お梶やアい〳〵。



ト雨車、捨て鐘、雷にて、
幕の外に團七呼びながら向うへ入る。捨て鐘、雷にてつなぎ。引返し。

幕

本舞臺、三間の間、うしろ、打抜き田圃。夜の景色。上の方に刎れ釣瓶の井戸。正面、草土手、葭に笹など茂り、舞臺前、流れ、水草。よき所稻むら。すべて入谷通り。本雨、大雷にて幕明く。

ト東西より、夕立にあひし仕出し、菅笠、蓆なぞかぶりし仕出し、捨ぜりふを云ひながら、左右へ別れて入る。此うち、矢張り時の鐘、雷にて、東の口より四つ手駕籠に桐油をかけしを、駕籠舁二人、裸身にて、菅笠にて棒鼻へ小提灯を吊し、掛け聲にて出て來る。後より義平次、三度笠、尻からげ、腕まくりして出て來る。駕籠舁本舞臺にて駕籠を立てる。義平次やう／＼追ひつき

義平　コレ／＼駕籠の衆、精出して遣つてもらはう／＼。

駕舁　モシ、如才はないが、餘り光るではござりませぬか。そして豪氣に辷るよ。

同　その上に、おらァ草鞋を踏み切り、いつそ跣足にならうか。

義平　エヽ、この手合ひは埒もない。この辷るのに跣足で舁かれて堪るものか。すぐに駕籠を投り出すワ。それはいゝが、内の代物が損ねるワ。マア／＼、しつかりと支度して舁いてもらはう。

駕舁　手廻しをよく、草鞋を足へくゝりつけやな。

同　はねの上るのが一倍氣障だ。

ト提灯の灯にて繩を拾ひ、草鞋をくゝしつける。此うち、義平次、捨ぜりふにて急き立てる。矢張り雷、捨て鐘にて、東の口よりバタ／＼にて、お梶一散に出て來る。やう／＼本舞臺へ來て、提灯の灯を見て、辿りついて

かぢ　コレ／＼、駕籠の衆。今こゝへ娘の子を乘せた駕籠は來はせぬか、知つてなら、どうぞ敎へて下さりませ／＼。

ト義平次、この聲を聞き

義平　ヤ、かみさん、爰までござつたか。

かぢ　お前は義平次さん。そんならこの駕籠は娘のお市か。エヽ、嬉しや好い所で。コレ、娘。

ト寄ると、駕籠の中にて

いち　母さん、來てかいなア。（ト駕籠の中にて焦る思ひ入れ。）

かぢ　オヽ、お市、そこに居やるか。わしが來た程に、氣遣ひしやんな。コレ、こゝへ出て

ト寄らうとするを、義平次手荒く引退け

義平　さうはならねえ。駕籠の衆、早く遣らつしやい／＼。

駕昇　合點でございます〱。

ト行かうとする。お梶縋つて

かぢ　イエ〱。いま内でも云ふ通り、義理のあるあの娘、お前の所へわたしが代りに、どうして遣られよう。慈悲でござんす。どうぞ内へ、戻して下さんせ〱。

義平　イヤ〱。戻して遣つたら其方は好からうが、此方がそれでは濟まぬワ。コレ、内儀、一體あの團七どのに、五十兩の貸金、内二十兩は代物で預かり、殘つた所が三十兩、その金の濟されぬその時は、女房のそなたを連れていても、大事ないと云ふゆゑに、いかさま、色氣のある顏附き、相談物と思ふ内、それ〱、貴樣の顏に大きな生疵。イヤモウ、三文にもならぬ大疵物。それぢや濟まぬといふうちに、年の行かぬこの娘、まだ四五年は寢かし物でも、取らぬより增しと思ひ、連れて歸るこのお市。コレ、お梶どの、なんで邪魔をするのだ。

かぢ　サア、その譯は御尤も。お前に無理はこざんせぬが、どうもあの子は先妻の、義理があるゆゑ、勤めさせては

義平　遣るが否なら、團七へ、貸した金を貴樣戻すか。

かぢ　サア、その金があるならば、なんの此やうに云ひませう。どうぞわたしでその金を

義平　エヽ、厚かましい。その面の疵で賣り物なるものか。野玉に遣るにも病身者。どんな盲目に見せたとて、三十兩の抵當に、どう連れて行かれるものか。いけ厚かましい女だわえ。(ト踏み飛ばす。)

かぢ　さやうではござりませうが、そこをどうぞ、どのやうな、惡い奉公、憂い、辛い、水仕女に賣つてなと

義平　おかッしやい。水仕奉公で、大枚な、三十兩が埋るものか。七面倒な。構はずと、遣らつしやい

遣らつしやい。

駕舁　合點でごんす。(ト舁ぎ上げる。)

かぢ　エヽ、コレ、あの子を遣つては、どうも

義平　エヽ、退きやれな。

ト引退けて、突き飛ばす。又縋るを義平次引退け、捨ぜりふにて花道へかゝり、駕籠は先きへ立ち、また駕籠へ行かうとする。義平次引退ける。立廻りよろしく、時の鐘にて、東の口より團七、大小、尻からげ、破れし傘をさし、出て來り、花道の樣子を窺ひ、足早に來て、この中へ入り

團七　義平次どのか。

義平　オヽ、團七どのか。

かぢ　エヽ、こちの人。

トよろぼひかゝるを、團七お梶を押へつける。

團七　病みほうけても達者もの。ようマアこゝへ。

義平　イヤモウ、跡を追うて來て、駕籠に縋つて、小煩くつてなるものではないわな。

團七　ハテ、こなさんもおれが娘を、おれが賣るに、何處から點の打ち手はない。構はずと、連れて行かッしやいな。

義平　それでも足手まとひな内儀。こなたを頼んで、この義平次は、夜更けぬうちに

團七　きり〳〵ございな。

義平　サア、駕籠の衆、頼むぞ。

駕舁　心得ました。

かぢ　イエ〳〵、あの子はどうあつても

ト義平次が帯に縋る。義平次振り切る途端に、お梶が手に義平次が帯に挾みし合印しの雪駄片し殘る。團七捨ぜりふにてお梶を引附ける。引立て〳〵、舞臺の方へ引戻す。其うち、駕籠を早め、義平次捨ぜりふにて向うへ入る。お梶雪駄の片しを持ち

アヽモシ、どうぞお市を戻して下さんせ〳〵。

團七　エヽ、打つちやつて置きやァがれ。
ト引立て〳〵連れて來る。花道立廻りのうち、お梶持つたる雪駄の片しを花道へ捨てたるまゝ、團七に引立られ、本舞臺へ來り、兩人よろしくあつて

かぢ　コリヤ、こなさんは、あの子にどうでも、勤めをさする心にならんしたかいなァ。團七どの、お前はなう。

團七　コレ、エヽ、おれだといつて、實の娘のあのお市、賣る氣はさら〳〵なけれども、何をいつても三河屋の義平次に、返す工面が出來ないゆゑ

かぢ　イエ、そりやお前の心柄。身貧な中に日頃の惰弱。友達衆の交際に、お上で法度の勝負事、それに使うてあの金も

團七　イヽヤ、身持を放埒に、惡交際を合點で、身たけに餘る錢金を、使ふをわりやァ團七が、身持惰弱と思ふのか。

かぢ　思はいでかいなァ。あのやうに可哀さうに、お市を廓へ

團七　われが代りに、現在の、肉身分けし娘をば、金の抵當に遣るおれを、酷い心と思ふのも道理。コ

レ、お梶、貧乏すりやア發明な、われも愚鈍になつたのか。

かぢ　エ。

ト團七、お梶が帶に挾みし袖を見つけ、こなしあつて

團七　コレ。（ト片袖を取つて）この片袖の御戒名、身の放埓も舅御の

かぢ　敵を討つて下さんすか。

團七　コレサ、靜かに云へ。（ト合ひ方。捨て鐘になり、團七思ひ入れあつて）惡友達を合點で、茶屋歩きの
その上に、素見戻りの中田圃、向うの客は歴々と、見ると嚇して突ツかゝり、喧嘩仕掛けも仇敵、
佐賀右衞門めが行くへをと、彼奴を尋ねるその爲に、小見世に泊り、樣々な、世間の噂話をも、
手蔓を聞き出す便りとも、惡い身持を合點で、浮れ歩くを女氣の、われは眞の團七を、思うて居
るも無理ならねど、いはゞ連添ふ女房に、疑はれるが口惜しく、一日片時も忘れはせぬ。コレ、
この片袖の御無念を、思へば〳〵

ト戒名を見詰めて、無念のこなし。

かぢ　すりや、こなさんのこの程の、身を放蕩に持ちなすも、矢張りわたしが父さんの、敵の在所を尋
ぬる手蔓に

團七　コレ、連添ふおぬしにこの胸が、割つて見せたい。見せたいわえ。

ト胸を掻きむしり、無念の思ひ入れ。

かぢ　イヽエ、却つてこなさんの、その胸割つて見る時は、お前の武士が立ちますまい。

團七　曇らぬ胸を打割つて、見せたら武士が立たぬといふのか。

かぢ　コレ、この手紙の文言で（ト以前の狀を出す。團七見て）

團七　ヤ。そりや浮牡丹の香爐の

かぢ　モシ、なぜにお前は此やうな（ト合ひ方變り、日ぐらし、蛙の聲）。この程、お前の惡交際、何が心に違うてやら、ツイ云ふ事も棘々しく、腹立ち紛れ投げ打ちの、顏へ當つて此やうに、生れもつかぬ面の疵。まだこの上に、どの樣な、無理我儘を云はんしても、夫の心に違ひしは、女房のわたしが誤りと、心で心取直し、見ぬ振りしても此やうな、他人に云はれぬ恐ろしい、質屋の手代と馴れ合つて、あの浮牡丹の香爐とやら

團七　エヘン／＼。（ト咳にて紛らす）。

かぢ　サ、道に背いた大膽な、此やうな事がお上へ聞え、お前の難儀になる時は、コレ、わたしやどうしやんせう。モウ、この年月の艱難も、お前を力に父さんの、敵が討つてもらひたさ。それにお

前は恐ろしい騙り事。わたしばかりか、お市まで。あの子は不便に思はんせぬか。コレ、可愛うはないかいな。在つて甲斐ないわたしは繼母、あの子の親身はお前ばかり。娘の身の上不便と思ひ、わたしが願ひも侍ひの、刀に掛けてのお志し。それ樂しみの女房の、心を休める善心は、此やうな惡い企み事。ふつ〳〵この上思ひ切り、どうぞわたしと義理ある娘、二人を不便とこちの人、惡者交際止めにして、力になつて下さんせ。コレ、拜みますわいな〳〵。

ト手紙を差しつけ、いろ〳〵思ひ入れ。團七こなし。

團七　尤もだ〳〵。連添ふ男は恐ろしい、道に背きし騙り事。只一通りの女夫仲、轉び合ひでもある事か、力と頼み、頼まれて、心底づくの夫婦合ひ。隱して居たが、もうこれぢやア、話さにやならぬ騙りの起り。その恐ろしい騙りといふ事

かぢ　その恐ろしい騙りといふ事

團七　せねばならぬといふ筋は、兵太夫どの、大殿より、預り召されて失ひし、千壽院力王の、刀の行くへ知れたるゆゑに

かぢ　エ。すりや、アノ、お家の重寶たる、千壽院の刀の在所が

團七　その置き主は知れねども、淺草邊の質見世に、刀の質入れ。請け戻すには大枚な、先立つ物は金

ばかり。なんぼ女房のおぬしだとて、度毎いふも氣の毒と、思ふがゆゑに道ならぬ、事と知りつゝ香爐の騙り。その外、これまで樣々に、橫しま非道も力王の、刀が欲しさの事ながら、連添ふ女房の其方の手前、面目ない事だらけ。もう〱、この團七が、武士はすたつた。コレ、娘が事を賴むぞよ。舅の敵、師匠の仇、討たずに死ぬが口惜しいわえ。（ト大肌ぬぎになり）お市が事を、くれぐ〱も賴むぞよ。

ト腹を切らうとする。お梶驚き縋つて

かぢ　アヽコレ、こなさん、こりや、なんでマア、大膽な

團七　おぬしが手前、面目無いゆゑ、腹を切るわえ。離せ〱。

ト思ひ入れ。お梶、この手に縋つて取附き

かぢ　イエ〱、離さぬ〱。こりやお前、氣が違うてか。

團七　オヽ、氣が違うた。逆上せもした。殺してくれろ〱。

かぢ　イエ〱、そりやお前血迷はしやんした。氣がのぼつてぢや。モシ、お前が死んでこの袖の、無念の最期のその折を

團七　忘れはせねど、武士道が立たぬゆゑ、腹切つて

かぢ　わたしが力にならしやんす、その約束ぢやござんせぬか。

團七　サア、それ知りながら團七が、死なねばどうも、過ぎ行かれし兵太夫樣、二つには、其方の伯母御の琴浦どの、今日も便りを寄越されて、敵を尋ぬる旅立ちは、いつする事ぞ、べん／＼と、なぜこの江戸に足を留め、おくれが來たかと思し召す、御尤もとは思へども、口から出次第、出任せを、云つて遣つたも、一寸遁れ。まことは旅を急げども、路銀が無さに、べん／＼と、延引するが佛へ立たぬ。殊に、女房といふものゝ、師匠の娘のこなたゆゑ、この上苦勞はさせられぬ。というてこの儘これぎりに、捨てゝ置いては團七が、コレ、この顏が立たぬわえ。所詮ならない敵討ち。人に笑はれ、譏られぬ、その前方にくたばるが、まだしも舅へ云ひ譯と、思ひ詰めての切腹だ。女房、決して留めるな。離してくれろ／＼。（ト腹切らうとする。）

かぢ　（その手に縋つて）サヽ、尤もでござんすが、コレ、團七どの、お前が死んではこの袖の、御戒名が未來の迷ひ、討ちたう思ふもかよわきわたし。誰が力になりませう。モシ、その心を取り直し、どうぞわたしが助太刀して

團七　サ、討たせたいにも路銀は無し。旅立ちが出來ねば、どうで生きては

かぢ　アヽ、コレ、滅多な事を。

團七　イヽヤ、離せ〳〵。
かぢ　コレ、危ないわいな〳〵。
團七　エヽ、離せといふに。
　　ト留めるお梶を振り切るとて、誤まつてお梶が急所を切る。「ワツ」と倒れる。團七狼狽へ、駈寄つて
　コレ、お梶。どうした〳〵。また持病が起つたか。コレ。（ト引起し、こなしあつて）ヤ、こりや怪我をしたか。コレ〳〵、餘程切つたな〳〵。コレ、氣を慥かに持て。エヽ、コレ、血止めも無いわえ、血止めも無いわえ。
かぢ　イエ〳〵、大事ござんせぬ。こりや怪我でござんす〳〵。お前の命を助けたく、留めたわたしがこなさんの、刀で思はぬこの深手。（ト縋りついて思ひ入れ）。苦しうござんす〳〵。怪我とはいへど、刀疵、こりやモウ、わしは、助かる事は叶ふまい。この儘死ぬるでござんせう。命惜しうはなけれども、願ひ叶はず死ぬると思へば、死にともない〳〵。
團七　オヽ、尤もだ〳〵。死ぬる事ぢやァない。氣遣ひするな〳〵。コレ、この位な怪我で、ナニ、死ぬものか。案じるな。……とはいふものゝ、急所へかゝりしこの深手。可哀や、わりやァ
かぢ　とても死ぬるでござんせう。死ぬる命は惜しうないが、願ひに願ふ父さんの

團七　敵を討たずに、殺しては、この團七もおぬしが親、草葉の蔭の舅御へ（ト疵口を見て思ひ入れあり）。可哀や、女房、怪我とはいへどこの深手では。こりやモウ、われは、とても

かぢ　そんならわたしや死にますか。コレ、團七どの。約束事と諦めりや、命惜しうござんせぬ。只この上は、わたしに代つて父さんの、敵を討つて下さんせ。お前を頼むはこればかり。只いとしいのはあのお市。身腹痛めぬあの子の事、男のお前の手一つで、世話さしやんすが迷ひの種。殊に、尋ぬる刀の行くへ、尋ね出して、コレ〳〵、（ト片袖を取上げ）この戒名の片袖へ、どうぞ手向けて下さりませ。（ト縋つて思ひ入れ）。

團七　氣遣ひするな。娘はおれが實の胤、われが云はずと養育する。必ず迷はず、往生しろ。

かぢ　嬉しうござんす。くどうも頼むは、父さんの、敵を討つて、力王の

團七　刀の詮議、舅の仇……討つてやりたいものなれど、われが死んだるその後では、敵は討たない。否だワ、エヽ。

かぢ　エ。そりや又お前、な、な、なんで。（ト武者ぶりつく）。

團七　今こそ云ふが、われが親を、ぶつぱなしたは、おれだわえゝ。

かぢ　エヽ。ナニ。父さんを、アノお前が

ト寄るを、團七脛にて踏みとばし、屹度思ひ入れ。ト誂への合ひ方。一つ鉦の念佛、蛙の聲。

團七 殺して置いて佐賀右衞門、彼奴もかたづけ今日までは、隱して居たが、よく聞けよ。自體藝者のお辰めに、惚れたが病ひ、無いもせぬ、金を遣へどその阿魔も、德兵衞といふ色があり、此奴出來ない相談と、顔の好く似たわれゆゑに、佐賀右衞門めをお先きにして、この團七は助太刀と、伯母を騙して女房に、持つては居たが、今日といふ今日ふッつりと、否になつたも無理ぢやァあるまい。殊に、尋ぬる千壽院、その力王の刀はこれだワ。……われを切つたがわれが親の、奪られた卽ち千壽院。尋ぬる刀は、これだわえ。

ト突出して見せる。お梶よろぼひ寄つて

かぢ すりや、助太刀を賴んだる、夫が現在、父さんを

團七 殺して今まで隱して居たが、もうその手では助からぬ。女房ゆゑにあから様、云つて聞かすもわれが親の、兵太夫をおれが殺したその場所で、奪られたばッかり家は絶え、取返さねばならぬ刀、その力王の一腰で、ムザ〳〵死ぬも約束か。ハテサテ不便な、事だなア。

トお梶口惜しき思ひ入れあつて

かぢ そんならこなたが眞の敵か。コレ、エヽ、口惜しや。(トいろ〳〵思ひ入れ)折も折とてこの病ひ。

殊に深手を負うた身の、所詮願ひは叶ふまい。さうとは夢々知らぬ身の、日頃の無理や無得心、辛抱するのも父さんの、敵が討つてもらひたさ。枕を並べ、肌を觸れ、恥かしい事打明かし、物事包まず明け暮れに、眞實盡せし我が夫。それが現在、家の仇、親の敵と露知らず、帶紐解いて添臥しせし、道に違うたわたしが身は、神佛にも見離され、世間の人の口の端に、かゝると思へば、恥かしいやら、口惜しいやら、身も世もあられぬ。モシ、父さん（ト片袖を取上げ思ひ入れあつて）夢になりとも未來から、なぜ敎へては下さんせぬ。わたしや口惜しい。口惜しいわいなア。

團七　成る程、こりやア尤もだ。したが、よほけたわれが親父、草葉の蔭からこの事を、知らせる程の器量があれば、おれに切られて死にもしまい。返らぬ事と諦めて、亭主の刀で死んでしまへ。ハテ、亭主が女房を、返り討ちとは珍らしい。敵同士でも夫婦は二世、先きへ殺して遣る程に、未來は一つ蓮の樂しみ。半座を分けて、待つてけつかれ。

かぢ　エヽ、口惜しいその惡口。夫に持つたも敵が討ちたさ。親の仇をやはかこの儘、喰ひついてなと、せめて恨みを

トよろぼひかゝるを、團七切り倒す。お梶苦しみながら、武者ぶりつく。よきあたりより、忍び三重、日ぐらし、蛙の聲、一つ鉦、念佛。本雨降り來る。時の鐘。雨人物凄き立廻りにて、團七お梶をむ

ごく切り倒し、とゞめを刺し、片袖を拾ひ取り、血刀を拭ひ、鞘に納め、死骸を流れへ蹴込み、思ひ入れあつて

團七　なんぼ敵の娘でも、一旦抱寝をした女房、三百落した心持ちだ。(トあたりを見廻し、以前の手紙を拾ひ取り)香爐の譯を書いたる手紙、ひよつと人に拾はれては

トずた／＼に破り、捨てる。これにて又雷頻りに鳴る。團七捨ぜりふにて耳を閉ぐ。この時、向うより傳八、俵を冠り、駈け出て來り

傳八　桑原々々。(ト本舞臺へ來り)エヽ、煩く鳴る雷だ。あの團七に逢ひたいものだが

團七　さう云ふは誰だ。

傳八　ヤア、團七どのか。

團七　傳八か。

傳八　コレ／＼、こなさんは／＼(ト武者ぶりつく)香爐を渡すといつて、三兩騙り、見せたばかりで代物は渡さず、その上、わしは內を駈落ち、今では後へも先きへもだ。先刻內儀に渡して置いた、手紙の返事はどうさつしやる。どうするのだ／＼。

團七　コレサ／＼、靜かに云へ。三兩遣つたら、云ひ分はあるまいが。

傳八　そりやア金さへ寄越せば料簡もしようが、サア、金を寄越しやれ〳〵。

團七　ハテ、遣るわえ〳〵。ナニ、三兩ばかり、サア、こゝへ手を出せ〳〵、

傳八　サア、三兩、寄越さつしやい〳〵。

ト手を出す。團七その手を捕へ、懐を探す振りをして、利腕をグッと締め上げる。

アイタヽヽヽ。こりやアどうするのだ〳〵。……ヤ、こゝらは血だらけだ。

ト聲を立つるを、立廻つて、井戸の端を押しつけ、見事に井戸へ突込み、刎ね釣瓶の紐を切る。石は井戸の中へバッタリ落ちる。時の鐘の頭。向うより灯り見ゆる思ひ入れあつて、團七下へ寄つて窺ふ。矢張り時の鐘、忍び三重、蛙の聲。本雨降つて來る。向うより大和屋徳兵衛、一本差し、帷子の形、羽織の帶へ挾み、三度笠を抱へ、裏附きを後ろへ挾み、尻からげにて、王子海老屋と書いたる貸ぶらを灯し、お辰（お梶と早替り）帷子の形、跣足にて、裾をからげ、裏附きを持ち、手拭を冠り、青天井の日傘の濡れたるを、相合ひにさして出て來る。

徳兵　アヽ、まだ、北の方が豪氣に光るわえ。

たつ　鳴らねばようござんすが

ト捨ぜりふにて本舞臺へ來る。團七は花道へ行きかゝり、義平次が落せし片足の雪駄、足に觸るゆゑ、

ツッと拾ふ。お辰は戒名の附いたる片袖、足に觸るゆゑ拾ふ。

徳兵　アヽ、モシ、何やらこゝに

何がある。（ト袖を取上げ見て）これ、コレ、慥か袖のちぎれ。

たつ　何やら文字が

徳兵　夏月院劍譽信士。

たつ　そりやそれ、戒名。

徳兵　おいら二人に拾はれて、回向を受けたく、無緣の佛が

たつ　エヽマア、不氣味な

團七　こりや、山形に丸印し。

たつ　それ、血がついて

徳兵　ヤ。

ト提灯で見ようとする。また雷鳴ると、草叢より誂への蛇、お辰へ這ひかゝる。慴りして

たつ　アヽ、コレ、蛇。

徳兵　血の滴り。

團七　エヽ。

ト雪駄を打附けんとする。蛇はお辰へかゝるゆゑ、「ワツ」と言うて提灯を落す。これにて德兵衞は袖、團七は雪駄、一度に懷へ入れる。これを木の頭。雷頻りに鳴る。お辰、德兵衞に縋りつき、耳をふさぐ。德兵衞介抱して

德兵　桑原々々。

トこれを刻みにて、

幕の外、捨て鐘、雷にて、團七向うへ入る。シヤギリ。

拍子幕

大切

深川中裏の場

洲崎敵討の場

（作者　勝俵藏）

役名――大島團七。大和屋德兵衞。釣舟の三吉。浪人、五郞。同、石塔半助。三河屋義平次。貸物屋、木片の權助。若い者、友七。德兵衞女房、お辰。同妹、お仲。藝者、お磯。同、お照。團七娘、お市。義平次女房、お虎。

本舞臺、三間の間、平舞臺、向う暖簾口、押入れ、佛壇。下の方、障子、下座の口、九尺の二階、この軒

に、富ケ岡八幡宮と書いたる丸提灯を掛け、誂への通り、いつもの所に門口、大和屋といふ暖簾を掛け、この外、板塀の喰ひ違ひ、中裏、子供屋の體。幕の内より、上の方に、藝者お磯、同お照、部屋着の形にて、鏡臺に向ひ、身拵へして居る。妹お仲、序幕の形にて、眞鍮の獅嚙へ、廣島薬罐を掛け、茶をほうじて居る。木片の權助、風呂敷を脊負ひ、立ちかゝり居る。屋臺囃子、佃節にて幕明く。

なか　サアく、お磯さんも、お照さんも、今日はいつもと違ふ。早う身拵へしてしまひなさんせ。

權助　それくく。今日は影祭りの宵宮。十二軒に、ゐざり屋臺が出來て、アレ、あのやうに太鼓の音で浮きくする。お前方も口が寄つたら、早くお客を浮かし立てるがいゝ。

いそ　サア、人は祭りで浮きくすれど、わたしや、モウ、いつそ氣合ひが悪いによつて

なか　それくく、お前の氣合ひは、あの三吉さんの噂。悪い噂を聞いたぞえ。

權助　ほんに、こゝのお磯さんは、あの釣舟の三吉野郎に惚れて、逢ふといふ事だが、もうおてちんにしなさい。あの野郎は、道具屋の家を勘當された腹立ちやら、何か譯の悪い物を盗み出して、道無しにしたとやら。この頃中尋ねられて居るといふ事。今にでも捕まりやァ兇状者。……そんな者に引ッ懸つて居ようより、この權助と乘り替へて見な。手あり名古屋は、城が堅いよ。

ト後ろより寄添ふ。お仲突退け

なか　ア、モシ、權助さん。子供衆の前でお客の噂。お前も粋の樣にもない。たしなましやんせいなア。
權助　オツト、これは大あやまり。成る程、德兵衞さんの妹程ある。形は小さうても、商賣、道に依つて賢い娘御だ。
なか　サア〳〵、兄さんの歸らしやんせぬ內に、早う身拵へしてしまひなさんせ。……コレ〳〵、お市、早う嗽ひの湯を汲んで上げぬかいなう。お市や〳〵。
いち　アイ〳〵。（ト奧よりお市、前幕の形にて、嗽ひ茶碗へ水を入れ、持つて出て來る。）伯母さん、湯を持つて來たわいなア。（トお磯の前へ置く。）
てる　オヽ、この子とした事が、わたしらを伯母さんとは、オヽをかし。
いそ　お照さん、其やうに笑はぬもの。奉公に來た當座は、誰しも覺えがある事ぢやわいなア。
權助　ハヽア、そんならその子は下地ッ子かえ。
てる　アイ、此方のおかみさん、お辰さんの親御、三河屋の義平次さんとやらが連れて見えて四五日あとから來て居やんすが、それは〳〵、可愛い子ぢやわいなア。
權助　ドレ〳〵。（トお市を引寄せ見て）ヤア、おぬしはアノ入谷の浪人、團七さんの娘ぢやァないか。
いち　お前は、わたしが內へも常住來て、母さんを苛めた伯父さんぢやな。

權助　人を苛めるは貸し物屋の商賣。エヽ、あの團七めも、この娘まで賣るやうになつたか。それはさうと、この子を中繼ぎしたといふ、三河屋の義平次も、爰へ來る筈だが、もう來さうなものだが。

ト門口より向うを見る。屋臺囃子、佃になり、花道より義平次、以前の形にて、菅笠持ち出て來る。

義平　オヽ、こりやァ損料屋の權助どん。もう來て居るか。サテ、早い足の。

權助　サア、先刻ちよつと話し合つた理窟。是非おれでなければならぬといふ事ゆゑ。

義平　サア、それぢやが、ちつとでも錢ッ子といへば、ひづらを張つて人先きへ。

權助　ハテ、そこが俗名の木片だわな。時に、いよ〳〵團七が

義平　コレサ。……マア、娘が內で風を入れにやァならぬ。ヤレ〳〵、暑いぞ〳〵。（ト內へ入る。）

なか　これは親仁さん、ようお出でなされました。

義平　オヽ、聟が妹のお仲、德兵衞は內に居るか。

なか　サア、今、風呂へ

義平　ヤ。

なか　サア、今朝から遠い所へ行くと云うて、居やしやんしたゆゑ、まだ

義平　滅多には歸らないといふか。……して、娘は。

なか　サア、今日は祭りの宵宮ぢやによつて、お重をするとて、お煮染めの世話燒いてゞござんす。

義平　そんなら奥にか。こりや好い間だわえ。マア、此方の事より……コレ、お市、こゝへ來い。(トお市を引寄せ)われをこゝの內へ置くと、酷い目に合はせるから、吉原といふ、旨い物を食はせる樂な所へ遣る程に、おれと一緒に來や。

ト連れて行かうとする。お磯、お照、引留め

いそ　モシ〳〵、この子を何處へ連れてお出でなさんす。

義平　何處であらうと、打つちやつて置け。

てる　イエ〳〵、なんぼ此方の旦那さんの舅御さんでも、お留守といひ、連れてお出でなさんすなら、せめておかみさんにでも

義平　やかましいわえ。娘に知らせぬが山だ。そこ退きやれよ。

てる　さう仰しやれば、アレ、おかみさん〳〵。

なか　姉さんえ〳〵。

義平　やかましい。默れ〳〵。(トロを押へようと踠く。)

たつ　オイ〳〵、忙しない。何ぢやぞいなう。

ト合ひ方になり、暖簾口よりお辰、やつし女房、莨盆を提げ、出て來て、義平次をちよつと突廻す。

義平　ヤア、娘か。
たつ　父さん。
義平　惡い所へ
たつ　ようござんしたなア。（トお市を圍ふ。）
なか　モシ〳〵、姉さん、あのお方がこのお市を、何處へやら連れて行かうと
たつ　コレ〳〵、何の父さんが、そんな事を云はしやんせうぞ。
いそ　イヽエイナ。旦那さんや、お前さんが居やしやんせぬこそ幸ひ
てる　吉原とやらへ遣ると云うて
たつ　アヽコレ、わが身までが同じやうに。尤もこのお市は、父さんの口入れで、此方の内へ來たなれど、金渡して證文した奉公人、それを滅多に連れて歸れば、勾引しとも、踏むとも、それを知り
つゝなんの、父さんが
磯照　イヽエイナ、たつた今
たつ　まだかいなう。わしが爲には父さんなれど、こちの人とは義理ある親子仲を、あら探すやうな惡口云ふと、聽かぬぞや。（トこれにて三人顏見合せ、思ひ入れ）。

權助　したり。流石はこの頃まで、土橋に出て居て、三勝ぢやァないが、人馴れさんしたお辰さん。挺でも行かない義平次どのに、爪を咬へさせる今の一言。徳兵衛さんはあやかり者だ。

たつ　何を人を嬉しがらすやうに。尤もこちの人の事は、座敷に出て居る時分ふと云ひ交はして、わたしが勝手に持つた夫。それを不足も言はず、添はせて下さんした父さん、、たびを拍子に無理我儘。

義平　ヤ。

たつ　それ云はれても諸かにやならねど、それを言はずに、それは〳〵、不便がつて下さんす。マア、此やうなお慈悲深い親は。金の草鞋穿いて尋ねてもあるまいと、常住拜んで居るわいなァ。

義平　コレ、お辰、嗜ませるな。われがさう丸めても、今日はおれが

權助　アヽ、コレサ、さうかさ押しに物を云つちやァ、肝心の頼む事が……ナ。

義平　成る程。そんならおれが云ふ事は、いづれ徳兵衛に逢つて、マア、貴様の頼みを

たつ　父さん、わたしに頼みとはえ。

義平　サア、そりやァ何よ、……今日は祭りの宵宮だから、酒を一杯ねだらうな。

權助　それ〳〵。義平次どのを待ち合せて、馳走してもらはうと

たつ　そりやモウ何より。此方もお祭りの身祝ひ。……コレ〳〵、お仲さん、お市を連れて、勝手へ行

て、早う肴を拵へやと、云ひ附けて下さんせ。
なか　アイ〳〵、そんならわたしや（ト行かうとして）モシ〳〵、姉さん、お磯さんを粂本から、晝仕舞ひ云うて來たぞえ。
たつ　アノ粂本から……イエ〳〵、今日はお磯は遣られぬわいなう。
いそ　エ。……なぜわたしを座敷へは
たつ　サア、この頃の素振りと言ひ、今日は取り分け氣合ひの惡さうな顏色。滅多に座敷へは
義平　それ〳〵。惡足のあるお磯。當分用事で糺明させやれ。
いそ　そんならわたしは
つた　二階住居で養生しや。
てる　日頃に似合はぬ
たつ　ハテ、樂しみ無うては勤まらぬと、異見云うたは昔の事。
權助　今時は氣が善いと、拜み倒しに倒されぬやうに
たつ　鬼と云はるゝわたしの仕置。
義平　それでこそおれが娘。金貯めて親に寄越せよ。

權助　慾と云つちやァ微塵も無い。
なか　そんなら姉さん。
いそ　どうでも二階へ。
義平　そのお市を（トちよつとお市へ寄るを隔てゝ）
たつ　ハテ、その身を恨んだがようござんす。
なか　サア、ござんせ。
ト流行り唄になり、お磯思ひ入れあつて二階へ上ろ。お仲はお市を連れ、お照附いて暖簾口へ入る。
權助　成る程。その氣でなくつちやァ、この商賣はのだらないてナ。
たつ　イヤモウ、わたしが女房馴れぬと、笑はれまいと思へば、大抵や大方……大方と言へば、もう肴が出來るでござんせう。父さんも、權助さんも、一つお上がりなさりませぬか。
義平　イヤ、今頼みと云つたは、酒の事ではないよ。
たつ　エ。そしてマァ、外に。
義平　サア、據ない
たつ　して、その頼みと云はしやんは

權助　サア、それはの

義平　早く云はつしやいの。

權助　サア、どうも小ッ恥かしくつて

義平　エヽ、埒のあかない。お辰、高が斯うよ。娘の前ではちと遠慮だが、この權坊が、約束した所へ遣る文を、書いてもらひたいとよ。

たつ　ホヽヽヽ。何ぢやと思や、滅相な。わたしがほんのにじり書き。自身書いて遣らしやんすが、結局先きで

權助　イヤ〱、先きの色めは大能書。おれのやうな金釘の折れでは愛想づかし。そこで能書の者と考へた所が、師匠樣へは持つて行かれず

義平　おぬしが能書の事を知つて居て、おれへの頼み。ちよつと書いて遣りやれな。

たつ　さう云はしやんす事なら（ト掛け硯を持つて來て、お辰紙を出し）してマア、何と書くのぢやえ。

權助　ハテ、マア、知れた、一筆しめしり〱、とやらかしてくんなさい。

ト　お辰その通り書いて

たつ　一筆しめしり〱

権助　この間は、ゆる〳〵御見なし、つもる御物語り致し、今に〳〵忘れかね、斯様に我が身も任すからは、この世は愚か、二世も三世も

たつ　エヽモウ、父さんの前で

義平　野暮な。差合ひが要るものか。

トお辰書いて

たつ　して、この後は

権助　御見の折申せし通り、何卒此方の暇を取り

たつ　エ。……お前、誰に暇を取るのぢやえ。

権助　ハテ、自方になつてもまだ親方持ち、本店の暇を取るのサ。

たつ　エヽ、さうでござんすか。（ト書く。）

権助　一日も早く、世間晴れて女夫に、神かけ祈り〳〵

たつ　祈り〳〵

義平　もうそれでよからう。

たつ　して、宛名はえ。

權助　おこつ樣……イヤ〳〵、おを附けまい。只七樣……こつより。
たつ　こつとはえ。
權助　ハテ、こつサ。
たつ　テモ、をかしい。
義平　ハテ、そりやァ權と書いては目立つから、木片のこつであらう。
權助　それサ。仇名の頭へこつと書いてやりやァ、木片の權は承知だわな。
たつ　成る程。そんな事もござんせう。そんならこれでようござんすか。（トくる〳〵卷き上げ渡す。）
權助　七樣まゐる。こつより。……有り難い〳〵。
義平　權坊、しつかり禮をしやれ。
權助　そりやァ承知サ。わしもその氣で、持つて來たこの風呂敷包み。
　　　ト脊負つてゐる風呂敷包みより前幕の蚊帳を出す。
たつ　權助さん、この蚊帳はえ。
權助　こりやァ、アノ、大島團七どのへ貸して置いた蚊帳だが、お前の所で飯焚に吊らせる蚊帳が要ると、この間の約束ゆゑ、持つて來たのサ。

義平　そんならこれを今の禮に。

權助　ナニ、上げちやァ失禮、一分二朱二百サ。

義平　おきやァがれ。禮に、けん五樣儲けられるも有り難い。ナア、娘。

たつ　イエ〳〵。この間から尋ねて居た蚊帳。持つて來て下さんしたは、直ぐに禮ぢやと思うて居やんせう。

權助　その代りに、團七が所の吊り手にした、古腰帶がおまけサ。

ト腰帶にて卷いて、押入れの前へ置く。

義平　時に、先刻の肴も出來たらう。德兵衞が歸るまで

權助　禮をせぬ代り、御馳走になりませうか。

たつ　權助さんは格別。父さんは、もう

義平　また歸したがるか。

たつ　さうぢやなけれど、いつもとは違ふ。今日はどうぞ機嫌よう

義平　ハテ、祭りはおれも知つて居るワ。

たつ　そんなら奧で

義平　權坊、來やれ。

卜屋臺囃子、佃になり、義平次、權助、暖簾口へ入る。合ひ方。お辰、奥、外へ思ひ入れあつて、腰の巾着より鍵を出し、押入れの錠を明け、戸をあけると、中より釣舟の三吉、以前の形にて出て

三吉　お辰さん、誰も居ませぬか。

たつ　今朝日朝樣へ參りに行つた戻り、まだほの暗いに寺町で、お前に逢うたところ、ちよつとした譯で、人に逢はれぬ身の上、晝の中は隱して置いてくれぬかとの頼み。こちの人德兵衛どのは、お前の親御に恩もあり、懇ろ合ひと日頃の話。内へ連れて戻つたれど、内外の手前、あの押入れへ、隱して置いてまだ間がないゆゑ、こちの人には逢はせねど、マア、どういふ譯で、人に逢はれぬ身の上ぢやえ。

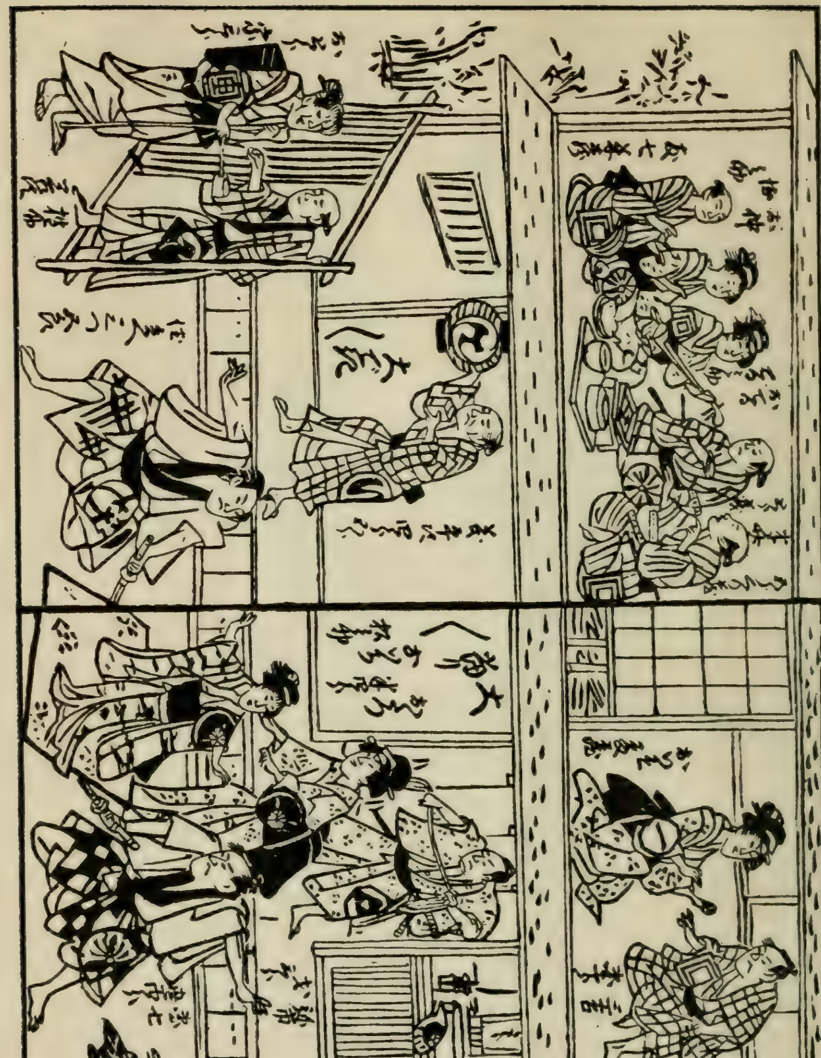
三吉　サテ、それはサ

たつ　喧嘩でもして。ひよつと人でも

三吉　ナニ、とんだ事を。身の上はこんなでも、そこは江戸ッ子。乘り切つた事に

たつ　成る程、元は道具屋の息子樣。そんな事も

三吉　なにサ。身に曇りかすみは少ともないが、さう云つてお前の所へ來たは



たつ　お磯に逢はうと思うてかえ。

三吉　エ。

たつ　深う馴染んだ仲ぢやによつて、逢ひたいは尤もなれど、わたしが抱へで慾目ぢやないが、お磯ばかり惚れて居て、お前はねッから、構はぬやうに見えるぞえ。

三吉　とんだ事を。あの女にやア、わつちも、箆棒に、鈍くなつて居やすよ。

たつ　イエ〳〵、さうでない證據は、お前が内の勘當と一緒に、茶屋町もせかれ、上げる事もならぬに、お磯が着替へ、頭の物も、仕懸け文庫も、皆なあき殼。

三吉　エ。

たつ　鈍い女ぢやと此方の抱へを、笑はせて下さんすなえ。

三吉　ナニ、そりやア大方、あの女めが、藪酒手でもやらかすのだらう。……そんな事も糺すため、ちよつと彼奴に

たつ　イエ〳〵、お磯は内に居ぬわいなア。

三吉　アノ、内に

たつ　サア、今日は藏前の二番で、汐留へ迎ひに行つたわいなア。

三吉　そりやア大方、札差し屋の十郎兵衛野郎であらう。いま〱しい。歸るべい〱。（ト門口へ出かかり、雪駄を袂より出し）お草履は袂から、とんだ夕立だ。

ト雪駄を門口へ直し、出ようとする。此うち、二階の障子を明け、お磯見て居て、辛氣なこなし。三吉行きかゝるを

たつ　アヽ、コレ〱、三吉さん。折角今朝から來て居て、こちの人に逢つて行かしやんせいなア。

三吉　イエ〱、徳兵衛さんに逢ふと、また聞きたくもない意見。

たつ　ハテ、あの二階に、こちの人が（トお磯と顔見合せ、お磯障子を締める）。

三吉　澁い顔を見ようより（ト行きかゝるを）

たつ　ハテマア、なんであらうと

ト此方へ引き廻し、二階の方へ突き遣る。

三吉　そんならどうでも、逢つて行くかえ。

ト不承々々に二階へ上る。此うち、又お磯障子を明け、三吉と顔見合せ

いそ　三吉さん。

三吉　お磯か。

いそ　おかみさん、何にも申しませぬ。（ト拜む。）
たつ　コレ、わしが逢はすというては濟まぬぞ。
三吉　流石はそれ者。
たつ　これもほんの粋が身を……苦勞が却つて、樂しみかいなア。
　ト唄になり、お辰思ひ入れあつて奧へ入る。二階は寄添ふと障子締める。直ぐに屋臺囃子、バタ〳〵にて、向うより友七、若い者の形にて逃げて出るを、五郎、石塔牛助、前幕の形にて追ひ駈けて來り、花道にて引捕へる。
友七　アヽモシ、御免なされませ〳〵。
五郎　うぬ、武士に慮外をして、御免とばかりで濟むものか。うぬは何處の飯炊きだ。
半助　居る所をぬかしやアがれ〳〵。（トこづき廻す。）
友七　ア、モシ〳〵。成る程、私しは奉公人でござりますが、居所を申したら、また親方にどんな難儀。これがばつかりは申されませぬ。
五郎　太い事を吐かしやアがる。うぬ、云はぬとて、云はせずに置くものか。
半助　主の名を、吐かせ〳〵。

ト兩人こづき廻す。又屋臺囃子、佃にて、向うより大和屋徳兵衞、下駄かけ、湯上り、手拭ひを持ち出て來り、この體を見て

徳兵　ヤア、わりやア、內の友七ぢやァないか。

友七　アモシ〳〵。私しを家來ぢやと仰しやると、お前樣にも御難儀が

徳兵　箆棒め。どんなおしぶちが來ようとも、內の男が擲たれるのを、見ない顏で居られるものか。こりやァどういふ譯だ。

五郎　今の五音。さてはこの野郎が其方の主か。

徳兵　ヘイ。お侍ひ樣だが。私しの家來の此奴には、どのやうな

半助　オヽ、慮外をした。

五郎　その譯といふは

徳兵　アイヤ、こゝは人が立ちます。私しは大和屋の徳兵衞と申して、即ち向うが

半助　其方が宅なら

五郎　野郎を引摺つて歩ばつしやい。

友七　モシ〳〵、とんだ災難、無理ばかり

徳兵　ハテ、云ひ譯せずとも、マア來やれサ。

　　ト矢張り右の佃の切れにて、皆々本舞臺へ來り、内へ入る。

友七　モシ、旦那、私しが一の鳥居まで、お使ひに參つた歸りに、あのお侍ひ樣がたが

徳兵　コリヤノ〲、わりやァ何も吐かすな。……ハヽヽヽ。どういふ御慮外を申し上げたか存じませぬが、高が取るに足らぬ下部の儀。私しが御挨拶。どうぞ

五郎　イヽヤ、料簡罷りならぬ。二腰は武士の表道具、それを足蹴に致した上

半助　挨拶も無く、過言を云ひ、料簡致せば方圖がないワ。

徳兵　アノ大道中で、どうしてお刀を足蹴に

友七　サア、そりやァ斷うでござります。あの、お二人が、つくばつて、話をしてござりましたを、道は急ぐ、ついお刀へ觸つたを、無禮とあるゆゑ、あやまつても、弱い者だと附け上つて

徳兵　まだ吐かすか。粗相しながら何も云ふ事はねえ。われはナ（ト囁く。友七呑み込んで暖簾口へ入る）。ハヽヽヽ。下人を使ふは使はれる、御立腹は重々御尤も。どうぞマア、貴方がたのお膝を抱きまして

　　ト此うち、友七、廣蓋に肴、銚子、杯を持ち、徳兵衞の前へ置き、奥へ入る。

サア、マア、何もござりませねど、お一つお上り下さいまし。

半助　こりやァ何でござるな。

德兵　今日は影祭りの宵宮。ほんの出來合ひ。お一つ上つて

五郎　イヽヤ、下さるまい。

半助　ハヽア、こりやァ何かな。したみ酒が飲みたくつて、ぶう〳〵云ひに來たと思ふのか。

德兵　イエサ、さやうでは

五郎　イヤ、さうであらう。身共は武士。仲直りの酒を當てに、喧嘩をするのではないぞ。

半助　侍ひ食はずと高楊枝。貧乏してもこんな物が

二人　食はれるものかえ。（ト杯臺を蹴返す。）

德兵　食はれざァよしやァがれ。（ト莨盆を引寄せ、吸ひつける）。

二人　なんと。（ト氣味惡きこなし）。

德兵　なんの事だ。奉りやァ附け上り、濟むの濟まねえのと、水切れの井戸ぢやァあるめえし。內の野郎が粗相したら、どうする。コレエヽ、身を知つた侍ひは、祭り、遊所、繁華の場へ、面を出すは御法度ゆゑ、云ひたい事も、云はずに歸るワ。お里の知れた兩刀たち。コレ、白癡嚇かしが怖

くつて、泥水飲んで、三分の鰹が、食はれるものかえ。

五郎　ヤア、家來の無禮を詫びようとはしないで

半助　人も無げなるその雜言。濟まぬぞ。

二人　料簡ならぬぞ〱。

トきつぱ廻して立騷ぐ。德兵衞は構はず、莨のんで居る。此うち、屋臺囃子になり、向うより大島團七、以前の形にて出て來る。餘程後より若黨彌市、帷子、羽織、大小の侍ひにて、出て來る。團七は門口より、内を見て

團七　コレ〱、この手合ひは何を騷ぐのだ。

ト内へ入る。此うち、彌市は内の樣子を見て、下手の塀の蔭へ入る。

五郎　オヽ、こりやァ團七どのか。濟まないぞ〱。

半助　武士がすたつた〱。（ト又騷ぎ出す）。

團七　コレサ〱、御大層な。マア〱、おれが來るからは、どうとも筋道を（ト德兵衞と顏見合せ）ヤア、何處かと思へば、萬更知らない顏でもないこゝの内。こりやァおれも裁きにくいなう。

五郎　さういふ事なら退いて居やれ。あの素町人め

半助　討ち果すワ〳〵。

團七　アヽ、コレサ〳〵。この團七が來にやァ格別、おれが來て、友達の、お身樣たちに騷がれちやァ、どうか、コレ、おれが差し金でも、遣ふやうに思はれるも氣の毒だ。こゝは一番、云ひ分を、わしが貰つた。何も云はずに

五郎　イヤ〳〵、重々の雜言。聞いたら團七、御身でも

團七　サア、それを聞いちやァ物がない。マア〳〵、おれに免じて

半助　イヤ〳〵、どうも料簡が

團七　コレサ〳〵。マア裏通し、杵正へでも行つて、腹を直すがいゝ。

二人　イヤ〳〵

團七　ハテ、マア、行つてくりやれな。

ト佃になり、捨ぜりふにて團七、兩人を門の外へ出す。兩人は下手の塀の內へ入る。團七兩人を見送り、ふいと門口にある三吉が草履へ目をつけ、思ひ入れあつて、此方へ來り

ハヽヽヽヽ。これは御亭主。友達めらが、何をごたついたか知らないが、若い者の惡酒を、料簡して下さいまし。

德兵　これは〳〵、よい所へ。たしか貴公樣は、入谷の御浪人、大嶌氏。

團七　いかにも、その團七。こなさんとは鞘當で、とう〳〵今は女房に、藝者のお辰が以前の客。

德兵　成る程、お名は聞き及べど、見知り越しなる、大和屋德兵衛といふ武骨者。

團七　折もあらばと思うたところ

德兵　思ひがけない

團七　友達の

德兵　その裁人が

團七　緣となり

德兵　お出合ひ申す上からは

團七　以後は、互ひに（ト氣味合ひあつて）

德兵　入魂に

二人　しませう。（ト合ひ方。德兵衞思ひ入れあつて）

德兵　いかさま、緣といふものは味な物。あのお辰が座敷へ出てゐる時分は、わしと、こなさんと張合つて、今日は船、明日は山と、互ひの意地もどこの拍子か、ツイ女房にして見れば、埒もないもの。

必ず以前の事を

園七　ナニ、根に葉に持つ程なら、今の奴等も共々煽て、けちをつける事も知つて居れど、ナニ、氣恥かしい。二才野郎ぢやあるまいし。無理に追ッ返してやつたも、厄病神で敵と云はれまいため。

徳兵　したり、切れ離れのいゝところが侍ひ氣質。さういふ事なら、迚もの事に、なんと、わしに杯をさしちやア下さるまいか。

園七　そりやハヤ、しまいものでもないが、酒の事なら、こなさんから

徳兵　でも、この杯ばかりは

園七　ハテ、順を云へば、こなさんは亭主役。マア〱始めて

徳兵　成る程、そんなら慮外ながら。（ト飲んでさす。園七受けて一口飲む）。ドレ、お肴を

園七　イヤ、徳兵衛どの、肴はちつと望みがごんす。

徳兵　エ。

園七　おれへの肴なら、あの門口の雪駄が望み。

徳兵　フム。（ト合點の行かぬ思ひ入れながら、門口へゆき、雪駄を取つて來り）山形に丸印し、片足は揃はぬちぐの雪駄を

團七　サア、その片しは、德兵衞どん、こなたへ肴に進上しよう。

ト帶に挾みたる前幕の片しを出して、差附ける。

德兵　フム。それも山形に丸印し。

團七　一つ寄すれば

德兵　揃ふ一足。

團七　德兵衞、出しやれ。

德兵　ヤ。

團七　人殺しの釣舟三吉。この團七に渡しやれ。

德兵　なんと。

團七　忘れもしない當月二日。所は入谷の田圃中で、この團七が女房のお梶、しかもその夜は夕立に、雨は篠つく眞の闇、殺されて居たその側に、落ちてあつたる片しの雪駄。㊀印しは人も知つたる道具屋の、印しは知れたあぶれ息子。あの三吉めが仕業とは、云はずと知れたこの證據。片しはこゝの門口に、一足揃ふ上からは、隱し置いたに違ひない。德兵衞、きり〳〵出して渡しやれ。

德兵　サア、その三吉は

ト此うち、暖簾口よりお辰、様子窺うて居て、この時、ツカ〳〵と出て

たつ　こちの人、今月二日は午の日にて、しかも王子へこなさんと

徳兵　それよ。參つて、歸りには、路から降られた夕立に

たつ　消えも入谷の田圃中。

團七　雨に黑白はわからねど

徳兵　摺れちがつたは

たつ　すりや、その時のは

團七　イヽヤ、曉方、死骸を尋ね、證據の雪駄を拾つたより、宵に行つた覺えはない。

たつ　覺えないとは、三吉さん、せかれてゐても抱へのお磯と、粹を通して二日の夜は

徳兵　すりや、お辰、其方が承知で

たつ　粂本の見通しに、しつぽり寢て居た三吉さんが、遠い入谷の果まで行つて、人を殺しさうなものかいなア。

徳兵　そんなら、その夜は

たつ　疑はしくば、三吉さん、わたしが隱して置きやんした。こゝへ呼んで、明るさ、暗さ。

ト二階へ行かうとする。

徳兵　ヤレ、待て。うか／＼物を云ふな。

ト　ちよつと引留め、門口へ目を附ける。

たつ　でも、こゝへ呼ばにや、身の明りが

ト又行きにかゝる。此うち、門口に窺つて居る五郎、この時ズツと内に入る。

五郎　三吉がこの家に居らば、身共が召捕り、連れ帰るワ。

トつか／＼と二階へ行かうとするを、お辰留め

たつ　エ。すりや又、なんの科で

五郎　知れた事。勘当請けた親の内へ、夜盗に入つて盗み出したは、石堂家よりお預りの、浮牡丹の香爐、道無しにするといひ、勘当受くれば親子も他人。すりや盗人の科は遁れぬ。引縛れと石堂家の隠し目附け。

たつ　そんなら、あなたが

徳兵　女房、これぢやによつて、迂濶に物は云はれぬぞ。

五郎　すりや、三吉めは

たつ　こちの内には居りませぬ。
團七　でも、たつた今
たつ　居ると云うたはわたしが後先き。しやうどの無いは女童。
五郎　して、三吉が居ぬものが
團七　どうして雪駄がこゝにある。
徳兵　サ、それは
團七　但しは徳兵衞、この雪駄の、主におぬしはなる心か。
徳兵　サア
團七　サア〱〱。なんと。

ト此うち、門口に彌市窺ひ居て、この時

彌市　徳兵衞、かねて申し附け置いたる刀の行くへは、まだ知れぬか。
徳兵　あなたはお代官のお役人。
彌市　信樂彌藤次。先頃濱田家の重寶、千壽院力王の刀、家臣玉島兵夫太へ申し附け、石堂家へ結納の印しに持參なす、途中に於て横死なし、刀紛失。尤も、同家中、大鳥佐賀右衞門と申す者の仕業

なりとはいへ、これ以て分明ならず。何樣、右の刀あらざれば、婚姻の結び調はず、これによつて武將家へ、お願ひ申し上げたるに就き、代官たる身共が詮議。（ト團七思ひ入れ）。

德兵　サア、當所の世話役と申しては、をこがましうござりますれども、差出者ゆゑ寄りに立てられ、その御用も仰せつかつた私し。

彌市　何樣、客の入り込む當所。武士、町人の嫌ひなく、其方に詮議さするも、お上よりの仰せ附け。

德兵　畏つてござります。……サア、お聞きの通り、石堂家のお侍ひ樣、千壽院力王の刀の詮議、ぶしつけながらお差し料を

五郎　イヽヤ、なんぼ代官の云ひ附けでも、武士の表道具を

德兵　ならぬとあつても、彌藤次樣のお指圖は、お上よりの御上意同然。

彌市　違背の輩が卽ち疑ひ。

德兵　踏みつけても、引拔いて見まするぞ。

五郎　アヽ、コレサ。泣く子と地頭、ソレ。（ト兩腰投出す。德兵衞一つ〳〵見て）

德兵　千壽院の銘は行信、差表に不動の梵字ありとの仰せ。……こりや、似ても似つかぬ。（ト返す）。

五郎　なにサ。身が二腰は村松出來合ひ。二分一本の名作だ。

徳兵　サア、團七どのも見らるゝ通り
團七　すりやアノ、身が二腰も
徳兵　ちよつと爰で（ト手をかけるを突き退け）
團七　イヤ、改めるに及ばぬ。
徳兵　ヤ。
團七　恥かしながら、竹光だ。
徳兵　なんと。
團七　浪人の糧に盡き、煙の代に魂ひも、人に預けて竹箆を、さすが武士なるこの身の恥を
徳兵　改めて（ト又かゝる）。
團七　恥面かゝさば、雪駄の片し。人殺しをこの場にて
徳兵　その詮議より刀の詮議。
團七　徳兵衛、われが
徳兵　團七、見事
二人　して見るかよ。（ト立ちかゝるを、お辰、仲を引分け）

たつ　アモシ、互ひに身の疵を、云ふは云はぬに増す鏡、曇り、かすみを疵にして、後まで預けて下さんしたら、コレ、丁度、この鏡の、丸う納まる、思案はわたしが

トそこにある鏡臺の鏡を取つて突き附ける。此うち、二階の障子を明け、三吉覗いて居る。

德兵　すりや、その鏡に

團七　映るは三吉。

トお辰、鏡をドッサリ取落し、三吉障子を閉す。

德兵　イヤ、破鏡再び照さず。

たつ　割つて云はずに

團七　この場の納まり

五郎　然らば詮議を團七と

彌市　德兵衞、其方に

德兵　預りまして

たつ　いづれ、後まで

團七　刀と盗賊

たつ　人殺し
德兵　灰汁が拔ければ
團七　その身の德兵衞。
德兵　團七（ト寄るを）
たつ　アモシ（ト隔てる）。
團七　目釘をしめして、待つて居ろ。
ト唄になり、團七思ひ入れあつて、五郎附いて奥へ入ろ。彌市、德兵衞あと見送り、思ひ入れあつて
德兵　彌市どの、御苦勞でござつた。
彌市　德兵衞樣。もうようござりますか。
ト腰の風呂敷より、前幕の下部の形を出して着替へろ。
たつ　ヤ、そんなら信樂彌藤次というたは
德兵　眞赤な僞り。其方にはまだ逢はせねど、このお人は、かねて話したお邸の
たつ　エヽ、あの琴浦樣とやらのお召仕ひかいなア。
彌市　ヘイ、彌市と申す不調法者。つひぞ參らぬお宿まで、お尋ね申したも、申さば琴浦樣の得手勝手。

徳兵　サア、改め云ふには及ばねど、あの濱田の奥勤め、琴浦樣といふはおれが故主、助松主計樣のお連れ合ひ。この身が不首尾でお邸を出た後で、主計樣にも御病死。跡を立てるお世繼も無いゆゑ、思ひ切つて琴浦樣は、一生御殿の奥勤め。たとへ旦那の無い後も、どうぞこの身の御勘氣御赦免あるやうと、いつぞやもソレ、妹のお仲を

たつ　それ〳〵。兩國まで遣らしやんしたが、お聞入れがないといふ事ぢやなかつたかえ。

彌市　サア、その時拙者もお取持。樣々に申したれど、お聞入れないその所へ、あちらから手を下げて、勘當も免すとお頼みの譯も、この度不慮の大變と申す譯は、則ち琴浦樣の兄御玉島兵太夫樣、殿樣より御結納の印しに、千壽院の刀、外へ持參の途中に於て、大鳥佐賀右衞門といふ者に討たれ、刀も紛失。その兵太夫樣に、一人の娘御お梶樣、卽ち親御の武術のお弟子、團七樣といふ人と、討たれしその場で祝言も、助太刀せんとの誓ひ、約束。然るにその敵討ちの出立もせぬ内に、この程お梶樣にも何者にか討たれ、只今となつては、敵討より刀の詮議。

徳兵　琴浦樣にもお懸り合ひ。いよ〳〵尋ね出しくれよと、彌市どのを以てのお頼み。最前、湯屋の門口で、立ちながらの話の中、内の野郎と侍ひめが、何かいさかひ、若しも搦んだ譯とならば

彌市　斯う〳〵せいとお指圖に、持つて來た着物、大小、引張つて、刀を詮議の代官役。

徳兵　あの團七が、吐かすも曲事。
たつ　待ちなさんせ。……今の話のお梶さんとやらの、嫁いたも團七。今のも團七。
彌市　面體は存ぜねど、家は入谷、苗字は大島。
たつ　そんなら、矢ッ張り。（ト奥へ思ひ入れする。）
徳兵　コレ、日頃願ひの勘當も、御赦免あつてお主のお頼み。こりや、とつくりと思案して
たつ　その千壽院とやらの刀を
徳兵　詮議いたすと、しつかと御返事。
彌市　すりや、御承知下されたか。ヤレ〳〵、それ承つてお使ひの拙者安堵。お請合ひの上はお渡し申せと、持參いたしたこの品々。
　　ト並べる。
徳兵　この二腰に、この包みは
彌市　卽ち御勘當の時分、お取上げありし貴公樣の差し料に、衣類は旦那の御紋附き。
徳兵　すりや、これを御赦免の印し。何から何まで御厚意の程
彌市　琴浦樣へも右の趣き

たつ　御安堵遊ばす爲でもあれば
彌市　もうお暇申しませう。
　　ト懐へ入れて來た小脇差を差す。
德兵　刀の吉左右
たつ　跡より追々
彌市　お聞かせなされて下さりませ。
　　ト唄になり、彌市思ひ入れあつて向うへ入る。ト二階より三吉、お磯を連れ、下りて來て
三吉　德兵衛樣、段々の深切忝うごんす。(ト德兵衛大小、包みを方附ける。)最前、あの團七が、穿き替へて來た雪駄の片しで、覺えもない人殺し、飛び出して云ひ譯せうにも、この身に暗い香爐の詮議。侍ひがうせるばかりで、切ない所をよくもマア
德兵　イヽヤ、ありやアこなたにするのぢやアない。親御孫右衛門どのとは懇ろといひ、おれが邸を出た時分、借りてもらつた僅かな金も、それが蔓で取附いた德兵衛が身の上。恩を知らにやア犬猫同然。その恩といふ字も、餘所事ばかりぢやアないよ。
たつ　それいなア。押しも押されもせぬ道具屋の、一人息子でありながら、人に逢はれぬ身持ちといふ

は……とサア、こんな異見云はゞ、まだ若い形をして、年寄り臭いと思ひなさんせうが、抱への子供といへば、子も同然なお磯につながるお前。可哀さうに痩せる程、思ひ込んでゐる、あれが不便と思ふなら、辛抱して、添うてやつて下さんせ。そりやわたしが好い手本。昔の苦勞を昔語り、迎ひのかゝらぬ床に居て、直し肴で酒飲まぬが、苦界する身の願ひぢやわいなア。

三吉　成る程、徳兵衛樣といひ、お前まで、忝いその異見。わしも今まで、唄の通り、ちよつと來てちよつと歸りやア、何の事はなかつたに、この女にかゝつて、わるい香爐の尻。あれがなけりやア、どうで江戸の住居は出來ず、いつそ此奴を釣り出して、宿場へでもぶち賣つて、それを路銀に高ぶけりと、氣ざして來た惡念も、お前がたの深切で、もう／＼どんと發起して、これから心を改めやす。……コレ、お磯、これから暫く逢はない程に、隨分お客を大事にして、この衆の爲になれよ。

いそ　そしてお前は、何處へ行かしやんす。

三吉　何處といつて雲を暗ッ足の向いた方へ行かうわサ。（ト門口へ出るを）

徳兵　三吉、待ちやれ。

三吉　まだ何ぞ、用でも

徳兵　早合點、呑み込まねど、行くにしても路銀があるまい。譬への通り、貧の盜み。惡い心を出さぬや

う。ソレ、お磯の手切れ。

ト包み金を出して投げる。三吉取上げ

三吉 ヤ、こりや金五兩。

德兵 それも親御へする返禮。

いそ 晝は遠慮なお前の身の上。

たつ 最早程なく暮れるを待つて

德兵 身は隱すとも、必ずとも

たつ 愼しむは短氣と惡氣。

三吉 そんなら御夫婦。

たつ 三吉さん。

いそ モシ。（ト三吉へ寄らうとするを、此方へ引廻し）

德兵 コリヤ、堪忍五兩を、忘れまいぞ。

ト唄になり、德兵衞思ひ入れあつて、お辰、お磯を連れ、こなしあつて奥へ入る。三吉殘り、切れは無いかと小判を見て居る。合ひ方になり、奥より團七、五郎、下の塀の中より半助出て來て

團七 三吉。五兩に有りついたな。

三吉 オヽ、こりやァ團七どん。こなたにかゝつて香爐は道なしにする。暗い身になつて、仕方が無さに相談して、金さへちつと工面したら、明るくする仕樣もあらうと、詞に附いて、お磯が事から引ッかけて、お爲ごかしに路銀の五兩。

團七 サア、おれもあの德兵衞にやァ、埋らねえ目に逢つたゆゑ、けちをつけてお辰を此方へ、捲き上げるにも、しけ込み綱が無さに、云ひ合せて、ごたつきに寄越した二人。

半助 丁度折よくこゝの野郎が、腰の物へ觸つたを附け込んで

五郎 無禮者だとにじり込み、德兵衞が爲にやァ、粗略にならぬ三吉が事だから、どうか巧く行きさうなところを

團七 ハテ、先刻はあれで別れても、跡の始末は樣々。それにしても、あの義平次めに、賴んで置いた手紙の事は

ト權助、義平次、出て來て

義平 そこに如才はない。コレ、この權助が賴む分にして、巧く書かせた娘の手紙。

權助 團七さん、豪的に骨を折つて書かせたぞえ。（ト以前の手紙を出す。團七取つて）

園七　文言は頼んだ通りであらう。……時に、なんだ、上書きは、七樣まゐる、こつより。こりやアどうだ。

權助　サア、其こつで、わしでなけりやァならないといふ譯は、こりやァ木片のこつサ。

義平　サア、この字へ斯う扁をつけると、よたれのたの字。なんと娘の名にならうが。

トそこにある硯箱を取つて加筆する。

園七　成る程。

權助　そこで、斯う七の上へ、園の字を加へると、園七樣まゐるとお前の名になる。（ト加筆する。）

園七　成る程、この文を德兵衞が見たら、直ぐに事にやァなりさうなもの。

義平　これが講釋にもいふ、反間の謀り事といふものぢや。

權助　成る程。おれより餘程惡業の入つた親仁だ。

義平　サア、此やうに骨折るも、氣に入らぬ聟の德兵衞。これから無理といふ無理を並べて、それで去らにやァ、この手紙、彼奴が見る前へ落して置いて、これで焦かせてお辰を去らせ、こなたの女房に遣らうといふも、約束の物が欲しさ。

園七　ハテ、そりや巧くさへ行けば、何時でも貴樣に遣るヮ。

三吉　イヤ、遣るといへば、この五兩。こなたに渡して置く程に、何でもおれが身の上を（ト金を渡す。）

團七　ハテ、そりやァおれが合點だよ。

三吉　これからわしは歸つたと思はせて、女めをそつと引ッさらつて、切りでも叩かせる工面をしよう。

團七　おれに交際ふと、さういふ好い智慧が出る。

五半　して、おいらはこれから。

團七　もしおれが身の上に、凶事が出來たと聞いたら、早速來て、共々逃げる手傳ひしてくりやれ。

五郎　そんならこの裏町や、十二軒の近所をぶらついて

半助　聞き耳立てゝ待つて居よう。

三吉　おれはこれから奥へ忍んで

權助　お磯女めを。

團七　コレ。

ト行けと思ひ入れ。時の鐘、合ひ方にて、五郎、半助は向うへ、權助と三吉は奥へ忍び入る。

氣の利いた面をしても、流石は息子、香爐を捲き上げに口鉾にかゝつて、また五兩。こりやァまんが直るわえ。

義平　イヤ、香爐といへば、貴樣の所から取つた香爐。賣り拂ふにも盗み物の詮議。こりやア持ち腐れになるのか。

團七　ハテ、それもおれが好い捌け口を拵へてやるワ。

義平　それにしても徳兵衛野郎を、せごすに持つて居ちやア危ない。何處ぞへ

團七　隱し所は斯う。（トあたりを見廻し）オ、、幸ひ、あの祭りの提灯の中へ。

義平　成る程。（ト上へ吊してある提灯の中へ隱す。）

團七　それでよい〳〵。

ト奥にて

徳兵　舅どの。義平次どの。用があると云はしつたが

團七　ありやア徳兵衛が聲。

義平　コレサ。

ト時の鐘にて、團七、二階の下より奥へ忍び込む。

あの徳兵衛とお辰と、縁を切らせる好い工夫が何ぞ

トあたりを見廻し、佛壇に在る片袖を見附け

なんだ、夏月院劍譽信士。戒名の縫ひつけてあるこの片袖。（ト引返し見て）エヽ、したゝか血が附いてある。エヽ氣障な。（ト投り出し）ムウ。血で思ひついた仕事がある。それ〳〵。

ト思ひ入れあつて、眞田の上帶を取つて、二階の手摺へ引きかけ、鏡臺を足臺にして、首を縊らうとする。此うち、奥より徳兵衞出かゝり、この體を見て

徳兵　こりやア舅どの。氣が違つたか。何をさつしやる。

義平　ヤ、徳兵衞か。面目ない。留めずと、首縊らせてくれ。殺してくれ。

徳兵　ヤレ、馬鹿な事をさつしやるな。マア〳〵、待たつしやい。

義平　イヤ〳〵、折角覺悟したものを

徳兵　ハテ、馬鹿な。他人さへ、事と品。聟のわしが目にかゝつて、打つちやつて置かれるものか。そばへずと、マア、下に居さつしやいな。

ト引下ろして引据ゑる。

義平　面目ない〳〵。（ト空泣きをする。）

徳兵　ムウ。そりやアどんな面目ない事をさしつて、そんな振舞をさつしやるのだ。

義平　サア、聟の前では遠慮だが、年寄りのあるまい、近所の小娘にかゝつたところが、兄が惡うて、

主がある、と云ひ立てられ、金で濟まさにや、恐れながらと、砂利の上へも出かねぬ面附き。願はれて見りやア、近所、家主の手前、どうも外聞が惡い。というて、內濟にする金は無し。死にたい事はなけれども、右の譯ゆゑ。

德兵　フム。そりやハヤ有るまい事とも云はれませぬが、して、內濟金は。

義平　德兵衞。聞くからは貸してくれるか。エヽ、忝い〳〵。

德兵　ハテマア、禮を云はずと、高を云はつしやりませ。

義平　そりやア僅か百兩。

德兵　エ。

義平　首縊るを留めたからは、貸してくれるであらうの。

德兵　モシ、そりやハヤ十や二十の事なら、掛け金を借りても、貸すまいものでもござんせぬが

義平　百兩は出來ぬか。

德兵　娘の扱ひに百兩とは、御大層といひ、こなさん、この間借りの抵當に取つたといふあのお市、見たところが可哀さうな小娘、邪險な主人を取らせるも、不便だとこなたの云ふなり、三十兩渡した、あの金はどうさしつた。

義平　ハテ、二十や三十、いつまで持つて居るものか。

徳兵　フム。こりや又例の地金を出して

義平　百兩出來ずば、娘を去りやれ。

徳兵　エ。

義平　ハテ、血を分けたおれが娘。肩脊に立つ子が子の役目。汁氣のあるうち稼がせるワ。

徳兵　イヽヤ、そりやァあるまい。尤も、こなさんの娘なれど、貰ふ時にも名を附けて、帶代の二十兩。無手で貰つた女房ぢやァごんせぬ。

義平　イヽヤ、それが表へ出されるものか。どこまでも親の難儀、見て居ぬが聟の役目。百兩出すか。

徳兵　サア、その金は

義平　娘を去るか。

徳兵　サア

義平　サア〳〵〳〵。返事をしやれな。

ト思ひ入れ。此うち、暖簾の中よりお辰出かゝり、この時、ツカ〳〵と出て義平次が胸づくしを取る。

この女は何をしやァがる。

たつ　何をするとは、エヽ、こなさんはなア。

義平　どうしたと。

たつ　サア、お前を親ぢやと思へばこそ、座敷へ出てゐる內も、今日は五兩。今日は三兩。ぬしの所へ來ても、わたしが望んで來て、譽めるぢやないが、お前のやうな人でも、舅ぢやと思へば、かゆい所へ手の屆く心附け。それに不自由な身でもある事か……知つて居るぞえ。それにマア、慾に頂きは無いとやら。これまでも度々の無心、合力。その上に、何ぢや、百兩。……モシ、どんな分限の所へ行ても、こなさんのやうな親持つて、續かうと思はしやんすか。娘不便と思ふなら、どうぞ慾心な事云はずと

義平　やかましいわえ、べら〳〵と。百兩出さにやア、われを去らして金にする。二道かけた金との話。われも不得心なら、コレ〳〵、いま勝手から用意した來たこの出刃で、面當てに死んで見せるぞ。

ト懷より出刃を出して振り廻す。

たつ　アヽコレ。滅多な事をしなさんすな。

義平　云ふ事を諾かにやア、親殺し同然だぞ。

たつ　アヽコレ、危ない。(ト留める拍子に、お辰指を切る。)アイタヽ。(ト云ひながら、もぎ取り、出刃を捨て、

そこにある以前の片袖を取つて血を拭く。）ヤア、こりや、この間拾うて來て、佛壇へ上げて置いたに、誰がマア。

ト云ひながら、鏡臺の上へ置く。

義平　箆棒め。片袖よりは此方の片親の、命を取留める金だぞ。

たつ　すりや、どうあつても

義平　くどいワ。

德兵　ハテ、慾に根强い

義平　舅だぞ。

德兵　ウム。（ト思ひ入れ。）

義平　サア、德兵衞。金を出すとも、女房を去るとも、男らしく返事をしやれな。

ト德兵衞莨をのんでゐる。此うち、流行り唄の合ひ方ばかりにて、時の鐘にて、花道よりお虎、革籠を脊負ひし千ヶ寺參りの婆アにて、渋団扇を持ち、出て來り、門口に立つ。

サア、德兵衞。舅にばかり脊腹揉ませ、默つて居て、事が濟むか。わりやア、唖か、聾か。

とら　じやぶ〳〵〳〵、じやじやぶ〳〵〳〵〳〵。（ト自我偈を讀む。）

義平　やかましい。手がふさがつて居る。通れ〳〵。

とら　ハイ。わたしは遠國者。通り一遍のお手の内が出來ずば、どうぞ莨を一服下さりまし。

義平　莨は無い。通れ〳〵。

とら　ハテ、お前提げてござるではござらぬか。モウ今日は、晝から、吸ひたうて〳〵堪らねど、修行は無し、買ふ事はならず。どうぞお慈悲にたつた一服。

義平　エヽ、やかましい。一服ばかりなら、やる程に、早く行け。

ト莨を捻つて、門口へ出て、互ひに顏見合せ

とら　ヤ。こなたは、わしが亭主の八内どのぢやアないか。

義平　われは國へ置去りにしたお虎か。（ト逃げようとする。）

とら　アヽ、コレ〳〵。逃げようといつて逃がすものか。こなたに逢はうばつかりに、日頃嫌ひな珠數三味。京大阪まで尋ねても、居ないこそ道理。この江戸にぬつくりと、コレ、尋ねに出て、もう十四年になるわいなう。

義平　やかましいわえ。おれが國を出たも、譯のある事。足り不足を云やアがるな。

とら　イヤ〳〵、この年月の溜り〳〵。女房だもの、亭主だもの、云はにやアならぬわいなア。

たつ　フム。今の詞の端々。そんならお前は、わたしが母さんかいなア。（ト側へ來る。）

ト此うち、お辰思ひ入れあつて

とら　なにサ、お前、わたしに娘ッ子はござりませぬ。（トお虎、お辰をよく〳〵見て）ヤア、お前はお主樣の娘御。お辰樣ぢやござりませぬか。

たつ　エ。

義平　コレ〳〵。滅多な事を吐かしやアがるな。

とら　イエ〳〵、云はにやアならぬ。コレ〳〵、幼な顏に覺えある、お主の娘御、お辰樣。

義平　コレ、物を吐かすな。

トお虎が口を押へ、押し伏せるを、徳兵衞、義平次を取つて上の方へ引き退ける。

徳兵　何か怪しい女房が素性。尤もらしい親仁が不足。サア〳〵、婆ア、存分に云やれ〳〵。

ト義平次腕くを、屹度留めて居る。

とら　云はないでどうしませう。お前がたも聞いて下さいまし。……あの男は八内といつて、三河の鄕士、駒形杢兵衞樣の小者、ところに、このお辰樣といふは、江戸は濱田の御家中、玉島兵太夫樣の娘御。

たつや、、、、なんと。すりやアノ、この身は、玉島兵太夫様とやらの

とら　サア、お前にお梶様といふ姉御はあり、妹の事ゆゑ、杢兵衛様へ、三つの時御養子。ところに、あらう事か、あるまい事か

義平　アヽ、コレ〳〵。その譯を吐かしては（ト寄らうとするを徳兵衛押へて）

徳兵　サア〳〵、後の譯を、云つた〳〵。

とら　サア、ちよつぼり髪のお辰様、しかも、五つの時、氏神の祭りを見せに行くと、肩車に乘せて出て、それツきり歸らず。わたしも置去り。

徳兵　すりや、いよ〳〵お辰が身の上は

とら　兵太夫様の妹娘、杢兵衛様の御養子。それを、今のあの子の口振りでは、こなた、こりや、娘にして、我が儘云うて暮して居るの。

義平　サ、それは

とら　道理こそ、歸らぬ筈。こなたは榮耀、女房のわたしは、コレ、袖乞ひの千ケ寺參り。よう置去りにしやつたなう。お主の娘を勾引かさしつたの。天命を知らつしやれ。八内どの、恥かきどの。エヽ、こなたはなう。

義平　イヽヤ、うぬが云ふは皆噓だ。德兵衞夫婦、これには段々

德兵　何も聞く事はない。現在女房が惡事の白狀。云ひ分あれど、今は云はぬ。きり〳〵と出てうせう。

義平　イヤサ、それは（ト提灯へ思ひ入れするを）

德兵　四の五と云はゞ、婆アを連れ、砂利の上で糺さうか。

義平　サア、それは

德兵　サア〳〵〳〵。アノ、こゝな、天命知らずめ。

義平　ムウ。………眉目形の好い餓鬼ゆゑ、五つの時引ッ浚つて、この江戸へ來ると直ぐに、小じよく奉公。それから藝子の下地ッ子。物も要らずに娘にし、これまで强請りせたげた上、親ごかしに今日の仕事。巧く行きさうなところへ、とんだ奴がうしやァがつて

とら　洗ひざらひ、ぶちまけたも、これまでの腹癒せ。

義平　うぬ。まだ吐かしやァがるか。はッつけ婆ァめ。

とら　畜生親仁め。

義平　イヤ、おのれは

ト兩人摑み合ひになるを、德兵衞引分け、お虎を門の外へ突き出す。お虎花道へ行つて、倒れる。德

兵衛直ぐに義平次の襟髪を取つて、同じく花道へ投り出す。

徳兵　をとゝひうしやアがれ。

ト門口を締める。時の鐘、合ひ方。お虎が上へ倒れかゝり、お虎刎ね返す。また摑みつくを、直ぐに手拭にて猿轡をはめ、思ひ入れあつて門口の天水桶を蹴返し、これを冠せ、側にある石を重石に置き、懐より以前の文を出し、門口よき所へ置き、思ひ入れあつて、頷いて、下手へ入る。

たつ　こちの人、今まではあの義平次づらを、眞實の親ぢやと思うて居たが、今の話では

徳兵　誠は玉島兵太夫様の娘とあれば、最前、彌市の物語り。

たつ　すりや、あの團七どのに連添うた、お梶さんとやらは

徳兵　其方の姉御であつたか。

たつ　聞けば、父上兵太夫様も、人手にかゝり、姉さんまで、もこの程入谷の

徳兵　田圃の中で、殺された噂。

たつ　たしかその夜に通りかゝり、拾うたこの袖。

ト以前の袖を取上げる所へ、奥よりお市、ツカ／＼と出て

いち　ヤア、こりやわしが母さんの袖。（ト手をかける。）

徳兵　フム。すりや、わが身はお梶どのゝ

いち　イエ〳〵、わたしが母さんは、とうに死んで、二度目の母さん。

ト徳兵衞袖を返し

徳兵　夏月院劍譽信士。俗名玉島兵太夫。

いち　そりや祖父さんの戒名を縫ひつけて、着て居やしやんしたわいなア。

たつ　すりや、話に違はず、父さんの、敵討たうと苦勞も甲斐なう、その身も人手にかゝらしやんして

徳兵　もしや敵の返り討ちか。

たつ　その夜に附けたこの血汐に、最前思はず過まちの、わたしが血汐と一つに寄つたは

徳兵　ドレ。……兵太夫樣の胤を現はす、姉妹の血寄せ。

たつ　何處の誰が無情とも、知らで拾ひしこの袖も

徳兵　回向を頼むといふ事かと

たつ　持ち歸つたも

徳兵　親、兄弟。

たつ　それと知らする

徳兵　爲であつたか。
たつ　その俤さへ
徳兵　亡き魂の
たつ　思へば
徳兵　果敢ない
たつ　緣ぢやわいなア。（ト袖を抱いて、ヂツと思ひ入れ。）今の今まで、餘所事に思うて居たも、今はこの身に降りかゝる
徳兵　親と姉とのその敵、討つて手向けざ孝が立つまい。
たつ　ぢやというて、三味線の、絲よりかよわいこの體、撥の手より知らぬ身で
徳兵　後ろ見して討たせてやらう。
たつ　すりや、アノお前が
徳兵　玉島兵太夫樣は、琴浦樣の兄御なりや、この徳兵衛が御主人の片割れ、緣に繫がる姉、舅。
たつ　エヽ、忝い。……敵といふも、たしか大鳥佐賀右衛門とやら。
徳兵　ムウ。

ト手を組み、思案。誂への合ひ方になり、お市、お辰が手を取つて、ヂツと顔を見る。お辰ヂツとしたる思ひ入れ。

たつ　エヽ、氣味の惡い。この子は

德兵　團七が娘。（ト引取る。）

たつ　何か樣子の

ト お市またお辰へ寄らうとする所へ、友七出て來り、この中へ入り

友七　モシ、旦那。先刻条本の親方が、日暮れから、何か長屋の叶はぬ相談、是非來るやうにとお言傳がござりました。ツイ忘れました。サア、お出でなすつて下さいまし。

德兵　それを今まで云はぬとは粗相な。して、そりやァどこの內に。

友七　小濱屋の隱居所だと申す事でござります。サア、もう遲うござりますぞえ。

德兵　ウム。……そりやァちよつと行かずばなるまいが、コレ、お辰、さうく〳〵して居たとて、急に行く事ではない。心を長く。

たつ　そんなら早う、歸つて下さりませえ。

德兵　何時にならうも知れぬ。（ト脇差をさす。）

たつ 友七、ちよつと送りまして。
友七 ハイ〳〵、畏りました。
徳兵 氣を附けやれ。
ト合ひ方になり、友七、ぶら提灯を灯し、門口へ出る。徳兵衞下駄を穿くとて、以前の文を拾ひ、見い見い花道まで行く。
合點の行かぬこの文。
ト歸らうとして、又行きかゝり、立ちどまり、思案する。
友七 モシ、そりやア何でござります。
ト覗く。手早く懷へ入れ
徳兵 また夕立がかゝるわえ。
ト唄、入相の鐘にて、徳兵衞、友七を連れ、向うへ入る。直ぐに合ひ方彈き續けにて、奥よりお仲、火打ち箱、お照、行燈を持ち、出て來り
なか モシ〳〵、姉さん、もう日の暮れ。お照さんが行燈持つてござんしたによつて、わたしやお祭りの提灯へ、お灯を上げようと、火打を持つて來たわいなア。

たつ　オヽ、そりやよう氣が附きなさんした。したが、お前には高うて上げられまい。お照、ちよつと。

てる　アイ〱。合點でござんす。

ト火を打ちつけ、提灯をおろしにかゝる。暖簾口より團七覗いて居て、この時、恟りして走り出て

團七　アヽ、コレ〱。その提灯へおぬしが灯しては、惡い〱。

てる　でも、おかみさんの云ひ附け。お祭りの提灯へ、お灯上げてはなぜ惡いえ。

團七　おぬしは女、體が穢れて居る。

てる　イエ〱。今日は座敷へは出ず、清淨でござんすわいなア。

ト團七を引退け、又行かうとする。此うち、お辰心附いたる思ひ入れにて、ズツと立つて來て

たつ　アヽコレ、お照、氣が附かなんだ。神樣のお灯上げては惡いわいの。

團七　ウム。神の燈明上げられないとは、不幸でもあつたか。

たつ　なんの、さうではござんせぬが、降つて來さうな空合ひゆゑ。

團七　止めになりやア、それ程の事はない。……時に、徳兵衛は何處へ行つた。

たつ　サア。

團七　奧にもこゝにも見えないからは、ハヽア、又何處へかしけ込みに出たな。徳兵衛が居ないとあ

れば……………

たつ　お仲もお照もこゝに居やよ。

園七　イヤ〳〵、こゝに居ては惡い。アレ、ごろつくぞえ。（ト遠くにて雷鳴る。）てめえ達は奧の押入れへでも入つて居やれ。……ツリヤ、光るワ。

ト嚇す。これにてお仲、お照、奧へ逃げて入る。

たつ　ア丶、コレ〳〵。お市も一緒に連れて行きやいなう。

いち　父さん。もうわしや眠たうなつたわいなう。（ト側へ寄るを）

園七　エ丶、うるさい。また慕やァがるか。（ト毆り倒す。）

たつ　エ丶、可哀さうに。其方はこゝへ來て寢て居や。

ト押入れの前へ蒲團を敷き、お市を寢させ

幸ひ先刻、權助どんの、持つて來たこの蚊帳。吊つてやりませう。

ト以前の蚊帳を吊る。

園七　エ丶、小面倒な。打つちやつて置くがよいわな。

たつ　ほんに、子にも、他人にも、邪險な事を。

團七　ナニ、邪險といふはおぬし。あれ程通つたこの團七を……イヤ、云ふまい〳〵。思ひ切つては未練らしくつて惡い。

たつ　ほんに、そこは又お前だけ。昔の事は夢ぢやと思うて下さんせいなア。（ト雷餘程鳴る）アヽ、こりや又きつうお鳴りなさる事ではある。……モシ、團七さん、わたしや雷樣がきつい嫌ひ。ひどうお鳴りなさると、アレ〳〵モウ、癪が。幸ひの蚊帳、御免なさんせえ。

　　トお辰胸を押へ、とつかは蚊帳の中へ入り、打臥す。

團七　いや、雷と借錢。それは誰でも好きな者はない。

　　ト段々と大きく鳴ると、團七氣味惡き思ひ入れ。捨ぜりふのうち、烈しく鳴る。これにて

桑原々々。

　　ト臍を押へたり、いろ〳〵狼狽へ、これも蚊帳の中へ入る。雷近くへ落ちたる音にて、しやんと止む。
　　時の鐘になり、向うより徳兵衛、腕捲りにて、以前の提灯を下げ、下駄がけにて出て、内へ入り

徳兵　お辰や〳〵。雷が鳴つたといつて、宵のうちから（ト蚊帳の中を提灯にて透して見て）ヤ、蚊張の中には、團七。

團七　徳兵衛、歸つたか。

たつ　エ、こちの人か。（ト蚊帳を出る。）
徳兵　イケ見つとも無い。蚊帳の中へ

ト蚊帳を引下ろす。團七わざと帶解き廣げにて、這ひ出すを、徳兵衞、團七が持つたる帶の端とお辰が裾を踏まへ、屹度なつて

女房。なんで男を引摺り込んだ。
たつ　イエ〳〵。わたしやそんな覺えはござんせぬ。お前も知つての雷嫌ひ。蚊帳の中でさし込む癪。夢中になつて居るうちに、マア滅相な。どうしてマア。
團七　ア、イヤ〳〵、お辰、云ひ譯は暗い。おぬしが藝者の時分から、附けつ廻しつ燒け木杭。ツイ團七と斯うなりましたと、一口に云つてしまやれ。
たつ　エヽ。何のマア、覺えもないこの身に、そんな事を。
徳兵　イヤ、女房。覺えないとは云はれまい。
たつ　こちの人。お前までがそんな事を
徳兵　オヽ、證據はこの狀。（ト以前の狀を出す。）
たつ　その狀とは。（ト徳兵衞狀を開き）

徳兵「一筆しめしらせ〳〵、この間はゆる〳〵御見なし、積る御物語り致し、今に〳〵忘れがたく、斯樣にわが身を任すからは、この世はおろか、二世も三世も、御見の折申せし通り、何卒こちらの暇を取り、一日も早く世間晴れて、女夫になりたく祈りまゐらせ候」。

ト お辰見て

たつ すりや、最前、あの權助さんに賴まれて

徳兵 書いた文が、なんで團七樣、たつより、と書いてある。

たつ エヽ、ほんに、こりや、團七樣、たつより。……とは。……七さま、こつより……と書いてやつた文が、どうしてマア、此やうに。エヽ、そんなら矢ッ張り

ト 團七の顏を見て、口惜しき思ひ入れ。

徳兵 云ひ譯があるか。

たつ サア

徳兵 サア〳〵〳〵。こゝな人非人めが。

團七 徳兵衞。おぬしも男。その人非人を女房に持つても居られまい。さつぱりとおれにくれやれ。

徳兵 なんと。

團七　サア、間男に上中下、三段の思案。重ねて四つにするが、下の思案。耳、鼻、坊主、中の思案。極上々の思案といふは、むつとする胸を擦つて、くれてしまふが折紙附きの、昔から上の思案。通り者の徳兵衞、よもや

德兵　イヽヤ、德兵衞は野暮だ。

團七　ヤ。

德兵　白癡だによつて、上中下、三段のうち、下の思案と極めて

團七　すりや、この團七を

德兵　五分でも引かねえ、一寸德兵衞。ぶち果す。相手になれ。

ト拔きかけるを留めて

團七　イヽヤ、手向ひせうにも、帶した刀が

德兵　竹光ならば、差添で

團七　すりや、どうあつても。

德兵　覺悟しろ。

ト拔いて切りかける。これにて是非なく、團七、脇差を拔いて受留め、烈しき立廻りあつて、德兵衞、

団七が白刃を打落し、疊みかけて切りつける。これにて團七堪らず、刀をひらりと拔いて切りかける。
德兵衞刀を持ちたる手をしつかりと掴み、この白刃をキツと見て

ヤヽ。この一腰こそ、正に千壽院力王の刀。

團七　なんと。

德兵　先つ頃玉島兵太夫樣、御結納の印しに、持參いたさるゝ途中にて横死。その場より紛失のこの刀。さては團七、其方が

たつ　父さん兵太夫樣を手にかけ、奪ひ取つたよな。

團七　イヽヤ、兵太夫を討つた覺えはない。

德兵　なんと。

團七　この刀は古鐵買ひから求めた刀。

德兵　ヤ。

團七　殊に、その兵太夫は、身が爲には劍術の師、なんで討たう道理がない。……さりながら、その玉島をお辰が親と吐かすは

德兵　オヽ、それこそは其方が、妻となしたるお梶どのゝ妹。幼い時に三河の國、駒形杢兵衞樣へ養子

となつて行かれたお辰。最前思はず、その身の素性、不思議と知れて様子明白。

園七　すりや、いよ〳〵玉島が

徳兵　縁に繋がるこの徳兵衛。舅といひ、お主の片割れ、討つたる者を詮議なさんと、女房が無實の不義を幸ひ、事を好んで爭ふも、その一腰を抜かさうため。

たつ　そんならこの身の疑ひは

徳兵　名前の所へ筆を加へ、思はざる不義に落し、手に入れん企みと知りつゝ、企みに乘り

園七　この一腰を見出しても、買つた物なら

徳兵　證據にならぬか。

園七　侍ひは刀を買ふなと、何處ぞから觸れでもあつたか。

徳兵　サア、それは

園七　買つた刀で人殺しといふか。

徳兵　サア

園七　サア〳〵。云ひ掛けひろぐ、徳兵衛、うぬを。

ト又切りかける。これにて徳兵衛も是非なく立廻り、誂への合ひ方になり、兩人よろしく、お辰雙方

を留めようと、其處に有合ふ蚊帳を白刃へ打ちかける。團七振り解いて打つてかゝる。徳兵衞も白刃を合せる。お辰もあぶ〳〵しながら、其處にある枕屏風にて白刃を押へ、三人屹度見え。

團七　ヤア、退け〳〵。

徳兵　女房なんで

團七　邪魔をするのだ。

たつ　サア、……イヽエ、わたしは留めはせぬ。團七さん、留めたはこの子でござんすぞえ。

トお市を屏風の上へ抱き上げ、白刃を押へる。

團七　なんと。

トこの途端に又雷鳴り出す。

たつ　アレ、また雷様が

ト耳を押へ、氣味惡き思ひ入れ。雷の音、どろ〳〵の様に前幕の凄き合ひ方。蚊帳に附けし丸括け、蛇になつて團七の身内へ附きまとふ。徳兵衞きつと目を附け

徳兵　ヤヽヽ。こりやこれ、丸括け帯と見えながら

たつ　正しく蛇。（ト俯臥す。）

團七　エヽ。

ト拂ひのける。又雷大きく鳴る。

いち　父さん、お前が母さんを殺さんしたは、こんな晩でござんしたなア。

團七　なんと。

ト　お市屹度なつて

いち　恨めしい團七どの。父上兵太夫様を手にかけながら、助太刀せんとこの身を娶り、辱むるのみならず、剩へ、この身まで、ようも刃にかけやつたの。……妹お辰、德兵衞どの、どうぞ敵を

ト　お市悶絶する。雷しやんと止む。團七屹度思ひ入れ。お辰、お市を介抱する。

德兵　ヤヽヽ。さてはお梶どのゝ恨みの魂魄、幼な子の五體を借り、手懸りも無く、名も知れざる

たつ　敵をそれと今の一言。

德兵　サア、團七。この場の怪しみ、卽ち我が子が訴人も同然。

たつ　兵太夫様、お梶様も

德兵　其方が非道の手に掛けたであらうが。

團七　サア、それは

徳兵　サア〳〵〳〵何と。

團七　それが知れたら、六段目だ。

ト切りかける。三人ちよつと立廻り、奥より三吉飛んで出て、お辰、徳兵衛を押へ

三吉　團七どの、委細は聞いた。こゝはおれに任せて置いて、早くこゝを高ぶけり。

團七　すりや、アノ、三吉、われが

三吉　サア、おれも跡から追ツつく程に、ソレ、この書附けの道筋を

ト書き物を投げてやる。團七見て

團七　すりや猪の堀通り。落つく所は

三吉　下總佐島。

徳兵　イヤ、この場は遁さぬ。

ト三吉を突き退け、引きとむろ。ちよつと立廻り、團七其處にある出刃を取上げ、花道まで行く。此うち、三吉支へて居る。團七花道にて、徳兵衛を目當てにて出刃を打ちつける。途端にお市起上つてこの出刃に中り、苦しむ。お辰、徳兵衛愕りする。團七、尻からげ、時の鐘にて、一散に向うへ入る。

たつ　すりや、團七めは

徳兵　猪の堀通り。
　　ト振り解いて行かうとするを
三吉　待つた。その道筋は眞赤な僞り。
徳兵　なんと。
三吉　眞は洲崎の海手通り、元八幡に待ち合せと、身方と見せて送つた書面。
たつ　すりや、矢ッ張り三吉さんは
三吉　これまでの惡事も、先刻の深切ひるがへせど、それと知らせず團七を、思ふ場所へ誘き出したは、
　　五兩の金から附け込んで、災ひも三年。
徳兵　すりや、團七はいよ〳〵洲崎
三吉　元八幡。
徳兵　出かした。然らば女房、其方は
たつ　裏通り傳ひ、蔦横丁
徳兵　この徳兵衛は表丁
たつ　別れて行くも

徳兵　遁さぬ工夫。

ト徳兵衞以前の脇差をお辰に渡し、刀をぼつこみ、東西へ別れて行かうとするを、奥より義平次、權助出て來て、掛からうとするを、ちよつと立廻つて、權助棕梠箒にて打つてかゝる拍子に、上の提灯を叩き落す。中より香爐出る。

三吉　ヤア。こりや浮牡丹。

義平　それを。

かゝりトかゝるを、徳兵衞下へ突き飛す。これにて天水桶の石に當り、石落ちる。桶を冠つた形にてお虎よろよろと出て、義平次にしがみつく。三吉は權助を引きつける。此うち、徳兵衞は花道、お辰は東へ

徳辰　これは。

三吉　構はずと早う。

徳辰　合點ぢや。

よろしくト屋臺囃子にて、兩人東西へ走り入る。

幕の內、聖天にてつなぎ、引き返し。

幕



本舞臺、一面に五尺程なだれの土手、前へ突出し、後ろに篠藪。舞臺先き、上の方、樋の口、浪板、誂への通り。幕の中より、土手の上に、五郎、半助、頬冠り、菰を着て立ちかゝり、月出て居る。又屋臺囃子に直り、幕明く。

五郎　半助か。

半助　五郎か。

五郎　今、土橋で團七が云ふには、今日徳兵衛が家へ浸け込んで、何かの目論見と思つたところ、何もかも目が割れ、當分影を隱すは、元八幡のそんぢよそこ。

半助　この洲崎通りを行くも、夜が更けて不用心、一緒にこゝで待ち合せてくれろといへど、

五郎　今宵は宵宮で人目が多いゆゑ、おぬしとおれが菰かぶりの振りで、見え隱れに附いて行かうと、約束して來たが

半助　それよく〳〵。襟垢の附かない菰は、なか〳〵着心の悪いものだ。

五郎　おきやァがれ。時に、もう團七は來さうなものだが

ト藪の中にて物音する。

半助　何だか藪の中で物音がするぞえ。

五郎　合點の行かない。

　　ト兩人藪際へ寄る。中より手を出して、兩人の襟髪を掴む。德兵衞ヌツと出る。時の鐘、兩人月影に透し見て

五郎　ヤア、わりやア

半助　德兵衞だな。

德兵　團七より先きへ廻り、わいらが仔細は殘らず聞いた。

半助　それ聞かれたら

二人　うぬを。

　　ト掴みかゝるを、立廻り、菰、手拭を引剝ぐ。兩人を土手の上より樋口の流れへ、ぼん〳〵と打込む。忍び三重。德兵衞思ひ入れあつて、藪の中よりお辰を連れて出て來て、囁き、兩人今の菰を着て思ひ入れ。向うばた〳〵するゆゑ、東西、土手の上へ倒れ居る。時の鐘。バタ〳〵にて、向うより團七走り出て來る。月隱れる。直ぐに舞臺、土手の上へ來り

團七　五郎と半助めがこゝらへ來て、待つて居る筈だが。（ト暗闇を透し見て）コレ〳〵。五郎、半助か。

　　トこれにて德兵衞、お辰、團七が左右へ來るを探り見て

オヽ、約束の菰かぶり、これぢやァ何奴も氣の附く事ぢやァ
　ト徳兵衞、お辰うなづく。
時に、二人ながら聞いてくりやれ。とんだ事があるものぢやァないか。いつぞや本所で佐賀右衞門をお先きに使ひ、兵太夫を手に掛け、この千壽院の刀をひん盜んだも、娘のお梶を女房にせうため。それも元は、あのお辰めに似て居るゆゑ、女房にして見りやァ見たものゝ、どうも元木に勝る梢木無し。お辰が好いと思つて見りやァ、段々鼻に附いたあのお梶め。出て行け、別れよがしに酷くすれど、兎角助太刀々々々々と、うるさい上に、香爐の事や、何やかや、惡い尻を知つた女め、生けて置かれず。先度入谷でこれも手料理。そこはおれだから證據も置かにやァ、誰も知る人もない事ゆゑ、大船に乘つた心で居たところが、執念は怖いものだ。この團七が實の子の、お市めに取ッ附いて、洗ひざらひ、徳兵衞夫婦に
徳兵　聞かれた上は
たつ　敵團七
兩人　遁れはあるまい。
團七　ヤ。（ト、チョンと月出ろ。顏見合せ）五郎、半助と思ひの外

徳兵　入れ替つて徳兵衛夫婦。
たつ　父さん、姉さんの敵。
徳兵　尋常に、立合へ、團七。
團七　ムウ。是非に及ばず、さりながら、泥水飲んだ徳兵衛、お辰。劍術手練の大島團七。うぬら如きの手に合はうか。返り討ちだ。覺悟ひろげ。
徳兵　ムヽヽハヽヽヽ。勘當の世渡りに、町人とは罷りなれど、我れも名乘れば、助松主計の家の子。……實子のお市を、過つて、汝が手にかけ殺せしも、おのれが罪の歸する所。觀念なして尋常に
團七　見ン事討つか。
徳兵　おんでもない事
團七　小癪な事を
徳兵　イザ
團七　イザ
三人　イザ

トこれより誂への合ひ方。お辰、徳兵衛、土手より下り、いろ〳〵面白き立廻り、世話、時代こきま

ぜの犬ダテ。三人よろしくあつて、トヾ團七が打込む刃を徳兵衞叩き落す。お辰その刃が千壽院ゆゑ、取つて戴く。徳兵衞、團七を取つて引附け、お辰一太刀切る。これより禪のツトメになり、徳兵衞、お辰、左右より團七の脇腹へ突き立てる。此うち、後ろへ花車、祭りの提灯など通る仕掛け。好き程に下座より、バタ〳〵にて、三吉出て來て

三吉　ヤア、首尾好く敵團七を

徳兵　討取つて、紛失の

たつ　千壽院の刀まで

三吉　手に入りましたか。

團七　殘念な。

三吉　出來た〳〵。

徳兵　思ひ知つたか。

ト抉り殺し

まづ、今日はこれぎり。

めでたく打出し

大南北全集　第四卷終

大正十四年五月一日印刷
大正十四年五月五日發行

『大南北全集第四卷』

非賣品

校訂者 坪内逍遙

編纂者 渥美清太郎

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者 和田利彦

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷者 上村新輔

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所 博文館印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所 春陽堂

